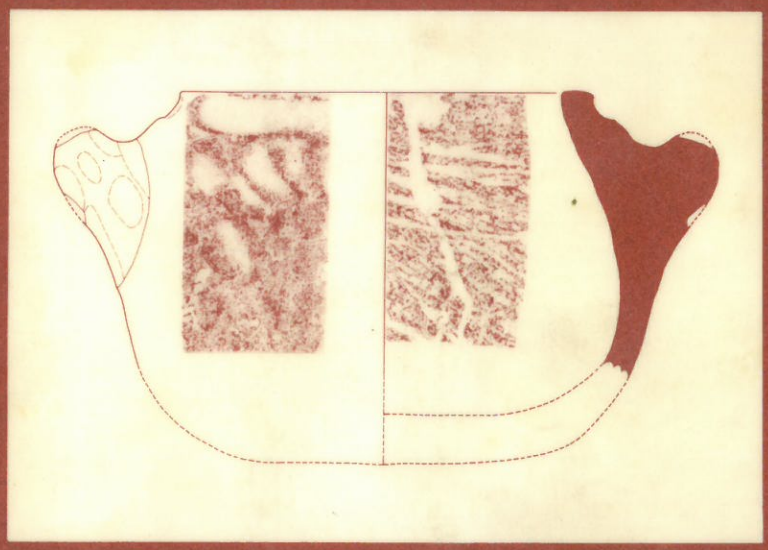
沖縄県文化財調査報告書第74集

下田原貝塚・大泊浜貝塚

—第1・2・3次発掘調査報告—



1986年 3月

沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書第74集

下田原貝塚・大泊浜貝塚

—第１・２・３次発掘調査報告—

1986年 3月

沖縄県教育委員会

序

本調査報告書は八重山郡竹富町波照間島所在の、下田原貝塚及び大泊浜貝塚発掘調査の成果を記録したものであります。

さて波照間島においては、ここ数年農業基盤整備事業が大規模に計画あるいは実施されてきております。本遺跡の位置する下田原地区についても圃場整備事業が計画されたため、埋蔵文化財の範囲とその性格を明らかにし、適切な保存を図るための協議を行う必要が生じた次第であります。

そこで当教育委員会では文化庁の補助を得て、昭和58年度より３次にわたり、当該遺跡の範囲確認のための発掘調査事業を実施してまいりました。本年度は最終年度にあたるため、これまでの調査成果をひとつにまとめて報告する運びとなったものであります。

下田原貝塚は、戦後では初めての発掘調査が開始された遺跡であることや、その文化内容が南方地域との文化的関連を示唆するなど、八重山先史時代の重要な標識遺跡として広く注目されてきたといわれております。

今回の発掘調査においても、先史時代の重要な遺構や遺物が出土し、八重山先史時代の生活と社会の様相ならびに文化的系譜を探究する上で、極めて貴重な成果が得られたようであります。この成果を基に、これらの貴重な埋蔵文化財が農業基盤整備の計画策定にあたっても十分に配慮され、その適切な保存が図られるよう協議調整を進めたいと考えております。

また、本報告書がこれらの諸開発計画の策定にあたっての保存協議基礎情報として利用されるとともに、文化財についての普及ならびに文化財愛護思想の高揚、さらには歴史学習の教材および学術研究など多方面に活用されることを期待する次第であります。

昭和61年３月31日

沖縄県教育委員会
教育長　米　村　幸　政

例　　言

1. この調査報告書は、昭和58～60年度事業として、文化庁の補助（80%）を得て実施した下田原貝塚・大泊浜貝塚の発掘調査の内容を記録したものである。
2. 空中写真は日本地図センター（1977年）製作のC　OK－77－5　C20－2・4・6・8～C21－2・4・6・8によった。
3. 波照間島の全図は国土地理院発行の1／25,000によった。
4. 下田原（しもたばる）貝塚・大泊浜（おおどまりはま）貝塚の地形図は竹富町建設課調製の1／1,000によった。
5. 人骨の同定は内藤芳篤氏（長崎大学医学部教授）、脊椎動物遺存体と骨製品の同定は金子浩昌氏（早稲田大学考古学研究室）、石質の同定は大城逸朗氏（教育センター研究主事）、貝類の同定は黒住耐二氏(琉球大学理学部研究室生)の御協力を得た。記して謝意を表する。
6. 本報告の執筆は下記のとおりである。なお、編集は金武・金城があたった。

   I．序　言

   金城亀信（県教育庁文化課専門員）……第1章～第3章

   II．下田原貝塚

   金武正紀（県教育庁文化課主任専門員）……第3章・第4章・第5章(第1節)・第6章

   金城亀信（　　〃　　専門員）……第1章・第2章・第5章(第2節～第4節)

   金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）……第5章（第5節の2）

   花城潤子（県教育庁文化課専門員）……第5章（第5節の1）

   III．大泊浜貝塚

   金武正紀（県教育庁文化課主任専門員）……第1章～第4章・第5章(第1節～第8節)・第6章

   内藤芳篤（長崎大学医学部教授）……第5章（第9節）

   島袋春美（県教育庁文化課専門員）……第5章（第10節）
7. 写真撮影は金武正紀・金城亀信、現像・焼付は金城亀信が担当した。
8. 石器の研磨面の範囲は点描で表現した。
9. 層序断面図・遺構実測図でつぎのような記号を用いた。

   岩　盤　　地　山　　遺構のある面で岩盤、地山以外の堆積層
10. 遺物の実測図とPL．は見開きで対比させ、遺物番号を同一にした。
11. 発掘調査などで得られた資料はすべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管されている。

本 文 目 次

I　序　言 …… 1

第1章　調査にいたる経緯 …… 1

第2章　調査の経過 …… 2

第3章　調査体制 …… 4

II　下田原貝塚 …… 7

第1章　はじめに …… 7

第2章　遺跡の位置と環境 …… 7

第3章　層序 …… 8

第4章　遺構 …… 17

第5章　遺物 …… 21

第1節　土器 …… 21

第2節　石器 …… 39

第3節　骨・牙製品 …… 63

第4節　貝製品 …… 74

第5節　食料残滓 …… 90

1　貝類遺存体 …… 90

2　脊椎動物遺存体 …… 113

第6章　総括 …… 127

III　大泊浜貝塚 …… 129

第1章　はじめに …… 129

第2章　遺跡の位置と環境 …… 129

第3章　層序 …… 130

第4章　遺構 …… 137

第5章　遺物 …… 141

第1節　白磁 …… 141

第2節　須恵器 …… 141

第3節　褐釉陶器 …… 142

第4節　滑石製石鍋 …… 142

第5節　石器 …… 142

第6節　骨製品 …… 143

第7節　貝製品 …… 143

第8節　鉄製品 …… 144

第９節　人骨……145
第10節　食料残滓……146
1　貝類遺存体……146
2　脊椎動物遺存体……148
第６章　総括……155

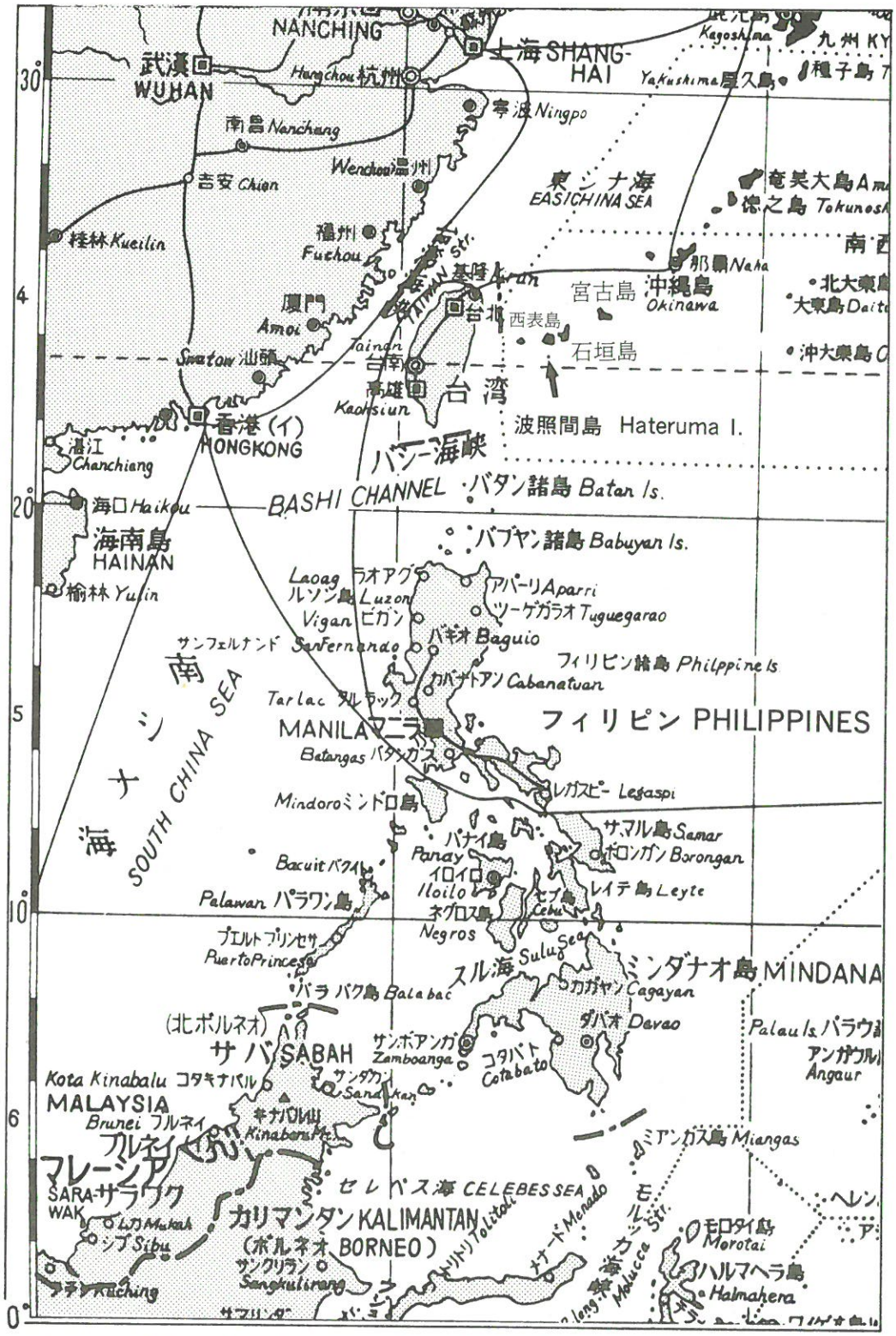
挿　図　目　次

第１図　波照間島の位置図
第２図　下田原貝塚グリッド設定図……９
第３図　第２・３・４地区の層序と第３地区の土壙……13
第４図　第１地区の遺構……18
第５図　第２地区の柱穴・炉跡などの遺構……18
第６図　イノシシの牙製品（尖状・ノミ状）の利用部位……64
第７図　サメ歯製品Ｄタイプにおける使用部位……66
第８図　スイジガイ製利器の突起番号…75
第９図　大泊浜貝塚グリッド設定図……131
第10図　層序……135
第11図　Ｄ－22・23グリッド第10層の礫床住居跡とＤ－25グリッド第10層の礫床遺構……139
第12図　炉跡……140
第13図　遺跡分布地図（地形図）
第14図　Ａ群土器
第15図　Ａ群土器
第16図　Ａ群土器
第17図　Ａ群土器
第18図　Ａ群土器
第19図　Ａ群土器
第20図　Ｂ群土器
第21図　Ａ群土器　群不明
第22図　Ａ群土器　Ｂ群土器
第23図　Ａ群土器　Ｂ群土器
第24図　石斧
第25図　石斧
第26図　石斧
第27図　石斧
第28図　石斧
第29図　石斧
第30図　石斧・石斧未製品・石核石器
第31図　石斧転用品
第32図　尖頭器・鑿状利器
第33図　鑿状利器・石錐
第34図　磨石
第35図　磨石・凹み石・石皿
第36図　砥石・敲き石・円盤形石器
第37図　骨針
第38図　骨錐
第39図　イノシシ牙製尖状品・ノミ状品・骨製ノミ
第40図　サメ歯製品
第41図　サメ歯製品・イノシシ牙製品
第42図　イノシシ牙製品・有孔イヌ牙製品・有孔椎骨製品・ウツボ有孔顎骨製品・用途不明・その他
第43図　スイジガイ製利器
第44図　スイジガイ製利器・クモガイ製利器

第45図　ヤコウガイの蓋製貝刃
第46図　ヤコウガイの蓋製貝刃
第47図　シレナシジミ製貝製品
第48図　貝匙
第49図　貝匙
第50図　イモガイ科製装飾品
第51図　イモガイ科製装飾品・巻貝科製装飾品
第52図　巻貝科製装飾品
第53図　巻貝科製装飾品
第54図　巻貝科製装飾品
第55図　二枚貝有孔製品
第56図　二枚貝有孔製品
第57図　二枚貝有孔製品
第58図　第１号埋葬人骨
第59図　第２号埋葬人骨
第60図　第３号埋葬人骨
第61図　白磁碗・須恵器壺・褐釉陶器壺
第62図　滑石製石鍋・石斧・敲石
第63図　骨製品・貝製品
第64図　貝製品・鉄鑿

図　版　目　次

ＰＬ．１　波照間島の空中写真
ＰＬ．２　遺跡遠景（下田原貝塚）および下田原貝塚第２地区の発掘状況
ＰＬ．３　下田原貝塚第１地区西側で検出された溝状遺構と第１地区東側で検出された貝塚
ＰＬ．４　下田原貝塚第２地区で検出された柱穴や炉跡（南・西から）
ＰＬ．５　下田原貝塚第３地区で検出された土壙と第２地区の層序
ＰＬ．６　下田原貝塚ケ－74グリッドの層序とケ－76グリッドの層序
ＰＬ．７　下田原貝塚第２地区で検出された下田原式土器および石斧とサメ歯製品
ＰＬ．８～ＰＬ．57　下田原貝塚出土遺物（土器、石器、骨・牙製品、貝製品、自然遺物）
ＰＬ．58　遺跡遠景・近景（大泊浜貝塚）
ＰＬ．59　大泊浜貝塚の第６層の集石炉と第６層から第８層まで掘り込んだ柱穴
ＰＬ．60　大泊浜貝塚第10層で検出された礫床住居跡（東・南から）
ＰＬ．61　大泊浜貝塚第10層で検出された礫床住居跡と層序、Ｄ－22グリッドの層序
ＰＬ．62　大泊浜貝塚Ｄ－23グリッドの層序とＧ－22グリッドの層序
ＰＬ．63　大泊浜貝塚Ｇ－35グリッドの層序と検出された夥しい貝類
ＰＬ．64　大泊浜貝塚第４層で検出された薄手の白磁玉縁碗と滑石製石鍋
ＰＬ．65　第１号埋葬人骨
ＰＬ．66　第２号埋葬人骨
ＰＬ．67　第３号埋葬人骨
ＰＬ．68～ＰＬ．77　大泊浜貝塚出土遺物（陶磁器・滑石製石鍋・石器・骨製品・貝製品・鉄鑿・自然遺物）



第１図　波照間島の位置図（スケールの１目盛りは200km）

下田原貝塚・大泊浜貝塚

―第１・２・３次発掘調査報告―

Ⅰ　序　　言

本書は、昭和58・59・60年度に実施された「圃場整備に伴う下田原貝塚・大泊浜貝塚範囲確認調査」で得た成果を収録したものである。

第１章　調査にいたる経緯

波照間島は有人島の中では日本最南端にあたる。北緯24°01′～24°03′、東経123°45′～123°48′に位置する。気候は年平均気温が23.9°C（1958～1967年）となっており、那覇の年平均気温22.3°Cより1.6°C高くなっている。石垣島から約40kmあり、19人乗り飛行機（ＤＨＣ型）で約15分、定期船「新栄丸」で約３時間を要する。この島の地質は基盤岩が新第三紀中新世末期～第四紀更新初期の島尻層群に被さる琉球石灰岩（第四紀更新世中－後期）で構成される。島の面積は14.96㎢、周囲は14.62㎞である。最高標高は59.50ｍと低平な島である。島の人口は723人（1986年１月末現在）で、大多数は農業従事者である。農業はさとうきび生産がほとんどである。島には波照間製糖（100ｔ工場）があり、沖縄における数少ない黒糖工場である。かつてはカツオ漁が盛んで、カツオ節工場が10を数えたようであるが、今では一つも残っていない（最盛期は昭和28年～昭和30年）。

この島で最初の発掘調査が実施されたのは1954年の国分直一・金関丈夫・永井昌文・多和田真淳氏らによる下田原貝塚の発掘調査である。これは八重山における本格的な発掘調査の開始であり、学史的な発掘調査である。ついで1958年、早稲田大学八重山学術調査団による同じ下田原貝塚の発掘である。この二つの発掘調査によって、下田原貝塚は八重山において最も名の知れた遺跡となっている。

大泊浜貝塚の発見は1982年に阿利直治氏が帰島した際によるものであり、下田原貝塚から東へ約50ｍの地点にある砂丘遺跡である。編年的には無土器期に位置づけられる貝塚である。

日本最南に位置するこの島においても土地改良事業が実施されている。波照間地区土地改良事業計画の総面積は682haであり、内採択率は71％（483ha）となっている。改良工事の実施率は31％（211ha）である。関連工事として農免道路・支線道路・側溝工事は昭和47年から開

始された。補助事業（団体営）の土地改良は昭和54年から着手されている。この様な状況で今回の範囲確認調査が実施されたわけである。

参　考　資　料

○「波照間島調査報告書」　地域研究シリーズ№3　沖縄国際大学南島文化研究所　1982年。
○「沖縄県波照間島の水理地質」　古川博恭・富田友幸　琉球列島の地質学研究　第3巻　1978年。
○「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」　国分直一・金関丈夫・多和田真淳・永井昌文　水産大学校研究報告人文科学篇　第9号　1964年。
○「沖縄八重山」　滝口　宏編　校倉書房　1960年。
○「竹富町・与那国町の遺跡」　沖縄県教育委員会　1980年。

第2章　調査の経過

調査は第1次発掘調査が大泊浜貝塚で、昭和58年9月5日～11月5日まで実施した。第2次発掘調査・第3次発掘調査は下田原貝塚が主体となった。第2次発掘調査は昭和59年5月28日～8月7日、第3次発掘調査が昭和60年7月15日～8月25日までの期間で実施した。

大泊浜貝塚は防潮林に沿う小道の側に№4（X＝－214,245.54、Y＝－22,609.09、H＝8.705）、№3（X＝－214, 237.13、Y＝－22, 641.77、H＝8.243）の座標点を設け、この2点を結ぶ座標軸を大泊浜貝塚の局地座標軸とした。この座標軸上をDラインとして、東から西へ0・1・2・……、北から南へA・B・C・……とした。

下田原貝塚は小道と畑地の境に№1（X＝－214, 253.57、Y＝－22,823.73、H＝6.286）、№2（X＝－214.304.78、Y＝－22,807.76、H＝8.492）の座標点を結ぶ線から90°東へ振ったラインが主な発掘調査区とる。№4から4mの箇所にカ－50を設け、カーラインとした。グリッド番号は西から東へ0・1・2・……、北から南へア・イ・ウ・……とした。また、各ライン単位に地区を設け、カーラインを第1地区、コ・サ・シ－58・59ラインを第2地区。ニ・ヌ－49・50を第3地区。ケーライン試掘を第4地区とした。

(1)　第1次発掘調査（1983年9月5日～11月5日）

大泊浜貝塚の発掘から始める。D－22からD－27・G－22の発掘である。この一帯は砂地でサトウキビやカボチャなどの畑地であったので第1層（耕作土）は鍬やスコップを利用して発掘した。第2層・第3層には明確な遺物包含層が確認されず、第4層に達して始めて包含層となり、埋葬人骨三体と滑石製石鍋・白磁玉縁・須恵器・褐釉陶器などが出土した貝層であった。従って埋葬人骨が出土したD－25・26・27の発掘は一部、中止し、D－22・23・24に傾注しながら新

たにG－22の試掘坑を設けた。層序は試掘坑のG－22で21枚が確認され、内4・6・10・11・12・13・14・17・18の9枚の層が遺物包含層であることが判明した。

住居跡はサンゴ礫を敷いた礫床住居跡で、炉跡は屋内にあるものと炉跡のみのものが把握された。屋外の炉跡は第6層・第11層で検出された。

D－22～24の第10層で検出されたサンゴ礫利用の礫床住居は、炉跡が最初に確認されたので、住居面を慎重に礫の重なりや切り合いを検出しながら柱穴を確認した。土器は各層から一片も検出されなかったが、特に貝類や獣骨などの遺物が多く出土した。第1次発掘調査の期間が迫り、埋葬人骨の取り上げとG－22の壁面剝ぎ取りは次年度に予定した。埋葬人骨は木枠を作り、ビニール・シートで覆って土砂を戻して、第1次発掘調査を完了した。

(2) 第2次発掘調査（1984年5月28日～8月7日）

下田原貝塚の第1地区から第3地区を発掘調査した。この帯はサツマイモ・カボチャ・サトウキビが植えられた畑地である。本貝塚は1954年に国分・金関氏らによって初めて調査された。その後、早稲田大学八重山調査団が1958年に発掘を実施した経過がある。今回の調査区と重ならない様に小道や畑地の堺目寄りに設けた。各地区も第Ⅰ層は耕作土で、鍬やスコップで除去すると第2層に達した。遺構は第1地区のカーラインで検出されたので、他の2地区も中途で、終了し、第1地区に集中した。第1地区は表土層が、比較的、薄い状況にあり、包含層も第2地区より浅い傾向にあった。遺構は地山面を溝状に掘り込んだものと柱穴が検出した。柱穴のプランは判然としなかった。これと平行する方法で7月25日から第1次発掘調査（大泊浜貝塚）の埋葬人骨検出作業を開始し、7月26日の二日間で、人骨三体を検出した。また、大泊浜貝塚G－22の壁面剝ぎ取り作業を8月1日から8月4日まで実施した。その後に人骨の取り上げ作業と埋葬の掘り方を作図した。下田原貝塚の第2・第3地区は第2層面にビニールシートを覆って土を埋め戻した。

第1地区の遺構・側壁図を8月15日から開始し、8月19日に完了した。

(3) 第3次発掘調査（1985年7月15日～8月25日）

第3次発掘調査は第2次調査の残りである。第2地区、第3地区の発掘調査が主である。

第2地区は第3層面からの発掘とコ－58・サ－58の新設グリッドを発掘した。新設したグリッドは、グリッドの層序を再確認することとトラクターによる農作業で、木杭の全てが、抜けたり、折れたりしたため、新しくグリッドの木杭を打ち直し、前回との木杭のズレを最少限に抑える為でもあった。

第3地区は第2層面（一部、第4層の地山面が前回、確認されていた）から着手した。第3地区の発掘は7月30日から始め、8月2日に地山面を露出させたので、発掘調査の後半は第2地区と第4地区（試掘坑）に絞られた。

第2地区の一部はランダム・サンプリングを実施しながら調査を進行させた。第3層を除去した段階で、焼土面や柱穴などが検出された。これらの遺構は第4層面で確認されたが、最終的には地山まで達していたことが判明した。柱穴のプラン等は前回の調査と同様、判然としなかった。

第4地区とした試掘坑は8月15日から第2地区と平行させながら実施した。試掘はケ－43・70・74・76とケーラインの延長線上に設け、他に大泊浜貝塚のG－35を設けた。その結果、ケ－76の試掘坑で、間層を挟んで、第2層が大泊浜貝塚の延長する包含層、第4層が下田原貝塚の遺物包含層であることが確認された。

第3次発掘調査は第2・第4地区の遺構と側面図を作成し、埋め戻して調査を完了した。

第3章　調査体制

第1次から第3次までの調査体制および協力関係者は、次のとおりである。

調査指導　文化庁記念物課調査官　桑原滋郎（第1次発掘調査）
　　同　　上　　黒崎　直（第2次発掘調査）
　　同　　上　　伊藤　稔（第3次発掘調査）

調査助言　沖縄国際大学　学長　　高宮廣衛
　　長崎大学医学部教授　　内藤芳篤
　　早稲田大学考古学研究室　金子浩昌
　　鹿児島大学助教授　　上村俊雄
　　琉球大学助教授　　玉城政美
　　琉球大学法文学部史学研究室　助手　池田栄史
　　法政大学沖縄文化研究所々員　波照間永吉

調査協力　竹富町教育委員会　教育長　宇根　実
　　同　　上　　社会教育主事　東田正祥
　　石垣市教育委員会　文化財担当　阿利直治
　　竹富町文化財保護審議委員　波照間哲夫
　　仲底商店　　仲底長幸（竹富町々会議員）
　　民宿　みのる荘　　登野盛　稔
　　波照間中学校教諭　志喜屋　清
　　波照間小学校教頭　宮国恵慈
　　竹富町役場建設課　課長　次呂久英夫
　　同　　上　係長　登野城景作（琉球新報通信員）
　　同　　上　係員　勝連松一・田島　松・大泊鉄一

ＮＨＫ沖縄放送局　八重山ニュース　宮良長明

八重山毎日新聞社

株式会社　宮古交通　八重山営業所波照間作業所

波照間製糖株式会社　波照間事業所

波照間島在住　大泊善八・大泊勇一・山田均・石野友三・南正雄
前田盛成幸・大泊正市・垣本茂・崎山三郎・崎山
シナコ・新盛英仁・東金嶺健吉・東金嶺昇・東金嶺
栄吉・西石垣全助・西島本米彦・西本長正・田島
松・越地信一

事業主体

沖縄県教育委員会　教育長　新垣雄久（第１次発掘調査）

教育長　米村幸政（第２次・第３次発掘調査）

事業所管

沖縄県教育庁文化課　課長　城間茂松（第１次発掘調査）

課長　比嘉賀幸（第２次・第３次発掘調査）

課長補佐　糸数兼治（第１次発掘調査）

課長補佐　西平守勝（第２次・第３次発掘調査）

事業事務

文化振興係々長　山根　義治（第１次・第２次発掘調査）

係長　大城　真幸（第３次発掘調査）

主事　大村　光仁（第２次発掘調査）

主事　当間　　勉（第１次～第３次発掘調査）

主事補　仲村とも子（　同　　上　）

事業総括

埋蔵文化財係々長　安里嗣淳（第２次・第３次発掘調査）

発掘調査員

主任専門員　金武正紀（第１次～第３次発掘調査）

専門員　金城亀信（　　同　　上　　）

専門員　岸本義彦（第２次発掘調査）

専門員　盛本　勲（　同　　上　）

専門員　比嘉春美（第１次発掘調査）

専門員　島　　弘（第２次発掘調査）

発掘調査補助員

石垣市教育委員会非常勤職員　後仲筋正徳（第１次発掘調査）

沖縄国際大学考古学研究室生　下地　傑　（第１次・第３次発掘調査）

発掘作業員（第１次～第３次発掘調査）

野原　豊・鳩間末子・本比田トミ・垣本初枝・安里アイ子・西本比田トミ・崎枝禮子・美底ヨシ・上盛洋子・美底初代・西波照間千江子・西本勝枝・米盛玉子・金城ミツ子・前野ツネ・垣本　茂

資料整理作業員（第１次～第３次発掘調査）

（洗滌・注記・実測・トレース等）　比嘉春美・花城潤子・大田宏好・比嘉優子・城間千栄子・城間光子・新垣千恵子・瑞慶覧尚美・善平スガ子・安里和美・渡慶次純子・大城ますみ・高良三千代・善平スガ子・平良利枝・砂川　勉・伊集恵子・呉屋啓子・照屋利子・長嶺紀文・渡慶次園子・下地洋子・金城米子・黒島リエ子

II　下田原貝塚

第1章　はじめに

本報告書は昭和58～昭和60年度事業として、文化庁の補助を得て実施したものである。大泊浜貝塚・下田原貝塚の一帯は、竹富町波照間下田原地区団体営の土地改良計画が予定されたので、両貝塚の性格や範囲を包括する形で発掘調査の成果を収録した。

第2章　遺跡の位置と環境

下田原貝塚は沖縄県竹富町字波照間小字下田原5994・5995－1・6362・6363－2・6359－2番地一帯に所在する。

貝塚は海岸に面した石灰岩（石灰質砂岩）上に形成され、海抜3～9m間の緩傾斜面に立地する（波照間島の地質は島尻層群に相当する泥岩層の上に石灰岩が覆っている)。

貝塚一帯はサトウキビ・サツマイモ・カボチャが植えられた畑地や牧場跡・墓などがある。牧場跡の後背からは海抜15m面、20～30m面、30～40m面と平担面は内陸部へ続く。島の最高点は59.50mを測る。

同地からは直線距離にして西表島仲間川河口まで約25km、石垣島までは約60kmを測る。同時期に比定される遺跡は波照間にはなく、遠く離れて、仲間第二貝塚（西表島）・大田原遺跡（石垣島）などがある。

この一帯の地質は沖縄本島中・南部に分布する島尻層群に相当すると考えられる泥岩（俗名：ジャーガル）を基盤として石灰岩類（砕屑性・礁性など）が覆っている。石灰岩類の上には赤褐色土（島尻マージ）から構成されている。(注1)

貝塚の南側には海抜30～40m面の石灰岩平担面があり、集落が立地する。貝塚から集落までの直線距離は約1,000mを測る。

貝塚の東側には時期の異なる大泊浜貝塚が近接する。また、東南側約300mの箇所には下田原城跡が丘陵上に形成されている。この下田原城跡の西側斜面はブリブチ公園となっている。この公園の側に燐鉱採掘跡（昭和初期に朝日肥料株式会社が採掘）があり、そこから水が湧き出している。この水は波照間製糖工場が管理・利用し、農地への散水などを実施している。

注1　「沖縄県波照間島の水理地質」　古川博恭・富田友幸　琉球列島の地質学研究　第3巻　1978。

第3章　層　　序

遺跡が広く、発掘箇所が多いので、四つの地区に分けて層序を観察する。地区は第2図に示してあるように、カ－51～67までのカ－ラインを第1地区、コ・サ・シの48・49を第2地区、ニ・ヌの49・50を第3地区、ケ－43・70・74・76のケ－ラインを第4地区とする。

(1)　第1地区

遺跡の北端部を東西へ走る海岸道路に沿って設定した地区である。西側のカ－51では遺物包含層が1～3cmと薄いが、東側へと厚くなっている。

カ－56～59の層序は第4図下のとおりである。

第Ⅰ層　暗褐色土で、層厚が15～25cm。耕作で攪乱されている。遺物は非常に少ない。

第Ⅱ層　淡黒褐色土で、層厚が10～15cm。溝状遺構内では20～25cmと厚い。この層までトラクターによる攪乱を受けている。遺物は第Ⅰ層よりは僅かに多くなっている。

第Ⅲ層　黒褐色土で、層厚が5～10cm。未攪乱の層である。遺物は第Ⅱ層に比してやや多いが、それでも1グリッドで土器片が10個前後という貧弱さである。貝殻・獣魚骨・礫などの自然遺物もやや少ない。

第Ⅳ層　赤褐色土（琉球石灰岩風化土で方言でマージ）の地山。溝状遺構内は淡黄色の砂質石灰岩(注1)（〝アワ石〟状石灰岩(注2)）に達する。

カ－66・67の層序は第4図中に示した。

第Ⅰ層　黒褐色土で、層厚が15～20cm。耕作によって攪乱されている。遺物は非常に少ない。

第Ⅱ層　淡黒褐色土で、層厚が10～15cm。遺物包含層だが、トラクターの歯で攪乱されている部分も見られる。1グリッドで土器片が10個前後で、石器も1、2点の出土である。貝殻、獣魚骨、礫などはやや多い。

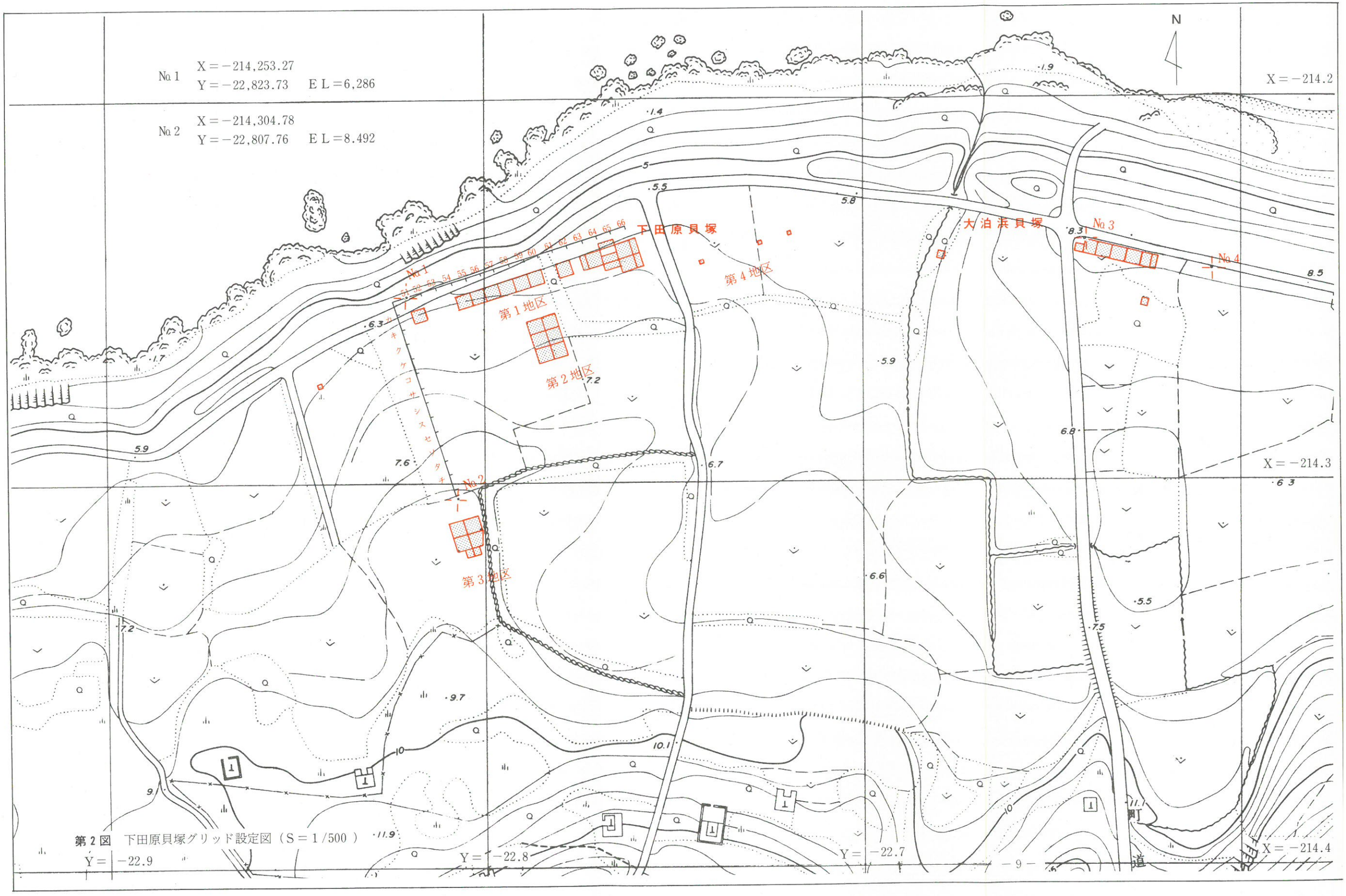
第Ⅲ層a　カ－67の北半分に見られる層で、貝塚の上に乗っている。礫は多いが、貝殻は少ない。層色は第Ⅱ層よりやや黒い。土器は第Ⅱ層よりやや多い。

第Ⅲ層b　貝塚である。カ－67の南側$\frac{2}{3}$とキ－67の北側$\frac{2}{3}$に広がる。西側はカ・キ－66に約30cm延びて終っている。東側はカ・キ－68に延びているが、農道が通っているために、発掘して確認することはできなかった。第4図上に貝塚の広がりを示した。層色は黒褐色で、層厚が10～25cm。南側ラインは約5cmぐらい掘り込まれている。この貝塚層は貝殻、獣魚骨、礫などが多く堆積している。しかし、土器片は1グリッドで20個前後と少ない。

第Ⅳ層　赤褐色土の地山。

(2)　第2地区

ケ－58・59、コ－58・59、サ－58・59の6グリッドで、層序は第3図上のとおりである。この



第2図　下田原貝塚グリッド設定図（S＝1/500）

一帯は、さとうきびが最も成育していたので、層が厚いと予測し、グリッドを設定した。発掘の結果、本遺跡の中心部分であることが確認された。層が厚く、遺物が多く、遺構も集中している地点である。

第Ⅰ層　暗褐色土で、層厚が20～25cm。耕作で攪乱されている。土器、石器などがかなり表面採集された。

第Ⅱ層　黒色土で、層厚が５～15cm。貝殻や礫は少ないが、土が黒く、他の地区の第Ⅱ層とは様相が違う。土器片が、多いグリッドでは70個前後もあり、他の地区の第Ⅱ層よりははるかに多い。なお、サ－59東壁断面図で第Ⅲ・Ⅳ層を切っているのは柱穴で、第Ⅱ層に対応する遺構の一部と考えられる。柱穴より南へ約1.7ｍの所に鍋底状の凹みが見られるが、そこに第16図20の下田原式土器が横になって埋まっていた。

第Ⅲ層　黒褐色土で、層厚が15～20cm。貝殻・獣魚骨・礫などが多量に堆積している貝塚である。土器も他の地区よりは多く、各グリッドとも100個前後検出された。貝塚の南はシ－58・59の途中で終るが、東・北・西は未発掘部分へさらに延びている。

第１表　コ－59グリッドの自然礫集計表　　単位はkg

出土礫＼層序	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅲ層	第Ⅳ層	計
石灰岩	0.649	0.328	266.120	56.800	323.897
砂岩	26.860	3.373	78.700	9.780	118.713
石英	0.755	0.045	2.549	——	3.349
サンゴ礫	0.105	0.286	77.000	15.500	92.891
石材片	1.490	0.092	8.600	2.201	12.383
シルト岩	0.180	0.111	1.224	——	1.515
マンガン	0.010	——	——	——	0.010
巻貝化石	0.001	——	——	——	0.001
軽石	0.006	——	0.358	0.011	0.375
焼土	——	——	0.015	0.002	0.017
計	30.056	4.235	434.566	84.294	553.151

この層では貝殻、獣魚骨も多いが、特に礫が多いのが一特色である。拳大以下の小さな角礫が主体である。第１表に示してあるように、コ－59第Ⅲ層だけで約434kg検出された。検出された礫は火を受けているのもあるが、火を受けた痕跡のないのが多い。これらの礫が何に使用された大きな関心事である。早稲田の報告(注3)では「調理に関係して重要な役目を果したものであると考えられる」と述べている。

第Ⅳ層　暗褐色土で、層厚が約５cm。この層は貝塚ではなく、第Ⅲ層に比して、人工遺物も自然遺物もかなり減少する。遺構直上の層である。

第Ⅴ層　赤褐色土の地山。この面に遺構が検出された。

(3)　第３地区

ニ・ヌ－49・50のグリッドで、遺跡の南端部にあたる。層序は第３図右下に示した。

第Ⅰ層　暗褐色土で、層厚が約15cm。耕作で攪乱されている。遺物が僅かに検出された。

第Ⅱ層　黒褐色土で、層厚が約20cmの遺物包含層である。耕耘機の歯による攪乱を受けてい

る。遺物は第Ⅰ層よりは多く見られる。

第Ⅲ層　ニ－50の東南隅だけに見られる。黒色土で、層厚が10～15cm。ニ－50の層序を第3図に示した。東南隅に、深さ約10～15cmの方形状掘り込みがあり、その中に堆積しているのが第Ⅲ層である。貝殻、獣魚骨、礫などが多い。土器片も1.5m×1.5mの掘り込み内から約30個検出されており、本遺跡では多い地点である。

第Ⅳ層　赤褐色土の地山。

(4)　第4地区

ケーラインで、遺跡の東、西の範囲を確認するための試掘グリッドである。ケ－43・70・74・76の層序を第3図に示した。特にケ－74・76は下田原貝塚と大泊浜貝塚の重なる重要なグリッドであり層序収束で詳しく述べる。

ⓐ　ケ－43の層序

第Ⅰ層　茶褐色混砂土層で、層厚が20～30cm。耕作で攪乱されている。遺物は検出できなかった。この一帯は西への傾斜地で、西側砂丘の砂が混入する最東部である。

第Ⅱ層　灰褐色土で、層厚が10～20cm。この層が遺物包含層に対応する層であるが、自然遺物も人工遺物もほとんど検出できなかった。遺跡の西端部と考えられる。

第Ⅲ層　赤褐色土で、層厚が5～10cm。この層が地山であるが薄い。

第Ⅳ層　黄褐色混砂土層で、層厚が10～20cm。砂質石灰岩の粗粒砂が混入する無遺物層。

第Ⅴ層　淡黄色混土砂層で、層厚が10～20cm。砂質石灰岩の粗粒砂や礫の層で、僅かに赤褐色土が混入する無遺物層。

第Ⅵ層　淡黄色の砂質石灰岩で岩盤。

ⓑ　ケ－70の層序

第Ⅰ層　暗褐色混砂土層で、層厚が20～30cm。耕作で攪乱されている。地表面から30cmでは岩盤に達する浅い所であり、明確な遺物包含層は見られない。しかし、遺物が僅かに混入していることから、耕作以前は包含層があったと考えられる。なお、この一帯から東側へと傾斜しており、大泊浜の砂丘の砂が混入する西側最奥部と考えられる。

第Ⅱ層　赤褐色土層。岩盤直上の地山。

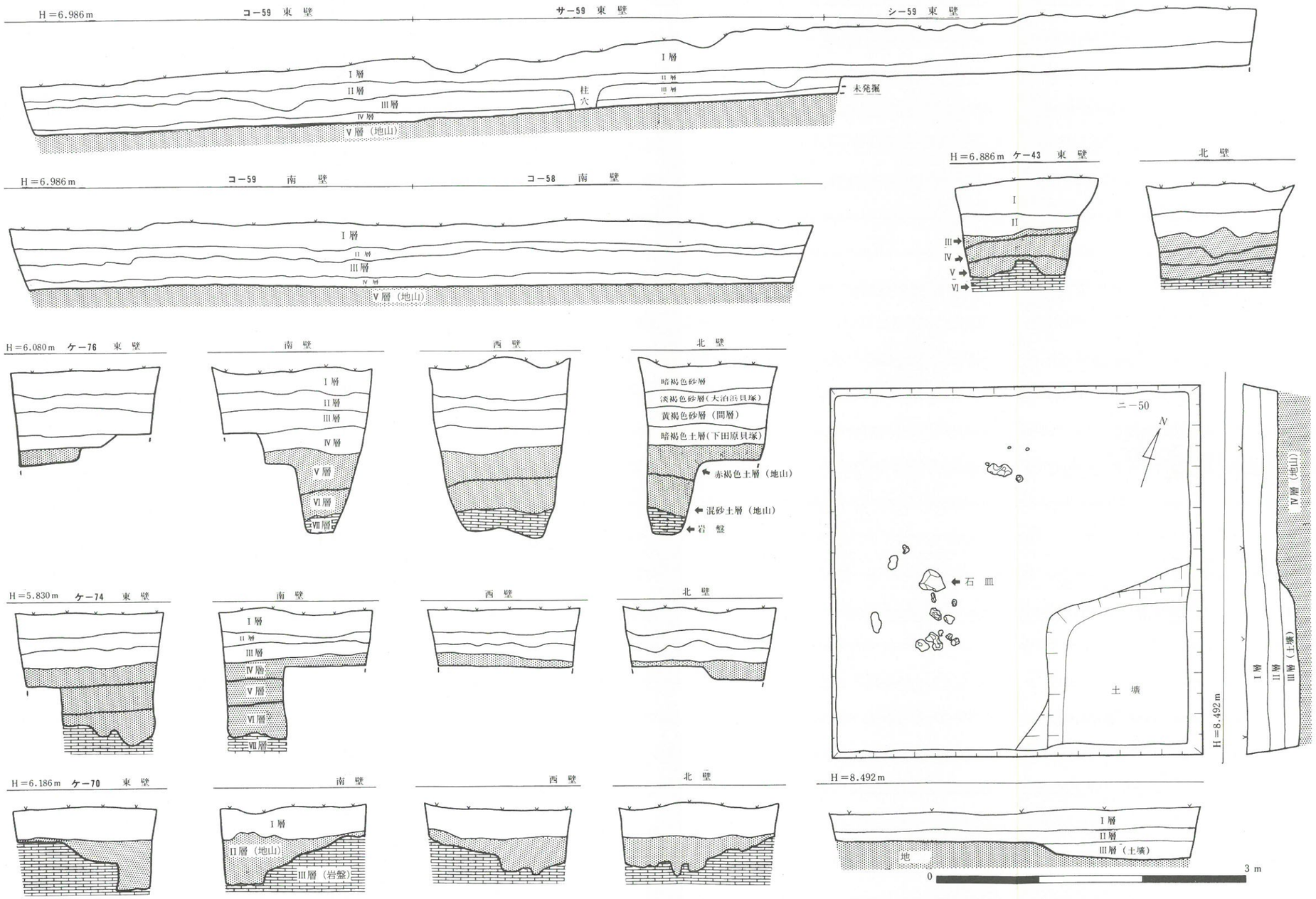
第Ⅲ層　淡黄色の砂質石灰岩で岩盤。

ⓒ　ケ－74の層序

第Ⅰ層　暗褐色混砂土層で、層厚が15～20cm。耕作で攪乱されている。遺物なし。

第Ⅱ層　淡褐色混砂土層で、層厚が10～15cm。貝殻、獣魚骨などは少量検出されるが、人工遺物は見られない。

第Ⅲ層　暗褐色混砂土層で、層厚が10～15cm。この層は下田原貝塚の層で、土器や石斧などが検出された。貝殻、獣魚骨、礫なども混入している。



第3図 第2・3・4地区の層序と第3地区（ニ－50グリッド）の土壙

第Ⅳ層　赤褐色土の地山で、層厚が15～20cm。

第Ⅴ層　黄褐色混砂土層で、層厚が20～25cm。砂質石灰岩の粗粒砂が混入する無遺物層。

第Ⅵ層　淡黄色の砂質石灰岩で岩盤。

ⓓ　ケー76の層序

第Ⅰ層　暗褐色砂層で、層厚が20～30cm。耕作で攪乱されている。前述のケー74までは混砂土層であるが、このグリッドからは砂層になっていることに注意。

第Ⅱ層　淡褐色砂層で、層厚が10～15cm。貝殻や獣魚骨が混入しているが、土器は1片も見られない。大泊浜貝塚の西端部と考えられる。

第Ⅲ層　黄褐色砂層で、層厚が15～20cm。遺物を包含しない間層である。

第Ⅳ層　暗褐色土層で、層厚が15～25cm。砂の堆積が始まる以前の土層で、この層には、下田原式土器や貝殻・獣魚骨・礫などが包含しており、下田原貝塚の層である。下田原貝塚の東端部付近と考えられる。

第Ⅴ層　赤褐色土の地山で、層厚が25～40cm。

第Ⅵ層　赤黄褐色混砂土層で、層厚が30～40cm。砂質石灰岩の粗粒砂が混入する無遺物層である。

第Ⅶ層　淡黄色の砂質石灰岩で岩盤。

層序収束

今回の層序で最も注目されるのはケー76の層序である。第Ⅰ～Ⅲ層は、西側のケー74では混砂土層であるのに対して、ケー76では砂層である。ケー76とケー74の間は僅か10.5mの距離であり、この10.5mのどこかで砂層は終っていることになる。このことによって、東側の大泊浜砂丘の西側最奥部はケー76付近であることが確認された。

ケー76の第Ⅱ層は貝殻や獣魚骨を包含している遺物包含層で、土器が1片も検出されないことから、大泊浜貝塚（無土器遺跡）の西端部と考えられる。第Ⅲ層は砂の間層で、その下の第Ⅳ層が下田原式土器を包含する下田原貝塚である。この層序関係で、下田原式土器をもつ下田原貝塚（第Ⅳ層）は無土器の大泊浜貝塚（第Ⅱ層）より古いことが確認された。

また、第Ⅳ層の下田原貝塚の上は砂層（第Ⅲ層）であるが、下は赤褐色の地山（第Ⅴ層）である。この層序関係によって、大泊浜砂丘形成は、下田原貝塚の形成以後であると言える。しかも、大泊浜貝塚が無遺物砂層（間層）の上に形成されていることは、大泊浜貝塚と下田原貝塚の時間差をも示している。このような状況は、大泊浜貝塚のG－35の試掘グリッド（第10図）でも確認された。赤褐色土の地山の上に約90cmの黄褐色砂層（無遺物層）が堆積し、その上に約90cmの大泊浜貝塚（黒褐色混貝砂層）が形成されている。

このように、遺跡の層序関係と、自然堆積の層序堆積から、下田原式土器をもつ下田原貝塚は、無土器の大泊浜貝塚より古いことが確認された。しかも、間層を挟んでいることで、時間

差も見ることができた。本遺跡での層序把握は、1978年に発掘調査された神田貝塚・大田原遺跡の層序関係(注4)が正しかったことを立証したことにもなる。

注1　古川　博恭
富田　友幸　「沖縄県波照間島の水理地質」　琉球列島の地質学研究第3巻　1978

2　河名　俊男
大城　逸朗　「八重山諸島、波照間島の地形と地質」沖縄県立博物館紀要第4号　1978

3　滝口　宏編　「沖縄八重山」　校倉書房　1960

4　「石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告」　沖縄県文化財調査報告書第30集
沖縄県教育委員会　1980

第4章　遺　　構

発掘調査において、住居跡の明確なプランは確認できなかったが、柱穴、炉跡、溝状遺構などが検出された。なお、第4図上の貝塚南側の掘り込みや、第3図右下の方形状掘り込み（土壙）などは層序の項で取り扱う程度にした。

(1)　柱　穴

第1・2地区の地山面で柱穴が検出された（第4図、第5図)。しかし、方形とか円形などの規格性のあるプランは確認できなかった。柱穴は口径が15～50cm、深さも10～30cmと大小がある。柱穴内には楔石もあり、柱が立っていたことはほぼまちがいないと考えられる。

(2)　炉　跡

第2地区で6つの炉跡が検出された(第5図)。5つは径50cm前後の円形状炉跡である。地山面に焼土面があり、その上及び周辺には木炭が多く検出された。第5号炉跡は長径約1.7m、短径約90cmの楕円形状である。鍋底状に約10cm掘り凹められている。底が焼土面である。この凹み内に木炭や灰が堆積していた。なお、炉跡の周囲の柱穴もプランがはっきりせず、屋外炉か屋内炉かの問題も不明である。

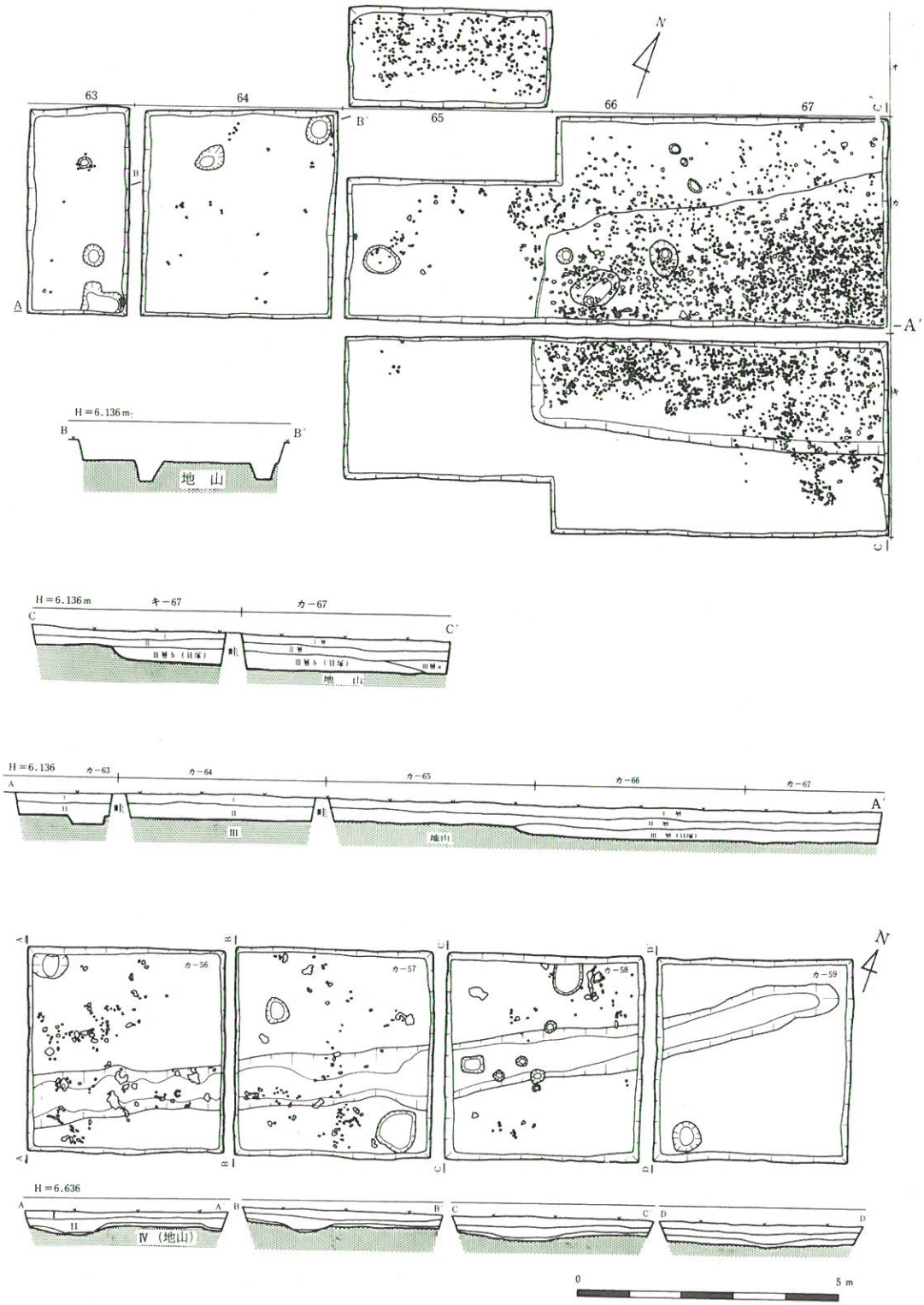
(3)　溝状遺構

第1地区のカ－51からカ－59グリッドにおいて、東西に延びる溝状遺構が確認された。第4図にはカ－56からカ－59までの状況を示した。溝は幅約80cm、深さが5～15cmの浅い溝である。西から東へと緩やかに傾斜しており、カ－59の自然傾斜で終っている。全長36mは確認できたが、西へさらに延びており、地形的に見て、あと10m前後は考えられる。この溝状遺構は遺跡の北側の低い所を通っており、排水的機能をもつ遺構と考えられるが、先島には類例がなく、全体の把握もできてないので、今後の資料をまちたい。

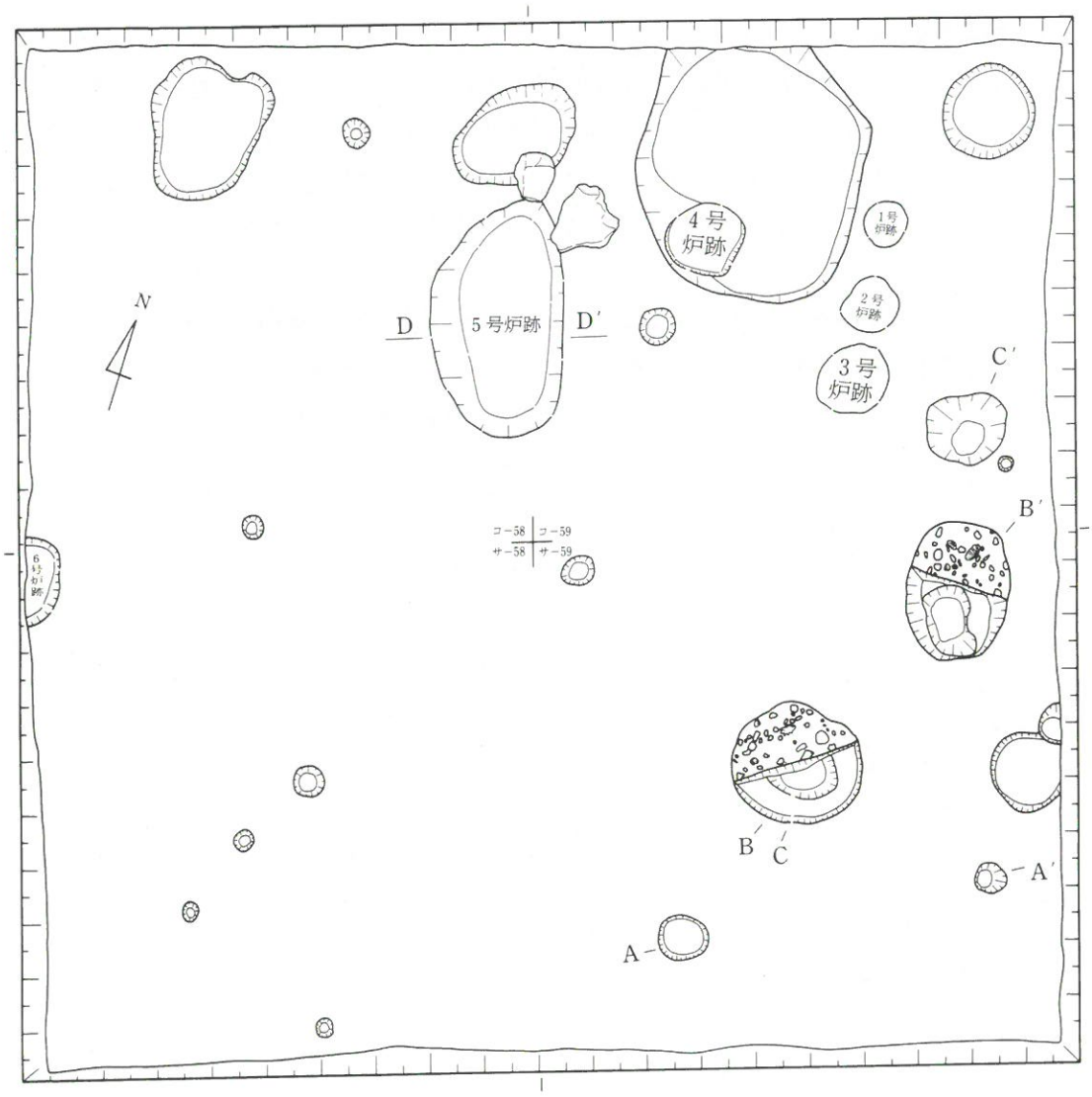
遺構収束

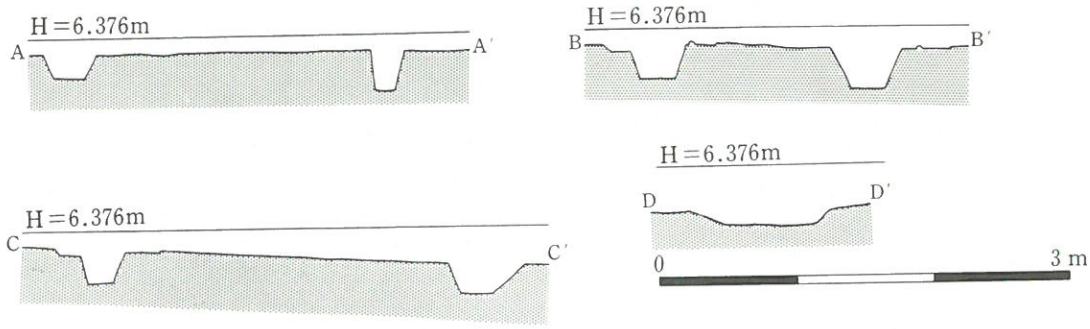
住居跡について考えてみたい。柱穴が検出されたことで、何らかの建物があったことは確認できた。それは竪穴式ではなく平地式である。大田原遺跡で竪穴遺構(注1)が報告されているが、本遺跡では、平地での炉跡や柱穴などが多く検出されていることと、下田原期の文化は南方の影響が強く感じられることで、竪穴住居跡よりは平地住居跡の可能性が強いと考えられる。

柱穴は検出されたが、方形や円形などのような規格性のあるものとしては把握できなかった。おそらく、簡素な住居跡ではなかっただろうか。カ－64グリッドで2つの柱穴が検出された（第4図上)。一つは口径約30cm、深さ33cm。もう一つは口径30cm、深さ23cmである。柱と柱の間隔はおよそ2.5mで、柱穴内には楔石も詰められており、明確な柱穴である。この2つの柱穴から方形や円形などのプランを想定して、その周辺を広げて発掘したが、2つの柱穴と結びつくような柱



第４図　第１地区の遺構（上：第１地区　東側の貝塚と柱穴遺構
下：第１地区　西側の溝状遺構）





第5図　第2地区の柱穴・炉跡などの遺構

穴は検出できなかった。このことから、2つの柱穴で建物が立つことも考えられる。赤沢威氏は、オーストラリアの原住民Wik－Monkan族が、2本の柱を立ててテント小屋状の住居をつくっている図（イギリスの人類学者TomSonが1939年に作成したもの）を紹介している。(注2) 本遺跡においても、もし、そのような簡素な住居跡が考えられるのであれば、第5図の柱穴群もプランをおさえることが可能である。しかし、現段階では資料不足であり、今後の発掘成果をまちたい。

注1　「大田原遺跡」　石垣市文化財調査報告第4号　石垣市教育委員会　1982

2　赤沢　威　「先史学における解釈」　日本の旧石器文化第5巻　麻生　優、加藤晋平、藤本　強編　雄山閣　1976

第5章　遺　　物

第1節　土　　器

今回検出された土器片は、口縁部64個、把手13個、底部11個、胴部858個である。胴部破片は両面が残っているものだけを集計した。これらの土器はすべて下田原式土器である。(注1、2) 下田原式土器は、すでに、石垣島の大田原遺跡の発掘調査で、数千点の破片が検出されている。(注1、2) 破片数では大田原遺跡に及ばないが、器形を知り得る資料では本遺跡が多い。

下田原式土器の基本的な器形は、丸底に近い平底で、胴部が脹らみ、胴部から口縁部へと内彎し、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢である。土器の大きさにはバリエーションがあり、口径が10cm前後の小型のものから、25cm前後の大型のものまで見られる。今回、胴部器壁の厚さで、大きく二つの群に分けた。それは、器壁厚が11mm以上の厚手土器をA群とし、10mm以下の薄手土器をB群とした。その結果は第2・3表のとおりである。第2表で見ると、A群が約90%、B群が約10%で、圧倒的にA群が多いことが解かる。よって、下田原式土器は11mm以上の厚手土器が主体で、僅かに薄手土器が共伴していると言える。厚手土器のうちでも、11～20mmが約89%と大部分を占めている。25mm以上の厚手土器は、ほとんど底部破片と考えられる。

混和材として、荒い石英、長石などが多量に混和されているのが下田式土器の特徴の一つであるが、しかし、荒い石英、長石等の混和状況でも、「多いもの」、「やや多いもの」、「やや少ないもの」、「少ないもの」、「ほとんど見えないもの」などがある。混和材で分類できないだろうかと試みたがどの器形の土器にも、また、A群、B群にも見い出すことができることから、混和材による分類は、現時点では無理だという結論に達した。

焼成は総体的に脆弱である。特に荒い石英、長石などが多く混和されている土器はほとんど脆弱である。荒い石英、長石などの混和が少ないのは、多いのに比して焼成がやや良好であるが、それでも硬いとは言えず、やや脆弱という表現にした。器色は赤褐色が多い。器面は堆積土の土色が浸み込んで、暗褐色か黒褐色を呈しているが、器壁内は赤褐色が多い。器壁内が暗褐色のも見られるが、赤褐色に比してかなり少ない。なお、堆積土が琉球石灰岩の風化土（方言でマージ）で硬いために、脆弱な土器の器面は剝離しているのが多い。

紋様は細沈線紋が一点検出されているだけで、大田原遺跡(注1、2)やフーネ遺跡(注3)などで検出されている爪形紋は一点も検出されなかった。細沈線紋のほかに、頸部に指頭紋らしいのが2点ほど見られるが、大田原遺跡でも検出されていることから、紋様の可能性がある。しかし、断定するには資料不足であり、今後の資料をまちたい。

以上、本遺跡出土の下田原式土器の特徴を述べたが、つぎに、口縁部の形態による分類を中心に、把手、底部などの特徴などを述べる。

(1) 口　縁　部

前述したように、全体的な器形は内彎形の浅鉢であるが、口縁部だけの形態でつぎのように分類した。

第Ⅰ類（内彎）
- a．口縁部先端が尖り気味で内側へ延びる内彎形。（A群土器のみ）
- b．　〃　〃　が、口縁直下に指撫でによる凹みを廻らす。（A群土器、B群土器）

第Ⅱ類（外反）
- a．平口唇で、口縁部が僅かに外反し、頸部に指撫でによる凹みを廻らす。（A群土器、B群土器）
- b．　〃　〃　口唇部の幅が狭く、肩部で急に脹らむ壺形的器形。（A群のみ）
- c．　〃　〃　口唇部の幅が狭く、胴部へと厚くなる。（A群土器のみ）
- d．　〃　〃　口唇部の幅が広く、口縁部外端が僅かに肥厚する。（A群土器、B群土器）

第Ⅲ類（直口）　口縁部先端が丸味をもち、内彎も外反もしない直口形。（A群土器、B群土器）

つまり、第Ⅰ類は、口縁部が内側へ大きく彎曲するもので、口縁先端が尖り気味である。この土器には頸部がない。「無頸の内彎形口縁」である。大田原遺跡では、このⅠ類に爪形文が多く見られる。(注1) 第Ⅱ類土器は、口唇部が平口唇で、口唇内端が内側へ延びず、口唇部の内端、外端とも僅かに外反する。この土器には頸部（短頸）が確認できる。「有頸の外反形口縁」である。第Ⅲ類は、口縁部先端が丸味をもつ口縁で、基本的には内彎も外反もしない直口形の口縁である。ただ、僅かに内彎気味のがあるが、それはⅠ類の退化したものと考えられる。このⅢ類にはⅠ類同様頸部がない。「無頸の直口形口縁」である。

この分類は小破片が多く含まれており、土器全体が復元できた場合は若干異なると考えられる。それは、口縁部の傾きの問題と、口縁部の形態が器全体画一的に仕上げられているかの問題である。総体的に土器製作が粗雑であり、例えば、第16図20のように、1個の土器口縁でⅡ類aの部分とⅡ類dの部分が見られるというものもあるからである。

ここで分類した土器を第3表に示した。層位で見ると、Ⅰ類a・b、Ⅱ類a・bはほとんど第Ⅳ層と第Ⅲ層の出土であるが、Ⅱ類c・d、とⅢ類は第Ⅲ層と第Ⅱ層の出土である。ここに若干の時間差を見ることができる。しかし、結論は今後の資料をまちたい。

(2) 把　手

口縁部から把手まで付いた土器が2点（第16図20と第17図29）検出され、把手の位置や傾きなど、これまで不明であった部分がある程度解決された。この2点で見ると、一対の把手が付くも

のと考えられる。口縁部から2～数cm下の位置に上向き状に貼付されている。

把手には、上面から見ても、側面から見ても三角形状を呈するいわゆる牛角状把手と、横長の把手が見られるが、牛角状把手がほとんどである。横長把手は大田原遺跡でも僅か1点[注1]であり、本遺跡でも2点（1点はA群、1点はB群）である。牛角状把手は下田原式土器に最も多い把手で、本遺跡において、早稲田大学の発掘調査でも4点検出[注3]されている。ほかに、大田原遺跡[注1]、フーネ遺跡[注4]、仲間第二貝塚[注5]、平地原遺跡[注1]等で検出されている。

第2表　土器の厚さ計測集計表

部位 / 厚さmm	口縁部	把　手	底　部	胴　　部	
	（個）	（個）	（個）	（個）	（%）
6	1			1	0.1
7	2			1	0.1
8	4			29	3.4
9	5			40	4.7
10	2			12	1.4
11	4			34	4.0
12	7			99	11.5
13	6	1		112	13.1
14	6			82	9.6
15	4			116	13.5
16	3			61	7.1
17	3		1	34	4.0
18	7		1	97	11.3
19	1			23	2.7
20	1	2		36	4.2
21				12	1.4
22	1	2	3	16	1.8
23				11	1.3
24	2			14	1.6
25			2	11	1.3
26			1	3	0.3
27	1		1	5	0.6
28	1		1	5	0.6
29				1	0.1
30		3		0	0
31				2	0.2
32			1	1	0.1
35		1			
38		1			
40		1			
45		2			
合　計	61	13	11	858	100

※　厚さは各部位の最大厚

牛角状把手には大型と小型があり、小型は主にB群土器に付くものと考えられる。把手の先端部は円形状のがほとんどであるが、貼付部分（根元）は横位の楕円形状のもの、円形状のもの、縦位の楕円形状のものなどがある。また、貼付部分の径に比して、突出が長いのと短いのがある。

層序で見ると、第Ⅳ層から小型の牛角状把手が1点検出されているが、あとは大型も小型も共伴状態で検出されており、層位的な把握はむつかしい。ただ、第17図29は貼付部分が横楕円形状で、先端付近が円形状の把手である。これと同形態のが、第21図64・65である。これは第17図29がⅡ類cの土器であることから、Ⅱ類cの土器に付く可能性が強い。また、第16図20は貼付部分も先端付近もほぼ円形状で、突出が長い把手である。これと同形態のが、第22図70である。第16図20がⅡ類aの土器であることから、これもⅡ類aの土器に付く可能性が強い。このように、口縁部から把手まで付いている資料が

第3表　土器分類と各層の出土状況

分類 / グリッド・層位		口縁部 A群 Ia	Ib	IIa	IIb	IIc	IId	III	B群 Ib	IIa	IId	III	把手 A群	把手 B群	底部 A群	底部 B群	胴部 A群	胴部 B群	合計
コ－58	I																6	0	6
	II										1		1				10	0	12
	III	1	1	1			1				1						57	7	69
	IV								1								8	2	11
コ－59	I																7	0	7
	II																10	0	10
	III		1			2	1				1		3				80	11	99
	IV	1	2	2	1								1		2		29	6	44
サ－58	I																4	0	4
	II					1	2	1					1				25	3	33
	III			1			5	2	1							1	70	13	93
	IV																7	2	9
サ－59	I																5	1	6
	II			1													16	4	21
	III			1		1						1	2		1		69	8	83
	IV																9	1	10
シ－58	I																6	1	7
	II			1			4	1			1			1			51	7	66
シ－59	I																5	0	5
	II					1	1										27	1	30
	III	1	1		1					1	1				2	1	67	4	79
ナ－49	I																4	0	4
	II																2	1	3
ナ－50	I																2	0	2
	II																6	0	6
ニ－49	I																2	0	2
	II																3	0	3
ニ－50	I																6	1	7
	II		1												1		26	2	30
ヌ－49	I																2	0	2
	II																2	0	2
ヌ－50	I																1	0	1
	II																1	0	1
オ－65	I																2	0	2
	II						1								1		16	0	18
	III																4	0	4
カ－54	I																0	0	0
	II																3	0	3
カ－55	I																1	0	1
	II																2	0	2

分類 / グリッド・層位		口縁部 A群 Ia	Ib	IIa	IIb	IIc	IId	III	B群 Ib	IIa	IId	III	把手 A群	B群	底部 A群	B群	胴部 A群	B群	合計
カ－56	I																1	0	1
	II																1	0	1
	III																1	0	1
カ－57	I																0	0	0
	II																2	0	2
	III																2	0	2
カ－58	I																1	0	1
	II																4	0	4
	III																4	0	4
カ－59	I																4	0	4
	II																3	0	3
	III																2	0	2
カ－62	I																1	0	1
	II																2	0	2
	III																4	1	5
カ－63	I																1	0	1
	II																1	0	1
	III																4	1	5
カ－64	I																1	0	1
	II													1			4	0	6
	III																1	0	1
	IV		1														2	0	3
カ－65	I																2	0	2
	II						1										2	1	4
	III											1			1		11	0	13
カ－66	I																1	1	2
	II														1		2	1	4
	III					1											14	2	17
カ－67	I																1	0	1
	II																2	0	2
	III	1	1				1										13	0	16
キ－65	I																2	0	2
	II																4	0	4
キ－66	I																1	0	1
	II																2	0	2
キ－67	I																1	0	1
	II																3	1	4
	III																6	0	6
ケ－70	I																1	0	1
ケ－74	III																4	0	4
ケ－76	IV	1															4	0	5
表採								1					3				0	0	4
合計		5	8	7	2	6	17	5	2	1	6	2	11	2	9	2	775	83	943

今後増加すれば、上記以外の把手がどの土器に付くかが解明できるであろう。

(3) 底　部

丸底や尖底は１点もなく、すべて平底である。底部から胴部へ立ち上がるコーナーが角を形成するのもなく、すべて丸味を持っており、丸底に近いような平底が多い。国分直一・金関丈夫氏らによる本遺跡の発掘調査でも、平底だけが数点検出されている。(注6) 下田原式土器は底部が特に部厚いのが一つの特徴である。A群土器（厚手）の底部は25㎜～32㎜と厚く、B群土器（薄手）の底部が17㎜～20㎜ぐらいと考えられる。

土　器　収　束

以上、土器を概観してきたが、最後に要点をまとめて結びとする。

①下田原式土器の主な器形は、底部角が丸味をもつ平底で、胴部が脹らみ、胴部から口縁部へと内彎し、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢である。

②サイズは口径10cm前後の小型のものから、25cm前後の大型まである。しかし、その差は下田原式土器の中でのバリエーションと考えられる。

③胴部の器壁厚で11㎜以上のはA群土器（厚手）、10㎜以下のはB群土器（薄手）に分けてみた。その結果、A群土器が約90％で、下田原式土器はA群土器が主体で、僅かにB群土器が共伴することが把握された。なお、B群土器はほとんど口径10cm前後の小型土器と考えられる。

④口縁部の形態によって、第Ⅰ類（無頸の内彎形口縁）、第Ⅱ類（有頸の外反形口縁）、第Ⅲ類（無頸の直口形口縁）に分類した。なかでも第Ⅱ類が最も多く、下田原式土器の盛興期と考えられる。

⑤把手は横断面、縦断面とも三角形状を呈する、いわゆる牛角状把手が主体で、僅かに横長の把手も共伴している。口縁部から把手まで付いている土器が検出されたために、これまで不明であった、把手の位置や傾きなどがある程度解明された。

⑥有紋土器は細沈線紋が１点検出されただけで、爪形紋は１点も検出されなかった。大田原遺跡では第Ⅰ類に爪形紋が多いことから、大田原遺跡との間にいくらかの時間差が考えられるが、その解決は今後の発掘成果に期待したい。

⑦混和材として、荒い石英、長石などを多く含む土器はほとんど脆弱で、少ないのは焼成がやや良好である。しかし、テンパーによる分類は現時点で無理と考えられる。荒い石英、長石などが混入する土器について、多和田真淳氏は「石英の粗砂粒を含んだ土器は西表島仲間第二貝塚のものと同一のものと断定する。此の土は西表島の高那・古見間の古生層地帯のものと同一で、波照間には産しない」(注7) と述べている。

⑧器面調整は、外面は指撫で調整されているが、内面は荒い条痕が見られることから、貝殻などによる調整がなされていたと考えられる。ただ器面が剝離しているのが多いことは残念で

ある。

⑨層位的に第Ⅰ類a・b、第Ⅱ類a・bはほとんど第Ⅳ層・Ⅲ層の出土で、第Ⅱ類c－d、第Ⅲ類は第Ⅲ・Ⅱ層でほぼ同じぐらい出土している。ここで若干の時間差を見ることができるが、今回は問題提起にとどめておきたい。

注1　「石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告」沖縄県文化財調査報告書第30集　沖縄県教育委員会　1980

2　「大田原遺跡」石垣市文化財調査報告書第4号　石垣市教育委員会　1982

3　滝口　宏編　「沖縄八重山」　校倉書房　1960

4　安里　進・新田　重清・大浜　永亘　沖縄タイムス　1977年12月20～23日の朝刊

5　「竹富町・与那国町の遺跡」　沖縄県文化財調査報告書第29集　沖縄県教育委員会　1980

6　金関　丈夫・国分　直一・多和田真淳・永井　昌文　「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」　水産大学校研究報告人文科学篇9号　1964

7　多和田真淳　「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」　文化財要覧　琉球政府文化財保護委員会　1956

第4表　土器観察表

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量(cm) 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
第14図1 PL. 8	コ-59Ⅳ	A-Ⅰ-a	-	1.8	1.2	口縁部先端がやや尖った状態で内向。かなり内彎する浅鉢	器面は内・外面ともものこりが良い。やや滑らかに仕上げられている。	脆弱	暗褐色	荒がいやや石英多等い
2	コ-58Ⅲ	〃	-	1.6	1.1	口縁部先端がやや丸味をもった状態で内向。かなり内彎する浅鉢	内面はやや滑らか。外面は剝離してざらざらしている。	〃	〃	荒が多い石英等い
3	ケ-76Ⅳ(Ⅲ層は砂層)	〃	-	2.0	1.2	口縁部先端がやや尖った状態で内向。かなり内彎する浅鉢で、口縁部の彎曲する部分が厚く、胴部へやや薄くなる。	器面は内・外面ともものこりはいいが、製作時の指圧痕が内・外面にあり、滑らかな仕上がりで	〃	〃	荒は少ない石英等い

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量(cm) 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
							ない。			
第14図4 PL. 8	カ-67Ⅲ	A-Ⅰ-a	-	1.3	1.2	かなり内彎する浅鉢。口縁部外面が丸味をもつやや薄手	内・外面とも剝離して器面調整等は不明。外面に製作時の指圧痕が見られる。	脆弱	赤褐色	荒い石英等がやや多い
5	シ-59Ⅲ	〃	-	2.3	1.3	口縁部先端がやや尖って内向。上記4点に比して内彎が弱い。口縁部外面が丸味をもち、胴部へ厚くなる。	調整痕は見られないが、内・外面ともやや滑らかに仕上げられている。	やや脆弱	暗褐色	荒い石英等は少ない,
6	カ-64Ⅳ(柱穴内)	A-Ⅰ-b	-	2.1	1.4	口縁部は欠損しているが、かなり内彎する浅鉢。口縁部直下に指撫でによる凹みが廻る。平口唇と考えられる。	内面は滑らかに仕上げられている。外面は剝離部分が目立つ。凹み直下に13本の沈線が廻る有紋土器	脆弱	赤褐色	荒い石英等はやや少い
7	オ-65Ⅲ	〃	13.0	1.8	1.7	平口唇に仕上げられているが、口唇部内端は内向する。かなり内彎する浅鉢。口縁直下に指撫でによる凹みを廻らす。	器面は内・外面とも剝離してざらざらしている。	〃	〃	荒い石英等が多い
8	コ-59Ⅳ	〃	18.5	1.5	1.3	平口唇だが、口唇部内端は内側へ延びている。かなり内彎する浅鉢で、口縁直下に指撫でによる凹みが廻っている。	内面はやや滑らかに仕上げられているが、調整痕は見られない。外面は剝離してざらざらしている。	〃	〃	荒い石英等が多い
第15図9 PL. 9	コ-59Ⅲ	〃	-	2.4	1.5	平口唇で、口唇部内端は、やや尖がり、内側へかなり延びている。かなり内彎する浅鉢。口縁直下に指撫でによる凹みが廻る	器面は内・外面ともほとんど剝離しており、器面調整は不明	やや脆弱	〃	荒い石英等は少ない
10	ニ-50Ⅲ	〃	-	2.7	1.5	平口唇で、口唇部内端は内向する。口唇部外端はレン	器面は内・外面ともすべて剝離してざら	脆弱	〃	荒い石英等が多い

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量(cm) 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
						ズ状に肥厚し、直下に指撫でによる凹みを廻らす。かなり内彎する浅鉢	ざらしている。			
第15図11 PL. 9	シ-59Ⅲ	〃	-	2.4	1.6	平口唇で、口唇部内端は内側へ延び、外端は三角状に肥厚する。口縁直下に幅広の指撫で凹みを廻らすかなり内彎する浅鉢。	外面は指撫でによる調整痕あり、内面は剝離してざらざらしている。	〃	〃	〃
12	コ-59Ⅳ	〃	-	2.8	1.5	平口唇で、口唇部内端は内側へかなり延び、外端はレンズ状に肥厚。口縁直下に指撫での凹みを廻らすかなり内彎する浅鉢。	内面は剝離して調整痕不明。外面は指撫でによってやや滑らか。	〃	〃	〃
13	コ-58Ⅲ	〃	-	1.8	1.3	平口唇で、口唇部内端は内向。口縁直下に指撫で凹みを廻らす内彎の浅鉢。	外面は指撫で調整により滑らか。内面は凹凸	〃	〃	やや少ない荒い石英等が
14	コ-58Ⅲ	A-Ⅱ-a	-	1.8	1.5	平口唇で内彎する浅鉢土器だが、口縁直下に指撫で凹みを廻らし、頸部が表現されている。	指撫で調整されてやや滑らかである。頸部の凹みに指頭痕があり、有紋の可能性がある。	やや脆弱	暗褐色	が少ない荒い石英等
15	コ-59Ⅳ	〃	13.5	1.6	1.3	平口唇で内彎する浅鉢。口縁部が僅かに外反。指撫で凹みによって有頸を示す。	内面は凹凸が多く滑らかでない。外面には製作時の指圧痕が縦に2本あり。頸部の凹みに2つの指頭痕があり、有紋の可能性。	〃	赤褐色	〃
16	コ-59Ⅳ	〃	21.2	1.4	1.3	平口唇で内彎する浅鉢、口縁部が僅かに外反。頸部は幅広の指撫で凹み。口唇外端は雑な面取り。	外面は指撫で調整によってやや滑らか。内面は剝離。	脆弱	〃	荒いやや多い石英等が
17	シ-58Ⅱ	〃	21.0	2.6	1.8	平口唇で内彎する浅鉢。口縁部が僅かに外反。口縁直下に指撫でによる凹みを廻らし、頸部を示している。	内面には製作時の指圧痕が見られる。内面と口唇は指撫で調整されて	やや脆弱	〃	荒いやや少ない石英等が

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量（cm） 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
						かなり厚手の土器	いるが外面は凹凸が多い。			
第16図18 PL.10	サ-59Ⅲ	A-Ⅱ-a	-	1.8	1.6	平口唇で内彎する浅鉢だが、口縁部だけ僅かに外反。口縁直下に指撫での凹みが廻り、有頸となる	外面は指撫で調整されてやや滑らか。内面は凹凸が多く、調整痕なし	やや脆弱	赤褐色	荒いがやや少ない石英等
19	サ-58Ⅲ	〃	-	2.1	1.5	平口唇で内彎する浅鉢。口縁部が僅かに外反。指撫での凹みで頸部を示す。	外面は指撫で調整で滑らか。内面には調整時にテンパーが引きづられて条痕が残っている。	〃	暗褐色	荒いがやや多い石英等
20	サ-59Ⅱ	〃	18.0	2.0	1.4	平口唇で内彎する浅鉢。口縁部は外反し、頸部の指撫で凹みは生々しいが途切れたりしている。把手は一対と考えられる。把手の根元も先端部も円形状で突出が長い。把手は上向きに付く。胴径23cm器高約16cm。	外面には指撫で調整痕が縦位に数本みられる。内面は荒い条痕が横位に走っている。内外面ともやや滑らか。	〃	赤褐色	荒いやや少ない石英等が
21	シ-59Ⅲ	A-Ⅱ-b	9.8	1.7	1.1	平口唇で内彎する浅鉢形だが、頸部が明瞭で、口縁部は外反し、肩部で急に厚くなり大きく彎曲する。口縁部から肩部までは壺的な器形。	外面は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。内面は荒い条痕が僅かに残っている。	〃	〃	荒いが少ない石英等
22	コ-59Ⅳ	〃	12.0	1.8	1.1	大きさや頸部の凹みが浅いなど若干の差異はあるが、ほとんど第16図21に同じ。	外面は指撫で調整でやや滑らかに仕上げられている。内面はほとんど剝離して調整痕不明	脆弱	〃	荒いが多い石英等
第17図23 PL.11	シ-59Ⅱ	A-Ⅱ-c	約12.0	1.9	0.9	平口唇で内彎する浅鉢形と考えられる。口縁部は薄く胴部へかなり厚くなる器形	外面は製作時の指圧痕がいくつもあって凹凸。内面は平担に仕上げられているが調整痕は見られない。	やや脆弱	暗褐色	荒いがやや多い石英等
24	コ-59Ⅲ	〃	約15.0	2.1	0.9	平口唇で内彎する浅鉢形と考えられる。口縁部は薄く胴部へかなり厚くなる器形。口径は約15cmだが、胴径	外面は指撫でによってやや滑らかに調整されている。内面は剝離。	〃	〃	〃

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量(cm) 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
						は約20cmと脹らむ。なお高さは約12.5cmと考えられる。				
第17図25 PL.11	サ-58Ⅱ	〃	-	1.7	0.9	平口唇で内彎する浅鉢形で、口縁部が外反する。	外面には製作時の指圧痕が見られる。内面には条痕が僅かに残っている。	〃	〃	荒い石英等がやや少ない
26	〃	〃	-	1.8	0.8	平口唇で内彎する浅鉢形だが、口縁部が僅かに外反する。	口唇部は滑らかに指撫で調整されている。外面は指圧痕があって凹凸。内面には荒い条痕が斜めに走っている。	〃	赤褐色	荒い石英等がやや多い
27	サ-59Ⅲ	〃	-	1.5	0.7	かなり幅狭の平口唇で内彎する浅鉢形。口縁部が僅かに外反し、胴部へかなり厚くなっている。	頸部に指圧痕が見られるが、外面は指撫で調整でやや滑らか。内面に荒い条痕が僅かに残っている。	〃	暗褐色	荒い石英等が少ない
28	カ-66Ⅲ	〃	-	1.7	0.8	〃 〃	内・外面とも剝離しており、器面調整については不明。	〃	赤褐色	荒い石英等が多い
29	コ-59Ⅲ	〃	19.5	2.0	0.8	平口唇で内彎する浅鉢形。口縁部が僅かに外反し、頸部は幅狭の凹みが廻っている。口縁部から把手まで残っており、把手の位置や傾きのわかる数少ない資料。把手は根元が横楕円形状で、先端付近が円形状の上向き把手。	把手は貼付され、その周辺は指撫で調整されている。内面には荒い条痕が斜めに走っている。	脆弱	〃	〃
第18図30 PL.12	コ-59Ⅲ	A-Ⅱ-d	17.8	1.6	1.4	平口唇で口縁部は外反し、僅かに三角形状に肥厚する内彎の浅鉢形。短頸ではあるが、頸部を有する。	口唇部と頸部は指撫で調整されて滑らか。内面は剝離しているが指圧痕が残っている。	やや脆弱	暗褐色	荒い石英等がやや少ない

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量(cm) 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
第18図31 PL.12	シ-58Ⅱ	A-Ⅱ-d	22.0	2.3	1.4	平口唇で、口縁部は僅かに外反し、三角形状に肥厚する内彎形の浅鉢。口縁部下約3cmに肥厚部分があり、貼付痕があることから肥手の付け根と考えられる。	外面は器面調整が雑で指圧痕などで凹凸している。内面は剝離している。	脆弱	赤褐色	荒い石英等が多い
32	カ-65Ⅱ	〃	25.0	1.4	1.3	平口唇で、口縁部は僅かに外反し、三角形状に肥厚する内彎形の浅鉢。	内外面とも剝離してざらざらしている。	〃	〃	〃
33	サ-58Ⅲ	〃	24.8	2.1〃	1.8	平口唇で、口縁部は外反し、僅かに三角形状に肥厚する内彎形の浅鉢。口縁部で肥厚してない部分もあり、製作の粗雑さを感じる。	外面は指撫で調整されてやや滑らかである。内面は剝離してざらざらしている。	〃	暗褐色	〃
34	オ-65Ⅱ	〃	-	1.6	1.4	平口唇で、口縁部は外反し、僅かに三角形状に肥厚する内彎形の浅鉢。	内・外面とも剝離にざらざらしている。	〃	赤褐色	〃
35	サ-58Ⅲ	〃	-	1.5	1.4	〃　〃	口唇部から頸部は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。内面剝離	〃	暗褐色	〃
36	サ-58Ⅱ	〃	-	1.5	1.3	平口唇で、口縁部は外反し、口縁外端が僅かに三角形状に肥厚する内彎形の浅鉢	口唇部から頸部は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。内面剝離	やや脆弱	〃	荒い石英等が少ない
37	コ-58Ⅲ	〃	-	1.7	1.5	〃　〃	口唇部から頸部は指撫で調整でやや滑らか。内面は小さな凹凸が多い。調整痕不明	脆弱	〃	荒い石英等が多い
38	シ-58Ⅱ	〃	-	1.3	1.1	〃　〃 頸部が厚く胴部へ薄くなっている。	口唇部剝離。頸部は指撫でややや滑らか。内面には荒い条痕が横位にみられる。	やや脆弱	赤褐色	荒い石英等がやや多い

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量(cm) 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
第18図39 PL.12	シ-58Ⅱ	〃	-	1.5	1.3	〃　〃	口縁部は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。口唇部と内面は剝離している。	〃	〃	〃
第19図40 PL.13	サ-58Ⅲ	〃	-	2.0	1.3	平口唇で、口縁部は僅かに外反し、台形状に肥厚する内彎形の浅鉢。肥厚部は三角形状肥厚の角を面取りして台形状にしてある。	外面は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。内面には荒い条痕が斜めに走っている。	〃	暗褐色	荒い石英等がやや少ない
41	サ-58Ⅲ	〃	-	1.4	1.3	平口唇で、口縁部は僅かに外反し、三角形状の肥厚も弱い内彎形の浅鉢。	外面は指撫で調整でやや滑らか。内面は荒い条痕が斜めに走っているのが少し残っている。	〃	赤褐色	荒い石英等がやや多い
42	シ-58Ⅱ	〃	-	1.4	1.2	〃　〃	頸部は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。口唇部から内面は剝離	〃	〃	〃
43	シ-59Ⅱ	〃	-	1.8	1.6	平口唇で、口縁部は僅かに外反し、三角形状の肥厚も弱い内彎形の浅鉢。	頸部には製作時の指圧痕が縦位に見られる。口唇部は滑らかで、内面は剝離。	脆弱	暗褐色	荒い石英等が多い
44	サ-58Ⅲ	〃	-	1.4	1.2	平口唇で、口縁部は僅かに外反し、三角形状に肥厚する内彎形の浅鉢。頸部が明瞭である。	口唇部から頸部は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。内面は指圧痕が見られる	やや脆弱	赤褐色	荒い石英等がやや少ない
45	サ-58Ⅱ	〃	-	1.9	1.2	平口唇で、口縁部は外反し、僅かに三角形状に肥厚する内彎形の浅鉢。頸部が明瞭である。	口唇部から頸部は指撫でややや滑らか。頸部直下に指圧痕が斜めに見られる。内	〃	暗褐色	〃

挿図番号 PL. 番号	出土地点 層位	分類	法量（cm） 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
							面は剝離。			
第19図46 PL. 13	カ-67Ⅲ	A-Ⅱ-d	-	2.2	1.7	平口唇で、口縁部は外反し、三角形に肥厚する内彎形の浅鉢。頸部がやや長く明瞭。	口唇部から頸部までは指撫でによってやや滑らかに仕上げられている。内面剝離。	やや脆弱	暗褐色	荒い岩英等が多い
47	サ-58Ⅱ	A-Ⅲ	-	1.7	1.5	口縁部が内彎も外反もしない直口の内彎形浅鉢。僅かに内彎気味でⅠ類土器の退化したような器形。	外面は指撫でによってやや滑らかに仕上げられている。内面はやや細かい条痕が横位に走る。	〃	〃	荒い石英等がやや少ない
48	サ-58Ⅲ	〃	-	1.6	1.2	口縁先端が丸味をもつ直口の内彎形浅鉢。	内・外面とも剝離してざらざらしている。	脆弱	〃	荒い石英等がやや多い
49	サ-58Ⅲ	〃	-	1.6	1.0	〃　〃	外面は指撫で調整でやや滑らか。内面は荒い石英等が動いて条痕を描いているのが見られる。	やや脆弱	〃	荒い石英等がやや少ない
50	表採	〃	-	1.6	1.2	口縁先端が丸味をもつ直口の内彎形浅鉢。	内・外面とも指撫で調整されてやや滑らかに仕上げられている。	〃	〃	荒い石英等が多い
51	シ-58Ⅱ	〃	-	1.6	1.3	〃　〃	内外面とも剝離して、器面調整については不明	〃	赤褐色	荒い石英等が少ない
第20図52 PL. 14	サ-58-Ⅲ	B-Ⅰ-b	-	1.1	0.8	口縁部先端が内向する内彎形の浅鉢。口縁部直下に指撫でによる凹みを廻らし、頸部状を呈する。 口縁部から胴部へ薄くなっていく。	外面は指撫で調整で滑らかに仕上げられている。内面は斜めにテンパーの動いた痕が残っている。	〃	暗褐色	〃

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量（cm） 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
第20図53 PL. 14	コ-58Ⅳ	〃	9.3	0.9	0.6	〃　〃 口縁部から胴部へ僅かに厚くなっていく。	外面は指撫で調整でやや滑らか。内面は小さな凹凸が多く、調整痕は見られない。	〃	〃	〃
54	シ-59Ⅲ	B-Ⅱ-a	-	1.1	0.8	平口唇で、口縁部が僅かに外反する内彎形の浅鉢。口縁直下に指撫でによる凹みを廻らし頸部をつくっている。	外面は指撫で調整で滑らか。内面は剝離して調整痕不明	〃	〃	荒がいや石英等多い
55	コ-58Ⅲ	B-Ⅱ-d	-	1.1	1.0	平口唇で、口縁部が外反する内彎形の浅鉢。頸部がかなり明瞭になっている。	〃　〃	〃	〃	〃
56	コ-59Ⅲ	〃	-	1.0	0.8	〃　〃	外面は指撫で調整でやや滑らか。内面は小さな凹凸が多いが調整痕は見られない。	〃	〃	荒が少ない石英等
57	シ-59Ⅲ	〃	-	1.0	0.7	平口唇で、口縁部が外反する内彎形の浅鉢。頸部がかなり明瞭になっている。	外面は指撫で調整でやや滑らか。内面は剝離。	〃	〃	荒がや石英等多い
58	コ-58Ⅱ	〃	-	1.2	1.0	〃　〃	外面は指撫で調整でやや滑らか。頸部に一つの指頭痕が見られるが、紋様ではないと思われる。内面は剝離。	〃	赤褐色	〃
59	シ-58Ⅱ	〃	-	1.1	0.6	〃　〃	口唇部は剝離。頸部は指撫で調整でやや滑らか。内面は荒い条痕	〃	暗褐色	〃

挿図番号 PL・番号	出土地点 層位	分類	法量（cm） 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
							が横位に見られる。			
第20図60 PL. 14	カ-64 II	B-II-d	-	0.9	0.7	平口唇で、口縁部が外反する内彎形の浅鉢。頸部がかなり明瞭になっている。頸部直下に貼付の一部が残っているが、それは把手の一部と考えられる。	外面は指撫で調整で滑らか。内面は剝離。	やや脆弱	暗褐色	やや多い荒い石英等が
61	サ-59III	B-III	9.3	0.1	0.6	口唇部が丸味を呈し、口縁部は内彎も外反もしない。内彎形の浅鉢。	外面は指撫で調整痕も残っているが、凹凸が多い。内面は細かい条痕や、テンパーの移動痕などが横位に走っている。	〃	赤褐色	やや少ない荒い石英等が
62	カ-65III	〃	10.5	1.2	0.9	〃　〃	内・外面とも剝離して調整痕不明。	〃	〃	〃
第21図63 PL. 15	コ-58 II	A	-	5.8	1.3	今回検出された把手で最大の把手。把手の先端ではほぼ円形だが、貼付部分では横長の楕円形状を呈する。	貼付部分や把手面に製作時の指圧痕が見られる。内面にも指圧痕あり。	〃	〃	やや多い荒い石英等が
63	サ-58 II	A	-	5.4	1.3	貼付部分は横楕円形状で、先端部はほぼ円形状を呈する上向きの把手。第17図29と同タイプであり、II類Cの把手と考えられる。	貼付部分に製作時の指圧痕が残っている。	〃	暗褐色	やや多い荒い石英等が
64	コ-59IV	-	-	4.5	-	〃　〃	貼付部分に製作時の指圧痕が見られる。把手部分は指撫でややや滑らか。	〃	赤褐色	〃
65	表採	-	-	3.5	-	把手の先端付近も、貼付部分もほぼ円形状を呈する。小型の把手で、	貼付部分に製作時の指圧痕が見られる。内面欠損で器	脆弱	〃	〃

挿図番号 PL・番号	出土地点 層位	分類	法量（cm） 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
						B群に属する可能性が強い。	壁厚不明。			
第21図67 PL. 15	表採	-	-	3.1	-	〃　〃	貼付部分に製作時の指圧痕が廻っている。	〃	〃	〃
68	コ-59Ⅲ	-	-	3.0	-	把手の先端付近も、貼付部分もほぼ円形状。根元径に比して突出の長い小型把手。	〃　〃	やや脆弱	〃	ほとんどない荒い石英等が
第22図69 PL. 16	サ-59Ⅲ	A	-	4.4	1.2	把手の先端付近も、貼付部分もほぼ円形状を呈する。根元径に比して突出の短い把手で、かなり上向きと考えられる。	外面は滑らかに指撫で調整されて、製作時の指圧痕も見えない。内面剝離。	〃	〃	やや多い荒い石英等が
70	サ-59Ⅲ	〃	-	4.0	-	把手の先端付近も貼付部分もほぼ円形状を呈する。根元径に比して突出の長い把手で、かなり上向きである。第16図20と同タイプでⅡ類aに付く把手と考えられる。	貼付部分から突出部分にかけて製作時の指圧痕が見られる。	〃	〃	〃
71	表採	〃	-	3.1	1.7	把手の先端付近も貼付部分も、やや縦長の楕円形状を呈する。根元径に比して突出の短い把手。	貼付部分に製作時の指圧痕が残っている。	〃	暗褐色	がやや多い荒い石英等
72	コ-59Ⅲ	-		2.7	1.2	突出の短い横長の把手として図示したが、縦長になる可能性もある。	横長把手の下の貼付付近に2本の指撫で痕が走っている。	〃	赤褐色	やや少ない荒い石英等が
73	カ-64Ⅱ	B	-	2.7	0.9	把手の先端付近ではほぼ円形状を呈しているが、貼付部分ではやや縦長の楕円形状を呈す	貼付部分に製作時の指圧痕が見られる。内面の調整痕不明	〃	暗褐色	〃

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量(cm)			形態の特徴	手法の特徴	備考		
			口径	最大厚	最小厚			焼成	色調	混和材
						る。かなり上向きの把手。				
第22図74 PL.16	シ-58Ⅱ	B	-	3.1	0.9	突出の短い横長の把手と考えられる。図上復元すると胴径が約15cmの内彎形浅鉢の把手部分となる。	内・外面とも調整痕が残ってない。把手先端部剝離	やや脆弱	赤褐色	荒いがやや多い石英等
第23図75 PL.17	カ-66Ⅱ	A	-	2.7	1.7	底部から胴部へ緩やかに立ち上がっていく平底である。	調整痕なし	〃	〃	〃
76	カ-65Ⅲ	〃	-	2.5	1.6	底部から胴部への立ち上がりがやや急である。	外面剝離。内面に荒い条痕が僅かに見られる。	脆弱	〃	荒いが多い石英等
77	コ-58Ⅲ	〃	-	2.2	2.0	底部から胴部への立ち上がりが緩やか。	外面やや滑らか。内面にやや細かい条痕が横位に走っている。	やや脆弱	〃	荒いやや少ない石英等が
78	オ-65Ⅱ	〃	-	2.5	1.1	底部から胴部への立ち上がりがやや急である。底部から胴部へ急に薄くなっている。	内・外面とも剝離	〃	赤褐色	荒いが少ない石英等
79	シ-59Ⅲ	〃	-	2.8	1.9	底部から胴部への立ち上がりがやや急である。	外面に指圧痕が見られる。内・外面とも調整痕不明	〃	〃	〃
80	ニ-50Ⅲ	〃	-	2.2	2.0	底部から胴部への立ち上がりがかなり急である	内・外面とも剝離	〃	〃	〃
81	サ-59Ⅲ	〃	-	2.2	1.5	底部から胴部への立ち上がりがやや急である。	内・外面とも調整痕が確認できない。	〃	〃	荒いがやや少ない石英等

挿図番号 PL.番号	出土地点 層位	分類	法量（cm） 口径	最大厚	最小厚	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
第23図82 PL.17	コ-59Ⅳ	〃	-	2.6	2.0	底部から胴部への立ち上がりがかなり急である。	外面に指撫で痕が横位に残っている。内面剝離	〃	〃	やや多い荒い石英等が
83	シ-59Ⅲ	〃	-	3.2	2.6	〃　〃	内・外面とも調整痕が確認できない。	〃	〃	やや少ない荒い石英等が
84	サ-58Ⅲ	B	-	1.7	1.2	〃　〃	内・外面とも剝離	脆弱	暗褐色	やや多い荒い石英等が
85	シ-59Ⅲ	〃	-	1.8	0.8	〃　〃	〃　〃	やや脆弱	赤褐色	〃
86	サ-58Ⅱ	A	-	1.5	1.3	内彎形浅鉢の胴部破片	爪形が一つだけ見られるが、紋様ではなく、製作時についたものと考えられる。	脆弱	〃	〃

第2節　石　　器

石器は総数で207点が得られた。器種は石斧・石製利器・磨石・磨石の兼用品・凹石・石皿・砥石・敲き石の8種である。他に用途不明として円盤状製品がある。石斧は次の様に分類した。完成品・未製品・石核石器・転用品である。また、石器利器としたものについても分類を試みた。尖頭器・鑿状利器・石錐の三種である。石器の出土状況は第5表に呈示した。個々の記述は表化し、第20表に記した。

第5表　石器出土状況

器種／層序	石斧						石製利器	磨石	磨石の兼用品	凹石	石皿	砥石	敲き石	円盤状製品	計
	未製品	石核石器	完成品	破損品	再利用	転用									
表採	1	1	16	23	2	6	6		2	1		2	1	1	62
第Ⅰ層	2		9	28	1	1	5		1			3	2		52
第Ⅱ層	1		14	17		3	3	1	4		1	3			47
第Ⅲ層	1		9	19		6	2		4		1	3			45
第Ⅳ層	1														1
計	6	1	48	87	3	16	16	1	11	1	2	11	3	1	207

（注）石斧破損品の内、石斧基部（頭部）の出土は表採（2点）、第Ⅰ層（3点）、第Ⅱ層（3点）、第Ⅲ層（3点）で、合計11点が得られた。他は刃部破片である

1、石斧

石斧は半磨製および局部磨製が主であり、 磨製は少ない。ここでは刃部の整形で特に平面形における刃縁の状態に注目し、以下の様な分類を試みた。

第Ⅰ群……刃縁が直刃タイプのものや直刃傾向のある円刃(刃縁の張り出しが弱いもの)のものである（第24図1～第25図16)。

第Ⅱ群……刃縁が円刃をなすものをその典型とし、偏刃もその範疇に含めた(第26図17～第29図41)。

第Ⅲ群……刃縁の幅がⅠ・Ⅱ群より狭い傾向にあり、刃縁はⅡ群の円刃よりも強く、張り出すものが主である（第29図42～同図48)。

第Ⅳ群……第Ⅲ群よりも刃縁が強く、張り出し、刃は尖状となる(第30図49～同図51)。

また、各群は刃部の幅で、以下の三タイプに区分した。

刃部の幅が1.5 cm～2.9 cmを小型とした。

刃部の幅が3.0 cm～4.9 cmを中型とした。

刃部の幅が5.0 cm～6.9 cmを大型とした。

以上の分類を集約したのが第6表である。

第6表　石斧刃部平面形と刃部の幅

刃部平面形の模式図		Ⅰ群		Ⅱ群		Ⅲ群		Ⅳ群		計	
刃部の幅(cm)		完成品	破損品	完成品	破損品	完成品	破損品	完成品	破損品	完成品	破損品
小	10～19	1（1）	1（1）	1	1（2）	4	7（1）		2	6（1）	11（4）
	20～29	3	4（2）	5	1	3	3		1	11	9（2）
中	30～39	8（2）		4（3）	2（1）					12（5）	2（1）
	40～49			6（1）	6（4）				6（1）	6（1）	6（4）
大	50～59	1		1	3（1）					2	3（1）
	60～69			3（1）	1（1）					3（1）	1（1）
計		13（3）	5（3）	20（5）	14（9）	7	10（1）		3	40（8）	32（13）
		18（6）		34（14）		17（11）		3		72（21）	

注.（　）内は、刃部が破損するもので、推定復元を試みたものである。両頭刃の石斧は破損した刃を除いて完全に残る部位を計測した。刃部平面形は模式図である。

本貝塚出土の石斧で、両刃は11点のみ得られた。他は片刃が圧倒的に多く、出土した(片刃的両刃に分類した)。石斧の計測方法は基部から刃縁を長さとし、刃部の幅をもって幅とした。厚さは基部の中央部を計測した。

石斧は他に群に区分し、次の表を作成した。出土表・長さ・横断面・平面形・刃部の正面形・刃部の縦断面・重量である（第7表～第19表)。

その他に表中の模式図等を概説すると第８・９表は刃部側面形態で、イとしたものは両刃、ロ・ハは片刃である。第10・11表は刃部正面形態を図化したものである。アは直線的なタイプである。イ・ウの両者は弧状のタイプである。便宜的に前者イを正の弧状、後者ウを負の弧状とした。第12・13表と第14・15表は横断面・平面形を略図化したものである。第17～19表は石斧の長さ・重量・刃部の厚さを示したものである。いずれも各群を分類する上で、必要な条件として考えた。以下、群別にその特徴を概説するが、刃部のみの破片も含めた。

(1) 第Ⅰ群（第24図１～第25図16）

第Ⅰ群は総数で24点が得られた。内16点を図示した。第Ⅰ群は小型のものが多く、中型、大型の順に減少する傾向にある。刃部は小型～大型とも片刃が主流となり、両刃は中型で一例のみ得られた。石斧の長さは小型が７cm～８cm、中型は７cm～12cmの範囲内に含まれる。大型のものは１点のみ得られた為、平均的なサイズは保留した。刃の厚さは小型が0.6cm～1.9cm、中型は1.0cm～1.9cmが平均的なものである。重量の面からは小型が50ｇ～99ｇ、中型は50ｇ～249ｇが平均的なものかとみられる。

(2) 第Ⅱ群（第26図17～第29図41）

第Ⅱ群は各群の中で、最も多いものである。点数は48点を数える。この内25点を図示した。この第Ⅱ群の中でも、特に中型が多い。これに次ぐものは大型・小型である。刃部は小型～大型とも片刃に優位性がみられる。両刃は少量ではあるが各タイプに共通して認められた。石斧の長さは小型では不明瞭である。中型は７cm～13.9cmが平均的な範囲とみられる。大型の大半は破損するが、平均的な長さは14cm前後が推定される。重量の面から小型は第Ⅰ群のものと同様に50ｇ～99ｇが考えられる。中型も第Ⅰ群とほぼ近い範囲が考慮される。大型のものは開きが極端に大きい（200ｇ～699ｇ）為、その範囲は限定できない。刃の厚さは1cm～2.9cmのものが多い。

(3) 第Ⅲ群（第29図42～同図48）

この第Ⅲ群は国分直一氏によって命名された「有稜石器」・「割竹型石器」（註１）と称されているグループに属するものが主流である。量的に第Ⅱ群に次いで多く出土した。総数は28点である。

この中で特異な例として44が考えられた。44は稜部を調整剝離によって形成し、稜を意識した感じを受けるものである。この第Ⅲ群は小型のものに限定される。また、刃部は片刃のみに限定される点などが、第Ⅲ群の特徴として捉えることが可能かと考えられる。石斧の長さや重量もある程度、限られている。長さは７cm～10cm、重量が15ｇ～150ｇの範囲内で収まる。刃の厚さは１cm～1.9cmのものが多い様である。

(4) 第Ⅳ群（第30図49～51）

本群の中には、第Ⅲ群の「有稜石器」に近似する例もあるが、これらは刃部の形態（刃の平面形態など）から分類が可能であった為、本群に含めた。量的には最も少なく、３点のみ得られた。このタイプも第Ⅲ群と同様に小型のみで、片刃という点で共通する。石斧の長さや重量は３点とも一部破損する。刃部の厚さは１cm～1.9cmのものが主体かと考えられる。

2、石斧未製品（第30図52～55）

石斧未製品（製作途中）は6点のみ得られた。いずれも、周辺を粗く打ち欠いた後に調整剝離を施す。研磨を施す場合は、極めて小範囲に限られている。

3、石核石器（第30図56）

石核石器として取り扱ったものは一例のみである。この種のタイプは今回、初めて得られた資料である。東南アジアやフィリピンなどから出土するホアビニアン型に近似するものであろうか。なお、この石器については松沢亜生氏（奈良国立文化財研究所）の御教示を得た。

4、石斧転用品（第31図57～64）

この種のものはいずれも、刃を敲打によって潰す為、「敲き石」的な要素を持つ面で共通する。この中で、57は細かい敲打で潰れ、滑面を呈する点で、他と異なる。

5、尖頭器（第32図65～68）

尖頭器としたものは4点のみ得られた。65・67の2点は完形品である。66・68は破損品である。この中で両先端を鋭く、研磨を施す例は65のみである。刃を尖状に施す点で一致する。

6、鑿状利器（第32図69～第33図72）

鑿状利器として取り扱ったものは4点である。いずれも尖端を鑿状に刃を施したものである。この中には72のように錐状（下端）・鑿状（上端）の両方の要素を備えるものもある。また、石斧などの破片を利用したとみられるものもある。

7、石錐（第33図73～79）

石錐として考えられたものは7点得られた。76は石斧の第Ⅳ群に近似するが刃部の形態（特に石斧としての機能的側面を考慮した場合）などから外れる為、錐として取り扱った。78・79は石錐の胴部片とみられるものである。前述した尖頭器・鑿状利器と石錐は広義の石製利器として、第5表中に記した。

8、磨石（第34図80～第35図88）

磨石は12点が得られた。内11点は敲打を側面や端部に残すもので、磨石と敲き石との併用が考えられる。敲打が認められないものとして82が掲げられる。

9、凹み石（第35図89）　凹み石は1点のみ得られた。両面に3～5㎜程の浅い窪みを残す。

10、石皿（第35図90・91）　石皿は2点のみ得られた。完形品は91の1点である。

11、砥石（第36図92・93）　砥石はいずれも破損品で、11点が得られた。比較的、大きいものを図示した。

12、敲き石（第36図94～96）　敲き石は3点得られた。石斧破片を叩き石として転用されたと見られるものが一例ある。

13、円盤形石器（第36図97）　用途不明の石器で、剝片を利用したものである。

第 7 表　石斧群別の出土状況

刃部平面の模式図 ＼ 層序	Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
表採	1 (3)	2		3 (2)	6 (4)	(2)	4 (4)			(1)			8 (10)	8 (4)	(2)
第Ⅰ層	2 (1)	3		1 (1)	1 (2)		2(4)						5 (6)	4 (2)	
第Ⅱ層	1 (1)	3	1	1 (1)	4 (4)	3 (2)	1 (1)			(1)			3 (4)	7 (4)	4 (2)
第Ⅲ層	1 (3)	2		1	4 (3)	1 (2)	(2)			(1)			2 (6)	6 (3)	1 (2)
第Ⅳ層															
計	5 (8)	10	1	6 (4)	15(13)	4 (6)	7 (11)			(3)			18(26)	25(13)	5 (6)
	16(8)			25 (23)			7 (11)			(3)			48 (45)		

注.( )内は刃部の破片資料。

第 8 表　石斧群別の刃部側面形態

刃部側面形態 ＼ 群	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			Ⅳ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
イ		1		1	2	1							1	3	1
ロ	2	1		2	5		2			1			7	6	
ハ	1	6		3	6	2	3			1			8	12	2
破損品						1									1
計	3	8		6	13	4	5			2			16	21	4
	11			23			5			2			41		

注．模式図は典型的なものを図化した。また、明確なものを分類の対象とした。

第 9 表　石斧刃部破片群別の側面形態

刃部側面形態 ＼ 群	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
イ				2			1			3		
ロ	2			1	3	1				3	3	1
ハ	5			1	9	3	10			16	9	3
破損品	1				1					1	1	
計	8			4	13	4	11			23	13	4
	8			21			11			40		

注．模式図は典型的なものを模式的に図化した。また、明確なものを分類の対象とした

第10表　石斧群別の刃部正面形態

刃部正面形態＼群	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			Ⅳ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
ア	2	3		1	3	3	1						4	6	3
イ		3		2	4		3			1			6	7	
ウ	1	1		1	4								2	5	
計	3	7		4	11	3	4			1			12	18	3
	10			18			4			1			33		

注．横式図は典型的なものを図化した。また、明確なものを分類の対象とした。

第11表　石斧刃部破片群別の正面形態

刃部正面形態＼群	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
ア	3			3	6	1	1			7	6	1
イ	2			1	1	2	9			12	1	2
ウ						1						1
計	5			4	7	4	10			19	7	4
	5			15			10			30		

注．横式図は典型的なものを図化した。また、明確なものを分類の対象とした。

第12表　石斧群別の横断面形態

群 / 模式図 刃部の横断面	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			Ⅳ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
1						1									1
2	2	4			2								2	6	
3							2			2			4		
4		1		1									1	1	
5					1		2			1			3	1	
6				2	4		2						4	4	
7			1		3									3	1
8	1					1							1		1
9					1									1	
10　不定形		3		1	2		1						2	5	
11　破損				2									2		
計	3	8	1	6	13	2	7			3			19	21	3
	12			21			7			3			43		

注．横式図は簡略化したものである。

第13表　石斧破片群別の横断面形態

群 / 刃部の横断面 模式図	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
1					1						1	
2	5			2	7	3	1			8	7	3
3							5			5		
4	1						1			2		
5							3			3		
6					2						2	
7				1						1		
8												
9							1			1		
10　不定形					1						1	
11　破損	2				2	3				2	2	3
計	8			3	13	6	11			22	13	6
	8			22			11			41		

注．模式図は簡略化したものである。

第14表　石斧群別の平面形態

群 / 平面形態	I群			II群			III群			IV群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
A. 短冊形	1	1			1		2						3	2	
B. 細身の短冊形		1												1	
C. バチ形		3			3	3								6	3
D. 逆バチ形		3	1	1	2		3			3			7	5	1
E. 不定形	2			2	3		1						5	3	
計	3	8	1	3	9	3	6			3			15	17	4
	12			15			6			3			36		

注．模式図は典型的なものを図化した。IV群は残存の形態から分類した。

第15表　石斧刃部破片群別の平面形態

群 / 平面形態	I群			II群			III群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
A・短冊形				1	2	2	1			2	2	2
B・細身の短冊形							1			1		
C・バチ形	1					1				1		1
D・逆バチ形	3			3	4	2	7			13	4	2
E・不定形					5		2			2	5	
A・Bの不明	1									1		
A～Eの不明	3				2	1				3	2	1
計	8			4	13	6	11			23	13	6
	8			23			11			42		

注．模式図は第14表を参照されたい。

第16表　石斧群別の長さ

石斧の長さ(cm) ＼ 群	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			Ⅳ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
4. 0～4. 9				1									1		
5. 0～5. 9							(1)						(1)		
6. 0～6. 9	(1)									(2)			(3)		
7. 0～7. 9	3	3		(1)	(1)		1			(1)			4(2)	3(1)	
8. 0～8. 9		2			5(2)		2						2	7(2)	
9. 0～9. 9	1	1		1(1)	1		1(1)						3(2)	2	
10. 0～10. 9		1		1	1		(1)						1(1)	2	
11. 0～11. 9		1			1	(1)								2	(1)
12. 0～12. 9			(1)	1	2								1	2	(1)
13. 0～13. 9		1			1	1								2	1
14. 0～14. 9						(1)									(1)
15. 0～15. 9															
16. 0～16. 9		(1)				(1)								(1)	(1)
17. 0～17. 9					1									1	
計	4(1)	9(1)	(1)	4(2)	12(3)	1(3)	4(3)			(3)			12(9)	21(4)	1(4)
	13(3)			17(8)			4(3)			(3)			34(17)		

注.（　）内は残存重量。

第17表　石斧群別の刃部の厚さ比較

刃部の厚さ(cm) ＼ 群	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			Ⅳ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
0.6～0.9	(1)	1		1			2			1			4(1)	1	
1.0～1.9	4	6(1)		4	7(1)		2			2			12	13(2)	
2.0～2.9		1	1	1	5	2(1)	3						4	6	3(1)
3.0～3.9		1			2	1								3	1
計	4(1)	9(1)	1	6	14(1)	3(1)	7			3			20(1)	23(2)	4(1)
	１４（２）			２３（２）			7			3			４７（４）		

注.（　）内は残存部の厚さ。

第18表　石斧群別の重量比較

群 / 重量(g)	I			II			III			IV			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
15～49	1(1)			(2)			1(1)			(1)			2(5)		
50～99	2(1)	1(3)		1(2)	2(3)		4			(2)			7(5)	3(6)	
100～149		(1)			3		1						1	3(1)	
150～199		1(1)			2									3(1)	
200～249		(2)		1	(2)	(1)							1	(4)	(1)
250～299					2									2	
300～349		(1)												(1)	
350～399						1									1
400～449															
450～499			(1)			(1)									(2)
500～549															
550～599					(1)									(1)	
600～649															
650～699						(1)									(1)
計	3(2)	2(8)	(1)	2(4)	9(6)	1(3)	6(1)			(3)			11(10)	11(14)	1(4)
	5(11)			12(13)			6(1)			(3)			23(28)		

注.（　）内は残存重量。

第19表　石斧刃部破片の群別の厚さ比較

群 / 刃部の厚さ(cm)	I群			II群			III群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
0.4～0.9	3(1)			2(1)	1(1)	1	3			8(2)	1(1)	1
1.0～1.9	4			1	11	3(1)	7			12	11	3(1)
2.0～2.9						1	1			1		1
3.0～3.9												
計	7(1)			3(1)	12(1)	5(1)	11			21(2)	12(1)	5(1)
	7(1)			20(3)			11			38(4)		

注.（　）内は残存部の厚さ。

第20表　石器観察一覧

器種	群	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
局部磨製・半磨製石斧	I小	第24図1 PL.18の1	(6.0) 1.4 0.8 19	サ-59 第Ⅲ層	素材は表面が自然面。裏面は剝離面。基部と刃部の大半を欠く。小型の鑿形石器で，自然礫の薄い側面を利用したものである。平面形は逆バチ形を呈する。研磨は表面の基部の一部に施す。裏面および側面は基端の一部と刃部に認められる。横断面は梯形を呈する。半磨製石斧。	斑レイ岩
	I小	〃　2 〃　2	7.7 2.7 1.0 61	コ-59 第I層	表面の研磨は全体的に施すが、基部は徹底されていない。刃部は丁寧に研磨を施す。側面の調整剝離や敲打痕は研磨で研ぎ潰したようである。裏面は基端近くと刃部に施す。平面形は逆バチに近い。横断面は長方形状を呈し扁平である。半磨製石斧。	〃
	I小	〃　3 〃　3	7.2 1.0 1.0 28	カ-55 第Ⅱ層	研磨は表面の刃部に集中し、基部に一部認められる程度である。側面は剝離調整を施した後に研磨を施す面である。他の側面は敲打痕を研ぎ磨く。裏面は表面よりも研磨が丁寧に施すが、剝離面までは消え切っていない。平面形は短冊形に近く、刃部と端部で細まる。半磨製石斧。	輝緑岩
	I小	〃　4 〃　4	7.7 2.4 1.7 59	表採	側面に自然面が観察できる。研磨は端部と側面の大部分を除いて施す。表面よりも裏面の研磨が丁寧である。側面は刃部近くに僅かに残存する。平面形は短冊形に近い。横断面は平行四辺形状を呈する。比較的研磨が丁寧に施された石斧といえる。	〃
	I小	〃　5 〃　5	9.5 2.8 1.9 63	シ-58 第I層	研磨は基部の中央付近から刃部に施す。基部は雑であり、剝離面まで達していない。裏面も同様で、刃部の研磨が丁寧である。側面は敲打調整・研磨が認められる。研磨は刃部近くに集中する。平面形は短冊形に近い。横断面は扁平状を呈する。	斑レイ岩
	I中	〃　6 〃　6	8.9 3.2 0.9 52	カ-64 第I層	素材は表面が自然面、裏面は剝離面。研磨は表面が基部中央付近から刃部へ施す。裏面は刃部を丁寧に施す。他は剝離面である。側面は調整剝離の痕跡が顕著に観察でき、周縁は研磨や敲打が部分的に認められる。平面形はバチ形に近い。	輝緑岩
	I中	〃　7 〃　7	7.3 3.1 1.3 61	サ-58 第Ⅲ層	表面の研磨は刃部が丁寧で、基部は雑である。剝離面を残す。裏面は表面に比べ、研磨は丁寧である。両側面の剝離調整痕（研磨が不十分）は消え切っていない。敲打は基部上部から基端にかけて施しているが、使用によって潰れて手馴れ様になっている。平面形はバチ形に近い。横断面は扁平円形を呈する。	斑レイ岩
	I中	〃　8 〃　8	7.0 3.3 1.3 62	サ-59 第I層	手頃な河原石を利用したものとみられる。両面の研磨は徹底せず、刃部のみが丁寧に仕上げる。両側面の研磨は刃部に集中し、他は敲打調整を施す。敲打は潰れている。平面形は矮少な長方形状となっている。横断面は不定の平行四辺形状を呈する。	〃

器種	群	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
局部磨製・半磨製・磨製石斧	Ⅰ中	第25図9 PL.19の9	8.4 3.9 1.8 80	表採	表面に稜を有し、稜部と刃部に研磨を施す。いわゆる有稜石器と称されるタイプの石斧である。本品は剝片の稜部を生かした感じを受ける。裏面の研磨は刃部から刃縁方向にきつく反らす様に刃をつけている。基部の研磨は調整程度の軽いものである。両側及び基端は敲打を主とする。研磨は刃部近くに施す。平面形はバチ形傾向を示す。横断面は扁平の三角形状を呈する。	斑レイ岩
	Ⅰ中	〃 10 〃 10	7.8 3.8 1.4 100	シ-58 第Ⅰ層	研磨は両面の基部中央付近から刃部に施す。刃部の研磨は丁寧である。左側面は残存部の状況から研磨面の大半が欠失した後に破損面に敲打を加えている。右側面は研磨が比較的残る。基端は剝離面の縁が潰れている。平面形は逆バチ形に近い。横断面は扁平楕円形状を呈する。	〃
	Ⅰ中	〃 11 〃 11	9.1 3.2 1.6 128	サ-59 第Ⅲ層	手頃な河原石を利用したもので、雑な研磨を両面の基部に施す。刃部は丁寧である。両側は自然面を生かし、若干の敲打を加え、刃部に研磨を施す。基部は敲打が潰れ、手馴れ様の磨面が一部、観察される。平面形は逆バチ形に近い、横断面は扁楕円形に近い。	〃
	Ⅰ中	〃 12 〃 12	11.0 3.5 1.6 165	表採	比較的に研磨は丁寧に施されているタイプである。両面、左側面に調整剝離面が観察される。右側面の研磨は丁寧である。基端の敲打は潰れている。平面形は短冊形を呈する。横断面は平行四辺形状に近い。	輝緑岩
	Ⅰ中	〃 13 〃 13	10.8 3.6 2.1 222	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	両面・両側に研磨を施すが、研磨は徹底せず、自然面や剝離面を残す。敲打は基部上端と基端に施すが顕著ではない。平面形は逆バチ形を呈する。横断面は長方形状を呈する。	斑レイ岩
	Ⅰ中	〃 14 〃 14	13.9 3.3 3.0 247	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	表面の研磨は比較的よく施されているが、裏面は剝離面まで達していない。左側面の大半は破損しているが、面の縁は潰れている。右側の基部上半に敲打を加え抉り込みを入れている。この敲打は研磨面を潰した感じで調整している。平面形は不定形状である。横断面は扁楕円形に近い。	〃
	Ⅰ中	〃 15 〃 15	(16.2) 3.8 1.6 (330)	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	両面・両側の研磨は丁寧である。基部を欠く、両側の基部上半に破損面がある。調整剝離面まで研磨は達していない。平面形は短冊形を呈する。横断面は長方形状を呈する。	〃
	Ⅰ大	〃 16 〃 16	(12.9) 5.5 2.4 (450)	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	両面および両側面の研磨は比較的丁寧である。右側面の研磨は自然面や剝離面まで達していない。左側も剝離が残存する。敲打は両側の基部上半と基端に施されている。刃部は使用によってかなり潰れている。平面形は隅丸の逆バチ形に近い。横断面は扁平の長方形状に近い。	〃

器種	群	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
局部磨製・半磨製・磨製石斧	Ⅱ小	第26図17 PL.20の17	9.3 2.9 1.5 69	表採	剝片の縁を粗く、打ち欠いて研磨を施して仕上げている。従って、平面形は歪曲した長方形状となる。研磨は基部下半から刃部にかけて施す。側面の研磨は左側が基部中央付近から刃部にかけて施している。敲打は基部上半に少し認められる。右側は刃部近くの剝離面の縁から施されている。基端は剝離の縁が敲打で潰されている。横断面は扁平の隅丸長方形状を呈する。	斑レイ岩
	Ⅱ小	〃 18 〃 18	9.3 2.6 1.1 59	コ-58 第Ⅰ層	節理面に対して縦割れした剝片の右側に調整剝離を加えている。剝離の縁は敲打や研磨を施す。表面の基部中央に剝離が残存する。両端は研磨を施し、刃部を形成する「両端刃石器」（国分直一氏）である。裏面の研磨は表面よりも比較的丁寧である。平面形は両端で刃が狭くなる隅丸長方形状に近い。横断面は不定の三角形様を呈する。	〃
	Ⅱ小	〃 19 〃 19	10.2 2.9 1.8 97	表採	本品も17と同様に剝離したものを利用したもので、右側に敲打調整（抉り様の浅い凹面部分）を施した後に研磨を加え仕上げている。表面の基端と基部中央付近は研磨が不徹底で剝離面が残る。基端は敲打が認められない。平面形はバチ形に近い。横断面は不定の扁楕形状に近い。	〃
	Ⅱ小 （片刃）	〃 20 〃 20	12.4 2.9 2.2 239	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	表面は丸味を持たせた様な研磨（横断面が凸レンズ状）を施す。裏面の大半は剝離面である。研磨は両側・刃部・基端近くに限られている。両側は研磨のみ認められる。基端の剝離の縁は敲打で潰されている。平面形は逆バチ形を呈する。	〃
	Ⅱ小 （片刃）	〃 21 〃 21	7.2 1.3 1.0 28	サ-58 第Ⅲ層	小型の剝離片（自然面を残す）を利用。自然面は基端面・右側面表面に残る。研磨は徹底しないが両面の刃部は丁寧に仕上げる。左側は剝離や研磨が認められる。他の研磨は角の一部や基部上半に加える程度である。平面形は逆バチ形に近い。横断面は不定の長方形状を呈する。	〃
	Ⅱ小 （片刃）	〃 22 〃 22	4.7 2.8 0.8 19	表採	小型の剝離片を利用したものである。表面の研磨は基部の右斜めの剝離と基端近くを除いて比較的良く丁寧に施す。裏面は刃部と基端を主に施す。左側面は研磨が良く残り刃部に細い剝離が認められる程度である。右側面は剝離が主で、研磨は刃部に施す。平面形は不定の短冊形を呈す。横断面は扁平性が強い長方形に近い。	〃
	Ⅱ中	〃 23 〃 23	8.8 3.2 1.1 60	シ-58 第Ⅰ層	本品も前記した17と同様の「両端刃石器」に含まれるものである。両面の研磨は比較的良好な部類に入いる。左側の破損部を除く他は、主として敲打である。研磨は刃部に限定されている。右側の基端と刃部の一部に研磨が残る。他は剝離の縁を敲打で潰している。平面形は隅丸様のバチ形を呈する。横断面は扁平の隅丸長方形状を呈する。	〃
	Ⅰ中	〃 24 〃 24	8.7 4.8 2.3 125	表採	手頃な河原石を利用したもので、主に両面の刃部と両側に研磨を加えて仕上げている。他（基端）は剝離の縁に敲打を加えている。平面形はバチ形に近い。横断面は凸レンズ状を呈する。	〃

器種	群	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
局部磨製・半磨製・磨製石斧	Ⅱ中	第27図25 PL.21の25	12.2 4.7 2.2 249	表採	前記した17・22と同様の「両端刃石器」である。表面の研磨は調整剥離面まで達していない。研磨は丁寧に施す。裏面も研磨が徹底せず、自然面や剥離面までは達していない。左側面は刃部に研磨を施す。他は調整剥離面や破損面の縁に敲打調整を施す。右側面の刃部（両端）に研磨を加える。他は調整剥離の縁や面に敲打を加えている。平面形は短冊形に近い。横断面は扁楕円形に近い。	斑レイ岩
	Ⅱ中	〃 26 〃 26	9.6 4.1 2.2 165	表採	両面の研磨は基部中央付近から刃部に施す。他は調整剥離面や敲打が認められる。両側は、調整剥離の縁や面に敲打を加える。左側の上半は敲打で、若干、抉れ込む。基端も同様である。平面形はバチ形に近い、横断面は扁楕円形を呈する。	〃
	Ⅱ中	〃 27 〃 27	8.6 3.8 1.6 103	コ-58 第Ⅲ層	表面の研磨は剥離面まで達する。裏面は表面よりも研磨がよく施す。両側の縁は敲打が潰れ、滑めらかになる箇所が主体である。両側には調整剥離が残る。平面形は隅丸の長方形を呈する。横断面は扁平な隅丸三角形を呈する。	〃
	Ⅱ中	〃 28 〃 28	175 3.9 3.9 575	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	両面の研磨は全体的に施すが、剥離面・自然面までは達していない。両側は研磨が主である。敲打は右側の剥離面の縁に僅かに施す。基端も剥離の縁（尖状部分）に敲打を加え縁を潰したようである。平面形は不定の逆バチ形。横断面は不定の菱形状を呈する。	〃
	Ⅱ中	〃 29 〃 29	11.6 3.9 2.4 250	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	両面の研磨はほぼ全体的に施すが、徹底されていない。両側の基部下半から刃部には研磨を施す。他（基部上半）は敲打調整で、浅い抉りを入れている。基端は剥離調整で生じた縁を敲打で潰している。平面形は短冊形に近い。横断面は隅丸の長方形を呈する。	輝緑岩
	Ⅱ中	〃 30 〃 30	8.8 4.1 1.9 90	表採	両面・両側・基端に調整の剥離を施している。刃部への研磨は簡素に加えて仕上げている。製作がある程度簡略化した感じを受けさせる石斧で、典型的な局部磨製石斧である。平面形はバチ形に近い。横断面は扁平な楕円形に近い。	斑レイ岩
	Ⅱ中	〃 31 〃 31	12.2 4.1 2.6 281	表採	表面と右側面の研磨は不徹底であるため自然面が消え切っていない。左面は研磨が主で、剥離面が残る。基端は剥離面の縁部分を敲打で潰している。裏面は使用によって剥離したとみられる破損面と調整剥離面が残る。他は研磨面である。平面形は短冊形を呈する。横断面は隅丸の長方形に近い。	〃
	Ⅱ中	〃 32 〃 32	10.6 3.3 2.8 185	カ-66 第Ⅲ層	手頃な河原石を素材として利用したものとみられる。両側・両面の基部中央付近に剥離調整が残り、その縁を敲打で調整する。その他に両側は抉れを入れている。基端も剥離面や縁を敲打で調整している。研磨は両面の刃部付近が丁寧に仕上げる。他は雑な仕上げとなっている。平面形は隅丸の長方形状に近い。横断面は扁平な三角形状を呈する。	〃

器種	群	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
局部磨製・半磨製・磨製石斧	Ⅱ中	第28図33 PL.22の33	13.7 4.7 1.8 230	サ-59 第Ⅱ層	両面の研磨は剝離面まで達していない。刃部の研磨は丁寧である。両側は基部上半以下から刃部に研磨を施す。上半部から基端は剝離の縁を潰し、抉りが入いって「有肩」状となっている。基端は敲打調整が丁寧に施している。平面形は短冊形に近い。横断面は長方形状に近い。	斑レイ岩
	Ⅱ中	〃 34 〃 34	8.8 4.8 1.3 96	サ-58 第Ⅱ層	両面の研磨は全体的に施すが剝離面や自然面は消え切っていない。右側面の研磨は主とし、調整剝離面が認められる。左側面は剝離面や破損面の縁が磨耗する。刃部は研磨を施す。基端は破損面に研磨を施している。基端および基部上半の状況から刃部を形成していた可能性があり、本品も「両端刃石器」であったようである。平面形は短冊形に近い。横断面は不定形で、扁平の長方形状を呈する。	〃
	Ⅱ中	〃 35 〃 35	7.6 3.6 1.5 72	コ-58 第Ⅲ層	両面は調整剝離を両側に残し研磨は基端から刃部に施す。刃部は刃が欠けたために研ぎ直している。両側の大半は敲打で仕上げている。特に基部下半は敲打調整で、抉りを入れている。基端は割れ面で、割れの凸部分を敲打で潰している。平面形は分銅状を呈する。横断面は不定の扁楕円形に近い。	輝緑岩
	Ⅱ中	〃 36 〃 36	(8.2) 4.6 1.6 (111)	表採	両面は研磨を全体的に施すが、調整剝離面や剝離面まで達していない。刃部の研磨は丁寧である。両側面は調整剝離面の縁に敲打を加えている。右側の基部上半は敲打で抉れる。端部の敲打面は潰れ滑らかになっている。平面形は短冊形に近い。横断面は扁平の楕円形に近い。	〃
	Ⅱ大	〃 37 〃 37	11.4 5.4 2.2 193	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	研磨は両面の基部下半から刃部にかけて施している。他は調整剝離面などが認められる。両側は調整剝離の縁や面に敲打を加えている。基端は敲打が潰れ、滑らかになっている。平面形はバチ形を呈する。横断面は扁惰円形に近い。	〃
	Ⅱ中	〃 38 〃 38	8.3 3.2 1.4 87	サ-59 第Ⅲ層	両面の研磨は調整剝離面まで達していない。両側は敲打調整後に研磨を施す。基端は剝離面の縁を敲打で潰している。平面形は隅丸の長方形状に近い。横断面は扁平の長方形状に近い。	〃
	Ⅱ大	〃 39 〃 39	13.8 6.2 2.2 376	コ-58 第Ⅲ層	両面の研磨は主に刃部に集中し他の研磨は基部中央・基端に施されている。両面は調整剝離・剝離面が大部分を占める。左側面は研磨を施す。右側面は基部下半から刃部に研磨を施す。基部上半から基端は敲打調整を主とする。基端は敲打で仕上げる。平面形はバチ形を呈する。横断面は隅丸の長方形状に近い。	〃
	Ⅱ大	〃 40 〃 40	16.7 6.1 3.0 650	サ-59 第Ⅱ層	本品は32とセットで出土したものである。両面の研磨は比較的丁寧に仕上げるが、剝離面まで達していない。両側に自然面をかなり残す。研磨は周縁部と一部に施す。基端の破損面は新しく縁は鋭い。平面形は短冊形を呈する。横断面は平行四辺形状に近い。	〃

器種	群	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
半磨製・局部磨製・磨製石斧	Ⅱ大	第29図41 PL.23の41	14.7 6.0 2.7 460	サ-58 第Ⅱ層	両面は研磨が徹底せず、大半は剥離面を残す。両側は研磨を全体的に施す。両側の敲打は基端近くに施されている。基端は破損（剥離）面の縁に敲打が若干認められる程度である。平面形はバチ形に近い。横断面は長方形を呈する。	輝緑岩
	Ⅲ小	〃 42 〃 42	9.6 1.2 2.0 130	表採	「割竹型石器」（国分直一氏）と称されるタイプに属するとみられる石斧である。表面および両側は比較的に丁寧な研磨を施す。裏面は平担に仕上げる。基端近くに調整剥離が両側にみられる。他は研磨を施すが、表面よりも雑である。基端は敲打で潰され、滑らかになっている。平面形は逆バチ形に近い。横断面は半円形状に近い。	〃
	Ⅲ小	〃 43 〃 43	7.3 1.9 1.6 49	表採	上記40のタイプに近い石斧である。表面の研磨は刃部が丁寧である。他は雑な研磨で剥離面まで達していない。裏面も、剥離などに達していないが、全体として平担面となっている。敲打は基端に施され、滑らかになる。平面形は短冊形を呈し、横断面が半円形状となる。	〃
	Ⅲ小	〃 44 〃 44	9.2 2.8 1.4 62	ヌ-50 第Ⅰ層	剥離片を利用したもので、細かい調整剥離を施した後に刃部へ研磨を加えた石斧である。「有稜石器」に属する。左側面および基端は剥離の縁を軽く敲打で潰したとみられる。右側は敲打が顕著に残る。平面形は短冊形に近い。横断面は扁平な半円形状を呈する。	〃
	Ⅲ小	〃 45 〃 45	8.3 2.9 2.8 99	表採	自然礫の稜部を利用した「有稜」の石斧である。表面の研磨は基部と稜部の刃部に施すが、調整剥離面や剥離までは達していない。裏面の研磨は刃部へ集中的に施す。敲打は基部の縁沿いに施されている。基端は敲打で仕上げる。平面形は逆バチ形に近い。横断面は三角形状を呈する。	〃
	Ⅲ小	〃 46 〃 46	8.9 2.0 2.3 69	表採	上記、44と同一タイプの「有稜石器」と称されるものに属する石斧である。研磨は両面の刃部に集中し、限定される。左側は自然面を利用する。右側は剥離面と調整剥離が見られる。従って、稜部は敲打で潰された感じとなっている。裏面の両縁部は一部が剥離面を残す。他は敲打で潰されている。基端は自然面が大半を占め、縁部や剥離面に敲打を施す。平面形は細身で短冊様となる。横断面は三角形状を呈する。	〃
	Ⅲ小	〃 47 〃 47	10.6 2.0 0.8 78	シ-58 第Ⅱ層	自然礫の端を打ち欠いて仕上げた石斧である。表面の研磨は部分的に施すが、比較的、良い。また、研磨は、自然面や剥離面まで達していない。裏面は剥離面が若干残り、研磨は中央付近から刃部に施されている。基端の縁は敲打で潰れ、滑らかである。平面形は逆バチ形を呈する。横断面は扁平な半円形に近い。	〃
	Ⅲ小	〃 48 〃 48	5.7 1.0 0.9 19	コ-59 埋め土	両面の研磨は基部中央付近から刃部に施される。両側は剥離調整を加える。両側の敲打は潰れ滑らかになる。基端は剥離面で、その縁を敲打で潰す。平面形は不定なバチ形状に近い。横断面も不定な菱形状を呈する。	結晶片岩

器種	群	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
局部磨製・半磨製石斧	Ⅳ小	第30図49 PL.24の49	(6.2) 1.5 1.3 (2.3)	表採	剝片の稜部を生かし、先端を刃部として利用したものである。研磨は表面の稜（一部）から刃部に施される。裏面は刃部と基部下半の右側と側面（刃部方向）に研磨を施す。基端は剝離の縁となっている。平面形は尖状の逆バチ形に近い。横断面は扁平な三角形を呈する。	斑レイ岩
	Ⅳ小	〃 50 〃 50	(6.9) 1.3 0.7 (50)	カ-58 第Ⅱ層	自然礫の稜部を生かしたものである。研磨は裏面の左側縁部から刃部に施される。他は剝離面である。表面は自然面を残す。基端は剝離の縁となっている。平面形は尖状の逆バチ形に近い。横断面は扁平な三角形状に近い。	〃
	Ⅳ小	〃 51 〃 51	7.2 2.0 1.4 55	キ-66 第Ⅲ層	上記50と同様に自然礫を利用し打ち欠いて稜部を形成する。研磨は両面の刃部に限定される。剝離調整は裏面、左側に観察できる。両側の縁は潰れる。基端は剝離面の縁が敲打で潰される。	〃
石斧未製品		〃 52 〃 52	8.4 3.8 1.5 69	コ-59 第Ⅳ層	両面は剝離面の周辺に調整剝離を加える。特に刃縁や基端に細かい調整を加えている。両側の基部上半に敲打を加え、浅い抉りをつけている。基端は前述した細かい調整剝離の縁を敲打で、潰している。研磨は認められない。また、刃縁は潰れない。平面形は分銅形に近い。横断面は扁平の不定形。	角閃岩
		〃 53 〃 53	13.6 5.2 2.8 220	表採	両面は剝離面であり、その周辺に調整剝離を加える。刃縁に細かい調整剝離を加える。両側の縁・基端の縁に敲打を加えている。研磨は裏面の刃部近くに僅かに施す。平面形はバチ形に近い。横断面は扁惰円形に近い。	〃
		〃 54 〃 54	10.3 5.0 1.5 110	カ-65 第Ⅱ層	両面は剝離面である。周辺に調整剝離を加える。刃部に細かい調整剝離を施す。顕著な敲打は観察できないが、周縁部は潰れが若干認められる。平面形は短冊形に近い。横断面は扁平な菱形状を呈する。	〃
		〃 55 〃 55	7.9 2.9 1.4 64	シ-56 第Ⅰ層	基端に自然面を残す。両面に研磨を施すが、徹底していない。両側は調整剝離を施す。両側の一部分に研磨が認められる。刃部として加工される箇所は、剝離面で、その縁が潰れる。平面形は短冊形を呈する。横断面は不定な長方形状に近い。	斑レイ岩
石核石器		〃 56 〃 56	16.5 8.8 4.1 730	表採	原石利用の石斧。両側・基端に調整剝離を加える。両側・基端の剝離の縁は潰れ、摩耗する。研磨は両面の刃部に施される。平面形は尖状の扁惰円形を呈する。核断面は扁惰円形に近い。本品はその形態が、東南アジア・フィリピンなどの遺跡から出土する「ホアビニアンⅡ」と称されるものに近似するが、確定的ではない。	角閃岩

器種	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
石斧転用品	第31図57 PL.25の57	9.6 4.3 2.0 148	ケ-74 第Ⅲ層	剝片利用の石器で、元来、石斧として使用されていたものが、敲き石やなめし用の石器に転用されたものであろう。研磨面は両面の基部下半から刃部に残る。両側や基端に調整剝離を加える。剝離の縁は敲打で潰される。刃は敲打で潰れ、丁寧な滑面を呈する。平面形はバチ形に近い。横断面は不定な扁楕円形を呈する。	斑レイ岩
	〃 58 〃 58	11.6 5.6 1.9 209	コ-58 第Ⅲ層	両面の研磨は基部下半から刃部に施される。石斧として使用されていたのが、敲打用の石器に転用したものである。両側には調整剝離と敲打が残る。刃部と基部は敲打で潰れ、滑らかになっている。平面形は短冊形に近い。横断面は扁平な楕円形を呈する。	角閃岩
	〃 59 〃 59	8.9 3.7 1.7 118	表採	上記57・58と同様に石斧からの転用品である。表面の研磨は刃部に認められる。裏面の研磨は基端から刃部に施す。両側および基端は調整剝離と敲打が観察される。刃は敲打で潰れる。平面形は短冊形を呈する。横断面は不定な扁楕円形を呈する。	斑レイ岩
	〃 60 〃 60	8.5 3.9 1.5 101	表採	表面の研磨は刃部に認められる。他は剝離面である。裏面は全体的に施すが研磨は徹底しない。両側は調整剝離と敲打が残る。基端と刃は敲打で潰れ、特に基端は著しく潰れる。平面形は短冊形に近い。横断面は扁平な楕円形を呈する。	角閃岩
	〃 61 〃 61	9.8 5.5 1.9 176	カ-65 第Ⅱ層	剝片を利用したとみられるもので、石斧未製品からの転用が可能性として考えられる。研磨は裏面に施すが徹底しない。両側と基端には比較的に粗い調整剝離を加える。剝離の縁は敲打で潰される。刃を整形しようとする箇所の一部は敲打でかなり潰れ、滑らかになる。平面形はバチ形に近い。横断面は扁平な楕円形を呈する。	〃
	〃 62 〃 62	7.7 4.6 1.7 98	サ-59 第Ⅲ層	表面の研磨は基部の下半（一部分）と刃部に認められる。裏面は全体的に施すが剝離面まで達していない。両側は調整剝離と敲打を加える。基端と刃は潰れ、滑面となっている。平面形はバチ形に近い。横断面は歪な半円形を呈する。	〃
	〃 63 〃 63	11.8 5.0 2.2 240	サ-58 第Ⅱ層	手頃な河原石が素材かとみられるものである。両面の研磨は全体的に施すが、剝離面や自然面まで達していない。両側は調整剝離と研磨が観察される。刃は破損し、敲打はない。基端に敲打を残し、滑らかになっている。平面形は逆バチ形に近い。横断面は扁平な楕円形を呈する。	〃
	〃 64 〃 64	9.4 5.4 1.9 248	カ-58 第Ⅲ層	上記63と同様に河原石が考えられるものである。表面の研磨は基端から刃部まで施す。裏面も全体的に施すが、剝離面までは達していない。両側は調整剝離と敲打が認められる。基端は敲打が剝離面まで達する箇所もある。刃は剝離し、剝離の縁が潰れる。平面形は隅丸のバチ形に近い。横断面は半円形状に近い。	〃

器種	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
尖頭器	第32図65 PL.26の65	6.0 0.6 0.4 3	サ-59 第Ⅱ層	両面・両側に研磨を施すが、両面の研磨は両側より雑である。両端を尖状に加工する。上端の尖部は使用によって潰れる。下端は鋭利である。平面形は柳木葉状に近い。横断面は長方形を呈する。	斑レイ岩
	〃 66 〃 66	(5.0) 0.4 0.4 (3)	サ-59 第Ⅲ層	上半部は欠落する。研磨は両面と側面に施すが、両面の研磨は雑で、剥離面まで達していない。尖端は鋭利である。平面形を類推すれば柳木葉形かとみられる。横断面は隅丸長方形を呈する。	〃
	〃 67 〃 67	2.5 0.5 0.3 1	サ-58 第Ⅱ層	自然面を表面と左側に残す。研磨は表面・両面の先端に施す。その他は剥離や調整剥離である。尖端は潰れ、鋭利さに欠く。平面形・横断面は不定形である。	〃
	〃 68 〃 68	2.4 0.5 0.3 1	ニ-49 第Ⅰ層	胴部から上を欠失する。研磨は各面とも丁寧に施す。先端は使用によって潰れる。平面形は柳木葉形が考えられる。横断面は隅丸の長方形を呈する。	〃
鑿金状利器	〃 69 〃 69	3.4 0.5 0.7 2	表採	研磨は表面に全体的に施す、右側の研磨は徹底せず、剥離を残す。裏面は刃部にのみ施す。極小の鑿状利器で、刃幅は3㎜を測る。細部加工用（木工用など）のものであろう。 平面形は歪な長方形様を呈する。横断面は不定の長方形である。	〃
	〃 70 〃 70	2.5 0.4 0.7 2	表採	両面・両側に研磨を施す。両側は剥離を残す。両面の研磨は丁寧である。 刃は両面から研ぎ出し、片刃となる。刃部の幅は先端で1㎜を測る。平面形は短冊形に近い。横断面は梯形状をなす。	〃
鑿状利器	第33図71 PL.27の71	2.5 0.8 0.4 2	カ-55 第Ⅱ層	石斧などの剥片を利用したとみられる石器である。表面の研磨は刃部と基部の一部に施す。裏面は全体的に施すが剥離面まで達していない。両側の剥離面は縁が摩耗した感じを受ける。平面形は不定形。横断面は扁平の楕円形に近い。	〃
	〃 72 〃 72	6.5 1.0 1.0 11	表採	表面の研磨は丁寧に仕上げる。他面は雑で、多くの剥離面を残す。上端に刃を造る。刃の幅は2.5㎜を測る。下端は錐状に加工する。尖端は摩耗する。平面形は柳木葉形を呈する。横断面は隅丸の三角形状を呈する。	〃

器種	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
石錐	第33図73 PL.27の73	6.2 1.3 0.9 12	キ-67 第Ⅰ層	各面に満遍無く、研磨を施す。特に下端は丁寧に施す。尖端は他と比較して鈍角であり、摩耗する。平面形は歪な木葉状を呈する。横断面は半円形状を呈する。	斑レイ岩
	〃 74 〃 74	3.0 0.9 0.4 2	表採	研磨は裏面に全体的に施し、他面は尖端部に施す。表面は自然面を残す。両側は剝離面である。先端は鋭利である。平面形は柳木葉状を呈する。横断面は不定形である。	〃
	〃 75 〃 75	2.7 0.7 0.5 2	キ-66 第Ⅲ層	研磨は両面と側面の尖端に施す。両側は剝離面である。尖端は鈍角ではある。平面形は歪な短冊形を呈する。横断面は長方形状に近い。	〃
	〃 76 〃 76	(4.7) 2.4 0.6 (11)	カ-55 第Ⅰ層	表面は稜のある自然面を利用する。裏面は節理面である。研磨は三面の尖端と稜・縁に観察される。先端は鋭利である。平面形は三角形が推定される。横断面は不定（三角形状）である。	〃
	〃 77 〃 77	(2.6) 1.2 0.4 (1)	カ-56 第Ⅰ層	表面と裏面の研磨は全体的に施すが剝離面までは達していない。両側の研磨は丁寧である。両端は破損する。 平面形は三角形を呈する。横断面は扁平な長方形状をなす。	〃
	〃 78 〃 78	(3.0) 1.5 0.5 (3)	表採	両面に比較的丁寧な研磨を施す。両端は破損する。両側は剝離面が潰されている。上記、77の部類に入いるかと考えられる胴部片である。平面形は短冊形に近い。横断面は扁平な長方形に近い。	〃
	〃 79 〃 79	(5.0) 1.5 0.4 (3)	表採	両面は剝離面が主とし、一部自然面を残す。両側に研磨を施す。両端を欠く。石錐の胴部片かとみられる。平面形は逆バチ形に近い。横断面は歪で扁平な長方形を呈す。	〃
磨石	第34図80 PL.28の80	10.1 8.4 5.0 639	サ-59 第Ⅱ層	両面は使用によって磨滅するが、自然様の小孔を無数に残す。あるいは人為的な高打によるものかどうかは判然としない。周縁は敲打痕が、満遍無く観察できる。両面の磨滅による稜は右上から左下に残る。平面形は隅丸の長方形を呈す。横断面は扁楕円形に近い。	結晶片岩

器種	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
磨石	第34図81 PL.28の81	11.1 8.9 4.8 668	サ-59 第Ⅱ層	両面や両側は研磨を思わせるほど丁寧に使用したかと想定される。両端は敲打痕が認められる。両面は研磨によって形成された稜部が右上から左下に浅く残る。平面形は石鹸状に近い。横断面は歪で扁平な長方形状を呈する。	砂岩
	〃 82 〃 82	11.3 8.6 4.9 690	コ-59 アゼ第Ⅱ層	手頃な河原石を利用したかと考えられるものである。両面・右側に使用による丁寧な磨面が観察される。敲打はない。平面形は卵形に近い。横断面は扁楕円形状に近い。	〃
	〃 83 〃 83	11.4 8.9 5.5 821	コ-59 アゼ第Ⅱ層	表面は研磨で稜部が長軸方向に残る。裏面のものは稜が浅い。敲打は両側の一部と下端に僅かに残る程度である。平面形は石鹸状を呈する。横断面は不定形である。	〃
	〃 84 〃 84	9.5 7.9 5.0 499	表採	両面および両側の上半は磨滅が著しく研磨様に滑らかとなる。敲打は右側下半から下端に施され、下端の大半に磨滅痕が残る。平面形は歪な隅丸三角形状を呈する。横断面は扁平な楕円形に近い。	〃
	〃 85 〃 85	11.8 9.5 7.1 1120	キ-65 第Ⅲ層	両面および周縁に磨滅がみられる。表面の中央は叩きで生じたとみられる浅い窪み（約4㎜）がみられる。左側面の中央と上端に敲打がみられる。特に左側の窪み（約2㎜）は上端より深い。平面形は歪な扁楕円形を呈する。横断面は扁楕円形に近い。	花崗岩
	第35図86 PL.29の86	10.5 8.5 3.0 435	コ-59 第Ⅱ層	両面および上端に磨面を残す。敲打は両側と下端に施すが、右側は敲打が磨り潰されている。平面形は隅丸の二等辺三角形状を呈する。横断面は扁平な長方形状に近い。	角閃玲岩
	〃 87 〃 87	10.8 95 4.8 720	シ-59 第Ⅲ層	両面および上端に磨面を残す。敲打は両側と下端に認められる。平面形は隅丸の三角形を呈する。横断面は扁平な半円形状を呈する。	石灰質砂岩
	〃 88 〃 88	11.5 6.6 5.2 804	サ-59 第Ⅲ層	磨滅する箇所は両面・両側と下端の大半である。右側には敲打が一部分、観察される。敲打が顕著に残る箇所は上端と下端の一部である。平面形は隅丸の長方形状に近い。横断面は歪な正方形状に近い。	斑レイ岩

器種	挿図番号 図版番号	長さ（cm） 幅（〃） 厚さ（〃） 重量（g）	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
凹み石	第35図89 PL.29の89	(9.1) 7.5 5.7 (628)	表採	両面の中央付近に窪みを残す。窪みの深さは表面が5㎜、裏面は3㎜と表面が深い。窪みの周辺は磨耗する。敲打は周辺に施す。平面形は隅丸長方形を呈す。横断面は歪な長方形状のものに属するとみられる。	斑レイ岩
石皿	〃 90 〃 90	(12.0) (8.9) 3.5 (579)	ニ-40 第Ⅱ層	両面および左側面は磨り減って凹面となる。両端は自然面を残す。表面の凹みは4～5㎜を測る。裏面は3～4㎜を計測する。平面形および横断面は不定形である。	砂岩
	〃 91 〃 91	15.8 12.9 4.1 1210	カ-64 第Ⅲ層	平面形は歪な三角形状を呈し、各頂部は敲打で潰れる。磨り面は各側面と両面にみられる。敲打の一部は右側の下端に帯状に残る。横断面は扁平な長方形をなす。	〃
砥石	第36図92 PL.30の92	長軸 4.2 短軸 2.7 厚さ 1.8 重量 29	表採	小礫を利用したとみられる砥石で、表面と右側に研磨によって生じた磨面があり、線状痕も観察できる。特に側面は凹面となる。上端の一部にも磨面がみられる。平面形は梯形状を呈する。横断面は不定の方形をなす。	〃
	〃 93 〃 93	(4.4) (3.2) (3.1) (68)	カ-54 第Ⅰ層	石皿（？）の破片利用かとみられるものである。磨面は表面のみ観察される。平面形は不定の長方形に近い。横断面は不定な方形状に近い。	花崗岩
敲き石	〃 94 〃 94	(9.8) (3.2) (2.3) (80)	キ-67 第Ⅲ層	石斧からの転用が考えられる打き石である。大半を欠落する。研磨は基部の中央（表面）と刃部（裏面）に認められる。側面には調整剥離と敲打が残る。刃は、敲打で潰される。平面形は不定形である。横断面は方形状に近い。	斑レイ岩
	〃 95 〃 95	12.0 5.2 3.8 298	サ・シ-59 アゼ第Ⅱ層	両面と左側面・下端の大半は研磨様の磨面を残す。両端および右側面は敲打が著しい。平面形はバチ形に近い。横断面は不定な五角形様を呈する。	〃
	〃 96 〃 96	9.5 5.1 1.0 199	シ-59 第Ⅱ層	表面と裏面の一部（下端）に研磨様の磨面を残す。両側の剥離面に敲打を若干、施す。両端部は敲打で潰れ滑らかになる。平面形はバチ形に近い。横断面は不定の長方形である。	〃
円盤形石器	〃 97 〃 97	長軸 9.0 短軸 8.0 厚さ 1.8 重量 195	表採	剥片利用で、周縁に調整剥離を加える。敲打は使用によるものか、調整によるかは判然としない。左側は薄く、刃状を呈する。平面形は円形状を呈する。横断面は不定形である。用途不明。大田原遺跡出土の「円盤形石」に近似するものかと考えられる。	〃

石　器　収　束

石器の中で、特に注目されるのは石製利器の出土である。このタイプに一部、属するものは国分直一氏らによる下田原貝塚の調査で得られている（註２）。この手のものは他に無土器のトゥグル浜遺跡（註３）やピューシタ遺跡（註４）で出土例がある。これまでの状況から下田原期まで遡ることが改めて確認された。今のところこの石製利器は八重山・与那国地域から多く、認められる傾向が考えられ、ひとつの地域的特徴かと想定された。また、台湾の例を見ると芝山岩文化期（註５）のものにも想起させるものが出土している。

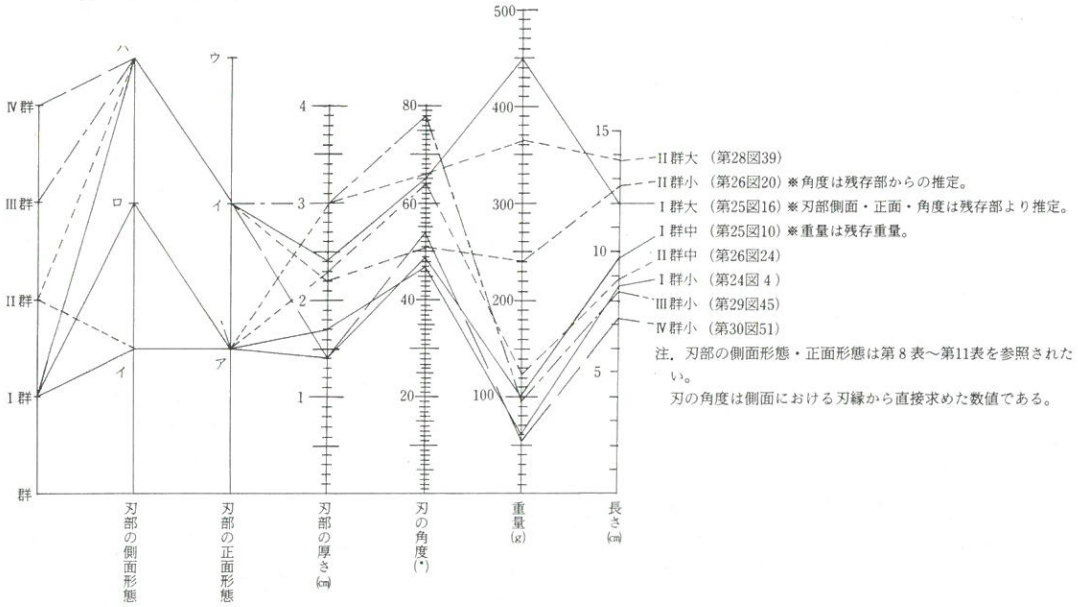
石核石器についてはフィリピン出土（註６）のホアビニアンIIに形態などが近似するものがあるが、本品がその範疇に入いるかは比較検討を要するため、確定的なものではない。また、滝口宏氏は八重山における石斧の中で、半磨製・局部磨製石斧の中にもバクソン・ホアビニアンの両文化期から出土するものに近似する例を掲げている（註７）。

出土した石斧の中には国分直一氏の言うビラ型石器・有稜石器・両端刃石器・割竹型（ホッグ・バッグ型）石器（註８）が今回の調査でも得られている。ビラ型石器・両端刃石器はＩ・II群の短冊形を主体に含まれ、有稜石器・割竹型（ホッグ・バック型）石器はIII群に主に含まれている。

円盤形石器についても過去の発掘調査（註９）でも出土している。この円盤形石器についての用途は出土例の増加や今後の研究などによって究明されるものかと考えられる。

下記に示す表は石斧（群別）の刃部形態（側面・正面）・刃部の厚さ・刃の角度などを典型的な例として抜き出したものである。

第21表　石斧群別関連表



石斧の刃部幅で各群に共通してみられる小型のものは鑿的要素を示すものが多いかと考えられた。他の中型・大型のタイプの主流は手斧 (Adze) となるものが考えられ、明確な斧 (Axe) は数点のみ得られただけであった。この様な状況は八重山諸島の普遍的な特徴ともいえ、阿利直治氏は Adzes Culture という文化的特性として把握している（註10)。

註

1 「南島先史時代の研究」国分直一　慶友社　1972年。

2 「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」　金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文　水産大学校研究報告　人文科学篇第 9 号　1964 年。

3 「トゥグル浜遺跡」　沖縄県教育委員会　1985 年。

4 石垣市教育委員会で、実見させて頂いた。

5 「台北芝山岩遺跡発掘報告」　黄土強　台北市文献委員会　1973 年。

6 「Philippine Prehistory」An Anthropological Overview of the Beginnings of Filipino Society and Culture F. LAND JOCANO 1975。

7 「沖縄八重山」　滝口宏編　校倉書房　1960 年。

8 註 1 に同じ

9 註 2 に同じ

10 「大田原遺跡」　石垣市教育委員会　1982 年。

第3節　骨・牙製品

骨製品および牙製品は総数で72点が得られた。内10点は研磨を施した骨針・骨錐の胴部破片である。骨・牙製品の出土状況は第22表に呈示した。個々の観察は別表に記した。計測部位の幅・厚は残存部の中央付近を基準とした。また、サメ歯製品は計測部位を図示することにした。

第22表　骨・牙製品出土状況

種類／層序	実用品				実用品・装身具						装身具				用途不明		計
	骨針	骨錐	牙製尖状製品	ノミ状製品	サメ歯製品						猪牙製品	有孔犬牙製品	有孔椎骨製品	有孔顎骨製品	牙状有溝製品	鯨骨製品	
					Aタイプ	Bタイプ	C		D								
							aタイプ	bタイプ	aタイプ	bタイプ							
表採	1(1)				1		1	3		1			3				10（1）
第Ⅰ層		2	1		3						1				1		8
第Ⅱ層	(3)	2	1	6		1			2		1			1		1	15（3）
第Ⅲ層	6(6)	7(1)	2	1		1	1	1		2		1	1				23（7）
第Ⅳ層	2						1		1	1							5
計	9(10)	11(1)	4	7	4	2	3	4	3	4	2	1	4	1	1	1	61（11）

注．骨針・骨錐の（　）は尖端を欠落する資料の点数である。

サメ歯製品
A．製作途中のもなどを含むので研磨や加工（歯根部の切傷痕）などを施すもの。
B．歯冠・歯根部を全体的に研磨を加えて仕上げるもの。
C．歯冠と歯根部の間（歯頸部）に孔を穿つもの。一孔穿つものと二孔穿つもは、細分して、前者をCaタイプ、後者はCbタイプとした。
D．歯冠と歯根部の側面および平面に研磨を加えて仕上げるもの。孔を有するものをDaタイプとし、孔を有しないものをDbダイプとした。

骨・牙製品は実用品・装身具・用途不明に分類される。分類は素材も可能な範囲で分類中に組み入れた。分類は下記に記すとおりである。

○実用品
- 骨針・骨錐・牙製尖状品・ノミ状製品（素材：イノシシ・魚骨）
- サメ歯利用で実用品や装身具を含む
- 猪牙製品（イノシシ）

○装身具
- 有孔犬牙製品（イヌ）
- 有孔椎骨製品（サメ科）
- 有孔顎骨製品（ウツボ科）

○用途不明―牙状有溝製品（魚骨）・鯨骨製品（クジラ）

（1）実用品

実用品はイノシシを利用したものとサメ歯利用（一部）のものがある。イノシシの骨・牙を主体的に利用する骨針・骨錐・牙製尖状品・ノミ状製品とサメ歯利用の製品について記す。

イ）骨針（第37図1～同図11）

骨針は胴部片や先端片を含めて、総数で17点が得られた。いずれも破損品である。素材はイノシシ利用16点、魚骨利用1点である。魚骨利用のものは先端部が、発掘中に折れ、粉失した。イノシシの腓骨を利用したものが優位的に占める。

ロ）骨錐（第38図12～同図22）

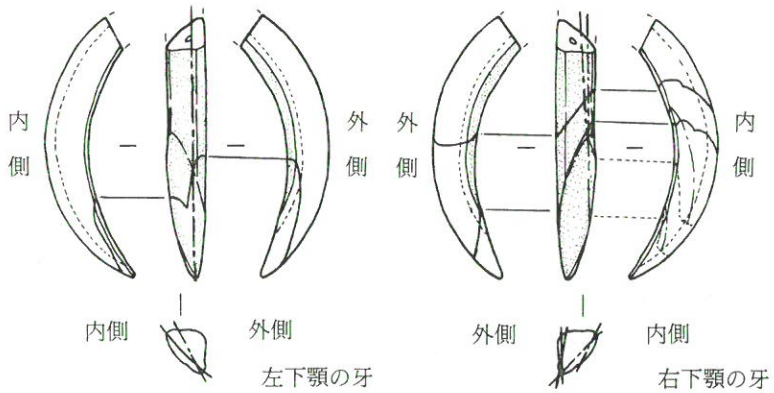
骨錐は胴部片を含めて11点が出土した。素材は全てイノシシの骨を利用したものである。骨の利用部位は次の箇所が掲げられる。脛骨（右脛骨5点・左脛骨2点）・尺骨（右尺骨2点）・橈骨（右橈骨1点）・腓骨（左腓骨1点）である。脛骨利用のものが最も多い。

ハ）牙製尖状品（第39図23～同図26）

イノシシの牙を利用したものである。自然のままの状態で使用されたとみられるもの（同図24）・縦割りで利用したもの（同図23・26）・牙の一部を削り出したもの（同図25）に分類できる。いずれも尖状に加工したもので、錐様の製品として考えられるものが主である。併用品の中には牙を縦割りにしてエナメル質の面に刃をつけたものもある（割れ面の部分からエナメル部分へ研磨を加え、一部は稜を形成する）。この併用品に近い形状のものが、過去の調査で得られているようである。

ニ）ノミ状製品（第39図27～同図33）

イノシシの牙・骨（腓骨）を利用したものであり、前者（牙）が多い。先端をノミ状に加工したものである。刃は片刃を意識している。牙は次のように分類される。牙の一部を削り出して刃をつけたもの（同図27・28・31）。縦割りにして刃をつけたもの（同図29・30）。腓骨の一端に刃をつけたもの（同図32・33）に大別できる。以下に示す図は牙の利用部位である。



第6図　イノシシの牙製品（尖状・ノミ状）の利用部位
（実線は各面利用タイプ・一点破線及び点線は縦割り利用タイプ）

牙製尖状製品とノミ状製品（牙製のみ）で、刃または尖端を内側エナメル部分につけるタイプは主なものとして同図26•28〜30がある。外側エナメル部分を利用するものは主として同図25・31がある。両者は細分が可能である。

ホ）サメ歯製品（第40図34〜第41図53）

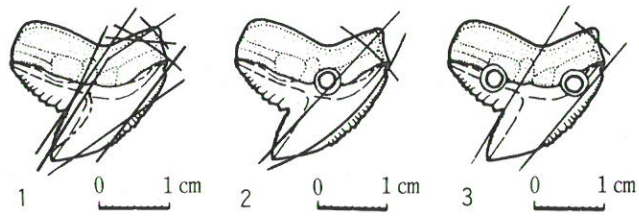
サメ歯製品は製作過程において、著しい変化が認められたものである。従って素材も考慮して次の4種に大別した。

A．製作途中のもを主とするもので研磨や加工などを施すもの
B．歯冠・歯根部に全体的に研磨を施して仕上げるもの
} アオザメを主として利用する。

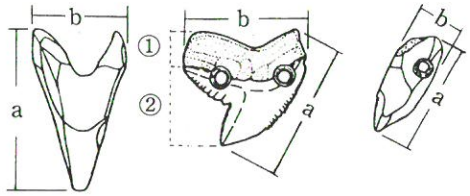
C．歯冠と歯根部の間（歯頸部）に孔を穿つもので、細分した。
　一孔穿つものをCaタイプ
　二孔穿つものをCbタイプ
D．歯冠と歯根部の側面および平面に研磨を施すもので、細分した。
　孔を穿ったものをDaタイプ
　孔が無いものをDbタイプ
} メジロザメ科を利用する。

A・Bのタイプはアオザメの歯を主に利用したものである。Aタイプは次の3つが考えられた。装身具を意図したとみられるものが1点(同図35)。抉り込みを入れ若干の研磨を施し、利器を意図としたとみられるものが1点（同図36)。不明なものが2点（同図34・37）出土している。Bタイプは装身具が2点（同図38・39）得られている。

C・Dのタイプはメジロザメ科を利用したものである。Cタイプは歯根の端部や歯根に研磨を施す例が2点（同図42・第41図46）認められた。他は一〜二孔穿つものである（Caタイプ3点、Cbタイプ4点)。いずれも垂飾品としての利用が今のところ考えられる。Dタイプは歯冠の先端が磨耗するものが、その特徴である（前記のCタイプには認められなかった)。利器として使用されたことは、事実として思慮される。Dタイプの中にはCタイプから垂飾品から利器へ転用されたものがある。同図47はCbタイプが破損したものを再加工したものである。同図48はCaタイプから転用されたものであり、側面の一部に孔が穿たれた痕跡が認められる（金子浩昌氏の教示)。従って、Caタイプの破損品が二次加工されDbタイプへ移行し、Cbタイプの破損品は加工されDaタイプとして登場したことになる。Dbタイプが未加工のサメ歯から来る可能性は薄くなる要素が強い。やはりCタイプ（垂飾品）→Dタイプ（利器）への転用が自然の流れかと考えられる。また、Dbタイプの中には再利用のものがある(同図53)。Daタイプが破損後に、その破損面を一部使用し摩耗している点が注視された。これはDbタイプの破損後に再加工・再利用がなされたことを裏付ける資料である。このサメ歯製品の中で、Aタイプの歯冠に抉りを入れるタイプに孔を穿った痕跡がついてないので、あるいは未加工（自然の状態）のものに抉りを入れ緊縛した製品が今後、発見される可能性が強くなった。この種のサメ歯製品で、C・Dタイプの類例は与那国のトゥグル浜遺跡（早稲田編年の第Ⅰ期相当）（註1）があるが、



第７図　サメ歯製品Ｄタイプにおける使用部位の箇所（実線は加工箇所・一点破線は再利用の箇所）
1.　Ｄｂタイプ（第41図49～52）の加工方向、Ｄｂタイプの再利用（第41図53)。
2.　Ｄｂタイプ（第41図48）の加工方向、Ｃａタイプからの転用。
3.　Ｄａタイプ（第41図47）の加工方向、Ｃｂタイプからの転用。
注．Ｄｂタイプを未加工品と製品に重ねて図化した。また、孔の位置は製品によって若干のズレがある。



サメ歯製品計測部位と使用名称
ａ＝長さ。①歯根
ｂ＝幅。②歯冠
※①・②の間は歯頸

時間的に差がある。

（２）装身具

装身具としたものは猪牙製品・有孔犬牙製品・有孔椎骨製品・有孔顎骨製品である。その素材も他と比較して豊富である。

イ）猪牙製品（第 41 図 54・第 42 図 55）

イノシシの牙歯を利用したものである。54 はサメ歯製品 D_b タイプに近い。装身具の一種であろう。55 は牙の端部に抉りを入れたもので、腕輪などが用途として考えられる。

ロ）有孔犬牙製品（第 42 図 56）

イヌの歯に両面から孔を窺ったものである。装身具の一種であろう。

ハ）有孔椎骨製品（同図 57～60

サメの脊椎骨を利用したもので、椎骨の臼状凹部に孔を穿つものである。首飾りなどが用途として想定される。

ニ）有孔顎骨製品（同図 61）

ウツボの顎骨に孔を三孔穿ったものである。垂飾品的要素が強いものである。

３）用途不明（同図 62・63）

クジラと魚の骨を利用したものである。62 はクジラの骨を削り出して鰹節状に加工したもので、その用途は判然としない。63 は魚骨に研磨と溝を施すものである。

４）その他（同図 64）

イノシシの中足または中手骨に切傷痕を残すもので２点のみ得られた。イノシシの肉を切りとる際に傷がついたものであろう。

骨・牙製品収束

以上が、骨・牙製品としたものである。下田原式土器を伴出する遺跡では骨・牙製品の量や種類において、最も豊富に出土したことは意義深いものである。

骨錐は脛骨利用のものが多い点が要素として把握でき、沖縄本島の尺骨利用タイプを主とするものと区別できるものである。明らかな異いが認められる。

牙製尖状製品やノミ状製品は木などを削る為の工具かと想定されるが、今後の研究に十分な期待が掛けられる。刃の位置に外側利用と内側利用の二タイプが存在することが判明した。

サメ歯製品がある程度解明できたことは大きな成果であろう。特にCタイプの破損品が再加工され、Dタイプとして登場した過程が把握できた。従来、この種のものは装身的要素を持つものとして理解されていたが、利器が確認されたことは貴重な発見となった。また、Cタイプとしたものは、ポリネシアなどの島々で利器（武器など）（註２）として利用されているが、本遺跡出土のものは装身具の一種としての可能性が今のところ考えられた。しかしながらサメ歯製品の系譜となるとやはり南の島々に求めるべきであろう。

猪牙製品の一部で、サメ歯のDタイプを模したようなものが一例、得られた。装身具として取り扱った。類例が出土していないので、今後の資料の増加が期待されるところである。

有孔犬牙製品は今回、初めて出土したものであり、先島（宮古・八重山）にその類例はない。類例はフィリピンのイフガオ族・台湾のアミ族にもあるようで、複式耳飾として利用されていた様である（三島格氏論文による）（註３・４）。また、台湾の芝山岩遺跡からも採集品が得られているようである（註５）。

有孔椎骨製品は与那国のトゥグル浜遺跡で得られているが、時期的に異なるようである。

有孔顎骨製品もこれまで報告例がなく、今後の資料の増加に期待される。

牙状有溝製品・鯨骨製品も発見例がない。

これらの資料は、将来の発掘や研究に委ねられる部分が大きく課題として残った。

註１「与那国トゥグル浜遺跡」沖縄県教育委員会　1985年３月。

２「鮫の歯を使用した遺物」連載第５回　ポリネシア遺物控　篠遠喜彦　えとのす　第10号　新日本教育図書

３「九州および南島出土の鮫歯製垂飾について」　三島　格　日本民族文化とその周辺　考古篇　国分直一博士古稀記念論集　新日本教育図書　1980年。

４「アミ族のクラッパーベルと其の起源」　鹿野忠雄 東南亜細亜民族学先史学研究 矢島書房 1946年。

５「台北芝山岩遺跡発掘報告」　黄土強　台北市文献委員会　1973年。

〈参　考　資　料〉

「オセアニアの貝製品」印東道子　名蔵貝塚群発掘調査報告　沖縄県教育委員会　1981年。

「台湾北部におけるサメ歯状石製品―沖縄との関係」三島　格　鹿大考古２号　鹿児島大学法文学部考古学研究室　1984年。

第23表　骨・牙製品観察一覧

挿図番号	図版番号	残存状況	法量 長(cm) 幅(cm) 厚(cm) 重量(g)	素材	出土地区層位	主な特徴
第37図 1	PL 31 1	尖端部のみ残す。	3.4 0.5 0.4 1.7	イノシシの腓骨	コ-59 第Ⅲ層	猪の腓骨を利用した骨針、研磨は先端部のみ施す。
同図 2	〃 2	〃	3.7 0.5 0.4 0.9	〃	サ-59 第Ⅲ層	猪の腓骨を利用した骨針である。同図1と同じタイプである。先端は使用によって生じたとみられる潰れが観察される。研磨は先端に限られている。
同図 3	〃 3	〃	2.4 0.4 0.3 0.3	〃	コ-58 第Ⅳ層	猪の腓骨を利用した骨針で、前記の1・2と同じタイプであるが、幅・厚さの面からは細身と言える。研磨は先端部に集中する。
同図 4	〃 4	〃	3.2 0.5 0.3 0.6	〃	カ-66 第Ⅲ層	猪の腓骨を利用した骨針。部分的に破損面や剝離面が認められるが、先端部に使用時に生じたとみられる溝状の窪みや使用痕が観察できる。
同図 5	〃 5	〃	2.6 0.6 0.5 0.9	〃	サ-58 第Ⅳ層 (東側アゼ)	猪の腓骨を利用した骨針で、前記した資料よりも先端部の研磨は雑で、稜を残す。先端は使用によって生じたとみられる潰れが観察できる。潰れは他の資料よりも著しいく、鈍い。
同図 6	〃 6	〃	2.8 0.5 0.4 0.7	〃	サ-59 第Ⅲ層	猪の腓骨を利用した骨針。同図5と同様に先端部の研磨は雑である。先端は僅かに破損するが、上記の5よりも鋭い。
同図 7	〃 7	〃	1.6 0.6 0.5 0.6	〃	表採	猪の腓骨利用の骨針。残存する面は全体的に研磨を施す。本資料は灰色～黒色を帯びている(火を受けた可能性が考えられる)。
同図 8	〃 8	〃	1.9 0.5 0.4 0.4	〃	コ-58 第Ⅲ層	猪の腓骨を利用した骨針である。残存部から細身のタイプに近い。
同図 9	〃 9	両端を欠失する。	3.6 0.6 0.5 1.4	〃	コ-58 第Ⅲ層	猪の腓骨を利用した骨針の胴部である。先端部に研磨を施す。研磨は比較的、丁寧に仕上げていたかと推定される。
同図 10	〃 10	先端を欠失する。	4.2 4.5～1.2 3.5 1.4	〃	サ-59 第Ⅲ層	猪の腓骨を利用した骨針の破片で、端部に孔(直径2.8㎜)を穿つ、孔は両面から穿っている。胴部は使用による摩耗で、滑沢を呈している。
同図 11	〃 11	〃	8.4 0.6 0.5 3.2	魚骨	サ-59 第Ⅲ層 直上	魚骨を利用した骨針の胴部片である。研磨は先端付近と頭部近くに部分的に施す。

挿図番号	図版番号	残存状況	法量 長(cm) 幅(cm) 厚(cm) 重量(g)	素材	出土地区層位	主な特徴
第38図 12	PL. 32 12	ほぼ完形に近い。	8.6 1.5 1.0 9.3	イノシシの左脛骨	カ-65 第Ⅲ層	猪の左脛骨の外側を使用した骨錐である。研磨は先端部と胴上半(一部)に施す。先端の研磨は丁寧である。先端は使用によって生じたとみられる潰れがあり、鈍く、丸味を帯びている
同図 13	〃 13	端部を欠失する。	8.4 1.6 0.8 8.0	イノシシの右脛骨	シ-58 第Ⅲ層	猪の右脛骨内側を使用した骨錐。研磨は先端部から端部近くまで施す。先端部は丁寧に研磨を加え、前記のものより鋭く尖る。
同図 14	〃 14	胴上半部と先端を残す。	4.3 1.9 0.7 3.3	イノシシの右尺骨	ニ-50 第Ⅲ層	猪の右尺骨内側で関接部直下を加工した骨錐である。研磨は全体的に施すが、特に先端は丁寧に仕上げる。
同図 15	〃 15	両端を欠失する。	2.1 0.9 0.4 1.1	イノシシの右脛骨	コ-59 第Ⅲ層	猪の右脛骨内側を利用した骨錐である。残存部の研磨は比較的雑に施す。
同図 16	〃 16	先端部を残す。	2.5 0.8 0.5 0.8	〃	サ-59 第Ⅲ層	猪の右脛骨内側を利用した骨錐である。残存部の研磨は先端を丁寧に施し、鋭く仕上げている。他は雑である。
図同 17	〃 17	胴上半部を欠失する。	3.8 0.6 0.5 1.1	〃	コ-59 第Ⅲ層	猪の右脛骨内側を利用した骨錐である。研磨は残存する面に全体的に施す。先端の研磨は丁寧である。先端に溝状の使用痕が2～3本認められる。使用痕は左から右方向に螺旋状に残る。
図同 18	〃 18	端部を欠失する。	5.9 1.2 0.7 3.7	イノシシの右橈骨	サ-59 第Ⅲ層	猪の右橈骨後面を利用した骨錐である。先端の部は欠失する。研磨は先端を主体に胴部の一部に達する。
図同 19	〃 19	端部を欠失する。	5.2 1.4 1.0 5.6	イノシシの左脛骨	コ-59 第Ⅱ層	猪の左脛骨外側を利用した骨錐とみられるものである。先端がかなり摩耗し丸味を呈している。研磨は先端と胴部の一部に施す。本品は火を受けた形跡が窺える。
図同 20	〃 20	端部を欠失する。	5.5 1.7 1.1 5.1	イノシシの右脛骨	カ-66 第Ⅱ層	猪の右脛骨の稜の部分を利用した骨錐である。研磨は全体的に施す。先端の研磨は丁寧である。軸頂部近くに緊縛用に施したとみられる抉りが両側に観察される。
図同 21	〃 21	両端を欠失する。	5.5 4.7 0.9 3.8	イノシシの右尺骨	コ-59 第Ⅲ層	猪の右尺骨内側を利用した骨錐である。研磨は端部（胴上部）近くまで施す。先端近くは研磨が雑で稜を残す。
図同 22	〃 22	ほぼ完形に近い。	4.1 1.8 0.7 2.0	イノシシの左腓骨の遠位端	コ-59 第Ⅰ層	猪の左腓骨を利用した骨錐である。小型の骨錐である。研磨は先端と胴上半（一部分）に施す。研磨は面取りを意識した様であり、横断面は方形状に近い。

挿図番号	図版番号	残存状況	法量 長（cm） 幅（cm） 厚（cm） 重量（g）	素材	出土地区層位	主な特徴
第39図 23	PL. 33 23	端部（胴上部）欠失。	4.0 0.7 0.4 1.9	イノシシの牙	サ-58 第Ⅲ層	猪（雄）の右下顎に付属する牙を利用したもので牙製の錐が考えられる。研磨は先端の両側と裏面に部分的に施す。牙は縦割りのようであり、その破片を加工する。
同図 24	〃 24	胴上部と端を欠失。	2.7 0.8 0.7 1.0	〃	ニ-51 第Ⅰ層	猪の左下顎にある牙を利用したもので牙製の錐が考えられる。研磨は骨質の部分に限定される。
同図 25	〃 25	端部を欠失。	6.8 1.1 0.8 7.1	〃	コ-58 第Ⅱ層	猪の右下顎にある牙を利用したもので牙製の錐とみられるもので、胴部近くから先端方向に縦割れ様に整形し、先を尖がらす。研磨をこの割れ面に施す。
同図 26	〃 26	両端を欠失する。	7.9 1.7 0.7 10.9	〃	サ-58 第Ⅲ層	猪（雄）の左下顎の牙を縦方向に打割して加工している。研磨は先端と胴部に（一側）に施す。特に胴部の研磨は丁寧であり、刃をつけた可能性が強い。先端は錐状に形成されている。錐と刃子の併用が考えられる。
同図 27	〃 27	端部を欠失する。	6.6 1.3 0.6 7.3	〃	シ-58 第Ⅱ層	猪（雄）の右下顎の牙を縦割りし、丸鑿状に成形する。研磨は骨質部分に限定され、特に先端は丁寧に仕上げる。刃の一部はエナメル質を利用している。
同図 28	〃 28	先端部のみ残存。	4.2 1.1 0.7 3.7	〃	サ-59 第Ⅱ層	猪の左下顎の牙を利用したもので鑿状に加工したものである。削りは骨質部からエナメル質部分まで達し、刃を付けたようである。研磨は先端部に限られ、稜部を形成する。刃の横断面は長方形状を呈す。刃はエナメル質を意識として加工している。
同図 29	〃 29	端部と先端の一部が欠失。	4.2 1.4 0.3 2.5	〃	シ-58 第Ⅱ層	猪の右下顎の牙を縦割りして丸鑿状に成形したものである。研磨は先端部を主体に施す。刃の部分は丁寧に研磨を加える。
同図 30	〃 30	端部と先端を欠失。	5.8 1.6 0.4 0.4	〃	コ-59 第Ⅱ層	猪の右下顎の牙を縦割りして利用したもので、前述した29のものに近い形状となっている。エナメル質の部を削りとって研磨を加える点で異なっている。
同図 31	〃 31	端部を欠失。	5.8 1.2 1.2 5.9	〃	サ-59 第Ⅲ層	猪（雄）の右下顎の牙を利用した鑿状の製品である。エナメル質を深く削り込んで反対側のエナメル質まで達している。研磨は削り込んだ先端部のみ限られている。
同図 32	〃 32	ほぼ完形	5.9 0.8 0.6 4.1	イノシシの左腓骨の遠位端	シ-58 第Ⅱ層	猪の左腓骨を利用した鑿状の製品である。刃は両面から研磨を施す。刃は片刃になる。側面の一部に研磨が認められる。研磨は胴上部に達する。
同図 33	〃 33	端部を欠失。	6.9 0.6 0.4 1.9	イノシシの腓骨	サ-58 第Ⅱ層	猪の腓骨を利用した丸鑿状の製品とみられるものである。刃は片面から研磨を施すため、片刃となっている。一側に研磨が観察できる。研磨は端部込くまで施される。

挿図番号	図版番号	残存状況	法量（長（cm）、幅（cm）、厚（cm）、重量（g））	素材	出土地区層位	主な特徴
第40図 34	PL. 34 34	完形品 Aタイプ	a＝2.6 b＝1.9 c＝0.8 d＝2.2	アオザメ	カ-65 第Ⅰ層	歯根の大半を切断する。研磨は表面の歯根に残存する。製作途中のものであろうか。
同図 35	〃 35	歯冠が欠失。 Aタイプ	a＝3.1 b＝1.2 c＝0.7 d＝1.8	〃	ヌ-49 第Ⅰ層	歯冠の上端（歯頸）に孔を穿っている。孔は表面裏から穿っているが、ズレが生じている。残存部の状況から孔は貫通していないようである。孔のサイズは3～4㎜が推定される。
同図 36	〃 36	歯冠・歯根が欠失する。 Aタイプ	a＝3.0 b＝— c＝0.6 d＝1.7	メジロザメ科	表採	歯根の一部に研磨を施す。歯冠の端部（鋸歯）に緊縛のための抉りが認められる。同箇所は紐擦れによって窪み、磨耗する。
同図 37	〃 37	歯冠が欠失。 Aタイプ	a＝— b＝3.5 c＝0.6 d＝1.65	アオザメ	コ-59 第Ⅰ層	歯根部に切傷痕（加工の為の）が7～8本認められる。他に研磨痕がみられる。本品は火を受けた痕跡があり、歯冠の剝離がある。色合いは灰色～黒色を帯びる。
同図 38	〃 38	ほぼ完形 Bタイプ	a＝3.0 b＝1.3 c＝0.5 d＝1.65	〃	カ-64 第Ⅱ層	歯冠の研磨は表面と側面の一部に施す鋸歯は除去されている。歯根部は溝状の箇所まで丁寧に研磨を端し、仕上げる。
同図 39	〃 39	ほぼ完形 Bタイプ	a＝3.9 b＝2.1 c＝0.8 d＝3.9	アオザメ	コ-58 第Ⅲ層	歯根部・歯冠は全体的に研磨され丁寧である従って鋸歯はない。破損は歯根の突起部が僅かに欠失する程度である。牙製の鏃などが用途として考えられる。
同図 40	〃 40	完形 Caタイプ	a＝2.0 b＝1.6 c＝0.3 d＝0.6	メジロザメ科	コ-59 第Ⅲ層	歯頸部に一孔穿つ。研磨は認められない。孔は表面から穿っている。孔のサイズは2.8～3.0㎜を測る。
同図 41	〃 41	ほぼ完形 Caタイプ	a＝2.2 b＝1.9 c＝0.3 d＝0.8	〃	表採	歯頸部に一孔穿つ。研磨を施した痕跡はない。孔は表面と裏面から穿つ。孔のサイズは2.0㎜を測る。
同図 42	〃 42	歯冠の大半は欠失する Caタイプ	a＝— b＝1.9 c＝0.4 d＝0.7	〃	サ-59 第Ⅳ層	歯頸部に一孔穿つ。研磨は歯根の両端（側面）に施し、歯冠の一部まで研磨が達する。孔は表面と裏面から穿たれている。孔のサイズは2.5㎜を測る。
同図 43	〃 43	歯冠と歯根の一部が欠失する。 Cbタイプ	a＝2.3 b＝— c＝4.0 d＝0.8	〃	表採	歯頸部に二孔穿つが、一孔は大半が欠失する。研磨は施されていない。孔は表面から穿たれた様である。孔のサイズは3.0～3.5㎜を測る。
同図 44	〃 44	歯冠と歯根の一部が欠失する。 Cbタイプ	a＝— b＝2.1 c＝0.5 d＝1.0	〃	コ-58 第Ⅲ層	歯頸部に二孔穿つが一孔は完全に貫通していない（製作途中であったかと推定される。孔は両面から穿たれている。孔のサイズは1～2㎜を計測する。

挿図番号	図版番号	残存状況	法量 長（cm）幅（cm）厚（cm）重量（g）	素材	出土地区層位	主な特徴
第41図 45	PL. 35 45	歯根の大半と歯冠の一部が欠失。cbタイプ	a＝— b＝— c＝0.4 d＝0.4	メジロザメ科	表採	歯頸の箇所に二孔穿つが、いづれも破損する。研磨は認められない。
同図 46	〃 46	歯根と歯冠の大半を欠失する。cbタイプ	a＝— b＝— c＝0.35 d＝0.45	〃	表採	歯頸の箇所に二孔穿っている。一孔は破損する。孔は両面から穿っている（表面からある程度、穿った後に裏面より穿って整形したものかと考えられる）。研磨は両面の一部（孔の周辺）と側面（歯根）に施す。孔のサイズは1.5～1.8mmを測る。
同図 47	〃 47	完形 cbタイプ	a＝2.5 b＝1.0 c＝0.4 d＝1.0	〃	サ-58 第Ⅳ層	歯頸の箇所に一孔穿っている。孔は両面から穿っている。孔のサイズは2.1～2.5mm。歯根の研磨は両面・両側と全体的に施す。歯根の突起部分も一部施す。歯冠の一部（両面・面側）は研磨によってかなり研がれ、骨質部が露出する。先端の鋸歯は摩滅する。
同図 48	〃 48	ほぼ完形 Daタイプ	a＝1.6 b＝0.7 c＝0.35 d＝0.4	〃	カ-66 第Ⅱ層	歯根の箇所に孔を穿っていたようである。（孔の位置を未製品のものと比較すると歯頸の箇所に穿ったようである。）つまり、Caタイプが破損して、二次的加工を施しているわけであるが孔は研ぎ残されている。研磨は両面と両側に施す（歯冠は骨質部が研磨で露出する。）先端の鋸歯は磨滅する。
同図 49	〃 49	ほぼ完形 Dbタイプ	a＝1.6 b＝0.6 c＝0.25 d＝0.35	〃	サ-59 第Ⅱ層	歯冠の一部が剝離し、内部（骨質）が露呈する。骨質部にも鋸歯が観察できる。研磨は歯根の端部（突起部分）と一側面に施す。裏面には研磨は認められない。先端の鋸歯は摩耗しない。
同図 50	〃 50	〃 Dbタイプ	a＝2.2 b＝1.5 c＝0.4 d＝0.6	〃	サ-59 第Ⅲ層	研磨の状況を見ると表裏面とも一部に認められ、両面とも歯冠まで達する。側面は歯冠のみの研磨と歯根から歯冠までの研磨が観察できる。先端の鋸歯は摩耗がみられない。
同図 51	〃 51	〃 Dbタイプ	a＝2.5 b＝0.9 c＝0.5 d＝0.9	〃	コ-59 第Ⅳ層	表面の研磨は歯頸の一部を深く研ぐ為、歯冠と歯根に達する。側面は歯冠のみ研ぐ面と歯根・歯冠を研ぐ面がある。先端の鋸歯なかなり摩耗する。
同図 52	〃 52	完形 Dbタイプ	a＝2.5 b＝0.8 c＝0.45 d＝0.8	〃	サ-59 第Ⅲ層	両面の研磨は側面に部分的に施している。側面の研磨は一側面が歯冠のみ施す。他面は歯根から歯冠の骨質まで施す。先端の鋸歯は摩耗する。
同図 53	〃 53	歯根部の大半が欠失し、歯冠の一部が破損する。Dbタイプ	a＝1.2 b＝0.5 c＝0.3 d＝0.25	〃	表採	表面の研磨は歯根・歯冠の一部にみられる。両側の研磨は歯冠のみ施す箇所と歯根・歯冠（骨質）を施す面がある。破損面（先端）は使用によって生じた摩耗がある。先端の鋸歯も摩耗する。
同図 54	〃 54	ほぼ完形	a＝3.0 b＝1.0 c＝0.5 d＝1.75	猪上顎部の歯	シ-58 第Ⅱ層	猪（雌）の上顎部の歯を利用した製品である。平面形は前述したサメ歯Dbタイプに近い。研磨は歯冠の一側面に限られている。先端は僅かに欠落するが、摩耗が認められる。

挿図番号	図版番号	残存状況	法量 長（cm） 幅（cm） 厚（cm） 重量（g）	素材	出土地区層位	主な特徴
第42図 55	PL. 36 55	両端が欠失。	4.9 1.3 1.4 5.8	イノシシの牙	ヌ-50 第Ⅰ層	猪（雄）の左顎に付属する牙を利用したものである。端部の歯冠と骨質にある稜の一部を削り出し（抉り込んで）いる。骨質部には粗い研磨が半分程度施す。
同　図 56	〃 56	完形	2.0 0.6 0.5 0.6	イヌの歯（左上顎第3切歯）	サ-58 第Ⅲ層	イヌの左上顎第3切歯に孔を穿ち研磨を施すものである。孔は両面から穿たれ、サイズは1.0～1.5㎜を測る。研磨は両面の孔の周辺（歯根）に施されている。磨耗は歯冠の先端・歯根の端部・一側面に認められる。
同　図 57	〃 57	周辺を欠く。	残存直径0.8 厚 0.4 重量0.14	サメの脊椎	表採	サメの脊椎に孔が認められるものである。両面とも周縁の一部を欠く。孔は椎骨臼状凹部に穿つ。孔のサイズは2.0～2.5㎜を測る。同品は全体的に面の保持が悪い。
同　図 58	〃 58	ほぼ完形	直径0.8 厚 0.4 重量0.15	〃	〃	サメの脊椎に孔を穿つものである。孔は椎骨臼状凹部に穿たれている。孔のサイズは2.0～2.5㎜を計測する。側面の一部に研磨によって生じたとみられる条痕がある。
同　図 59	〃 59	½欠失	残存直径0.7 〃厚　0.2 〃重量0.07	〃	〃	サメの脊椎に孔を穿ったものである。本品は片面が欠失する。孔のサイズは1.7～1.8㎜を計測する。
同　図 60	〃 60	ほぼ完形	直径0.6 厚 0.3 重量0.09	〃	- 第Ⅱ層	サメの脊椎骨臼状凹部に両面から孔を穿つ。孔サイズは1.5～1.7㎜を計測する。研磨が側面の一部に施されている。
同　図 61	〃 61	中央部と端部を欠く。	端部を除く復元したサイズ 長5.2＋x 幅1.0 厚0.4 重量1.9＋x	ウツボ右下顎骨	サ-58 第Ⅱ層	ウツボの右下顎骨に孔を3孔穿っている。孔は先端（サイズ1.5～1.8㎜）。胴下部（サイズ2.8～3.0㎜）。端部（サイズは破損の為不明）にある。孔は両面から穿たれている（胴下部の状況）。
同　図 62	〃 62	一端を欠失。	残存長20.8 幅4.2 厚3.2 重量239	クジラ	サ-59 第Ⅲ層	クジラの骨を利用した利器様の製品で、先端を尖らす。平面形はカツオ節状を呈する。表面は胴上半から先端が削りで仕上げる。他は研磨面かとみられる。両側は削りが主である。
同　図 63	〃 63	一端を欠失	残存長3.1 幅1.0 厚0.5 重量1.3	魚骨	シ-58 第Ⅰ層	魚骨を利用したもので、平面形が牙状に近い。尖端の両面に研磨を施す。両側の一部にも研磨施している。両側には幅1㎜～2㎜の溝を削り込んでいる。
同　図 64	〃 64	完形	4.3 0.6 0.5 1.8	イノシシ第2～第5中足（中手）骨	サ-58 第Ⅱ層	イノシシ第2～第5中足（中手）骨に切傷痕のあるもので、傷は6～7本観察できる。

第4節　貝製品

貝製品は総数で200点が得られた。層位別に見ると第Ⅲ層が144点と最も多く、出土した（全体の4分の3を占める）。これに次ぐものが表採資料で23点であり、第Ⅱ層17点、第Ⅰ層11点、第Ⅳ層4点と減少する。表採品は貝製品を含めた他資料（石器・骨製品）も注意深く、地表面を詳細に観察しながら採集したため、結果的に多くなった。

貝製品は素材も考慮しながら、実用品・装飾品・用途不明（実用品・装飾品のいずれか）の三タイプに分類した。

(1) 実用品
- a．スイジガイ・クモガイ製利器
- b．ヤコウガイの蓋製貝刃
- c．シレナシジミ製貝刃
- d．シレナシジミ製利器
- e．貝匙（シレナシジミ・ホラガイ・イモガイなど）

(2) 装飾品
- f．タカラガイ製垂飾品
- g．イモガイ科製装飾品
- h．巻貝科製装飾品

(3) 用途不明
- i．二枚貝有孔貝製品

記述は上記に従って行なうが、個々の遺物の観察は表化した（**第31表～第39表**）。遺物の出土状況は第24表に示した。以下、実用品・装飾品・用途不明の順序で記述する。

第24表　貝製品出土状況

製品名／層序	実用品											装飾品			用途不明			計
					貝匙										二枚貝有孔製品			
	クモガイ製利器 スイジガイ	蓋製貝刃 ヤコウガイの	製貝刃 シレナシジミ	製利器 シレナシジミ	シレナシジミ	ホラガイ	ゴホウラ	イモガイ科	シャコガイ科	ガサガイ オオベッコウ	タカラガイ	貝製垂飾品	イモガイ科製装飾品	巻貝科製装飾品	シレナシジミ	シャコガイ科	サルボウ リュウキュウ	
表採	1	8									1	1	1	10			1	23
第Ⅰ層		2					1						3	3			2	11
第Ⅱ層	4	1	1			1		1		1			2	3			3	17
第Ⅲ層	8	9	1	1	8	2		1	1			6	17	42	3	2	44	145
第Ⅳ層		2											1	1				4
計	13	22	2	1	8	3	1	2	1	1	1	7	24	59	3	2	50	200
					17										55			

(1) 実用品

a．スイジガイ・クモガイ製利器

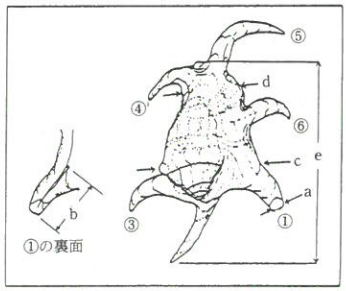
スイジガイ製利器（第43図1～第44図12）

本品は12点が得られた。刃の形態で、明確なものはポイントのみが得られた。他は使用によって刃が破損し、形態は判然としないが、刃部の研磨の状態を各面から観察した結果から次のタイプが推定された。円刃と平刃の2タイプである。観察表ではこれらの3タイプ（ポイント・円刃・平刃）を可能性の強いものを前者に、弱いものを後者に位置づけて記した。

刃は管状突起①に付すものが9点と多く、管状突起②に刃を付すものは2点、管状突起③に刃を付すものが1点のみ得られた。

サソリガイ製利器（第44図13）

本資料は一点のみ得られた。刃は管状突起①・③・⑦に付す。刃の形態は平刃の片刃である。（各部の突起番号はスイジガイの番号に続けた。また、計測部位の測定もこれに順じる方法で行なった。）



第8図 スイジガイ製利器の突起番号計測位置（上原静原図『南島表6』第7号1981年より）

b．ヤコウガイの蓋製貝刃

ヤコウガイの蓋を利用したもので、蓋の薄い縁辺を打ち欠いて刃を付すものである。ここではトゥグル浜遺跡（註1）の分類に準じたが、新資料などについては分類に追加する方法で行なった。以下は追加を含めた分類である。

トゥグル浜遺跡（基準タイプ）	Ⅰ．下半縁辺加工型	（第45図14～16）
	Ⅱ．右辺・下辺加工型	（第45図17～22）
	Ⅲ．下辺加工型	（第45図23・24）
	Ⅳ．下半加工型	（第46図25・26）
	Ⅴ．三辺(右・左・下)加工型	（第46図27～30）
	Ⅵ．三角形型	（第46図31～33）
	Ⅶ．右欠．下辺加工型	（出土例がない）
下田原貝塚（追加タイプ）	Ⅷ．半欠・右辺・下辺加工型	（第46図34）
	Ⅸ．右辺加工型	（第46図35）

上記、分類ではⅦに相当するものは出土していない。ⅧとしたものはⅡが破損した状態が思慮されたが、便宜上、分離することにした。

各タイプの出土量や出土層位については第25表に呈示することにした。また、各タイプごとの出土頻度をトゥグル浜貝塚と比較を試みることにするが、両遺跡は早稲田編年第Ⅰ期（トゥグル浜遺跡）と第Ⅱ期（下田原貝塚）に位置付られ、時間的な差は顕著である。また、両遺跡間での出土量はトゥグル浜遺跡が圧倒的に多いことを考慮して参考資料とするが、両遺跡に共

通する要素であるⅠタイプからⅦタイプで試みることにした。

	トゥグル浜貝塚	下田原貝塚
Ⅰ	130（37%）	3（15%）
Ⅱ	18（5%）	6（30%）
Ⅲ	66(19%)	2（10%）
Ⅳ	41(11%)	2（10%）
Ⅴ	27(7%)	4（20%）
Ⅵ	49(14%)	3（15%）
Ⅶ	18(5%)	0（0%）
計	349(約100%)	20(100%)

第25表　ヤコウガイの蓋製貝刃

タイプ＼層序	表採	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅲ層	第Ⅳ層	計
Ⅰ	1			1	1	3
Ⅱ	2	1	1	2		6
Ⅲ				1	1	2
Ⅳ				2		2
Ⅴ	3			1		4
Ⅵ	2			1		3
Ⅶ						0
Ⅷ		1				1
Ⅸ				1		1
計	8	2	1	9	2	22

この状況から当然のことではあるが，時間差や使用頻度・使用部位の相違などの点で、今後、注視されるであろう。

c．シレナシジミ製貝刃

本品は前者のヤコウガイ製貝刃と重量・素材などの面を含めた点で主に区別した（使用の上から共通的な要素も考えられる）。

同品はシレナシジミの腹縁に細かい押圧剝離を施して刃を付けるものである。出土量は2点のみ得られた（第47図36・37）。その内の1点は腹面に穿孔するものも得られている。

d．シレナシジミ製利器

シレナシジミの腹縁破片部を利用したものである。研磨は腹縁破損（剝離）面に施し、尖状となる（第47図38）

e．貝匙

貝匙の素材としては次の種類がある。シレナシジミ・ホラガイ・ゴホウラ・イモガイ・シャコガイ・オオベッコウガサガイ・タカラガイがあり、いずれも腹縁・ら塔・殻底・殻頂などに若干の研磨などを加える。数量はシレナシジミ8点（第47図39～46）、ホラガイ3点（第48図47～49）、ゴホウラ1点（同図50）、イモガイ2点（同図51・52）、シャコガイ1点（同図53）、オオベッコウガサガイ1点（第49図54）、タカラガイ1点（同図55）であり、総数17点となる。この中で、シャコガイ製のものは皿状の容器としての面も考えられる。オオベッコウガサガイやタカラガイ製のものは、前者が素材の脆さという面で、後者は極少的な面から非実用品である。寧ろ、装飾的な面が要素として考えられた。

(2)　装飾品

f．タカラガイ製垂飾品

タカラガイの背面を除去し、周縁に研磨を加えるものや背面除去後に殻底を殻軸方向に縦割

りし、研磨を施すものがある。前者は6点(第49図56〜61)が得られた。後者は1点(同図62)のみ出土した。

g．イモガイ科製装飾品

本タイプのものはイモガイ科（コマダライモが主体とみられるが斑文や斑点が消えているため明確ではない）の貝に穿孔や研磨などを施すものである（第50図63〜第51図86)。これらの製品は、その形態(特に形状)などが多岐に認められたので、特徴を把握して分類を試みた。

分類は以下のとおりである。また、各種別の出土状況は第26表に呈示した。

第26表　イモガイ科製装飾品

タイプ＼層序			表採	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅲ層	第Ⅳ層	計
Ⅰ		a				1（2）		1（2）
		b						
Ⅱ		a				1		1
		b				1		1
Ⅲ		a				（1）		（1）
		b			1	1		2
Ⅳ		a		1（1）				1（1）
		b		1		1	1	3
Ⅴ		a	1		1	（3）		2（3）
		b				6		6
計		a	1	1（1）	1	2（6）		5（7）
		b		1	1	9	1	12

注．a＝有孔のもの、b＝無孔のもの、(　)＝内は殻頂部破損のものである。

Ⅰ．殻軸・外唇・ら塔・殻頂の部位に研磨（部分的な）を加えたものである。殻頂に穿孔するものや破損するものをⅠaとし、未穿孔のものをⅠbとした。(第50図63〜65)。

Ⅱ．殻軸・外唇・ら塔部・殻底・殻頂の部位に研磨（部分的な）を加え、殻底（外唇近く）に穿孔し、その縁辺に研磨を施す。Ⅰと同様に殻頂に穿孔するものや破損するものをⅡa、未穿孔のものをⅡbとした。(第50図66・67)。

Ⅲ．外唇・殻底・ら塔部に部分的な研磨を施し、殻底や外唇の孔はⅡより大きくなる。その孔の縁辺を研磨を施す。Ⅰ・Ⅱと同様にⅡa・Ⅱbのタイプを設けた。(第50図68〜70)。

Ⅳ．殻軸の先端を完全に除去した後に外唇や殻底の縁辺に研磨を加える。その他の研磨（部分的な）はら塔・殻頂に施す。Ⅰ〜Ⅲと同様にⅣa・Ⅳbに分けた。(第50図71〜75)。

Ⅴ．殻軸・外唇・殻底の大半を除去後、その縁辺などに研磨を施す。その他の研磨（部分的な）はⅣと同じ部位に施す。Ⅰ〜Ⅳと同様に二分した（第50図76〜第51図86)。

本製品は穿孔例が5点、殻頂破損が7点、未穿孔のもは12点と半数を占める。この未穿孔のものから穿孔タイプへの製作途中のものであるのかあるいは未穿孔の状態で、完成されたかは判然としないところである。また、後項の巻貝科製装飾品へ直接（製作が進んだ段階）的に結びつくかは今後の課題であろう。

h．巻貝科製装飾品

巻貝科製装飾品は最も多く、得られた資料である。総数は59点を数える。本品の素材となった貝種は不詳である。巻貝科製装飾品は前項のイモガイ科製装飾品Vとしたものよりも外唇・殻底の除去面が大きく、ら塔部に一段と近接する例が主体となる。研磨も丁寧に仕上げられ、対象とする面（ら塔部）も大きくなる。これも細分が可能であったので、次の7タイプを設定した。また、各種ごとの出土状況は第27表に示した。

Ⅰ．外唇・殻底の研磨はら塔部の一部やら塔近くまで施すが、形状は不均等（斜位）な側面となる。他の部位の研磨は僅にら塔部と殻頂の一部分に施す。殻頂部が有孔あるいは破損品はⅠaとし、未穿孔のものはⅠbとした。（第51図87～第52図110）。

Ⅱ．外唇・殻底の形状はⅠよりも研磨が進み、ら塔部へ接近し、ら塔部の一部へ研磨が達する様になる。形状は（側面観から）Ⅰよりも斜位の面はゆるくなる。他の部位の研磨はⅠと同様の箇所に僅に施す例が多い。殻頂部への穿孔例（あるいは破損する）のものはⅡaとし、未穿孔のものをⅡbとした。（第52図111～116）

Ⅲ．外唇・殻底をほぼ除去した状態になり、ら塔部に研磨は達し、均一的な側面となる。他の部位の研磨はⅠ～Ⅱと同様に部分に施す。殻頂部の穿孔例や破損するものはⅢaとし、未穿孔のものはⅢbとしたが出土していない。（第52図117）。

Ⅳ．Ⅲと同様に外唇・殻底を除去し、研磨はⅢよりも丁寧となる。殻頂部・ら塔部への研磨は平滑する様な研磨で、均等になる。穿孔や破損例をⅣaとし、未穿孔のものは出土していない。（第52図118～第53図125）。

Ⅴ．外底・殻底の研磨はⅢと同様な形状で、ら塔部の研磨はⅣよりも徹底し、平滑な面に仕上げる。穿孔、破損品をⅤa、未穿孔のものをⅤbとした。（第53図126～第54図141）。

Ⅵ．外唇・殻底の研磨はⅣと同様な形状であるが、ら塔部の研磨はⅤと同じように平滑な面に仕上げる。穿孔・破損品の例をⅥaとした。未穿孔のものはⅥbとしたが出土していない（第54図142～144）。

Ⅶ．外唇・殻底はⅠと同様に残す。研磨は殻底・ら塔部・殻頂の一側面に集中するため、側面は斜位となる。有孔や破損のものをⅦaとした。未穿孔のものはない。（第54図145）。

本品は穿孔例が29点・未穿孔18点・破損品12点得られた。前述したイモガイ科製装飾品と穿孔例を比較すると、本品は穿孔例が多くなる傾向にある。また、本タイプのⅤ以下のタイプより貝種の違いや貝のサイズが小型化していく、傾向がみられた。この貝製品の出土状況で、特殊な例がある。これは第2地区のサ-59第Ⅲ層面で陸産マイマイが多量に集中して出土する

地点（長軸約 80 cm×短軸約 50 cm×深さ約 30 cm）に於いて、IVaタイプ 2 点、Vaタイプ 6 点、VIaタイプ 2 点の計 10 点が集中して出土した。これらのものは明らかに火を受けている点と穿孔するもので共通性を持つものである（因みにこの地点からサメ歯未製品が 20 点近くと製品 1 点、タカラガイ製垂飾品 1 点が得られた）。これらの状況から本品は手または首などに着装したものが、偶然かあるいは火を受けて落ちた可能性も想定された。

第27表　巻貝科製装飾品

タイプ＼層序			表採	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅲ層	第Ⅳ層	計
Ⅰ		a	1	1	1	3（5）		6（5）
		b			2	11		13
Ⅱ		a				1（1）		1（1）
		b	1	1		2		4
Ⅲ		a		1				1
		b						
Ⅳ		a	2			5（1）		7（1）
		b						
Ⅴ		a	3（2）			7（2）	1	11（4）
		b	1					1
Ⅵ		a				3		3
		b						
Ⅶ		a				（1）		（1）
		b						
計		a	6（2）	2	1	19（10）	1	29（12）
		b	2	1	2	13		18

注．a＝有孔のもの、b＝無孔のもの、（　）＝内は殻頂部破損のものである。

(3)　用途不明

i　二枚貝有孔貝製品

二枚貝の背面に穿孔したものである。素材となる貝種はシレナシジミ・ヒメジャコ・リュウキュウサルボウである（第 55 図 146～第 57 図 200）。出土量ではリュウキュウサルボウ製のものが圧倒的に多く、出土している。この種の製品については国分直一氏は本貝塚から出土したアナダラ科の貝製の錘として報告している（註 2）。また、カンドウ原遺跡でも二枚貝有孔製品（貝錘）として報告し、民具資料や民俗例などの追加例を窺っている（註 3）。

本品は貝錘と見なすには不十分な点があるように感じられる。これは紐ズレ痕などの要素が十分に満たされていない点が多くある。仮に貝錘と見なした場合、網などにまだ着装がなされない段階のものとして考えることも可能である。本品はまた、簡素な装垂品なども十分に考え

られるので、単に二枚貝有孔貝製品とした。

シレナシジミのもので一例は孔の周辺に研磨を施すものが得られている（第55図147）。

ヒメジャコのもの2点とも穿孔部の孔の一縁辺が摩耗する（第55図149・150）。

リュウキュウサルボウ製のもので研磨を孔の周辺に施す例は2点（第55図157・159）のみ得られた。他は穿孔のみの資料が主体となっている。このリュウキュウサルボウ製のものは重量や穿孔方向・穿孔部位・孔の形状について下記のように分類を試みることにした。

分類の方法はカンドウ原遺跡（註4）を参考にした。穿孔例は内側から打撃を加えるものが48点と圧倒的に多い。外側から打撃を加えた例は2点のみであった。また、孔の状況から打撃の状況を考えた場合、単孔タイプ（一回打撃）は16点、複孔タイプが最も多く、34点である。

孔の形状を観察すると定形的なものは18点が得られた。不定形のものは32点と多い。孔の位置は上・中としたものが半数以上を占める。

重量を見てみると15～19 gのものが16点と多い。

以上を簡単にまとめると重量10～24 gまでのものが多く、穿孔方向は内側のものが多いようである。孔の状況から打撃は、複孔（複数）のものが主体である。従って、複孔タイプのものは孔の形状が不定形となるものが多い。孔の位置についても上・中や上・前に穿つ例が多いようである。この結果はカンドウ原遺跡（註5）の例に近似する傾向が確認された。

第28表　リュキュウサルボウ製二枚貝有孔製品の重量

重量（g）＼殻の左右	右殻	左殻	計
5～9		1	1
10～14	4（2）	5	9（2）
15～19	7	8（1）	15（1）
20～24	3	7	10
25～29	4	2	6
30～34	1	2	3
35～39	2		2
40～44		1	1
計	21（2）	26（1）	47（3）

注.（　）内は破損資料（残存重量）の点数を示す。

第29表　リュウキュウサルボウ製二枚貝有孔製品の穿孔方向・方法・形状の一覧

穿孔の方向・方法・形状＼殻の左右	右殻	左殻	計
内側・単孔・定形	5	6	11
内側・単孔・不定形	2	3	5
内側・複孔・定形	2	5	7
内側・複孔・不定形	14	11	25
外側・複孔・定形	0	0	0
外側・複孔・不定形	0	2	2
計	23	27	50

第30表　リュキュウサルボウ二枚貝有孔製品の孔の位置

孔の位置＼殻の左右	右殻	左殻	計
上・前	4	8	12
上・中	14	12	26
上・後	1	2	3
中・前	1	0	1
中・中	3	5	8
計	23	27	50

注. 孔の位置　縦軸（殻高の方向）は殻頂部から上・中・下
横軸は前（前背縁）、中（中央）、後（後背縁）

貝　製　品　収　束

下田原式土器を伴出する遺跡で、貝製品の種類や量的な面でも本貝塚の貝製品は豊富といえる。これまでの、この時期の遺跡で報告例がなかったものとして、スイジガイ・サソリガイ製利器・イモガイ科製装飾品・巻貝科製装飾品などが掲げられる。スイジガイ製利器は従来、無土器遺跡から登場する（註６）（註７）ものとして考えられていたが、今回の調査で、下田原期からその出自として求められた。スイジガイ製利器の用途は漁具（ポイント）とするものと木工用等（丸ノミ・平刃）が想定されている（註８）。本貝塚のものもこの範疇にあるかと想定された。その他にヤコウガイの蓋製貝刃は今のところその用途として、国分直一氏の穂摘具（註９）や新田重清氏の魚調理具（註10）などが掲げられている。シレナシジミ製貝刃は過去の調査で得られていて、同時期の仲間第二貝塚（註11）で確認されている。貝匙としたものの中で装飾品的な要素をもつものが若干、得られた。また、シャコガイ科利用のものは皿状容器としての可能性が窺えた。装飾品の中で、巻貝科製装飾品が・手・腕・首などに着装していた可能性が想定された。用途不明の中で、リュウキュウサルボウ製のものは仲間第二貝塚（註12）で得られている。この種のものは国分直一氏は漁具としての錘を想定しておられる（註13）。この資料を仮に貝錘として仮定した場合、網などに着装する以前のものとしても考えられる。また、簡素な垂飾品なども十分に考慮されるが、その用途は将来の課題となるであろう。

以上、記述した中で、用途が特定されるであろうかと考えられたものに巻貝科製装飾品が掲げられたことは意義あるものとして捉えられる。

〈注〉

1．「トゥグル浜遺跡」沖縄県教育委員会、1985年。
2．「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」　金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文　水産大学校研究報告　人文科学篇第９号　1964年。
3．「カンドウ原遺跡発掘調査報告(1)」　沖縄県教育委員会　1983年。
4．　　註３に同じ。
5．　　註３に同じ。
6．「いわゆる南島出土の貝製利器について」　上原静　南島考古　第７号　1981年。
7．「ナガタ原貝塚・船越貝塚」　沖縄県教育委員会　1979年。
8．　　註６に同じ。
9．　　註２に同じ。
10．「渡喜仁浜原貝塚調査報告書」　今帰仁村教育委員会　1977年。
11．「沖縄　八重山」　滝口宏編　校倉書房　1960年。
12．　　註11に同じ。
13．　　註２に同じ。

第31表　スイジガイ・クモガイ製利器の観察一覧

タイプ	図版番号 挿図番号	出土 地点	法量（cm） （g）	体部の孔 （cm） 形状	素材	主な特徴	形状突起の保存状況						
							①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
ポイント	第43図1 PL. 37の1	サ-58 第Ⅲ層	a 1.8　b 3.9 c 8.8　d 5.3 e —　重量315	直径7.9 短径5.7 背面大粗孔	スイジガイ	背面大粗孔で、管状突起①の尖端部を両面から研磨を丁寧に施し、ポイントに加工する。尖端は一部欠落する。	▲	×	×	×	△	△	-
	同図2 〃 2	カ-59 第Ⅱ層	a 1.6　b 3.7 c —　d — e —　重量79	——	スイジガイ	管状突起①の付け根(外唇部)より突起尖端にかけて研磨を施す。表面には研磨はない。平面の形状からポイントのものが考えられる。	▲	-	-	-	-	×	-
	同図3 〃 3	サ-59 第Ⅲ層	a 0.6　b 3.2 c 8.5　d 5.5 e —　重量320	長径2.2 短径1.8 背面小粗孔	スイジガイ	背面に小粗子が認められる。管状突起①の尖端を両面、両側から研磨を丁寧に施し、ポイント状に加工する。	▲	×	×	○	○	○	-
ポイント・円刃・平刃・不明	同図4 〃 4	コ-59 第Ⅲ層	a 0.9　b 2.5 c —　d — e —　重量38	——	スイジガイ	管状突起①に両面・右側面に丁寧に研磨を加える。突起の状況から何度か破損した後に研磨を加えて、刃を施した感じを受ける。尖端は破損する。	▲	-	-	-	-	-	-
	同図5 〃 5	コ-58 第Ⅲ層	a 1.1　b 4.3 c —　d — e —　重量3.6	——	スイジガイ	管状突起①の尖端に両面・右側面へ研磨を施す。残存部の状況から円刃・平刃のものが考えられる。	▲	-	-	-	-	△	-
	同図6 〃 6	シ-58 第Ⅱ層	a 1.1　b 4.6 c 8.9　d 5.2 e —　重量354	長径6.8 短径5.9 背面大粗孔	スイジガイ	管状突起①の尖端に両面から研磨を加える。残存部の状況円刃または平刃かと考えられるものである。	▲	×	△	△	△	△	-
	同図7 〃 7	コ-58 第Ⅲ層	a 1.0　b 2.9 c 7.8　d 4.6 e —　重量223	長径6.7 短径5.3 背面大粗孔	スイジガイ	管状突起①の尖端に研磨を施す。研磨は表面に施す。残存部の状況から円刃または平刃が考えられる。	▲	×	△	△	△	△	-
	第44図8 PL.38の8	サ-58 第Ⅲ層	a 1.4　b 2.8 c 8.9　d 5.8 e —　重量294	長径6.5 短径5.6 背面大粗孔	スイジガイ	管状突起①の付け根(外唇部)近くから研磨を施す。研磨は裏面を主に両側の一部に施す。尖端は破損する。残存部の状況からポイント状か円刃が考えられる。	▲	×	×	○	△	△	-
	同図9 〃 9	シ-59 第Ⅱ層	a 1.0　b 3.9 c —　d — e 15.0　重量334	——	スイジガイ	管状突起②の尖端に刃を付ける。研磨は裏面のみに限定される。残存部の状況から円刃または平刃が考えられる。	×	▲	△	△	-	-	-
	同図10 〃 10	カ-67 第Ⅲ層	a 1.3　b 3.6 c 8.9　d 5.4 e —　重量199	長径7.1 短径5.6 背面大粗孔	スイジガイ	管状突起①の尖端に刃を付ける。研磨は裏面と両側に施す。残存部の状況から円刃または平刃が考えられる。	▲	△	×	×	○	○	-
	同図11 〃 11	表採	a 1.2　b 2.4 c —　d — e —　重量43	——	スイジガイ	管状突起②の付け根(外唇部)近くに研磨を施す。研磨は裏面にのみ施す。残存部の状況から円刃または平刃が考えられる。	○	▲	-	-	-	-	-
	同図12 〃 12	カ-59 第Ⅱ層	a 1.0　b 4.4 c 8.5　d 5.5 e —　重量261	長径8.3 短径5.6 背面大粗孔	スイジガイ	管状突起③に刃を付ける例である。研磨は裏面と両側のに残存する。尖端は破損する。残存部から円刃や平刃が考えられる。	△	△	▲	△	△	△	-
平刃	同図13 〃 13	サ-58 第Ⅲ層	a ①0.5 ①1.8 ③0.5 b ③1.8 ⑦0.5 ⑦2.1 c 6.3　d 3.3 e 10.7　重量153	長径4.6 短径4.6 背面大粗孔	クモガイ	管状突起①③⑦に刃を付ける例である。研磨は①・⑦は裏面から施す。③は裏面と左側に施す。刃部は片刃である。	▲	△	▲	△	○	△	▲

注　記号説明……▲附刃突起、○完全保存突起、△半欠突起、×全欠損突起（1cm前後残すものは含めた）

第32表　ヤコウガイ製貝刃の観察一覧

タイプ	図版番号 挿入番号	サイズ (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
Ⅰ	第45図14 PL.39－14	長径7.4 短径6.3	130	コ-59 第Ⅳ層	刃は鋭角である。
	〃 15 〃 15	長径6.3 短径5.5	71	コ-59 第Ⅲ層	〃
	〃 16 〃 16	長径6.3 短径5.4	75	表採	刃は鋭角である。
Ⅱ	〃 17 〃 17	長径7.9 短径7.2	147	表採	刃は鈍角である。
	〃 18 〃 18	長径8.7 短径7.6	225	表採	刃は潰れる。
	〃 19 〃 19	製径6.8 短径6.2	93	カ-65 第Ⅱ層	刃は鋭角であるが一部分潰れる。
	〃 20 〃 20	長径7.2 短径6.4	116	コ-59 第Ⅲ層	刃は鋭角である。
	〃 21 〃 21	長径7.6 短径6.8	122	ニ-50 第Ⅰ層	刃は全体的に潰れ、鈍角となる。
	〃 22 〃 22	長径8.2 短径7.3	176	コ-59 第Ⅲ層	刃は鈍角である。
Ⅲ	〃 23 〃 23	長径8.2 短径7.0	181	コ-58 第Ⅲ層	〃
	〃 24 〃 24	長径7.8 短径6.5	143	コ-58 第Ⅳ層	〃
Ⅳ	第46図25 PL.40－25	長径6.2 短径5.3	63	コ-58 第Ⅲ層	刃は鈍角である。
Ⅳ	第46図26 PL.40－26	長径8.6 短径6.4	170	コ-58 第Ⅲ層	刃は鈍角である部分的に潰れる。
Ⅴ	〃 27 〃 27	長径8.3 短径7.0	205	表採	〃
	〃 28 〃 28	長径8.1 短径7.5	167	表採	〃
	〃 29 〃 29	長径6.8 短径6.0	93	表採	全体的に風化・摩耗する。
	〃 30 〃 30	長径7.5 短径6.2	117	コ-58 第Ⅲ層	刃は鈍角である。
Ⅵ	〃 31 〃 31	長径5.8 短径5.4	69	表採	刃は鈍角である。全体的に摩耗する。
	〃 32 〃 32	長径7.8 短径7.2	167	コ-59 第Ⅲ層	刃は鈍角である。
	〃 33 〃 33	長径7.9 短径7.1	168	表採	〃
Ⅷ	〃 34 〃 34	長径(6.9) 短径(3.9)	(46)	ニ-49 第Ⅰ層	〃 全体的に摩耗する
Ⅸ	〃 35 〃 35	長径8.3 短径7.7	170	コ-58 第Ⅲ層	刃は鈍角である。

注.（　）内は破損品のサイズ、重量、数値を示す。

第33表　シレナシジミ製貝刃・同利器・貝匙の観察一覧

タイプ	図版番号 挿入番号	サイズ (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
シレナシジミ製貝刃	第47図36 PL.41－36	6.7 7.4 孔 長径1.2 短径1.0	39	サ-58 第Ⅲ層	孔は内側から穿つ（単孔）。刃は腹縁の中央から左側に調整の剝離を施す。
	〃 37 〃 37	5.9 6.1	15	カ-59 第Ⅱ層	刃は腹縁の左側一部と右側に調整の剝離を施す。
シレナシジミ製利器	〃 38 〃 38	長軸 4.9 短軸 1.3	0.25	サ-59 第Ⅲ層	腹縁の破片を利用したものである。研磨は先端の破損部に施されポイント状となる。
シレナシジミ製貝匙	〃 39 〃 39	6.8 8.7	69	サ-58 第Ⅲ層	腹縁を欠く。研磨を施すが、研磨は徹底していない。
	〃 40 〃 40	5.3 5.9	19	コ-58 第Ⅲ層	腹縁を欠く、研磨は認められない。孔の痕跡が観察される。孔は内側から穿つ。貝匙の未製品？。前・後背縁に打摩を加える。
シレナシジミ製貝匙	第47図41 PL.41－41	5.3 5.4	24	コ-59 第Ⅲ層	腹縁を欠く、研磨は認められない。成長線に沿う様に欠いているが前・後背縁を打ち欠いた可能性も十分にある。
	〃 42 〃 42	6.5 7.3	28	コ-58 第Ⅲ層	腹縁を欠く、研磨は施されていない。前・後背縁に打撃を加え成長線に沿って腹縁を除去。
	〃 43 〃 43	6.7 7.0	43	コ-59 第Ⅲ層	前・後背縁に打撃を加え、成長線に沿って腹縁を除去する。
	〃 44 〃 44	5.1 -	(15)	コ-58 第Ⅲ層	破損品で、打撃は前背縁が考えられる。
	〃 45 〃 45	(4.6) -	(10)	コ-59 第Ⅲ層	〃
	〃 46 〃 46	5.2 6.0	18	コ-59 第Ⅲ層	前・後背縁に打撃を加え腹縁を除去する。研磨は右腹縁に一部施されている。

第34表　タカラガイ製垂飾品観察一覧

タイプ	図版番号 挿入番号	サイズ (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
ホラガイ製貝匙	第48図47 PL.42－47	15.7 10.5	103	ケ-74 第Ⅲ層	ホラガイを縦割りして利用したものとみられる。周縁部に研磨を若干施す。
	〃 48 〃 48	13.2 9.7	154	コ-58 第Ⅲ層	ホラガイの殻底部附近の破片を利用したものと考えられるものである。研磨は左側面下部に集中するが徹底していない。
	〃 49 〃 49	9.5 (6.1)	(50)	ケ-74 第Ⅱ層	ホラガイの破片を利用したものと考えられるものである。研磨は左側面の上端に施す。比較的、丁寧に施す。
ゴホウラ製貝匙	〃 50 〃 50	9.2 4.9	89	オ-65 第Ⅰ層	ゴホウラのら塔部（殻軸を除去）を利用したものである。周縁部に打ち欠きとみられる調整痕があるが、全体的に摩耗するため、判然としない。
イモガイ製貝匙	〃 51 〃 51	11.1 4.9	68	シ-58 第Ⅱ層	イモガイのら塔部を利用。周縁部に研磨痕とみられるものがあるが、周縁部が摩耗するため明確に識別しがたい。
	〃 52 〃 52	10.0 4.1	57	コ-58 第Ⅲ層	イモガイのら塔部を利用。周縁部は摩耗するため、研磨面を識別するのは困難な状況にある。
シャコガイ製貝匙	〃 53 〃 53	殻高13.2 殻長125	677	コ-59	シャゴウかヒレジャコを利用したもので、外面のヒレ状鱗片を除去したものか、あるいは水磨で消えたかと考えられる。全体的に摩耗する。研磨と見られる箇所は外面の放射助に認められるが、徹底していない。

タイプ	図版番号 挿入番号	サイズ (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
オオベッコウカサガイ製貝匙	第49図54 PL.43－54	3.4 2.15 抉れ部分 1.3	2.1	シ-58 第Ⅱ層	オオベッコウカサガイを利用したものである。調整剝離は非常に細かく、内側から外側に施し、抉れを入れる。
タカラガイ製貝匙	〃 55 〃 55	1.45 1.2	0.3	表採	タカラガイの背面破片を利用したもので、周縁に研磨を施す。
タカラガイ製垂飾品	〃 56 〃 56	1.76 1.35 0.02	1.0	サ-58 第Ⅲ層	タカラガイの背面を除去し、研磨を破損面に加える。
	〃 57 〃 57	2.67 2.2 0.73	2.85	サ-58 第Ⅲ層	タカラガイの背面を除去、研磨は除去面に施す。一部は殻軸にまで達する。
	〃 58 〃 58	3.6 2.1 0.7	3.15	サ-58 第Ⅲ層	〃
	〃 59 〃 59	1.53 1.10 0.57	0.4	サ-59 第Ⅲ層 マイマイ集中部	タカラガイの背面を除去し、除去面に研磨を施す。全体的に面が剝落する。
	〃 60 〃 60	1.59 1.18 0.46	0.65	表採	タカラガイの背面を除去する。研磨は除去面に丁寧に施す。
	〃 61 〃 61	1.66 1.4 0.42	0.35	サ-59 第Ⅲ層	タカラガイの背面を除去する。研磨は除去面に施す。

第35表　タカラガイ製装身具

図版 挿図 番号	出土 地点	殻軸長 幅・厚 (cm) 重量 (g)	主な特徴
第49図62 PL.43－62	コ-58 第Ⅲ層	5.8 1.9 1.1 18	タカラガイ科の背面を除去した後に、殻軸方向に縦割りする。研磨は背面の除去面・殻軸の両端・歯状面の裏に施される。

第36表　イモガイ科製装飾品観察一覧

図版番号 挿図番号	タイプ	出土地点	殻高 殻径（cm） 重量（g） 孔のサイズ(mm)	備　　考
第50図63 PL.44－63	Ⅰa	サ-58 第Ⅲ層	8 1.4×1.6 1.8 （4×5）	ら塔部と殻頂に研磨を施す
〃　64 〃　64	〃	コ-58 第Ⅲ層	2.1 1.5×1.6 2.0 (2.5×2.9)	殻軸・ら塔部・殻頂に研磨
〃　65 〃　65	〃	コ-58 第Ⅲ層	1.6 1.4×1.5 2.8 2.0×2.1	殻軸・名唇・ら塔部・殻頂に研磨。火を受け黒褐色となる。
〃　66 〃　66	Ⅱa	サ-58 第Ⅲ層	1.75 1.2×1.3 1.4 (1.8×2.0)	殻底に孔（4.5×7.0mm）を穿つ。研磨は殻軸・外唇・殻底（一部）・ら塔部・殻頂に施す。
〃　67 〃　67	Ⅱb	コ-58 第Ⅲ層	2.5 1.5×1.6 2.8 —	殻底に孔（8.0×10.1mm）を穿つ。研磨は外唇・殻底縁辺を主体に施す。
〃　68 〃　68	Ⅲa	サ-59 第Ⅲ層（マイマイ集中部）	1.7 1.0×1.1 0.6 (1.5)	殻底に孔（8.0×9.0mm）を穿つ。研磨は外唇・殻底（大半）を主体に施す。
〃　69 〃　69	Ⅲb	サ-59 第Ⅲ層（マイマイ集中部）	1.11 0.9×0.95 0.35 —	殻底の孔は破損する。研磨は外唇（縁辺）・殻底縁辺を残存する。
〃　70 〃　70	〃	カ-51 第Ⅱ層	3.4 2.2×2.5 10.2 —	殻底に孔(16.5×17.0mm）をつくる。研磨は外唇・殻底縁辺ら塔部に若干に施す。
〃　71 〃　71	Ⅳa	コ-59 第Ⅰ層	0.69 1.1×1.25 0.6 (2.8×3.0)	殻底は破損する。研磨は外唇縁辺・殻底縁辺・ら塔部・殻頂部に残存する。
〃　72 〃　72	〃	コ-59 第Ⅰ層	1.7 1.4×1.5 1.0 (0.8×1.0)	殻底は破損する。研磨は外唇縁辺・殻底縁辺・ら塔部に残存する。
〃　73 〃　73	Ⅳb	サ-58 第Ⅳ層	1.25 0.9×1.0 0.5 —	研磨は殻頂外唇・殻底縁辺・ら塔部（一部）に施す。
第50図74 〃　74	Ⅳb	コ-59 第Ⅲ層	1.3 0.9×1.0 0.6 —	研磨は殻頂・外唇・殻底縁辺・ら塔部（一部）に施す。
〃　75 〃　75	〃	キ-66 第Ⅰ層	2.0 1.3×1.6 2.9 —	〃
〃　76 〃　76	Ⅴa	コ-59 第Ⅲ層	0.85 1.2×1.25 0.75 (0.3×0.5)	研磨は外唇・殻底縁辺に施す。
〃　77 〃　77	〃	表採	0.8 1.3×1.4 1.2 1.5×1.9	研磨は外唇・殻底縁辺・殻頂に施す。
〃　78 〃　78	〃	コ-59 第Ⅲ層	1.25 1.35×1.45 2.1 2.4×0.6	研磨は外唇・殻底縁辺に施す。
〃　79 〃　79	〃	ケ-74 第Ⅱ層	5.6 0.74×0.82 0.22 (1.4×1.5)	〃
〃　80 〃　80	〃	コ-59 第Ⅲ層	1.2 1.6×1.8 2.65 (1.5×1.7)	研磨は外唇・殻底縁辺・ら塔部に施す。
第51図81 PL.45—81	Ⅴb	サ-58 第Ⅲ層	1.12 1.1×1.2 0.8 —	研磨は外唇・殻底縁辺・ら塔部に施す。
〃　82 〃　82	〃	コ-59 第Ⅲ層	1.1 1.1×1.2 0.95 —	研磨は外唇・殻底縁辺に施す。
〃　83 〃　83	Ⅴb	サ-59 第Ⅲ層（マイマイ集中部）	1.05 1.0×1.1 1 —	研磨は外唇・殻底縁辺に施す。
〃　84 〃　84	〃	サ-58 第Ⅲ層	0.9 1.4×1.6 1.8 —	研磨は外唇・殻底・ら塔部に施す。
〃　85 〃　85	〃	コ-58 第Ⅲ層	1.2 1.5×1.7 2.49 —	研磨は外唇・殻底縁辺に施す。
〃　86 〃　86	〃	サ-58 第Ⅲ層	1.4 1.4×1.5 1.6 —	〃

第37表　巻貝科製装飾品観察一覧（1）

図版番号 挿図番号	タイプ	出土地点	殻高 殻径（mm） 重量（g） 孔のサイズ(mm)	備　　考
第51図87 PL.45－87	Ⅰa	キ-66 第Ⅰ層	4.3 7.5×7.9 0.75 1.5×1.6	殻底縁辺・殻頂に研磨を施す。
〃　88 〃　88	〃	コ-58 第Ⅲ層	5.0 10×11 0.3 (0.6×1.0)	殻底縁辺・ら塔部・殻頂に研磨。
〃　89 〃　89	〃	カ-58 第Ⅲ層	6.0 10×11 0.4 (0.9×1.0)	外唇・殻底縁辺に研磨を施す。
〃　90 〃　90	〃	コ-59 第Ⅲ層	8.0 11×12 0.6 1.0×1.2	〃
〃　91 〃　91	〃	〃	8.0 10×11 0.6 0.8×0.9	〃
〃　92 〃　92	〃	サ-58 第Ⅲ層	6.0 10×11 0.6 (0.4×0.5)	殻底縁辺に研磨を施す。
〃　93 〃　93	〃	コ-59 第Ⅲ層	7.0 10×11 0.7 (0.4×0.5)	外唇・殻底縁辺に研磨を施す。
〃　94 〃　94	〃	サ-58 第Ⅲ層	8.0 14×15 0.95 (1.0×1.1)	殻底縁辺・殻頂に研磨を施す。
〃　95 〃　95	〃	表採	7.0 16×16.5 1.8 2.2×2.3	〃
〃　96 〃　96	〃	カ-64 第Ⅱ層	9.4 16×17.6 1.95 (1.0×1.1)	外唇・殻底縁辺に研磨を施す。
〃　97 〃　97	〃	サ-59 第Ⅲ層	10.0 18×19 3.55 0.7	殻底縁辺・殻頂に研磨を施す。
〃　98 〃　98	Ⅰb	サ-58 第Ⅲ層	4.1 6×7 0.1 —	外唇・殻底縁辺に研磨を施す。
〃　99 〃　99	〃	〃	9.0 11.5×13.0 0.4 —	〃
〃　100 〃　100	〃	コ-58 第Ⅲ層	4.9 9.0×10 0.4 —	殻底に研磨を施す。
第52図101 PL.46 101	〃	サ-58 第Ⅲ層	5.1 9.0×10 0.4 —	外唇・殻底縁辺・ら塔部に研磨を施す。
同図102 〃 102	Ⅰb	チ-74 第Ⅱ層	5.0 8.9×10.6 0.5 —	外唇・殻底縁辺に研磨を施す
第52図103 〃 130	Ⅰb	コ-59 第Ⅲ層	7.0 11×12 0.7 —	外唇・殻底縁辺・ら塔部・殻頂部に研磨を施す。
同図104 〃 104	〃	サ-58 第Ⅲ層	7.0 14×16 1.15 —	外唇・殻底縁辺・殻頂部に研磨を施す。
同図105 〃 105	〃	〃	8.5 15×15.5 1.2 —	〃
同図106 〃 106	〃	コ-59 第Ⅲ層	7.7 15.4×18 1.35 —	〃
同図107 〃 107	〃	ケ-74 第Ⅱ層	12 12.9×13.8 1.4 —	〃
同図108 〃 108	〃	サ-58 第Ⅲ層	12 17×19 2.2 —	外唇・殻底縁辺・ら塔部に研磨を施す。
同図109 〃 109	〃	コ-58 第Ⅲ層	12 17×19 4.4 —	外唇・殻底縁辺に研磨を施す。
同図110 〃 110	〃	〃	14 21.5×22.5 5.0 —	〃
同図111 〃 111	Ⅱa	キ-66 第Ⅲ層	5.0 10.5×11.5 0.4 2.0×2.2	〃
同図112 〃 112	〃	サ-58 第Ⅲ層	5.5 12.5×13.0 0.55 (2.1×2.2)	外唇・殻底縁辺・ら塔部・殻頂に研磨を施す。
同図113 〃 113	Ⅱb	コ-58 第Ⅲ層	4.5 9.0×9.5 0.4 —	殻底・ら塔部・殻頂部に研磨を施す。
同図114 〃 114	〃	〃	5.5 9.0×10 0.5 —	外唇・殻底縁辺に研磨を施す。
同図115 〃 115	〃	コ-59 第Ⅰ層	5.5 12.5×16 0.55 —	〃
同図116 〃 116	〃	表採	4.5 9.5×10 0.6 —	殻底縁辺に研磨を施す。

巻貝科装飾品観察一覧（2）

図版番号 挿図番号	タイプ	出土地点	殻高 殻径（mm） 重量（g） 孔のサイズ（mm）	備　　考
第52図117 PL.46 117	Ⅲa	キ-66 第Ⅰ層	4.2 8.2×9.3 0.4 1.4×1.5	外唇・殻底縁辺・ら塔部・殻頂部に研磨。 火を受けた痕跡があり、灰色を呈する。
同図118 〃 118	Ⅳa	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	2.9 4.8×5.1 0.1 1.6×1.7	殻底縁辺・ら塔部・殻頂部に研磨を施す。殻底部の一部が欠失する。火を受けた痕跡を留め、黒色を呈する。
同図119 〃 119	〃	〃	3.1 4×5 0.1 2.4×2.5	〃
同図120 〃 120	〃	コ-59 第Ⅲ層	4.5 7.4×8.1 0.25 2.3×2.5	殻底縁辺・ら塔部・殻頂部に研磨を残す。殻底の一部を欠落する。
第53図121 PL.47 121	〃	表採	4.0 8×10 0.3 1.7×1.8	殻底縁辺・殻頂部に研磨を施す。殻底のを欠失する。
同図122 〃 122	〃	サ-59 第Ⅲ層	4.0 9.7×10 0.3 (0.9)	外唇・殻底縁辺・殻頂部に研磨を施す。
同図123 〃 123	〃	サ-58 第Ⅲ層	3.5 10×11 0.4 2.1×2.2	殻底縁辺・ら塔部・殻頂部に研磨を施す。殻底とら塔部の一部を欠く。
同図124 〃 124	〃	サ-59 第Ⅲ層	2.5 11×11.5 0.4 3.0×3.1	殻底・殻頂部に研磨を施す。
同図125 〃 125	〃	表採	4.7 9.5×11 0.45 1.5×1.6	外唇（一部）・殻底縁部・殻頂部に研磨を施す。外唇の大半は欠失する。火を受けたようである。色調は灰色を滞びる。
同図126 〃 126	Ⅴa	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	2.4 5.5×5.7 0.08 1.4×1.5	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。
同図127 〃 127	〃	〃	2.2 4.3×4.4 0.09 1.4×1.5	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。火を受けたようである。色調は灰黒色を呈する。
同図128 〃 128	〃	コ-58 アゼ 第Ⅲ層	2.5 5.0×5.9 0.09 1.9×2.0	殻底とら塔部に研磨を施す。一部分欠失する。
同図129 〃 129	〃	表採	3.4 5.5×5.8 0.09 1.3×（3.0）	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。
同図130 〃 130	〃	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	2.5 4.0×4.8 0.09 1.6×1.8	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。一部欠落する。 火を受けて灰黒色となる。
第53図131 PL.47 131	Ⅴa	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	3.5 4.4×4.5 0.1 1.4×1.5	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。 火を受けたようである。色調は灰黒色を呈する。
同図132 〃 132	〃	コ-58 第Ⅲ層	2.25 5.2×5.8 0.1 2.8×3.0	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。一部分欠落する。
第54図133 PL.48 133	〃	表採	2.1 6.1×6.2 0.1 (0.9×10)	〃
同図134 〃 134	〃	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	2.5 4×5 0.11 1.7×1.8	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。一部分欠落する。
同図135 〃 135	〃	直採	3.5 5.3×6.1 0.12 2.0×2.1	〃
同図136 〃 136	〃	〃	3.2 4.9×5.0 0.13 1.3×1.4	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。
同図137 〃 137	〃	サ-59 第Ⅲ層	2.8 6.0×7.0 0.14 (1.1×1.2)	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。 一部分が欠落する
同図138 〃 138	〃	表採	2.8 6.0×6.4 0.2 1.0×1.1	〃
同図139 〃 139	〃	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	3.8 5.2×6.8 0.2 1.9×2.1	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。 火を受けて、灰黒色となる。
同図140 〃 140	〃	コ-58 第Ⅲ層	3.1 7.9×8.5 0.21 (1.4×1.5)	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。 全体的に保持が悪く、脆い。
同図141 〃 141	Ⅴb	表採	2.2 5.6×5.9 0.1 —	殻軸・殻底縁辺・ら塔部に研磨を施す。
同図142 〃 142	Ⅵa	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	1.4 4.4×4.5 0.08 1.2×1.3	殻底・ら塔部に研磨を施す。
同図143 〃 143	〃	コ-59 第Ⅲ層	1.4 6.1×6.2 0.1 1.9×2.0	殻底・ら塔部に研磨を施す。 周縁の一部分が破損する。
同図144 〃 144	〃	サ-59 第Ⅲ層 （マイマイ集中部）	3.7 6.1×6.2 0.2 1.8×1.9	殻底縁辺とら塔部に研磨を施す。 火を受けた痕跡がある。灰黒色を帯びる。
同図145 〃 145	Ⅶa	コ-59 第Ⅲ層	5.5 6.3×7.4 0.19 (0.3)	殻底縁辺・ら塔部・殻頂の各部に一部分、研磨を施す。

第38表　二枚貝有孔製品観察一覧（1）

図版番号 挿図番号	タイプ	出土地点	殻高 殻長（cm） 重量（g） 孔のサイズ（mm）	備　考
第55図146 PL.49 146	シレナシジミ製有孔製品	コ-59 第Ⅲ層	(2.8) (3.4) (0.17) 0.45×0.6	シレナシジミの外面に孔を内側から穿っている腹縁は破損する。
同図147 〃 147	〃	〃	3.8 4.5 10.5 0.9×1.0	シレナシジミの外面に孔を外面から穿っている。孔の周辺に研磨を施す。腹縁は破損する。
同図148 〃 148	〃	サ-59 第Ⅲ層	6.2 7.0 30 1.5×1.1	腹縁を欠く、孔を内側から穿つ。
同図149 〃 149	ヒメジャコ製有孔製品	コ-59 第Ⅲ層	6.8 — (56) 3.0×—	内側より孔を穿つ。孔は破損する。孔の一部は摩耗する。
同図150 〃 150	〃	サ-58 第Ⅲ層	7.3 — (106) 3.1×2.3	内側より孔を穿つ。 孔の一部は摩耗する。
同図151 〃 151	リュウキュウサルボウ製有孔製品 上・中 右殻	コ-58 第Ⅲ層	3.6 5.6 11 1.2×1.1	孔の形状。内側・複孔・不定形。
同図152 〃 152	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	(3.9) (6.1) (13) 6.1×3.9	内側・複孔・不定形。
同図153 〃 153	〃 上・中 〃	コ-59 南アゼ 第Ⅲ層	4.2 6.0 14 6.0×4.2	内側・単孔・隅丸方形。
同図154 〃 154	〃 上・前 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.3 6.1 14 1.3×1.1	内側・複孔・不定形。
同図155 〃 155	〃 中・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	(4.4) (5.9) (14) 5.9×4.4	〃
同図156 〃 156	〃 上・中 〃	カ-58 第Ⅲ層	3.6 6.3 14 1.7×1.1	内側・複孔・扁楕円形。
同図157 〃 157	〃 上・中 〃	コ-58 第Ⅱ層	4.4 6.5 15 0.7×0.6	内側・単孔・扁楕円形孔の周辺に研磨あり。
同図158 〃 158	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.0 6.0 16 1.3×0.9	内側・複孔・不定形。
同図159 〃 159	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.6 6.7 16 1.0×0.7	内側・単孔・不定形孔の周辺に研磨を施す。
第55図160 PL.49 160	リュウキュウサルボウ製有孔製品 上・中 右殻	コ-59 南アゼ 第Ⅰ層	4.0 5.6 18 1.0×0.9	内側・単孔・隅丸方形。
同図161 〃 161	〃 上・中 〃	サ-58 第Ⅲ層	5.8 6.8 18 1.2×1.0	孔の形状。 内側・複孔・不定形。
第56図162 PL.50 162	〃 上・前 〃	コ-59 南アゼ 第Ⅲ層	4.2 5.9 19 1.0×0.9	内側・単孔・隅丸三角形。
同図163 〃 163	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.3 6.2 19 1.8×0.9	内側・複孔・不定形。
同図164 〃 164	〃 上・前 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.3 6.4 21 1.6×1.4	〃
同図165 〃 165	〃 上・中 〃	表採	4.6 6.0 22 6.0×4.6	〃
同図166 〃 166	〃 上・後 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.3 6.6 23 0.8×0.6	〃
同図167 〃 167	〃 上・中 〃	コ-58 第Ⅲ層	4.6 7.2 26 0.8×0.6	〃
同図168 〃 168	〃 上・中 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.9 7.0 26 2.2×1.8	〃
同図169 〃 169	〃 中・中 〃	コ-59 第Ⅲ層	5.0 7.5 26 2.2×1.1	内側、複孔、隅丸三角形。
同図170 〃 170	〃 上・中 〃	シ-58 第Ⅱ層	5.1 6.9 29 2.0×1.4	内側・複孔・不定形。
同図171 〃 171	〃 上・前 〃	サ-58 第Ⅲ層	5.0 7.6 30 1.2×1.0	内側・単孔、不定形。
同図172 〃 172	〃 中・中 〃	サ-58 第Ⅲ層	5.2 6.9 35 1.4×1.1	内側・単孔・梯形。
同図173 〃 173	〃 中・前 〃	サ-58 第Ⅲ層	5.5 7.9 39 2.6×1.9	内側・単孔・梯形。

二枚貝有孔製品観察一覧（2）

図版番号 挿図番号	タイプ	出土地点	殻高 殻長（㎝） 重量（g） 孔のサイズ(㎜)	備　考
第56図174 PL.50 174	リュウキュウサルボウ製有孔製品 中・中 左殻	コ-58 第Ⅲ層	3.4 4.6 7 2.3×1.4	孔の形状。内側・複孔・不定形。
同図175 〃 175	〃 上・中 〃	コ-59 第Ⅲ層	3.5 5.3 12 1.4×1.1	内側・複孔・扁楕円。
同図176 〃 176	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	3.5 5.4 13 1.3×0.6	内側・複孔・不定形。
同図177 〃 177	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.4 6.5 14 1.5×0.9	〃
同図178 〃 178	〃 上・中 〃	コ-58 第Ⅲ層	4.3 6.8 14 1.2×1.0	内側・単孔・隅丸方形。
同図179 〃 179	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.3 6.5 14 1.3×0.8	内側・複孔・不定形。
同図180 〃 180	〃 上・前 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.1 6.3 15 1.3×1.1	内側・単孔・扁楕円形。
同図181 〃 181	〃 中・中 〃	サ-58 第Ⅲ層	4.2 6.2 16 1.3×1.2	〃
同図182 〃 182	〃 上・前 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.3 6.3 16 0.9×0.8	内側・複孔・梯形。
第57図183 PL.51 183	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.4 6.9 16 0.9×0.7	内側・単孔・扁楕円形。
同図184 〃 184	〃 上・中 〃	コ-59 南アゼ 第Ⅲ層	4.6 6.3 18 1.4×1.2	内側・複孔・扁楕円形。
同図185 〃 185	〃 上・前 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.3 6.8 19 1.1×0.9	内側・複孔・不定形。
同図186 〃 186	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅱ層	(4.3) (6.8) (19) 1.3×1.2	内側・単孔・不定形。
同図187 〃 187	〃 上・中 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.1 5.6 19 0.6×0.4	内側・単孔・扁楕円形。

図版番号 挿図番号	タイプ	出土地点	殻高 殻長（㎝） 重量（g） 孔のサイズ(㎜)	備　考
第57図188 PL.51 188	リュウキュウサルボウ製有孔製品 上・中 左殻	コ-58 南アゼ 第Ⅲ層	4.0 6.3 19 1.6×1.2	外側・複孔・不定形。
同図189 〃 189	〃 上・前 〃	コ-59 第Ⅲ層	4.3 6.2 20 1.1×0.9	内側・単孔・不定形。
同図190 〃 190	〃 中・中 〃	サ-58 第Ⅲ層	4.7 6.0 21 1.9×1.5	内側・複孔・不定形。
同図191 〃 191	〃 中・前 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.8 7.0 21 1.8×0.9	〃
同図192 〃 192	〃 上・前 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.4 6.4 22 0.9×0.6	内側・単孔・不定形。
同図193 〃 193	〃 上・前 〃	コ-59 南アゼ 第Ⅲ層	4.6 5.8 23 1.3×1.2	内側・複孔・隅丸方形。
同図194 〃 194	〃 中・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.9 7.1 24 2.1×1.5	内側・複孔・不定形。
同図195 〃 195	〃 上・前 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.6 6.9 24 1.2×1.0	〃
同図196 〃 196	〃 上・中 〃	サ-59 第Ⅲ層	4.6 7.6 25 2.2×2.1	外側・複孔・不定形。
同図197 〃 197	〃 中・前 〃	コ-58 第Ⅲ層	5.1 6.8 27 1.4×0.7	内側・複孔・不定形。
同図198 〃 198	〃 上・前 〃	サ-59 第Ⅲ層	5.1 7.1 33 1.4×1.3	内側・複孔・隅丸三角形。
同図199 〃 199	〃 中・中 〃	コ-58 第Ⅰ層	5.0 6.8 34 2.9×1.6	内側・複孔・不定形。
同図200 〃 200	〃 上・中 〃	コ-58 第Ⅲ層	4.5 7.3 41 2.1×1.1	〃

第5節　食　料　残　滓

1　貝類遺存体

本貝塚から、多量の貝殻が出土した。出土した貝を、完形貝と破片貝に分け、その個体数と重量を計測した。破片貝については、殻頂部を有する貝と殻頂部の欠損した細片に分けて集計した。

さらに、各地区の層位ごとに最少推定個体数を示した表を作成した。完形貝と殻頂部を有する貝を1個体としたが、殻頂部の欠損した貝や細片のみ出土しているものに関しては、数量や重量に関係なく1個体とした。また完形貝と殻頂部欠損の細片貝が出土しているものは、完形貝の個体数に1個体追加して最少推定個体数とした。

表にはヤコウガイやチョウセンサザエの殻と蓋の個数を記入しているが、総計では多い方を個体数とした。

以下、地区ごとに出土状況を記述する。

（1）1地区出土の貝類

1地区から、少なくとも、35科88種で1,851個体の貝殻が出土した。

Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層とも出土量に差はない。

第39表　主体貝の出土状況

順位	主体貝	棲息地	Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅲ層		計
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	
1	チョウセンサザエ（蓋）	F2/20－gh	252	42.1%	216	33.6%	133	21.9%	601
2	マガキガイ	D～F20－d	62	10.4%	59	9.2%	106	17.4%	221
3	シラナミガイ（幼貝を含む）	G－g	24	4.0%	47	7.3%	72	11.8%	143
4	ヒメジャコ	D－ghの中	19	3.2%	20	3.1%	62	10.2%	101
5	シレナシジミ	B－a	10	1.7%	57	8.9%	28	4.6%	95

※棲息地の記号は第56表の「記号について」を参照。

各層でチョウセンサザエの蓋の出土量が多いが、特にⅠ層で多く、Ⅰ層出土貝の42.1%を占める。

次いで各層ともマガキガイが2位となっている。

Ⅰ層ではマガキガイに次いで多いのは第54表には出ていないが、ヤコウガイ（蓋）で、34個出土している。

Ⅱ層では、全体出土数5位のシレナシジミがマガキガイに次いで多い。

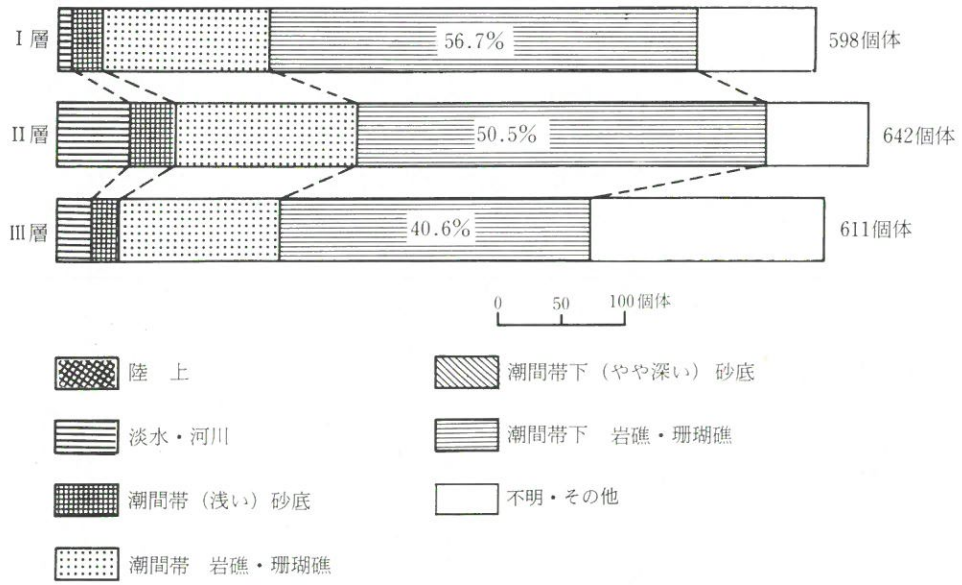
Ⅲ層では、シラナミガイやヒメジャコ等のシャコガイ科の出土が目立つ。

出土貝を棲息地別にみるため、棲息地の構成比較表を作成した。

大まかに、陸上、淡水・河川の泥底、潮間帯（浅い）の砂底と岩礁や珊瑚礁等の岩場、潮間帯下（やや深い）の砂底と岩場の6つに分けて集計したのが下の第40表である。

層ごとの出土数を棒の長さで示し、その中で棲息地別に占める割合を示した。

第40表　出土貝棲息地の構成比較



棲息地別にみると、潮間帯下（やや深い）岩礁や珊瑚礁に棲息する貝が多く、I層・II層では、出土数の50%以上を占める。

次いで潮間帯（浅い）の岩礁・珊瑚礁に棲息する貝が多い。

砂底に比べ、岩礁や珊瑚礁等の岩場に棲息する貝の出土が圧倒的に多い。

II層で、淡水・河川の泥底に棲息する貝の出土が目立つ。

全体的にみると、岩礁や珊瑚礁等の岩場に棲息する貝の出土が多い中で、砂底に棲息するマガキガイや、マングローブ地帯の泥底に棲息するシレナシジミの出土が目立つ。

（2）2地区出土の貝類

2地区から33科77種で3,112個体の貝殻が出土した。

III層から最も多く出土している。III層ではコ—58・コ—59・サ—59グリッドのピットからも貝が出土しており、コ—59グリッドのピットから68個体の貝が出土した。

2地区出土の貝はシレナシジミが最も多く、チョウセンサザエ(蓋)、シラナミガイと続く。

第41表　第1地区層位別出土状況（最少推定個体数）

科名	貝種名	貝番号	I層	II層			III層								合計	棲息地	
					落込み	計		カ—56 ピット	カ—56 溝	カピ—ツ 58ト	カ落—込み 62み	カピ—ツ 64ト	カピ—ツ 66ト	計			
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ	1															
	クルマガサガイ	2					1							1	1	D	g
	リュウキュウウノアシガイ	3	2												2	D	g
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	4		1		1									1	F	g
	ムラサキウズガイ	5	2	2	1	3									5	F	g
	ギンタカハマガイ	6	4	1		1	1		1					2	7	F 2/10	g
	サラサバテイ	7	4	3		3	2		2	1			1	6	13	F 1/30	g・h
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	8	1	18	1	19	1							1	21	G	h
	〃　のふた	8	34	28	1	29	13		1				1	15	78	〃	〃
	チョウセンサザエ	9	16	23	1	24	11		1	3			1	16	56	F 2/20	g・h
	〃　のふた	9	252	209	7	216	124		3			1	5	133	601	〃	〃
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	10	2	1		1	2							2	5	D	g
	ニシキアマオブネ	11	1	1	1	2	1							1	4	D	f
	マキミゾアマオブネ	12															
	キバアマガイ	13															
アマガイモドキ科	アマガイモドキ	14		1		1									1	D	g
トゲカワニナ科	ヌノメカワニナ	15	1												1	B	
タマキビガイ科	コンペイトウガイ	16															
ムカデガイ科	オオヘビガイ	17	1												1	E	g
オニノツノガイ科	カヤノミカニモリガイ	18		1		1									1	D	g
	トウガタカニモリガイ	19	1												1	D	e
	ゴマフトウガタカニモリガイ	20	2	1		1	2							2	5	E	h
	タケノコカニモリガイ	21		1		1									1	E	d
	ナガタケノコカニモリガイ	22		1		1									1	E	d
	カニモリガイ	23		1		1									1	D/F 20	d
	メオニノツノガイ	24	2	13		13	1							1	16	G	g
	オニノツノガイ	25	12	6		6	5		1					6	24	G	g
スズメガイ科	アツキクスズメガイ	26															
ソデガイ科	マガキガイ	27	62	58	1	59	94		3	3				100	221	D/F 20	d
	ムカシタモトガイ	28	1	1		1									2	G	d
	イボソデガイ	29					1							1	1	G	d
	スイジガイ	30	5	3		3	9	1	1			1		12	20	H	d
	クモガイ	31	12	4	1	5	8		1	1				10	27	H	d
	〃　（幼）	32															
	ラクダガイ	33															
	ゴホウラ	34															
タマガイ科	トミガイ	35		2		2									2	E	d
タカラガイ科	キイロダカラガイ	36	1												1	D	g・h
	ハナビラダカラガイ	37	1	2	1	3									4	D	g・h
	コモンダカラガイ	38		1		1									1	D	g
	ハナマルキガイ	39	18	17	1	18	15		3			2		20	56	D	g・h

科目	貝種名	貝番号	I層	II層			III層								合計	棲息地	
					落込み	計	カ—56 ピット	カ—56 溝	カピット58ト	カ落込62み	カピット64ト	カピット66ト	計				
タカラガイ科	ホシキヌタガイ	40		1	3	4	1							1	5	D	g
	クチムラサキダカラガイ	41			1	1			3					3	4	D	g
	ハチジョウダカラガイ	42		1		1	1							1	2	G	g・h
	ヤクシマダカラガイ	43	2	5	1	6	1		1					2	10	D	g
	ヒメヤクシマダカラガイ	44	1	1		1									2	D	g
	ホシダカラガイ	45	1	2		2	2			1				3	6	H	d・h
	ヒメホシダカラガイ	46					1							1	1	D	g
	〃 (幼)	47		1		1									1	〃	〃
トウカムリガイ科	タイコガイ	48	1				3		2					5	6	F 10/50	c
	アメガイ	49					1							1	1	F	c
フジツガイ科	ホラガイ	50		2		2	1		2	1				4	6	G	g
	ミツカドボラ	51															
オキニシ科	オキニシ	52	2	2		2	3							3	7	G	g
	シロナルトボラ	53															
アクキガイ科	レイシガイダマシ	54	1												1	D	g
	ヒメヨウラクガイ	55			1	1									1	D	g
	シラクモガイ	56	4	5		5	17			3				20	29	D	g
	ウニレイシガイ	57	1												1	G	g
	ムラサキイガレイシガイ	58	10	9	1	10	17							17	37	D	h
	アカイガレイシガイ	59	1	1		1	3							3	5	D	g
	ホソスシテツボラ	60								1				1	1	D	g
	コイボテツレイシ	61	1												1	D	g
イトマキボラ科	マルニシ	62		2		2	1							1	3	D	g
	リュウキュウツノマタ	63	1	2		2	1							1	4	D	g
	イトマキボラ	64															
	ベニマキ	65															
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	66		1		1			1					1	2	D	h
	コオニコブシガイ	67	14	9	3	12	9			1				10	36	D	g
フデガイ科	ニシキノキバフデガイ	68	1				1							1	2	D	d
	フトコロヤタテガイ	69		1		1									1	D	g
マクラガイ科	サツマビナガイ	70															
イモガイ科	マダライモガイ	71	7	4	2	6	2							2	15	D	g
	コマダライモガイ	72	5	4		4	1							1	10	D	g
	サヤガタイモガイ	73	16	6		6	3							3	25	D	g
	クロミナシガイ	74		1		1									1	D	d
	イボシマイモガイ	75	2	3	1	4	2							2	8	D	g・d
	キヌカツギイモガイ	76	5	9	2	11	2							2	18	D	g
	ゴマフイモガイ	77	2	1		1									3	D	d
	アカシマミナシガイ	78	1	1		1									2	G	
	ヒラマキイモガイ	79	3	2	3	5	1							1	9	D	d
	アンボンクロザメガイ	80	10	7		7	3							3	20	D	d
	クロフモドキガイ	81															
	イボカバイモガイ	82	18	18	1	19	13							13	50	D	g

科目	貝種名	貝番号	I層	II層			III層								合計	棲息地	
					落込み	計		カ—56 ピット	カ—56 溝	カピ—ツ 58ト	カピ—ツ 62ト	カピ—ツ 64ト	カピ—ツ 66ト	計			
イモガイ科	タガヤサンミナシガイ	83															
タケノコガイ科	ウシノツノガイ	84	1		1	1	1							1	3	D	d
	キバタケガイ	85		1		1			1					1	2	D	d
	リュウキュウタケガイ	86		1		1									1	E	d
オナジマイマイ科	クロイワオオケマイマイ	87		1		1	1							1	2	A	
	オキナワウスカワマイマイ	88															
フネガイ科	ベニエガイ	89					1							1	1	D	f
	カリガネエガイ	90	1												1	D	g
	リュウキュウサルボウガイ	91	2	5	2	7	6		1			1		8	17	D	d
タマキガイ科	ソメワケグリ	92															
	ウチワガイ	93															
イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	94															
シュモクアオリガイ科	シロアオリガイ	95															
ウミギクガイ科	メンガイ	96	1		1	1			1					1	3	D	h
イタボガキ科	オハグロガキ	97															
シジミガイ科	シレナシジミ	98	10	51	6	57	25		1				2	28	95	B	a
ツキガイ科	ウラキツキガイ	99		1		1									1	D	d
	サザナミセワケツキガイ	100															
カゴガイ科	カゴガイ	101	1				1		1					2	3	G～F 20	d
キクザルガイ科	カネツケザルガイ	102															
	キクザルガイ	103	1												1	D	g
シャコガイ科	シラナミガイ	104	12	28	1	29	32		1	5		1	1	40	81	G	g
	〃 (幼)	105	12	17	1	18	25		1				6	32	62	〃	〃
	ヒメジャコ	106	19	19	1	20	55		3	2	1		1	62	101	D	g·hの
	ヒレジャコ	107	1	1	1	2	2				1		1	4	7	G	h
	オオジャコ	108															
	シャゴウ	109	5	2	1	3	1		1				1	3	11	D	g・h
ザルガイ科	カワラガイ	110		1	1	2	1							1	3	D	d
マルスダレガイ科	マルオミナエシガイ	111	1	2	1	3									4	D	d
	アラスジケマンガイ	112					1							1	1	D	d
	ヌノメガイ	113															
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	114															
バカガイ科	リュウキュウアリソガイ	115					1							1	1	D	d
リュウキュウマスオガイ科	マスオガイ	116		1		1	1							1	2	内湾	d
	リュウキュウマスオガイ	117					1							1	1	D	d
ニッコウガイ科	サメザラガイ	118	1	1		1	1							1	3	D	d
合	計		598	592	50	642	525	1	36	22	2	6	19	611	1851		

※記号について

A陸　上　　E浅　海（水深5m→F5）　　a泥　底　　e砂礫底
B淡水・河川　F水深　m（水深2m～20m→F2/20）　b砂泥底　　f岩礫底
C潮上帯　　G潮間帯下　　c細砂底　　g岩　礁
D潮間帯　　H珊瑚礁　　d砂　底　　h珊瑚礁

第42表　主体貝の出土状況

順位	主体貝	棲息地	I 層		II 層		III 層		IV 層		計
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	
1	シレナシジミ	B－a	99	17.6%	241	30.4%	122	8.1%	12	4.6%	474
2	チョウセンサザエ（蓋）	F 9/20－gh	109	19.4%	90	11.3%	188	12.6%	38	14.6%	425
3	シラナミガイ（幼貝を含）	G－g	42	7.5%	53	6.7%	268	17.9%	59	22.7%	422
4	マガキガイ	D～F 1/20－d	45	8.0%	71	8.9%	112	7.5%	9	3.5%	237
5	サラサバテイ	F 1/30－gh	9	1.6%	20	2.5%	98	6.5%	9	3.5%	136

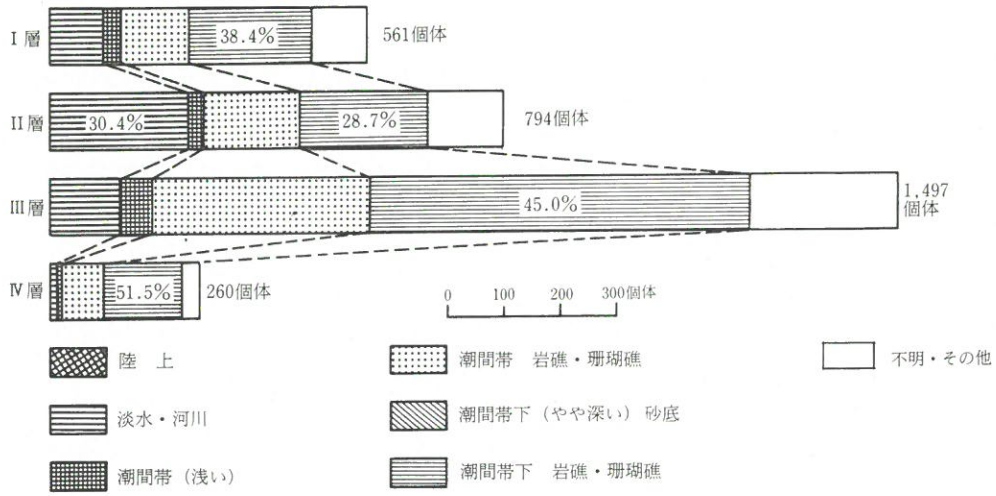
I 層ではチョウセンサザエ（蓋）の出土が最も多く、次いでシレナシジミが出土している。上の第42表には出ていないが、ヤコウガイ（蓋）が33個体出土しており、4位に位置する。

II 層ではシレナシジミの出土が最も多く、30%以上を占める。次いでチョウセンサザエ、マガキガイ、シラナミガイにつづいてクモガイの出土が目立つ。

III 層で最も多く出土した貝は、I 層・II 層とも異なり、シラナミガイ（幼貝を含む）で、チョウセンサザエ、シレナシジミとつづく。また、サラサバテイの出土が目立つ。

数は少ないが、IV 層出土の主体貝のベスト3はIII 層に似る。他にコオニコブシやヒメジャコの出土も目立つ。

第43表　出土貝棲息地の構成比較



棲息地別にみると、岩礁・珊瑚礁等の岩場に棲息する貝が多く、特にIII 層とIV 層では、潮間帯下の岩場に棲息する貝がそれぞれ45%、51.5%を占めている。

II 層では淡水・河川とくにマングローブ地帯の泥底に棲息する貝が多く、他の棲息地の貝を抜いて、30%を占めている。

第44表　第2地区貝類出土状況

2　地　区			I　層						II　層						III　層					
科　名	貝　種　名	番号	完　形		破　損　貝				完　形		破　損　貝				完　形		破　損　貝			
					有殻頂		無殻頂(細片)				有殻頂		無殻頂(細片)				有殻頂		無殻頂(細片)	
			個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ	1											2	2			2	20	9	13
	クルマガサガイ	2					3	2	2	16			3	2	1	1			26	12
	リュウキュウウノアシガイ	3													1	5			1	1
	不　明																			
ユキノカサガイ科	不　明						1	1												
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	4					3	210	1	9			2	20					16	55
	ムラサキウズガイ	5					1	0	2	25	1	8	7	22			2	30	11	38
	ギンタカハマガイ	6	1	190	6	223	2	60	8	848	5	66	5	33			14	570	7	235
	サラサバティ	7	2	535	7	266	241	2,419	14	2,740	6	379	612	6,955	17	5,315	74	5,005	1,322	13,346
	不　明				1	<1	6	25					50	468						
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	8	1	20	1	15	49	1,124	3	45			116	4,279	1	185	9	290	210	7,243
	〃　のふた	8	6	815	27	1,821	67	2,116	10	449	9	763	49	1,773	12	1,536	19	1,901	76	3,835
	チョウセンサザエ	9					29	383	1	10	4	166	26	228	7	755	13	520	105	1,383
	〃　のふた	9	104	1,043	5	28	3	17	85	932	5	38	23	494	172	1,898	3	40	16	167
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	10											3	8					5	8
	ニシキアマオブネ	11					2	2					6	13	1	5	1	5	17	30
	マキミゾアマオブネ	12					1	2			1	2					1	1	15	20
	キバアマガイ	13											2	1						
アマガイモドキ科	アマガイモドキ	14																		
トゲカワニナ科	ヌノメカワニナ	15																		
タマキビガイ科	コンペイトウガイ	16																		
ムカデガイ科	オオヘビガイ	17					2	35					3	65						
オニノツノガイ科	カヤノミカニモリガイ	18																		
	トウガタカニモリガイ	19																		
	ゴマフトウガタカニモリガイ	20									1	5								
	タケノコカニモリガイ	21																		
	ナガタケノコカニモリガイ	22																		
	カニモリガイ	23																	1	<1
	メオニノツノガイ	24																		
	オニノツノガイ	25	3	137	2	63	7	313	11	735	4	220	3	17	15	1,030	16	1,043	22	502
スズメガイ科	アツキクスズメガイ	26													1	2				
ソデガイ科	マガキガイ	27	18	323	27	312	9	92	33	673	38	444	15	77	67	1,245	40	557		
	ムカシタモトガイ	28																		
	イボソデガイ	29											2	25	2	125	2	90	1	15
	スイジガイ	30	1	295	16	1,374	93	2,810	2	470	13	1,775	95	2,579	15	3,930	28	3,477	252	4,663
	クモガイ	31			18	1,089	111	2,944	3	465	25	1,487	138	3,109	5	744	42	2,318	422	7,557
	〃　(幼)	32			3	115			1	100							1	65	2	85
	ラクダガイ	33															1	245	10	920
	ゴホウラ	34																		
	不　明				1	20	45	805			2	36	61	598			1	15	14	365
タマガイ科	トミガイ	35																		
タカラガイ科	キイロダカラガイ	36																		
	ハナビラダカラガイ	37	1	2																
	コモンダカラガイ	38													1	10	1	2		
	ハナマルユキガイ	39	8	67	11	49	39	202	12	104	4	16	73	156	53	377	3	13	165	403
	ホシキヌタガイ	40													4	80	1	16	8	30
	クチムラサキダカラガイ	41																		
	ハチジョウダカラガイ	42			1	40	16	245			2	70	3	57			12	515	94	1,580
	ヤクシマダカラガイ	43			3	65	61	758	2	45	2	27	13	91	2	79	12	178	82	691
	ヒメヤクシマダカラガイ	44																		
	ホシダカラガイ	45			2	100	7	103			1	93	3	88			9	475	21	378
	ヒメホシダカラガイ	46																		
	〃　(幼)	47																		
	不　明				2	27	25	137					121	437					519	1,546

Ⅲ層																		Ⅳ層											
コー58ピット						コー59ピット						サー59ピット												5号焼土					
完形		破損貝				完形		破損貝				完形		破損貝				完形		破損貝				完形		破損貝			
		有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)	
個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量
										2	1											1	1						
																						2	2						
								1	10	4	8									2	15	3	15						
1	135	1	50															1	97	3	140	7	173	1	65				
		1	50	20	340	2	170	3	150	20	125					41	415			9	460	238	1,517						
																						12	35						
										16	660											19	710						
						1	115											10	210	1	50	8	505						
				1	35			1	10	1	15	1	90	1	40	4	20	5	480	4	75	48	442						
1	10					10	100					2	20					37	420	1	5	1	5						
										1	1											2	2						
																												2	1
																						1	25						
																		1	15										
				1	10			2	130									1	45	2	35	5	125						
												1	1					1	1										
2	30					2	35							1	15			7	160	1	15					1	10		
		1	130	1	40					4	90	2	480					1	260	6	355	44	967					3	70
				2	45			3	150	18	305					1	5			4	447	48	542					1	3
																				3	110								
						1	10			4	10							6	58	1	2	24	68						
				2	30			2	95	3	35									3	85	25	355						
																		2	50	4	85	6	47						
				3	35			1	25	2	25									2	125	5	125					3	45
										15	90					1	5			1	8	103	408						

2 地区			Ⅰ層						Ⅱ層						Ⅲ層					
科名	貝種名	番号	完形		破損貝				完形		破損貝				完形		破損貝			
					有殻頂		無殻頂(細片)				有殻頂		無殻頂(細片)				有殻頂		無殻頂(細片)	
			個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量
トウカムリガイ科	タイコガイ	48							1	40										
	アメガイ	49																		
フジツガイ科	ホラガイ	50			4	292	13	73			7	298	87	1,687			1	75	134	2,475
	ミツカドボラ	51																		
オキニシ科	オキニシ	52									1	24	1	9			1	40	3	27
	シロナルトボラ	53													1	410			3	170
アクキガイ科	レイシガイダマシ	54	1	17			35	295							1	5			1	3
	ヒメヨウラクガイ	55																		
	シラクモガイ	56	7	670	1	27	3	165	3	269	2	50	13	166	26	2,565	7	315	15	172
	ウニレイシガイ	57			1	5	1	10												
	ムラサキイガレイシガイ	58	3	33	5	60	1	5	16	258	8	88	4	21	36	485	20	177	31	172
	アカイガレイシガイ	59					1	4	1	14	2	11			2	11			1	15
	ホソスジテツボラ	60									1	15	1	15					2	20
	コイボテツレイシ	61																		
	不明																2	25	1	10
イトマキボラ科	マルニシ	62					1	13	1	7			1	2	1	25	2	15	2	10
	リュウキュウツノマタ	63													1	12				
	イトマキボラ	64															2	85		
	ベニマキ	65																		
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	66							1	60			1	10	11	480	7	160	1	35
	コオニコブシガイ	67	6	209	5	80	4	16	16	358	3	27	4	22	22	339	20	331	77	425
	不明																			
フデガイ科	ニシキノキバフデガイ	68																		
	フトコロヤクテガイ	69																		
	不明																			
マクラガイ科	サツマビナガイ	70																		
イモガイ科	マダライモガイ	71	2	8	1	3	1	2			1	2			4	23	5	22		
	コマダライモガイ	72	5	42	3	12	6	7	5	19										
	サヤガタイモガイ	73	5	38	2	7			4	21	1	2	5	10	5	17	1	3	1	1
	クロミナシガイ	74													6	90	2	10		
	イボシマイモガイ	75													1	2				
	キヌカツギイモガイ	76	10	79	2	10	4	27	23	243	3	10	3	7	10	145	7	43		
	ゴマフイモガイ	77																		
	アカシマミナシガイ	78																		
	ヒラマキイモガイ	79	2	18	1	6					2	12			1	5	2	5	1	1
	アンボンクロザメガイ	80	2	163	4	153	2	28			1	20	6	130	2	126	11	457	46	730
	クロフモドキガイ	81					3	80					15	230					15	175
	イボカバイモガイ	82	5	257	11	212	5	66	11	427	13	206	5	55	14	620	23	610	49	441
	タガヤサンミナシガイ	83																		
	不明		3	64	20	49	11	68	5	15	2	4	14	90	3	8			69	374
タケノコガイ科	ウシノツノガイ	84	1	15																
	キバタケガイ	85			1	2														
	リュウキュウタケガイ	86																		
オナジマイマイ科	クロイワオオケマイマイ	87	1	2					4	9	1	<1	6	6	10	15	1	2	7	55
	オキナワウスカワマイマイ	88					2	1	1	1	1	<1	5	1	5	4			19	6
巻貝不明																	1	2	41	215
合計			198	5,042	194	6,525	916	15,665	282	9,407	162	6,365	1,607	24,058	539	22,709	422	19,768	3,968	50,653

Ⅲ層																		Ⅳ層											
コー58ピット						コー59ピット						サー59ピット												5号焼土					
完形		破損				完形		破損				完形		破損				完形		破損				完形		破損			
		有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)				有殻頂		無頂(綱片)	
個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量	個体数	重量	個体数	重量	個数	重量
																												1	1
																1	30			1	15	33	455						
														1	5														
										1	20											1	5						
						3	380			3	85	1	170					8	997	1	55								
						2	35			2	15							7	102	1	10	4	24						
														1	65			3	190	3	60	2	40						
								1	25	2	10			1	20			6	88	6	66	9	43						
																		1	4	1	1								
																		1	40										
																		1	5										
								1	20									1	40	2	70	7	90						
										1	10											9	210						
		1	10			1	40	3	40					2	40	3	20			6	97								
										4	10							1	10	9	137							1	1
						1	1																						
																						18	46						
4	175	4	240	30	535	23	286	18	855	103	1,515	7	761	7	185	51	495	101	3,272	77	2,523	685	6,982	1	65	1	10	11	121

2 地区			Ⅰ 層								Ⅱ 層								Ⅲ 層							
科名	貝種名	番号	完形			破損貝					完形			破損貝					完形			破損貝				
						有殻頂			無殻頂・細片					有殻頂			無殻頂・細片					有殻頂			無殻頂・細片	
			左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量	左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量	左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量
フネガイ科	ベニエガイ	89																								
	カリガネエガイ	90																								
	リュウキュウサルボウガイ	91	6	12	400		3	46	50	366	14	9	464	2	3	92	31	262	29	24	1,109		1	7	82	427
タマキガイ科	ソメワケグリ	92																		1	5					
	ウチワガイ	93																								
イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	94																							2	20
シュモクアオリガイ科	シロアオリガイ	95							3	12							1	3							9	55
ウミギクガイ科	メンガイ	96																	1	1	45					
イタボガキ科	オハグロガキ	97												1		22									5	140
シジミガイ科	シレナシジミ	98	20	22	1,041	79	60	1,487	531	2,092	71	82	3,777	146	159	3,891	1,133	4,021	41	34	2,463	77	75	2,001	597	2,212
ツキガイ科	ウラキツキガイ	99																								
	サザナミセワケツキガイ	100																								
カゴガイ科	カゴガイ	101		1	9				1	20							7	40							3	15
キクザルガイ科	カネツケザルガイ	102																								
	キクザルガイ	103																								
シャコガイ科	シラナミガイ	104	9	10	3,730	14	17	4,312	629	21,420	21	16	10,095	16	17	4,497	605	15,170	98	82	23,374	59	66	13,113	1,776	60,249
	〃 (幼)	105	1	4	744	7	11	938	49	1,621	2	4	495	11	12	2,339	42	2,045	28	33	2,767	29	32	1,427	34	1,322
	ヒメジャコ	106	2	1	320	11	18	814	59	909	12	5	1,195	12	8	892	54	1,350	14	16	1,725	25	16	1,895	45	1,060
	ヒレジャコ	107				3		240	7	466		2	1,068	1	1	635	8	495		3	156	5	4	813	13	1,970
	オオジャコ	108																				1		2,500		
	シャゴウ	109	3		4,000	4	2	1,524	48	3,056		1	240	3	1	1,078	44	3,318	3	1	2,980	3	3	3,765	156	16,205
	不明					3	2	145	54	1,351				3		30	210	3,109							32	1,405
ザルガイ科	カワラガイ	110									1		3		1	5	1	3		1	2	1		5	4	6
マルスタレガイ科	マルオミナエシガイ	111																								
	アラスジケマンガイ	112																								
	ヌノメガイ	113																								
	不明																									
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	114																								
バカガイ科	リュウキュウアリソガイ	115													1	9	1	1								
リュウキュウマスオガイ科	マスオガイ	116													1	5	2	10	1		2	1		2	1	2
	リュウキュウマスオガイ	117												1		5	5	16							6	8
ニッコウガイ科	サメザラガイ	118																								
二枚貝	不明								46	305							175	820								
クサズリヒザラガイ科		119																								
合計			41	50	10,144	121	113	9,506	1,477	31,618	121	119	17,337	196	204	13,500	2,319	30,663	215	196	34,628	201	203	25,534	2,765	85,096

Ⅲ層																								Ⅳ層																	
コー58ピット								コー59ピット							サー59ピット																	5号焼土									
完形			破損					完形			破損				完形			破損					完形			破損				完形			破損						
			有殻頂			無殻頂・細片					有殻頂			無殻頂・細片				有殻頂			無殻頂・細片					有殻頂			無殻頂・細片				有殻頂			無殻頂・細片			
左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量	左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量	左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量	左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量	左殻	右殻	重量	左殻	右殻	重量	個数	重量	左殻	右殻	重量
	1	55																						1	3	93	1		20	8	46									
								1		35	2	1	50	9	30					1	10	1	3	2	4	130	5	8	148	41	130									
3	4	935		2	30	35	1,180	9	9	1,600		4	205	90	3,130	10	18	3,000	1	1	70	14	28	38	20	6,190	13	12	2,220	290	8,970									
4	2	370	1		25			2		25	1		20											7	3	200	1	4	40												
											1	1	25	2	65		2	100	1	1	45	1	10	4	4	665	8	5	470	14	396									
1		30																							2	35				1	27									
																														11	1,025									
														2	70															10	515									
																											1		1											
8	7	1,390	1	2	55	35	1,180	12	9	1,660	4	6	300	103	3,295	10	20	3,100	2	3	125	16	41	52	36	7,313	29	29	2,799	375	11,100									

第45表　第２地区層位別出土状況（最少推定個体数）

科名	貝種名	番号	I層	II層	III層				IV層			合計	棲息地	
						コピット58ト	コピット59ト	サピット59ト	計		5号焼土	計			
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ	1		1	2				2	1		1	4	D	g
	クルマガサガイ	2	1	3	2		1		3	1		1	8	D	g
	リュウキュウウノアシガイ	3			2				2				2	D	g
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	4	1	2	1				1				4	F	g
	ムラサキウズガイ	5	1	3	2		1		3	2		2	9	F	g
	ギンタカハマガイ	6	7	13	14	2			16	4	1	5	41	F 2/10	g
	サラサバテイ	7	9	20	91	1	5	1	98	9		9	136	F 1/50	g・h
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	8	2	4	10		1		11	1		1	18	G	h
	〃　のふた	8	33	19	31		1		32	11		11	95	〃	〃
	チョウセンサザエ	9	1	5	20	1	1	2	24	9		9	39	F 2/20	g・h
	〃　のふた	9	109	90	175	1	10	2	188	38		38	425	〃	〃
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	10		1	1				1				2	D	g
	ニシキアマオブネ	11	1	1	2		1		3	1		1	6	D	f
	マキミゾアマオブネ	12	1	1	1				1				3	D	g
	キバアマガイ	13		1									1	D	g
アマガイモドキ科	アマガイモドキ	14										1	1	D	g
トゲカワニナ科	ヌノメカワニナ	15													
タマキビガイ科	コンペイトウガイ	16													
ムカデガイ科	オオヘビガイ	17	1	1						1		1	3	E	g
オニノツノガイ科	カヤノミカニモリガイ	18													
	トウガタカニモリガイ	19													
	ゴマフトウガタカニモリガイ	20		1									1	E	h
	タケノコカニモリガイ	21								1		1	1	E	d
	ナガタケノコカニモリガイ	22													
	カニモリガイ	23			1			1					1	D～F 20	d
	メオニノツノガイ	24													
	オニノツノガイ	25	5	15	31	1	2		34	3		3	57	G	g
スズメガイ科	アツキクスズメガイ	26			1			1	2	1		1	3	殻上に付着	
ソデガイ科	マガキガイ	27	45	71	107	2	2	1	112	8	1	9	237	D～F 20	d
	ムカシタモトガイ	28													
	イボソダガイ	29		1	4			1	4				5	G	d
	スイジガイ	30	17	15	43	1	1	2	47	7	1	8	87	H	d
	クモガイ	31	18	28	47	1	3		52	4	1	5	103	H	d
	〃　（幼）	32	3	1	1				1	3		3	8	〃	〃
	ラクダガイ	33			1				1				1	F	d
	ゴホウラ	34													
タマガイ科	トミガイ	35													
タカラガイ科	キイロダカラガイ	36													
	ハナビラダカラガイ	37	1										1	D	g・h
	コモンダカラガイ	38			2				2				2	D	g
	ハナマルユキガイ	39	19	16	56		2		58	7		7	100	D	g・h

科目	貝種名	番号	I層	II層	III層					IV層			合計	棲息地	
						コピット58ト	コピット59ト	コピット59ト	計		5号焼土	計			
タカラガイ科	ホシキヌタガイ	40			5				5				5	D	g
	クチムラサキダカラガイ	41													
	ハチジョウタカラガイ	42	1	2	12	1	2		15	3		3	21	G	g・h
	ヤクシマダカラガイ	43	3	4	14				14	6		6	27	D	g
	ヒメヤクシマダカラガイ	44													
	ホシダカラガイ	45	2	1	9	1	1		11	2	1	3	17	H	d・h
	ヒメホシダカラガイ	46													
	〃 (幼)	47													
トウカムリガイ科	タイコガイ	48		1							1	1	2	F 10/50	c
	アメガイ	49													
フジツガイ科	ホラガイ	50	4	7	1			1	2	1		1	14	G	g
	ミツカドボラ	51						1	1				1	G	g
オキニシ科	オキニシ	52		1	1		1		2	1		1	4	G	g
	シロナルトボラ	53			2				2				2	G	g
アクキガイ科	レイシガイダマシ	54	2		2				2				4	D	g
	ヒメヨウラクガイ	55													
	シラクモガイ	56	8	5	33		4	1	38	9		9	60	D	g
	ウニレイシガイ	57	1										1	G	g
	ムラサキイガレイシガイ	58	8	24	56		3		59	8		8	99	D	h
	アカイガレイシガイ	59	1	3	3				3				7	D	g
	ホソスジテツボラ	60		1	1				1				2	D	g
	コイボテツレイシ	61													
イトマキボラ科	マルニシ	62	1	2	3				3				6	D	g
	リュウキュウツノマタ	63			1				1				1	D	g
	イトマキボラ	64			2				2				2	G	g
	ベニマキ	65													
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	66		2	18			1	19	6		6	27	D	h
	コオニコブシガイ	67	11	19	42		1	1	44	12		12	86	D	g
フデガイ科	ニシキノキバツデガイ	68													
	フトコロヤクテガイ	69													
マクラガイ科	サツマビナガイ	70													
イモガイ科	マダライモガイ	71	3	1	9				9	2		2	15	D	g
	コマダライモガイ	72	8	5									13	D	g
	サヤガクイモガイ	73	7	5	6				6				18	D	g
	クロミナシガイ	74			8				8				8	D	d
	イボシマイモガイ	75			1				1				1	D	g・d
	キヌカツギイモガイ	76	12	26	17				17	1		1	56	D	g
	ゴマフイモガイ	77													
	アカシマミナシガイ	78	3												
	ヒラマキイモガイ	79	6	2	3				3	1		1	9	D	d
	アンボンクロザメガイ	80	1	1	13		1		14	3		3	24	D	d
	クロフモドキガイ	81	1	1	1		1		2				4	D	d
	イボカバイモガイ	82	16	24	37		4	2	43	6		6	89	D	g

科目	貝種名	番号	I層	II層	III層					IV層			合計	棲息地	
						コピーツ58ト	コピーツ59ト	サピーツ59ト	計		5号焼土	計			
イモガイ科	タガヤサンミナシガイ	83													
タケノコガイ科	ウシノツノガイ	84	1										1	D	d
	キバタケガイ	85	1										1	D	d
	リュウキュウタケガイ	86													
オナジマイマイ科	クロイワオオケマイマイ	87	1	5	11		1		12				18	A	
	オキナワウスカワマイマイ	88	1	2	6				6				9	A	
フネガイ科	ベニエガイ	89													
	カリガネエガイ	90													
	リュウキュウサルボウガイ	91	15	16	29	1			30	3		3	64	D	d
タマキガイ科	ソメワケグリ	92			1				1				1	D	d
	ウチワガイ	93													
イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	94			1				1				1	D	d
シュモクアオリガイ科	シロアオリガイ	95	1	1	1				1				3	D	d
ウミギクガイ科	メンガイ	96			1				1				1	D	h
イタボガキ科	オハグロガキ	97			1				1				1	D	g
シジミガイ科	シレナシジミ	98	99	241	118		3	1	122	12		12	474	B	a
ツキガイ科	ウラキツキガイ	99													
	サザナミセワケツキガイ	100													
カゴガイ科	カゴガイ	101	1	1	1				1				3	G	d
キクザルガイ科	カネツケザルガイ	102													
	キクザルガイ	103													
シャコガイ科	シラナミガイ	104	27	37	157	6	13	19	195	51		51	310	G	g
	〃 (幼)	105	15	16	65	5	3		73	8		8	112	〃	〃
	ヒメジャコ	106	19	24	39		1	3	43	12		12	98	D	g・h あ中
	ヒレジャコ	107	3	3	7	1			8	2		3	16	G	h
	オオジャコ	108			1				1				1	G	h
	シャゴウ	109	7	3	6				6	1		1	17	D	d・h
ザルガイ科	カワラガイ	110		1	1				1				2	D	d
マルスダレガイ科	マルオミナエシガイ	111													
	アラスジケマンガイ	112													
	ヌノメガイ	113													
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	114								1		1	1	C	d
バカガイ科	リュウキュウアリソガイ	115		1									1	D	d
リュウキュウマスオガイ科	マスオガイ	116		1	2				2				3	内湾	a
	リュウキュウマスオガイ	117		1	1				1				2	D	d
ニッコウガイ科	サメザラガイ	118													
合	計		561	794	1367	24	68	38	1497	253	7	260	3112		

※記号について

A陸　上　E浅　海（水深5m→F5）　a泥　底　e砂礫底
B淡水・河川　F水深　m（水深2m～20m→F2/20）　b砂泥底　f岩礫底
C潮上帯　G潮間帯下　c細砂底　g岩　礁
D潮間帯　H珊瑚礁　d砂　底　h珊瑚礁

（3） 3地区出土の貝類

3地区出土の貝は少なく、23科51種で289個体出土した。

層位別にみるとI層で多く、II層とIII層は同数でI層のほぼ半分である。

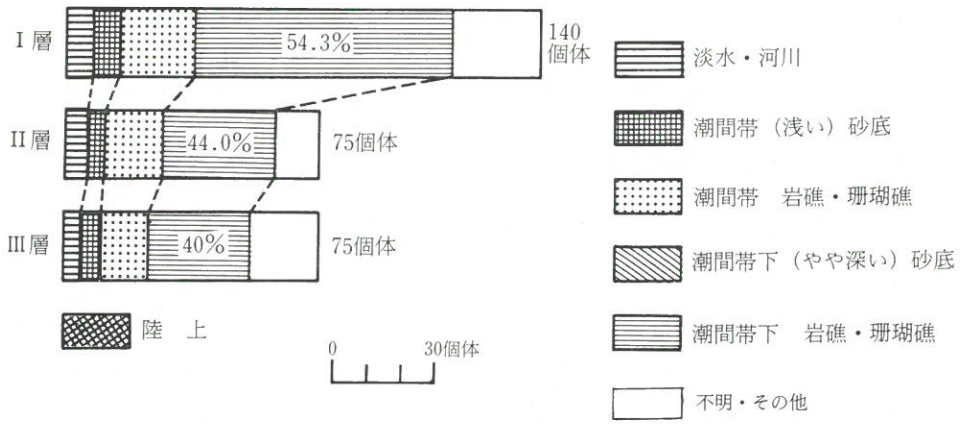
第46表 主体貝の出土状況

順位	主体貝	棲息地	I層		II層		III層		計
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	
1	チョウセンサザエ（蓋）	F 2/20－gh	53	37.9%	16	21.3%	14	18.7%	83
2	マガキガイ	D～F20－d	16	11.4%	5	6.7%	10	13.3%	31
3	シレナシジミ	B－a	8	5.7%	7	9.3%	5	6.6%	20
4	ヤコウガイ（蓋）	G－h	9	6.4%	4	5.3%	3	4.0%	16
5	シラナミガイ(幼貝を含)	G－g	4	2.9%	4	5.3%	7	9.3%	15

各層ともチョウセンサザエ（蓋）の出土量が最も多い。I層とIII層では次いでマガキガイが出土しており、II層ではシレナシジミの出土が目立つ。

この地区では、貝の出土量が少ないが、ヤコウガイの出土が目立つ。

第47表 出土貝棲息地の構成比較



棲息地別にみると、各層とも、潮間帯下の岩場に棲息する貝が多く、40%以上を占める。特にI層では50%以上を占めている。次いで潮間帯の岩場に棲息する貝が多い。

第48表　第３地区層位別出土状況（最少推定個体数）

科名	貝種名	番号	I層	II層	III層	合計	棲息地	
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ	1					D	g
	クルマガサガイ	2					D	g
	リュウキュウウノアシガイ	3					D	g
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	4					F	g
	ムラサキウズガイ	5					F	g
	ギンタカハマガイ	6	2			2	F2/10	g
	サラサバテイ	7	1		1	2	F1/30	g, h
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	8	2	1	1	4	G	h
	〃　のふた	8	9	4	3	16	〃	〃
	チョウセンサザエ	9	2	5	1	8	F2/20	g, h
	〃　のふた	9	53	16	14	83	〃	〃
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	10	2			2	D	g
	ニシキアマオブネ	11			1	1	D	f
	マキミゾアマオブネ	12					D	g
	キバアマガイ	13					D	g
アマガイモドキ科	アマガイモドキ	14					D	g
トゲカワニナ科	ヌノメカワニナ	15					B	
タマキビガイ科	コンペイトウガイ	16					C	g, h
ムカデガイ科	オオヘビガイ	17					E	g
オニノツノガイ科	カヤノミカニモリガイ	18					D	g
	トウガタカニモリガイ	19					D	e
	ゴマフトウガタカニモリガイ	20					E	h
	タケノコカニモリガイ	21					E	d
	ナガタケノコカニモリガイ	22					E	d
	カニモリガイ	23					D~F20	d
	メオニノツノガイ	24					G	g
	オニノツノガイ	25	4	2	1	7	G	g
スズメガイ科	アツキクスズメガイ	26						
ソデガイ科	マガキガイ	27	16	5	10	31	D~F20	d
	ムカシタモトガイ	28					G	d
	イボソデガイ	29					G	d
	スイジガイ	30	2	1	3	6	H	d
	クモガイ	31	1	3	2	6	H	d
	〃　(幼)	32					〃	〃
	ラクダガイ	33	1	1		2	F	d
	ゴホウラ	34	1	1		2	F30	d
タマガイ科	トミガイ	35			1	1	E	d
タカラガイ科	キイロダカラガイ	36		1		1	D	g, h
	ハナビラダカラガイ	37					D	g, h
	コモンダカラガイ	38		1		1	D	g
	ハナマルユキガイ	39	4	5	2	11	D	g, h
	ホシキヌタガイ	40		1	1	2	D	g
	クチムラサキダカラガイ	41					D	g
	ハチジョウダカラガイ	42	1		1	2	G	g, h
	ヤクシマダカラガイ	43	1	1		2	D	g
	ヒメヤクシマダカラガイ	44					D	g
	ホシダカラガイ	45			1	1	H	d, h
	ヒメホシダカラガイ	46					D	g
	〃　(幼)	47						
トウカムリガイ科	タイコガイ	48	1		1	2	F10/50	c
	アメガイ	49					F	c
フジツガイ科	ホラガイ	50	1		1	2	G	g
	ミツカドボラ	51					G	g
オキニシ科	オキニシ	52					G	g
	シロナルトボラ	53					G	g
アクキガイ科	レイシガイダマシ	54					D	g
	ヒメヨウラクガイ	55					D	g
	シラクモガイ	56			3	3	D	g
	ウニレイシガイ	57		1			G	g
	ムラサキイガレイシガイ	58	2	3	1	6	D	h
	アカイガレイシガイ	59	2			2	D	g
	ホソスジテツボラ	60					D	g
	コイホテツレイシ	61					D	g
イトマキボラ科	マルニシ	62	1			1	D	g
	リュウキュウツノマタ	63			1	1	D	g
	イトマキボラ	64					G	g
	ベニマキ	65			1	1	G	g
オニコブシガイ科	オニブシガイ	66					D	h
	コオニコブシガイ	67					D	g
フデガイ科	ニシキノキバフデガイ	68					D	d
	フトコロヤクテガイ	69					D	g
マクラガイ科	サツマビナガイ	70	1			1	E	d
イモガイ科	マダライモガイ	71	1		1	2	D	g
	コマダライモガイ	72		1	1	2	D	g
	サヤガタイモガイ	73		2		2	D	g
	クロミナシガイ	74					D	d
	イボシマイモガイ	75		4		4	D	g, d
	キヌカツギイモガイ	76	2	2		4	D	g
	ゴマフイモガイ	77					D	d
	アカシマミナシガイ	78					G	
	ヒラマキイモガイ	79		1		1	D	d
	アンボンクロザメガイ	80	4	2		6	D	d
	クロフモドキガイ	81					D	d
	イボカバイモガイ	82	6		3	9	D	g
	タガヤサンミナシガイ	83					G	e
タケノコガイ科	ウシノツノガイ	84			2	2	D	d

科名	貝種名	番号	I層	II層	III層	合計	棲息地	
タケノコガイ科	キバタケガイ	85					D	d
	リュウキュウタケガイ	86					E	d
オナジマイマイ科	クロイワオオケマイマイ	87					A	
	オキナワウスカワマイマイ	88					A	
フネガイ科	ベニエガイ	89					D	f
	カリガネエガイ	90					D	g
	リュウキュウサルボウガイ	91	2	1	1	4	D	d
タマキガイ科	ソメツケグリ	92			1	1	D	d
	ウチソガイ	93					D	d
イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	94					D	d
シュモクアオサガイ科	シロアオリガイ	95	1			1	D	d
ウミギクガイ科	メンガイ	96					D	h
イタボガキ科	オハグロガキ	97					D	g
シジミガキ科	シレナシジミ	98	8	7	5	20	B	a
ツキガイ科	ウラキツキガイ	99					D	d
	サザナミセワケツキガイ	100					D	d
カゴガイ科	カゴガイ	101	1			1	G~F20	d

科名	貝種名	番号	I層	II層	III層	合計	棲息地	
キクザルガイ科	カネツケザルガイ	102					D	g
	キクザルガイ	103	1			1	D	g
シャコガイ科	シラナミガイ	104	3	3	5	11	G	g
	〃（幼）	105	1	1	2	4	〃	〃
	ヒメジャコ	106	2	2	2	6	D	g, hの中
	ヒレジャコ	107		1	1	2	G	h
	オオジャコ	108					G	h
	シャゴウ	109	1	1	1	3	D	d, h
ザルガイ科	カワラガイ	110					D	d
マルスダレガイ科	マルオミナエシガイ	111		1		1	D	d
	アラスジケマンガイ	112					D	d
	ヌノメガイ	113					D	d
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	114					C	d
パカガイ科	リュウキュウアリソガイ	115					D	d
リュウキュウマスオガイ科	マスオガイ	116	1			1	内湾	a
	リュウキュウマスオガイ	117					D	d
ニッコウガイ科	サメザラガイ	118			1	1	D	d
合計			140	75	75	289		

※記号について

A…陸上　E…浅海（水深5m→F5）　a…泥底　e…砂礫底
B…淡水・河川　F…水深m（水深2m～20m→F2/20）　b…砂泥底　f…岩礫底
C…潮上帯　G…潮間帯下　c…細砂底　g…岩礁
D…潮間帯　H…珊瑚礁　d…砂底　h…珊瑚礁

（4）4地区出土の貝類

点在している試掘グリッドをまとめて、便宜上4地区とした。

貝が出土した試掘グリッドはオ―65・ケ―43・ケ―70・ケ―74・ケ―76の5つのグリッドで、グリッド別に表をまとめた。

（イ）オ―65グリッド

I層・II層・III層から83個体の貝が出土した。II層から最も多く出土し、III層出土の貝は少ない。

I層・II層ともチョウセンサザエ（蓋）の出土が最も多く、III層ではシラナミガイが1位である。

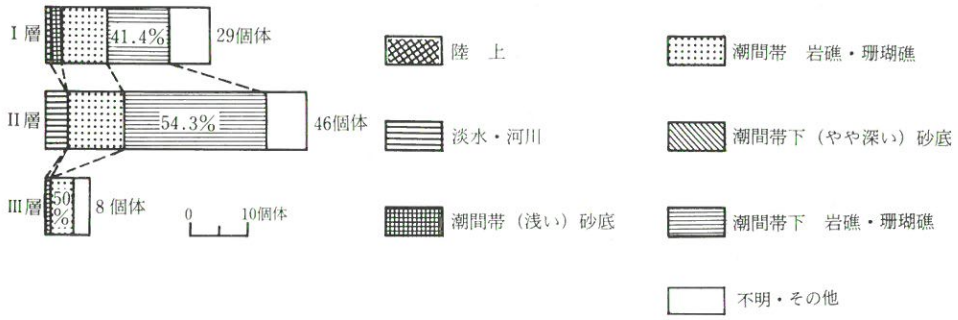
I層ではチョウセンサザエに次いでマガキガイ・ヒメジャコとなっている。

II層ではシレナシジミ・シラナミガイ・ヒメジャコとつづく。特にシャコガイ科の貝の出土が目立つ。

III層出土の貝はわずか8個体だが、その中ではシラナミガイが4個体出土しており、出土貝の半数を占める。

棲息地別にみると、各層とも潮間帯下（やや深い）岩礁・珊瑚礁に棲息する貝の出土が最も多く、次いで潮間帯（浅い）岩場の貝が出土している。II層で淡水・河川の泥底に棲息する貝も目立つ。

第49表　オ－65出土貝棲息地の構成比較



（ロ）ケ―43グリッド

出土数は少なく、I層で4個体、II層で17個体の出土である。

I層では、チョウセンサザエ(蓋)が2個出土しており、それだけで出土量の50%を占める。

潮間帯・潮間帯下の岩場の貝が主体を占めるが、II層では潮間帯（浅い）砂底に棲息する貝の出土が目立つ。

（ハ）ケ―70グリッド

この試掘グリッドも貝の出土数は少なく、I層・II層を合わせて19個体の出土である。ウラキツキガイが最も多く出土しており、二枚貝の出土が目立つ。

棲息地別にみると、潮間帯に砂底に棲息する貝の出土が最も多い。I層では潮間帯下岩場の貝の出土が目立つ。

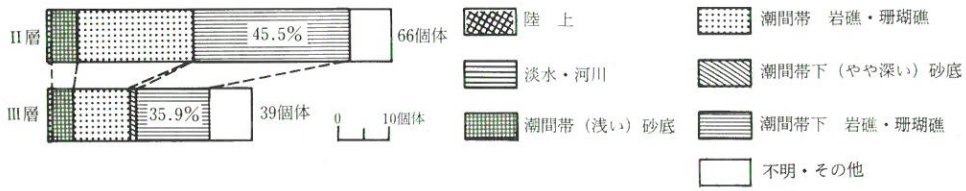
（ニ）ケ―74グリッド

試掘グリッドの中では最も多く出土した。

II層・III層とも、チョウセンサザエ（蓋）の出土が最も多く、次いでシラナミガイ・マガキガイが多く、他には、コオニコブシガイ等の出土が目立つ。

棲息地別にみると、潮間帯・潮間帯下岩場に棲息する貝が主で、潮間帯の砂底に棲息する貝も目立つ。

第50表　ケ－74出土貝棲息地の構成比較

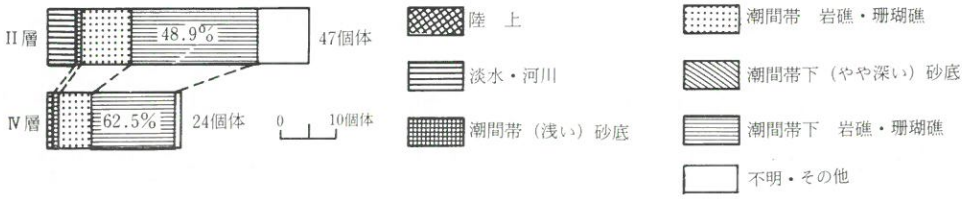


（ホ）ケー76グリッド

II層とIV層から貝が出土した。

II層ではサラサバテイが最も多く出土しており、シレナシジミ、シラナミガイの出土が目立ち、IV層ではチョウセンサザエとシラナミガイの出土が目立つ。

第51表　ケー76出土貝棲息地の構成比較



棲息地別にみると、潮間帯下岩場に棲息する貝が最も多く、II層では約50%を占める。II層IV層とも岩場に棲息する貝の出土がほとんどであるが、II層で淡水・河川の泥底に棲息する貝の出土が目立つ。

（5）小　　結

今回の調査で出土した貝類は、2地区で最も多く出土した。

各地区とも、チョウセンサザエ（蓋）が多量に出土したが、ほとんど殻よりも蓋の方が圧倒的に多く、ヤコウガイにしても殻よりも蓋の方が多く出土した。

地区別にあげた出土数ベスト5の主体貝は、チョウセンサザエ、シラナミガイ、マガキガイ、シレナシジミの4種の他に、1地区ではヒメジャコ、2地区ではサラサバテイ、3地区ではヤコウガイとなっている。

いずれの地区でも、潮間帯下の岩礁や珊瑚礁等の岩場に棲息する貝が最も多く出土しており、潮間帯の岩場に棲息する貝も多い。また、砂底に棲息するマガキガイも多量に出土することから、当時の貝塚付近の海岸の環境を考察することができる。本貝塚から出土した貝は、現在でも美味とされている貝が主体を占めており、そういう貝が容易に採れるという恵まれた環境であったことを示唆している。

マングローブ地河口の泥底に棲息するシレナシジミの出土も多い。現在、シレナシジミが棲息しそうな場所はみられないが、当時シレナシジミの棲息地が貝塚付近にあったのであろうか。この件については、今後の出土例や自然環境に関する報告を待ちたい。

各地区の完形貝、破損貝（有殻頂・無殻頂細片）の数量と重量を計測した出土状況については、最少推定個体数を示した表でも大まかな出土量を把握することができると思われるが、出土量の多い2地区については、出土状況表を掲載した。

他の地区の表については、紙数の都合により割愛することになったことをことわっておきたい。

第52表　第4地区層位別出土状況（最少推定個体数）

科名	貝種名	番号	試掘グリッド																	棲息地	
			オ－65				ケ－43			ケ－70			ケ－74			ケ－76			合計		
			I層	II層	III層	計	I層	II層	計	I層	II層	計	II層	III層	計	II層	VI層	計			
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ	1																			
	クルマガサガイ	2																			
	リュウキュウウノアシガイ	3																			
	不明																				
ユキノカサガイ科	不明																				
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	4																			
	ムラサキウズガイ	5											1	2	3	1	3	4	7	F	g
	ギンタカハマガイ	6		1		1								1	1		2	2	4	F 2/10	g
	サラサバテイ	7											3		3	7		7	10	F 1/30	g・h
	不明																				
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	8	1	1		2							1		1	1	1	2	5	G	h
	〃 のふた	8	1	1		2		1	1				1	1	2		1	1	6	〃	〃
	チョウセンサザエ	9	1			1		1	1				2		2	5	1	6	10	F 2/20	g・h
	〃 のふた	9	8	15		23	2	2	4				10	5	15	1	4	5	47	〃	〃
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	10											1		1				1	D	g
	ニシキアマオブネ	11												1	1	1		1	2	D	f
	マキミゾアマオブネ	12																			
	ギバアマガイ	13																			
アマガイモドキ科	アマガイモドキ	14																			
トゲカワニナ科	ヌノメカワニナ	15																			
タマキビガイ科	コンペイトウガイ	16																			
ムカデガイ科	オオヘビガイ	17											1		1	1	1		3	E	g
オニノツノガイ科	カヤノミカニモリガイ	18																			
	トウゲタカニモリガイ	19																			
	ゴマフトウゲタカニモリガイ	20																			
	タケノコカニモリガイ	21																			
	ナガタケノコカニモリガイ	22																			
	カニモリガイ	23						2	2										2	D～F20	d
	メオニノツノガイ	24											2		2				2	G	g
	オニノツノガイ	25	1	1		2				1		1	1		1	1		1	5	G	g
スズメガイ科	アツキクスズメガイ	26											1		1				1	殻上に付着	
ソデガイ科	マガキガイ	27	3	3		6		1	1				4	4	8	1		1	16	D～F20	d
	ムカシタモトガイ	28												1	1				1	G	d
	イボソデガイ	29																			
	スイジガイ	30	1	1	1	3													3	H	d
	クモガイ	31	1	1	1	3							1	1	2	1		1	6	H	d
	クモガイ（幼）	32																			
	ラクダガイ	33																			
	ゴホウラ	34																			
	不明																				
タマガイ科	トミガイ	35												1	1				1	E	d
タカラガイ科	キイロダカラガイ	36						2	2				2		2		1	1	5	D	g・h
	ハナビラダカラガイ	37																			
	コモンダカラガイ	38																			
	ハナマルユキガイ	39	2	1		3							1	1	2	1		1	6	D	g・h
	ホシキヌタガイ	40		1		1							1		1	1		1	3	D	g
	クチムラサキダカラガイ	41									2	2							2	D	g
	ハチジョウタカラガイ	42								1		1	1	1	2	1	1	2	5	G	g・h
	ヤクシマダカラガイ	43	1	1		2							1	1	2	1		1	5	D	g
	ヒメヤクシマダカラガイ	44																			
	ホシダカラガイ	45		1	1	2													2	H	d・h
	ヒメホシダカラガイ	46																			
	〃（幼）	47														1		1	1	D	g
	不明																				

科目	貝種名	番号	試掘グリッド																			
			オ－65				ケ－43			ケ－70			ケ－74			ケ－76			合計	棲息地	
			I層	II層	III層	計	I層	II層	計	I層	II層	計	II層	III層	計	II層	IV層	計			
トウカムリガイ	タイコガイ	48																			
	アメガイ	49																			
フジツガイ科	ホラガイ	50		1		1				1		1	1	1	2	1		1	5	G	g
	ミツカドボラ	51																			
オキニシ科	オキニシ	52																			
	シロナルトボラ	53																			
アクキガイ科	レイシガイダマシ	54																			
	ヒメヨウラクガイ	55																			
	シラクモガイ	56											1		1				1	D	g
	ウニレイシガイ	57														1		1	1	G	g
	ムラサキイガレイシガイ	58						1	1				3		3	1	2	3	7	D	h
	アカイガレイシガイ	59																			
	ホソスジテツボラ	60											1		1	1		1	2	D	g
	コイボテツレイシ	61																			
	不明																				
イトマキボラ科	マルニシ	62												1	1		1	1	2	D	g
	リュウキュウツノマタ	63															1	1	1	D	g
	イトマキボラ	64																			
	ベニマキ	65																			
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	66																			
	コオニコブシガイ	67		1		1							3	4	7				8	D	g
	不明																				
フデガイ科	ニシキノキバフデガイ	68																			
	フトコロヤタテガイ	69																			
	不明																				
マクラガイ科	サツマビナガイ	70												1	1				1	E	d
イモガイ科	マダライモガイ	71						1	1				2	1	3				4	D	g
	コマダライモガイ	72																			
	サヤガタイモガイ	73											3		3				3	D	g
	クロミナシガイ	74																			
	イボシマイモガイ	75																			
	キヌカツギイモガイ	76											1		1				1	D	g
	ゴマフイモガイ	77																			
	アカシマミナシガイ	78																			
	ヒラマキイモガイ	79						1	1										1	D	d
	アンボンクロザメガイ	80	1		1	2										1		1	3	D	d
	クロフモドキガイ	81															1	1	1	D	d
	イボカバイモガイ	82	2	3		5								1	1				6	D	g
	タガヤサンミナシガイ	83																			
	不明																				
タケノコガイ科	ウシノツノガイ	84																			
	キバタケガイ	85									3	3							3	D	d
	リュウキュウタケガイ	86																			
オナジマイマイ科	クロイワオオケマイマイ	87														5		5	5	A	
	オキナワウスカワマイマイ	88																			
巻貝	不明																				
合計			3	4	1	8		2	2		3	3	9	8	17	6	3	9	39		

科名	貝種名	番号	試掘グリッド																	棲息地	
			オ－65				ケ－43			ケ－70			ケ－74			ケ－76			合計		
			I層	II層	III層	計	I層	II層	計	I層	II層	計	II層	III層	計	II層	IV層	計			
フネガイ科	ベニエガイ	89											2		2				2	D	f
	カリガネエガイ	90									1	1		1	1				2	D	g
	リュウキュウサルボウガイ	91	1			1		1	1				3		3				5	D	d
タマキガイ科	ソメワケグリ	92																			
	ウチワガイ	93																			
イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	94																			
シュモケアオリガイ科	シロアオリガイ	95																			
ウミギクガイ科	メンガイ	96						1	1							1		1	2	D	h
イタボガキ科	オハグロガキ	97																			
シジミガイ科	シレナシジミ	98	1	4		5							1	1	2	5	1	6	13	B	a
ツキガイ科	ウラキツキガイ	99								1	3	4		2	2				6	D	d
	サザナミセワケツキガイ	100																			
カゴガイ科	カゴガイ	101									2	2	1	1	2				4	G~F2/20	d
キクザルガイ科	カネツケザルガイ	102																			
	キクザルガイ	103																			
シャコガイ科	シラナミガイ	104	1	4	1	6	1	1	2	1		1	5	2	7	4	1	5	21	G	g
	〃（幼）	105	1		3	4					1	1	4	1	5	1	3	4	14	〃	〃
	ヒメジャコ	106	3	3		6										1	1	2	8	D	g・h の中
	ヒレジャコ	107		2		2	1		1				1		1				4	G	h
	オオジャコ	108																			
	シャゴウ	109	1	1		2		1	1				1		1	1		1	5	D	d・h
	不明																				
ザルガイ科	カワラガイ	110						1	1	1		1	1		1				3	D	d
マルスダレガイ科	マルオミナエシガイ	111						1	1		1	1							2	D	d
	アラスジケマンガイ	112																			
	ヌノメガイ	113																			
	不明																				
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	114																			
バカガイ科	リュウキュウアリソガイ	115																	1		
リュウキュウマスオガイ科	マスオガイ	116												1	1				1	内湾	a
	リュウキュウマスオガイ	117												1	1						
ニッコウガイ科	サメザラガイ	118												1	1				1	D	d
二枚貝	不明																				
クサズリヒザラガイ科		119																			
合計			11	18	5	34	2	8	10	3	11	14	28	18	46	19	9	28	131		

※記号について

A……陸上
B……淡水・河川
C……潮上帯
D……潮間帯
E……浅海
F……水深　m
G……潮間帯下
H……珊瑚礁
F_5 …水深　5 m
$F_{2/20}$…水深 2 m～20m

a……泥底
b……砂泥底
c……細砂底
d……砂底
e……砂礫底
f……岩礫底
g……岩礁
h……珊瑚礁

2　脊椎動物遺存体

金子　浩昌

下田原貝塚の1984・85年調査時に出土した脊椎動物遺存体はかなりの量になるものであった。特に魚骨、獣骨が多く、中でもイノシシは多かった。1954年国分直一、多和田真淳氏らによる調査においても、46頭分の最少個体数の考えられることを仙波輝彦氏が報告されている。そして、それらのうち32個体が幼獣、3個体が若獣、11個体が成獣と推定されている。仙波氏は、肢骨の骨端線、縫合線の状態より推定されているが、これは部位により年令差があり、それらの統計では判定が難しくなるであろう。筆者らの歯牙による調査では成獣骨も多い。この点については今後も検討をつづけてみたいし、他遺跡との比較を通して、動物と人との関わりをみていきたいと思っている。

資料整理に当り、島袋春美、花城潤子氏らの協力を得、また金武正紀、金城亀信氏の御教示を得ることが多かった。記して感謝するものである。

第53表　脊椎動物種名一覧表

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATE
I　軟骨魚綱	I　Class Chondrichthyes
1.　サメ目	1.　Order Lamniformes
メジロザメ科	Family Carcharhinidae
イタチザメ	*Galoocerdo cuvier*
属・種不明	Ge. et sp. indet.
科・属不明	Fam. et. gen. indet.
2.　エイ目	2.　Order Rajiformes
科・属不明	Fam. et. gen. indet.
II　硬骨魚綱	II　Class Osteichthyes
1.　ウナギ目	1.　Order Anguilliformes
ウツボ科	Family Muraenidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
2.　スズキ目	2.　Order Perciformes
スズキ科	Family Serranidae
科・属不明	Ge. et. sp. indet.
フエフキダイ科	Family Lethrinidae
ヨコシマクロダイ	*Monotaxis grandoculis*

属・種不明	Ge. et sp. indet.
ベラ科	Family Labrdae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
ブダイ科	Family Scaridae
ナガブダイ	*Scarops rubrouiolaceus*
イロブダイ	*Bolbometopon bicolor*
ナンヨウブイ	*Scarus gibbus*
3. フグ目	3. Order Tetraodontiformes
ハリセンボン科	Family Diodontiae
イシガキフグ	*Chilomy cterus affinis*
モンガラカワハギ科	Family Balistidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
マフグ科	Family Tetraodontidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
III 爬虫綱	III Class Reptilia
1. カメ目	1. Order Chelonia
ウミガメ科	Family Chelonidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
IV 鳥 綱	IV Class Aves
1. ミズナギドリ目	1. Order Procellariformes
アホウドリ科	Family Diomedeidae
アホウドリ属	Diomedae sp.
2. スズメ目	Order Passeriformes
カラス科	Family Corvidae
カラス属	Corvus sp.
V 哺乳綱	V Class Mammalia
1. 翼手目	1. Order Chiroptera
オオコウモリ科	Family Pteropidae
オオコウモリ	Pteropus dasymallus
2. 齧歯目	2. Order Rodentia
ネズミ科	Family Murida
クマネズミ属	*Rattus sp.*
3. クジラ目	3. Order Cetacea

科・属不明	Fam. et. gen. indet.
イルカ科	Family Delphinidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
4. 海牛目	4. Order Sirennia
ジュゴン科	Family Dugongidae
ジュゴン	*Dugong dugong*
5. 偶蹄目	5. Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
リュウキュウイノシシ	*Sus leucomystax riukiuanus*

第54表　魚骨出土状況

調査地		サイ目 メジロザメ 側方歯	サイ目 脊椎	エイ目 ー 脊椎	ウナギ目 ウツボ科 A r+l	ウツボ科 A [illegible]骨	ウツボ科 B r+l	ウツボ科 B [illegible]骨	スズキ目 フエフキダイ科 ヨロシマクロダイ r+l	フエフキダイ科 種不明 r+l	ベラ科 r⊥l	ブダイ科 イロブダイ r+l	イロブダイ r⊥l	ナガブダイ r⊥l	ナンヨウブダイ r+l	種不明 r+l	種不明 r⊥l	種不明 咽頭破片	タイ科 r+l	ハタ科 r+l	フグ目 カワハギ r+l	カワハギ [illegible]	ハリセンボン科 上/下	ハリセンボン科 [illegible]	フグ科 r+l	その他 脊椎骨	その他 尾椎骨	その他 ヒレ	その他 その他	合計
カライン	I		小-6									+ / +1		3⊥2	1⊥ / 1	1+1	1(上1)1⊥ / 1				1+		–/2, 3			13	1		1	41
カライン	II		小-5 中-3		+ / 1+				1+ (下1)	1+		+1 / +2	2⊥4	2⊥5 / 3	2⊥1 / 3	2+1 / 1+2	⊥ / 3	2				1	2/–, 2	1		26	6		1	87
カライン	III		小-6		1+				2+2	+ / +1	⊥ / 1	1+	2⊥ / 1	1⊥3 / 2		1+ / 1+1	(上1)⊥1		+1				3/4, 1	1		14			6	58
カライン	小計		小-17 中-3		1+ / 1+				3+2 (下1)	1+ / +1	⊥ / 1	1+1 / +3	4⊥4 / 1	6⊥10 / 5	3⊥1 / 4	4+2 / 2+3	1(上2)2⊥ / 4	2	+1		1+	1	5/6, 6	2		53	7		8	186
49・50 ライン	I		小-3 中-3						1+ / 1+	1+		+ / +1	2⊥ / 2	⊥1 / 5		+1	2⊥1				+ / +1 (下3)		1			47	5		6	87
49・50 ライン	II				+ / +1								⊥1	+1	⊥ / 1	+ / +1	1⊥				+ (下1)				1+				5	13
49・50 ライン	III		小-2 中-2											1⊥		+1 / 1+				+1			–/2			5	4		.15	34
49・50 ライン	小計		小-5 中-5		+ / +1				1+ / 1+	1+		+ / +1	2⊥1 / 2	1⊥2 / 5	⊥ / 1	+2 / 1+1	3⊥1			+1	+ / +1 (下4)		–/2, 1		1+	52	9		26	134
58・59 ライン	I		小-1		+ / +1				+ (下1)	1+1	⊥ / 2		⊥1	2⊥1	3⊥2	3+ / 1+	4(上1)2⊥	1					1/3, 1			6	1		4	44
58・59 ライン	II	1	小-5 中-3 大-2	4			+ / +1		3+ / 1+	1+	⊥ / 1	1+1	5(上1)3⊥ / 3	3⊥5 / 9	⊥1 / 1	3+3 / 4+4	6⊥4			1+	+1 (下3)		3/5, 2	3		46	10	1	87	240
58・59 ライン	III	2	小-13 中-11 大-8	1	+ / +4	1	+ / +1		3+7 / 6+2 (下4)		⊥ / 1	1+1 / +1	7(上1)1⊥ / 4	3⊥3 / 31	4⊥ / 8	10+5 / 10+9	12(上1)12⊥ / 4	4		1+ / +1	1+ (下5)		8/4	8	+1	133	16	8	55	435
58・59 ライン	IV		大-1											⊥1 / 1		+ / 1+2					+ (下2)					5	2	1	4	20
58・59 ライン	小計	3	小-19 中-14 大-11	5	+ / +5	1	+ / +2		6+7 / 7+2 (下5)	2+1	⊥ / 4	2+2 / +1	12(上2)5⊥ / 7	8⊥10 / 41	7⊥3 / 9	16+8 / 16+15	22(上2)18⊥ / 4	5		2+ / +1	1+1 (下10)		12/12, 3	11	+1	187	29	10	150	739
コー59	I		大-1 中-1 小-1										(上1)⊥	⊥2 / 2			⊥1						1/–			6			5	21
コー59	II								1+																	6			1	8
コー59	III		小-4 中-5 大-2		+ / +2		+ / +1		4+1 / 1+3 (下3)	+1 (下5)		+ / +1	1⊥ / 1	1⊥1 / 18	⊥2	+2 / 2+4	1⊥3 / 2						–/3, 2			45	11	2	64	198
コー59	IV		小-1 中-1 大-6		+ / 1+						⊥ / 2			(上1)⊥ / 1									2				1	1		17
コー59	小計		小-6 中-7 大-9		+ / 1+2		+ / +1		5+1 / 1+3 (下3)	+1 (下5)	⊥ / 2	+ / +1	1(上1)⊥ / 1	1(上1)3⊥ / 21	⊥2	+2 / 2+4	1⊥4 / 2						1/3, 4			57	12	3	70	244
合計		3	小-47 中-29 大-20	5	1+ / 2+8	1	+ / +3		15+10 / 9+5 (下9)	4+2 / +1 (下5)	⊥ / 7	3+3 / +6	19(上3)10⊥ / 11	16(上1)25⊥ / 72	10⊥6 / 14	20+14 / 21+23	27(上4)25⊥ / 10	7	+1	2+1 / +1	2+1 / +1 (下14)	1	18/23, 14	13	1+1	349	57	13	254	1,303
不明		1						1		+ (下1)		+ (下1)	1⊥ / 1	3⊥2		1+	1⊥	1					2/–, 3			2	2		13	36
総合計		4	小-47 中-29 大-20	5	1+ / 2+8	1	+ / +3	1	15+10 / 9+5 (下9)	4+2 / +1 (下6)	⊥ / 7	3+3 / +6 (下1)	20(上3)10⊥ / 12	19(上1)27⊥ / 72	10⊥6 / 14	21+14 / 21+23	28(上4)25⊥ / 10	8	+1	2+1 / +1	2+1 / +1 (下14)	1	20/23, 17	13	1+1	351	59	13	267	1,339

凡例：

右前上顎骨	左前上顎骨
右歯骨	左歯骨

右上咽頭骨	左上咽頭骨
下咽頭骨	

1　魚　類

魚骨の出土は多い。

サメ目：加工された歯を加えてもその全体の出土量は少ない。椎体も特に多い数ではない。大形のメジロザメ科の他にも種類があるのであろう。歯の加工品で出土しているのはイタチザメである。

エイ目：椎体が主であるが、58・59ラインII層から尾棘が一点得られた。

ウナギ目：ウツボ科のもの2属があるようである。大形のものがあり、歯骨に穿孔した珍しいものが出土している。出土量は少ない。

スズキ目

スズキ科：ハタ類と思われるが数は少ない。

フエフキダイ科：ヨコシマクロダイの出土がやや目立つ。別に属・種不明のものがある。

タイ科：クロダイ類であるが1点のみ。

ベラ科：これも数が少ない。

ブタイ科：大部分の魚骨がこのブダイ科に属するもので、出土量も多い。イロブダイ、ナガブダイ、ナンヨウブダイその他数種のものが含まれよう。ナガブダイが最も多く、ナンヨウブダイ、イロブダイがこれに次ぐが、いずれも大形の体長をもつものであり、礁縁の水域でこれを狙ったのであろう。

フグ目

ハリセンボン科の多いのも島嶼における礁縁水域の漁撈の特徴で、特に大形のものがとられている。イシガキフグであろう。大形のモンガラカワハギ科の前上顎歯骨と棘が出土している。マフグ科1点は珍しい。

2　爬虫類

ウミガメ科

多くのウミガメの骨を出土している。他の骨と同様にII・III層特にIII層に多い。ただ、腹甲板、肋骨板ともに破壊が著しく、一部でも原形を止め得るような標本を探し出すことはできなかった。四肢骨の場合も、原形を留めるものは少なく、個体の復原される数は特に多くはない。しかし、こうした断片的な骨のみからの推定では不充分かも知れない。ウミガメ類については将来の精査が必要であろう。なお、ウミガメ類の甲板に特に焼けた例はみなかった。筆者がみている本州の貝塚から出土するウミガメには、しばしばその外面に焼痕を見るからである。

第55表　ウミガメ出土状況

地区＼部位		腹甲板	肋骨板	鳥口骨	尺骨 R	尺骨 L	尺骨 不	上腕骨 R	上腕骨 L	上腕骨 不	大腿骨 R	大腿骨 L	大腿骨 不	脛骨	手根(足根)骨	指骨	末節骨 A	末節骨 B	破片	合計
カ・キライン	I															4			2	6
	II	2	18	2				1						3		12	1	5	4	48
	III		13	1					1					3	1	5		1	6	31
	小計	2	31	3				1	1					6	1	21	1	6	12	85
49・50ライン	I		3													14	1		1	19
	II		2													8		1	7	18
	III		9	1												21	1		1	33
	小計		14	1												43	2	1	9	70
58・59ライン	I		4	1										3	1	13	1	1	7	31
	II	2	50	1	1			2					1	4	12	53	6	4	9	145
	III	3	6	2	1						2		1	10	12	49	9	6	57	158
	IV		1												3				5	9
	小計	5	61	4	2			2			2		2	17	28	115	16	11	78	343
コーグリッド59	I		2											1	1	5			2	11
	II		3												1	8			4	16
	III			1										7	8	27	11	5	39	98
	IV							1								2	1	2	7	13
	不明															1				1
	小計		5	1				1						8	10	43	12	7	52	139
不明			1											1	1				3	6
合計		7	112	9	2			1	4		2		2	32	40	222	31	25	154	643

3　鳥　類

沖縄の諸島における鳥骨の出土は一般に少ない。偶然的な捕獲の他は、特に狙うことが無かったからであろう。しかし、幾つかの遺跡で知られているアホウドリは大形の鳥であり、それなりの利用あるいは意義のあったことは予想される。

今回も上腕骨、尺骨、中手骨などを得ている。その他の骨もあったのであろうが、断片骨に含れている。

カラスの出土も島の遺跡では多い。おそらく多棲したのであろう。しかし、これもどの程度意図的に捕獲されたものか明らかではない。

鳥骨にはこの他にミズナギドリ目、チドリ目などと思われる海鳥の骨があったが、その種類を明らかにするには至らなかった。

第56表　鳥類・コウモリ出土状況

出土地		種類	アホウドリ							カラス				コウモリ					コウモリA	科不明								トリ不明	
			鳥口骨	上腕骨 pⓈd	尺骨 pⓈd	中手骨 pⓈd	脛骨 pⓈd	不明	小計	鳥口骨 pⓈd	尺骨 pⓈd	大腿骨 pⓈd	小計	下顎骨	肩甲骨 pⓈd	上腕骨 pⓈd	破片	小計	尺骨 pⓈd	鳥口骨	肩甲骨	中手骨	大腿骨 pⓈd	脛骨	破片	小計	破片	合計
カ・キライン	I	R																											
		L																											
		不																	1							1	2	3
	II	R														1	1	2											
		L															1	1									12	13
		不																											
	III	R																											
		L																											
		不																	1							1	1	2
	小計	R														1	1	2											
		L															1	1											
		不																	2							2	15	18
49・50ライン	I	R														1		1											1
		L														1		1											1
		不																	2							2	2	4
	II	R												1				1											1
		L																											
		不			1				1										1							1	2	4
	III	R																											
		L																											
		不																	2							2	9	11
	小計	R												1		1		2											2
		L														1		1											1
		不			1				1										5							5	13	19
58・59ライン	I	R																			1					1			1
		L		2			1		3					2				2											5
		不															1	1	3							3	5		9
	II	R									2		2	4				4											6
		L									1	1	3	7				7					1			1			11
		不		3					3								1	1	39						1	40	66	110
	III	R								3			3	4		1		5				1				1			9
		L		1		1			2		2		2	5		1		6											10
		不						1	1								1	1	17	1					1	19	57	78
	IV	R																											
		L																											
		不																									2	2	
	小計	R								3	2		5	8		1		9			1	1				2		16
		L		2.1		1	1		5		3	1.1	5	14		1		15					1			1		26
		不		35				1	4								3	3	59	1					2	62	130	199
コーグリフド	I	R												1				1											1
		L																											
		不																	2							2	2	4
	II	R												1				1											1
		L																											
		不																	7							7	2	9
	III	R												1	1														2
		L																											
		不															1		10					1	2 fr	13	39	53
	IV	R																											
		L																											
		不																									1	1	
	小計	R												1				1											1
		L												2	1			3											3
		不															1	1	19					1	2 fr	22	44	67
不明		R												1				1											1
		L																											
		不																	1							1	2	3
合計		R											5					12											
		L							5				5					22											
		不							5									5											

注：P→近位端　Ⓢ→骨体　d→遠位端

第57表　カエル出土一覧

グリッド	層　位	部　　位	個　数	備　　考
58・59ライン	Ⅲ　層	不　　明	3	PL．55下－9
合　　計			3	

第58表　ヘビ出土一覧

グリッド	層　位	部　　位	個　数	備　　考
58・59ライン	Ⅱ　層	脊　　椎	2	
〃	Ⅲ　層	〃	2	
合　　計			4	

4　哺乳類

オオコウモリ

大形のコウモリで、これまでの筆者らの調査した諸遺跡の中では最も多く出土していた。陸獣では、イノシシを除いて、このオオコオモリが重要な食料の資源になっていたのではないかと推定される。下顎骨を除いては断片的な骨となり、その部位を明らかにすることが難しかった。オオコウモリの遺骸は沖縄本島においても遺跡から発見されてきているので、石器時代との関わりも次第に明らかになるであろう。

クジラ類

断片的な骨を得ているのみである。

ネズミ類

これについては精査するまでに至っていない。クマネズミ属のものと思われる。

ジュゴン

椎体と肋骨を主に出土したが、その総量は断片的なものを加えても多いものではなかった。

肢骨による個体数の確認も現在のところできなかった。肋骨は厚味のあるものが大部分で成獣のものであろう。

第59表　ジュゴン・クジラ出土状況

調査区＼部位		ジュゴン 椎体	ジュゴン 肋骨	ジュゴン 破片	ジュゴン 小計	クジラ	ジュゴンorクジラ
カ・キライン	Ⅰ		1		1	2	1
	Ⅱ		2	1	3	3	3
	Ⅲ		3	1	4	2	
	小計		6	2	8	7	4
49・50ライン	Ⅰ		5		5		
	Ⅱ					4	1
	Ⅲ	1			1	3	
	小計	1	5		6	7	1
58・59ライン	Ⅰ					3	
	Ⅱ		3		3	5	2
	Ⅲ			2	2	25	
	Ⅳ					13	
	小計		3	2	5	46	2
コー59グリッド	Ⅰ						
	Ⅱ						
	Ⅲ	1	1		2	31	
	Ⅳ					3	
	小計	1	1		2	34	
不明			1		1		1
合計		2	16	4	22	94	8

第60表　ネズミ出土状況

地区	層序	R L 不	頭蓋骨	下顎骨	脊椎骨	肋骨	肩甲骨 P Ⓢ d	上腕骨 P Ⓢ d	尺骨 P Ⓢ d	橈骨 P Ⓢ d	中手骨 P Ⓢ d	寛骨 上臼下	大腿骨 P Ⓢ d	腿骨 P Ⓢ d	脛骨 P Ⓢ d	踵骨	距骨	中足骨(手) P Ⓢ d	指骨 基節骨	指骨 中節骨	指骨 末節骨	破片	合計
カライン	II	R												1									
		L										1											2
		不																					
	III	R												1									
		L						1															2
		不																					
	小計	R												2									
		L						1				1											4
		不																					
49・50ライン	I	R											1										
		L																					1
		不																					
	II	R											2										
		L																					2
		不																					
	III	R											1										
		L						1															2
		不																					
	小計	R											4										
		L						1															5
		不																					
58・59ライン	II	R						1				1	7	2									
		L										1	2	2									16
		不																					
	III	R	2										4										
		L						1					6	2									15
		不																					
	IV	R										1	1										
		L										1	1	2									6
		不																					
	小計	R	2					1				2	12	2									
		L						1				2	9	6									37
		不																					
	III	R						1					1										
		L												1									3
		不																					
合計		R	2					2				2	17	4									
		L						3				3	9										49
		不												7									

第61表　イルカ出土一覧

グリッド	層位	部位	個数	備考
58・59ライン	II 層	不明	2	
〃	III 層	頸椎	1	
〃	〃	不明	2	
合〃計			5	

第62表　ヒト出土一覧

グリッド	層位	部位	個数	備考
58・59ライン	II 層	耳骨	1	
〃	III 層	乳歯	1	
コ―59	II 層	不明	1	
合計			3	

イノシシ

多数の歯牙・骨格各部位が出土した。それには全身の骨格が認められるので、特定部位だけが運ばれてくるということはなかったと思われる。もっとも、部位により保存の条件、骨の破損度が違うために骨の残存する状況は骨により違っている。そうした様相は別表に示した数値によってよくみることができる。

頭蓋：完存するものは無く、すべて打ち割られた状態のものであった。頭蓋部は破損度が最も高く、左右を区別できる標本は少かったが、側頭骨は骨質の堅牢なことから保存がよく、出土量は多かった。また側頭骨頬骨突起部も破損度は高いものの、左右認定を可能にする標本が多かった。それに対して、後頭顆のように、保存の高いと思われる標本でも出土数は少なかった。やはりこわされる率が高かったからであろう。それにしても、推定個体数よりも頭蓋の保存度は、はるかに低いので、破損率の高い部位であったことがわかる。

椎骨：環椎は完存する標本2、右24、左28。軸椎は完存3、右8、左18が総数である。頸部諸椎骨の保存度は低い。

肋骨：多くの骨片が出土している。ただし、全破片数を含めている。肋骨は小さくわれ、原形を保つ標本はなかった。

肩甲骨：肩甲骨の関節窩部分の保存は、上腕骨近位部の保存とほぼ似た数であるので、肩甲骨と上腕骨が結合した状態で当初は解体されている可能性がある。

上腕骨：遠・近位両端部分を除いて、破損度は高い。しかし、堅牢な遠位部分が少ないということは、骨の持ち運ばれていることも考えねばならないであろう。

橈骨：近・遠位両端はほぼ同程度に残る。中間部は破損標本では左右認定が難しくなる。

尺骨：近・遠位骨端部分が少なく、特に近位部が少なくなっている傾向がみられる。近位部が骨器などの使用のために抜かれている可能性があろう。ただ、中間部分の保存数が多いので、骨器としての利用は、滑車切痕部分の直下あたりが主であったと思われる。

寛骨：ほとんど寛骨臼部がのこされるだけで、その上下は破損度が高い。仙骨などの認められることが極めて稀れであることと符合するのであろう。細かく割って肉質部分その他を食べているのであろう。

大腿骨：骨幹部の破損率が高い。骨髄が多く、また摘出し易い骨でもあるからであろう。しかし、そのために近位部の損われることが多い。

脛骨：破損度は高いが、近・遠位、骨幹部がよく残される骨である。特に遠位端がよくのこされ、上腕骨とほぼ同程度か、あるいはやや高い場合もある。これは、この骨につづく距・踵骨のあることと関連しよう。膝蓋骨が比較的よくのこされていた。全般に骨の保存の良いことと関連しよう。

第63表　イノシシ出土状況

地区	層序	RL不	頭蓋骨	下顎骨	脊椎骨	肋骨	肩甲骨	上腕骨	尺骨	橈骨	中手骨	寛骨	大腿骨	脛骨	腓骨	踵骨	距骨	中足骨（手）	指骨 基節骨	指骨 中節骨	指骨 末節骨	破片 長管骨	破片 長骨片
							PⓈd	PⓈd	PⓈd	PⓈd	PⓈd	上臼下	PⓈd	PⓈd	PⓈd			PⓈd					
カライン	I	R	2	2				1, 2, 2	6,	2 2	8,	2		3, 3, 2		1, 4	3						
		L	2				6	2, 3	1, 4, 3	1	6,	2	1, 1	5 2	1	6 8	6	3	27	4	9	20	78
		不	27	6	25	34	2	1, 1				1	1 1		3	2		30, 4					
	II	R	5		5		3, 2	1, 4, 7	1, 8, 1	2, 2,	13	1	5, 1, 5	4, 2, 7		11, 6	13						
		L	5		4		7, 1	1, 5, 9	3, 9, 1	9,	11	1,	1, 1, 1	11, 1, 4		1, 3, 8	15	13	56	2	18	61	106
		不	37	26	79	68	1	6				3, 8, 4	15, 1, 15		4	2		98, 6					
	III	R	11	13	3		4, 2, 1	3, 7, 4	8, 1	2, 1,	12	1, 3,	2, 2, 3	8, 1		2, 4, 1	9						
		L	11	9			3, 2, 1	3,12	6,	2, 1, 1	6	1, 4,	3, 2, 1	7, 5	1	1, 5, 8	4	7	30		4	80	83
		不	41	15	53	54	2,	10				1, 3, 1	3, 9		7,	1		32, 2					
	不明	R						5,	1,														
		L																					1
		不																1					
	小計	R	18	15	8		7, 4, 1	5,18,13	2, 22, 2	6, 5	33	1, 5, 1	7, 3, 8	15, 5, 10		2, 16,11	25						
		L	18	9	4		16, 2, 2	1,10,24	4, 19, 4	12, 1, 1	23	2, 6,	4, 4, 3	23, 1, 11	2	8, 8,24	25	23	113	6	31	161	268
		不	105	47	157	156	5,	1,17				4, 12, 5	18, 1, 25		14,	5,		161, 12					
49・50ライン	I	R	18		4		4, 8,	6, 6	1, 13, 1	4, 2, 1	13	5	1, 1, 4	8, 2, 2		1, 7,13	8						
		L	4	4	7		9, 2, 1	1, 6, 6	1, 19, 1	2, 1, 2	18	1, 4	2, 2, 5	6, 2, 7		3, 1, 9	16	12	71	2	11	67	79
		不	39	19	114	112	1	1,14		2		1, 6, 3	28, 2, 1	1	3,	9		70, 6					
	II	R	3	3	1		4,	1, 8, 3	9, 3	1, 1,	9	1,	2, 2	3, 2, 3	1	2, 1, 3	8						
		L	5		4		5,	1, 3, 5	8,	1 3	4	5,	4, 3	4, 2		1, 1, 3	11	4	39		5	60	17
		不	25	12	121	103		3		2,		3,	5, 23	2,	1,	2,		32					
	III	R	9	5	2		2,	5, 4, 7	2, 16,	6, 5, 5	6		1 1	6, 3, 6		1, 5, 6	5						
		L	7	4	2		3,	2, 5, 2	13, 2	3, 1	10	6,	2, 5, 6	18, 5	1,	2, 1,10	7	5	32	1	7	43	116
		不	45	17	115	119		1, 2		4,		4, 1	-9, 1, 5	1,	5,			44, 5					
	不明	R																					
		L																					
		不			1																		
	小計	R	30	8	7		10, 8,	6,18,16	3, 38, 4	11, 7, 7	28	6,	2, 3, 7	17, 7, 11	1	4, 13,22	21,						
		L	16	8	13		17, 2, 1	4,14,13	1, 40, 3	6, 1, 6	32	1, 15,	4,11, 14	28, 2, 14	1, 2	6, 3,22	34	21,	142	3	23	170	212
		不	109	48	351	334	1,	2,19		8,		1, 13, 4	42, 3, 29	4,	23,	11		146, 11					
58・59ライン	I	R	8		5		4, 1, 1	6, 5, 4	16, 3	6, 5,	10	5,	3, 2	9, 10	1, 1,	3, 12, 6	16						
		L	9	6	9		8, 2, 1	18, 6, 8	1, 13, 3	5, 3, 4	22	1, 4,	3, 3, 2	8, 4, 7	1,	2, 9, 8	13	12	60		6	102	40
		不	17	11	94	112		2, 6		1,		2, 6, 1	21, 3, 14		6	1,		68, 6					
	II	R	65	14	11		31, 9, 2	30,45,38	3,100,11	27, 5,29	66	5, 20,	23,28, 50	82,13, 55	2, 4	3, 52,16	54						
		L	56	15	15		22, 7, 5	12,31,50	16, 79,19	29,10,24	69	12, 32, 1	21,26, 46	82, 6, 65	1, 5	3, 28,50	59	31	193	14	33	356	845
		不	138	88	509	479	11	4, 2,32	2,	3,		12, 23,12	77,12, 52	12,	33,	16		376, 40					
	III	R	80	36	26		30,15, 6	40,43,57	1,112,15	34, 5,30	81	41	32,21, 63	83,30, 55	5, 10	1, 65,17	58						
		L	89	28	42		38,11, 9	21,38,29	18, 78,13	24,14,21	80	82	22,29, 73	84, 6, 60	6, 7	2, 41,34	70	26,	213	23	32	220	2,056
		不	320	168	754	753	6	3, 2,33	2,	3,		19, 20,17	67,11, 17	20	54,	13		332, 62					
	IV	R						2,						1,									
		L	1	2			1						1	1					1	1			9
		不	8			2												1					
	不明	R																					
		L												1 1								2	7
		不			1							1											
	小計	R	153	50	42		65,25, 9	76,95,99	4,228,29	67,10,64	157	5, 66	58,49,115	175,43,120	8, 15	7,129,39	128						
		L	155	51	66		68,20,16	51,75,87	35,170,35	58,27,49	171	13,118, 1	47,58,121	175,16,134	7, 13	7, 78,92	142	69	467	38	71	680	2,957
		不	483	267	1,358	1,346	17,	7, 6,71	4,	7,		34, 49,30	165,26, 83	32,	93,	30,		777,108					
コ 59	I	R	1	5			1, 1,	3, 12, 3	9,	1, 5	7	2,	1, 2, 3	2, 1, 5		1, 7, 7	3						
		L	2	1			3,	1, 7, 2	3,	3,	7		1, 3, 2	7, 1, 1		1, 4	5	4	10	1	7	28	59
		不	5	4	28	82	1,	1, 6				1	3, 1, 3	2,				27, 2					
	II	R			4		5,	1, 5	3,	1, 2, 5	2	1,	2, 3	1, 2, 1		1, 3							
		L	3		2		1,	1, 1, 3	6, 1	2, 3	3	3,	1, 1	5,		1	2	3	21		4	12	114
		不	10	15	22	382		2				1,	1, 1, 1	3,	1		-	13					
	III	R	48	13	16		21, 4, 7	15, 24, 24	45,14	15, 2,10	29	12, 17,	10, 7, 38	18, 8, 24	2, 2	2, 28, 10	38						
		L	25	29	15		1, 6, 4	6, 24, 23	7, 19, 8	10, 17,	27	13, 43	16, 19, 45	29, 5, 25	1, 2	1, 14, 15	31	25	80	25	28	61	1,711
		不	232	158	614	880	3,	2, 1	4			9, 3,12	30, 4, 6	19	21,	4		155, 37					
	IV	R	4	1				1,					2, 1	1, 1		1							
		L	4	4				1, 1			1		1,				1		4			5	14
		不	12		10	7	5						2,		1,			9					
	不明	R												1									
		L																					
		不				2		13					1					1					
	小計	R	53	19	20		27, 5, 7	19, 42, 27	57,14	16, 5,20	38	12, 20	15, 9, 45	22, 12, 31	2 2	3, 36, 21	41						
		L	34	34	17		5, 6, 4	9, 32, 29	7, 28, 9	15, 20	38	13, 46	17, 24, 48	41, 6, 26	1 2	1, 15, 20	39	32	115	26	39	106	1,898
		不	259	177	674	1,353	9	3, 1, 21	4			10, 3,13	36, 6, 11	24	23	4		204, 40					

ケ74	II	R					1.											1.							
		L					1		1.									1.						1	12
		不	4					2																	
表採		R																	1						
		L																							
		不																							
不	I	R																							
		L																							
		不																		1					
	II	R							1.		1	1	1.		3.				1						
		L						1. 1						2	3.				.		1				29
		不	7		1															1					
	III	R															1.								
		L															1. 1.							1	
		不															1			1					
明	不明	R	2	2			2.	3. 1	6.	1. 2.	1			3. 3	3. 1			1.	5						
		L	1	2	2		1.	1. 2	2. 3.	3.	1	2.		1. 3	9. 2			2	7		3		39	57	
		不	46	12	6	8	1.	3				2.	1		1.					15. 1					
	小	R	2	2			2.	3. 1	1. 6	1. 2. 1	2.	1		3. 3	6. 1		1. 2.		6						
		L	1	2	2		1.	2. 3	2. 3	3	1.	2		1. 3. 2	12. 2		1	3	7		3	1	40	86	
		計	53	12	7	8	1	3				2	1		1.					18. 1					
合		R	256	94	77		112. 42. 17	106.176.156	10.351. 49	101. 24. 97	258	18. 98. 1		82. 67.178	235. 67.173	10. 18	17.197. 93		221						
		L	224	104	102		107. 30. 24	66.133.156	49.261. 51	94. 29. 76	265	29.187. 1		73.100.188	279. 25.187	9. 19	23.105.161		247	145	840	74	164	1.158	5.433
計		不	1.013	551	2.547	3.197	33	10. 10.133	8.	15.		49. 79. 52		262. 36.148	61.173	153.	50.			1306. 172					

凡　例：　P→近位端　Ⓢ→骨体　d→遠位端

距・踵骨：最もよく残されていた骨で、最少個体数をほぼ推定することができよう。

中手・中足骨：ほぼ同程度に残されていたが、中手骨の方が保存状態が良いという場合が幾つかの標本で認められた。しかし近位端関節の保存あるいは部位認定の難易度によることも考えられる。

指趾骨：保存率は高くない。特に末節骨などは少ないが、特別の加工を考えるよりも、見逃されていることが多いのではなかろうか。

この他に手根・足根部のそれぞれの骨があったが、それらは数の上で、上記の骨を上廻るものはなかった。

以上の四肢骨から、本遺跡において今回発掘されたイノシシの最少個体数は踵骨で推定されるように283個体という数になった。この推定個体数はこれまでの調査例からすれば、野国貝塚のような特殊な集中例を除いては、それに次ぐ出土量であり、全体の発掘総量を考えても、かなり埋存量の高いものであることが推定される。

歯牙・顎骨：表示された標本はほぼ骨体をのこすものであって、この他に部分的にのこる標本は多かった。しかし下顎骨自体の破損度が高く、下顎角部分など破片で出土することが多かった。それらは小破片のため左右の認定が困難であった。

歯牙

多くの歯牙が出土している。そのうち、犬歯については性別を、乳臼歯、後臼歯についてはその咬耗の状況を記録し表化した。

犬歯から判定された雌雄別は、成獣で雄58、雌34、計92個体が最少個体数である。この数は右M_2が115個あって、臼歯からの最少個体数となるが、それに近い。犬歯による雌雄差は、雄犬歯が加工されていることを考えるとさらに大きくなろう。

第64表　イノシシ歯牙出土状況

調査区	部位	上顎骨 R $I^{1\,2\,3}$ C $P^{1\,2\,3\,4}$ $M^{1\,2\,3}$ $i^{1\,2\,3}$ c $m^{2\,3\,4}$	上顎骨 L $I^{1\,2\,3}$ C $P^{1\,2\,3\,4}$ $M^{1\,2\,3}$ $i^{1\,2\,3}$ c $m^{2\,3\,4}$	下顎骨 R $I_{1\,2\,3}$ C $P_{1\,2\,3\,4}$ $M_{1\,2\,3}$ $i_{1\,2\,3}$ c $m_{2\,3\,4}$	下顎骨 L $I_{1\,2\,3}$ C $P_{1\,2\,3\,4}$ $M_{1\,2\,3}$ $i_{1\,2\,3}$ c $m_{2\,3\,4}$	歯骨 切歯骨 R L 不	歯骨 犬歯 fr	歯骨 歯 fr	連合部	破片合計
カライン	Ⅰ	2 1 1 2♀ RL 1♂ 不明 6 2	4 2♀ 1	1 1 1 2♂ 1	RL 不明 1 1 1	1 20				52
	Ⅱ	11 1 2♀ 1♂ 2 2 10 5	9 1♀ 1 1 3 4	2♂ 2 6 2	3 2♀ 1♂ RL 不明 1 6 5 2	19	1♂	1 22	1♀	129
	Ⅲ	5 1 2 5 7 3	4 1 3 1 5	2♂ 1 1 3 3 1	1♀ 2♂ 1 7 4 4	23		3 19		112
	小計	18 2 1 4♀ 2♂ 1 2 2 7 23 10	17 3♀ 2 4 5 9	1 1 1 6♂ 1 1 6 9 3	1 1 4 3♀ 3♂ 1 1 13 9 6	42	1♂	5 61	1♀	293
49・50ライン	Ⅰ	5 3 4♀ 1 1 6 6	4 1 2♂ RL 不明 2 3 1	3♀ 3♂ 2 8 3	3 5♂ 3 5 4	28		5 34		145
	Ⅱ	1 1 2	4 1♀ 2 1 4	1♀ 1♂ 5	1 2♀ RL 不明 3 1 2	15		4 6		57
	Ⅲ	6 3♀ 1 4 4 5	4 3♀ 1 3 2 6	3♀ 5♂ 1 3 7 3	2 5 RL 不明 5♂ 2 4 5 1	1 19		2 25		135
	不明		1 2							3
	小計	11 4 ♀7 1 1 5 11 13	12 1 4♀ 2♂ 1 1 7 6 13	7♀ 9♂ 1 5 20 6	3 2♀ 10♂ 8 2 10 11 7	1 62		11 65		340
58・59ライン	Ⅰ	5 1 2 2 2	2 1♂ 1 1 1 3 4 1	4♂ 3 2	1♀ 3♂ 2 1 2 3 4 5	1 9		2 17		85
	Ⅱ	21 4 6♀ 2♂ 1 2 4 11 11 6	13 3 6♀ 3♂ 7 17 6 5	10♀ 13♂ 1 3 3 3 8 18 19 15	5 7♀ RL 14♂ 不明 7 2 3 3 22 15 11	4 3 75	4♂	70	3♀	469
	Ⅲ	26 1 7♀ 2♂ 1 2 18 20 7	1 4 5♀ 3♂ 4 24 20	5♀ 15♂ 12 4 4 8 21 40 27	11 10♀ RL 不明 13♂ 7 2 3 37 30 15	4 8 127	12♂	30 98	1♀	689
	Ⅳ	1♀ 2	1 1 7 7 6	1 3	1♂ 1 1 1 2 1	3		18		57
	小計	52 5 14♀ 4♂ 2 3 6 31 33 17	16 7 11♀ 7♂ 1 13 1 1 51 37 12	15♀ 32♂ 1 15 7 7 17 39 63 47	16 18♀ 30♂ 2 1 16 5 7 4 64 50 31	8 12 214	16♂	32 203	4♀	1,300
コ	Ⅰ	1	1 1♂ 1	1♂ 2 4 4 1	1 RL 不明 2♂ 1	3		3 6		32
	Ⅱ	1♀ 3 4	1♀	1♂	1♂ 4	10		1 3		29
	Ⅲ	6 2 2♀ 1♂ 1 1 2 2 12 17 8	15 4♀ 3♂ 3 1 1 6 11 2	6♀ 5♂ 6 3 4 7 8 15 7	9 3♀ RL 9♂ 不明 10 4 4 18 9 9	2 3 52	5♂	15 40		353
59	Ⅳ	5 1 1♀ 1♂ 1 3 3	5 1 1♀ 1 1	2♂ 2 1	1 RL 不明 2♂ 2 1	7	1♂	1 6		50
	小計	11 3 4♀ 2♂ 1 1 2 2 16 25 11	21 1 6♀ 4♂ 4 1 1 7 11 3	6♀ 8♂ 6 3 4 9 12 21 9	11 3♀ 14♂ 12 4 4 1 19 13 9	2 3 72	6♂	20 55		464
不明		1 1♂ 1	1	2♂ 1 3 5 2	3 1 2	1 4				28
最少個体数		93 14 1 38 1 4 8 11 59 93 51	67 9 37 1 1 20 2 2 69 59 37	1 1 1 86 1 21 10 12 29 65 11 8 67	1 1 34 91 2 1 31 9 12 5 109 84 55	11 20 390	23	68 384	5	2,425 118

注：I→切歯　C→犬歯　dm→乳歯　P→前臼歯　M→後臼歯

歯牙にみる年令階層

M^1・M_1の咬耗d、e段階まではdm_4M_1〈M_2〉（〈　〉内は未萌出歯）とみられる。その数は左M^2で48になる。〈M_3〉の段階は、M^2、M_2のc・d・e・f段階のものとみられ、LM_2のd・e・f各歯の計64、RM^2C段階14の合計78（M_2が萌出してからM^3・M_3の萌出しはじめるまでの歯を扱う）。

M^3M_3の完全萌出段階の歯は、M^3・M_3の歯の咬耗段階でd～とするとRM^3＝RM_3で22個になる。

これを次に表示する。

第65表　年令段階別のイノシシ推定個体数

定式・年令段階 ＼ 遺跡名		下田原		西広*	
dm_4〈M_1〉	0～0.5才未満	0**		11	8.2%
dm_4M_1〈M_2〉	0.5～1.0才未満	48	32.4	39	30.3
M_1・M_2〈M_3〉	1.5～2.0才まで	78	52.7	70	52.7
M_1・M_2・M_3	2.0才以上	22	14.9	13	9.8

*：千葉県市原市西広貝塚（金子・牛沢（1977）、金子・丹羽（1982）

**：中国浙江省河姆渡遺跡〈初期農耕文化〉では、この段階が2％という報告である。

下田原における動物遺存体の特徴

下田原貝塚の調査はこれまでに幾度か行われ、その都度かなり多くの動物骨が出土し、概要が知られてきたが、今回は調査面積も広く、これまでに比べてさらに多くの動物骨が採集された。これによって、下田原貝塚の動物相をさらに良く知ることができよう。

魚骨については、ブダイ科を主体とする特徴が強く現われていた。島嶼の貝塚としては当然の特徴なのであろう。その他のものも大部分は礁内あるいは礁縁で採捕されるもので、外海魚とみることはほとんどなかった。

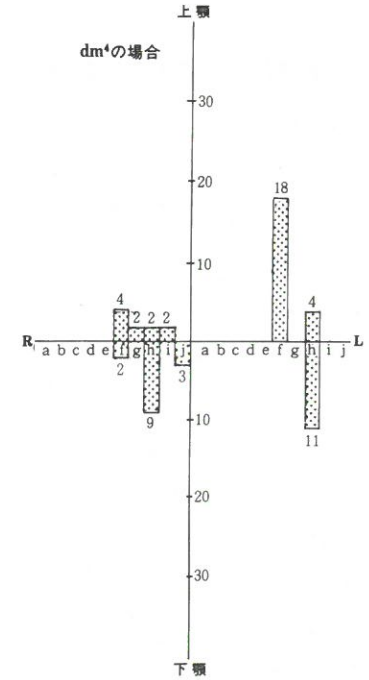
爬虫類のウミガメ類の骨は断片的であったが、多くを出土していたように思われる。しかし、これも意図的なウミガメ猟といわれる程の骨の総量ではなかったようである。

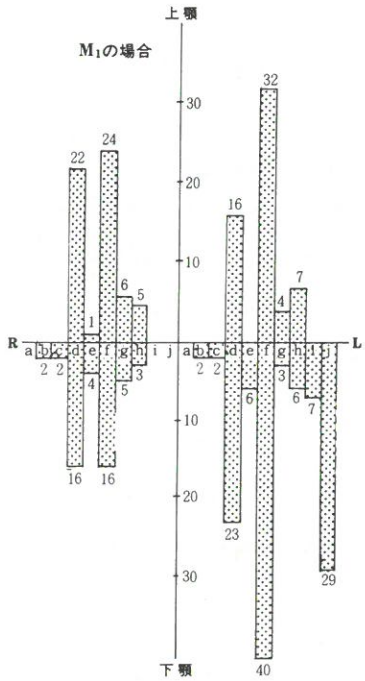
鳥類はアホウドリの骨を採集している。アホウドリよりも小さく、コアホウドリ、クロアシアホウドリと思われる。カラス属については、それ以上の同定をまだ行なっていない。

哺乳類では、オオコウモリの骨の出土の目立ったことがあげられる。今後いろいろな意味で注目してよいのであろう。ジュゴンの骨は少なかった。

リュウキュウイノシシの骨は多量に出土した。従来も、本貝塚の調査によって多くの歯牙、骨格を得ているので、ここには、かなりの量の骨が埋存していたのであろう。肢骨に比べると歯牙の保存はその半数に満たないという数である。本州の晩期貝塚で多くの歯牙・肢骨を出土する場合では、肢骨よりもむしろ歯牙の方が多いと思われる。下田原貝塚の場合、何故歯牙の

第66表　イノシシ歯咬耗度分布





歯の摩耗状況

〈　〉：未萌出
＋：エナメル質咬耗
＋＋：小窩独立
＋＋＋：同連絡
⊕：全面窩

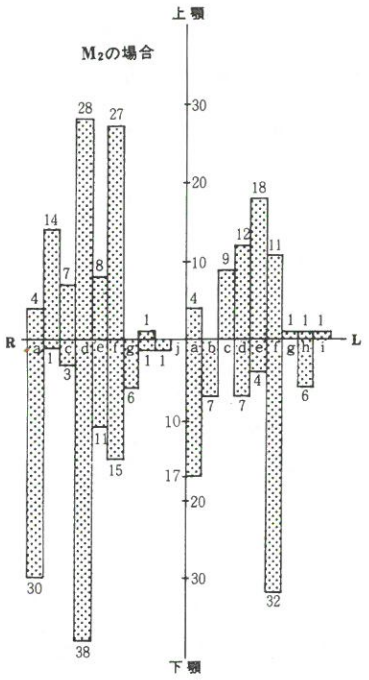
dm₄、M₁、M₁の場合

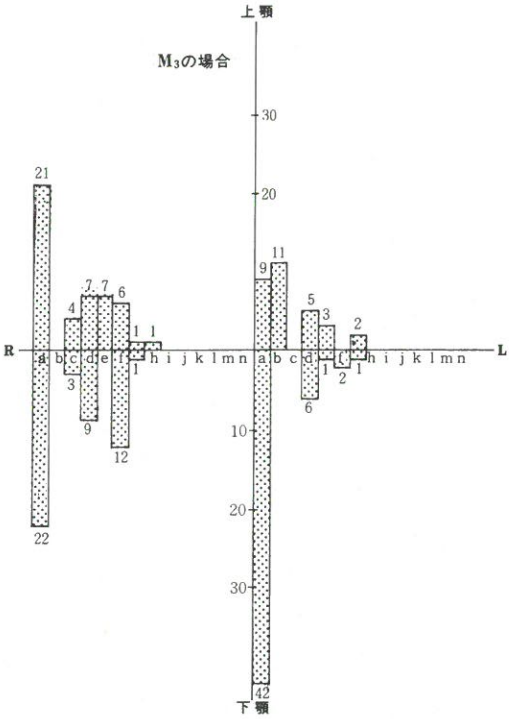
a：〈　〉
b：－、－
c：＋、－
d：＋、＋
e：＋＋、＋
f：＋＋、＋＋
g：＋＋＋、＋＋
h：＋＋＋、＋＋＋
i：⊕、＋＋＋
j：⊕、⊕

M₃の場合

a：〈　〉
b：－、－、－
c：＋、－、－
d：＋、＋、－
e：＋、＋、＋
f：＋＋、＋、＋
g：＋＋、＋＋、＋
h：＋＋、＋＋、＋＋
i：＋＋＋、＋＋、＋＋
j：＋＋＋、＋＋＋、＋＋
k：＋＋＋、＋＋＋、＋＋＋
l：⊕、＋＋＋、＋＋＋
m：⊕、⊕、＋＋＋
n：⊕、⊕、⊕

1. 全グリッドの総計を行なった。
2. 歯の摩耗段階の明瞭なもののみについて行なった。





数がこれ程少ないのかということが問題になるであろう。従って、歯牙よりみたこの貝塚におけるイノシシの性、年令構成の問題については、なお、今後検討の余地のあることを付け加えておかねばならないであろう。

それを考慮した上で、本貝塚のイノシシは、M_1が未萌出という0.5才段階の個体はなく、M_1が萌出してから、つまり0.5才以上1.5才までの個体が32.4%、次にM_3が未萌出もしくは萌出しはじめた段階2.5才までの個体が52.7%、そしてそれ以上が14.9%になる。これを千葉県西広貝塚の例と比較してみると、〈M_1〉段階のが0であることを除くとよく似た数値になっている。〈M_1〉が0であるのは、おそらく幼獣であるために捕獲されなかったのであろう。そして1.5才～2.5才の個体は生存数においても多く、もっとも狙われたのであろう。より大形の個体が狙われているのは当然であろう。若し、イノシシの飼育といった問題があるとすれば、1.5才未満の個体が最も多くなるのではないかと思われる。

遺存個体の埋存率であるが、発掘グリッドの総面積及び平均的な包含層の厚さ40cmとして、発掘体積は285㎥、イノシシの最少個体数283、これから1㎥あたりの分布密度は0.992である。この密度を本州の関東地方の貝塚比較してみるとすると、千葉県西広貝塚の後期における分布密度（イノシシ＝0.29、シカ＝0.51）よりもはるかに高い。同じ貝塚の晩期（安行Ⅲb～c期）ではイノシシ：2.01、シカ：1.09であり、シカの出土状況に似ている。なお沖縄本島シヌグ堂のイノシシの分布密度は概算で0.46であり、下田原に及ばない。下田原貝塚での特殊な条件を考えなくてはならないのではないかと思う。

狩猟の問題と関連して、イヌの問題がある。下田原貝塚では、イヌの遺骸がこれまでの調査でも出土していないらしい。野国貝塚での大量のイノシシの出土の際にもイヌの報告はない。イヌを使わないイノシシ猟があったわけであるが、これについても今後の課題となろう。

（早稲田大学考古学研究室）

第5章　総　　括

3次にわたる発掘調査の結果、県指定史跡下田原貝塚は、指定面積の約4倍の範囲に広がる広大な遺跡であることが確認された。検出された層序、遺構、遺物などの主なものをまとめて総括とする。

下田原貝塚出土の木炭やシャコガイを使って、放射性炭素による年代測定をした結果は次のとおりである。(注1)

シー58　第Ⅲ層（貝）　3660±70ｙＢ・Ｐ・(3550±65ｙＢ・Ｐ)

シー58　第Ⅲ層（木炭）　3740±85ｙＢ・Ｐ・(3630±80ｙＢ・Ｐ)

この年代は、大田原遺跡(注2)の放射性炭素による年代とほぼ近い年代である。

層序では、ケー76グリッドの層序が注目される。下田原貝塚が第Ⅳ層で、間層（第Ⅲ層）を挟んで大泊浜貝塚（第Ⅱ層）が堆積している。この層序により、下田原式土器をもつ下田原貝塚が、無土器の大泊浜貝塚より古いことが確認された。しかも間層を挟んでいることで、時間差もあることが明確となった。

遺構では、柱穴が多く検出されたが、方形や円形などの規格性のあるプランは確認できなかった。思ったより簡素な建物であった可能性が提起された。また、炉跡や柱穴などが平地面にあり、竪穴が見られないことから、平地式の建物であったと考えられる。なお、遺跡の北側を走る溝状遺構は、排水溝としての機能は十分果たし得ると考えられるが、排水溝であるという断定はむずかしく、今後の資料をまちたい。

遺物では、大田原遺跡(注2)や仲間第二貝塚(注3)で、ほとんど検出されていない骨製品、貝製品が豊富であることが注目される。下田原期の文化は土器、石器だけの文化ではなく、かなり進んだ骨器、貝器の文化でもあったことが確認された。また、石器でも、大田原遺跡や仲間第二貝塚では石斧、敲石、磨石などがほとんどであるのに対して、本遺跡では、小型の尖頭器類がかなり検出されていることも注目される。このように、下田原期の遺跡間でも文化様相にいくらかの差異があり、その解明は今後の大きな課題である。

下田原期を代表する遺物は土器である。下田原式土器は、沖縄本島や九州など北の文化には見られない特異な土器である。器壁が部厚く、把手付きで内彎する浅鉢は、北の土器の流れではなく、南の土器の流れと考えられる。その祖型を見い出すことが最大の課題である。

食料残滓でイノシシが大量に出土しているのが注目される。金子氏は1.5才以上が67.6％を占めていることから、「若し、イノシシの飼育という問題があったとすれば、1.5才未満の個体が最も多くなるのではないかと思われる」と所見を述べている。イノシシをどこで捕獲したのだろうか。現在、波照間島には棲息していないが、25km北の西表島には多く棲息している。石器の材料や土器の素地は西表産と考えられることから、それらと一緒に西表から運び込まれた

のだろうか。興味のある問題であるが、結論は今後の課題としたい。

注

1　社団法人日本アイソトープ協会で測定された。1985年12月10日

2　「石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告」　沖縄県教育委員会　1980

3　滝口　宏編「沖縄八重山」　校倉書房　1960

III　大泊浜貝塚

第1章　はじめに

1983年～1985年に、下田原地区土地改良に伴う遺跡の範囲確認調査を実施した。本貝塚の範囲確認調査は1983年にほぼ完了したが、隣接する下田原貝塚との関係を知るために、1985年にG－35グリッドの試掘調査を追加した。本報告はそれらの成果を収録したものである。

第2章　遺跡の位置と環境

本貝塚は、沖縄県八重山郡竹富町大字波照間小字下田原の砂丘に所在する。砂丘の北側砂浜は大泊浜（おおどまりはま）（方言でブドゥマイパマ）と呼ばれており、遺跡名もそれに因んだものである。大泊浜の砂丘は、波照間島北海岸の西端部にあたる。標高約８ｍの砂丘で、内湾する海岸の湾内を埋めた状態で形成されており、奥行約60m、湾径約100ｍの半円形状の砂丘である。

下田原貝塚のケ－76グリッドの層序で明らかにされたように、この砂丘が形成されるのは、西側の下田原貝塚が形成された後であり、したがって、下田原貝塚が形成された頃はこの砂丘はなかったことになる。現在、下田原貝塚と大泊浜貝塚は浅い谷間を挟んで立地しているように見えるが、浅い谷間の地中にも大泊浜貝塚の層が堆積しており、貝塚形成の初期は下田原貝塚の高い所（標高約8.5ｍ）より３～４ｍ低かったと考えられる。それが、砂丘形成と貝塚形成の繰り返しによって、現在では下田原貝塚（標高約8.5ｍ）とほぼ同じ高さになっている。

本貝塚の南約50mの琉球石灰岩丘陵上には下田原城跡（標高約26m）がある。下田原城跡に立って北側を眺望すると、眼下に大泊浜砂丘(貝塚）があり、その北側の海には発達したリーフが見られる。海の向うには西表島や仲の神島(国指定天然記念物「仲の神島海鳥繁殖地」）がはっきりと見える。特に西表島南岸の鹿川、南風見などの砂丘がよく見える。直線距離で約25kmであり、貝塚人が石器の材料やイノシシなどを西表に求めたとしても理解できる距離である。

下田原城跡の北側崖下には湧水があり、その小さな流れが小川となって、下田原貝塚と大泊浜貝塚の間の浅い谷間を通って海へ流れている。海は珊瑚礁の発達したやや遠浅な海で、小潮の干潮時でも約200ｍ先のリーフまで歩いて渡れる。リーフの上やその内・外には今でも貝類が豊富である。発掘期間中、昼食時間に干潮があたると貝を採りにリーフへ渡ったが、チョウセンサザエ、ヒメジャコ、シラナミ、シャゴウ、サラサバティ、ギンタカハマ、スイジガイ、クモガイ、ホラガイ、マガキガイ、オニノツノガイ、コオニコブシなどが採れ、我々の食卓を

にぎわしたものである。このように貝の豊富を海を面前にしている本貝塚から、夥しい貝殻が検出されるのは容易に理解できる。

第3章　層　　序

本貝塚は砂丘貝塚であり、砂丘形成と貝塚形成が何度もくりかえされている。そのために、G－22グリッドでは厚さ約3.4mの砂丘に19枚の層が確認された。遺跡全体が同じ状況ではなく、地区により層序の変化が見られるので、第I地区（D－22～D－27グリッド）、第II地区（E・F・G－22グリッド）、第III地区（G－35グリッド）の層序を述べる。

(1)　第I地区

この地区はDラインで、D－22～D－27のグリッドを発掘した。D－23～26グリッドは4m×4mであるが、D－22は第10層最下部の礫床住居跡の広がりを見るために東へ2m広げたグリッドであり、D－27は第4層最上面の埋葬人骨の全体を知るために西へ2m広げたグリッドである。よって、この2つのグリッドは2m×4mである。Dラインのグリッドすべてにおいて発掘途中で埋葬人骨、炉跡、礫床住居跡などの遺構にあたり、第10層まで掘り下げたグリッド（D－22・23・25の北半分）が最も深く掘ったグリッドである。よって、D－22・23グリッドの層序でDラインを代表させる。

D－22・23グリッドの北壁、東壁断面図を第10図に示した。

第1層　暗褐色砂層で、層厚が20～25cm。耕作で攪乱されている無遺物層。

第2層　黄褐色混土砂層で、層厚が10～20cm。土が僅かに混入してやや硬い無遺物砂層。

第3層　暗褐色砂層で、層厚が10～20cm。無遺物砂層である。埋葬人骨はこの層に対応する。

第4層　黒褐色混貝砂層で、層厚が10～30cm。本遺跡における最も新しい貝塚である。この層からは夥しい貝殻と一緒にイノシシの骨も多く検出された。人工遺物では、薄手の玉縁白磁碗、薄手の端反り白磁碗、滑石製石鍋、褐釉陶器壺、須恵器壺、石斧などが検出された。この層において、無土器遺跡の下限が遺物によって解明された。

第5層　淡黒褐色砂層で、層厚3～10cm。無遺物層であるが、褐釉陶器壺片が1個検出された。第4層からの落ち込みと考えられる。

第6層　黒褐色混貝砂層で、層厚が20～35cm。遺物包含層で、特に北東隅ではシャコガイ、サラサバティなどの大きめの貝殻がびっしり堆積しており、混砂貝層と呼べる状況であった。貝殻やイノシシの骨は多いが、人工遺物は、石斧、ヤコウガイ製貝匙などが数点検出されただけである。

第7層　淡黒褐色砂層で、層厚が5～10cm。無遺物砂層。

第8層　白砂層で、層厚が10～30cm。さらさらした白砂の無遺物層。さらさら崩れて、断面実測や撮影で苦労した。

第9図　大泊浜貝塚グリッド設定図（S＝1／500）

第９層　淡黒褐色砂層で、層厚が５～10cm。貝殻やイノシシの骨などは見られるが少ない。

第10層　黒褐色混貝砂層で、層厚が10～20cm。貝殻や獣魚骨の多い貝塚層である。この層の最下部（第11層直上）には礫床住居跡が検出されたので、発掘は礫床面で止めた。その下は第Ⅱ地区のＧ－22グリッドの層序とほぼ同じと考えられるので、Ｇ－22の層序を参照してほしい。

(2)　第Ⅱ地区

Ｅ－22、Ｆ－22、Ｇ－22の３グリッド（いずれも２ｍ×２ｍ）を設けて試掘したが、Ｅ－22とＦ－22は第４層直上で止めたので、ここではＧ－22の層序を見ていく。Ｇ－22の層序は21層（第５・７層はＤ－22・23では認められたが、Ｇ－22までは延びていない。しかしＤ－22・23とＧ－22の層序を対応させるために第５・７層もかぞえて21層。実際にはＧ－22の層は19枚）で、地表面から約3.4ｍまで確認した。17層以下は50cm×30cmの試掘。

Ｇ－22グリッドの北壁・東壁断面図は第10図のとおりである。

第１層　暗褐色砂層で、層厚が30～35cm。耕作で攪乱されている無遺物砂層。

第２層　黄褐色混土砂層で、層厚が５～10cm。土が僅かに混入してねばりのある無遺物層。

第３層　暗褐色砂層で、層厚が０～５cm。薄い層で、ところどころ切れている無遺物層。

第４層　黒褐色混貝砂層で、層厚が０～30cm。貝殻や獣魚骨が多い貝塚層であるが、南側で切れている。この層は第Ⅰ地区の第４層に対応する層であるが、このグリッドでの層を見ると、さらに南へは延びてないと考えられる。

第５層　なし。第Ⅰ地区の第５層はここまでは延びてないことが、ここで確認された。

第６層　黒褐色混貝砂層で、層厚が０～30cm。貝殻や獣魚骨の多い貝塚層であるが、北西隅では切れている。全面に広がる貝塚ではなく、部分的に切れる貝塚と考えられる。

第７層　なし。第Ⅰ地区の第７層はここまで延びてないことが、ここで確認された。

第８層　白砂層で、層厚が10～30cm。さらさらした白砂の無遺物層。第Ⅰ地区の第８層に対応する特色のある層である。

第９層　淡黒褐色砂層で、層厚が０～15cm。西南隅で切れる。貝殻やイノシシの骨などは見られるが少ない。

第10層　黒褐色混貝砂層で、層厚が０～20cm。この層も西南隅で切れる。貝殻や獣魚骨の多い貝塚層である。この層の最下部が、第Ⅰ地区の礫床住居跡に対応する。

第11層　淡黒褐色砂層で、層厚が５～20cm。第10層に比してリュウキュウザルボウなど小さい貝が目立つ。イノシシの骨は多い。この層には木炭や灰が多く、最下部（第12層直上）で炉跡が検出された。

第12層　暗灰色混砂利砂層で、層厚が15～20cm。枝サンゴの折れた砂利が多く混入している。木炭やイノシシの骨などが目立つ。貝殻は少ない。小型の片刃石斧やイモガイ製の円盤状有孔製品などが検出された遺物包含層である。

第13層　暗褐色混砂砂利層で、層厚が10～15cm。枝サンゴの折れた砂利がびっしり堆積している砂利層である。イノシシの骨はかなり検出されたが、貝殻はほとんど見えない。木炭が少し混入している。

第14層　暗黄褐色砂層で、層厚が５～10cm。円礫やテーブルサンゴ（ミドリイシ科）片などが混入している層で、イノシシの骨が少し見られる。

第15層　黄褐色砂層で、層厚が５～10cm。無遺物砂層である。

第16層　暗褐色砂層で、層厚が５～10cm。無遺物砂層である。

第17層　黒褐色砂層で、層厚が20～25cm。円礫やテーブルサンゴ片などが混入している。貝殻、イノシシの骨、木炭などを包含する遺物包含層である。ホラガイの有孔製品が検出された。

第18層　淡黒褐色砂層で、層厚が30～40cm。貝殻、テーブルサンゴ片、木炭などが少量包含している遺物包含層である。

第19層　暗褐色砂層で、層厚が30～60cm。円礫やテーブルサンゴ片などが少量混入しているが遺物包含層ではない。

第20層　暗黄褐色砂層で、層厚が５～20cm。無遺物層である。

第21層　黄褐色砂層で、無遺物層。下へもっと掘れるが、試掘坑が狭く、20cmまで確認して止めた。この層は第III地区の第５層に相当する層と考えられる。第III地区では標高約3.54mで赤褐色土（マーヂ）の地山に達するが、ここでは標高約4.3mでも、地山（又は岩盤）に達せず、まだかなり砂層が続くものと考えられる。

(3)　第III地区

G－35グリッド（２m×２m）だけの試掘である。第II地区まで約50mの距離であるが、ここでは標高約3.54mが地山面である。この地区は下田原貝塚と大泊浜貝塚の間の浅い谷間で、地表面の標高が約5.7mと低い。下田原貝塚と大泊浜貝塚の最も高い所とは約2.5mの高低差がある。このG－35グリッドの約２m西側には小川が流れている。

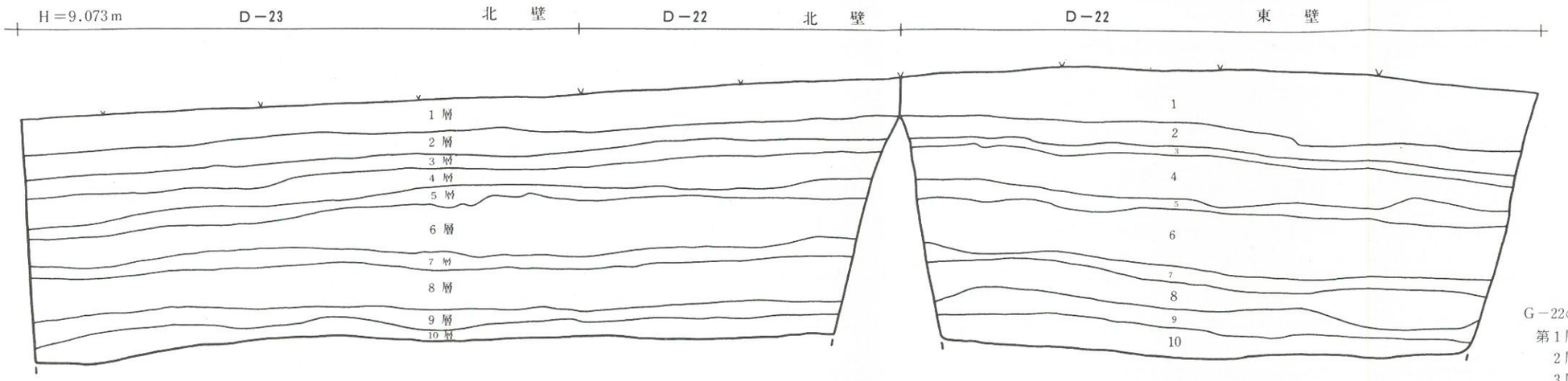
第１層　暗褐色砂層で、層厚が15～20cm。耕作で攪乱されている無遺物砂層。

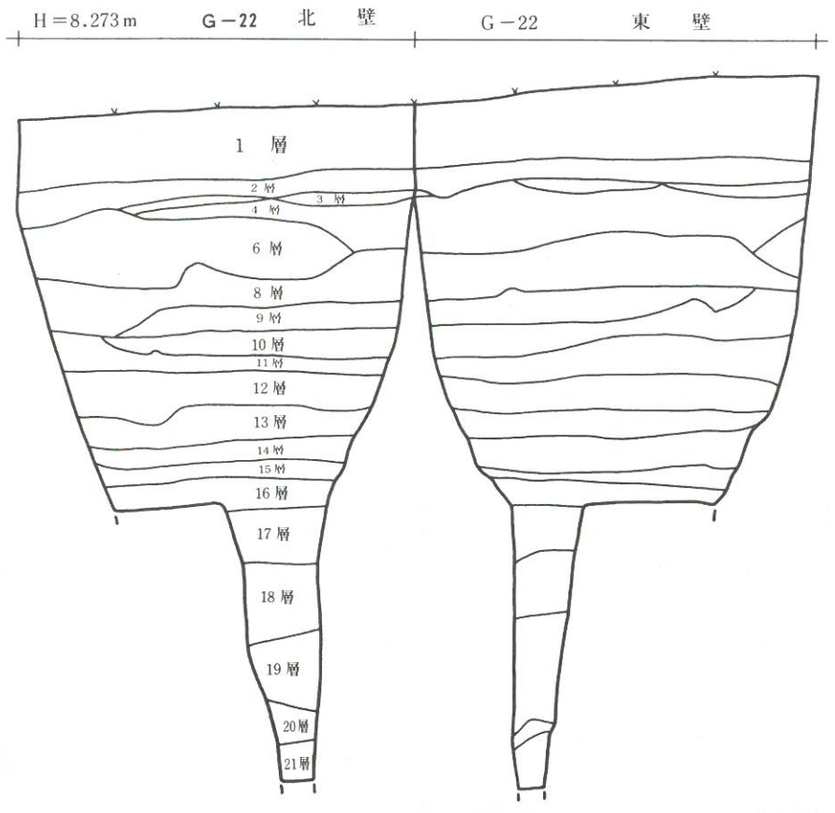
第２層　淡暗褐色砂層で、層厚が10～20cm。無遺物砂層である。

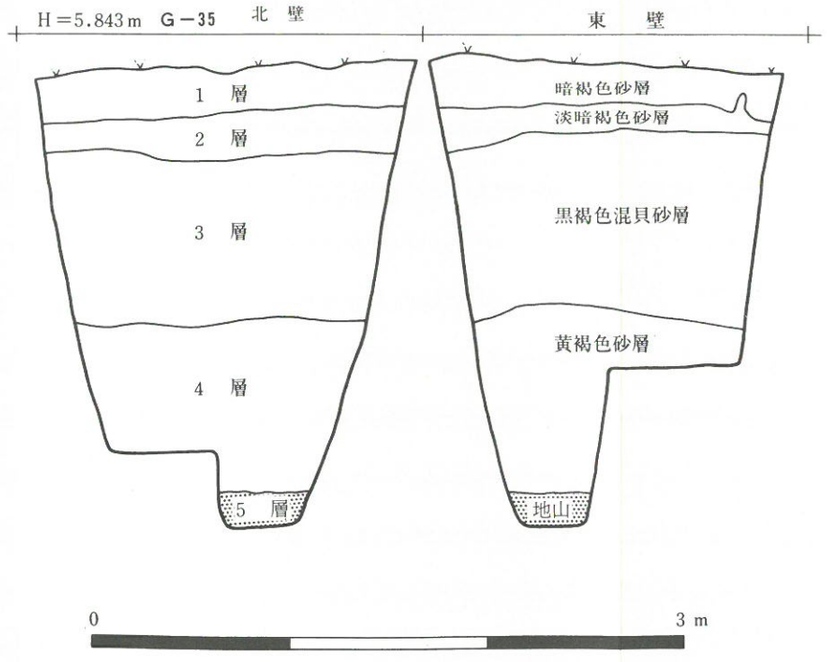
第３層　黒褐色混貝砂層で、層厚が80～90cm。貝殻やイノシシの骨が多く包含している貝塚層である。シャコガイやサラサバティなどの大きめの貝が多い。ここの遺物包含層はこの１枚だけである。第Ⅰ・II地区のように薄い層が何枚も堆積しているのと様相が異なる。この層が、第Ⅰ・II地区のどの層に対応するかの確認まではできなかった。遺物は有孔貝製品が検出されただけで、石器は検出できなかった。

第４層　黄褐色砂層で、層厚が約90cm。無遺物砂層で、砂層の色や砂粒の大きさなどから、第II地区の第21層に対応する層と考えられる。

第５層　赤褐色土（マーヂ）の地山。







G－22の層序

第1層　暗褐色砂層
2層　黄褐色混土砂層
3層　暗褐色砂層
4層　黒褐色混貝砂層（遺物包含層）
5層　なし。D－22・23ではある。
6層　黒褐色混貝砂層（遺物包含層）
7層　なし。D－22・23ではある。
8層　白砂層
9層　淡黒褐色砂層
10層　黒褐色混貝砂層（遺物包含層）
11層　淡黒褐色砂層（　〃　）
12層　暗灰色混砂砂利層（　〃　）
13層　暗褐色混砂砂利層（　〃　）
14層　暗黄褐色砂層
15層　黄褐色砂層
16層　暗褐色砂層
17層　黒褐色砂層（遺物包含層）
18層　淡黒褐色砂層（　〃　）
19層　暗褐色砂層
20層　暗黄褐色砂層
21層　黄褐色砂層

第10図　層序（上：D－22・23の北壁とD－22の東壁断面図　下左：G－22 グリッドの北・東壁）

下右：G－35グリッドの北・東壁断面図）

第4章　遺　　構

礫床住居跡、炉跡、埋葬跡などの遺構が検出された。無土器遺跡での遺構検出例は少なく、特に礫床住居跡のような明確な住居跡の検出は初めてである。なお、埋葬墓は無土器遺跡以後の遺構である。

(1)　礫床住居跡

第11図に示したものである。　いずれも第10層最下部での検出である。　この遺構の大きな特色は、主にテーブルサンゴ（ミドリイシ科）を拳大に割った角礫を敷き詰め、その隙間に枝サンゴ片を詰めて平担にした礫床である。テーブルサンゴの角礫のほかには砂岩礫、石材片、円礫なども見られる。砂層（第11層）の上に約10cmの厚さで礫が敷き詰められている。第11図下の礫床はプランがつかめなかったので、ここでは第11図上の礫床住居跡について述べる。

第１号礫床住居跡は、一部しか検出できなかったが、第２・３号礫床住居跡とほぼ同じ大きさの礫床と考えられる。東側の１辺が約 2.2ｍで、第２号礫床住居跡とは20～30cmの間隔がある。礫床の大部分はＤ－24グリッドへ延びており、発掘できなかったので、炉跡や柱穴などの有無については不明である。

第２号礫床住居跡は、約2.5ｍ×3.0ｍの方形状の住居跡と考えられる。東側の10～15cmは第３号礫床住居に覆われており、第３号礫床住居跡より古いことが確認できる。南東隅の柱穴（口径約８cm、深さ約12cm）は検出できたが、ほかの柱穴は検出できなかった。礫床面が黒褐色で、柱穴にも周囲の礫や黒褐色の砂が埋まっており、礫床面で柱穴を検出するのはかなり困難である。しかし、第３号礫床住居跡から推して、６本の柱が立つものと考えられる。炉跡は南東隅に長径約80cm、短径約60cmのやや楕円形状の炉跡が検出された。炉跡内の礫は焼けており、その上及び周辺には木炭混入の灰層が約１～２cm堆積していた。

第３号礫床住居跡は、約 2.5ｍ×２ｍの方形状のプランである。西側の10～15cmは第２号住居跡の上に乗っており、第２号住居跡より新しい住居跡であることが確認できる。柱穴が礫床住居跡内に６本検出された。西側の３本は口径10cmで深さ10cm、口径10cmで深さ11cm、口径14cmで深さ21cm、東側の３本は口径17cmで深さ20cm、口径10cmで深さ10cm、口径10cmで深さ15cmである。炉跡は北東隅にあり、長径約90cm、短径約50cmの楕円形状である。炉跡内の礫は焼けており、その上及びその周辺には厚さ１～２cmの木炭混入の灰層が堆積していた。この住居跡は礫床面もあまり崩れてなく、プランが明確であり、柱穴や炉跡なども明確である。

なお、ＰＬ．59下に柱穴が３本見られるが、これはＤ－25北半分の発掘で検出された柱穴で、第６層最下部から掘り込まれている。柱穴は第８層の白砂まで掘り込まれており、口径15～20cm、深さ30～40cmと深い柱穴である。プランや礫床の有無については確認できなかったが、第６層期にも掘立柱の住居跡があったことが確認された。

(2)　炉跡

礫敷きの炉跡が２つと砂面上の炉跡が１つ検出された。

第12図下右はD－23グリッドの第６層で検出された礫敷きの炉跡である。D－23の北東隅で検出されたこの炉跡は、直径約80cmの円形状を呈する。礫はほとんど拳大の円礫である。この円礫は、大泊浜のビーチロックに包含されている円礫と同じものであり、海岸から集めてきたものと考えられる。円礫は焼けており、その上には３～５cmの厚さで、灰や木炭が多く混入する黒色砂層が堆積していた。

第12図下左はD－26グリッドの第６層の北東隅で検出された礫敷きの炉跡である。この炉跡の礫も拳大の円礫がほとんどであるが、礫はまばらである。長径約1.2m、短径約90cmの楕円形状の炉跡で、円礫や砂は赤く焼けており、その上には灰や木炭が多く混入する黒色砂層が約２cm堆積していた。なお、炉跡の西側に直径約35cmの円形状の集石が見られるが、それが何であるかは不明である。

第12図上はG－22グリッドの第11層最下部で検出された炉跡である。この炉跡には何も敷かれてなく、砂利混入でねばりのある砂層が赤く焼け、その上には厚さ１～３cmの混砂灰層が体積していた。炉跡は長径約1.1m、短径約60cmのやや楕円形状を呈している。短径を挟んで１対の柱穴が検出された。口径は約10cmで、深さが約９cmと15cmである。この柱穴には２本の柱が立ち、炉と関係があると考えられる。しかし、この炉跡が屋内炉か屋外炉かについては、発掘面積が狭く、解明するまでには至らなかった。いずれにしても、本貝塚で検出された遺構のうちでは最古の遺構である。

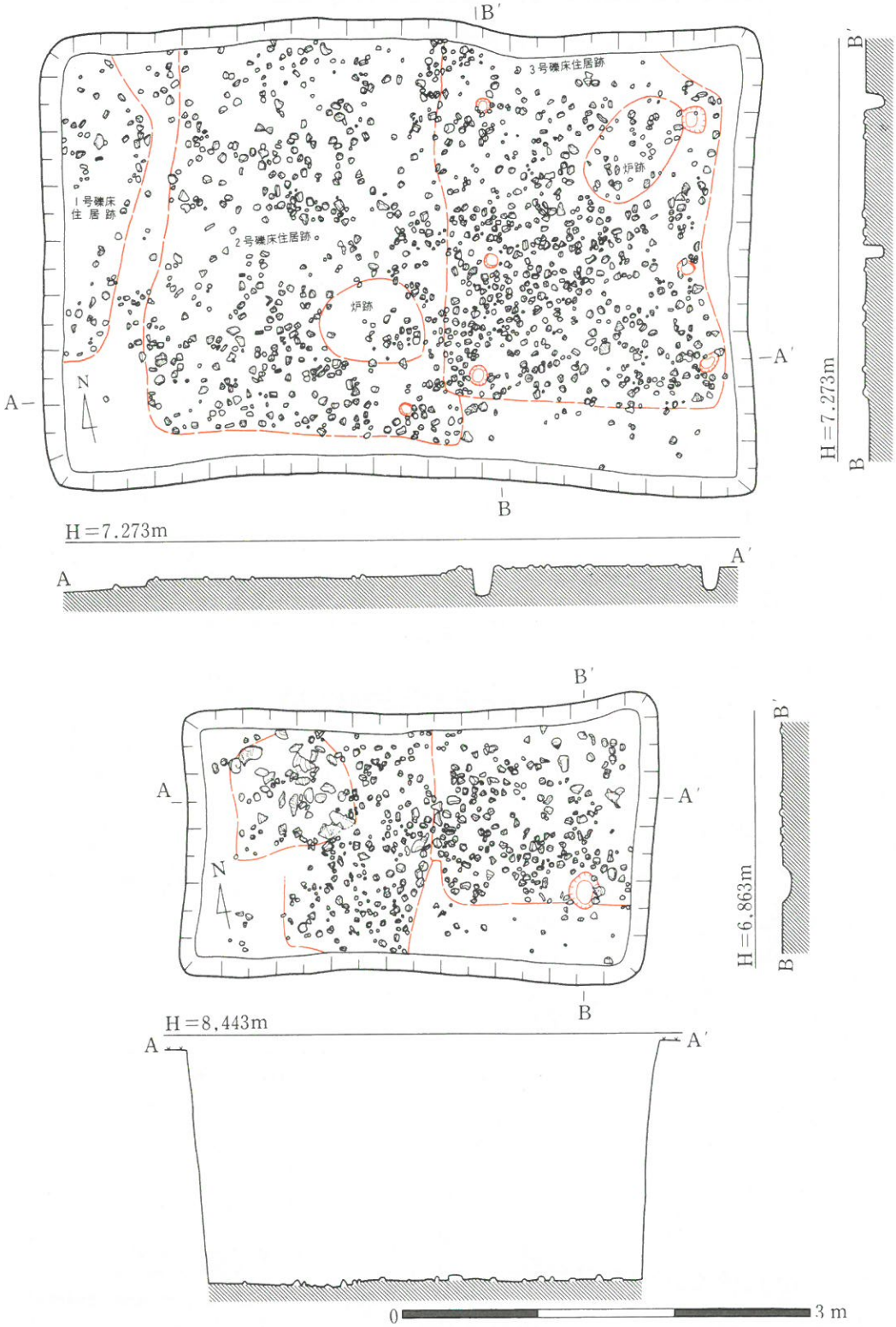
(3)　埋葬跡

３体の人骨が検出された。いずれも第３層の中位層から第４層の上位層まで掘り込んだ穴に埋められており、第３層に相当する時期の埋葬人骨と考えられる。副葬品は１点も検出できなかった。埋葬方位は一定ではなく、埋葬姿勢も一定でない。

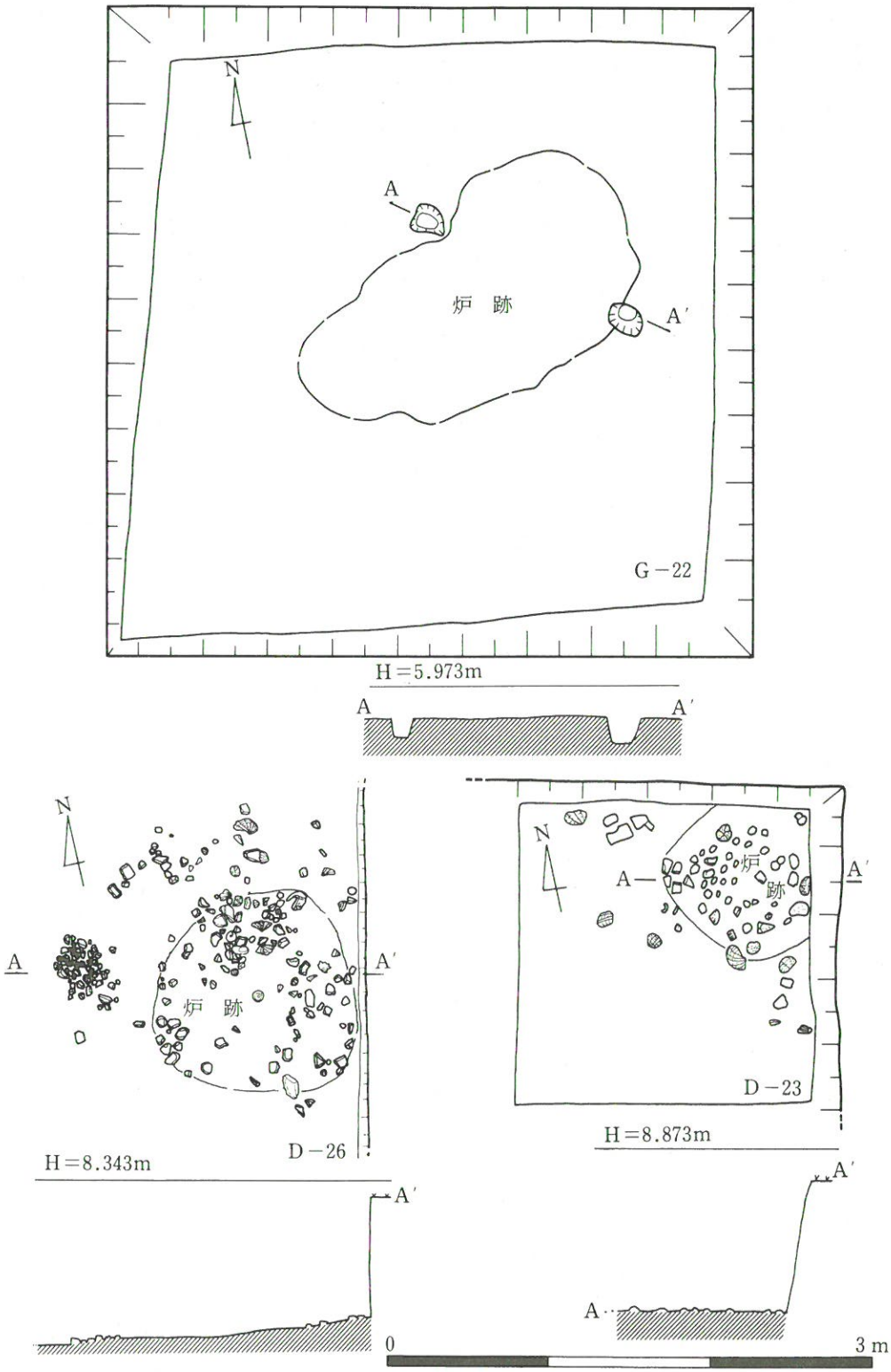
第１号埋葬人骨はD－26・27グリッドで検出された。頭骨がD－26の西壁で検出されたので、D－27グリッドを掘って全体を検出した。頭を東へ向け、仰むけの姿勢で埋葬されている。左手は股へ、右手は右腰へ伸び、両足は内側へ折り曲げられている。顔面の保存は悪い（第58図）。

第２号埋葬人骨はD－25グリッドの南半分で検出された。頭を南へ向け、仰むけの姿勢で埋葬されている。両手は下腹部へ伸びているが、足は左大腿骨が残っているだけで不明。これは、後世になって、足の埋まっていた地点に、長径約２m、短径約1.2mの楕円形状の穴が掘られており、そのときに除去されたものと考えられる（第59図）。

第３号埋葬人骨はD－24グリッドの北東隅で検出された。頭を北東へ向け、体全体が右横向きの姿勢で埋葬されている。足は折り曲げ、右手は膝まで伸び、左手は横腹で曲げられている。３体のうちでは保存状態の悪い人骨である（第60図）。



第11図　D－22・23グリッド第10層の礫床住居跡(上)とD－25グリッド第10層の礫床遺構(下)



第12図　炉跡（上：G－22グリッド第11層の炉跡　下左：D－26グリッド第6層の集石炉
下右：D－23グリッド第6層の集石炉）

第5章　遺　　物

第1節　白　　磁

第4層から薄手の白磁端反り碗と薄手の白磁玉縁碗が検出された。第61図2は薄手の白磁端反り碗である。口径は約14.8cmである。底部は検出されてないが、幅が薄くて高い高台が付くと考えられる。口縁部は軽い外反を示し、口唇部は尖がる。口唇下1.5cmには轆轤痕の稜線が廻っている。素地は白色微粒子で、薄い透明釉が施されている。この種の端反り碗は熱田貝塚でも検出されている。(注1) D－24第4層出土。

第61図1は薄手の白磁玉縁碗である。口径は約14.6cmである。底部は検出されてないが、幅が広くて低い高台が付くものと考えられる。口縁部は薄く玉縁状に肥厚し、口唇直下約1.9cmには轆轤痕の稜線が廻っている。素地は白色微粒子で、薄い透明釉が施されている。内側の口唇直下には釉溜りが見られる。この種の玉縁碗は熱田貝塚で検出されている。(注1) 薄手の白磁玉縁碗は、伊波後原遺跡出土の厚手玉縁碗より(注2)は古いタイプであり、12世紀に納まると考えられる。D－23第4層の出土

薄手の白磁端反り碗と薄手の白磁玉縁碗の共伴は、本遺跡のほかに熱田貝塚で確認されているが、全国ではその共伴がしばしば見られるようである。(注3)

注1　「熱田貝塚発掘調査報告」沖縄県教育委員会　1979

2　当真嗣一「石川市伊波後原遺跡調査概報」南島考古第4号　沖縄考古学会　1975

3　矢部良明「日本出土の唐宋時代の陶磁」日本出土の中国陶磁　東京国立博物館　1978

第2節　須 恵 器

第61図3・4に示した2点で、いずれも壺の破片である。3は頸部から肩部へ移行する部分の破片と考えられる。外面の叩き目や内面の当て目は残っていない。ただ内面は、当て目の上から先の丸い箆状工具で調整された調整痕が横位に3本廻っている。その間を細い櫛状調整痕が廻っている。4は肩部から胴部へ移行する部分の破片と考えられる。外面には格子目状の叩き目が見られるが、横に3列の箆状工具による摺消し痕が残っている。内面は格子目状の当て目が僅かに残っている。当て目の上を先端の丸い箆状工具で調整した調整痕が横位に8本廻っている。その間を細い櫛状調整痕が廻っている。この種の須恵器は熱田貝塚でも検出されているが、ビロースク遺跡など13世紀以後の遺跡で検出される須恵器との差異の有無などは現在のところ明らかでない。3はD－23第4層、4はD－26第4層出土。

第3節　褐釉陶器

2点検出されたが、同一個体の破片と考えられるので、同一個体として第61図5に示した。

肩部と底部近くの破片である。肩部径が約24cmで、高さは25～30cmぐらいと考えられる。轆轤痕が内外面に見られる。素地はやや粗粒で、紫灰色を呈する。釉は褐釉で、剝離が進んでいる。内面と底部近くの外面は露胎である。沖縄においては、12世紀の遺跡でこの種の褐釉陶器の検出例がなく、今後の資料をまちたい。下の破片はD－24第4層、上の破片はD－23第5層の出土である。

第4節　滑石製石鍋

第62図1に示した1点である。胴径約38cmの大型の滑石製石鍋である。縦長の瘤状把手が4個付くものと考えられる。把手の両側面は滑らかに切られており、切り込みが器壁まで達している。外面には幅約3cmの幅広の篦削りが廻っている。内面は滑らかに仕上げられている。把手の下には媒が付着しており、煮炊きに使用したと考えられる。この種の石鍋は熱田貝塚で検出されているが、熱田貝塚の石鍋より大型である。

第5節　石　　器

石器は石斧6点、敲石1点の計7点である。石器が少ないのが本貝塚の一つの特徴である。無土器遺跡には、仲間第一貝塚(注1)のように石器が多い遺跡と、本貝塚や神田貝塚(注2)のように石器の少ない遺跡がある。

(1)　石斧

ほとんど局部磨製石斧である。蛤刃1点、扁平両刃2点、片刃3点である。扁平両刃とは、刃部の最大厚が0.5～0.6cmと薄い両刃石斧である。刃縁を立面観で見ると、弧状を呈するのは1点もなく、すべて直線状である。特徴的な石斧は第62図7に示した小型片刃石斧である。本貝塚出土の片刃石斧では最も明瞭な片刃で、刃部の研磨が優れ、髭でも剃れそうなぐらい鋭利である。

(2)　敲石

第62図8に示した1点である。原石（川の自然礫）の両端に敲痕が残っており、敲石として使用されたと考えられる。

第67表　石器観察表

器種	挿図番号 図版番号	長さ(cm) 幅(〃) 厚さ(〃) 重量(g)	出土地点 出土層位	主な特徴	石質
蛤刃石斧	第62図 2 PL. 69－2	11.4 5.2 2.8 260	D－23 第6層	原石を利用した石斧で、縦に割れて半分は欠損している。刃部だけ研磨されている。刃縁は磨耗して丸味を呈している。	斑レイ岩
扁平両刃石斧	〃 3 〃 －3	8.7 4.2 2.2 100	D－23 第4層	打割片を利用した石斧、刃部と刃部の両側面が研磨されている。刃部の最大厚が0.6cmと薄い。	〃
	〃 4 〃 －4	4.7 5.2 1.5 5.5	D－22 第7層	打割片を利用した石斧。刃部と刃部の両側面が研磨されている。刃部の最大厚が0.5cmと薄い。平面観で刃縁がかなり傾斜している。	〃
片刃石斧	〃 5 〃 －5	7.3 4.1 1.7 8.0	D－23 第6層	打割片を利用した石斧。研磨されてない部分もあるが、ほぼ全面磨製に近い。刃縁は磨耗して丸味を呈する。 両側面のほぼ中央に抉があり、柄を付けて使用したと考えられる。	〃
	〃 6 〃 －6	9 6 2.2 18.5	D－25 第6層	打割片を利用した石斧。刃部と刃部の両側面が研磨されている。基部も高い所は研磨を受けている。平面観で刃縁が弧状を呈する。刃縁の磨耗はなく尖っている。	〃
	〃 7 〃 －7	7 2.8 1 3.5	G－22 第12層	打割片を利用した石斧。刃部はよく研磨され、片刃の鎬が明瞭である。刃縁はひげが剃れるくらい刃がしっかりしている。両面と片方の側面は高い所は研磨を受けている。もう片方の側面は縦に割れた状態を示している。したがってもう少し幅のある石斧だっと考えられる。なお、基端も研磨されている。	〃
敲石	〃 8 〃 －8	9.9 7 5.1 580	D－23 第4層	原石を利用した石。両端に敲痕があり、　敲石として使用されていたと考えられる。	角閃玢岩

注1　滝口　宏編「沖縄八重山」校倉書房
　2　石垣島県道改善工事に伴う発掘調査報告」　沖縄県教育委員会　1980

第6節　骨製品

第63図1に示した1点である。イノシシの腓骨の近位部を両刃状に研磨した骨製品である。先端部が箆状を呈することから、骨針とは別の用途の骨製品と考えられる。頭部は欠損しているので全長は不明である。刃幅0.7cm、刃部最大厚0.3cmの扁平状である。

第7節　貝製品

貝製品は、実用品と考えられるものとしてスイジガイ製利器、ホラガイ製有孔製品、シレナシジミ有孔製品、ヤコウガイ製貝匙などがあり、装飾品と考えられるものとしてイモガイ有孔製品がある。

(1)　実用品

a．スイジガイ製利器

第63図2は第1管状突起の先端部を研磨して錐状に尖らしたものである。三面から研磨されている。第63図3は第1管状突起の先端を両面から研磨して鑿状の刃をつくっている。刃部は磨耗して刃縁がやや丸味を呈している。第2・3管状突起までは残存している。2はG－22第9層、3はD－24第6層の出土。

b．ホラガイ有孔製品

第63図4・5の2点である。4は内唇近くに直径約1cmの円形状の孔を穿ち、5は内唇近くに直径約2.5cmの孔が穿かれている。このようなホラガイ有孔製品は、八重山では近世まで湯わかし器として利用されていたようであり（1983年八重山博物館に展示されているのを実見）、湯わかし器としての用途も考えられるが、この2例は小さなホラガイであり、湯わかし器としては小さすぎるのではなかろうか。4はG－22第17層、5はD－23第4層の出土。

c．シレナシジミ有孔製品

第64図1・2の2点である。ミレナシジミに孔を穿つ製品は多くの遺跡で検出されており、貝垂などとして報告されている。1はD－23第4層、2はD－25第9層の出土。

d．ヤコウガイ製貝匙

第64図3に示した1点である。破損品ではあるが、1側面は研磨されており、貝匙の破損品と考えられる。D－23第6層の出土。

(2) 装飾品

第64図4はイモガイ科の殻頂部近くを両面から研磨し、円盤状に丁寧に仕上げられている。側面も研磨が施されている。殻頂部は有孔であるが、穿孔痕は明瞭でない。直径約4.1cm、厚さ約0.4cm。G－22第12層の出土。この製品は宿舎でカラスに持ち去られて行方不明。

第64図5・6はイモガイ科の殻頂部近くを両面から研磨されているが、研磨が弱く、円盤状にはなっていない。5は直径約2.4cm、厚さ約0.8cmでD－25第10層の出土。6は直径約1.2cm、厚さ約0.4cmでD－24第4層の出土。

第64図7はいわゆるビーズである。イモガイ科の殻頂部近くを両面から丁寧に研磨され、薄い円盤状を呈している。直径約1.1cm、厚さ約0.1cmでD－27第4層直上の出土。

(3) その他

第64図8はアンボンクロザメの殻底部に長径約3.5cm、短径約2.3cmの楕円形状の孔が穿かれている。この孔は貝の肉を取り出すための孔の可能性が強い。しかし、明確ではないので、一応その他の貝製品に含めた。

第8節　鉄製品

第64図9に示した1点である。長さ約17cmの鉄鑿と考えられる。基部は正方形状で、最大厚が約1.5cmである。刃部は片刃に近い両刃状を呈し、最大幅は約2.5cmである。腐蝕が激しく、四面とも2～3mmの剝離が進行しており、保存がかなり困難な状況である。鉄鑿は1973年にRICHARD J. PEARSON氏が船浦貝塚の発掘調査[注1]で検出しており、混入遺物ではなく、薄手の白磁玉縁碗、薄手の白磁端反り碗、須恵器、滑石製石鍋と共伴する遺物である。G－22第4層の出土。

注1 R. J. PEARSON, S. ASATO et al 「Excavations on Kume and Iriomote, Ryukyu Islands」 Asian Perspectives, XXI(I), 1978.

第9節　人　　骨

内　藤　芳　篤

大泊浜貝塚人骨の詳細については、現在精査中であるが、その概要を述べると、次のとおりである。

1号人骨　（第58図　、ＰＬ．65）

男性、熟年

頭蓋諸径は一般に大きく、頭型は短頭ないしこれに近い中頭型と推定される。

歯の咬耗がひどく、Brocaの3～4度であり、前歯の部分に過耗部が認められる。

四肢骨のうち、ほぼ完全な状態で残っている右側橈骨を用いて、PEARSONの公式に拠り、推定身長を求めると、約161.5cmである。

2号人骨　（第59図　、ＰＬ．66）

男性、壮年

保存状態良好な人骨であるが、脳頭蓋、顔面頭蓋ともに諸径が大きい。

頭蓋最大長181㎜、最大幅150㎜、バジオン・ブレグマ高139㎜であり、頭蓋長幅示数82.87で、明らかに短頭型に属している。

顔面では、頬骨弓幅が142㎜、中顔幅109㎜、顔高120㎜、上顔高73㎜で、横径、高径ともにかなり大きい。しかし相対的に横径の大きいことが目立っており、示数値としては、顔示数84.57（K）、110.09（V）、上顔示数51.41（K）、66.97（V）となっている。

歯の咬耗度はBrocaの1～2度である。

四肢骨のうち最大長の計測可能な右側上碗骨を用いて、PEARSONの公式から推定身長を求めると、159.78cmであった。

3号人骨　（第60図　、ＰＬ．67）

女性、熟年

一般に頭蓋諸径が大きく、その割りには四肢骨は小さい。

頭蓋縫合は癒合し、熟年骨と推定されるが、歯の咬耗度はBrocaの2度である。

頭型は短頭ないし中頭型に属するものと推定される。

まとめ

1．大泊浜貝塚人は、成人男性2体、女性1体、合計3体である。

2．脳頭骨は短頭性が強い。顔面頭蓋は横径、高径ともに大きいが、横径がとくに目立っている。

3．推定身長は男性160～161.5cmとなり、比較的高い。

（長崎大学医学部教授）

第10節　食　料　残　滓

1．貝類遺存体

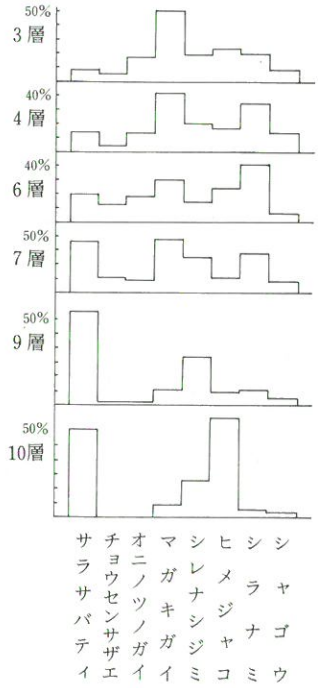
本遺跡の貝の集計は発掘時に現地で集計し、サンプルを持ち帰り、同定する方法をとった。巻貝は殻頂を有するものを1個としたが、二枚貝は左、右殻をいっしょに数えて、2等分して個体数とした。

出土した貝は腹足綱16科49種、斧足綱5科11種の計60種である。集計はDトレンチとGトレンチに分けて行った。地区別出土状況はDトレンチが圧到的に多く91.3%を示す。

Dトレンチは10層まであるが、最も多いのは4層で27.8%を示し、次に6層－26.9%、3層17.5%と続く。各層ごとの貝種別出土頻度を第68表に示した。それによると、サラサバティは9、10層で主体を示し、上層にいくにしたがって除々に減少し、チョウセンサザエは、6、7層で6.0%と増えるが全体的に少ない。オニノツノガイは6、7層から除々に増えるが、主体をなすすでにはいたらない。マガキガイは6、7層から急激に増え、3、4層では主体貝となる。シレナシジミは平均11.7%大きな変化はみられない。ヒメジャコは10層で主体貝となるが、9、7層で激減し、6層から除々に増えはじめる。シラナミは下層で少なく、7層から増え、6層では主体貝となる。シャゴウも上層にいくにしたがって、除々に増える。

Gトレンチは、13層まであるが、Dトレンチと同様、10層でヒメジャコが35.5%と主体を示し7、9層で減少し、6、4、2層では増加する。シラナミは、下層で少なく、6層で最も多く、21.7%を示す。

第68表　Dトレンチ層別出土頻度



以上のことよりDトレンチの場合、主体貝はヒメジャコ（10層）→サラサバティ（9、10層）→シラナミ（7層）→マガキガイ（3・4層）に変化することがわかった。これらの棲息する場所が下層ではサンゴ礁域の岩場（ヒメジャコ、サラサバティ、シラナミ）、上層では浅海・砂地（マガキガイ）と異なる。また、ヒメジャコとヒレジャコも、前者が浅い岩礁にすみ、後者が深いところに棲息する。

これらのことより、9、10層では比較的採集しやすく、大型の貝のとれるリーフ周辺で活動し、上層にいくにしたがってリーフ内の浅海・砂地に移行する。このことは海進海退等の海況の変化か、あるいは乱獲によるもの等が想定できるが本遺跡の場合、ヒメジャコ→シラナミに採集が変化することから、後者の可能性があるが、貝殻の計測、他の食料残滓等から、より深く検討を要する。また、河口川のシレナシジミの採集は波照間島に棲息場所が認められないことから、対岸の西表島から持ちこんだものであろう。

第69表　貝類出土状況

	貝類	地区	Dトレンチ 表採	表土	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	9層	10層	不明	小計	Gトレンチ 4層	11層	12層	13層	小計	不明	合計
1	ツタノハ科	オオベッコウガサ			3							3			6							6
2		マツバガイ	1			20	6								27							27
3		ベッコザラ			5										5							5
4		種不明					2								2							2
5	ニシキウズ科	サラサバテイ	1		14	23	70		95	57	9	75	24		368		12	7	3	22	98	488
6		ギンタカハマ		4	1	10			1	3					19							19
7		ニシキウズ				3	2		2	3	2	3	1		16							16
8		ムラサキウズ	2			8	8		2						20							20
9	リュウテン科	チョウセンサザエ				8	19		55	16	1	1			100							100
10		〃 のフタ	3	14	9	15	8					1			50							50
11		コシダカサザエ				1									1							1
12		ヤコウガイ					3		2	2		3	1		11							11
13		〃 のフタ			2	7	9		18	8		2	1		47							47
14	アマオブネ科	ニシキアマオブネ				3	2								5							5
15	オニノツノガイ科	オニノツノガイ			15	50	65	1	84	15	2	1			233						1	234
16	ソデガイ科	マガキガイ	5	14	54	152	201		142	59	5	12	3		647		6	2	3	11	69	727
17		クモガイ			3	21	38		28	7	1	9	4		111						42	153
18		スイジガイ				3	7		7	2	2	2			23							23
19		ラクダガイ							1						1							1
20		ムカシタモト					1								1							1
21		イボソデ				1	1	1	1						4							4
22	タカラガイ科	ホシダカラ			1		5		1	1		1			9						5	14
23		ハチジョウダカラ			1	4	2					2			9				3	3		12
24		ハナマルユキ	1	1	2		1								5							5
25		キッコウダカラ					1								1							1
26		ヤクジマダカラ				2	1	1							4							4
27	ヤツシロガイ科	スクミウズラ		1				1							2							2
28	フジツガイ科	ホラガイ			1		1		3			1			6							6
29	オキニシ科	シロミオキニシ				1			1						2							2
30	アツキガイ科	ムラサキイガレイシ					1								1							1
31		ツノテツレイシ				8						1			9							9
32		ホソスジテツボラ				1			2						3							3
33		テツボラ				1									1							1
34		カスリレイシ	1												1							1
35		種不明					15								15							15
36	イトマキボウ科	イトマキボラ			1	1	1	1	1						5							5
37		ヒメイトマキボラ											1		1							1
38		ニシキニナ		1											1							1
39		マルニシ	1												1							1
40	オンコブシ科	オニコブシ			1	3				2					6							6
41		コオニコブシ	1	1	8	16	32		23	11					92							92
42	フデガイ科	ニシキノキバフデ			1										1							1
43	イモガイ科	アンボンクロザメ		1		9	17			9				1	37							37
44		ヤナギシボリイモ					1								1							1
45		イボシマイモ			5				4						9							9
46		イボカバイモ				3	1			1	2				7							7
47		ロウソクイモ							5						5							5
48		クロフモドキ									1	1			2							2
49		オトメイモ				2									2							2
50		ミカドミナシ				4									4							4
51		キヌカツギ				3			11						14							14
52	フネガイ科	エガイ				1									1							1
53		リュウキュウヒバリガイ				2									2							2
54	ウグイスガイ科	アコヤガイ	1												1							1
55	ウシギク科	メンガイ						1		1					2							2
56	シジミガイ科	シレナシジミ			25	53	97		70	40	3	39	10	14	351	9	18	9		36	26	413
57	シャコガイ科	ヒメジャコ	1	2	12	67	79	1	112	16	10	10	27		339							339
58		シラナミ	1		23	62	165	2	199	46	5	13	2		518		6			6		524
59		シャゴウ			5	24	72	4	32	11	3	6	1		158		1			1		159
60		ヒレジャコ		3		8	22	2	13		1	38	1		88			2		2	2	92
61	マルスダレ科	ヌノメガイ								1					1							1
62		アラヌノメ					1								1							1
63	ニッコウガイ科	サメザラ				1						1			2							2
64		不明						7							7							7
	合計		19	42	192	603	957	22	915	311	47	225	76	15	3,424	9	43	20	9	81	243	3,748

2．脊椎動物遺存体

本遺跡出土の獣・魚骨は全調査区で採集したが、資料整理の都合上、完掘したD－22、23、24、及びG－22グリッドについて分類、集計を行なった。

魚類

軟骨魚類

サメ目：脊椎骨のみでD－24グリッドII層で1個、G－22グリッドII層で4個の計5個得られたのみである。

エイ目：前者と同様脊椎骨のみで、D－23グリッドI層、D－24グリッドIV層でそれぞれ1個得られた。

硬骨魚類

ウナギ目・ウツボ科：G－22グリッド第14層で左下顎骨が1点出土したのみである。

スズキ目・フエフキダイ科：ヨコシマクロダイ、ハマフエフキ等が得られた。前者は7個、後者で、魚類の中では多い方に入る。

ベラ科：最少個体数は2個と少ない。

ブダイ科・イロブダイ、ナガブダイ、ナンヨウブダイ等が得られ最少個体数は20個体と多い方である。種の中ではナガブダイが多い。顎骨は大きい。

ニザダイ科：ウロコが1点、G－22グリッドII層から得られたのみである。

ハタ科：最少個体数は3個と少ない。

フグ目・カワハギ科：2個体得られた。他は遊離歯である。

ハリセンボン科：11個体で多い方に入る。

その他の骨では脊椎骨391個と多かったが種を同定するのは困難である。

爬虫類

カメ目：アオウミガメの右下顎骨が1点得られた。最少個体数は左烏口骨の3個である。板の破片は236個と多量出土した。全グリッドほぼ同量の出土である。

ヘビ目：脊椎骨79点でとくにG－22のII層で59個（74.7%）最も多く得られた。

第71表　ヘビ出土一覧表

グリッド	層位	部　位	個数	%	備　考
D－23	4	脊　椎	2	2.5	PL.75下－2
D－24	1	〃	1	1.3	
D－24	8	〃	1	1.3	
G－22	2	〃	59	74.7	
〃	10	〃	16	20.2	
合　計	25		79	100	

第70表　ウミガメ出土状況

地区＼部位	層	下顎骨R	烏口R	烏口L	烏口不	尺骨R	尺骨L	上腕骨L	大腿骨R	大腿骨L	チ足根骨	指骨	末節骨	四肢破片	覆甲板	肋骨板	背甲a	板破片	合　計
D－22	4													1			1	14	16
	5													1				1	2
	6					1		1				1						3	6
	7											2						7	9
	9					1		1	1			3		1				29	36
	小計					2		2	1			6		3			1	54	69
D－23	2			1										1				2	4
	3																	1	1
	4		1	1	1						1	2		1	2			13	22
	6		1	1							1	4		2	1		3	31	44
	9																1	3	4
	10											3	1				1	13	18
	11														1			2	3
	小計		2	3	1						2	9	1	4	4		5	65	96
D－24	1																	1	1
	2													1					1
	3													1				17	18
	4				2													15	17
	5										1				1			2	4
	6										1	1			2			3	7
	7										1	5	1	1			2	16	26
	8																1	1	2
	9											4			3			11	18
	10										1					2			3
	不明																	1	1
	小計				2						4	10	1	3	6	2	3	67	98
G－22	2										1	1	1					5	8
	4												1					3	4
	7																	11	11
	8													1					1
	9											1							1
	10																1	13	14
	11											2						7	9
	12						1					3						2	6
	14												1		1				2
	15										1								1
	小計						1				2	7	3	1	1		1	41	57
合　計			2	3	3	2		3	1		8	32	5	11	11	2	10	227	320
不　明		1						1	1			1		2	2			9	17
総合計		1	2	3	3	2		4	2		8	33	5	13	13	2	10	236	337

第72表　魚類出土状況

調査地		サメ目 種不明 脊椎	エイ目 種不明 脊椎	ウナギ目 ウツボ科 R+L	スズキ目 フエフキダイ科 ヨコシマクロダイ R+L	フエフキダイ科 ハマフエフキ R+L	フエフキダイ科 種不明 R+L	ベラ科 R+L	ベラ科 R⊥L	ブダイ科 イロブダイ R⊥L	ブダイ科 ナガブダイ R⊥L	ブダイ科 ナンヨウブダイ R⊥L	ブダイ科 種不明 R+L	ブダイ科 種不明 R⊥L	ニザダイ科 ウロコ	ハタ科 R+L	フグ目 カワハギ R+L	ハリセンボン科 上/下	ハリセンボン科 棘	その他 鋤骨	その他 脊椎	その他 尾椎	その他 棘	その他 歯片	その他 その他	合計
D-1-22	4																┼ / 1	T			3					5
	6																								1	1
	7				1┼																					1
	9				┼1 / 3┼	┼2							┼ / 1┼					‾ / 1		1	3				8	20
	小計				1┼1 / 3┼	┼2							┼ / 1┼				┼ / 1	‾ / 2		1	6				9	27
D-1-23	2																┼ / 1	1 / 1				1			1	5
	3												┼ / ┼1				┼ / 1┼				1				2	5
	4		1									┴1	┼ / 1	1 1┴		1┼		1 /	1		82	1	11		7	109
	5					┼1		1┼	┴1	1 ┴ / 1	3┴		┼ / 1 2 1	3 2┴ / 1							1				2	21
	6									┴ / 1	┴ / 2	┴ / 2	┼1 / 1 1	1┴			1┼	5 / 1			2				2	20
	9				1┼	1┼				1┴1	┴ / 1	┴2		┴1				‾ / 1			4	5			5	23
	10				2┼ / 1 3		1┼1			┴1 / 1	┴ / 2		2┼1 / 2					2 / 1			5				12	37
	小計		1		2┼ / 2 3	1┼1	1┼1	1┼	┴1	1 1┴2 / 3	3┴ / 5	┴3 / 2	┼2 / 3 6 3	5 3┴1 / 1		1┼	2┼ / 1	9 / 3 1	1		95	7	11		31	220
D-1-24	1				┼1								┼ / 1								3				1	6
	2																				4					4
	3						1┼														12				1	14
	4																┼1				6					7
	6	1									┴ / 1			┴ / 1							4				9	16
	7		1				1┼				┴ / 1	┴ / 1	┼ / 2	┴1		┼1	┼1 / 1				20	4	1	1	13	49
	8				┼2 / 1					┴1	┴ / 1	┴1	┼ / 1					1 /			9					17
	9				1┼1 / 1	┼2				1┴		┴ / 1	1┼1 / 1			┼1		‾ / 2			5				5	23
	10				┼1																				1	2
	小計	1	1		1┼3 / 2 2	┼2	2┼			1┴1	┴ / 3	┴1 / 2	1┼1 / 5	┴1 / 1		┼1 / 1	┼1 / 1 1	1 / 2			63	4	1	1	30	138
G-1-22	2	4						1┼	1┴1				┼ / 5 1	┴1 / 3	1	1┼ / 1	┼ / 7 1		7		185	8	84		28	340
	4												┼ / 1 1					‾ / 1			2					5
	7													┴1				1 /			5				5	12
	9																									
	10				1┼														3		15				21	40
	11																								2	2
	12												┼ / 1					‾ / 1			2					4
	14			1┼											1						18				11	31
	小計	4		1┼	1┼			1┼	1┴1				┼ / 7 2	┴2 / 3	2	1┼ / 1	┼ / 7 1	1 / 2	10		227	8	84		67	434
合計		5	2	1┼	3┼4 / 7 2 / 5	1┼5	2┼1 / 1	1┼ / 1	1┴2	2 1┴3 / 3	3┴ / 8	┴4 / 4	┼3 / 5 5 / 18	5 3┴4 / 5	2	1┼1 / 2 1	2┼1 / 10 2	11 / 9 1	11	1	391	19	96	1	137	819

凡例：右前上顎骨｜左前上顎骨 / 右歯骨｜左歯骨　　右上咽頭骨｜左上咽頭骨 / 下咽頭骨

鳥類

鳥骨は48点出土したが細片のため、部位は不明である。とくに、コウモリの四肢骨が含まれている可能性が強い。D－23グリッド第4層で33個（68.8%）最も多く得られた。

第73表　鳥類

グリッド	層位	部　　位	個数	備　　考
D－23	4	破　　片	33	PL75下－1
〃	9	〃	1	
D－24	1	〃	2	
〃	2	〃	1	
〃	4	〃	1	
D－24	7	〃	2	
〃	9	〃	2	
G－22	2	〃	4	
〃	14	〃	1	
不　明	4	〃	1	
合　計			48	

哺乳類

翼手目：コウモリは、最少個体数11個で、とくにD－23グリッド4層で多く得られた。

第74表　コウモリ

グリッド	層位	部　　位	個数	備　　考
D－23	4	左下顎骨	4	
〃	〃	右　〃	5	
〃	10	左下顎骨	1	
D－24	7	左下顎骨	2	
〃	〃	右　〃	2	
D－24	8	左下顎骨	1	
G－22	2	歯	2	
〃	12	右下顎骨	1	
〃	14	左下顎骨	1	
合　計			19	

契歯目：ネズミ科：最少個体数は2個体を数える。比較的上層の方から得られた。

第75表　ネズミ

グリッド	層位	部　　位	個数	備　　考
D－24	3	L大腿骨	1	PL75下－5
G－22	2	R　〃	1	〃　－6
〃	〃	R上顎犬歯	1	
合　　計			3	

海獣骨：椎体と棘突起が得られたが詳細は不明である。

第76表　海獣

グリッド	層位	部　　位	個数	備　　考
D－22	4	破　　片	1	
D－22	6	椎　　体	1	
〃	9	〃	1	
D－23	4	破　　片	1	
G－22	8	〃	1	
〃	9	棘 突 起	1	
合　計			6	

第77表　イノシシ出土状況(1)

地区	層序	RLN	頭蓋骨	下顎骨	脊椎骨	肋骨	肩甲骨 P(S)d	上腕骨 P(S)d	尺骨 P(S)d	橈骨 P(S)d	寛骨 上臼下	大腿骨 P(S)d	腓骨 P(S)d	脛骨 P(S)d	踵骨	距骨	中足骨(手) P(S)d	指骨 基節骨	指骨 中節骨	指骨 末節骨	破片	合計
D-22	4	R	6		1		5,10	1, 2	3, 6	1, 1, 1	2, 2, 3	1, 2	2, 1, 2		3	5			2			
		L	1	1			5, 2	1, 5	4, 3, 2	1, 1	1, 1	1, 3, 6	1, 2		3	4			1		157	329
		不	6	2	23	5	1	1, 1, 1			4	1		1			15					
	5	R						1	1			1										
		L		1			1	1			1				2						3	17
		不						1									4					
	6	R		1				2	1	3	1, 1	1, 3	2		2				2			
		L		1	1		3	1	1	2	2, 2	1, 1	1, 1	1	1			1	4		33	100
		不		4	4	5	1						1				4	5				
	7	R	1		1		2		1, 1		1	2	1, 2			1						
		L		1			2		1, 1	2	1	1, 2				1					51	94
		不	7		3	4	2					1					1					
	9	R	8	2	2		1	3, 2, 6	1,12, 1	3, 3	1, 1, 2	5, 4, 7	3, 6		7	3			3			
		L	4	4	3		2	1, 6, 6	3, 4, 1	1, 1	2, 2	1, 2,10	3, 1, 3		3	5			1		73	306
		不	7	10	21	23		1, 1								2	14					
	11	R											1									
		L																				1
		不																				
	小計	R	15	3	4		8,10	4, 2,11	4,20, 3	7, 1, 4	4, 6, 5	8, 6,12	6, 2,12		12	9			7			
		L	5	8	4		13, 2	1, 6,13	7, 9, 4	1, 1, 6	3, 2, 6	4, 7,17	4, 2, 6	1	9	10		1	6		317	847
		不	20	16	51	37	4	2, 2, 2			4	2	1	1		2	38	5				
D-23	2	R					2, 1		1, 5, 1			1				2		1	1			
		L		2			1	1		1		1	1		1	1		1	2		68	102
		不	4					1									2					
	3	R	1					3		1			1		1	1						
		L	1	1			1, 1	1	1	3		1						1	2		119	168
		不	1	2	8		2	1			4					1	8, 1					
	4	R	4	7	1		4, 2	1, 1, 4	1,11, 2	4, 2	2, 1	4, 4	3, 5	1	3	2		2	2			
		L	4	4	1		5, 1	1, 6	4, 1	1, 1, 1	1, 2	2, 1, 2	1, 4, 3	2	9	8		2	5		309	605
		不	22	8	33	33	4	1, 1		1		2, 1	1	7			1,29	1	3	3		
	5	R		1									1									
		L							1												4	11
		不	3	1																		
	6	R	4	9			19, 6	3, 1, 9	1,11, 2	2, 1, 1	1, 1, 3	4, 5	3, 2		4	4						
		L	4	7	1		4, 3	1, 5	6, 7	6	3, 1, 4	1, 1, 1	3, 1	2	8			1	1		187	457
		不	23	7	32	10		1	1, 1			1	1			2	23	1				
	7	R																				
		L	1																			1
		不																				
	8	R		1																		
		L	1					1														4
		不			1																	
	9	R	1	3			1, 3	1	1, 2	2, 2	1, 1	2	3, 2, 3	1	2	1		4	2			
		L	1	3	1		2	1, 2	1	1		4	2, 2		3	1		2	1		40	163
		不	9		10	12	3	1			1		2, 1	1		2	12	2		2		
	10	R	5	13	4		2	2, 9	12, 3	4, 2, 6	1, 3, 3	1, 6, 10	5, 2, 11	1	12	3		1	1			
		L	9	11			3, 2	2, 5, 8	3,14, 2	3, 3, 4	2, 1	6,10,13	10, 3		9	4			6		300	738
		不	54	9	31	35	2	1, 1		1	1	1, 1					43		3			
	11	R		2			4, 1	4, 2	3, 1	4	6, 1, 5	2	2, 1		1	1			1			
		L	1	4			1	2, 4	1	1, 1, 1	2, 1, 2	2, 1, 1	2, 1		3	1			3		46	213
		不	23	3	22	29	4	3	1								6					
	小計	R	15	36	5		32,13	4, 9,27	3,43,11	17, 3,11	9, 7,13	14, 6,19	16, 8,20	3	23	14		8	7			
		L	22	32	3		13,11	4, 9,27	13,24, 4	16, 5, 6	8, 3, 8	11,13,23	19, 8, 6	2, 2	33	15		7	20		1,073	2,462
		不	139	30	137	119	15	3, 3, 5	1, 2	2	6	4, 1, 1	2, 3	8		5	1,123,1	4	6	5		
D-24	1	R		1					1	1												
		L	1					1, 1													7	20
		不		3	1	1											1			1		
	2	R	1	1					1						3				1			
		L		2					1						2	1					11	36
		不	2	1	3	3											3					
	3	R		5			2	1	5, 2	1	1, 1	1	1		3	1			2			
		L	1	2				1	1, 1	1, 2		1, 1	2, 1	1	1	2			3		37	167
		不	10	3	15	23	1	1			1	1		1			19, 2	2		4		
	4	R	2	3			1	1, 2, 4	2, 7,30	1, 1	1	2, 3	2, 1	1	4	2		1				
		L	2	5			2	3	1, 3	4, 2		1, 3	3, 2		3	1		1	5		69	286
		不	9	11	32	16	4	3			1	2		1		1	20	2	1	2		
	5	R	1				2											1				
		L		1				1		1						1					6	21
		不	3		2	1		1														

イノシシ出土状況(2)

地区	層序	RL不	頭蓋骨	下顎骨	脊椎骨	肋骨	肩甲骨 P Ⓢ d	上腕骨 P Ⓢ d	尺骨 P Ⓢ d	橈骨 P Ⓢ d	寛骨 上臼下	大腿骨 P Ⓢ d	脛骨 P Ⓢ d	腓骨 P Ⓢ d	踵骨	距骨	中足骨(手) P Ⓢ d	指骨 基節骨	指骨 中節骨	指骨 末節骨	破片	合計
D-24	6	R		1				2				1 1			1				1			
		L					1	1	3	2		1			1			1	1		31	72
		不	3	2	8	2	2										6					
	7	R	4	12	2		3, 2	5, 5	1, 6, 1	2, 2, 1		6, 1, 2	3, 2	1	3	7			7			
		L	7	4			2	1, 1, 3	3, 5	3 3	1 2	1, 2, 4	6, 4, 5	2	5	1			2		224	531
		不	22	4	26	35	5	3, 1, 2	1	1	2	4	3	2			47	2		2		
	8	R	2	1			1	1	2			1	1 1		4	2		1	2			
		L	1	1			2	1, 4	1, 1	2		1	1 1		1	1			1			106
		不	9	8	10	14						7					16	1		3		
	9	R	34	26	1		8, 1	3, 7	5, 1	4, 2, 1	5, 3, 3	2, 1, 3	8 1		11	8			2			
		L	21	23	1		10	1, 1, 9	6, 3	5, 1	1, 2, 2	1, 3, 9	3, 2, 8	1	12	5			4		245	834
		不	117	40	42	51	5	1 2		1		1 1	3, 1				47	1		2		
	10	R		2			1, 1, 1	1, 3	1, 2			2	2		2, 1	1						
		L	2	2			1	3	2	2, 1	2, 5	1, 2, 1	2 4			2	4					103
		不	9	3	9	7	1		1		3	2	1				8, 1	1		1		
	小計	R	44	51	3		15, 7, 1,	2, 14, 19	10, 22, 35	8, 6, 2	6, 4, 4	11, 2, 13	16, 2, 4	1 1	31, 1	21		3	15			
		L	35	40	1		17, 1	2, 8, 22	14, 17	20, 2, 7	4, 7, 4	4, 9, 19	17, 6, 21	4	25	14	4	2	16		630	2,176
		不	184	76	148	153	18	4, 2, 8	2	1, 1	5, 2	17 1	3, 5	4		1	167, 3	9	1	15		
G-22	1	R					1															
		L					1, 1															4
		不	1																			
	2	R		1				1	1						1	3		7	9	11		
		L						1	2, 1						1	1		15	11	12	33	347
		不	4		48	41					3	2		6, 6	3		25, 70, 20		8			
	4	R	4	4			4	1	1	2	1, 3, 1	3			3	2						
		L	5	3			3, 1	1, 4	2	1, 1, 1	1 1	1 4	1 1		2	2			1		41	165
		不	9	4	15	7	9	1 1			1	2				1	9					
	5	R	1					1	1, 1													
		L			1						1, 1										3	14
		不			3		1															
	6	R						2				1										
		L		1			1						1								1	9
		不	1									1										
	7	R	2	1	2		1	1, 5	1, 5, 1	1	1	1			1				1			
		L	1					1	1		1	1, 1	1 2	1	2	1			2		15	96
		不	6	1	17	4	9				2						3					
	8	R					1								1							
		L					2															7
		不					3															
	9	R					1	1	1													
		L						1				1	1			1					4	12
		不			1																	
	10	R						1	1, 2	1		1	1		2	1			2			
		L	1		1			1						1	1						45	89
		不	1		9	8		2		1	1	1					4					
	11	R	2	2	1		6	1 1	4, 3, 3	2, 3	3 1	2, 2, 3	2		5	2	2					
		L	1	2	2		4, 1	1	1, 3, 1	1, 1, 2	1, 2	3, 1, 1	2, 1, 2		3	3			1		43	209
		不	10	5	16	24	1	1				1		2			12	1	2			
	12	R	6	12	1		8, 1	3, 5, 7	2, 8, 2	9, 8, 3	3, 3, 3	7, 5, 15	7, 6, 9	1 1	8	4			3			
		L	8	9			9	4, 9, 11	3, 3, 2	1, 5, 2	8, 2, 6	8, 10, 5	7, 4, 9		7	3	1	1	3		116	692
		不	29	10	102	71	4	6			8	6	1, 2	1		1	45					
	13	R						2	3, 1	2		3, 1	1									
		L					1	3	2			1, 1, 2	2, 1		1						20	51
		不		1	2	1																
	14	R	4	3				2, 1	3, 3	1, 2, 3	2	1	2 1	1	8	8		9	12			
		L	2	3	2			4	1, 1, 1	4 4	1	2 2	4, 2, 5	1, 1	8	4		12	23		116	755
		不	64	7	89	121	1	3, 1, 1		1	2	7	1	12	2		141, 4	8	3	18		
	15	R	1	4	2		2	2, 2, 2	4	2, 2	1, 1	2, 2, 2	1	1	3	2						
		L	4	7			3	1, 3, 7		2		1, 1, 3	1, 2, 1			1		1			107	278
		不	15	8	30	23		3				2		4			9			1		
	小計	R	20	27	6		22, 3	9, 13, 19	12, 28, 11	13, 16, 12	7, 9, 7	12, 13, 26	10, 7, 13	2 2	32	22	2	16	27	11		
		L	22	25	6		23, 4	5, 14, 33	9, 10, 5	7, 9, 9	11, 4, 10	17, 14, 18	20, 10, 21	1, 2	25	16	1	29	41	12	544	2,728
		不	140	36	332	300	28	16, 1, 2		1, 1	17	22	1, 3	25, 6	2 3	2	25, 293, 24	9	13	19		
合計		R	94	117	18	0	77, 33, 1	19, 38, 76	29, 113, 60	45, 26, 29	26, 26, 29	45, 27, 70	48, 19, 49	3 6	98, 1	66	2	27	56	11		
		L	84	105	14	0	66, 18	12, 37, 95	43, 60, 13	44, 17, 28	26, 16, 28	36, 43, 77	60, 26, 54	2, 1, 9	92	55	5	39	83	12	2,564	8,213
		不	483	158	668	609	65	25, 8, 17	3, 2	2, 2, 2	32, 2	45, 1, 2	6, 12	38, 6	2 3	10	26, 621, 28	27	20	39		

注：P→近位端　Ⓢ→骨体　d→遠位端

第78表　イノシシ歯牙出土状況

調査地	層	上顎骨 R $I^{1\,2\,3}$ C $P^{1\,2\,3\,4}$ $M^{1\,2\,3}$ / $i^{1\,2\,3}$ C $m^{2\,3\,4}$	上顎骨 L $I^{1\,2\,3}$ C $P^{1\,2\,3\,4}$ $M^{1\,2\,3}$ / $i^{1\,2\,3}$ C $m^{2\,3\,4}$	下顎骨 R $I_{1\,2\,3}$ C $P_{1\,2\,3\,4}$ $M_{1\,2\,3}$ / $i_{1\,2\,3}$ C $m_{2\,3\,4}$	下顎骨 L $I_{1\,2\,3}$ C $P_{1\,2\,3\,4}$ $M_{1\,2\,3}$ / $i_{1\,2\,3}$ C $m_{2\,3\,4}$	切歯骨 R L 不	歯 fr	犬歯不明 fr	犬歯不明 上顎	犬歯不明 下顎	P fr	M fr	m fr	合計
D I 22	4	♂1 1 3 1 2	1 1 1	1 3 1	1 2 2		3					1		26
	5			1	♂1 1									3
	6	1 1 1		♂1			3							7
	7		1 1											2
	8	1												1
	9	1 2 3 1	2 5 5 5 2	♂1 2 3 4 3 2	♂2 1 1	9	1		1					56
	小計	♂1 1 2 7 5 3	1 2 6 6 7 3	♂2 2 3 5 6 4	♂3 1 2 4 1	9	7		1		1			95
D I 23	2		1	♂1		2								4
	3	1	1 1			3		2		1				9
	4	1 1 2 3 3	♂1 1 2 1 5 2 1	1 ♂1 3 2 1	1 1 2 1 2	1		1	6		2			48
	5	1 2	1				4			1				9
	6	♂1 1 1 2 3 3 2	1 1 1	♂2 1	♂1 1 1 2 3 6 1	1 5	5	1			2			48
	7	1 1												2
	8	1 1	1 1 1 1 1 1	1 2 2	1 1									15
	9		1 2 3 4	2 1	1 ♂2 1 1 1	1	2				1			23
	10	♂1 5 7 9 7 6	2 10 7 1	♂4 ♀1 1 2 4 3 5 4	♂3 ♀3 1 3 4 1 3 3 7	2 8	21		1	1	4			144
	11	3 4 4 2	1 1 1	1 1 2 2 2 3	♂1 1 4 1	3					1			38
	小計	♂2 3 8 15 21 19 11	♂1 1 2 5 8 18 14 10	1 ♂8 ♀1 2 3 6 12 12 10	1 ♂7 ♀3 3 1 3 7 5 9 15 11	1 3 22	32	2	2	7	3	10		340
D I 24	2	1	1 1	1	♂1 1	1	1					1		9
	3	1 1 2 1	2 2	1	♂2	8	8			3	1	1		33
	4	♂1 1		1 1 1	♂2 3 3 2		2			1	1	2		21
	5	1 1		1 1			2					3		9
	6	1	1 1	1 1 ♂3 1 1 1	1 ♂2 1 1	1 8	1							26
	7	2 3 4 3	1 1 2 1 2	♂2 2 1 2 2 1	♂1 1 1 1 2 1	4	2	2			1	3		48
	8	♂2 1 1 1 1	1 2 5 2	♂1 2	♀1 1 1	1 5								28
	9	1 ♂3 1 1 8 12 23 18 13	♂3 4 9 11 13 9	1 1 ♂19 ♀2 2 5 5 11 10 13	1 ♂16 ♀4 2 3 1 5 5 6 11 15 13	3 2 31	28			2	3	9		358
	10	1 ♂1 ♀1 1 1	1 ♂1 ♀1 1 1 1	♂1 1 2 3 2 1	♂1 1 1 2 1	4	3		1					35
	小計	1 ♂7 ♀1 2 1 9 17 30 28 17	1 1 ♂4 ♀1 6 13 22 20 12	2 2 ♂26 ♀2 2 3 8 10 17 18 17	2 ♂25 ♀5 2 3 1 8 8 7 18 21 17	3 4 61	47	2	1	6	6	19		567
G I 22	2	1 1 1	1 1 1							1	4	1		12
	4	2 2 2 1 1	1 2 2	♂1 1 1 1 2 2 3	♂2 1									27
	5		1 1 1 1											4
	6		1 1 1 1		1 1									6
	7	1 1 1 1	1 1 1 1		1									9
	9			1 1 1										3
	10		1 1	1 1 1 2	1 1	1	1				1			12
	11		2 1	1 3 4 3	1 2 1		2							19
	12	♂1 1 2 4 3 1	1 1 1 2 4 5	2 ♂2 1 2 2 3 2 3 2	1 ♂4 1 2 1 1 2 4 2 1	2 10	3				1			80
	13				♂1 3 2 2									8
	14	3 4 6 4 1	♂1 1 3 7 2 5	♂2 1 1 1	♂3 1 1 2	1 34	2			23	9	1		120
	15	1 1 2 6 6 2	1 1 3 4 3	2 1 10 8	♂1 3 2 3	12	2	6		4	3			87
	18						1							1
	小計	1 ♂1 1 1 7 12 20 16 5	♂1 2 1 3 12 23 18 10	2 ♂5 1 1 4 3 4 6 11 24 14	2 ♂11 1 3 1 2 3 14 10 8	3 57	11	6		1	31	15	1	389
合計	2	1 ♂11 ♀1 3 5 25 46 78 68 36	1 1 ♂6 ♀1 3 1 3 16 39 69 59 35	4 3 ♂41 ♀3 1 1 6 8 17 25 45 60 45	5 ♂46 ♀8 3 9 2 12 17 16 43 50 37	4 10 149	97	10	3	15	40	45	1	1,391
不明		1 1 3 6 4 1	1 2 1 5 2 2	1 1 2 3	♂1 1 1 2	2	3					1		47
最少個体数	2	1 ♂11 ♀1 4 6 25 49 84 72 37	1 1 ♂6 ♀1 3 1 4 18 40 74 61 37	4 3 ♂41 ♀3 1 1 7 8 17 26 47 63 45	5 ♂47 ♀8 3 1 9 2 12 17 16 44 52 37	4 10 151	100	10	3	15	40	46	1	1,438 / 84

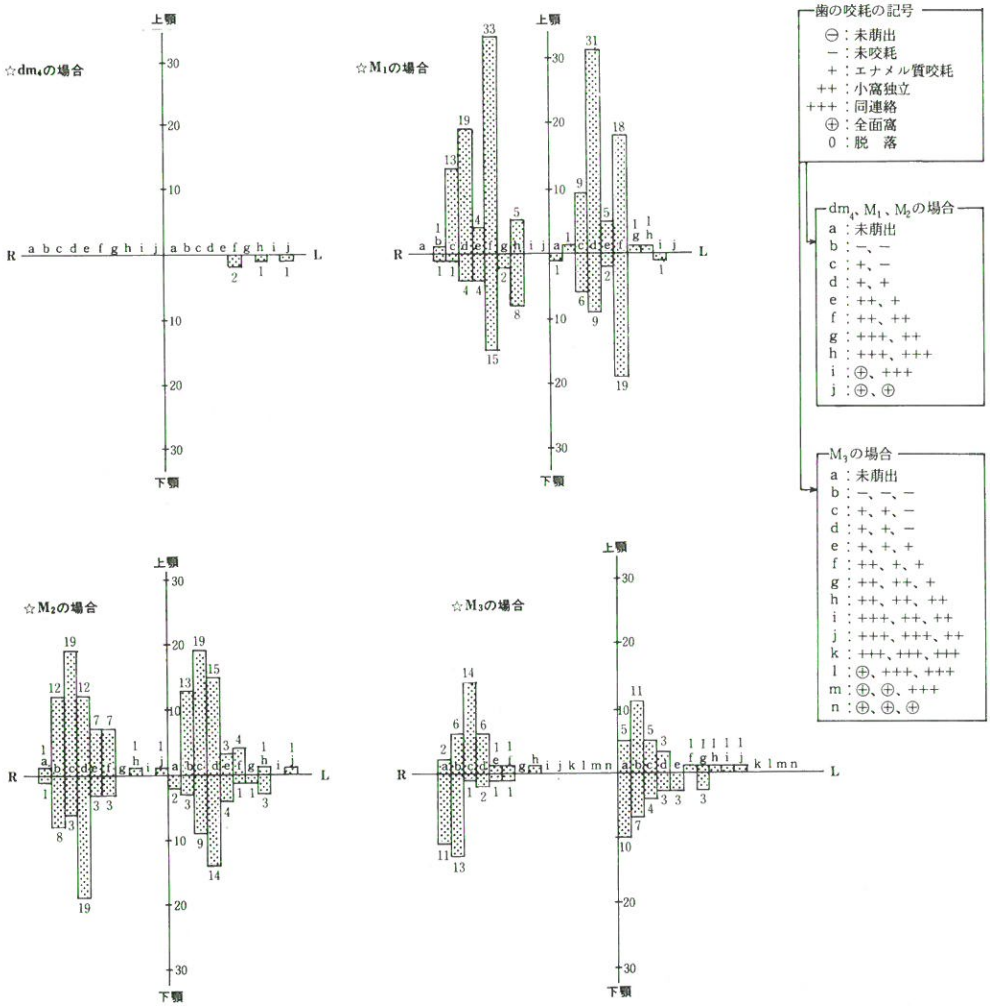
注：I→切歯　C→犬歯　dm→乳歯　P→前臼歯　d→後臼歯

イノシシ：破片総数9651個で、その85.4%が四肢骨である。最少個体数は右距骨の98個体である。上腕骨、尺骨、橈骨、脛骨等はほぼ完形に近い形で残こる。出土量から食料残滓の中で最も多く、食料の主流をなしていたと思われる。第79表にdm_4～M_3の歯の咬耗度分布を表わした。前述の下田原貝塚と比較できるであろう。

小　結

以上、食料残滓について記述したが、骨の中ではイノシシが全体の87.6%と圧到的に多く、大泊浜貝塚の採集の主体をなしていたと思われる。また、沖縄本島でみられるようなジュゴンの出土はなく、海ガメは3.4%程である。魚骨は7.4%と少ないが大きな顎骨からかなり大型の魚を捕獲していたと思われる。貝類は前述したごとく、下層と上層では変化があり、採集海域の変化等を窺わす資料である。いずれにしても、下田原貝塚等の資料を含めて食料の変遷をより深化させ、漁具、猟具を含めた検討が必要であろう。

第79表　イノシシ歯咬耗度分布



第6章　総　　括

第5章までに発掘調査で検出された遺構や遺物などについて述べたが、最後に主な成果をまとめて結びとする。

本遺跡の発掘調査で土器が1片も検出されず、本遺跡は無土器遺跡であることが確認された。波照間島にも無土器文化が存在していたことが明らかにされた。

第4層で薄手の白磁玉縁碗、薄手の白磁端反り碗、須恵器壺、滑石製石鍋、褐釉陶器壺、鉄鑿などが検出され、無土器遺跡の下限が遺物によって解明された。薄手の白磁玉縁碗と薄手の白磁端反り碗は12世紀に編年されている中国陶磁器であり、13世紀までは下がらないと考えられる。薄手の白磁玉縁碗、須恵器、滑石製石鍋の共伴出土は熱田貝塚で確認されており、熱田貝塚も12世紀に編年されている。(注1) なお、鉄鑿は同じ無土器遺跡の船浦貝塚でも検出されている。(注2) この鉄鑿は第4層の遺物であり、薄手の白磁玉縁碗などと共伴しており、12世紀の遺物と考えられる。

本遺跡から検出された木炭による放射性炭素の年代はつぎのとおりである。(注3)

D－22第6層	1350±75 yB．P．	(1370±75 yB．P．)
D－22第10層	1770±70 yB．P．	(1720±65 yB．P．)
G－22第11層	1560±70 yB．P．	(1510±70 yB．P．)

この結果は古く出ていると思われる。第4層が12世紀であり、第6層のC^{14}年代とは400年以上の差がある。層の堆積状況から見て、そんなに大きな年代差は考えられない。

無土器遺跡において明確な住居跡がまだ確認されていない状況下で、プランの明確な礫床住居跡の検出は重要である。約2.5m×2mの方形状の礫床住居跡で、礫床内に6本の柱穴が廻り、隅に楕円形状の炉跡をもつなどが解明された。しかも、礫床にテーブルサンゴ（ミドリイシ科）を割った拳大の角礫が使用され、隙間に枝サンゴ片を詰めて平担な床面をつくっていることなども解明された。

炉跡の検出も重要である。第6層の炉跡は円礫を敷いた円形状の炉跡であり、第11層の炉跡は何も敷かない楕円形状の炉跡である。時期によって炉跡にも差異があるものと考えられる。しかも、第11層の炉跡には2本の柱穴が付いており、炉の使用方法を考える上で好資料である。

埋葬人骨については、副葬品が1点もなく、時期決定することは困難であるが、層序から見て、第4層（12世紀）以後であり、第1・2層形成以前である。第1・2層の形成時期は明らかでないが、人骨の歯の咬耗度が進んでいることから見て、新しい人骨ではないと考えられる。

19層にも及ぶ層序には圧倒される。19層で約3.4mの厚さがあり、このように厚い層序は無土器遺跡では外に類を見ない。何年でこれだけの層序が形成されたのか、遺物からの研究と同時に地質学からの研究が必要である。

注1　「熱田貝塚発掘調査ニュース」　沖縄県教育委員会　1978

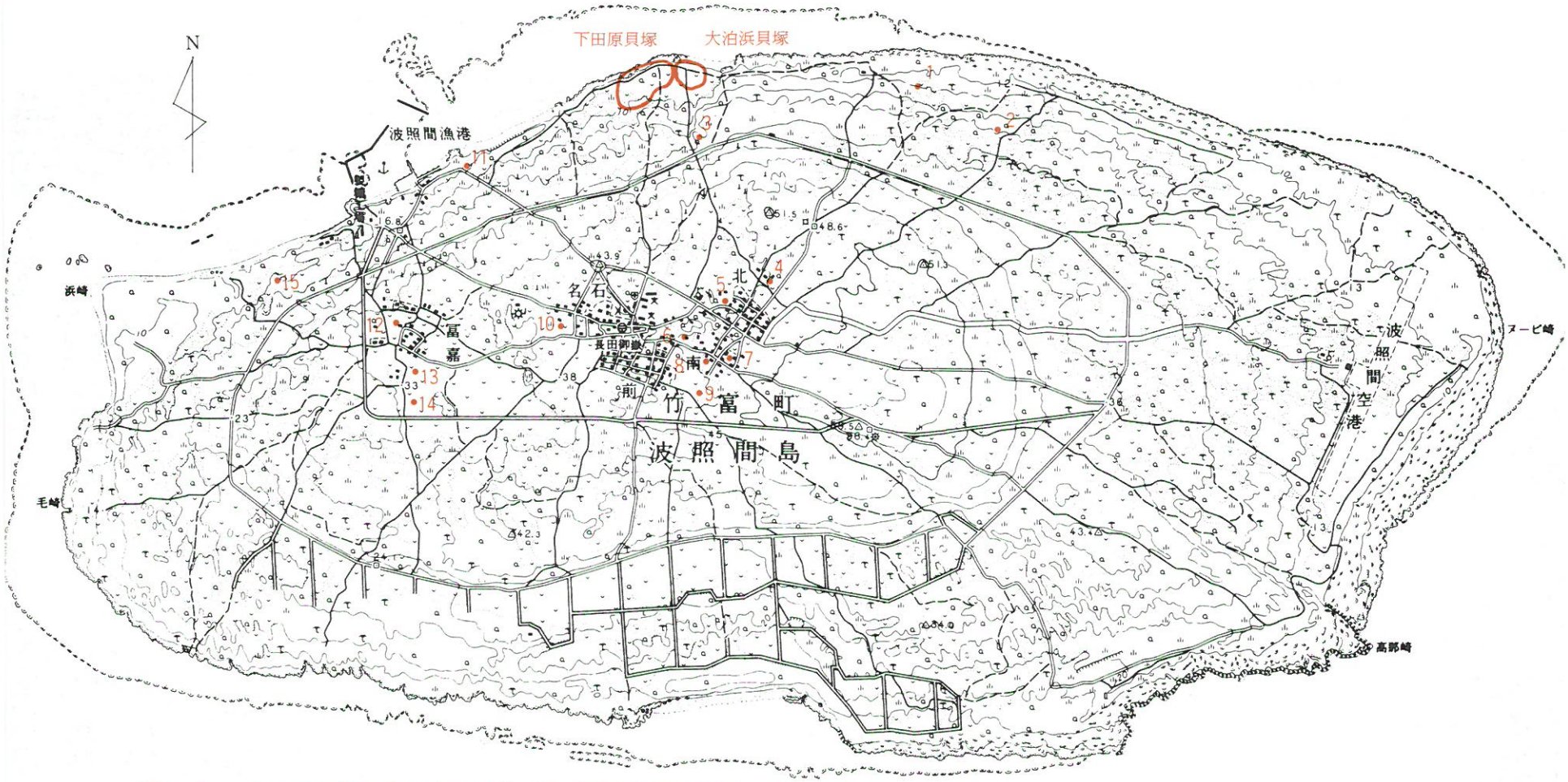
2　R. J. PEARSON, S. ASATO et al 「Excavations on Kume and Iriomote, Ryukyu Islands」Asian Perspecfives, XXI(Ⅰ), 1978

3　社団法人日本アイソトープ協会で測定された。1985年12月10日

図　　版

凡　例

- PL．2～PL．57までは下田原貝塚
- PL．58～PL．77までは大泊浜貝塚
- 遺物のPL．と実測図は対向頁に同一番号で示した。
- PL．1の空中写真はカラー写真からの複写合成であり、鮮明度が悪い。
- 実測図で、土器の拓影と石斧の研磨面は網撮りである。



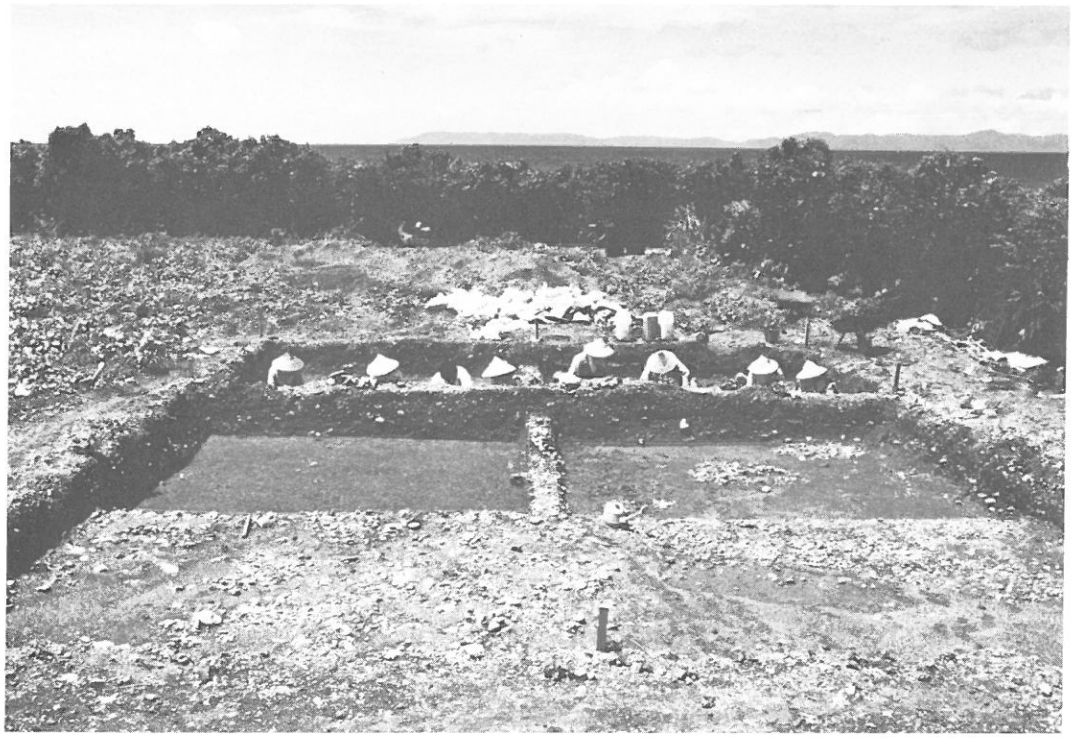
1. 伝マシュク村跡遺跡	6. 大底御嶽周辺遺跡	11. イナサイ遺跡
2. 伝シムス村跡遺跡	7. 新本御嶽周辺遺跡	12. 保多盛御嶽周辺遺跡
3. 下田原城跡	8. 伝オヤケアカハチ生誕の地	13. 伝ヤグ村跡遺跡
4. 美底御嶽周辺遺跡	9. 伝ウツォウ村跡遺跡	14. 伝ペーミシュク村跡遺跡
5. 北部落内遺物散布地	10. 名石御嶽周辺遺跡	15. 伝ミシュク村跡遺跡

1：25,000

500 0 500 1000 1500 2000m

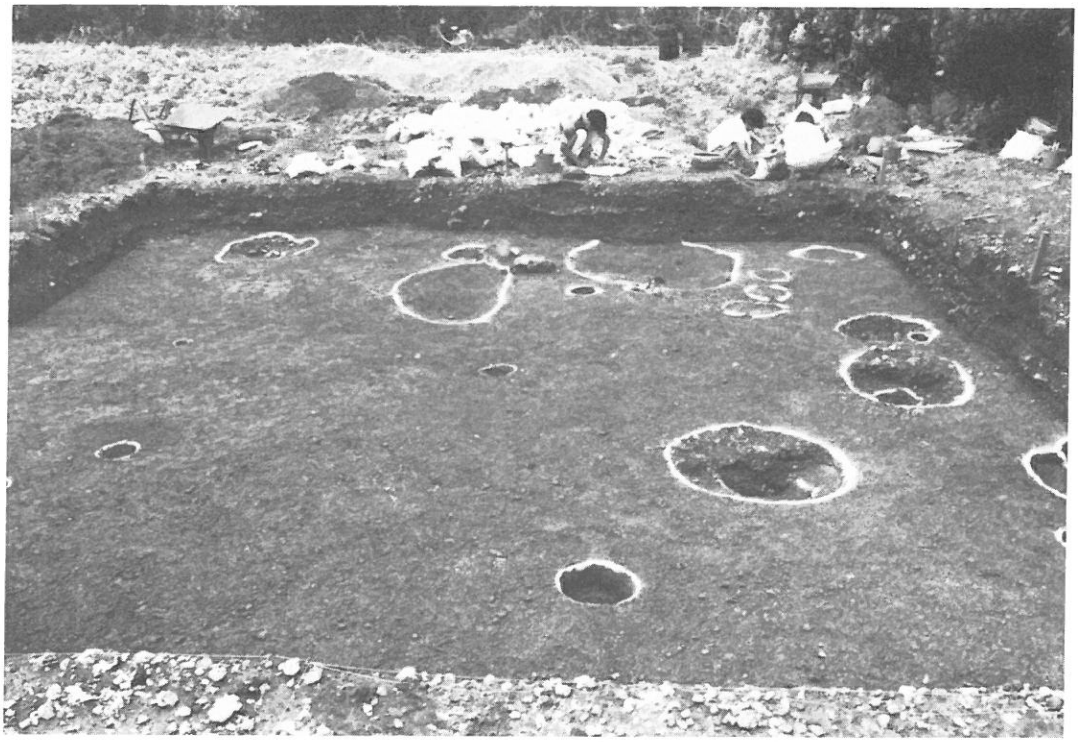
第13図　遺跡分布地図

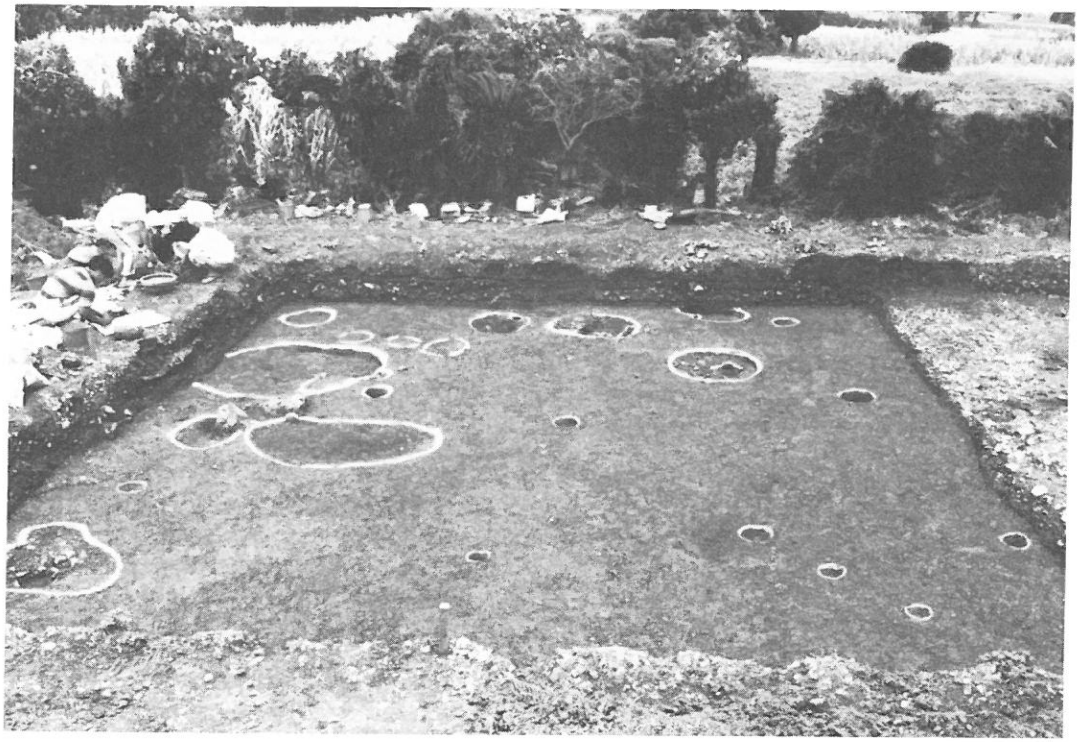
ＰＬ．１（第13図）　波照間島の空中写真　　1977年撮影（１：25,000）



PL. 2　上：遺跡遠景（1は下田原貝塚、2は大泊浜貝塚）　南から
下：下田原貝塚第2地区の発掘状況（遠くの島は西表島）　南から

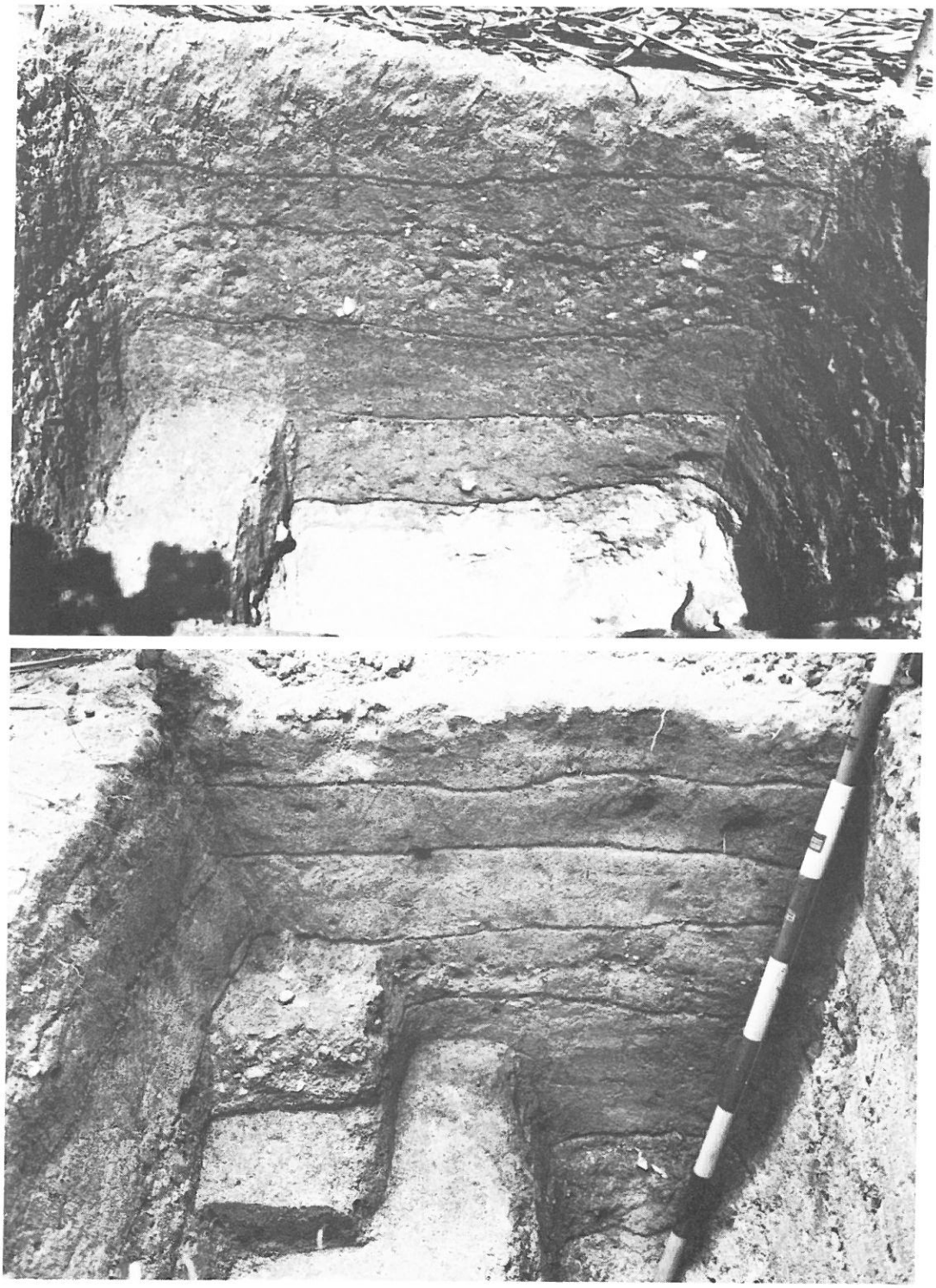
PL. 3　上：下田原貝塚第１地区西側で検出された溝状遺構　西から
下：下田原貝塚第１地区東側で検出された貝塚　西から



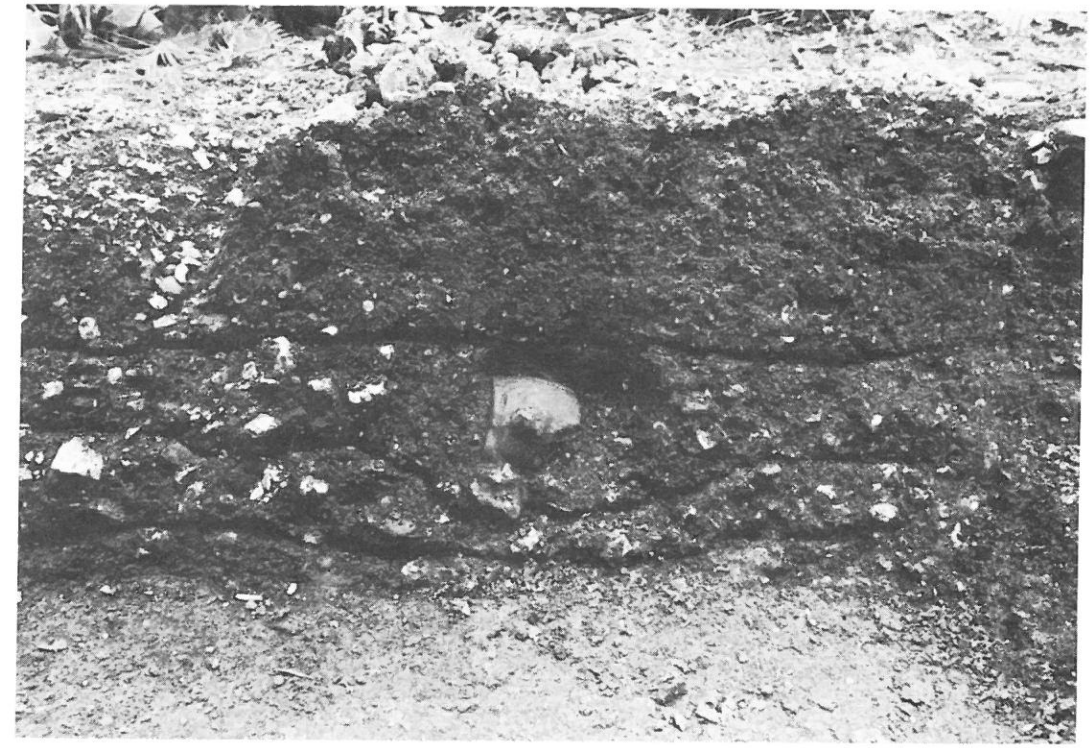


PL. 4　上：下田原貝塚第２地区で検出された柱穴や炉跡　南から
下：下田原貝塚第２地区で検出された柱穴や炉跡　西から

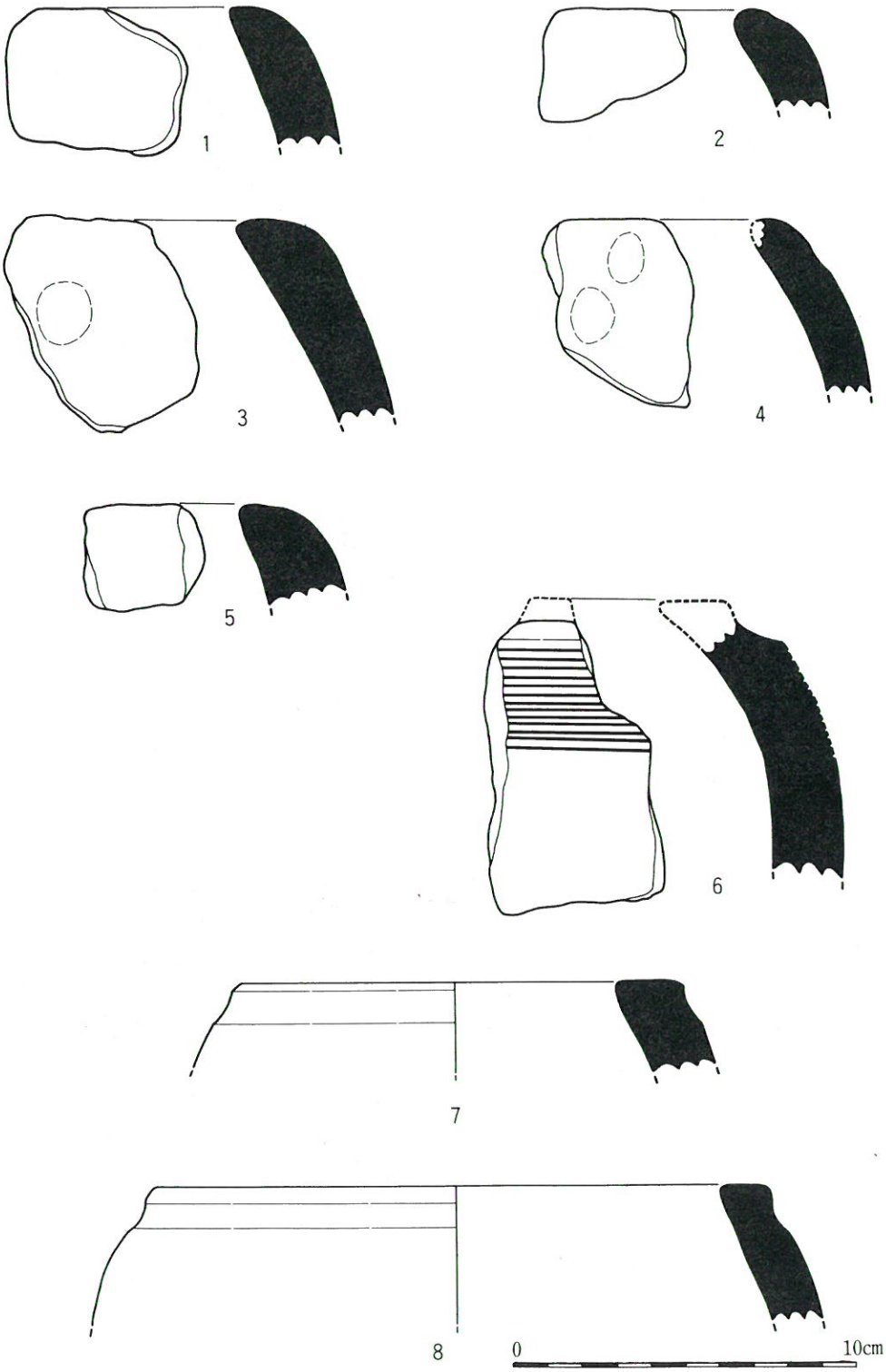
PL. 5　上：下田原貝塚第３地区で検出された土壙（第３図右下）　西から
下：下田原貝塚第２地区の層序（第３図上）　西から



PL. 6　上：下田原貝塚ケ－74グリッド東壁の層序（第３図）　北から
　　下：下田原貝塚ケ－76グリッド南壁の層序（第３図）　北から

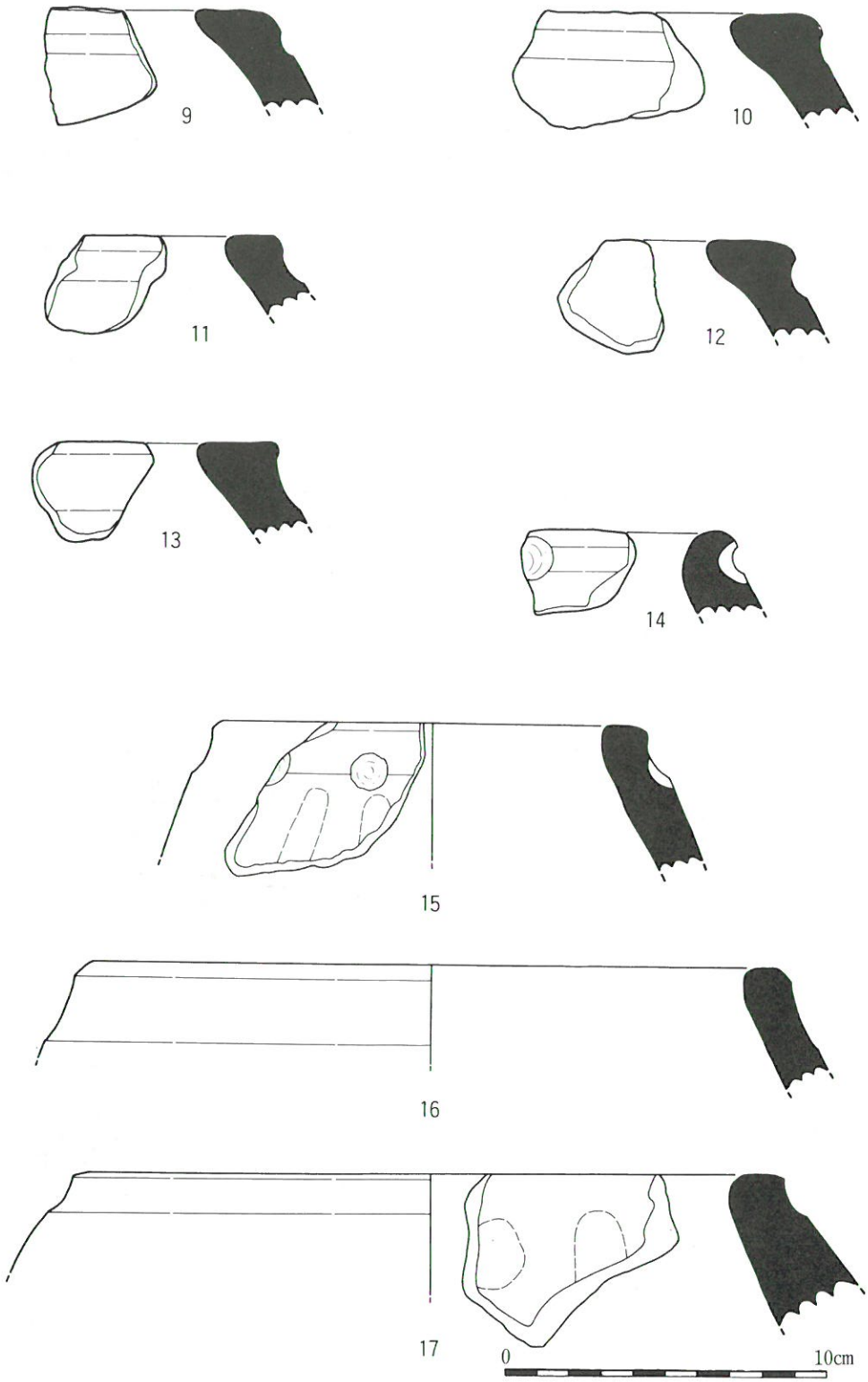


PL. 7　上：下田原貝塚第２地区で検出された下田原式土器　西から
下：下田原貝塚第２地区で検出された石斧とサメ歯製品（A）

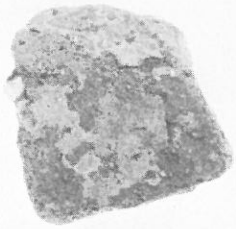


第14図（PL．8 ）　　A群土器（Ⅰ類a－1～5　Ⅰ類b－6～8）

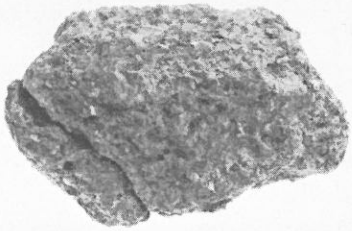
PL. 8　土　器



第15図（PL．9 ）　　A群土器（Ⅰ類b－9～13　Ⅱ類a－14～17）



9



10

11

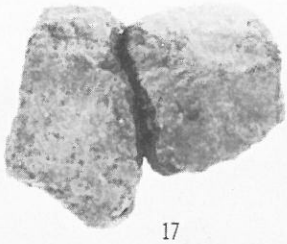
12

13

14

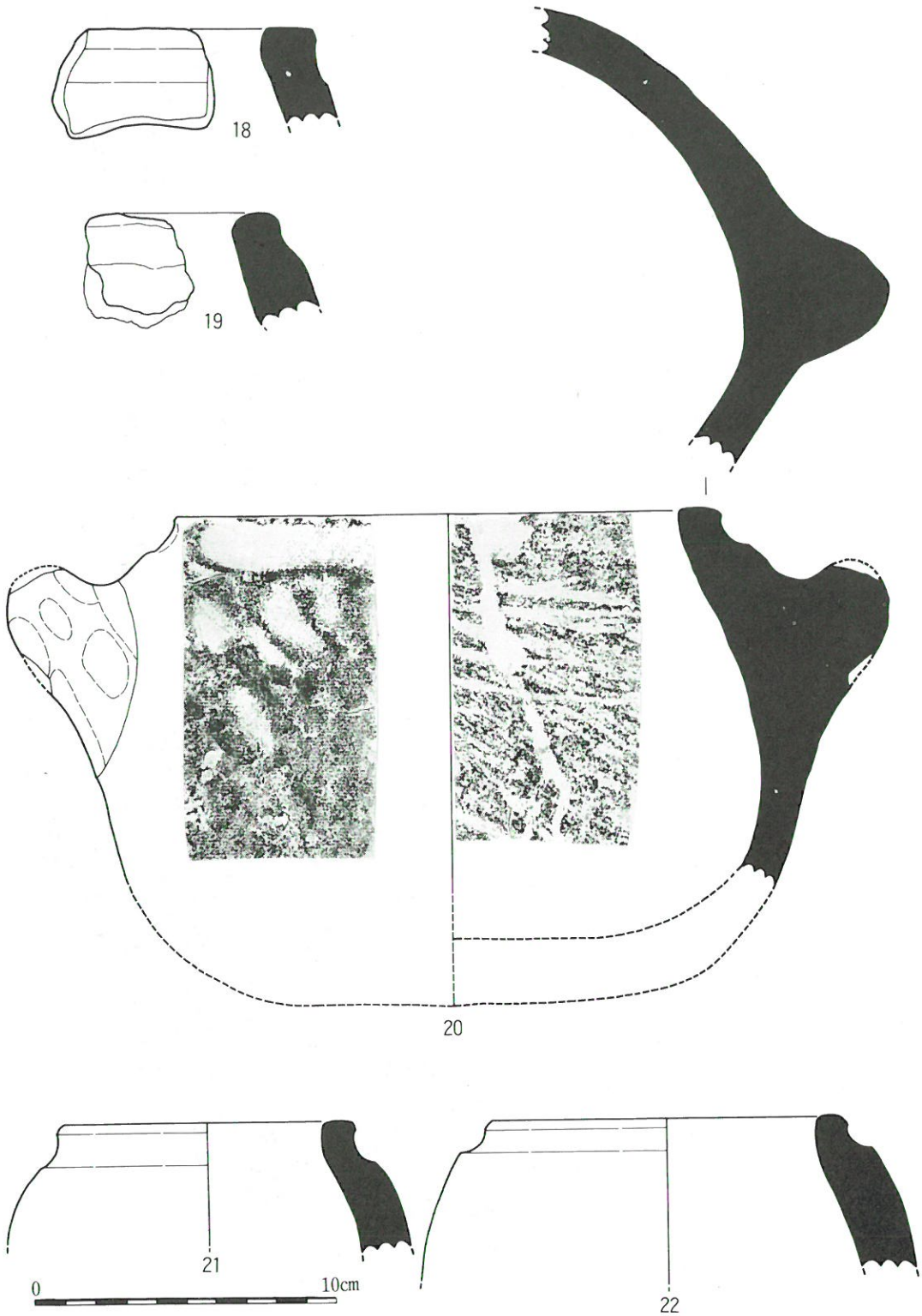
15

16



17

PL. 9　土　器



第16図（PL.10）　A群土器（II類a－18～20、II類b－21・22）

18

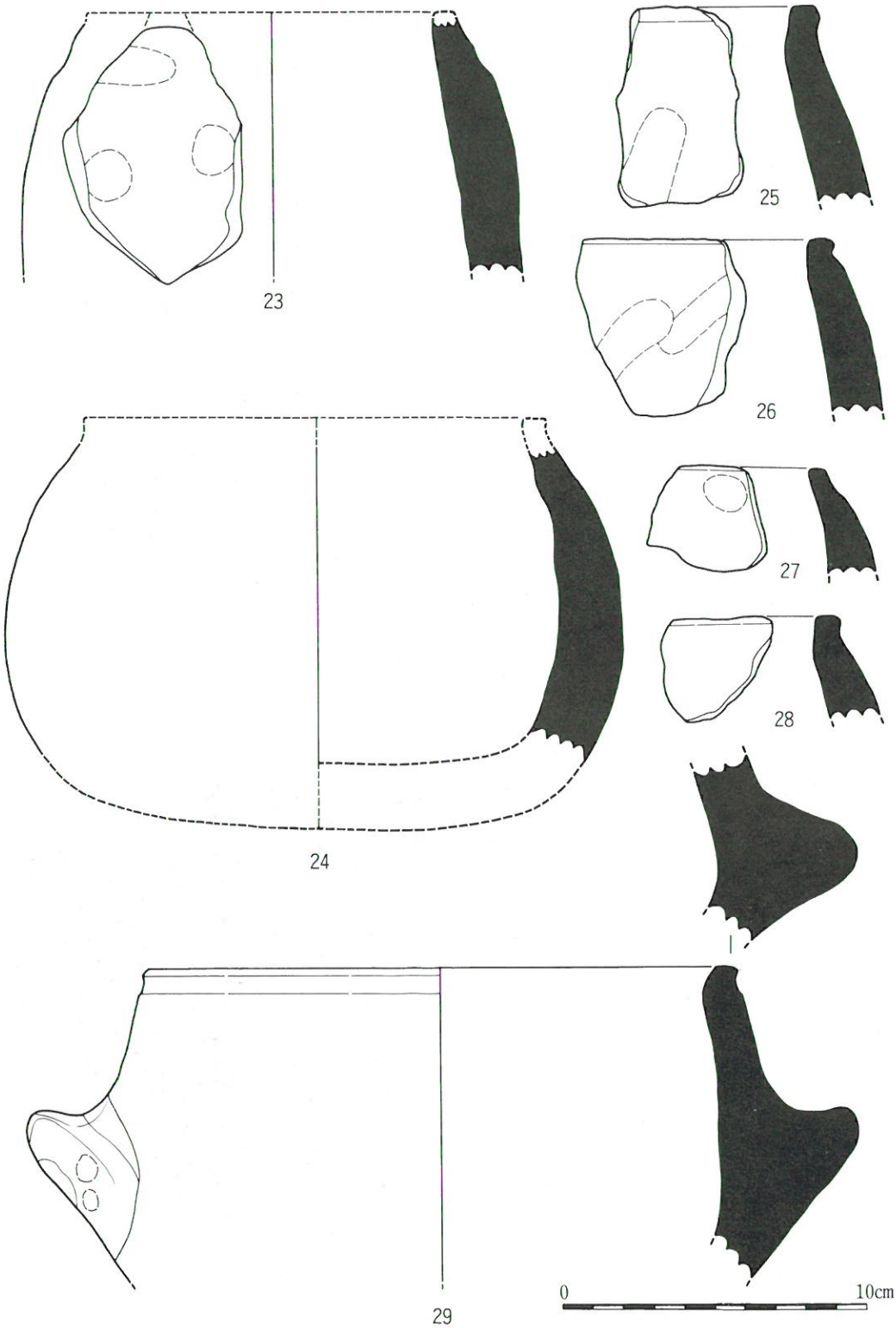
19

21

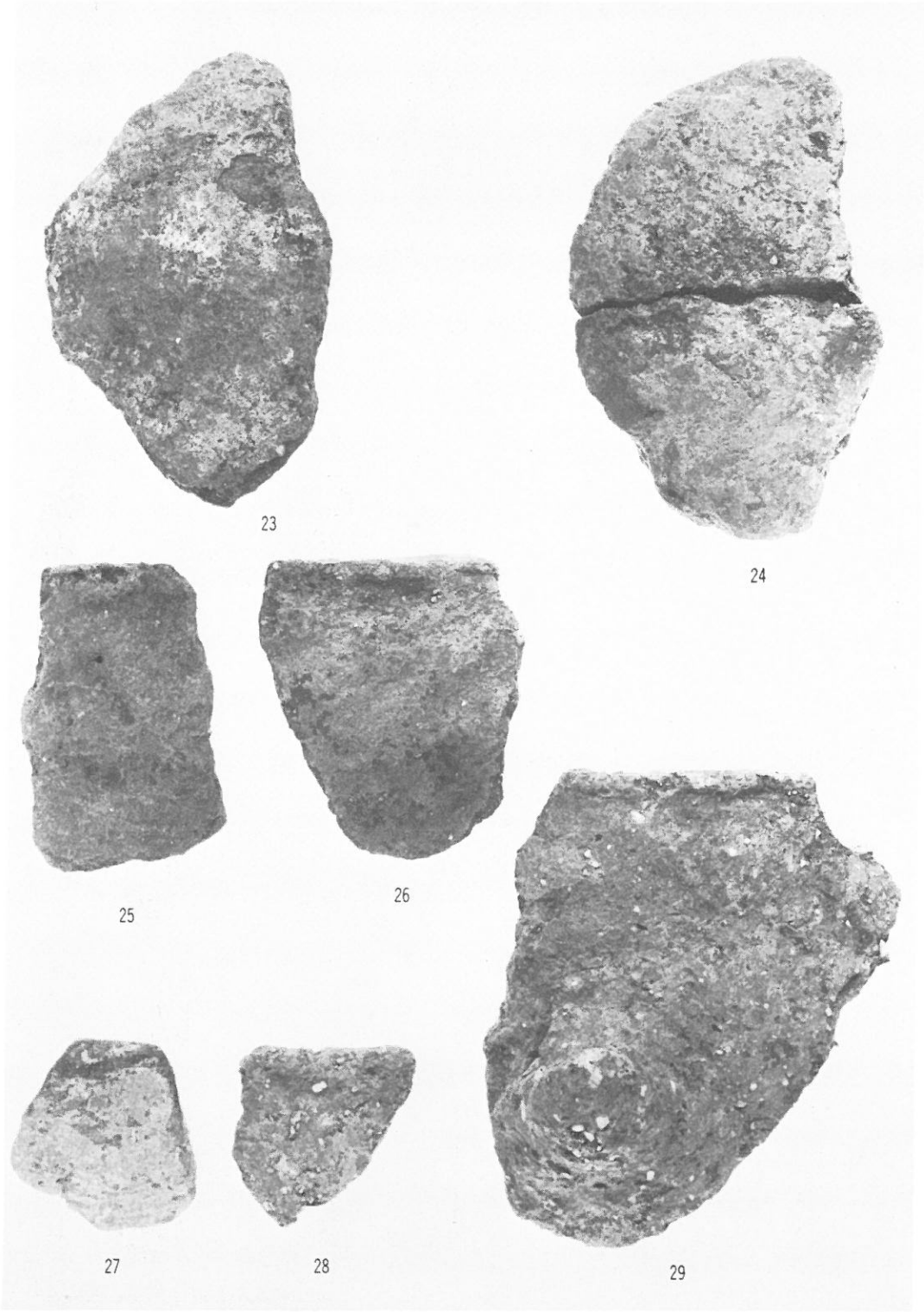
22

20

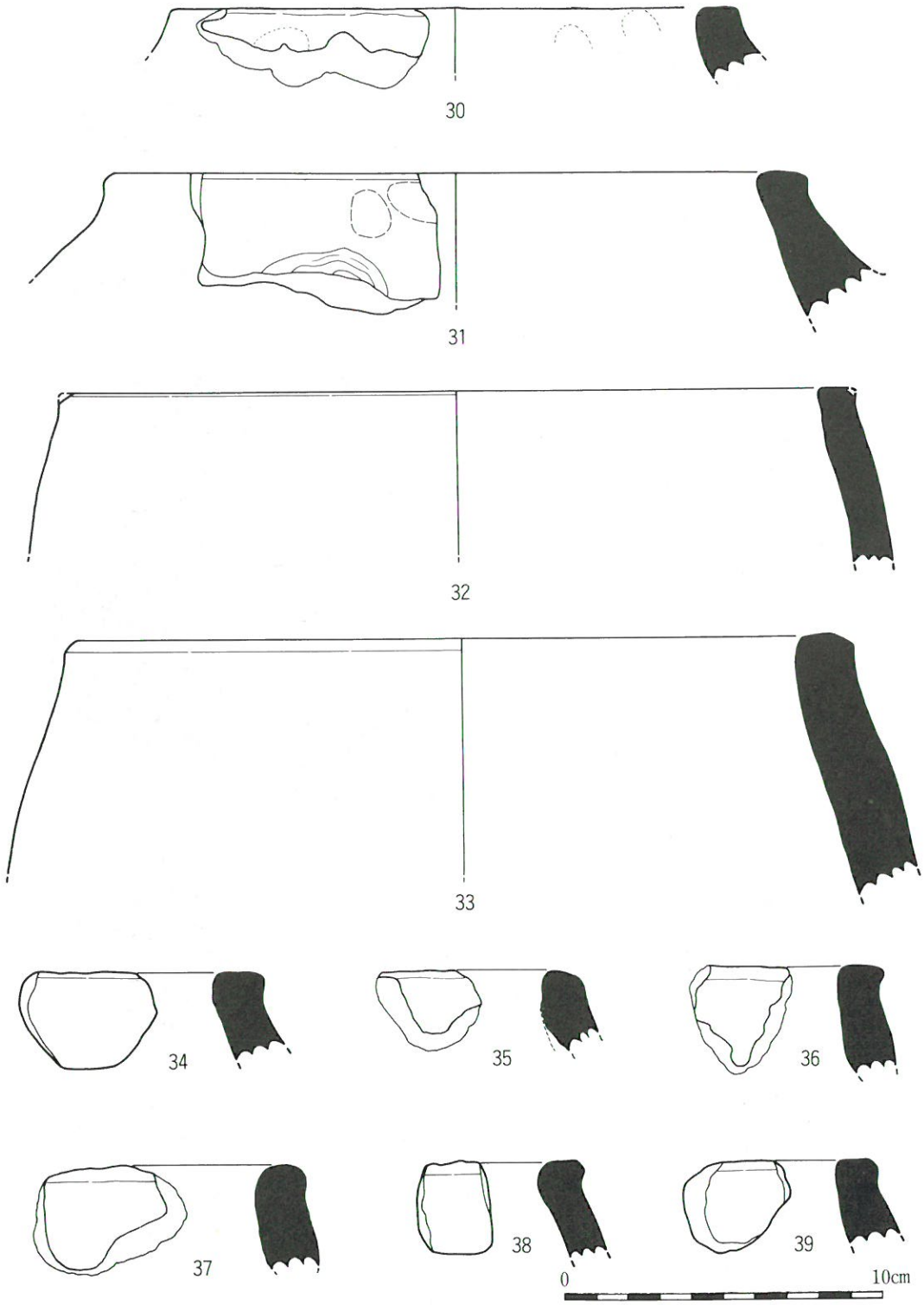
PL. 10　土　器



第17図（PL.11）　A群土器（II類c－23～29）

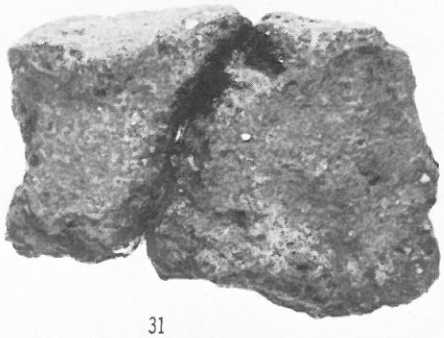


PL. 11　土　器

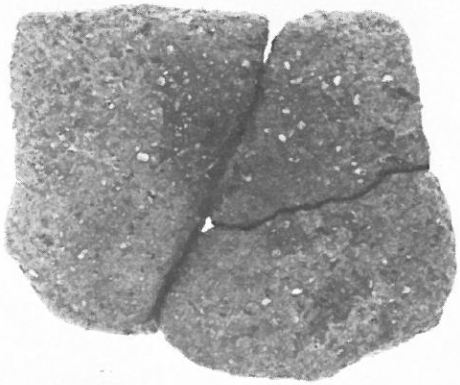


第18図（PL．12）　　A群土器（II類d－30～39）

30



31



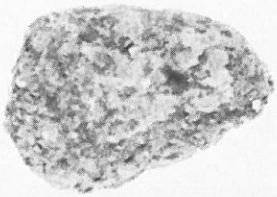
32

33

34

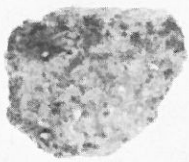
35

36



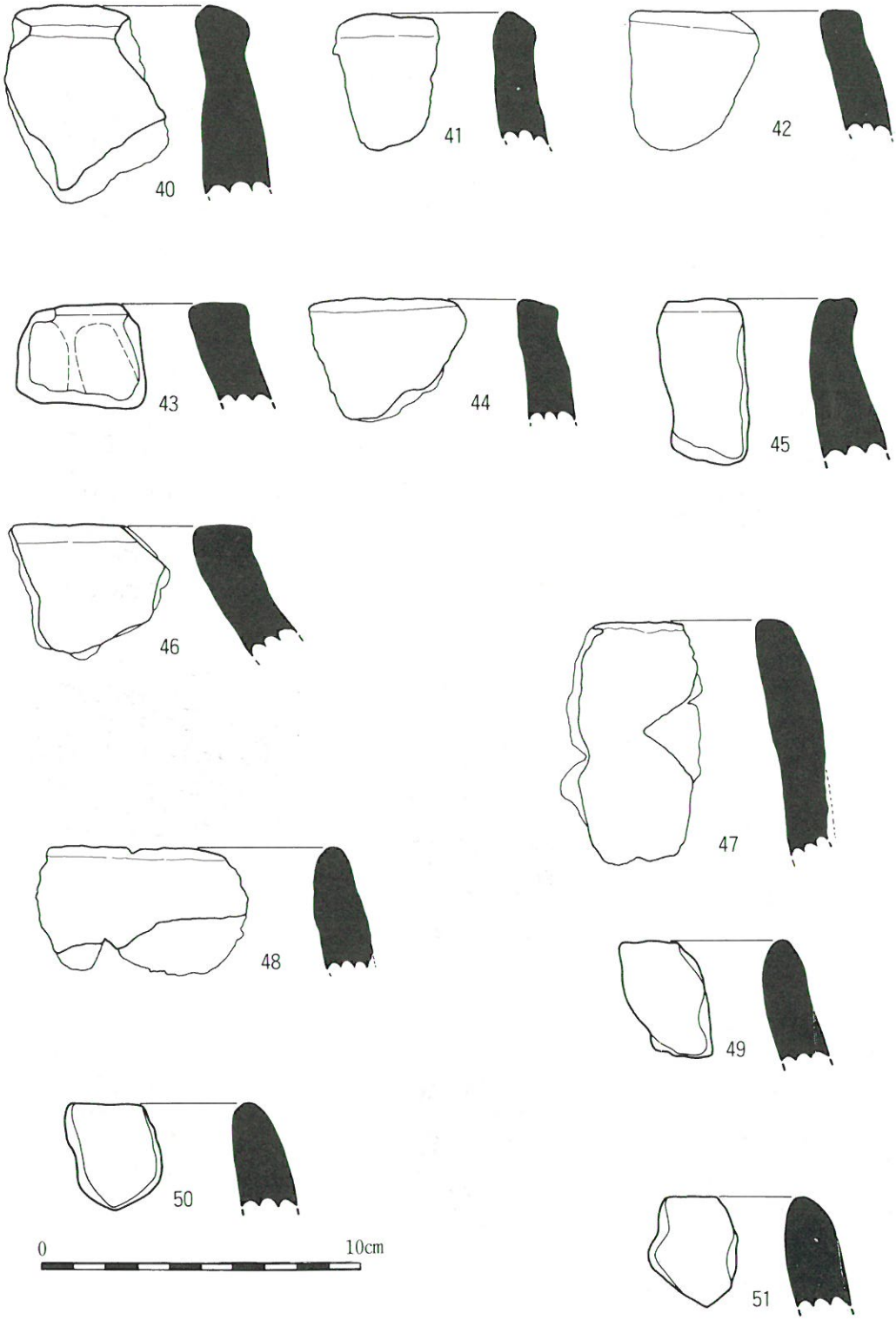
37

38

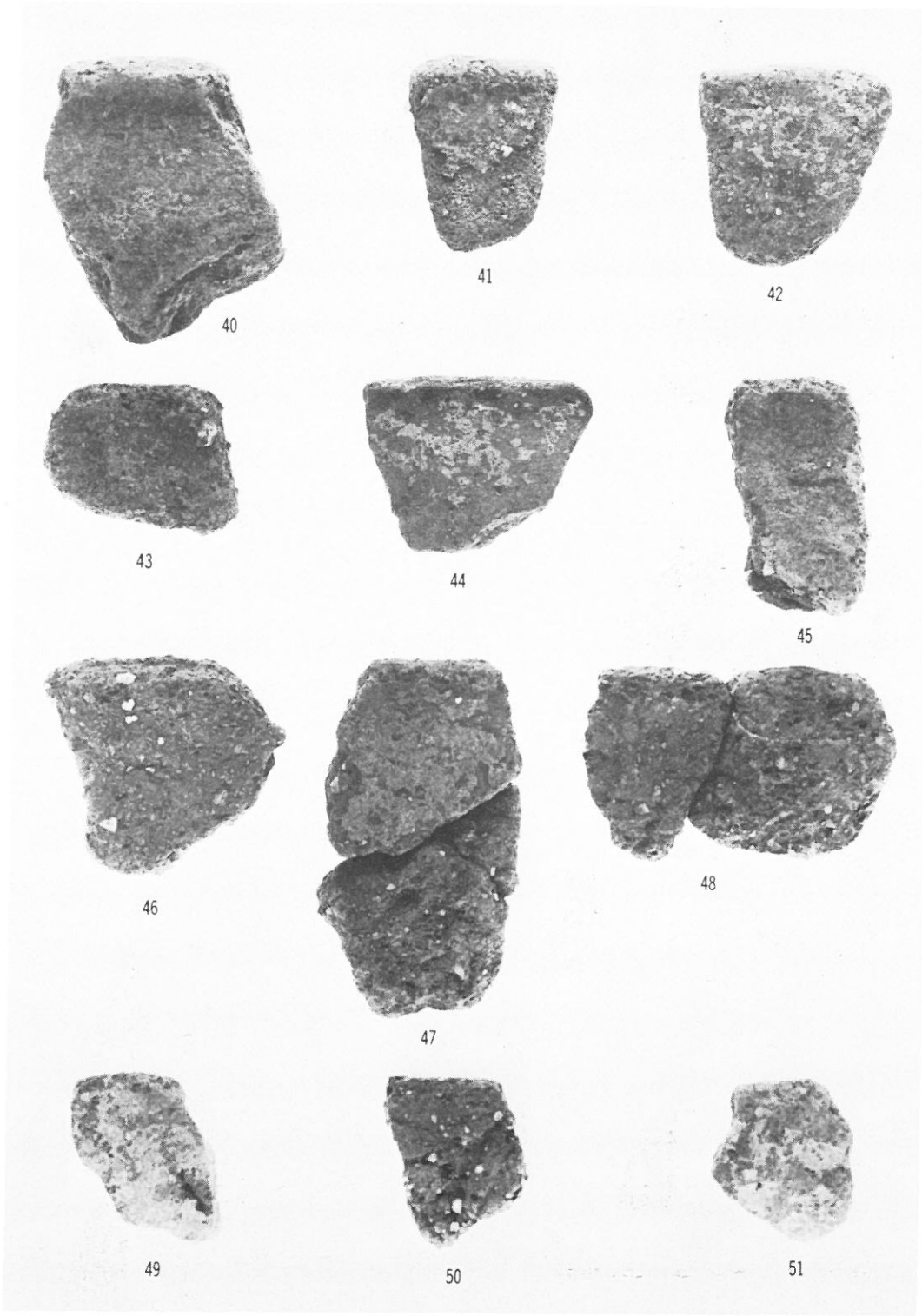


39

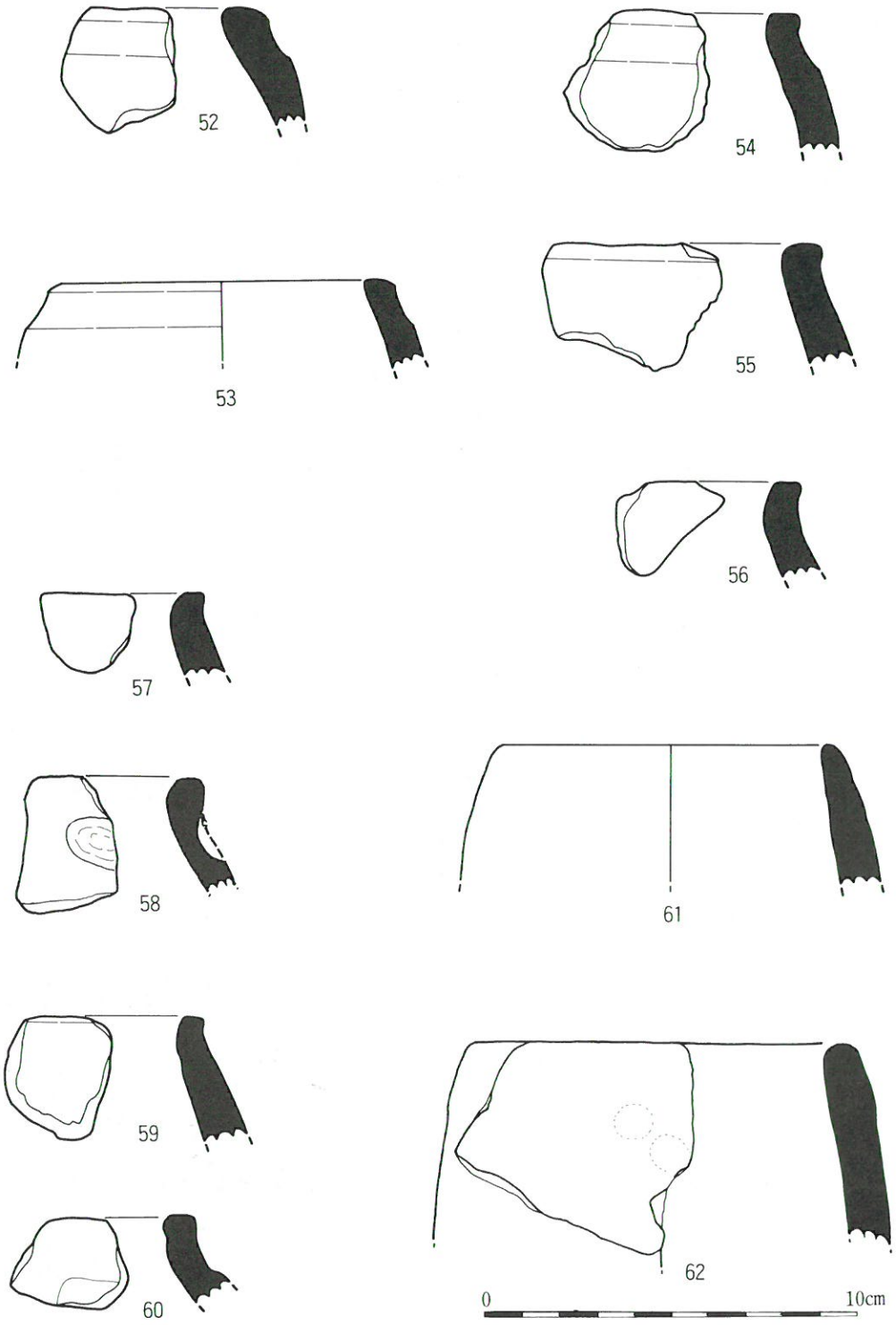
PL. 12　土　器



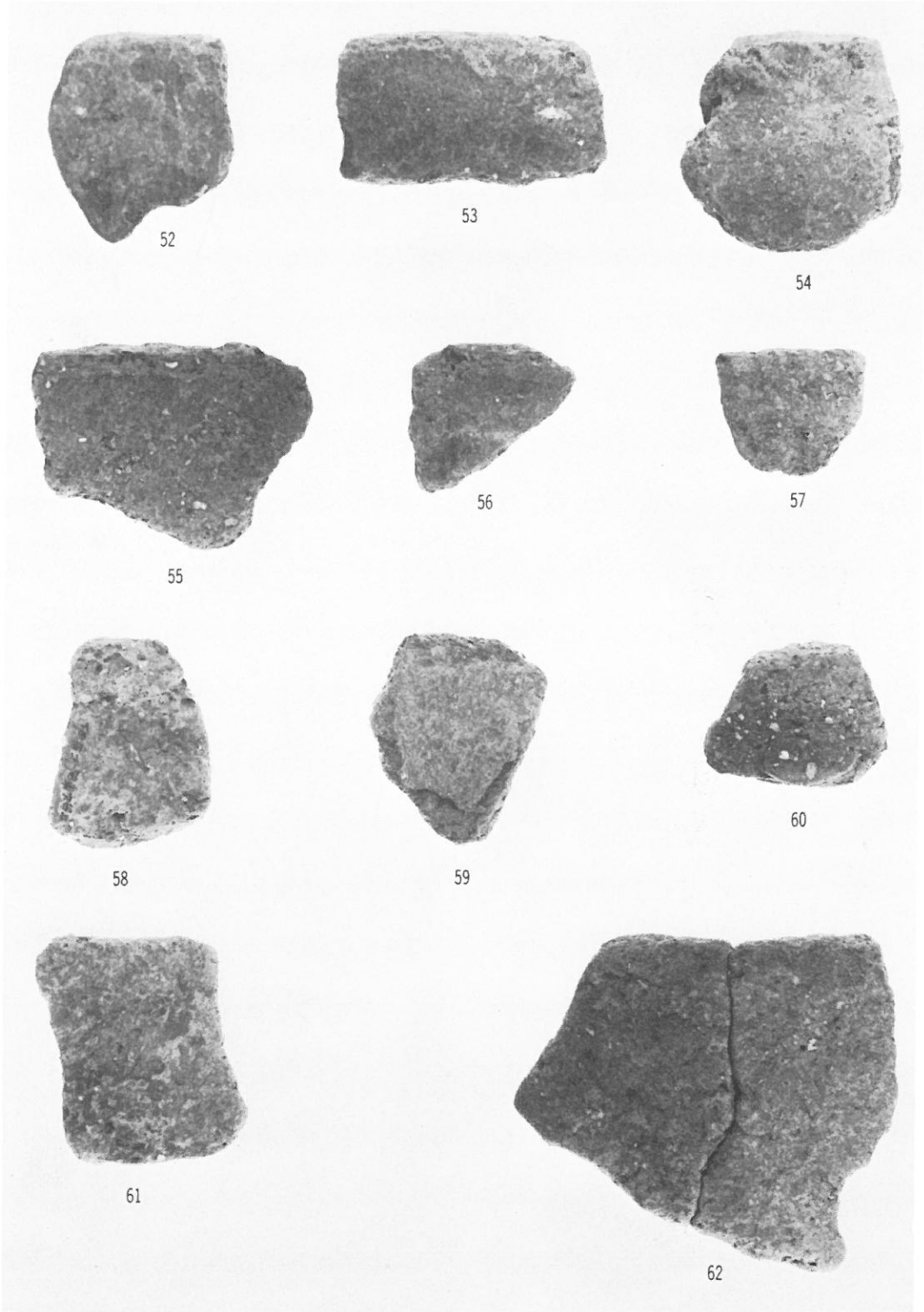
第19図（PL．13）　　A群土器（II類d－40～46　III類－ 47～51）



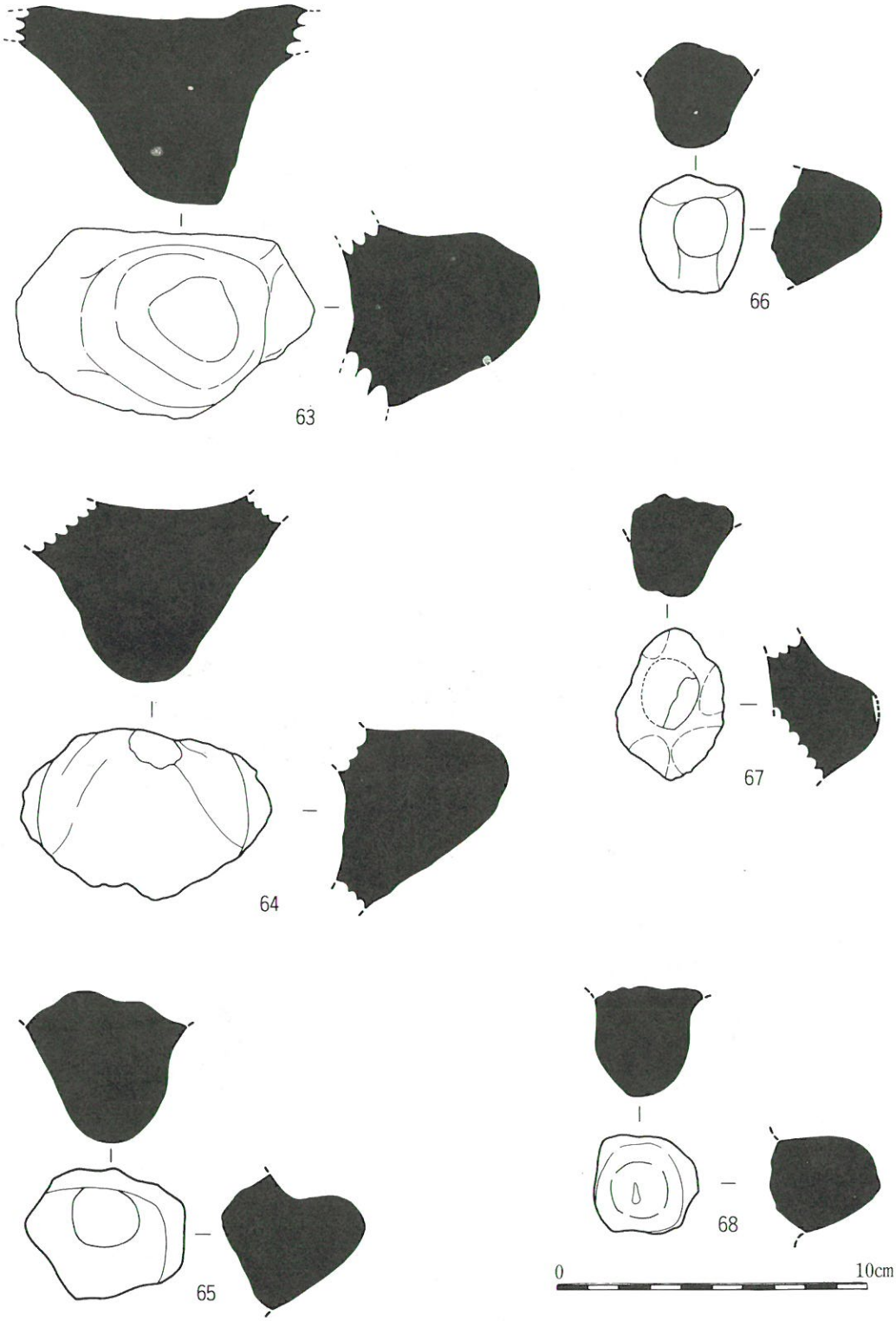
PL. 13　土　器



第20図（PL．14）　B群土器（Ⅰ類b－52・53　Ⅱ類a－54　Ⅱ類d－55～60
Ⅲ類－61・62）

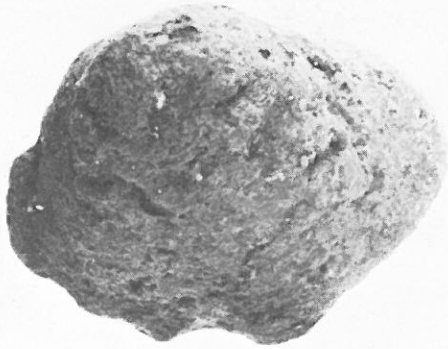


PL. 14　土　器

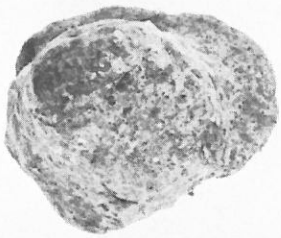


第21図（PL．15）　A群土器（把手63・64）　群不明（把手65～68）

63



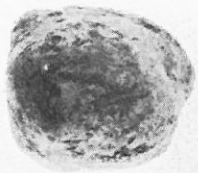
64



65

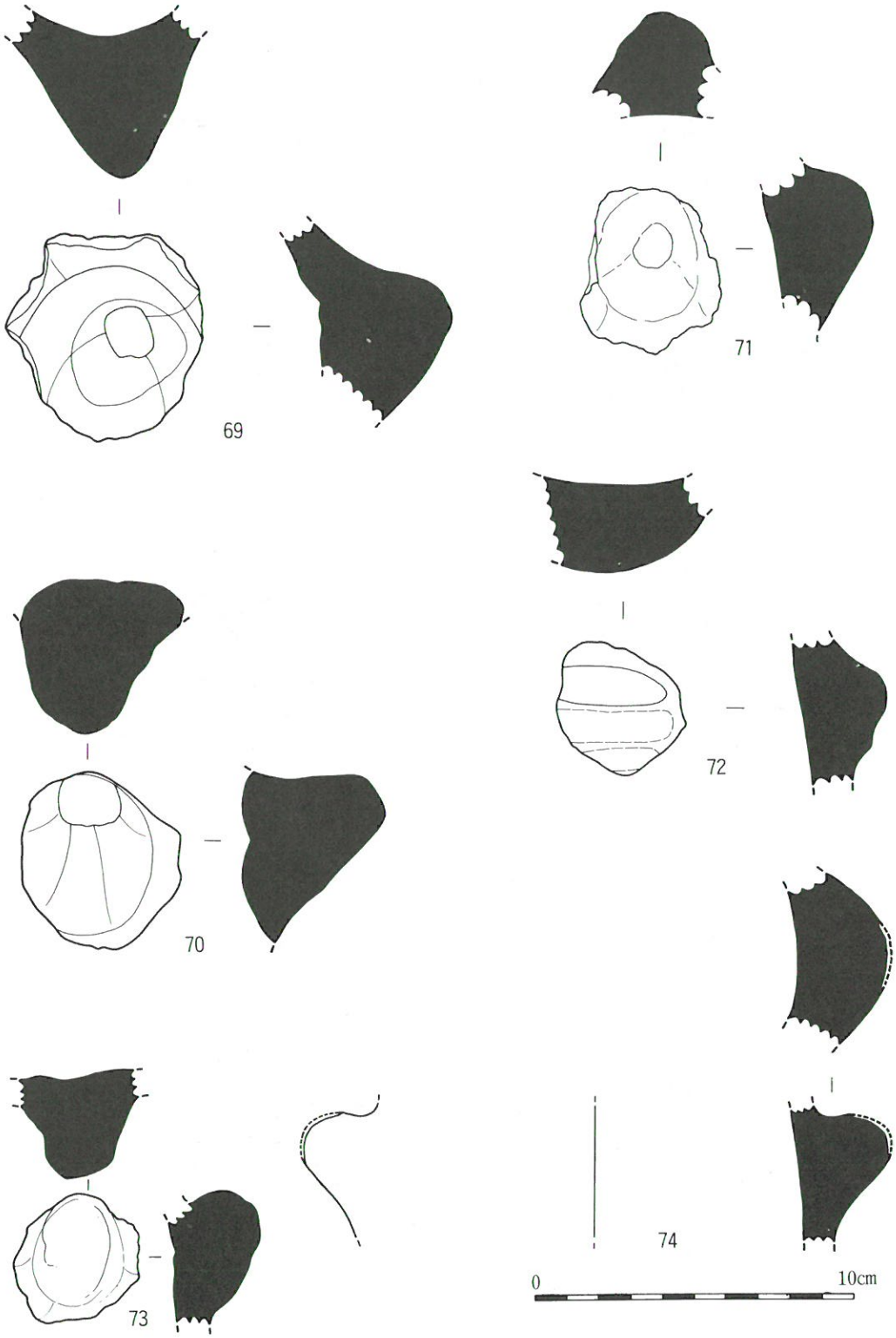
66

67



68

PL. 15　土　器



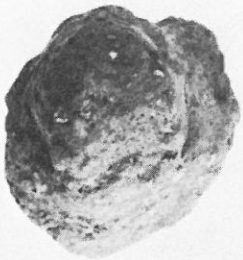
第22図（PL．16）　A群土器（把手69～72）　B群土器（把手73・74）

69

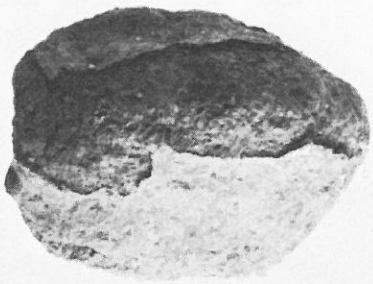
70

71

72

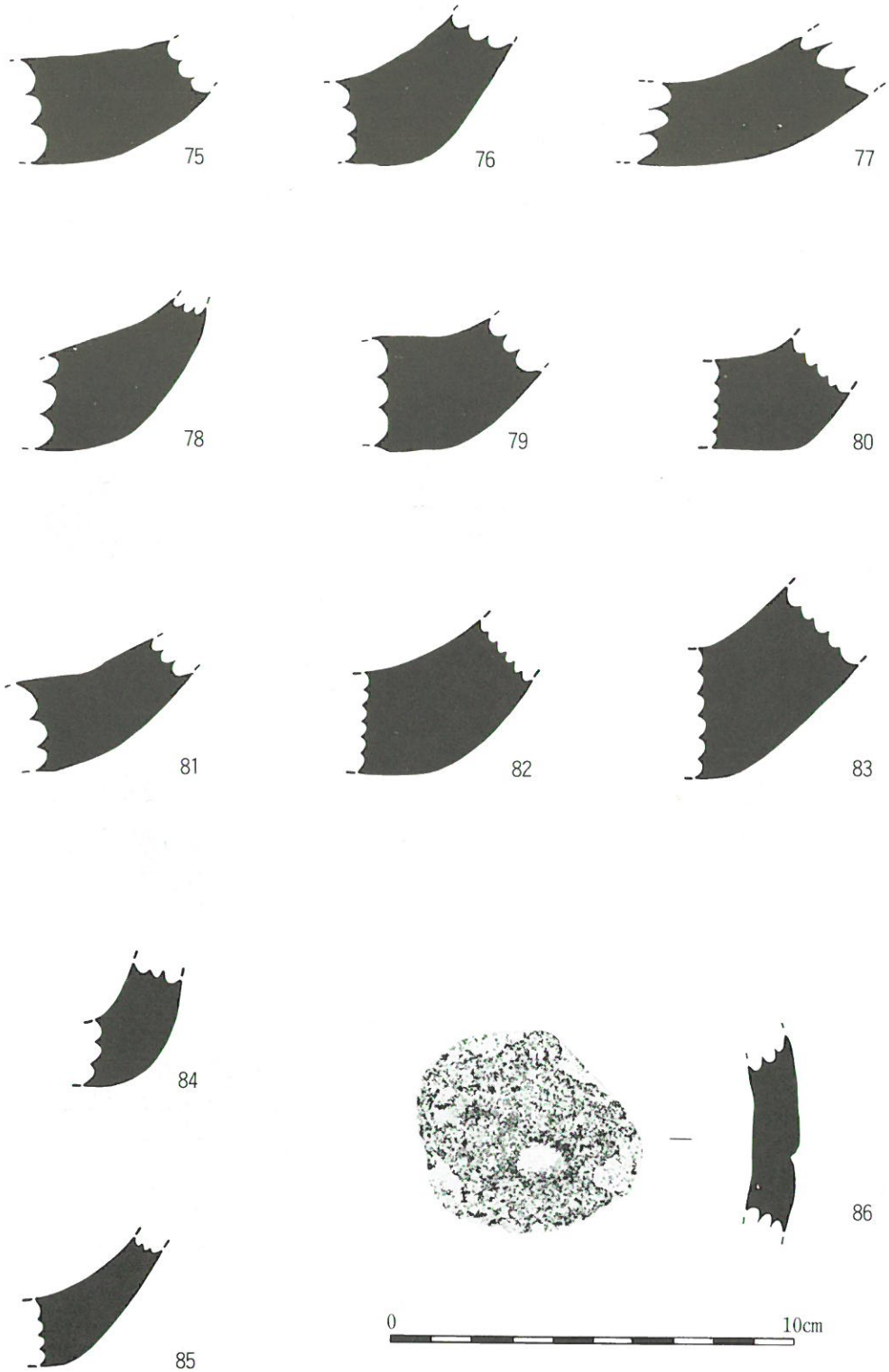


73

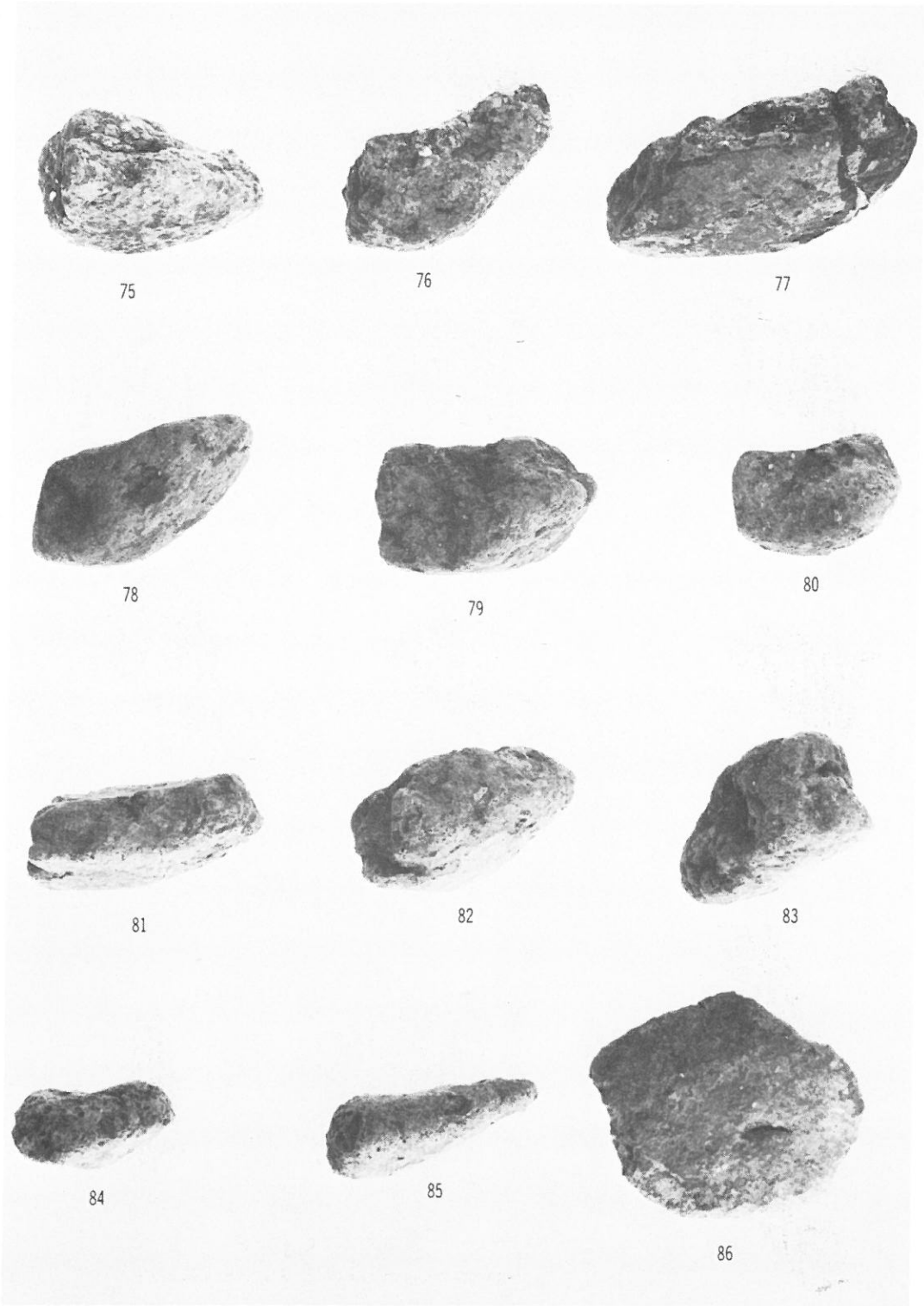


74

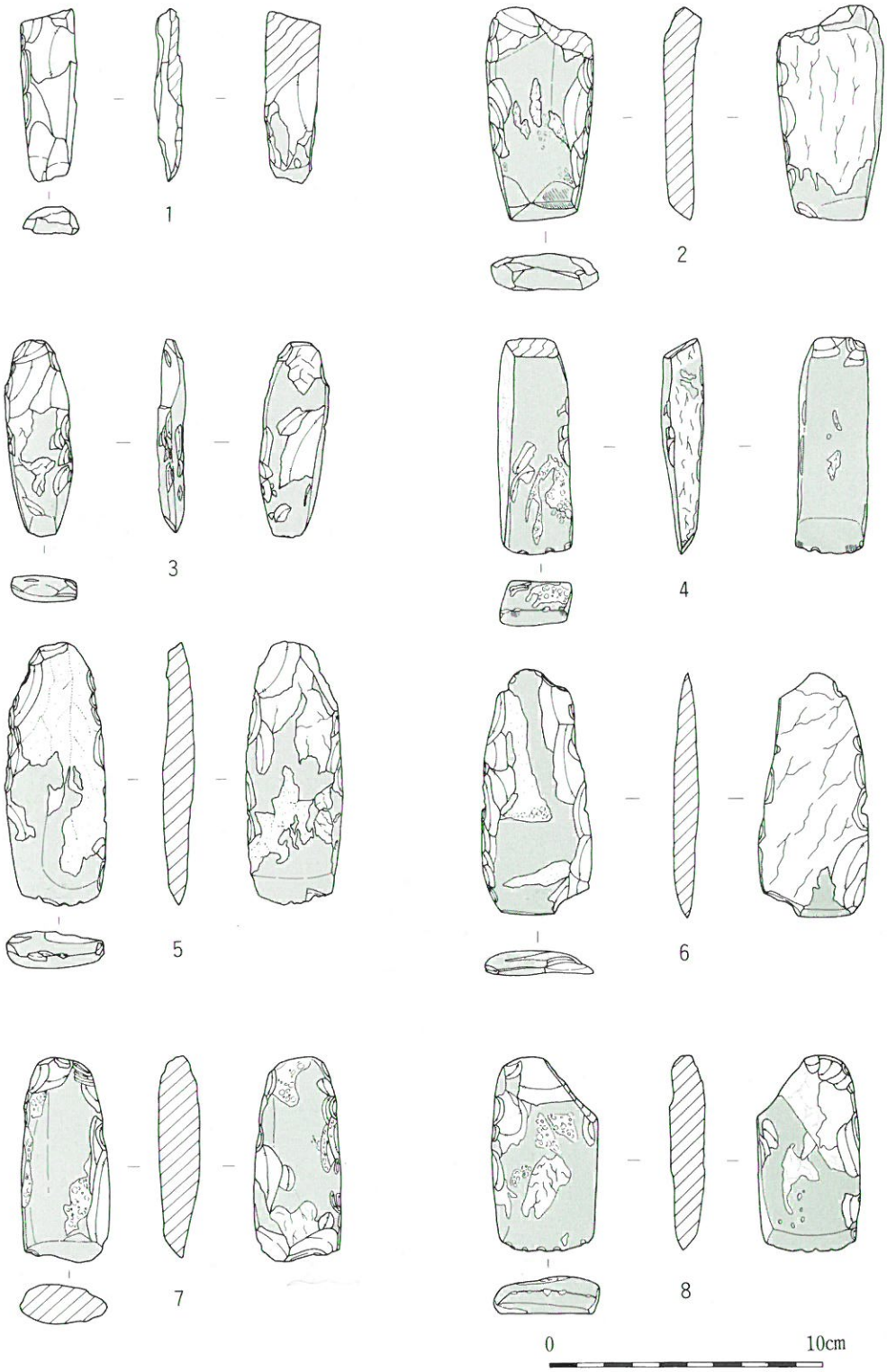
PL. 16　土　器



第23図（PL．17）　A群土器（底部75～83、爪痕のある胴部86）　B群土器（底部84・85）

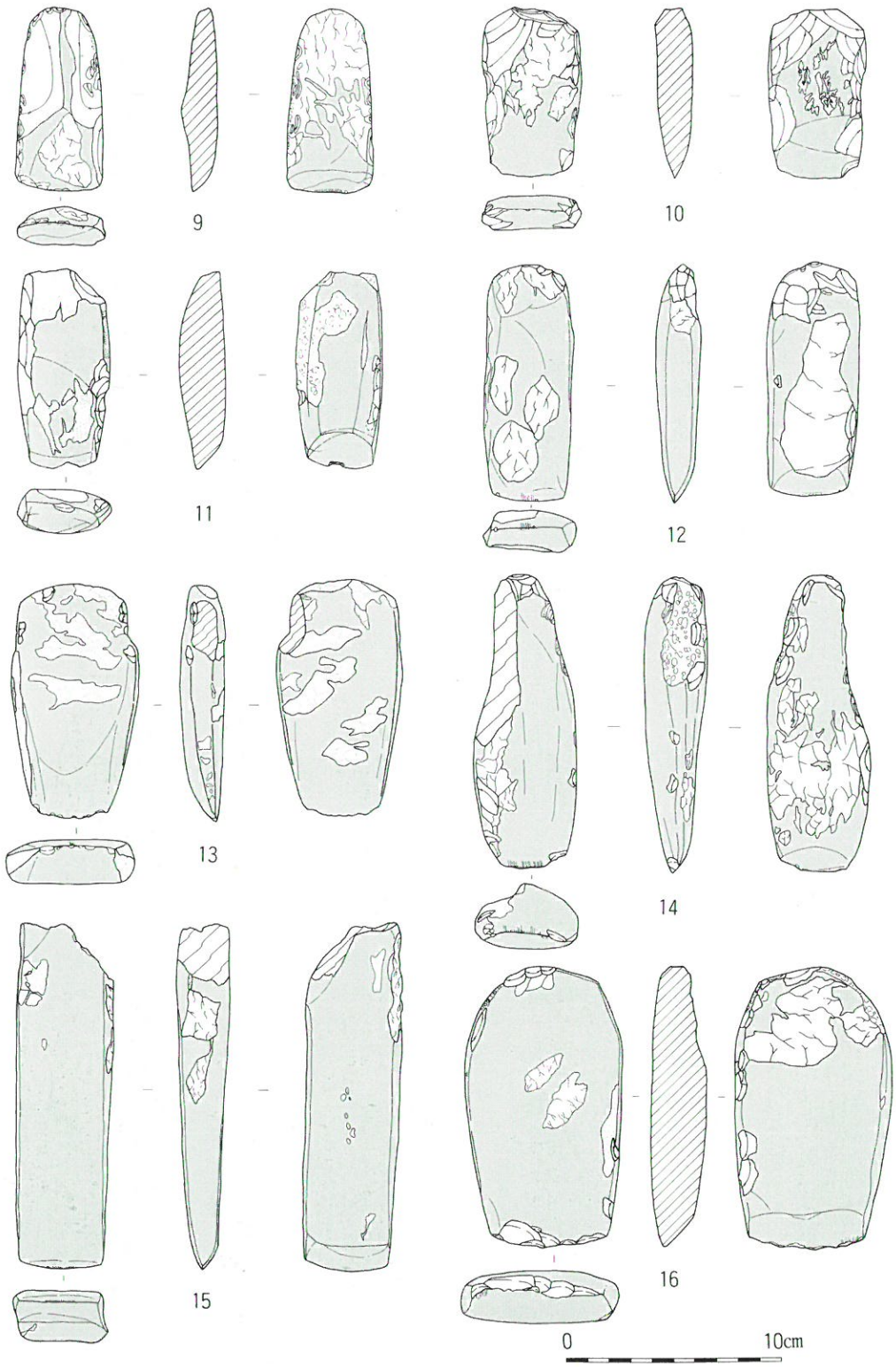


PL. 17　土　器



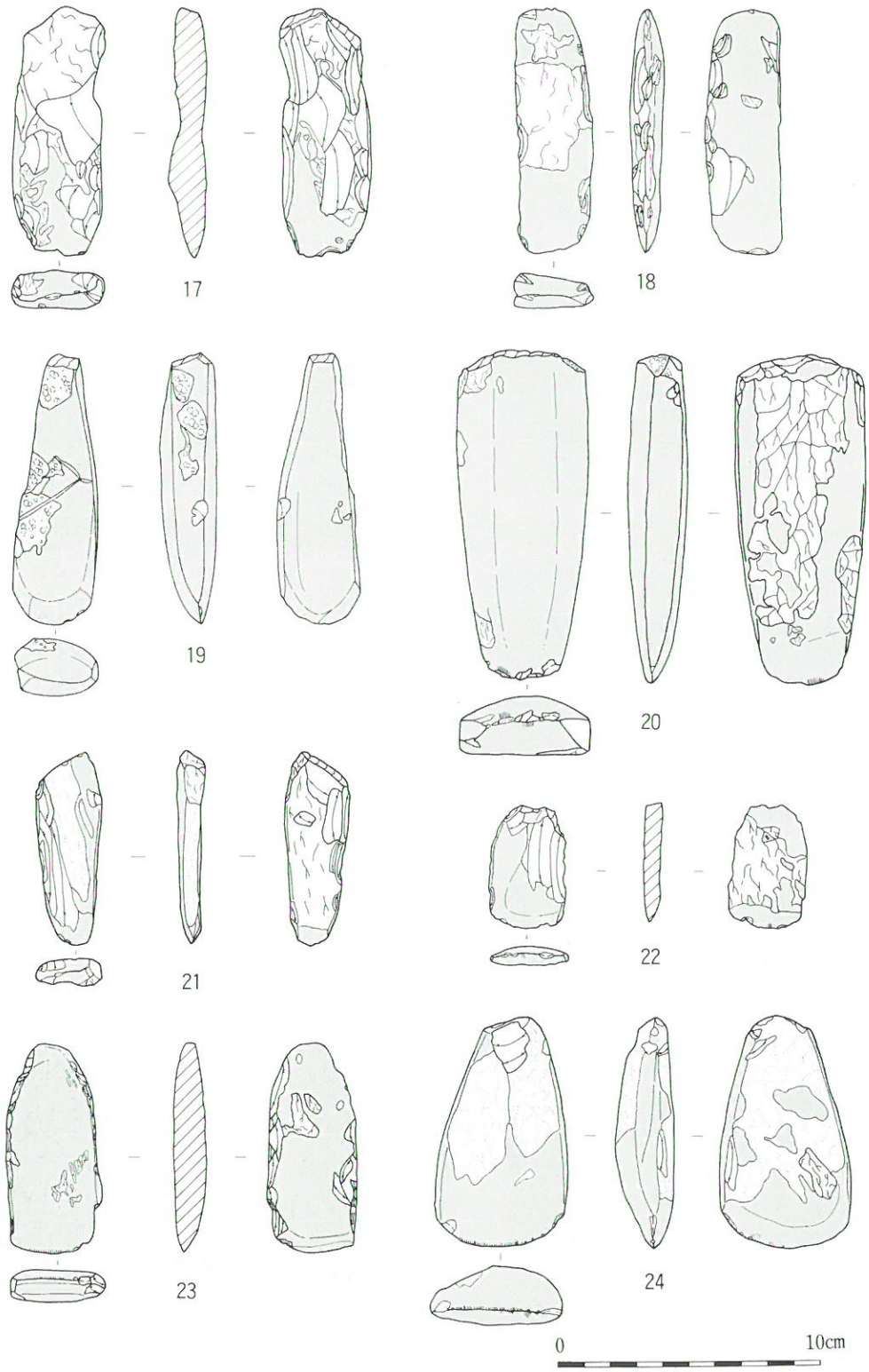
第24図（PL．18）　石斧（Ⅰ小群1～5、Ⅰ中群6～8）

PL. 18　石斧（Ⅰ小群1～5、Ⅰ中群6～8）



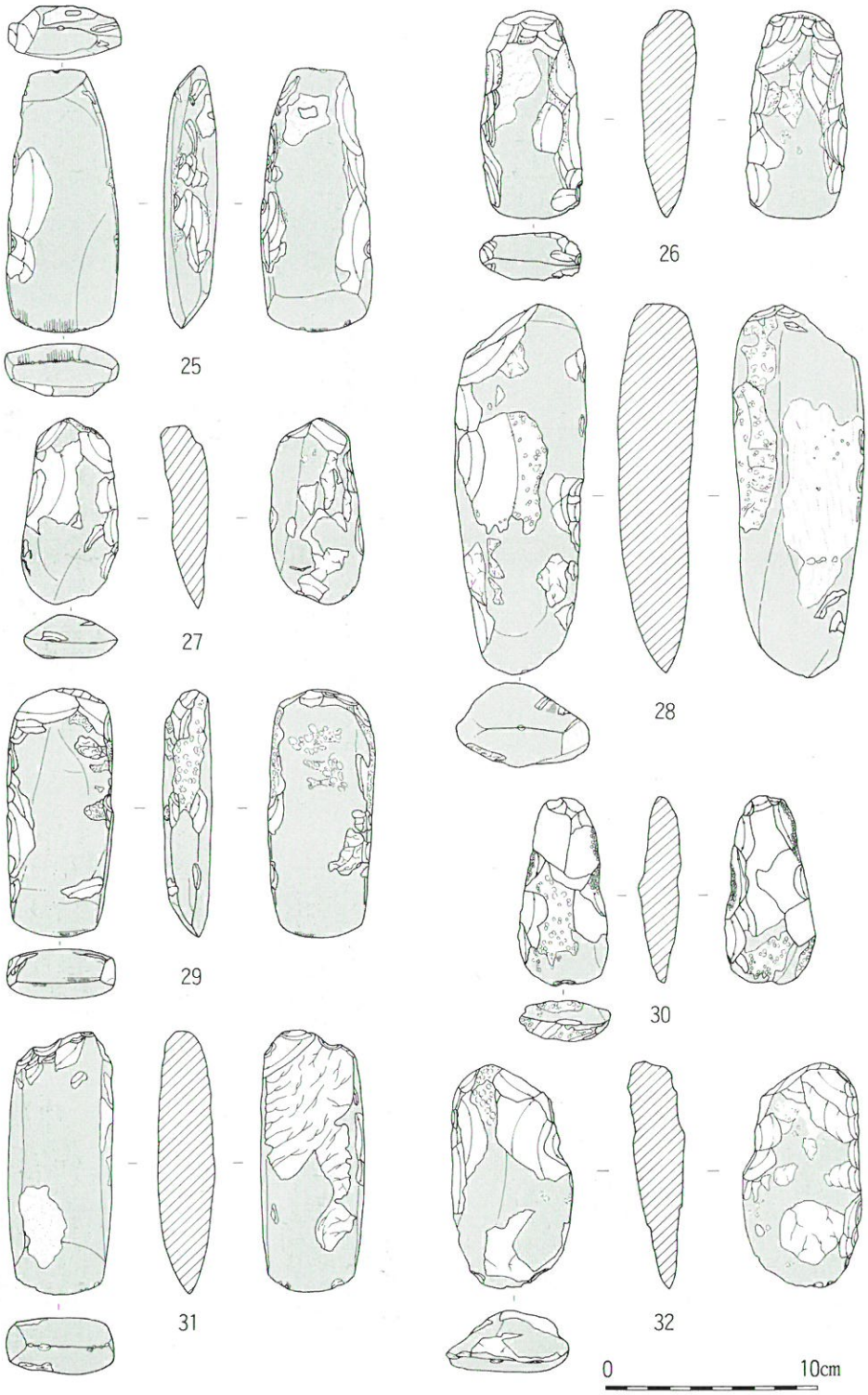
第25図（PL．19）　　石斧（Ⅰ中群９～15、Ⅰ大群16）

PL. 19　石斧（Ⅰ中群 9～15、Ⅰ大群16）



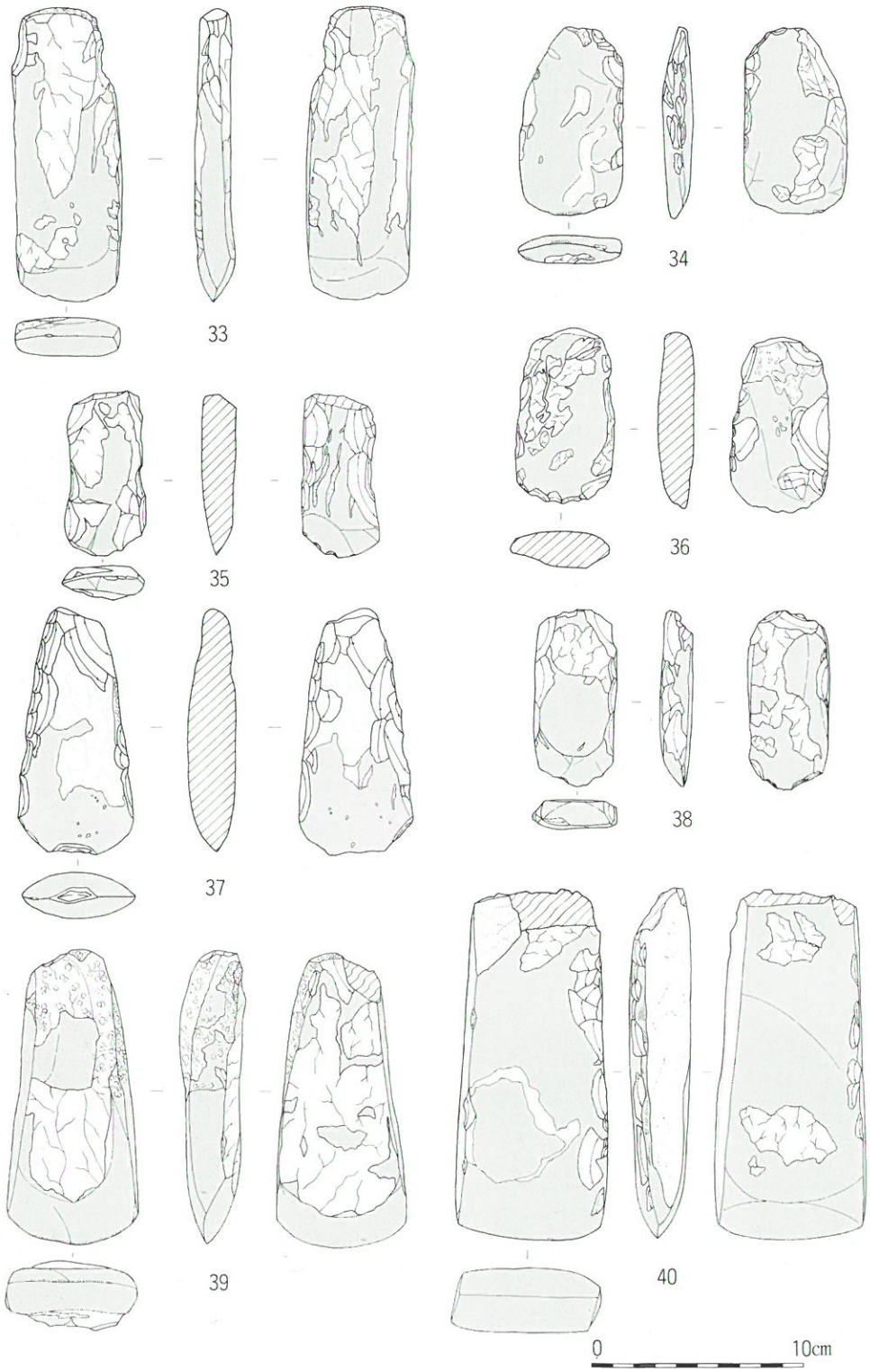
第26図（PL．20）　石斧（II小群17～22、II中群23・24）

PL. 20　石斧（II小群17～22、II中群23・24）

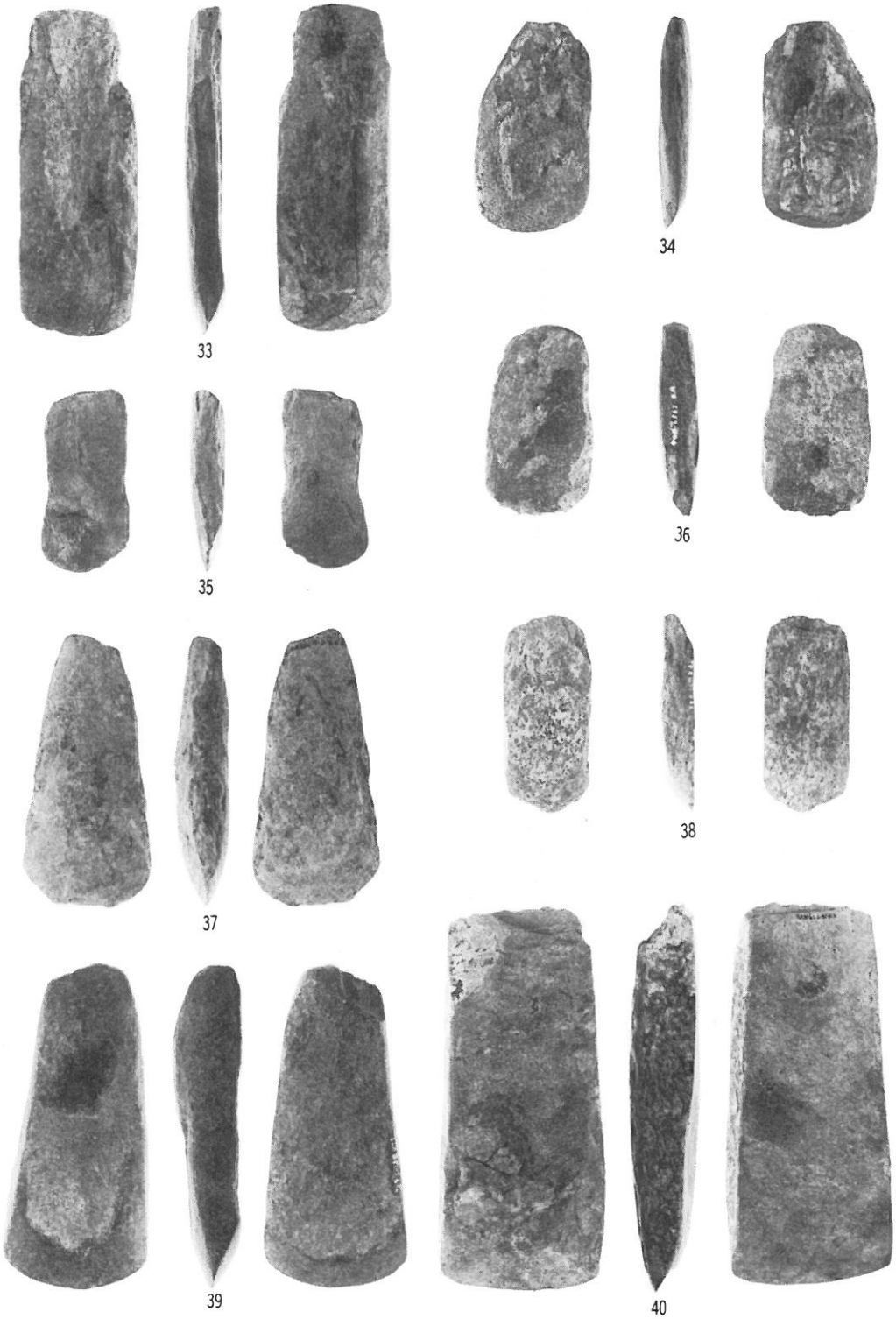


第27図（PL．21）　石斧（II中群25～32）

PL. 21　石斧（II中群25～32）

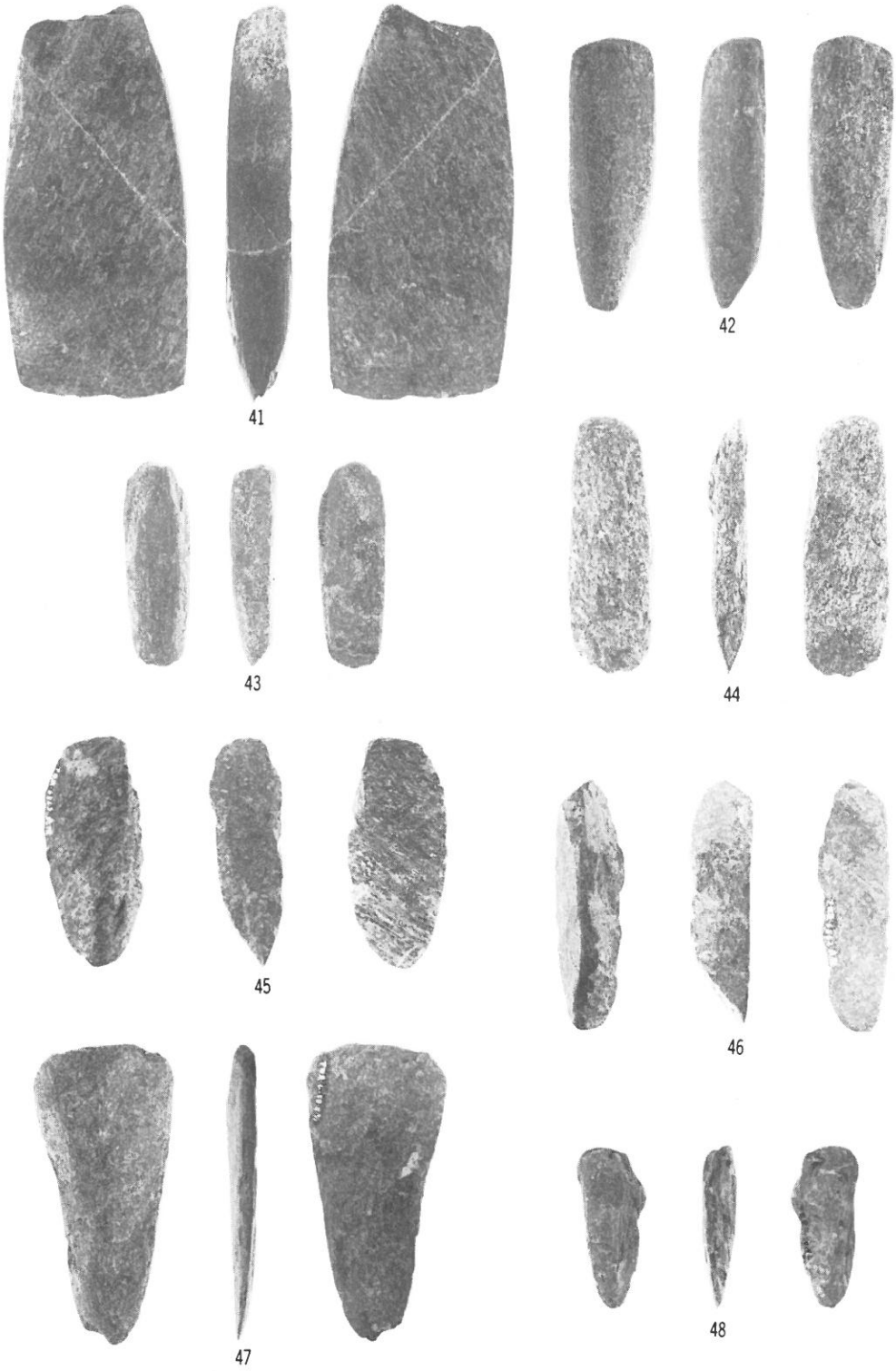


第28図（PL．22）　石斧（II中群33～38、II大群39・40）

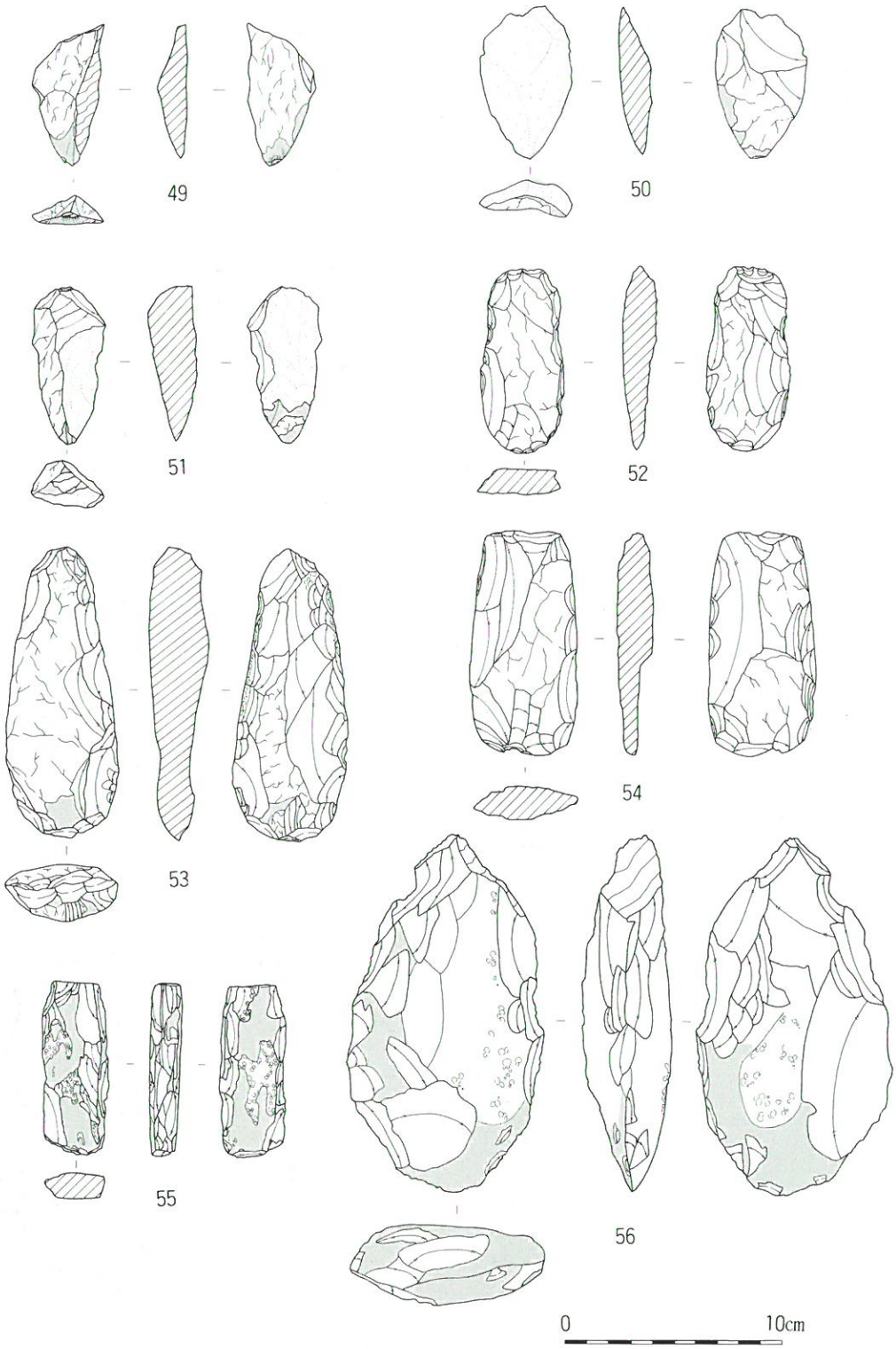


PL. 22　石斧（II中群33～38、II大群39・40）

第29図（PL．23）　石斧（II大群41、III小群42～48）

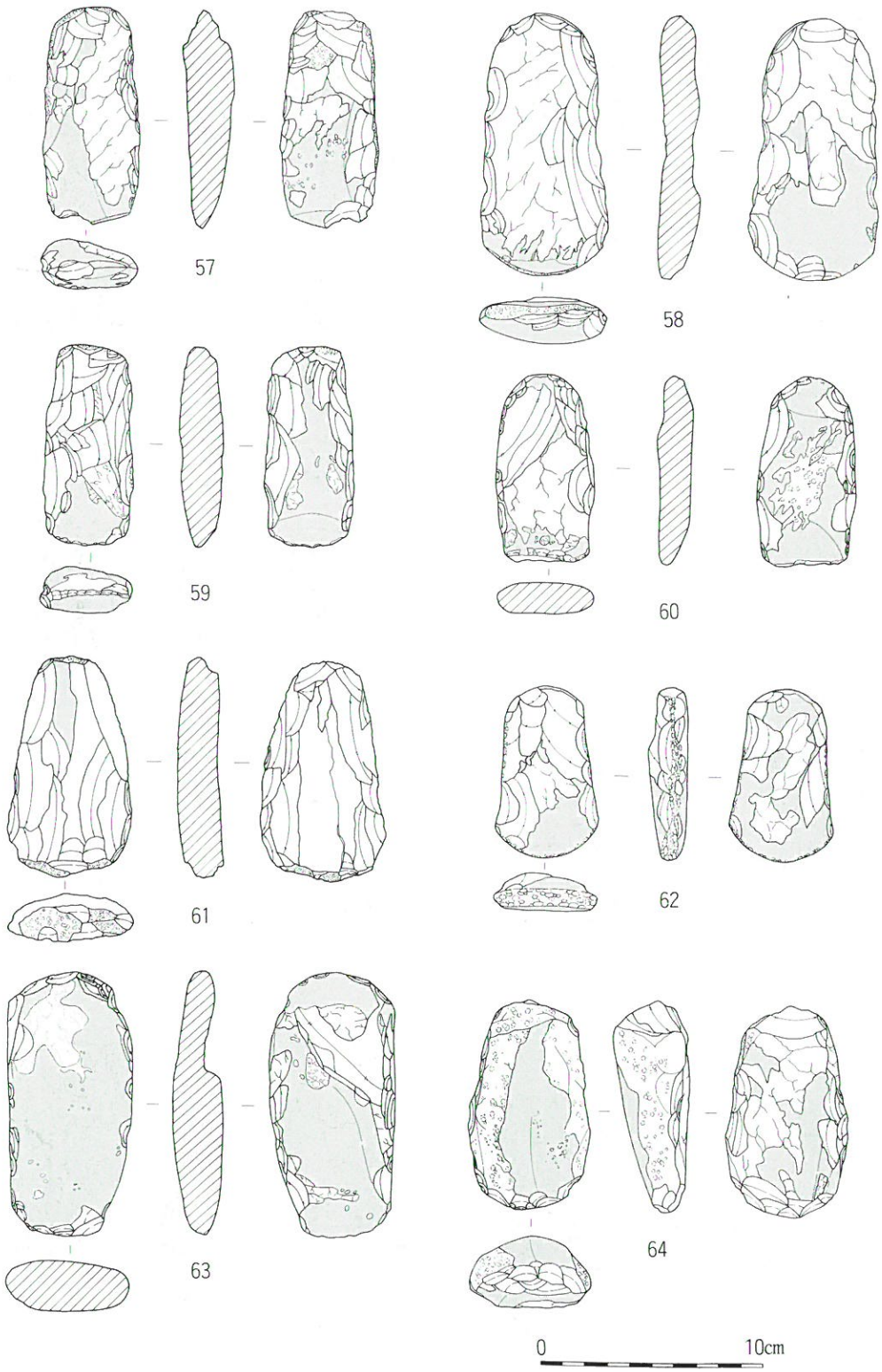


PL. 23　石斧（II大群41、III小群42～48）

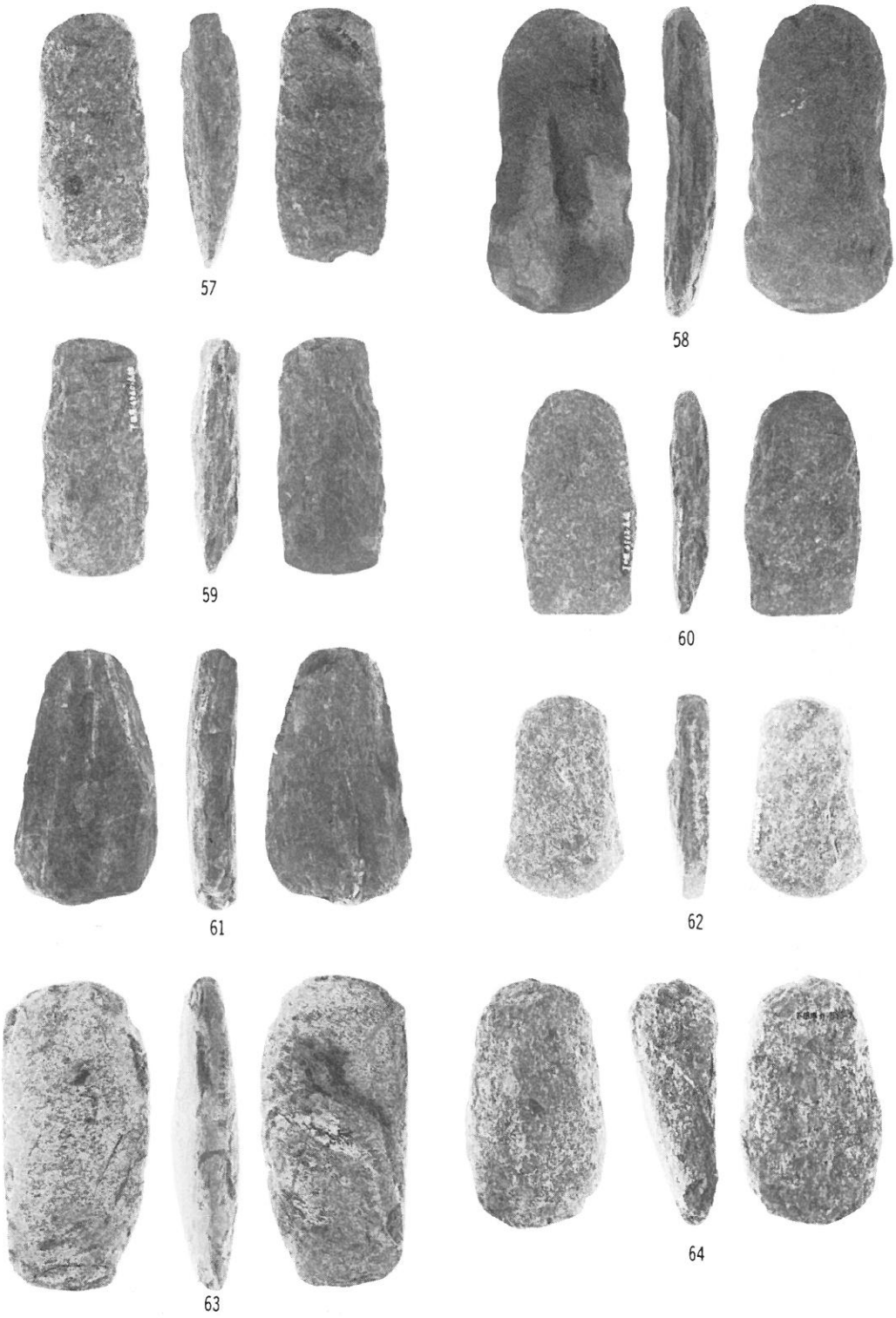


第30図（PL．24）　石斧（Ⅳ小群49～51）・石斧未製品（52～55）・石核石器(56)

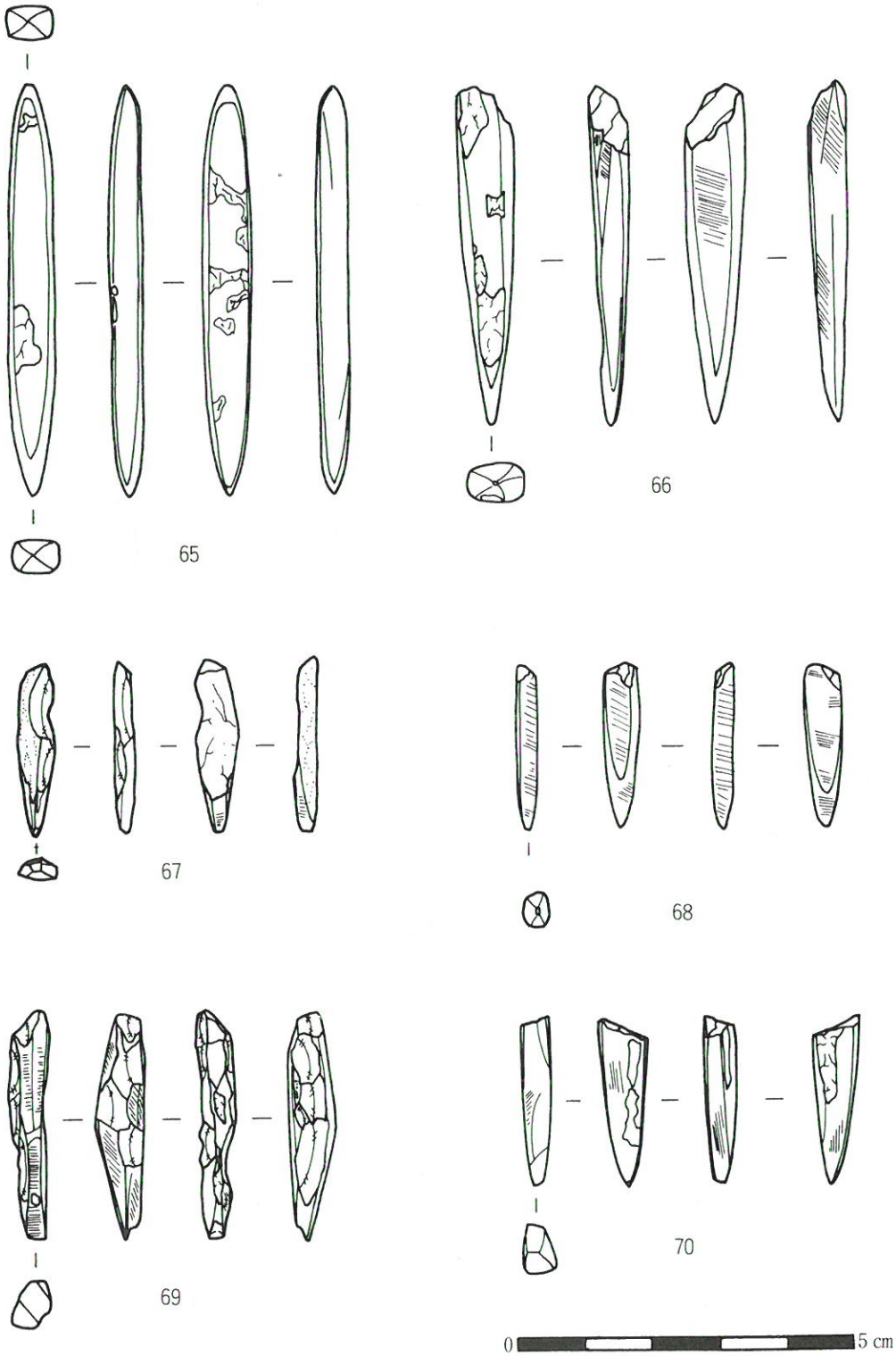
PL. 24　石斧（Ⅳ小群49～51）・石斧未製品（52～55）・石核石器（56）



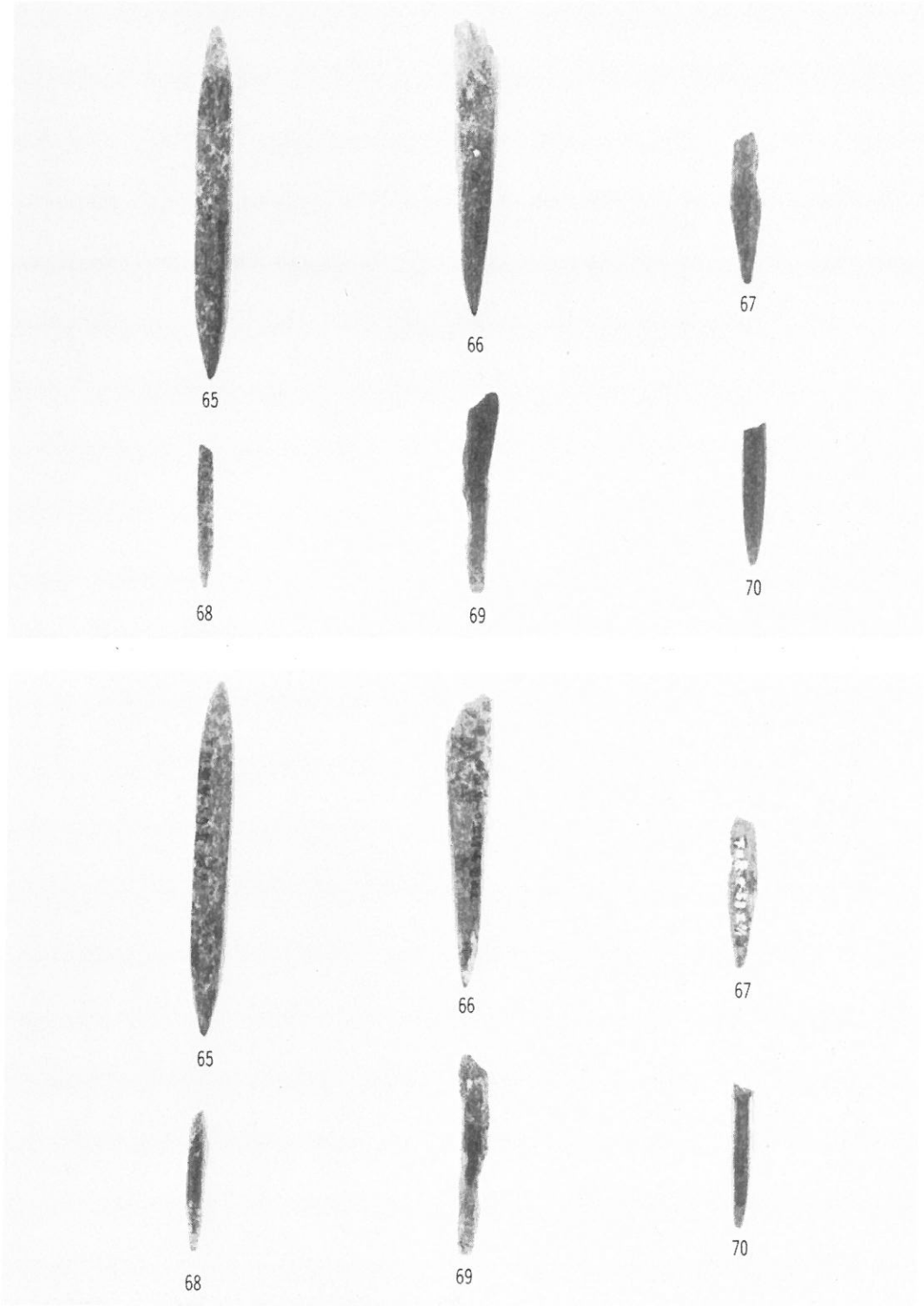
第31図（PL．25）　石斧転用品（57～64）



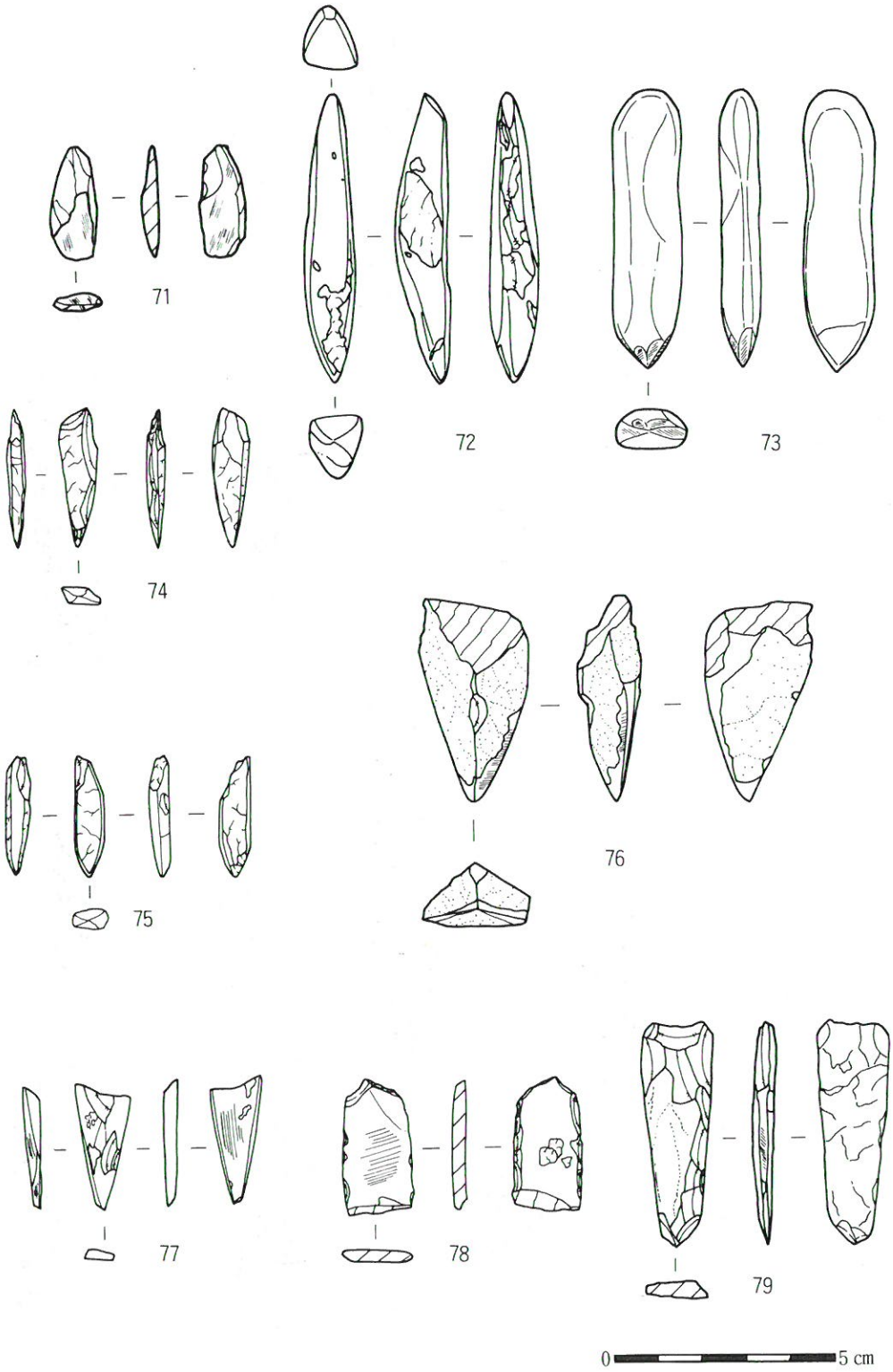
PL. 25　石斧転用品（57～64）



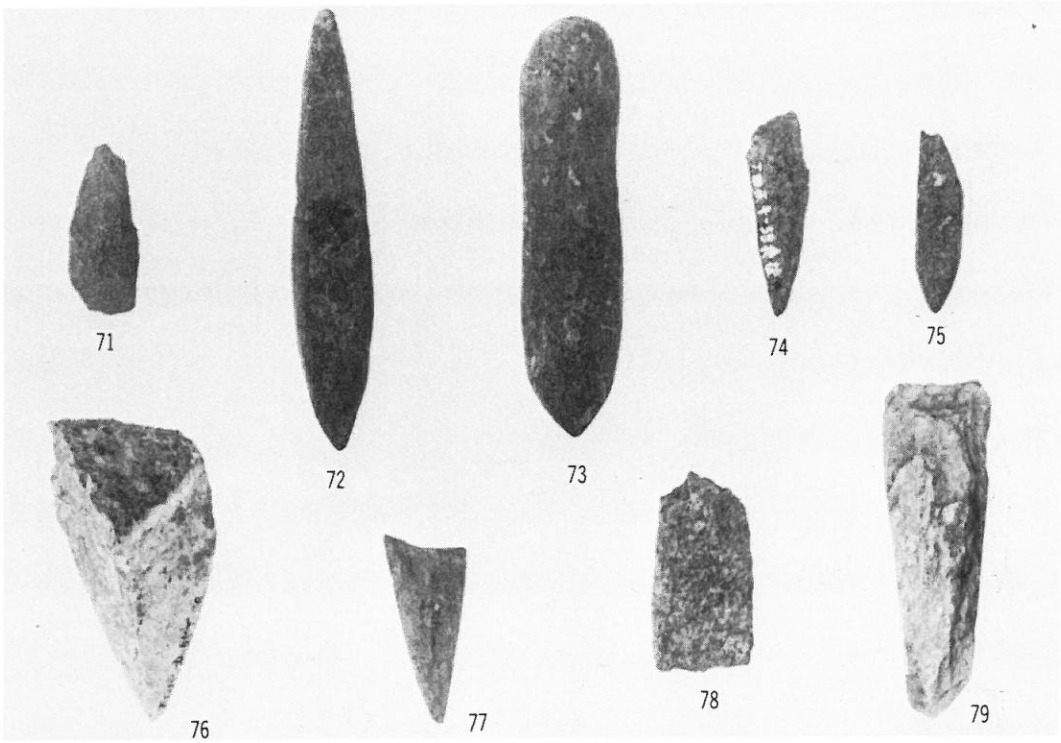
第32図（PL．26）　尖頭器（65～68）・鑿状利器（69・70）

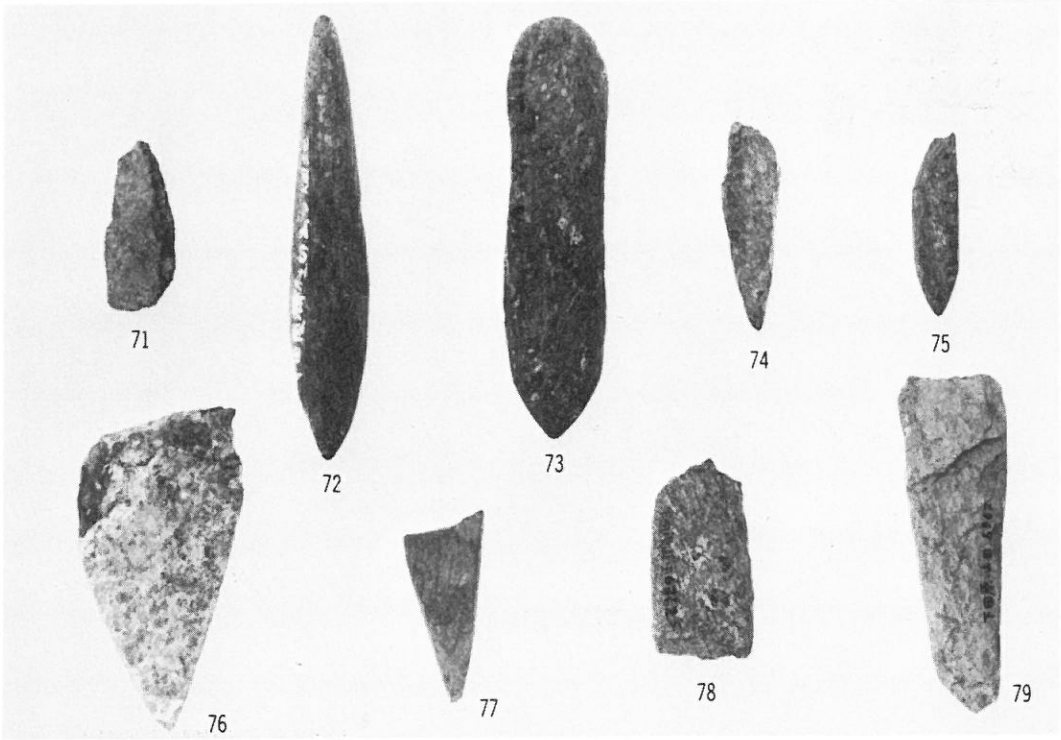


PL. 26　尖頭器（65～68）・鑿状利器（69・70）（上は表面・下は裏面）

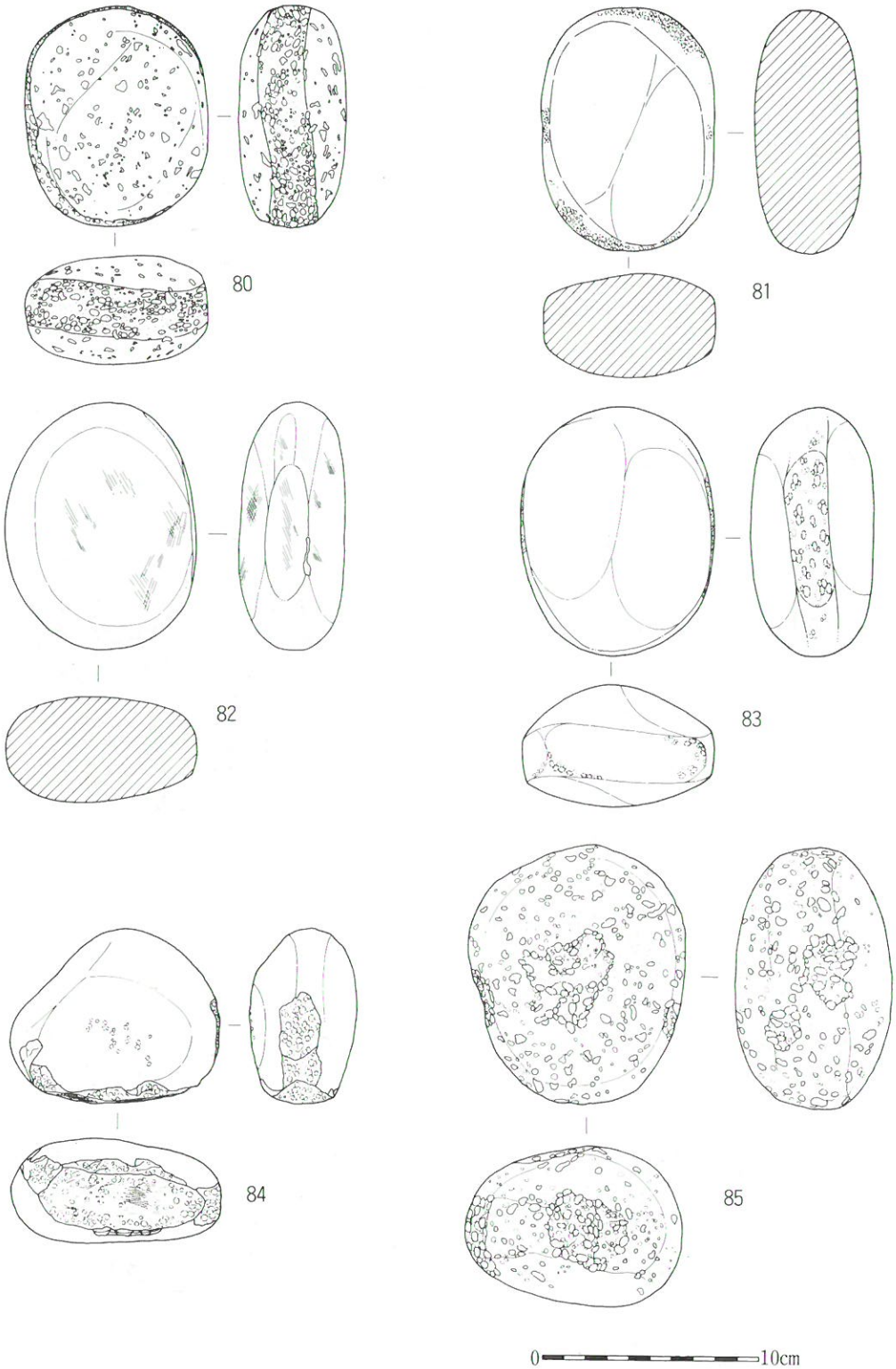


第33図（PL．27）　　鑿状利器（71・72）・石錐（73～79）

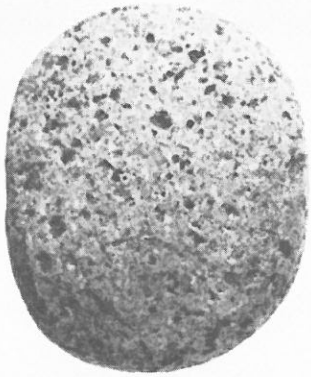




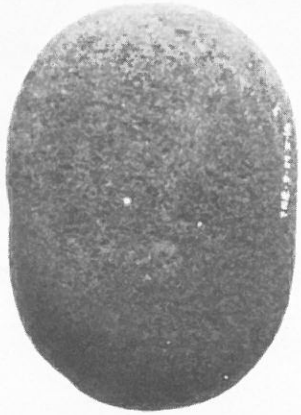
PL. 27　鑿状利器（71・72）・石錐（73～79）（上は表面・下は裏面）



第34図（PL．28）　磨石（80～85）



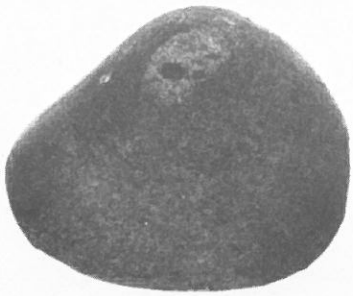
80



81

82

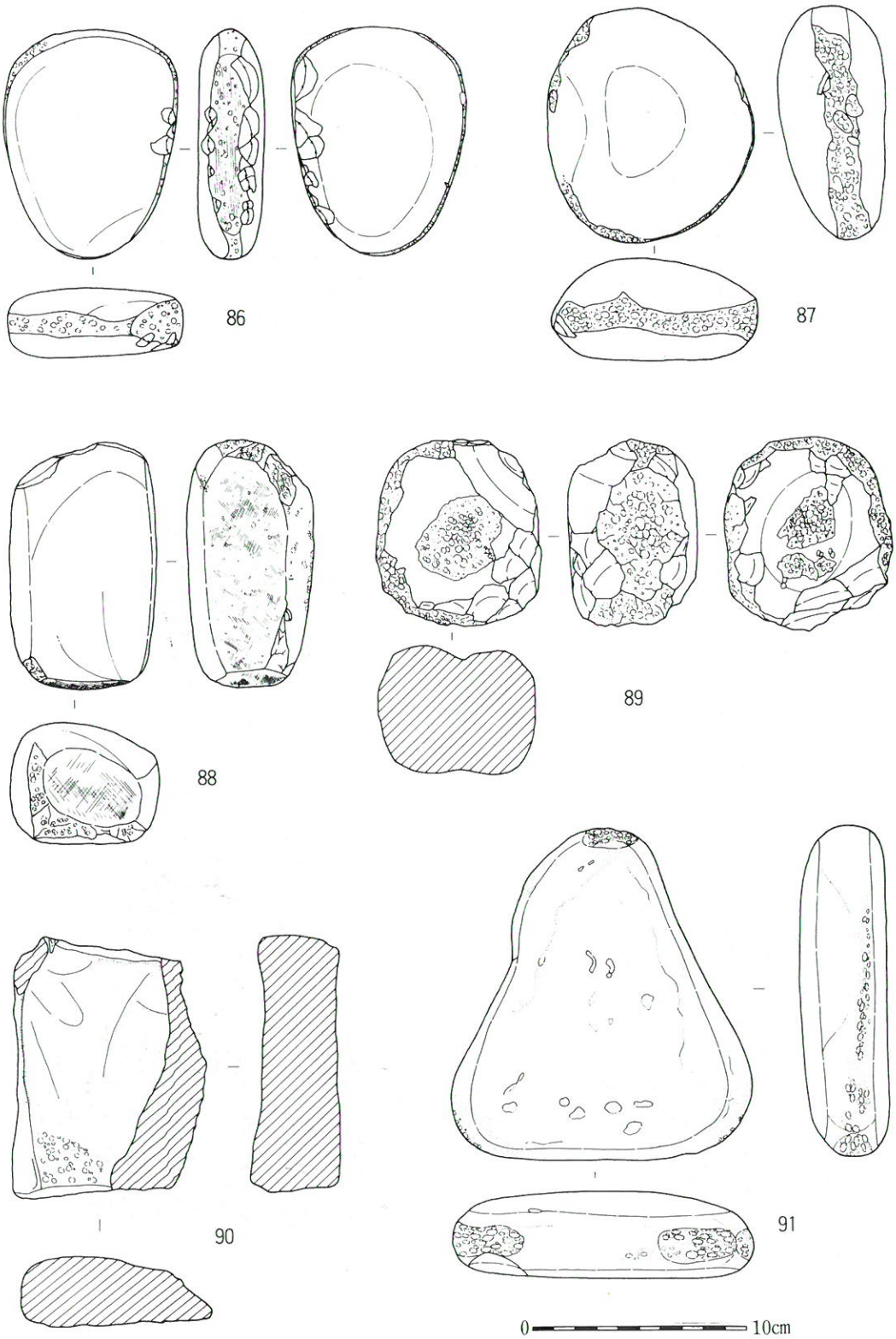
83



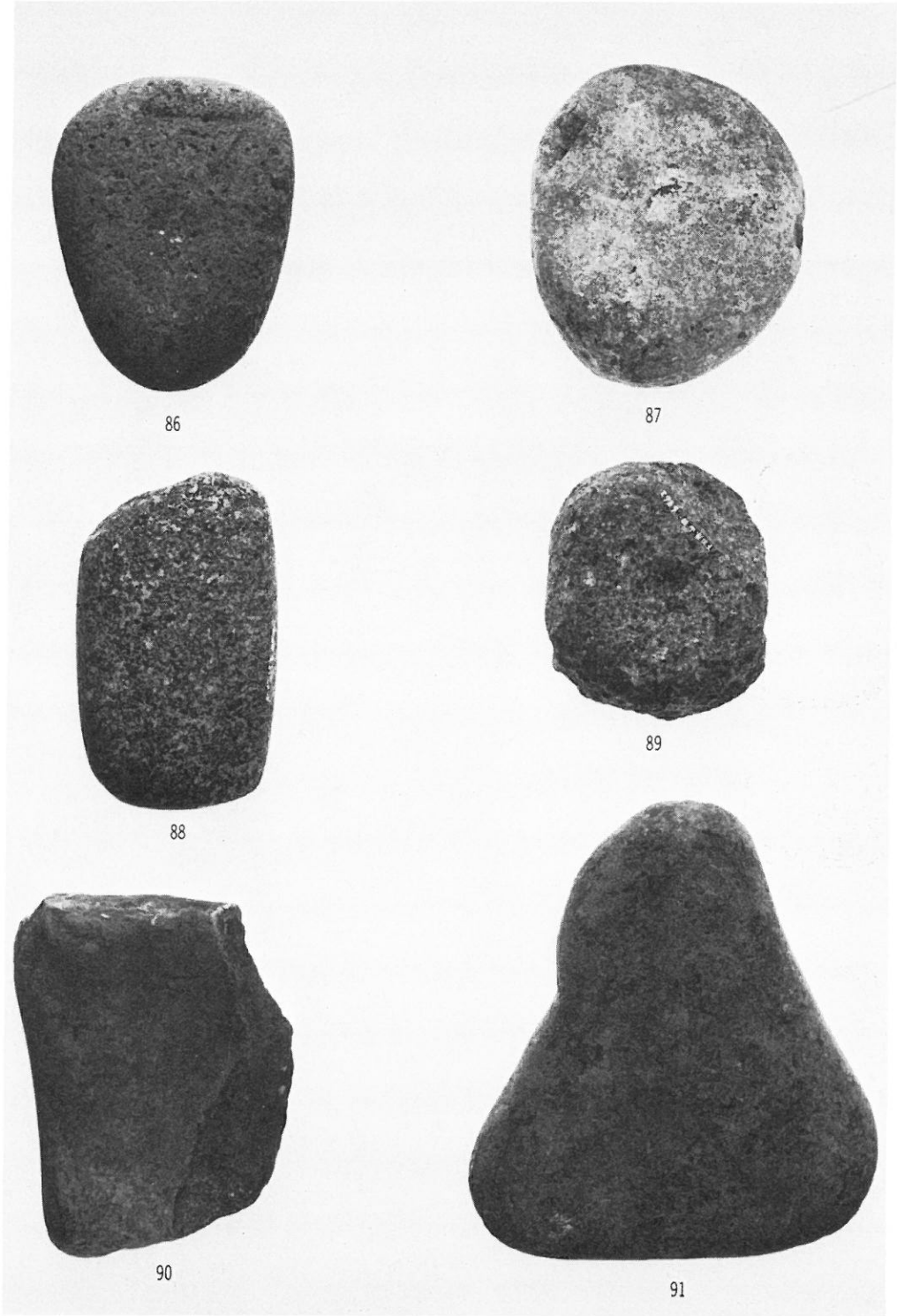
84

85

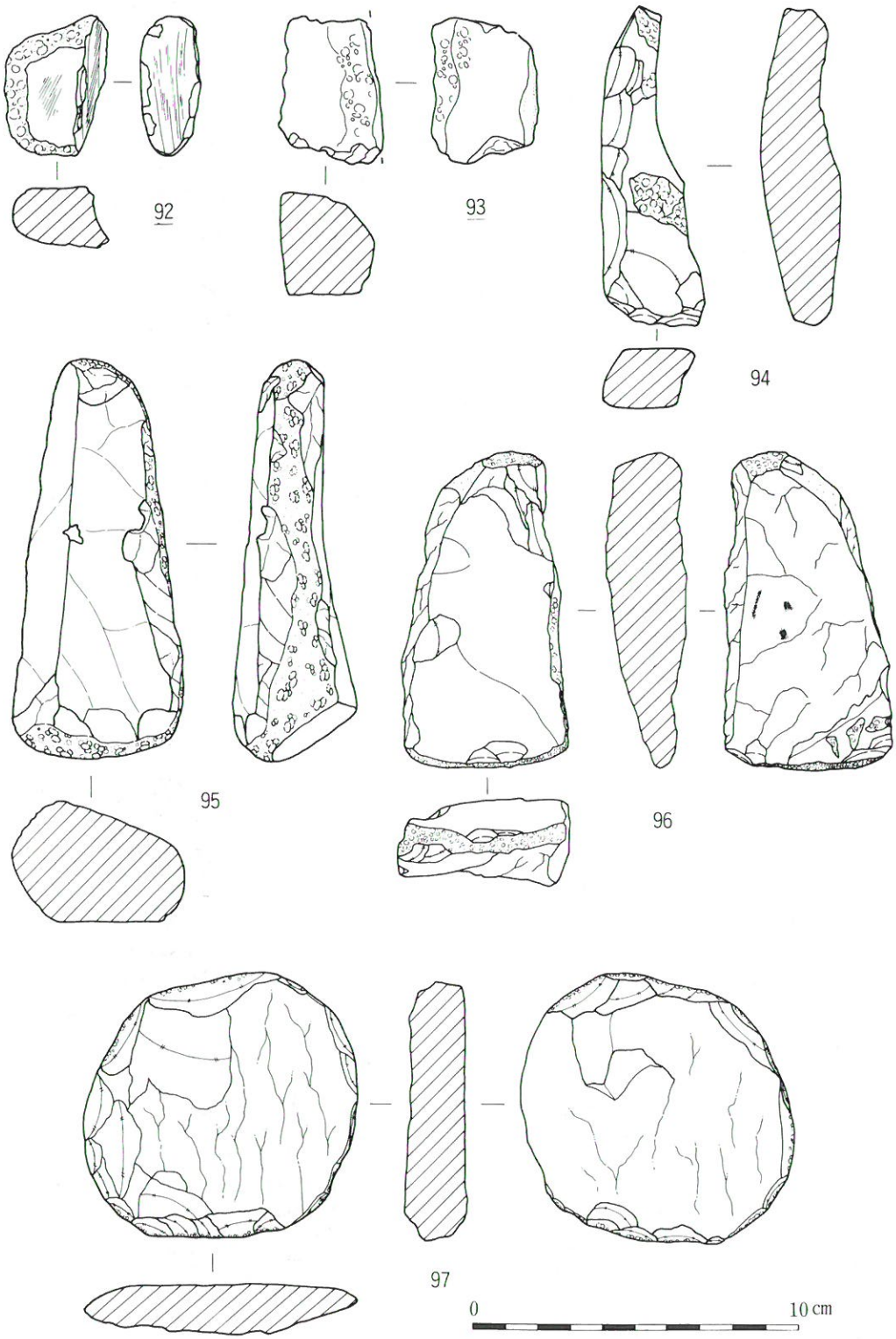
PL. 28　磨石（80～85）



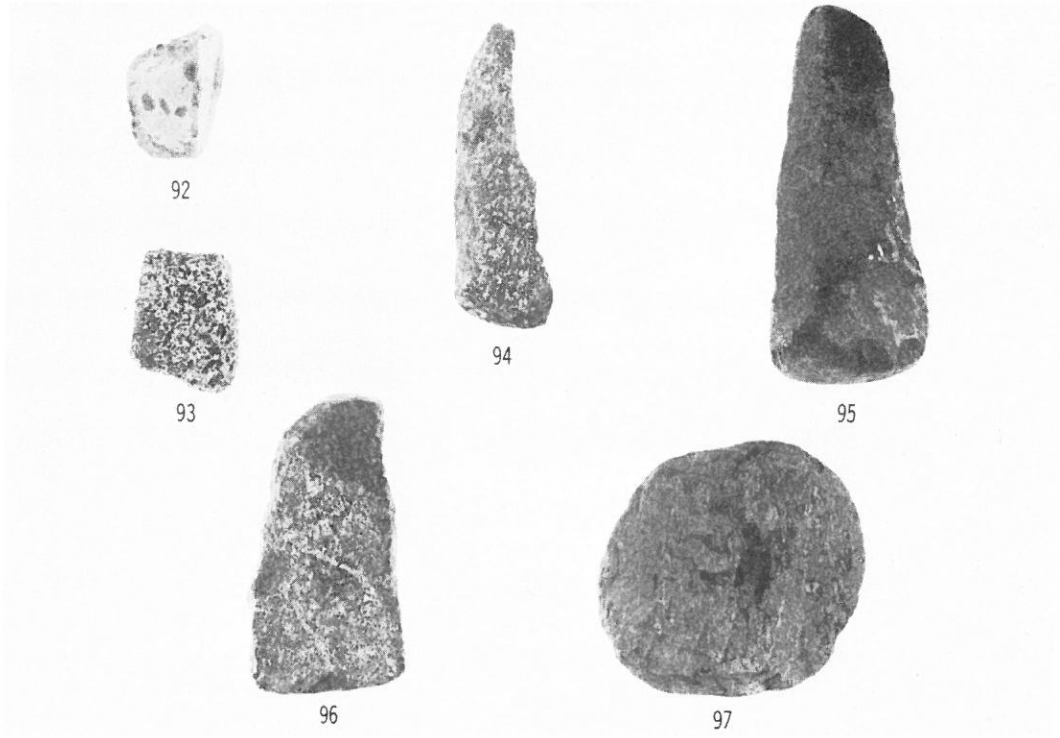
第35図（PL．29）磨石（86～88）・凹み石（89）・石皿（90・91）

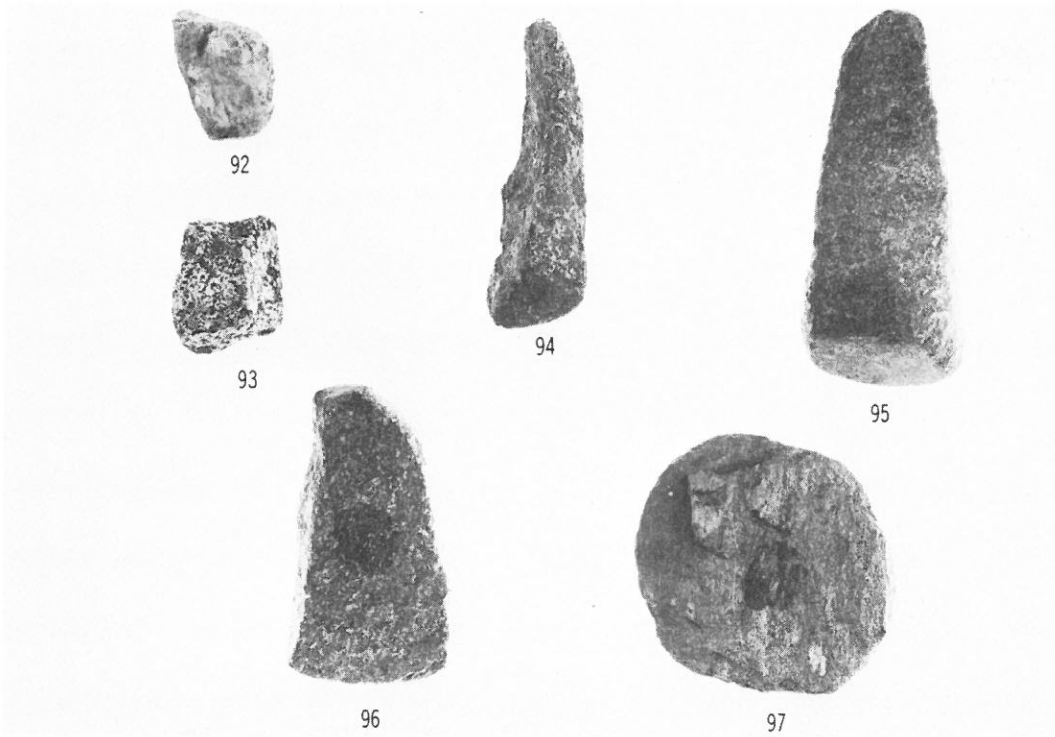


PL. 29　磨石（86～88）・凹み石（89）・石皿（90・91）

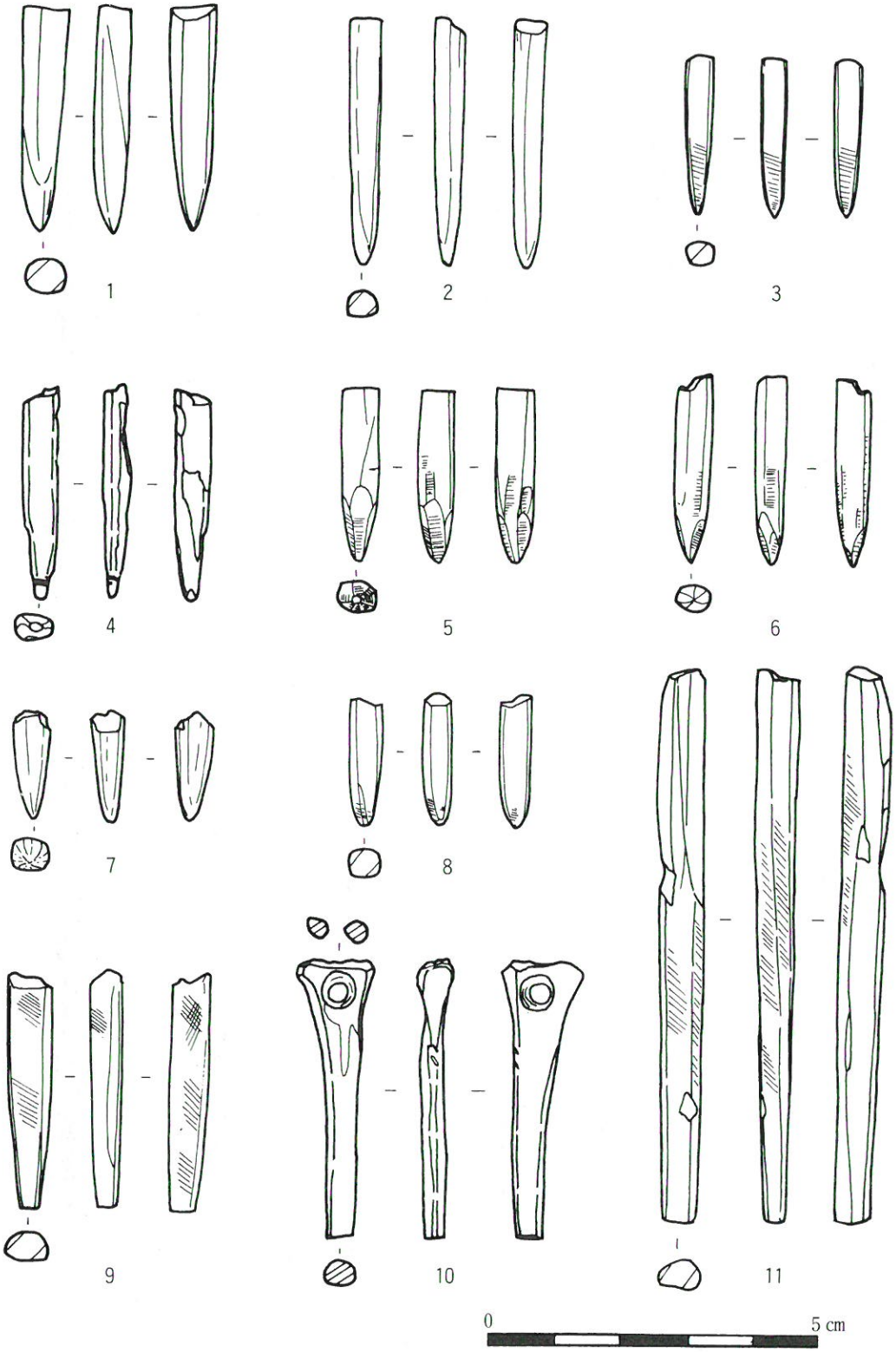


第36図（PL．30）　砥石（92・93）・敲き石（94～96）・円盤形石器（97）

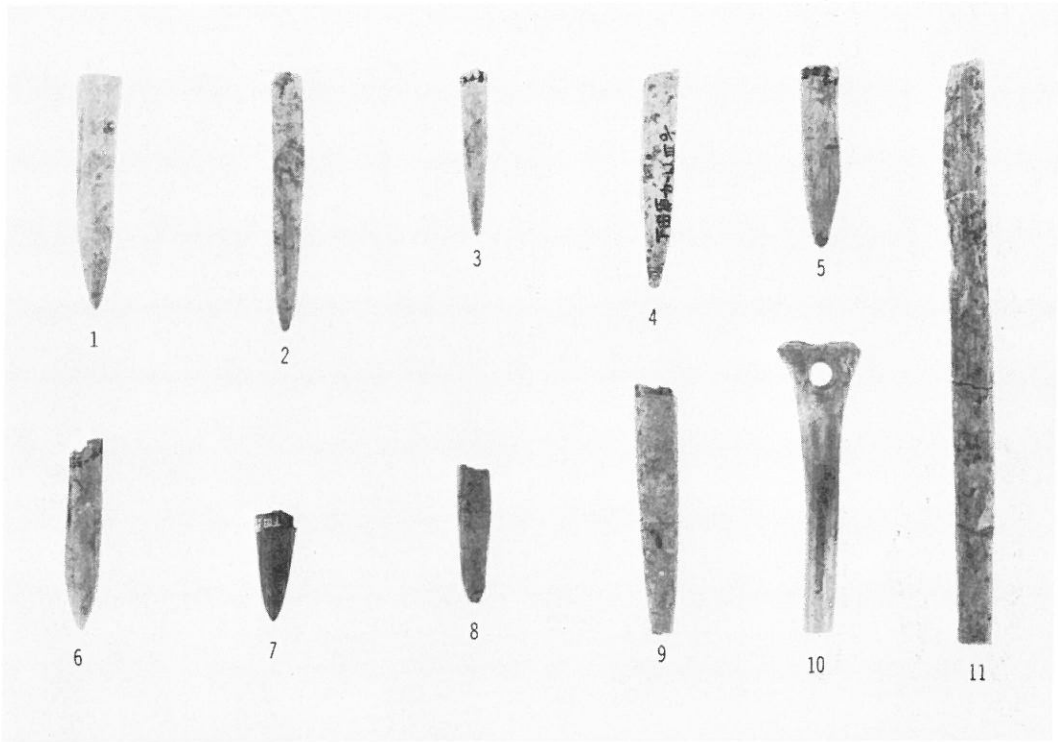


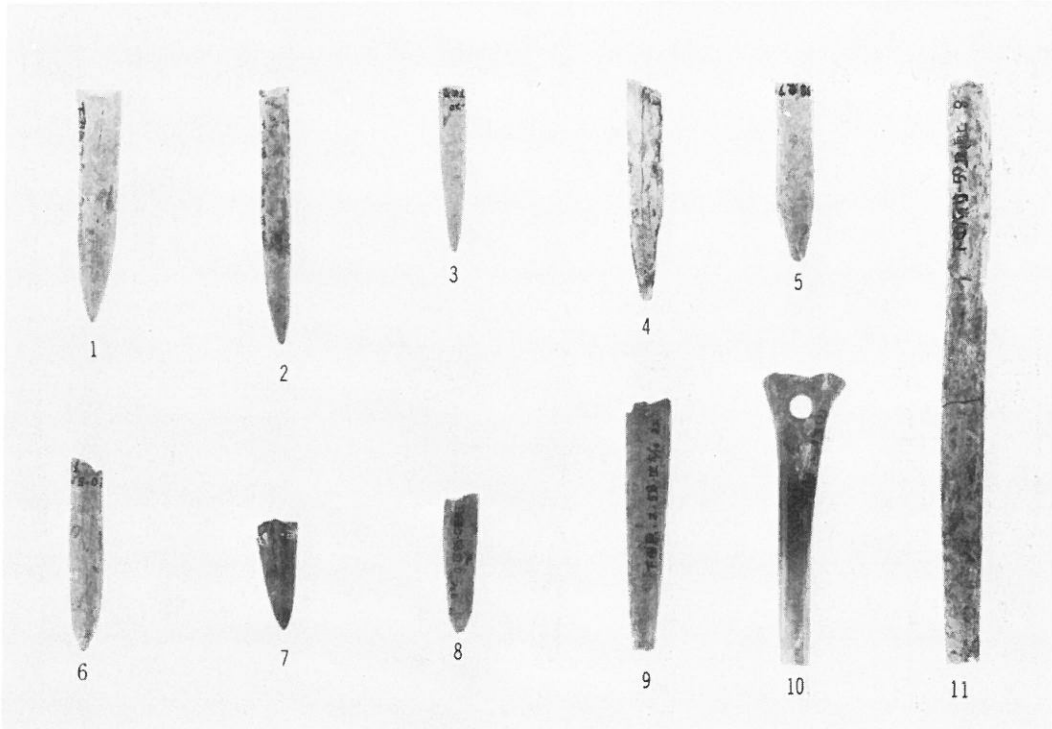


PL. 30　砥石（92・93）・敲き石（94～96）・円盤形石器（97）　（上は表面・下は裏面）

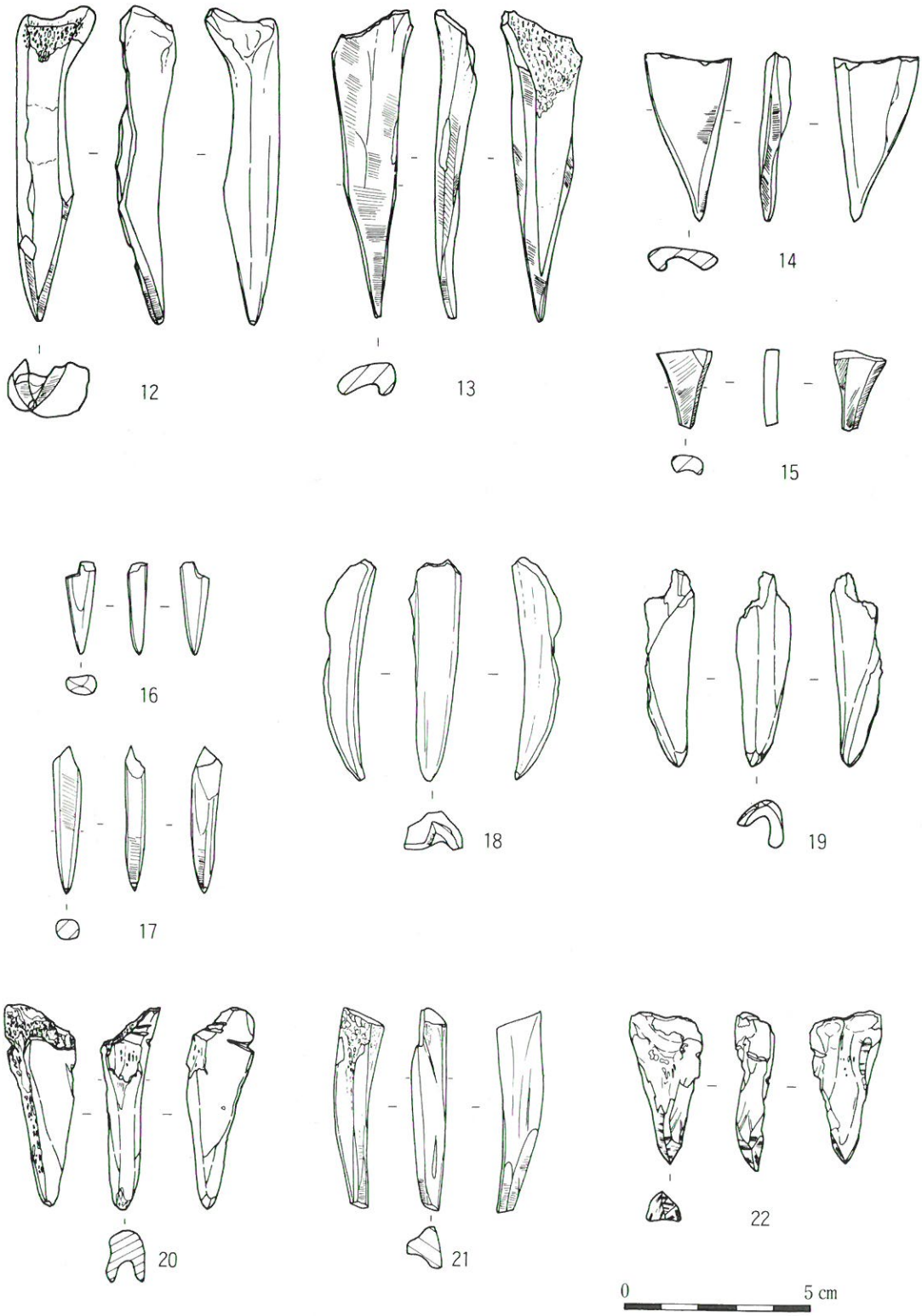


第37図（PL．31）　骨針１～11

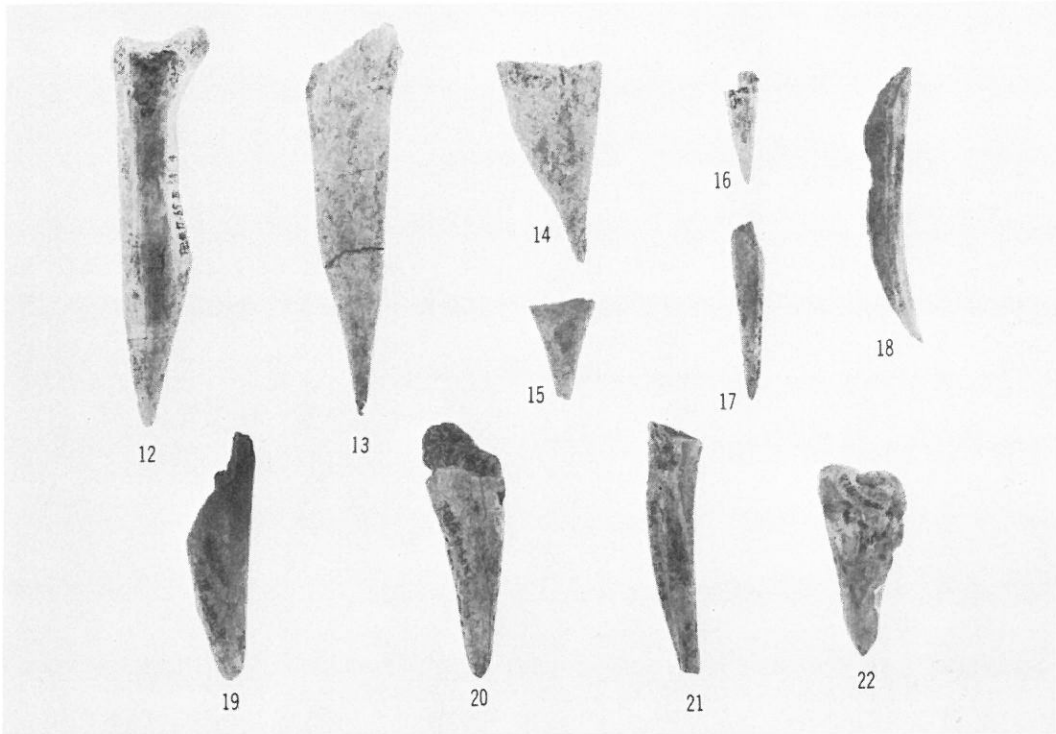


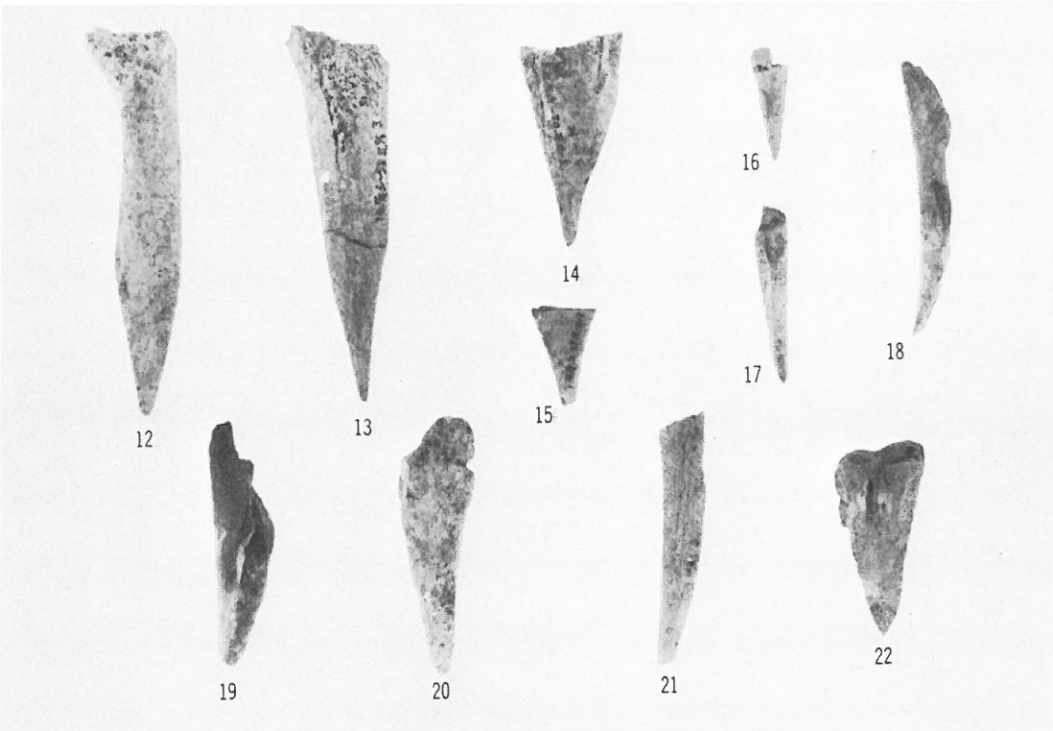


PL. 31　骨針（1～11）（上は表面・下は裏面）

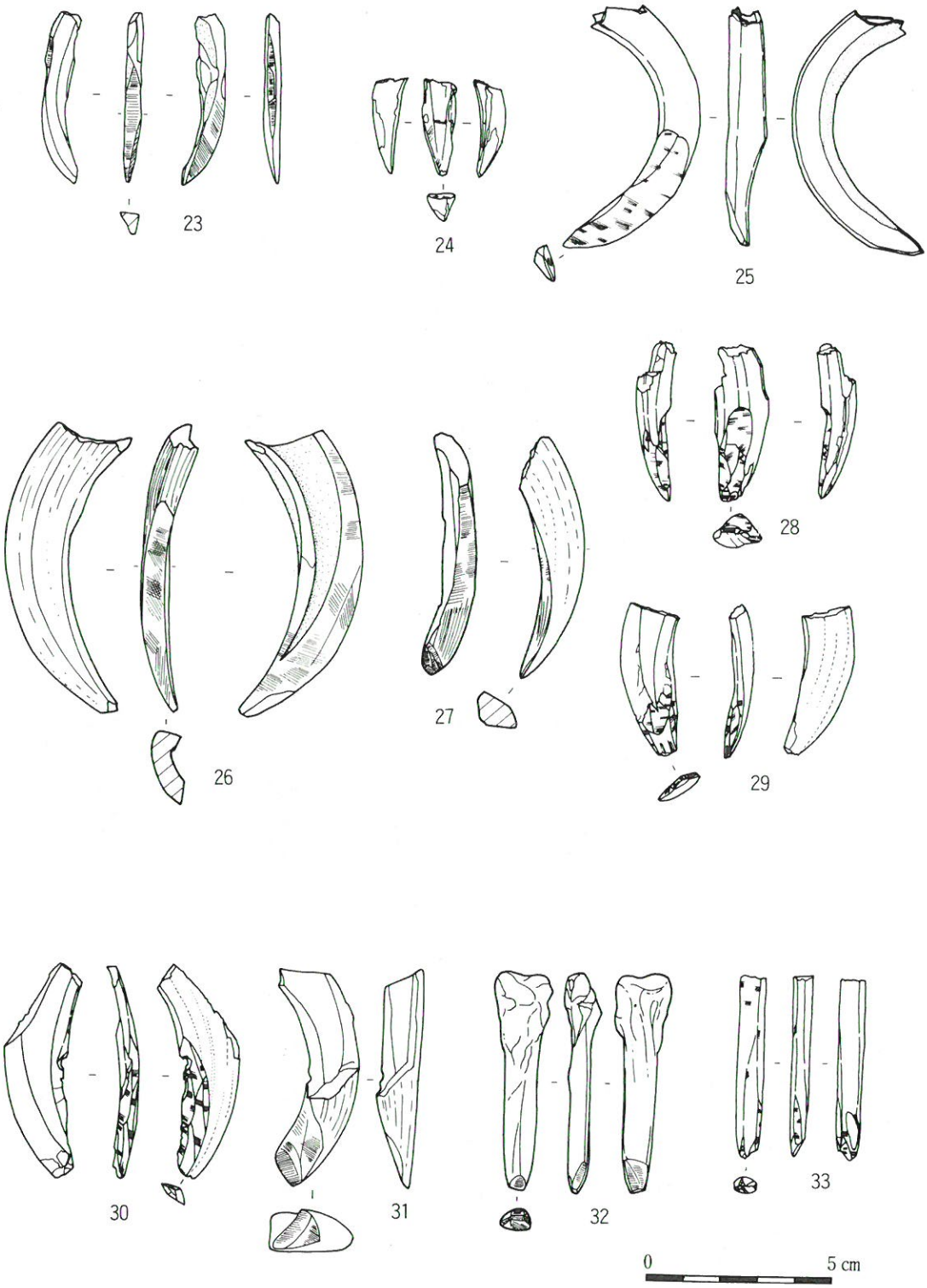


第38図（PL．32）　骨錐12～22

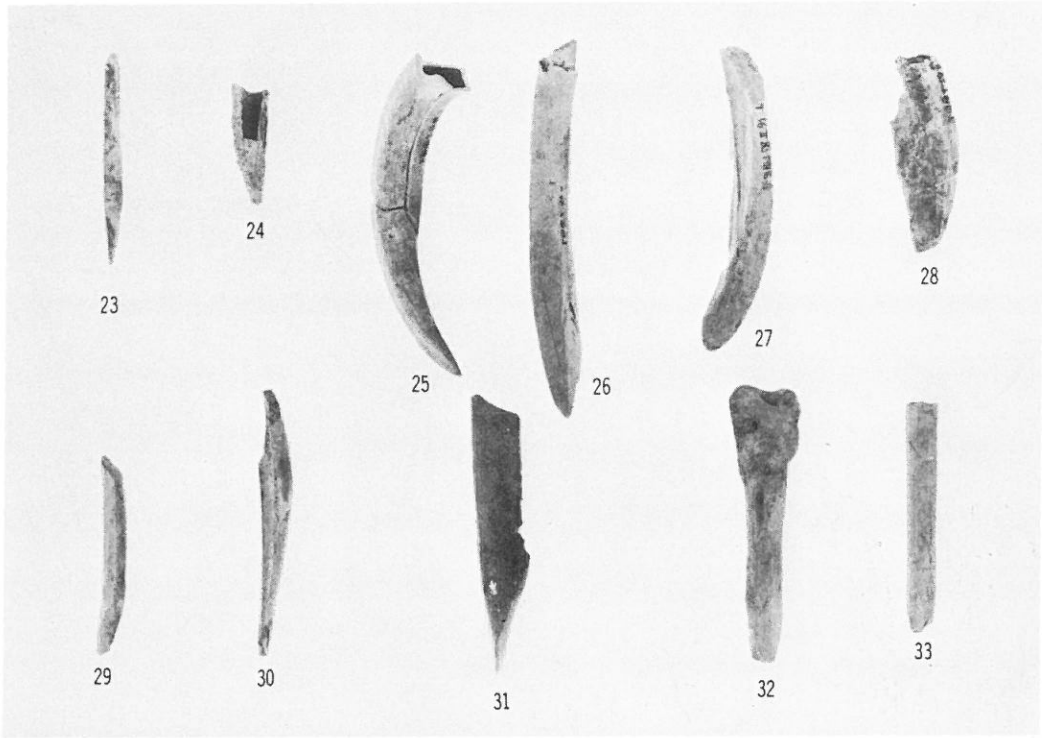


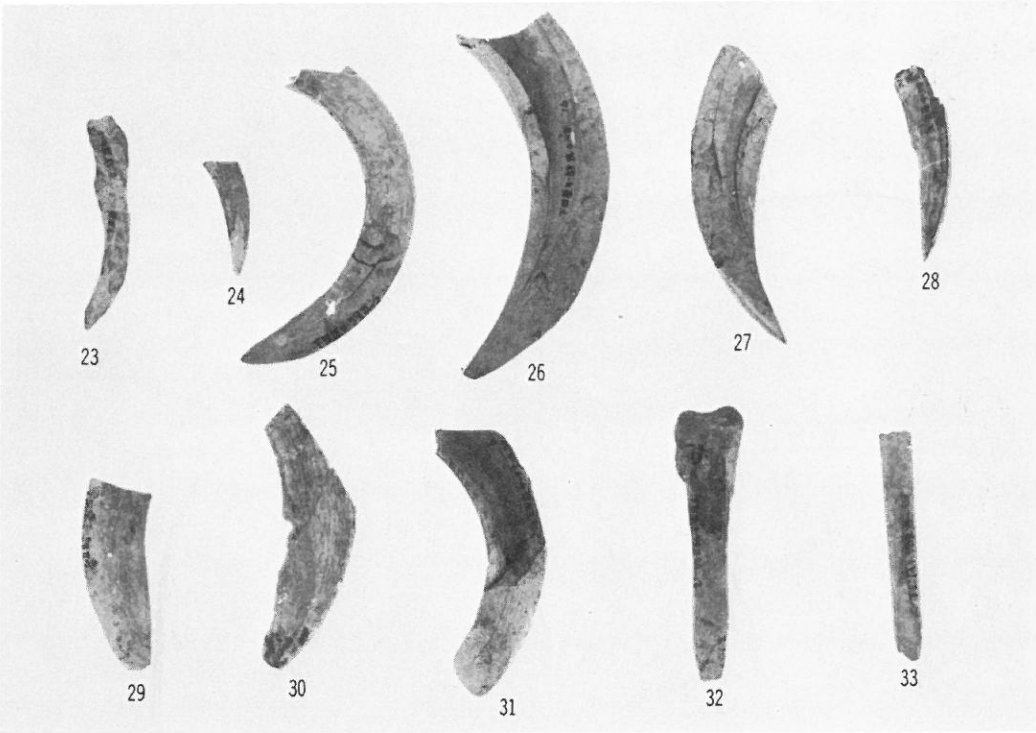


PL. 32　骨錐（12～22）（上は表面・下は裏面）

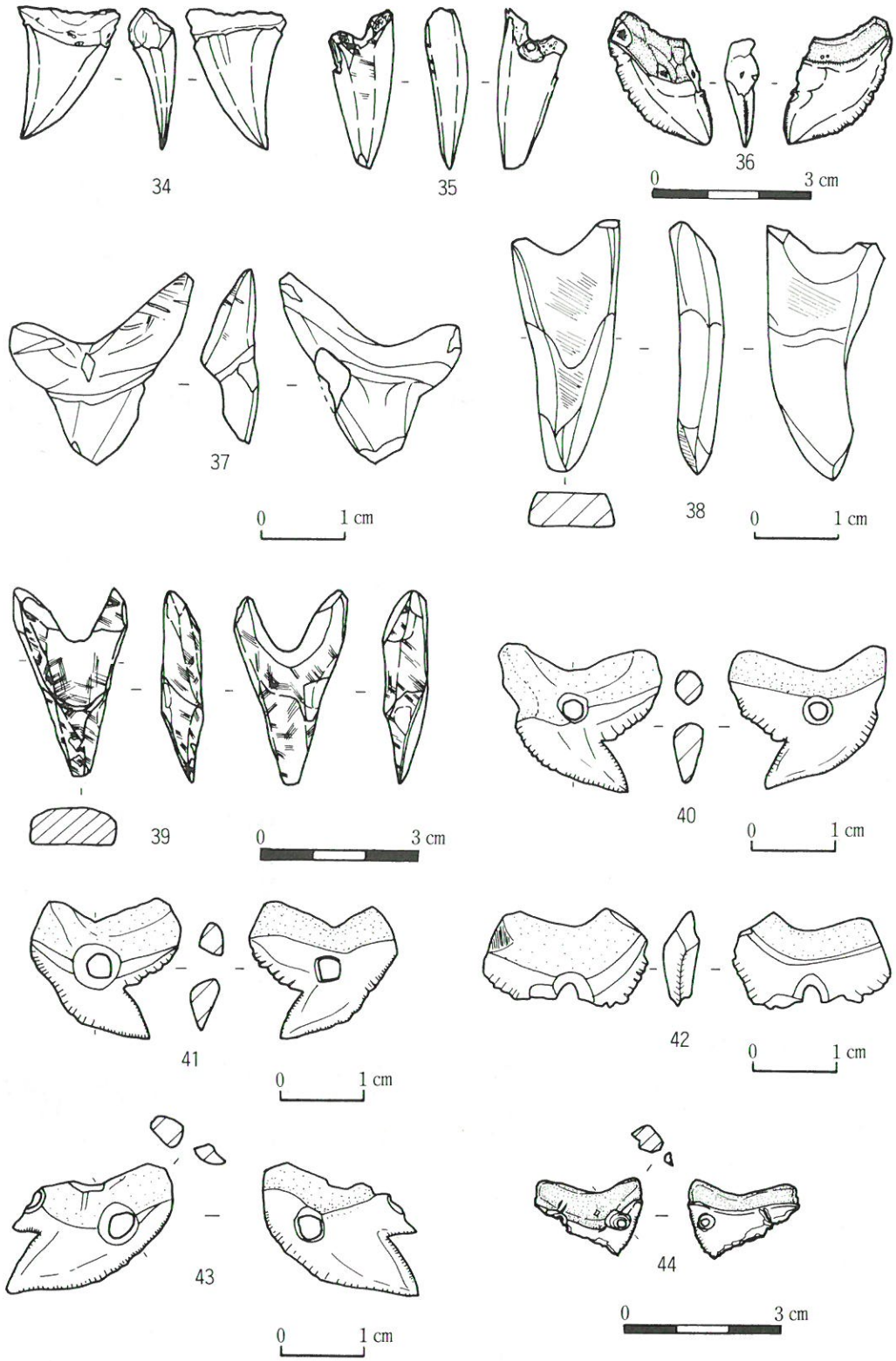


第39図（PL．33）　イノシシ牙製尖状品23～26、イノシシ牙製ノミ状品27～31、イノシシ骨製ノミ32・33

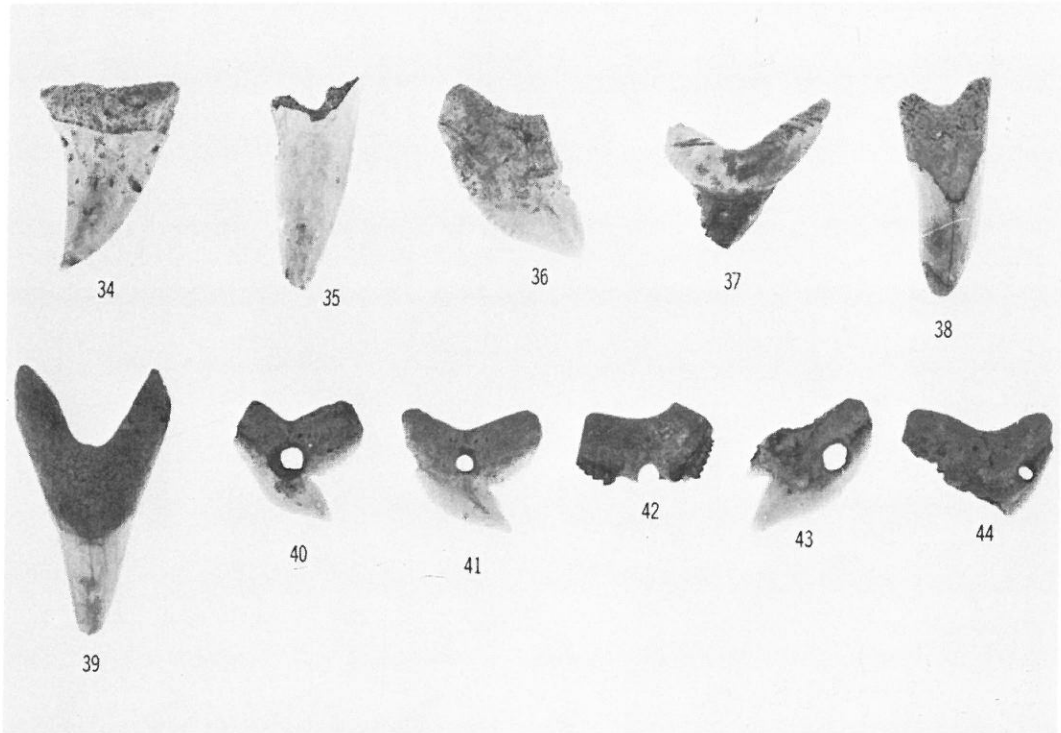


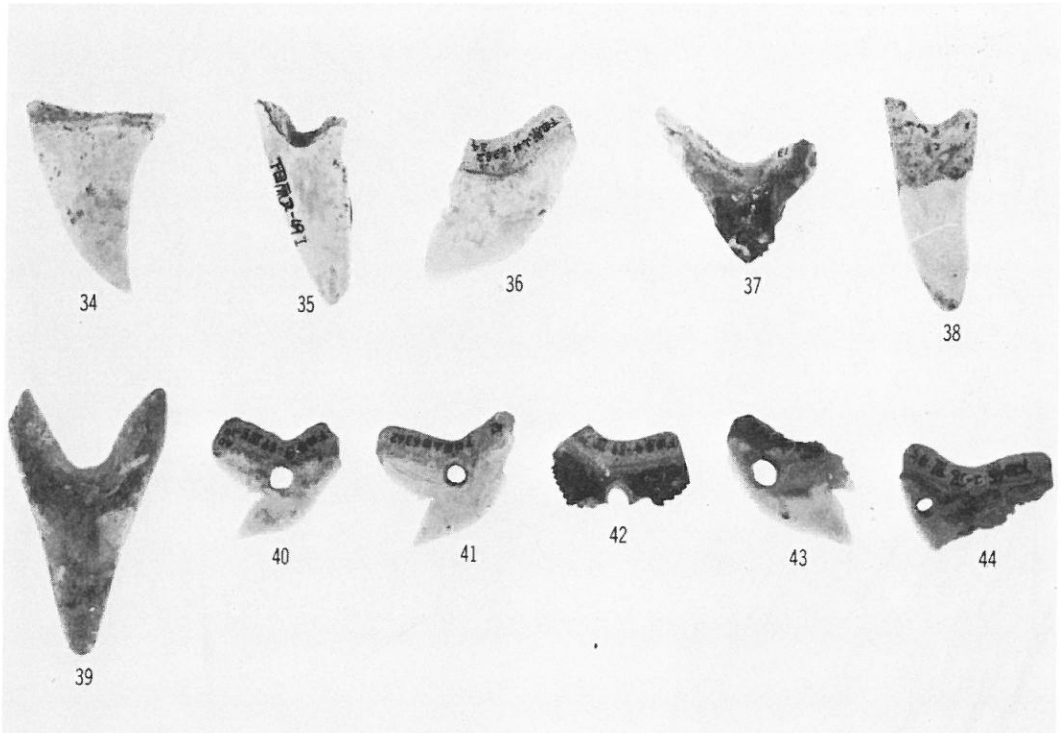


PL. 33　イノシシ牙製尖状品（23～26）、イノシシ牙製ノミ状品（27～31）、
イノシシ骨製ノミ（32・33）　（上は表面・側面・下は裏面・側面）

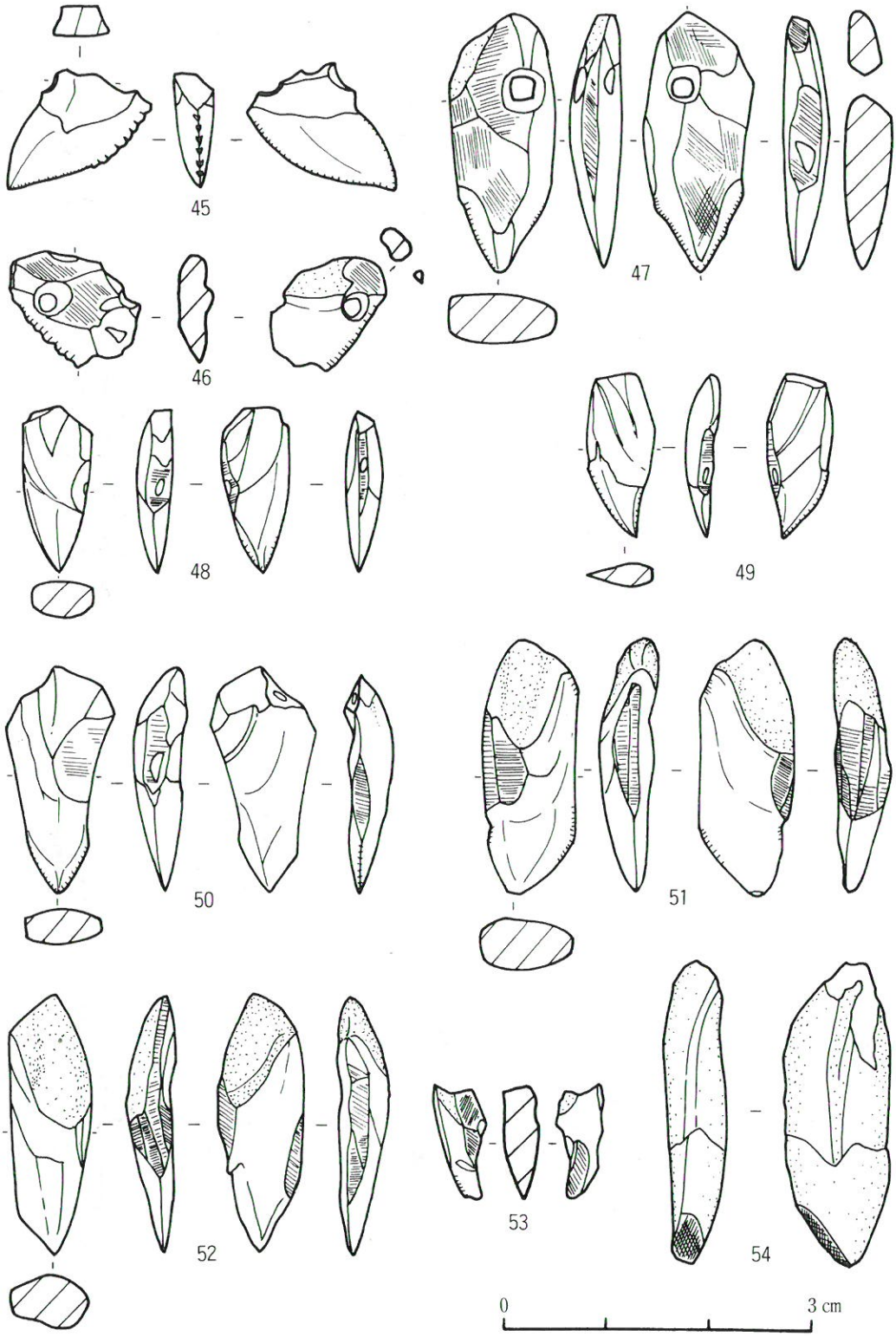


第40図（PL．34）　サメ歯製品34～44（A～Cタイプ）

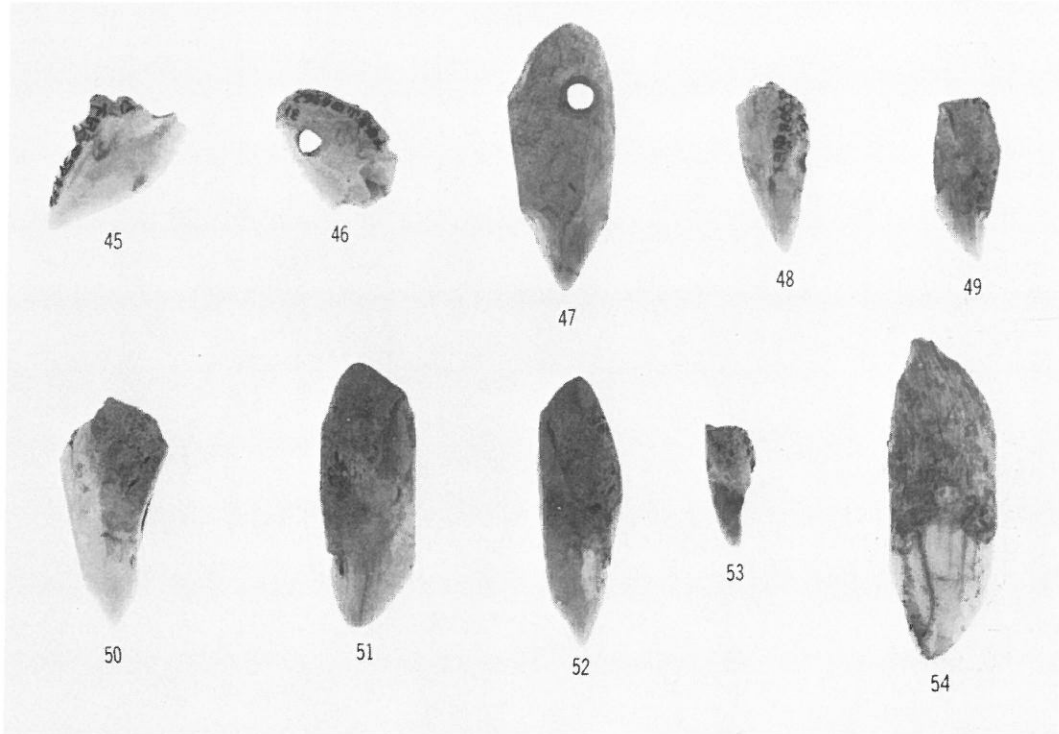


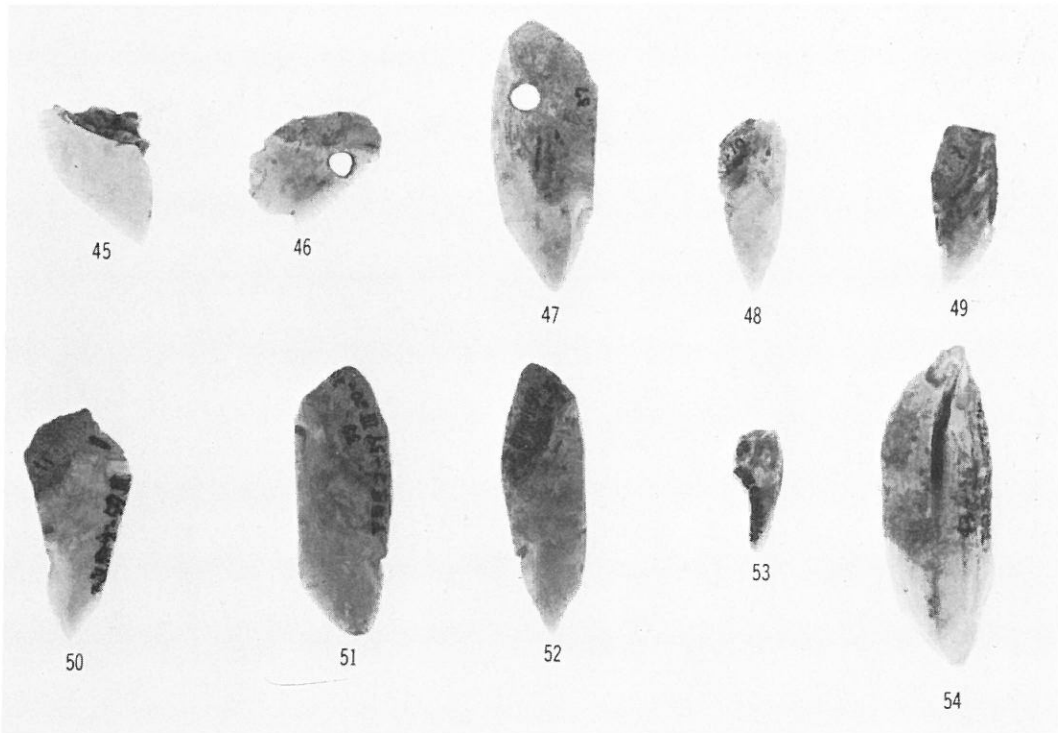


PL. 34　サメ歯製品（34～44）（A～Cタイプ）　（上は表面・下は裏面）

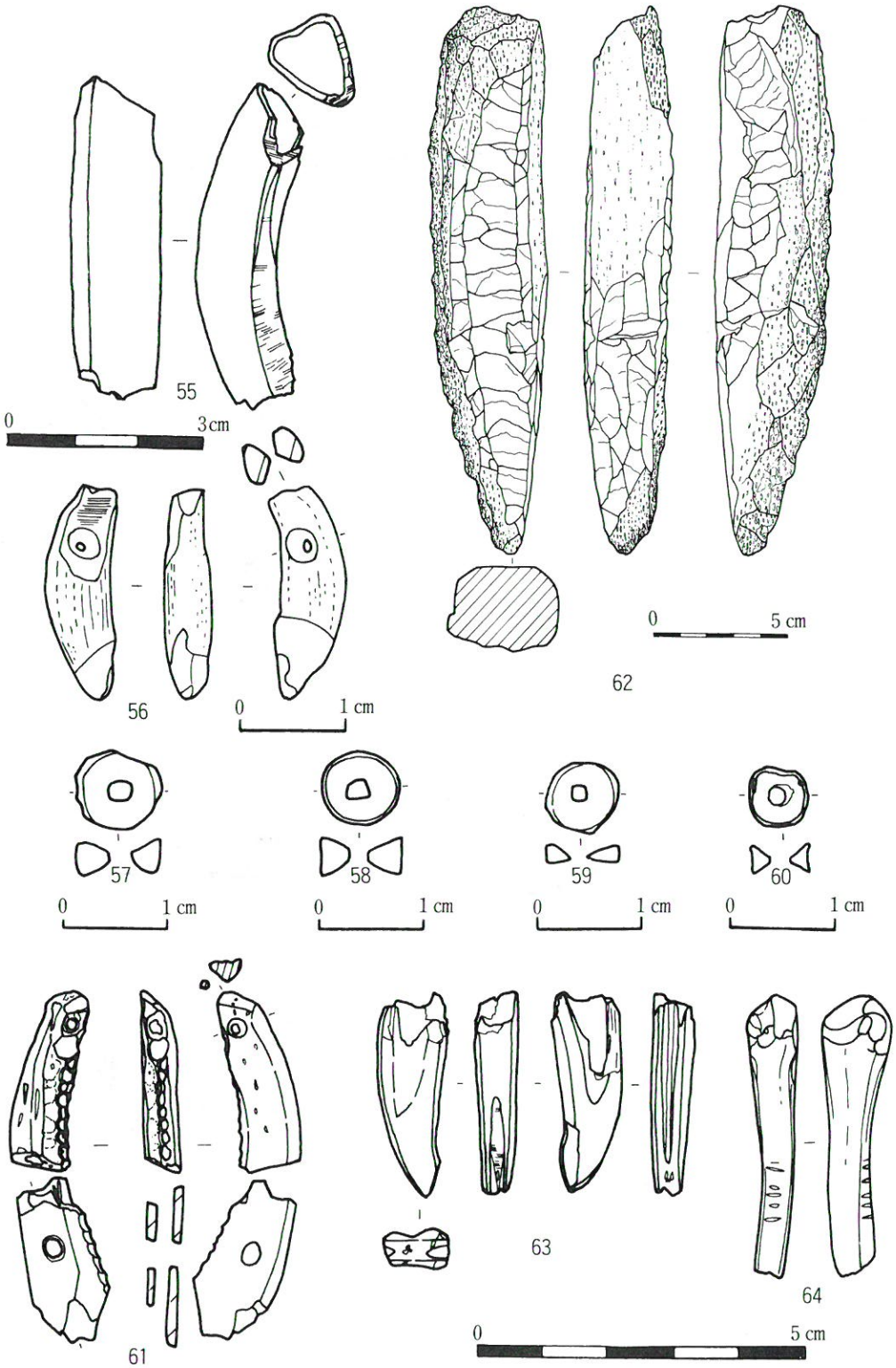


第41図（PL. 35）　サメ歯製品45～53（C・Dタイプ）
・イノシシ牙製品54

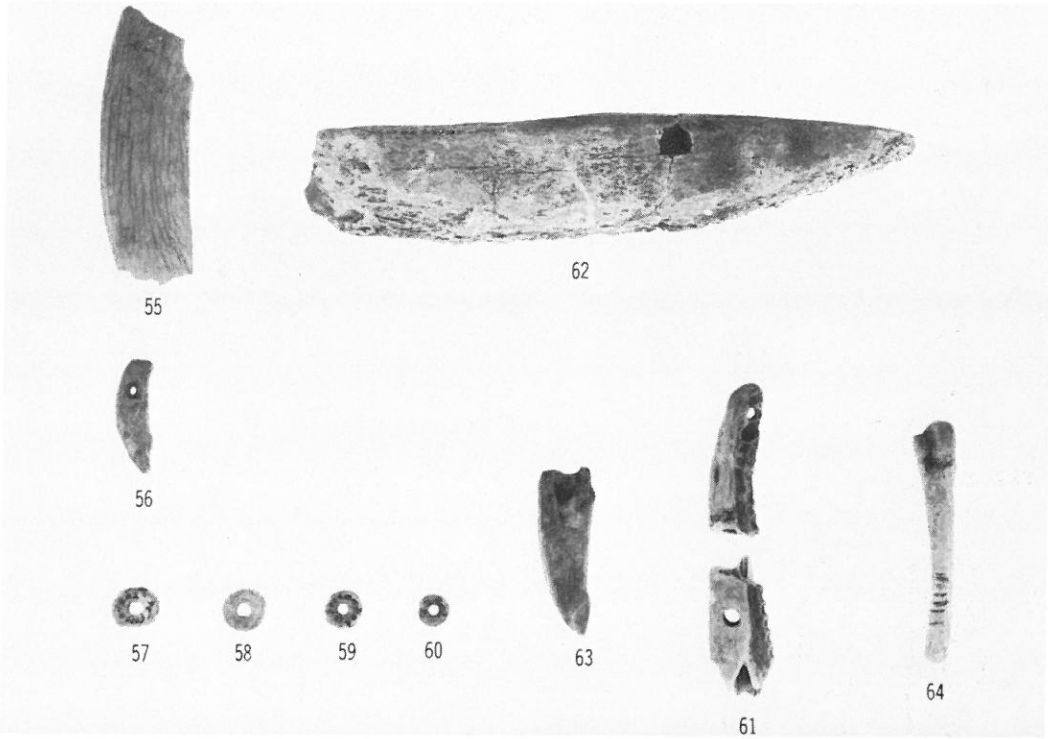


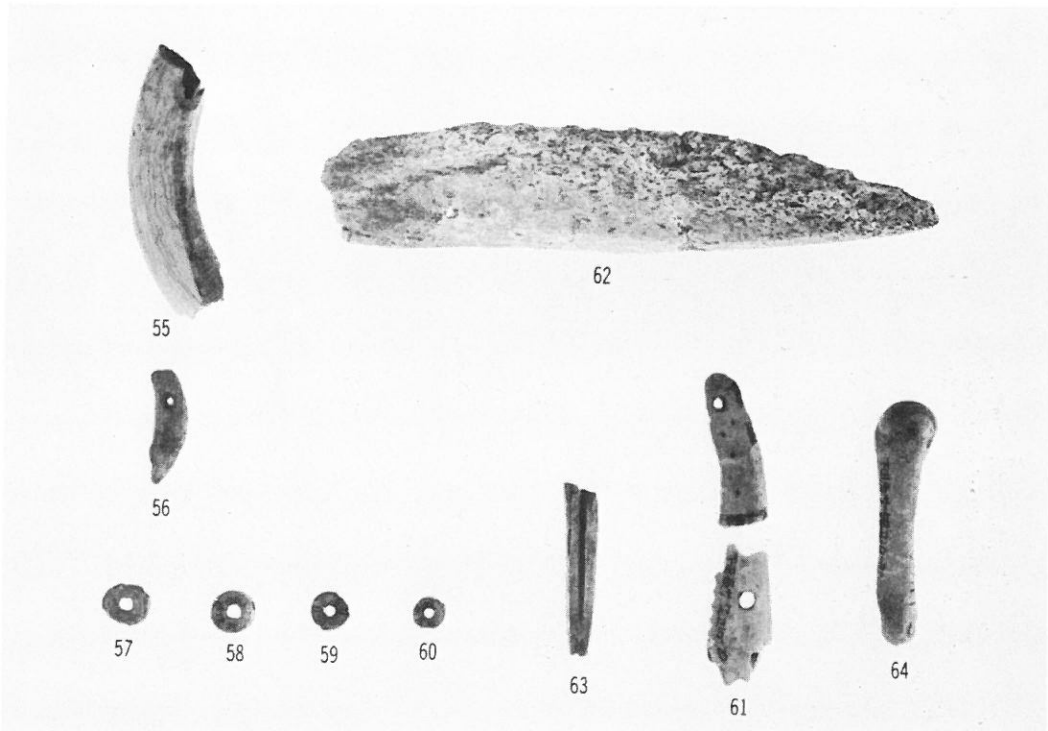


PL. 35　サメ歯製品（45～53）（C・Dタイプ）、イノシシ牙製品（54）
（上は表面・下は裏面）

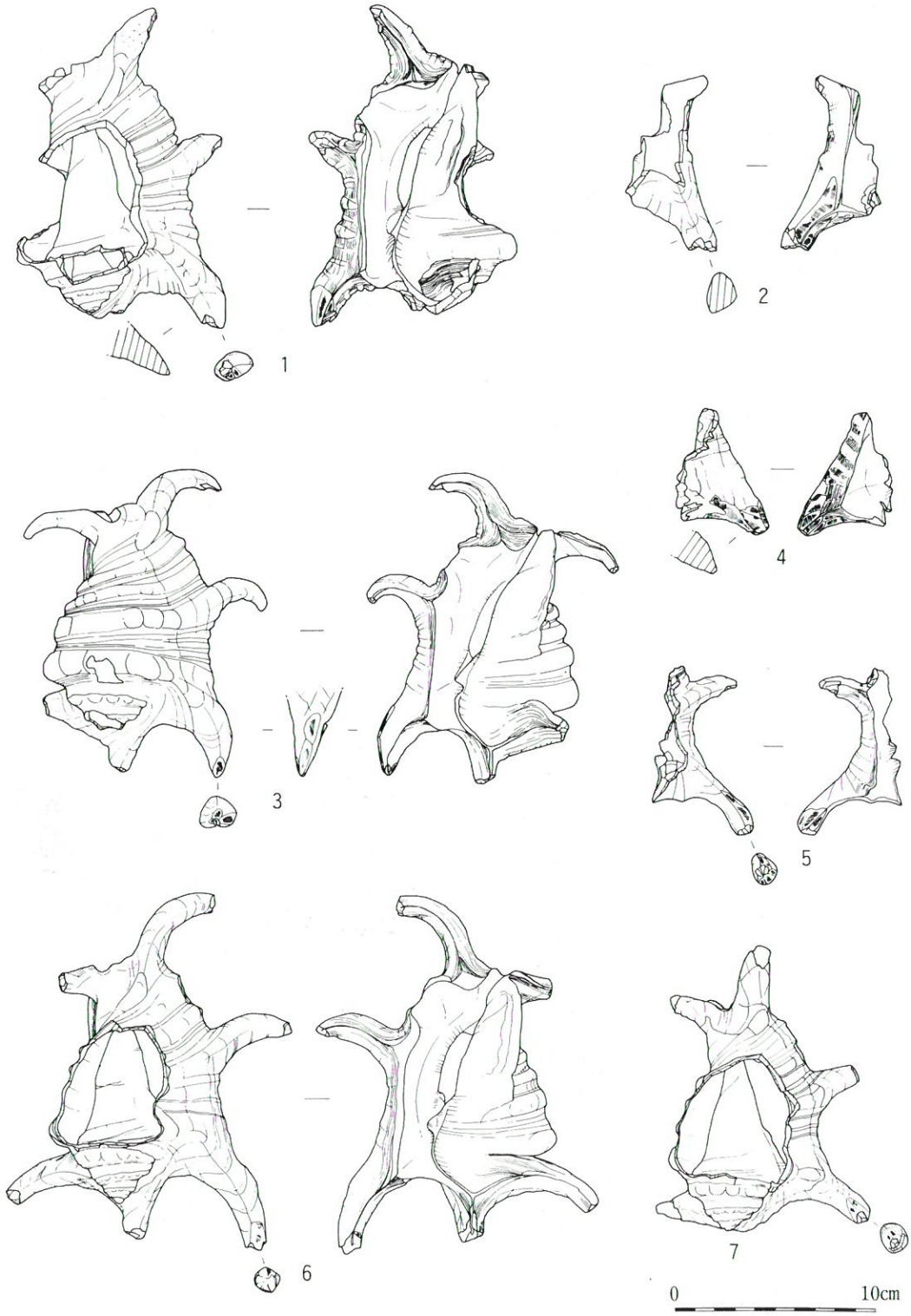


第42図（PL．36）　イノシシ牙製品55、有孔イヌ牙製品56　有孔椎骨製品57～60、ウツボ有孔顎骨製品61、用途不明62（クジラ）・63（魚骨）、その他64

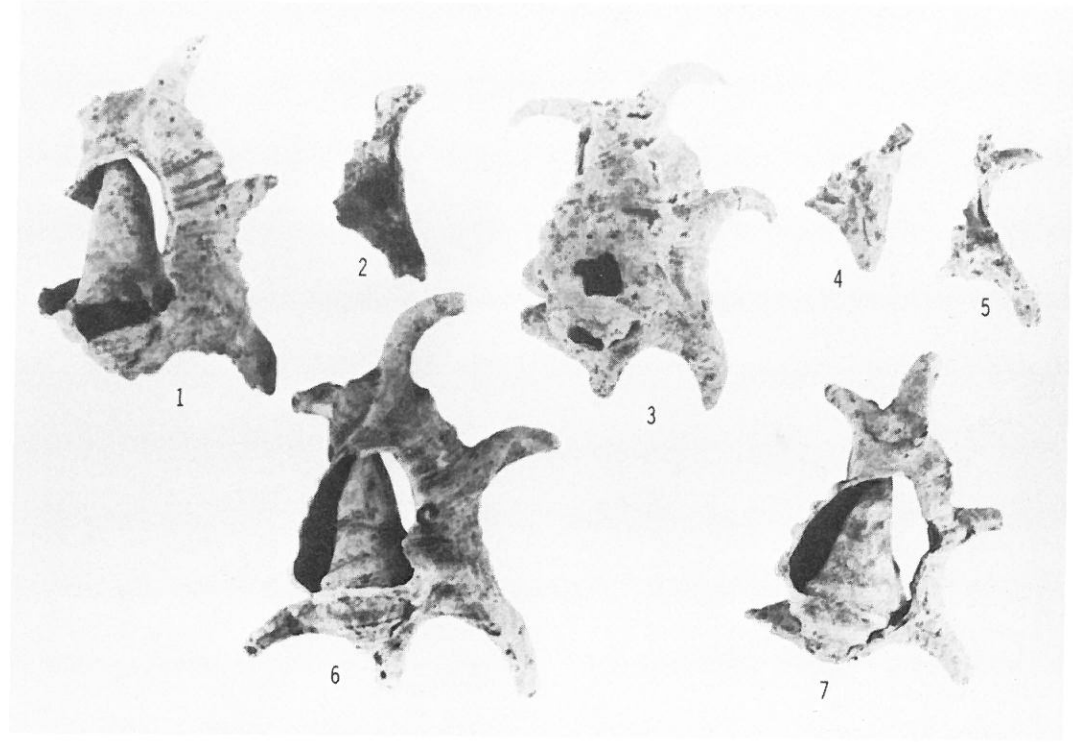




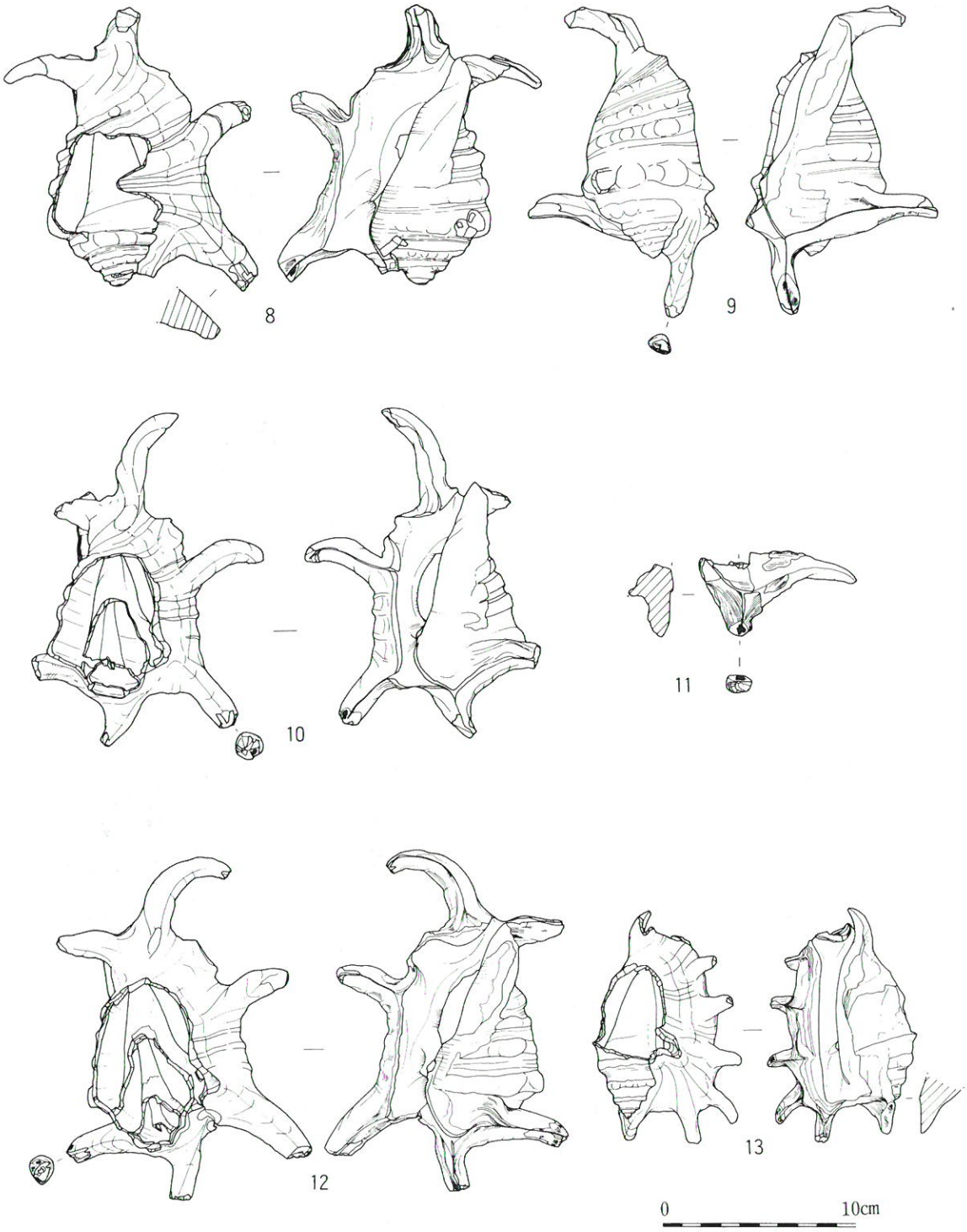
PL. 36　イノシシ牙製品55、有孔イヌ牙製品56、有孔椎骨製品57～60、ウツボ有孔顎骨製品61、用途不明62（クジラ）・63（魚骨）、その他64（上は表面・下は裏面）



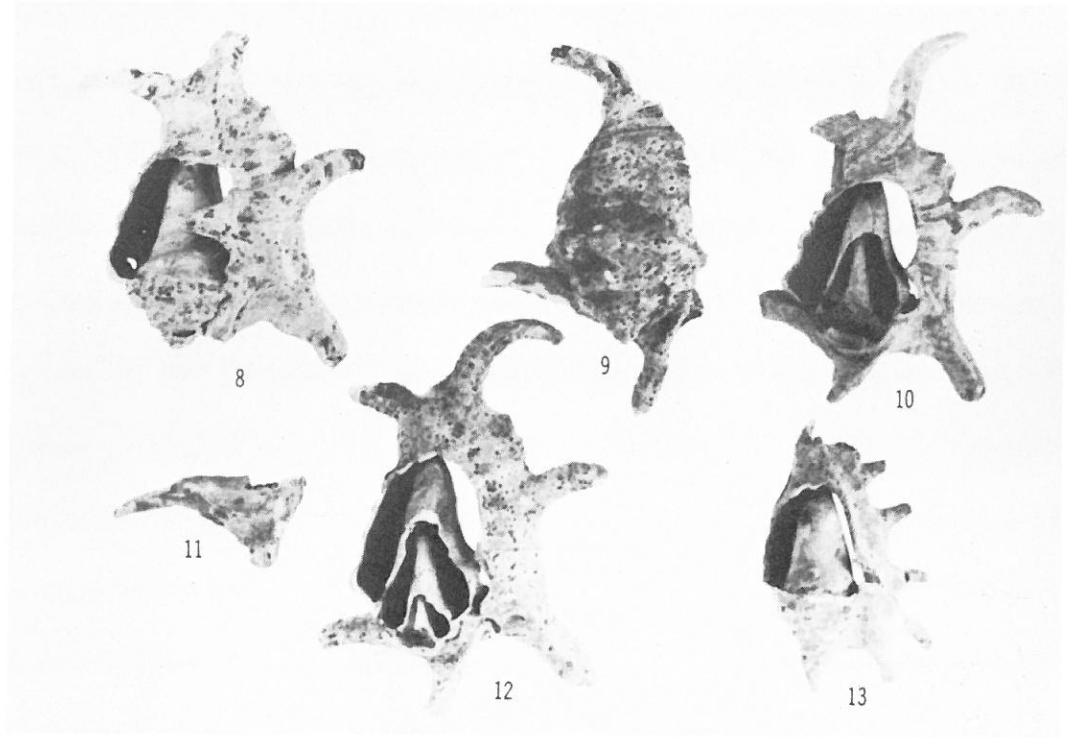
第43図（PL．37）　スイジガイ製利器１～７

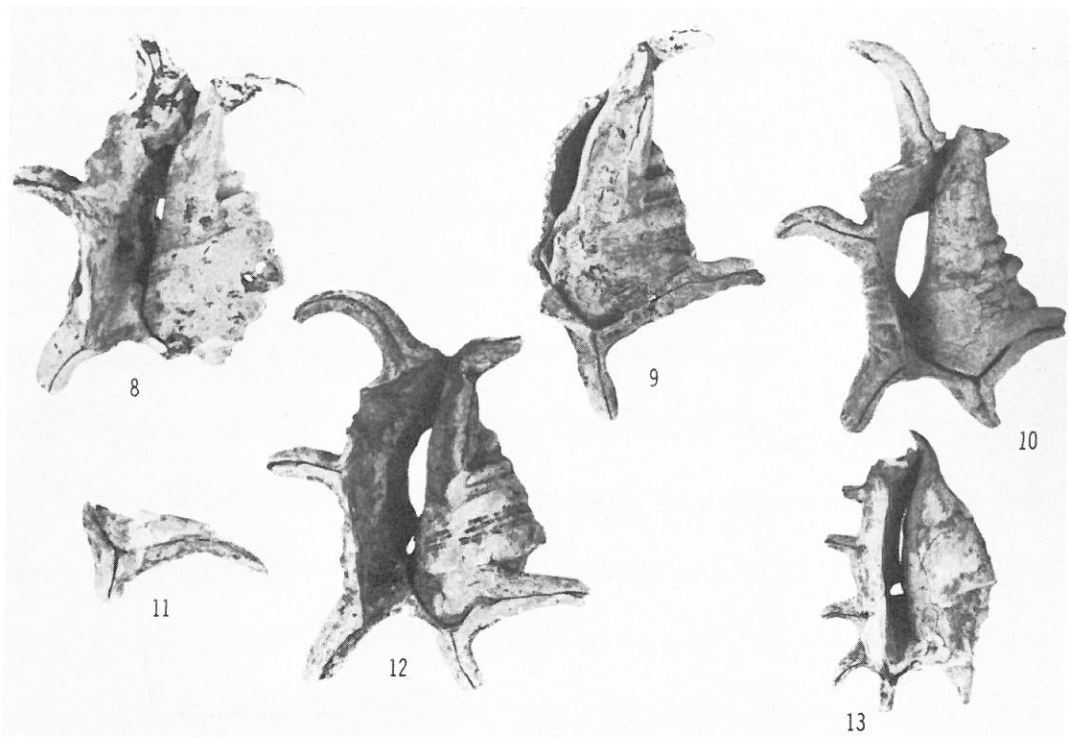


PL. 37　スイジガイ製利器（1～7）　（上は外面・下は内面）

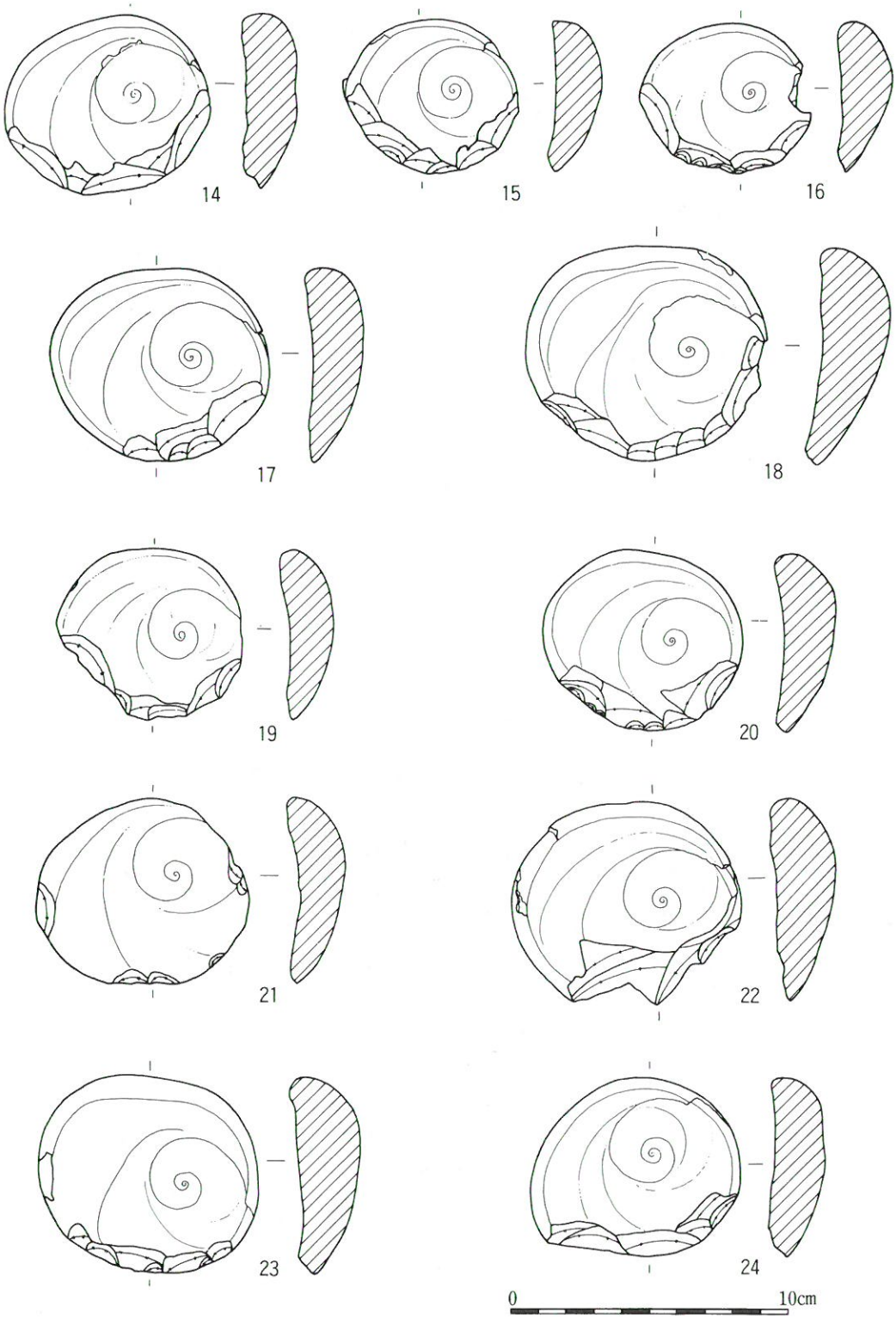


第44図（PL．38）　スイジガイ製利器８～12、クモガイ製利器13

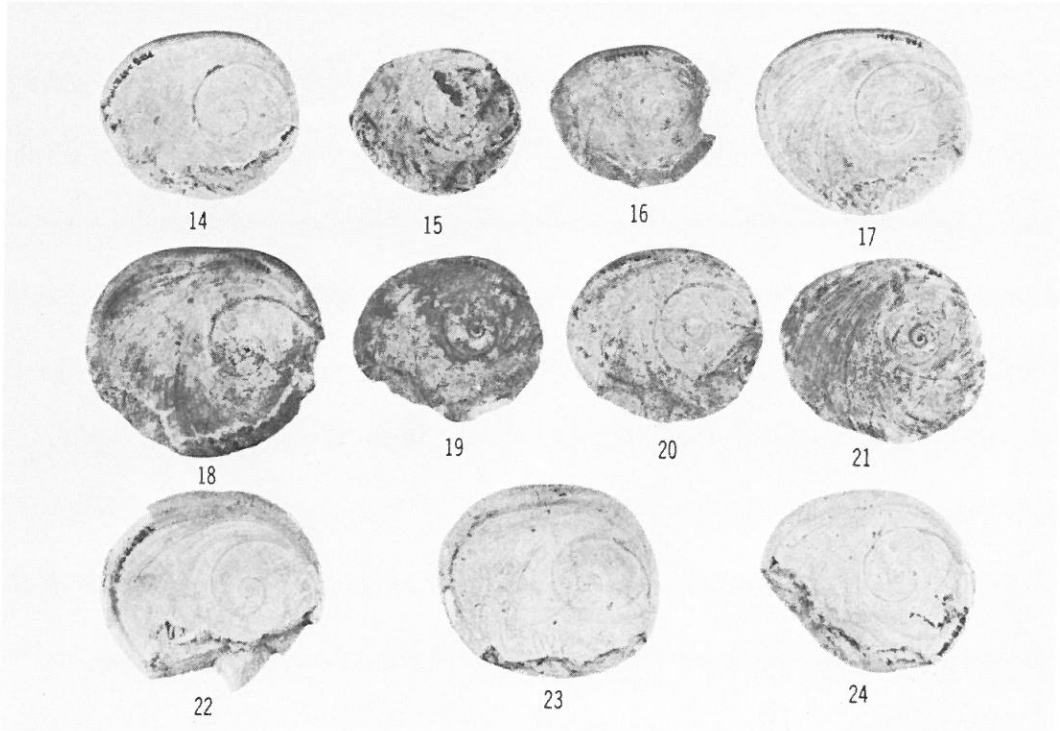


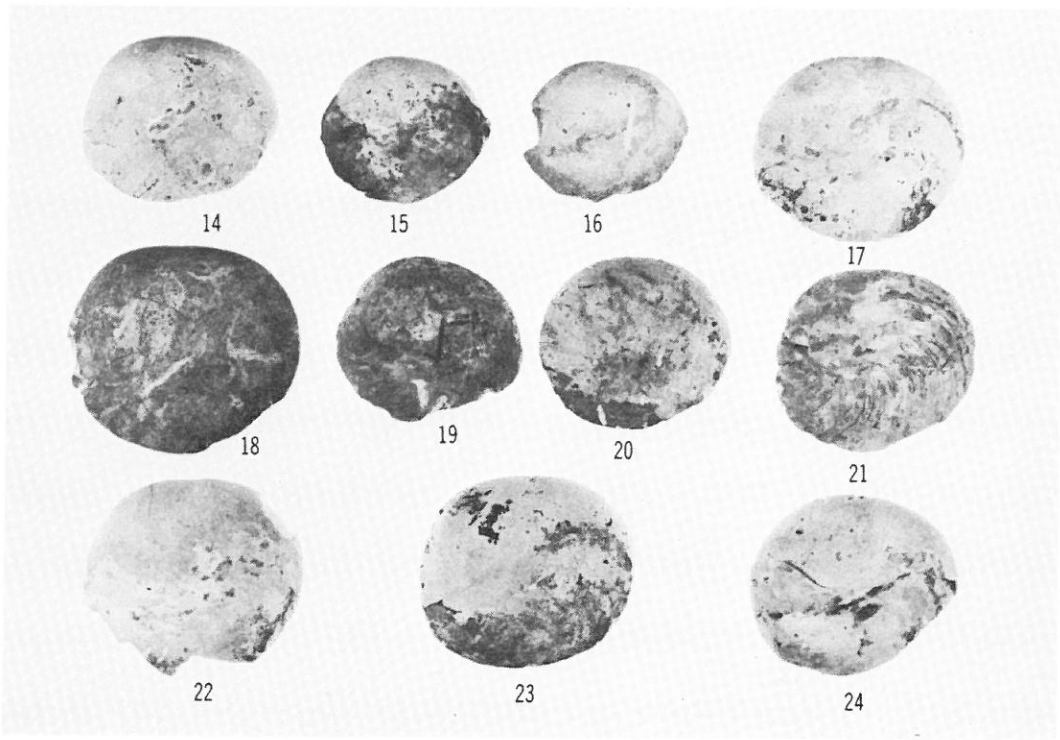


PL. 38　スイジガイ製利器（8～12）、クモガイ製利品（13）　（上は外面・下は内面）

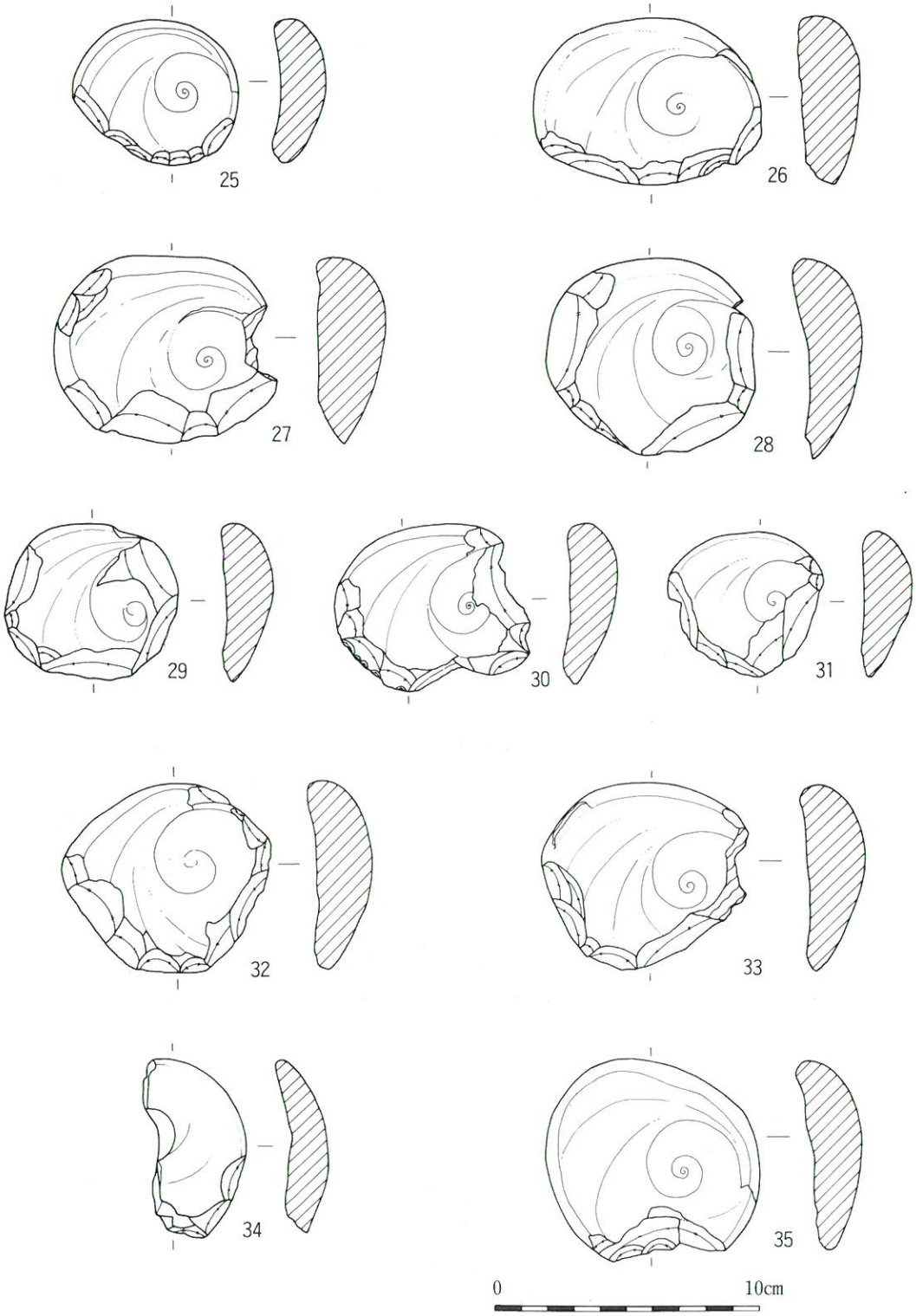


第45図（PL．39）　ヤコウガイの蓋製貝刃14～24

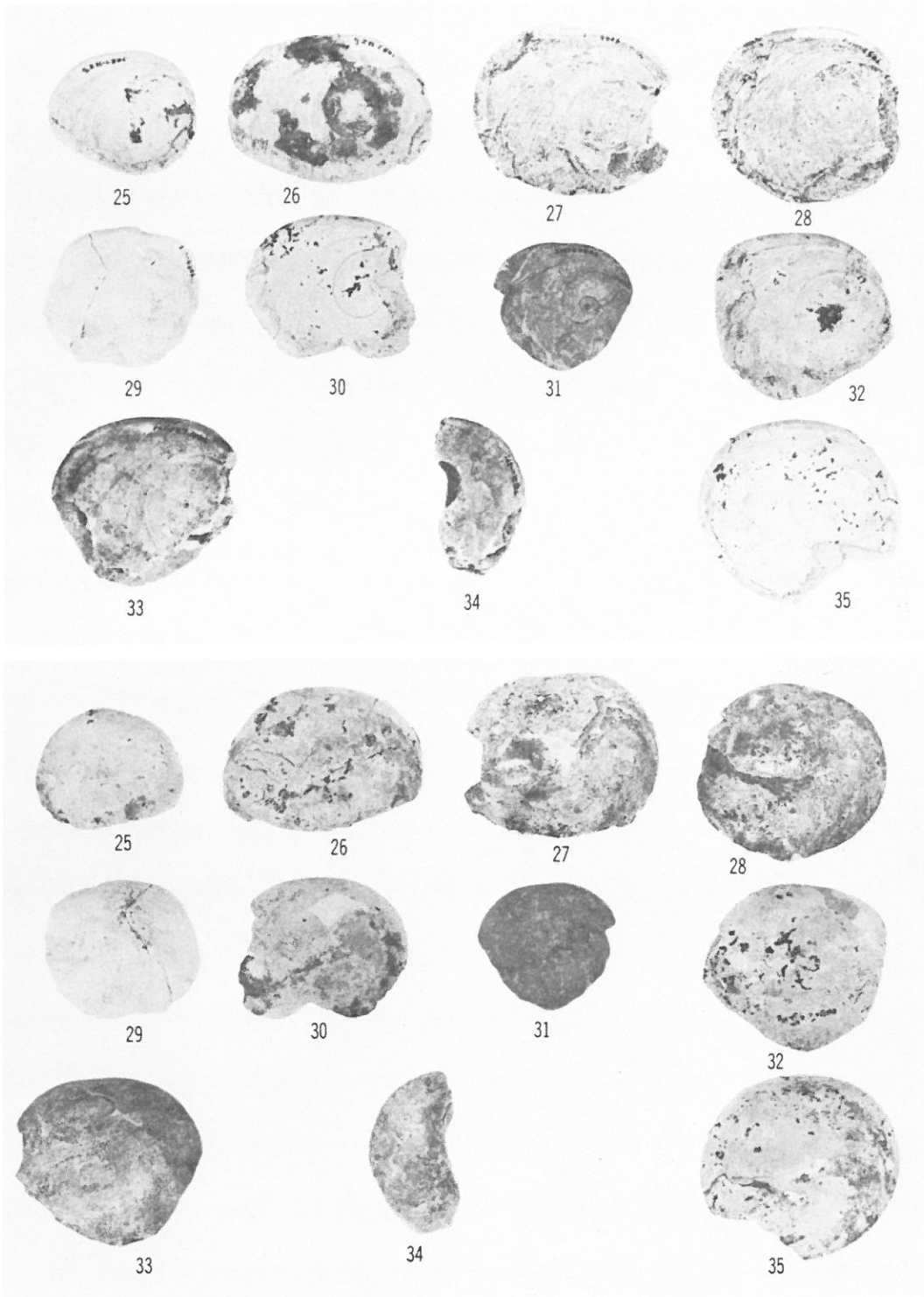




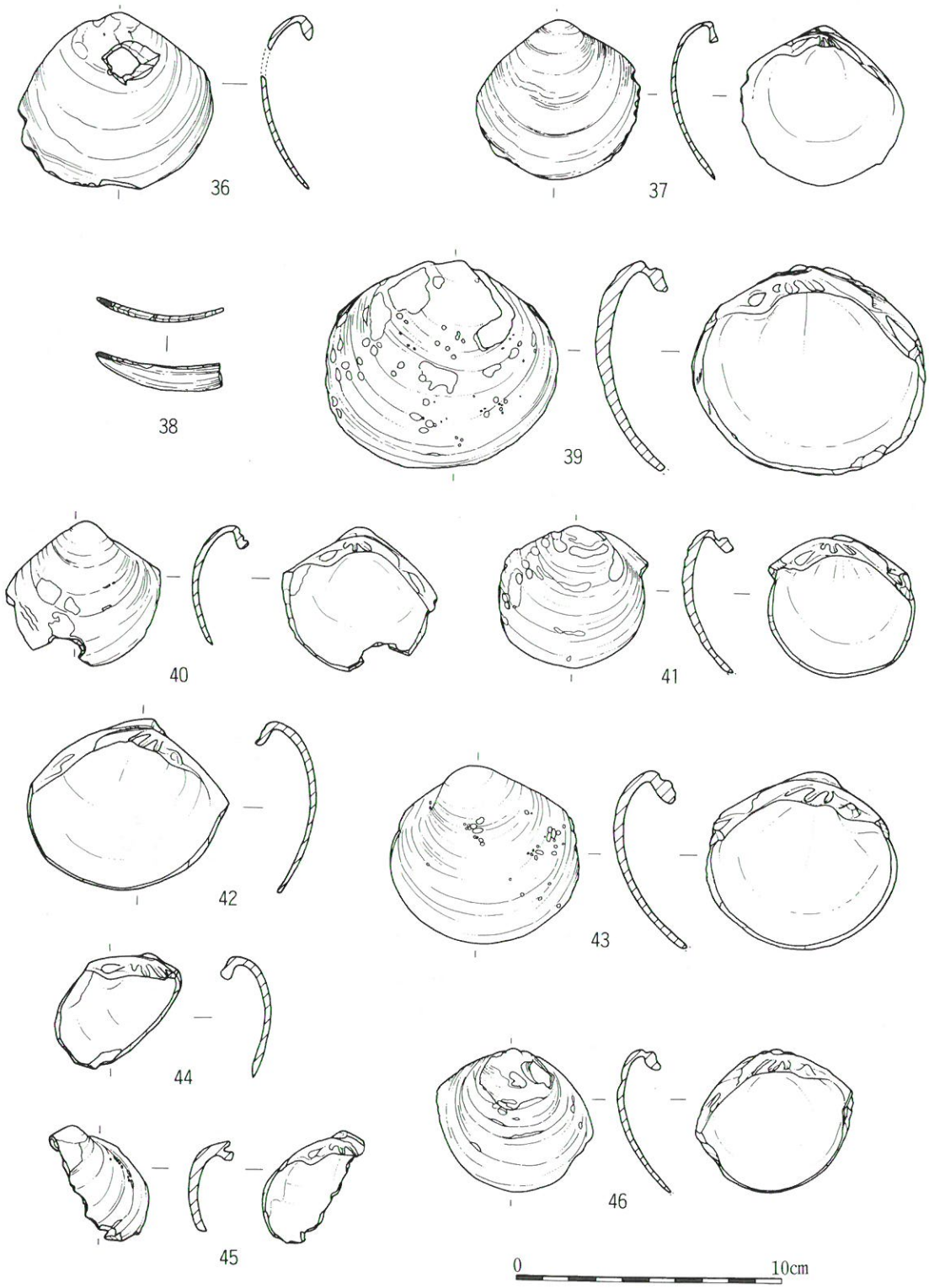
PL. 39　ヤコウガイの蓋製貝刃（14～24）（上は内面・下は外面）



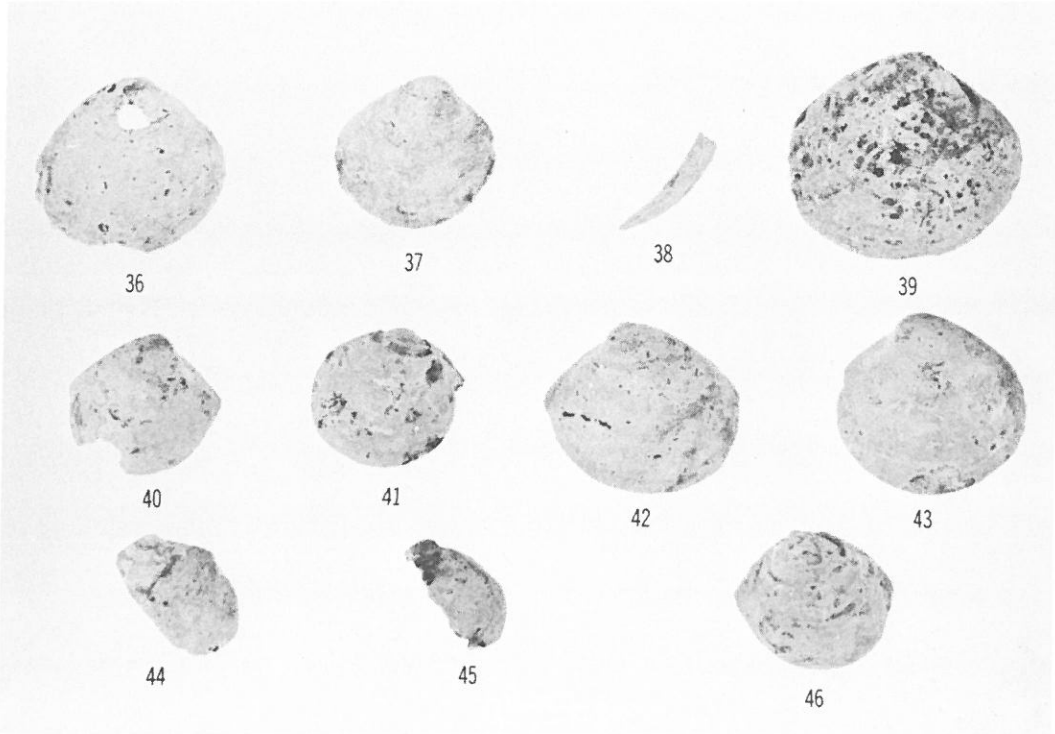
第46図（PL．40）　ヤコウガイの蓋製貝刃　25～35

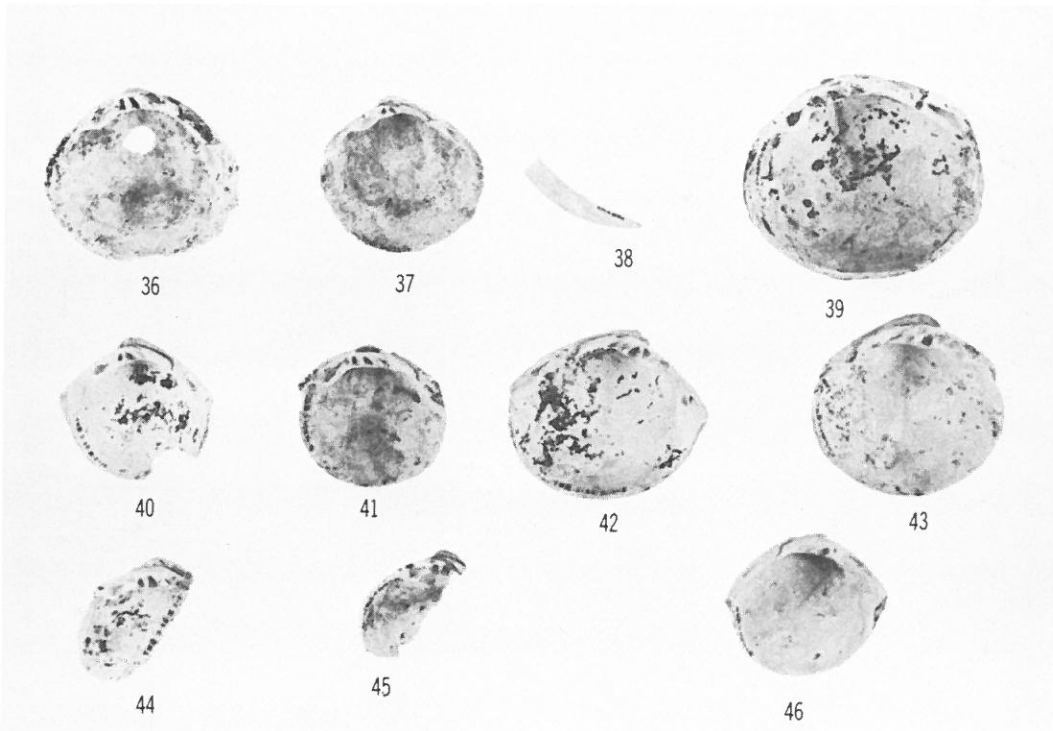


PL. 40　ヤコウガイの蓋製貝刃（25～35）（上は内面・下は外面）

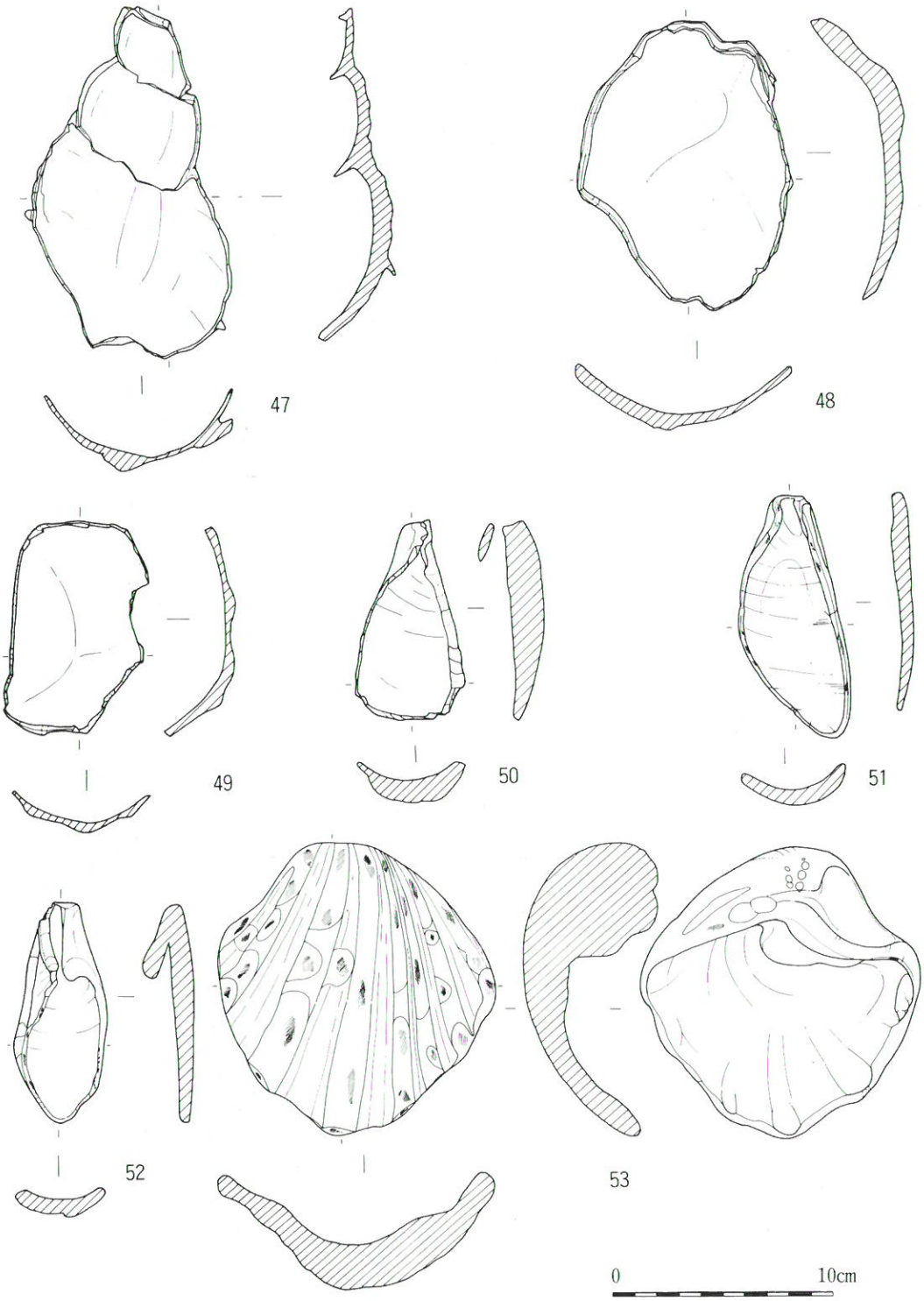


第47図（PL．41）　シレナシジミ製貝製品（貝刃36・37、利器38、貝匙39～46）

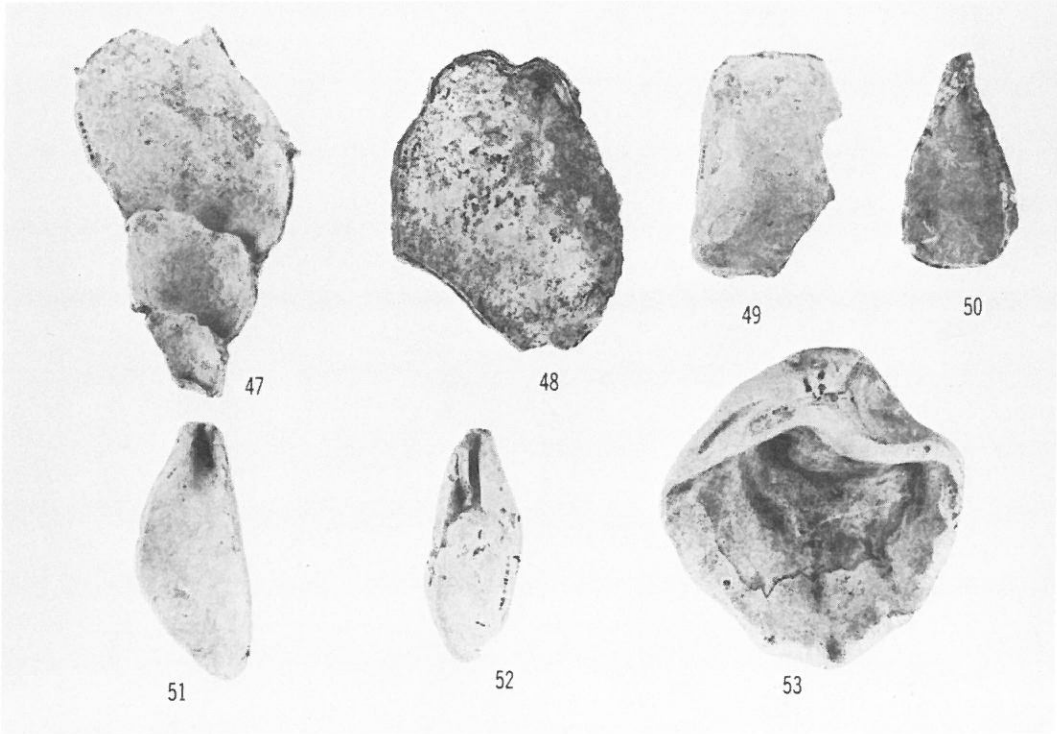


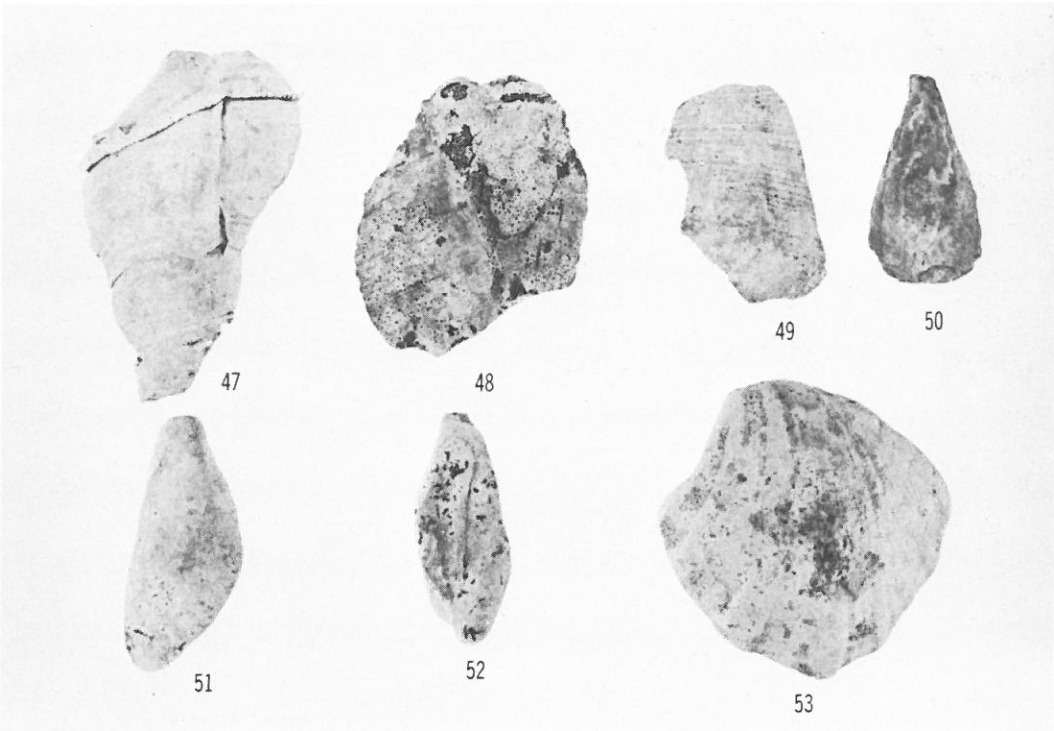


PL. 41　シレナシジミ製貝製品（貝刃36・37、利器38、貝匙39～46）
（上は外面・下は内面）

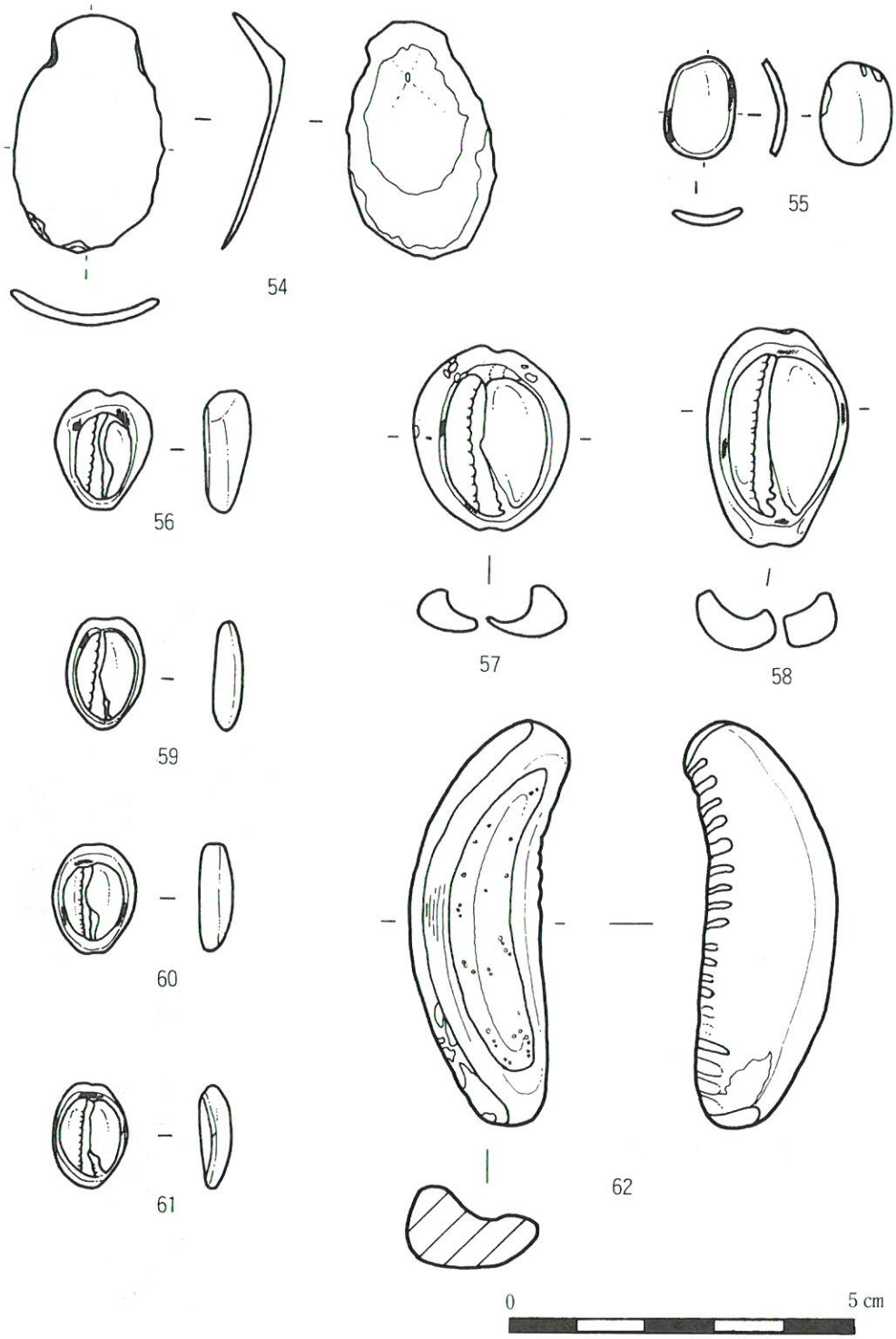


第48図（PL．42）　貝匙（ホラガイ製47～49、ゴホウラ製50、イモガイ科製51・52、シャコガイ製53）

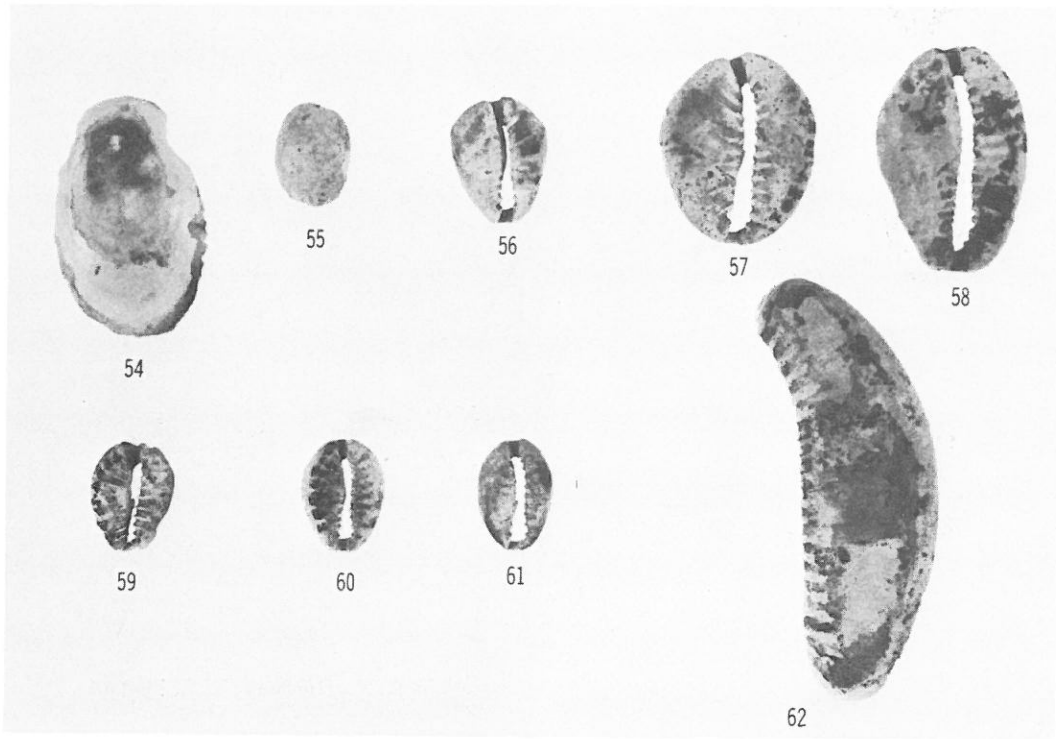




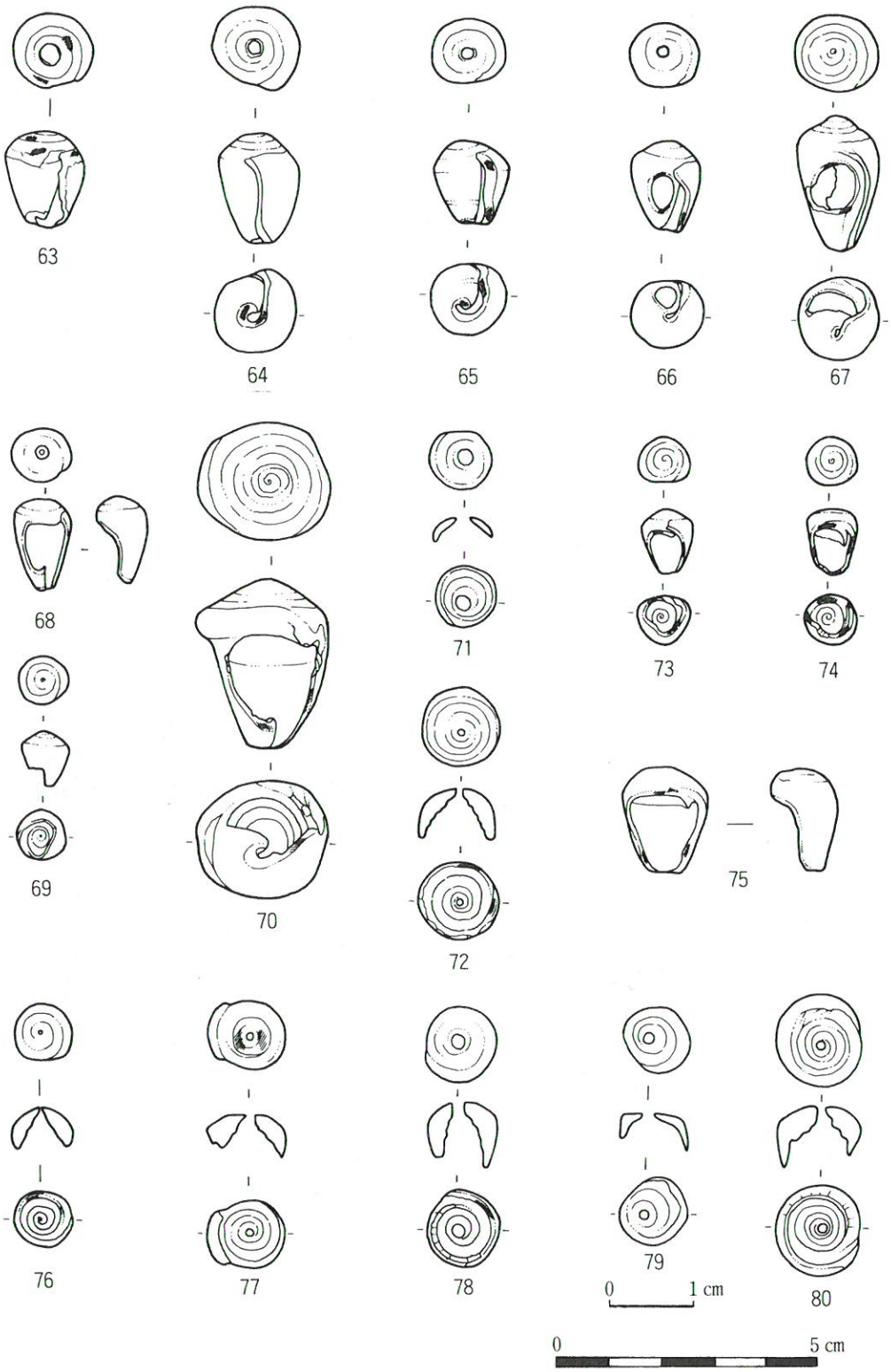
PL. 42　貝匙（ホラガイ製47～49、ゴホウラ製50、イモガイ科製51・52、シャコガイ製53）　（上は内面・下は外面）



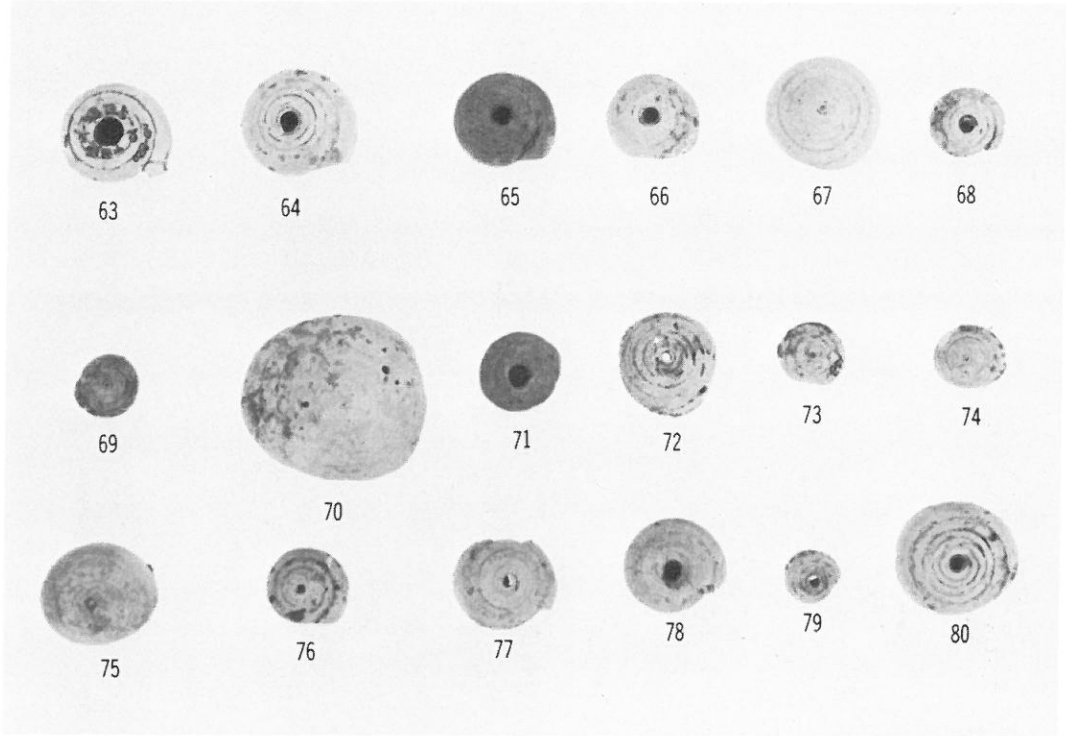
第49図（PL．43）　貝匙（オオベッコウガサガイ製54、タカラガイ製55）、タカラガイ製垂飾品56～62

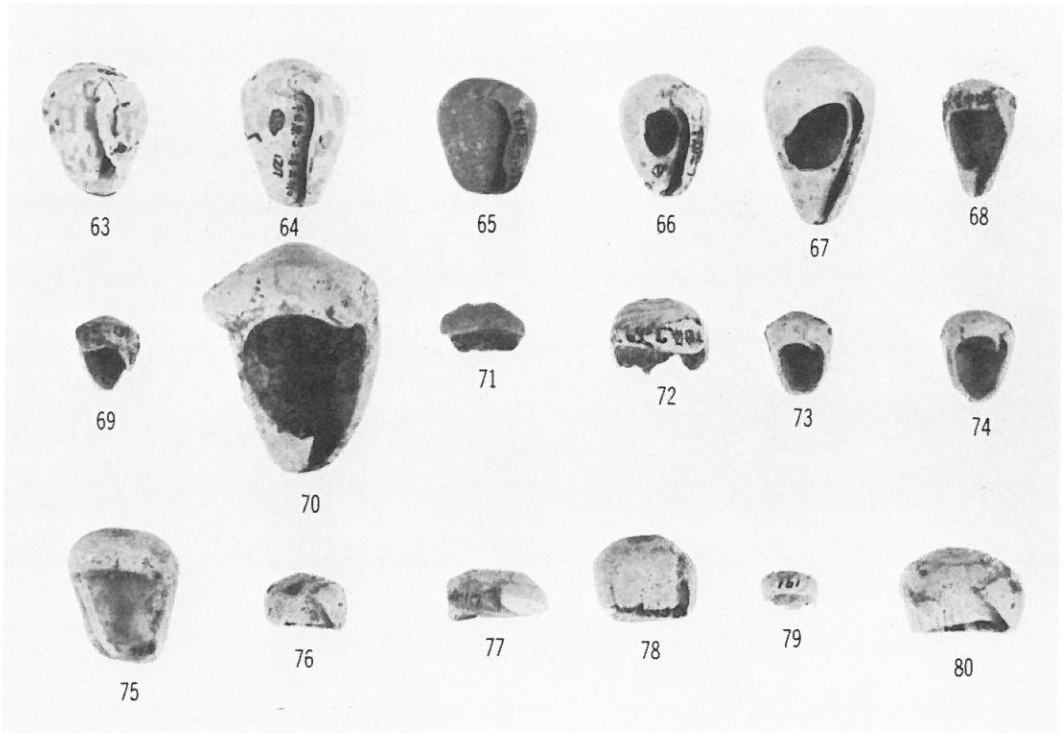


PL. 43　貝匙（オオベッコウガサガイ製54、タカラガイ製55）、
タカラガイ製垂飾品（56～62）　（上は内面・下は外面）

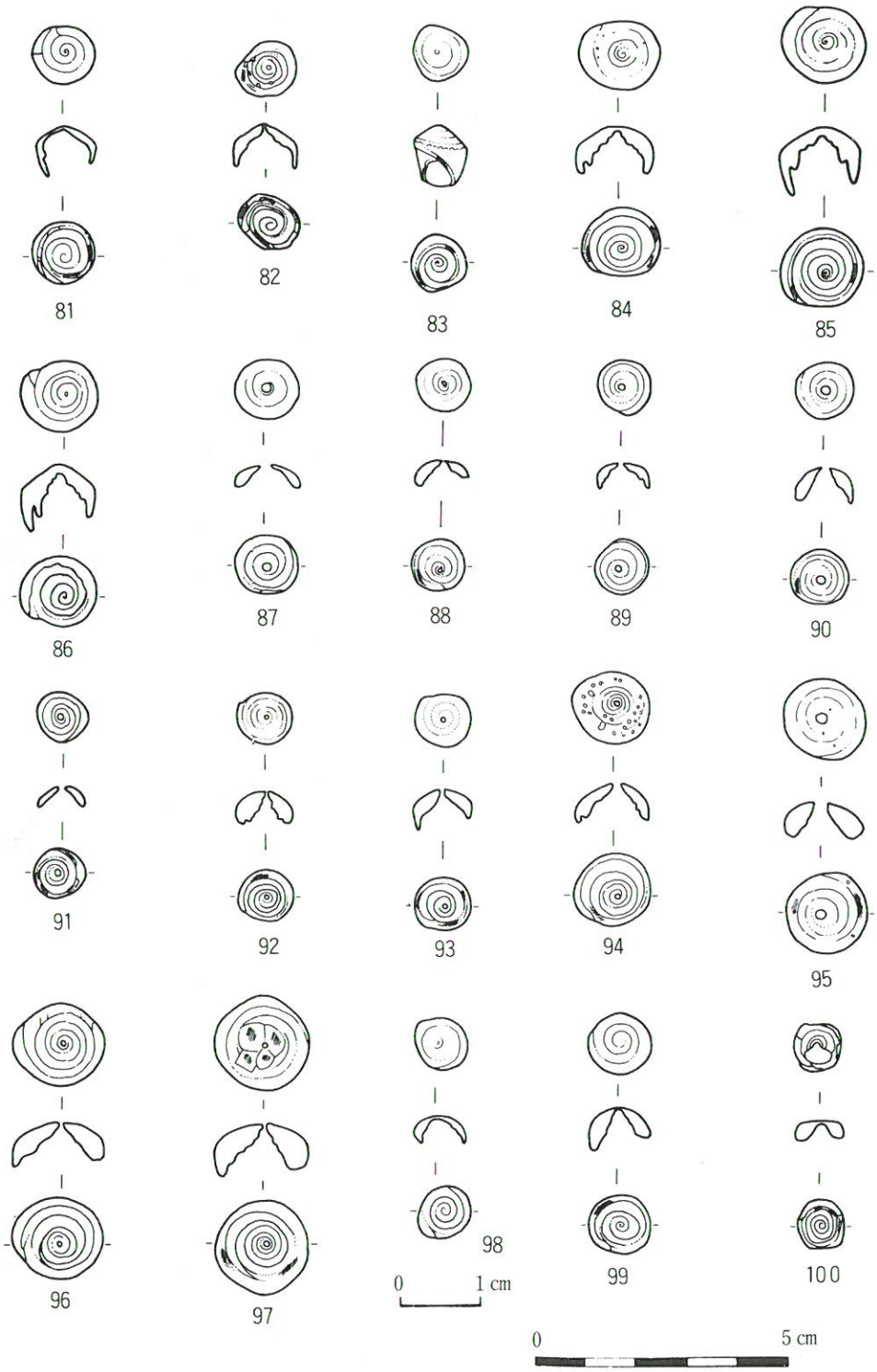


第50図（PL．44）　イモガイ科製装飾品　63～80

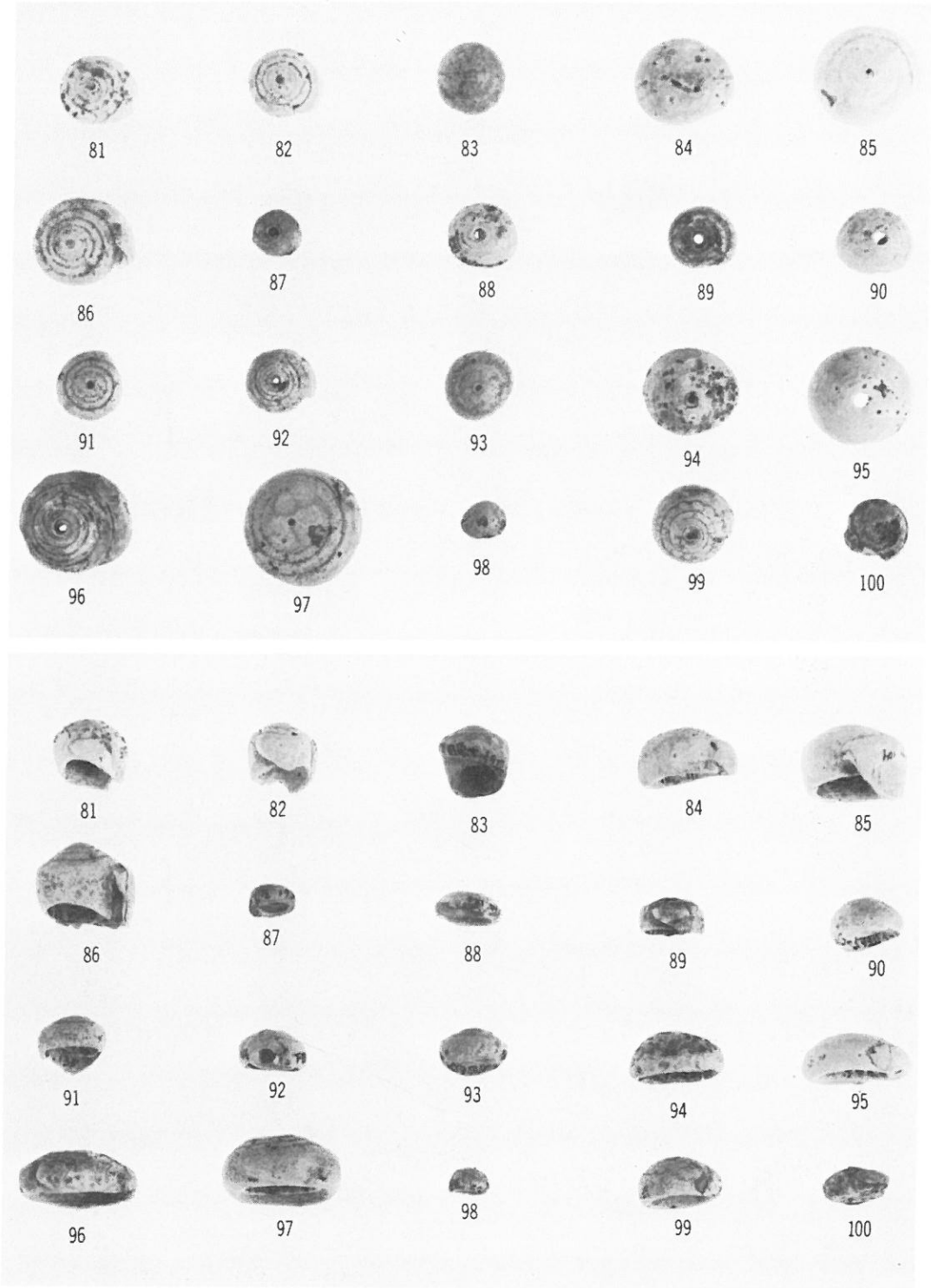




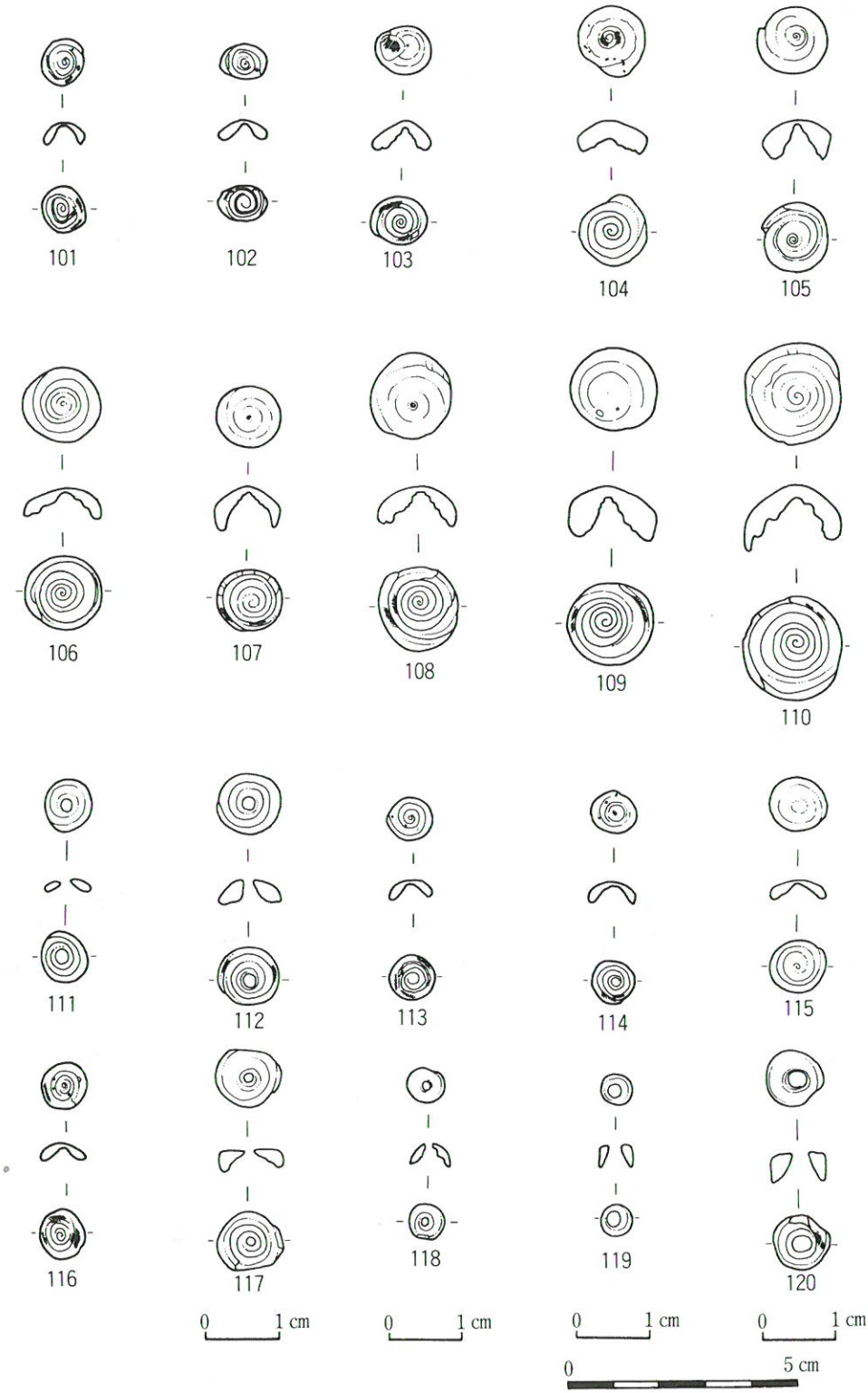
PL. 44　イモガイ科製装飾品（63～80）　（上は殻頂部・下は側面）



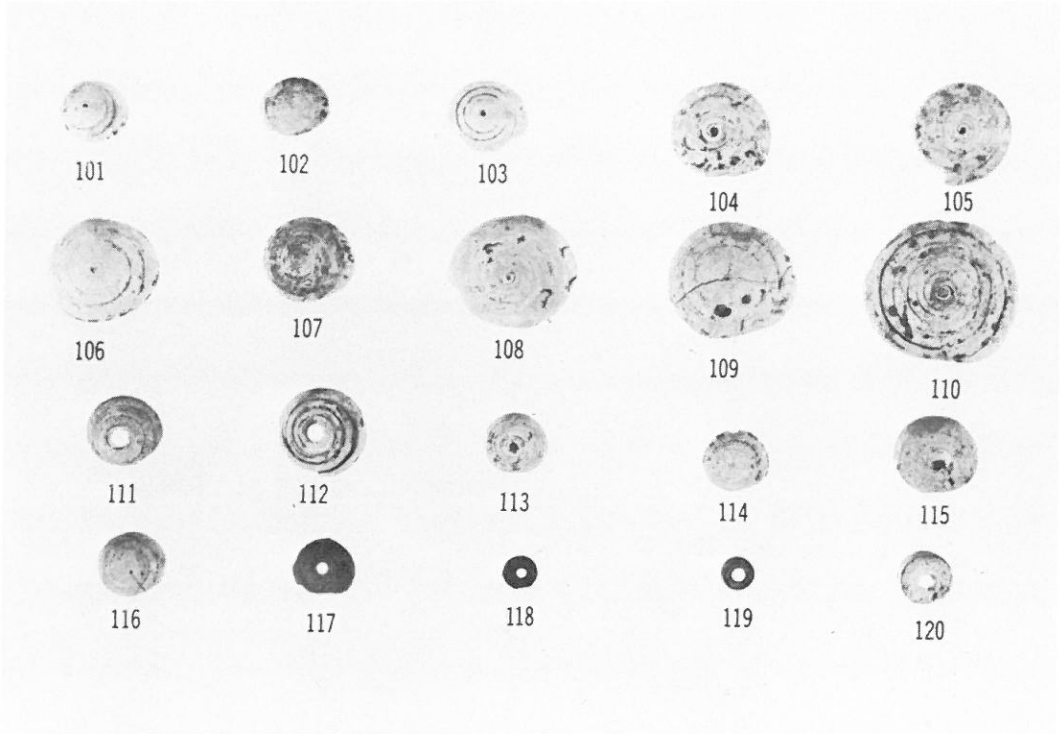
第51図（PL．45）　イモガイ科製装飾品81～86、巻貝科製装飾品87～100

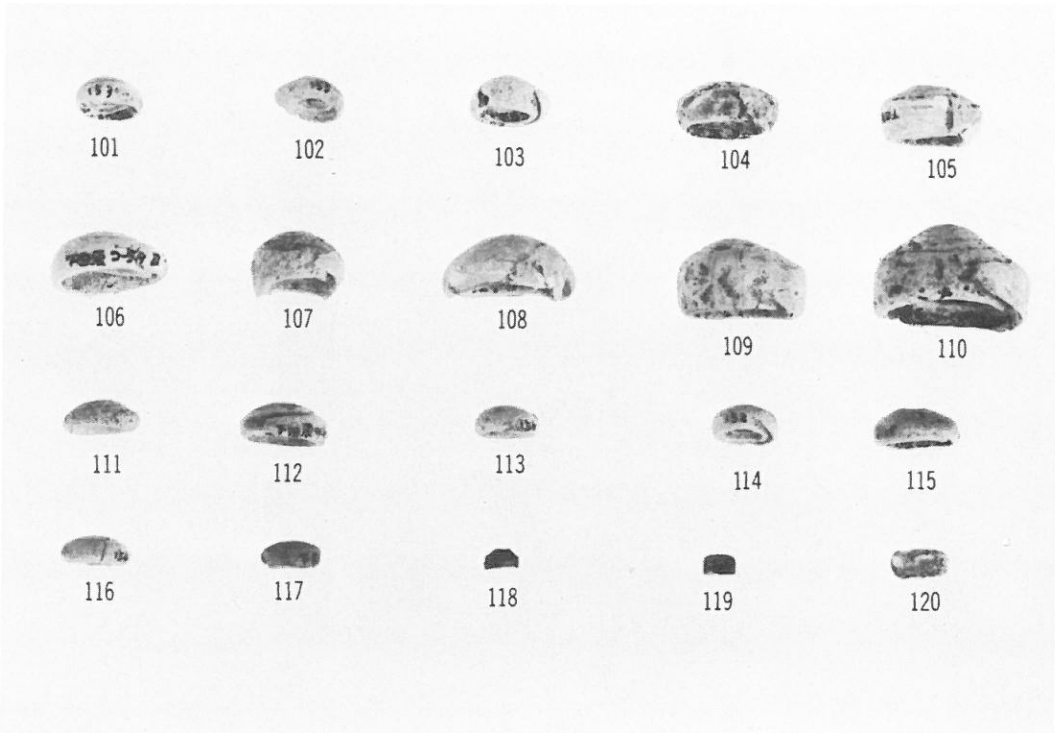


PL. 45　イモザイ科製装飾品（81～86）、巻貝科製装飾品（87～100）
（上は殻頂部・下は側面）

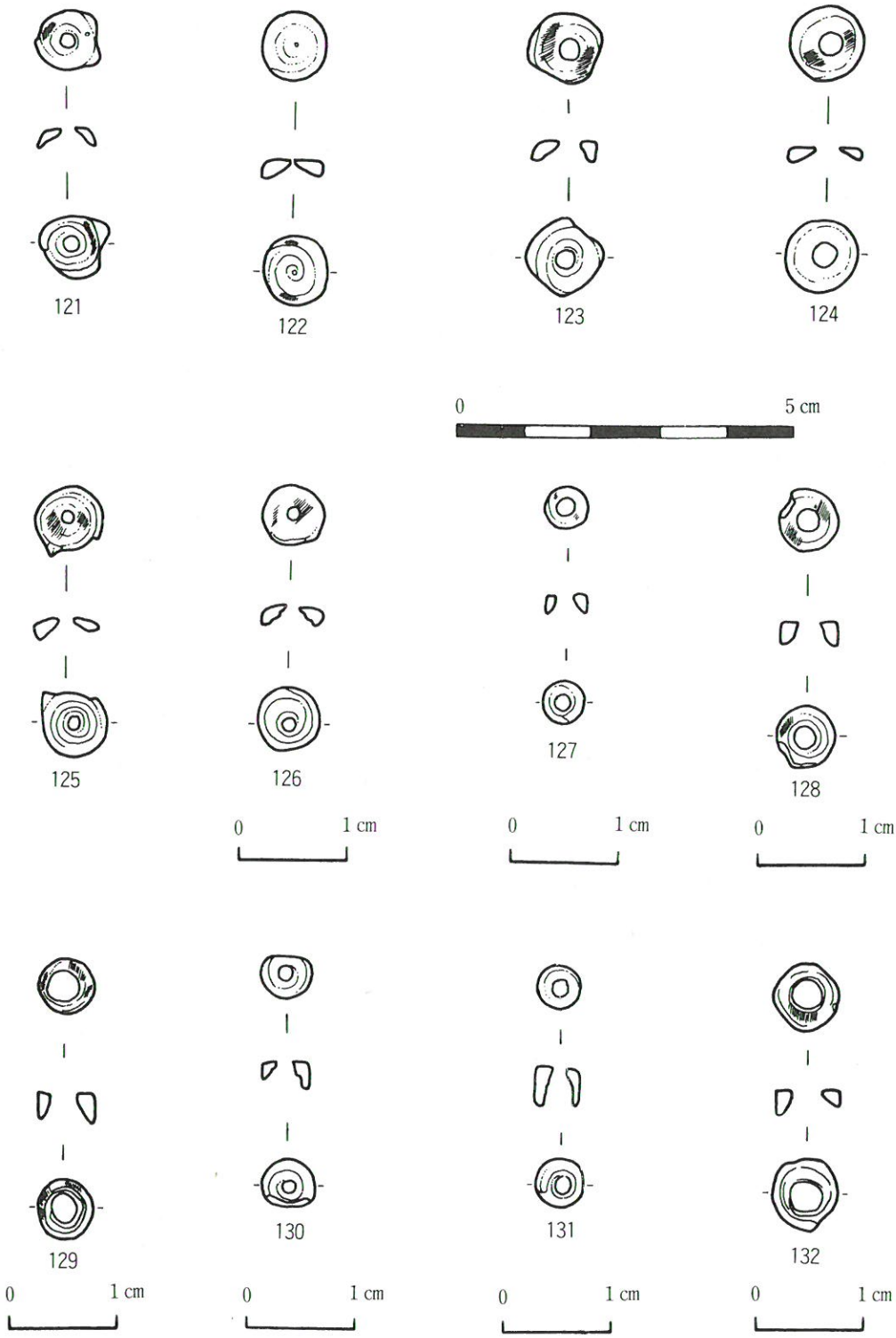


第52図（PL．46）　巻貝科製装飾品101～120

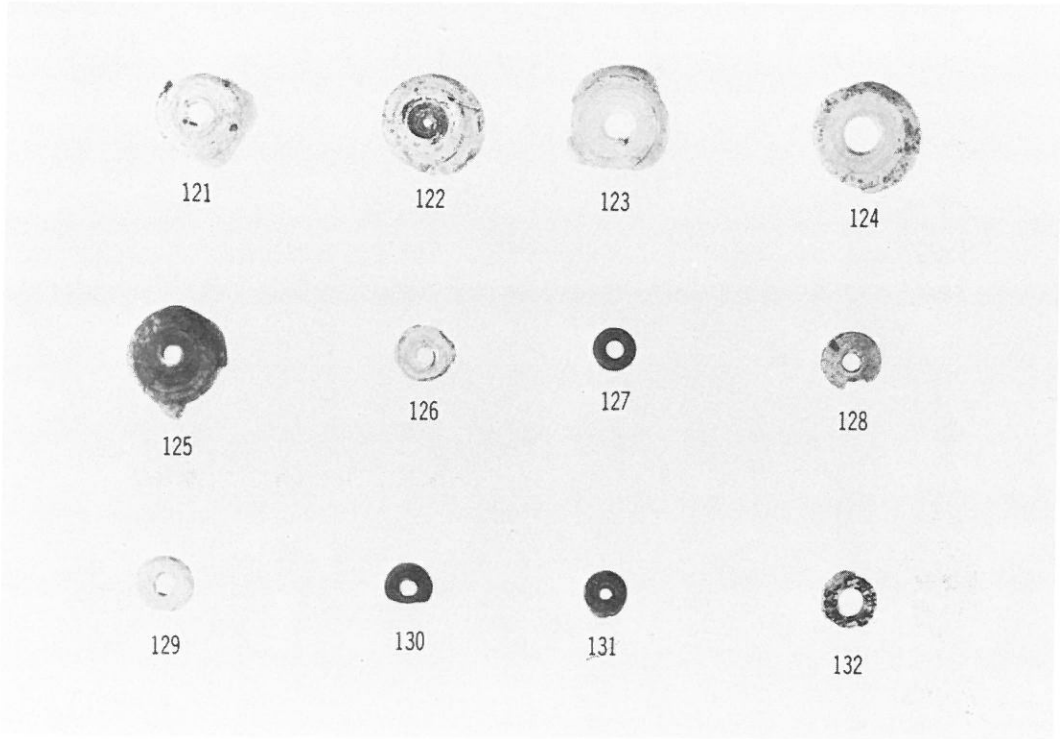


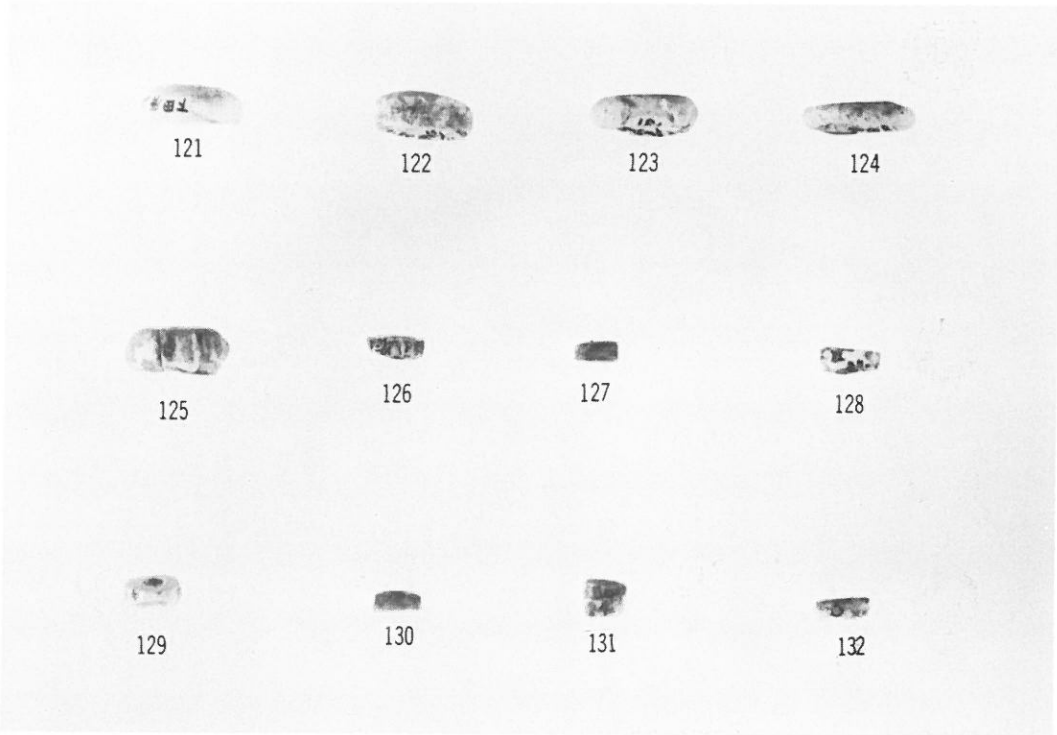


PL. 46　巻貝科製装飾品（101～120）（上は殻頂部・下は側面）

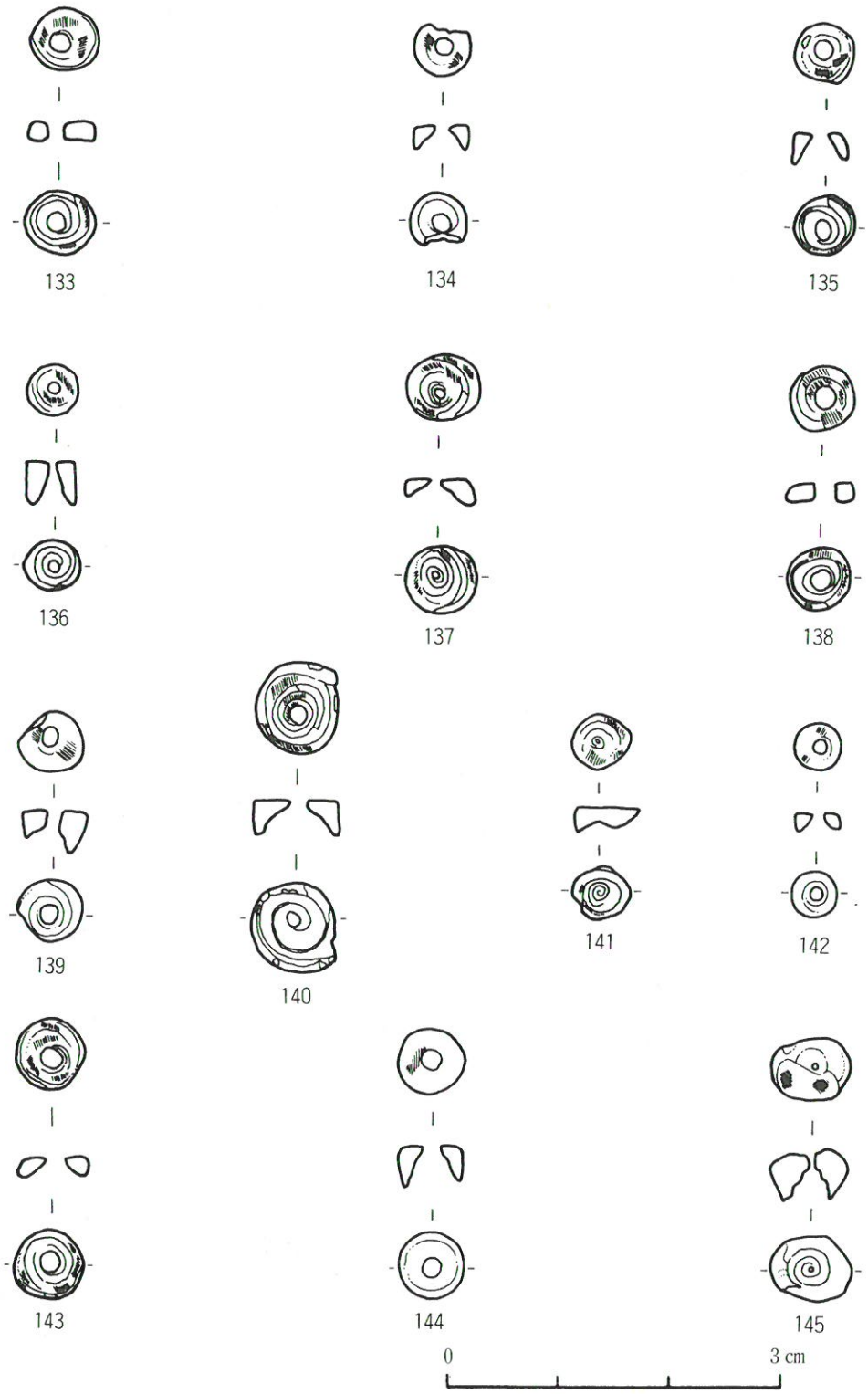


第53図（PL．47）　巻貝科製装飾品 121～132

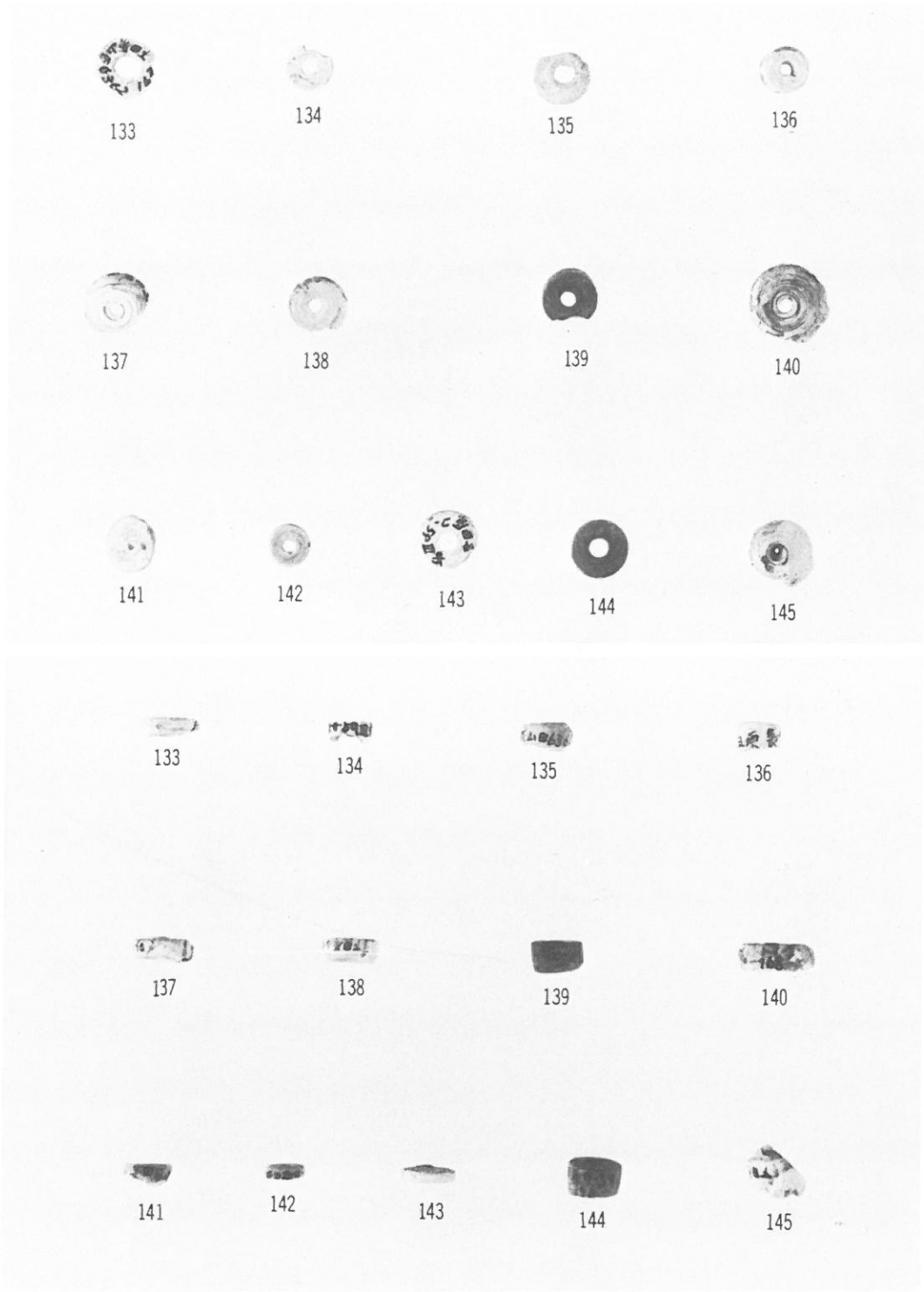




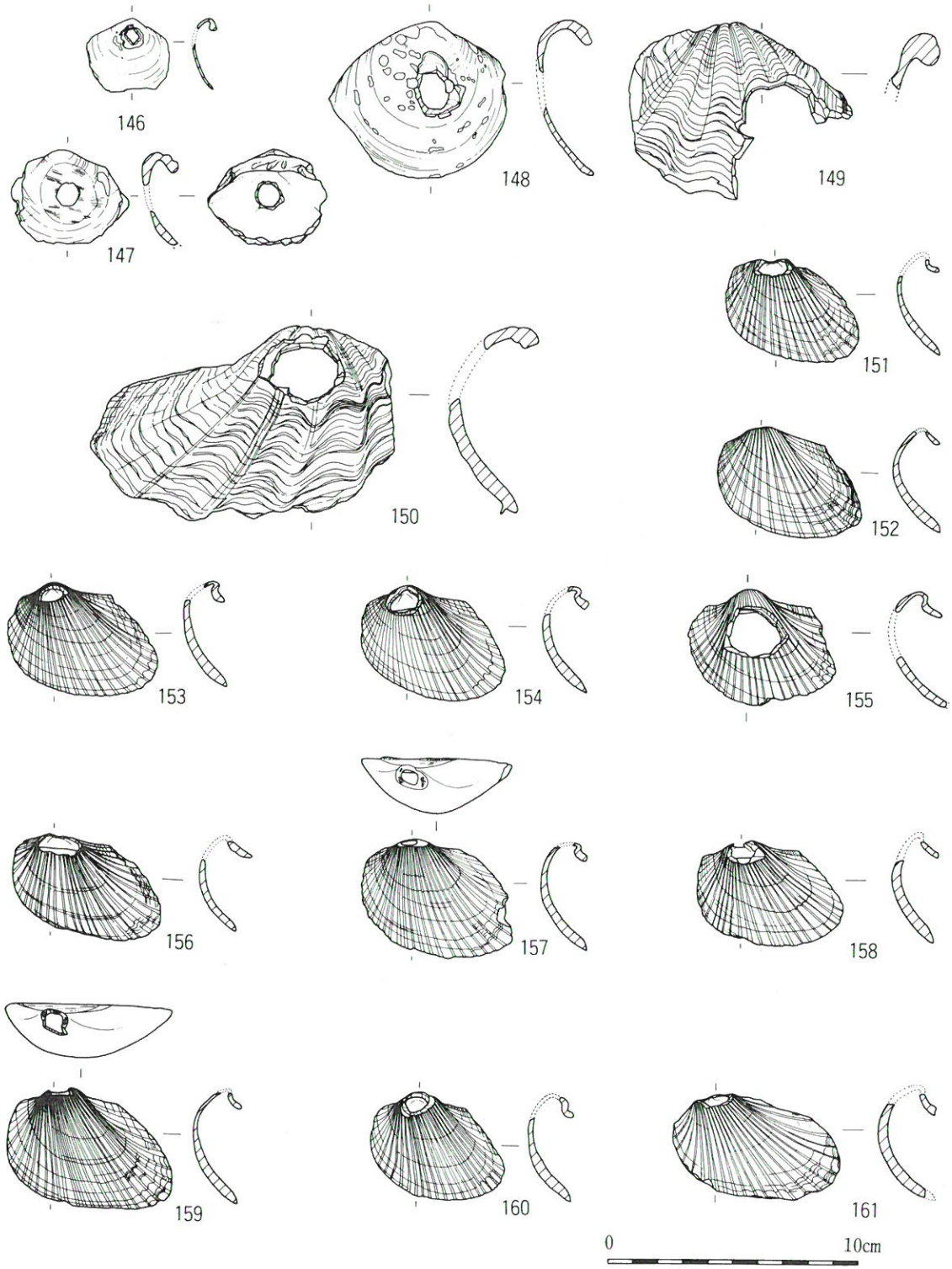
PL. 47　巻貝科製装飾品（121～132）（上は殻頂部・下は側面）



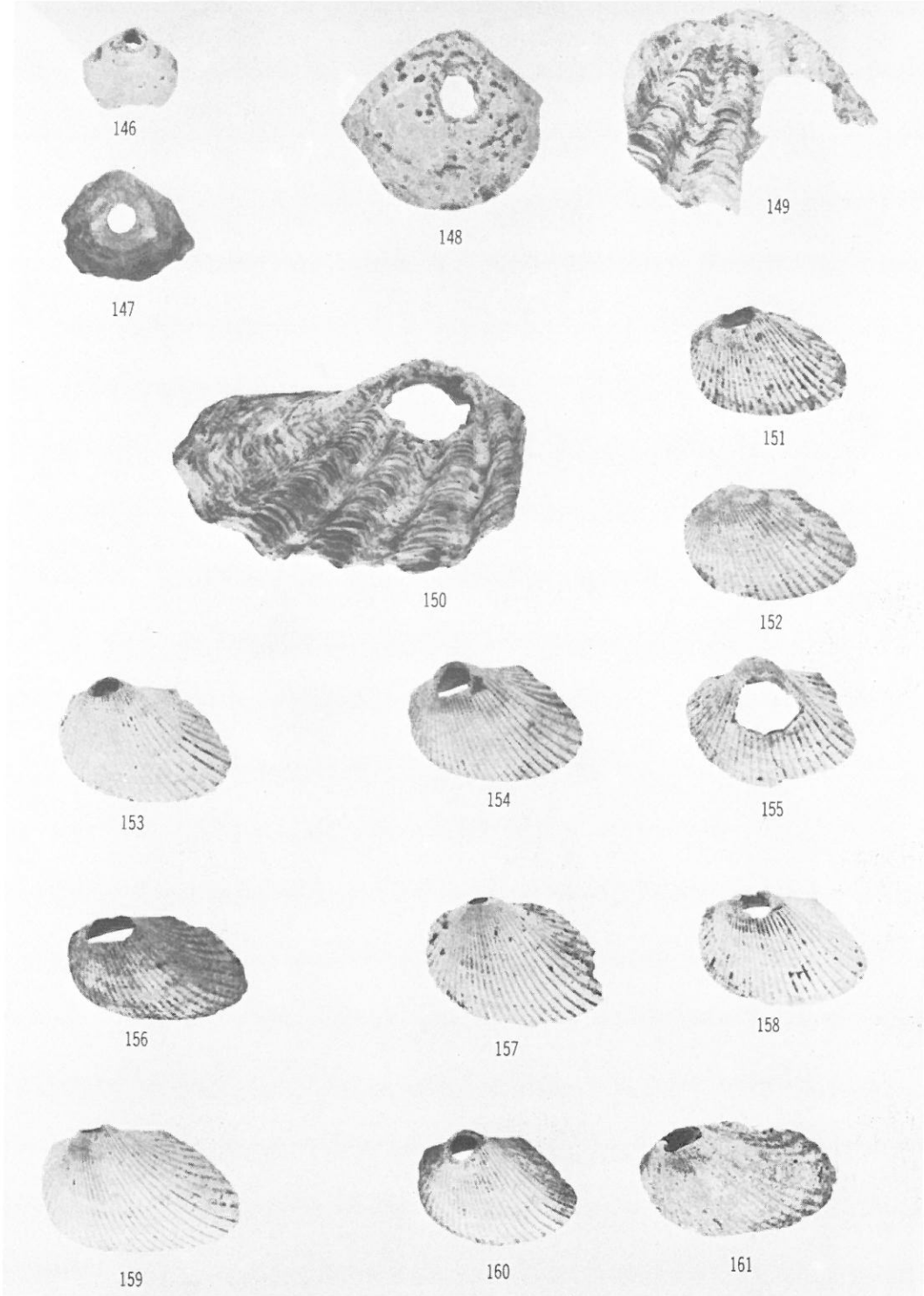
第54図（PL．48）　巻貝科製装飾品 133～145



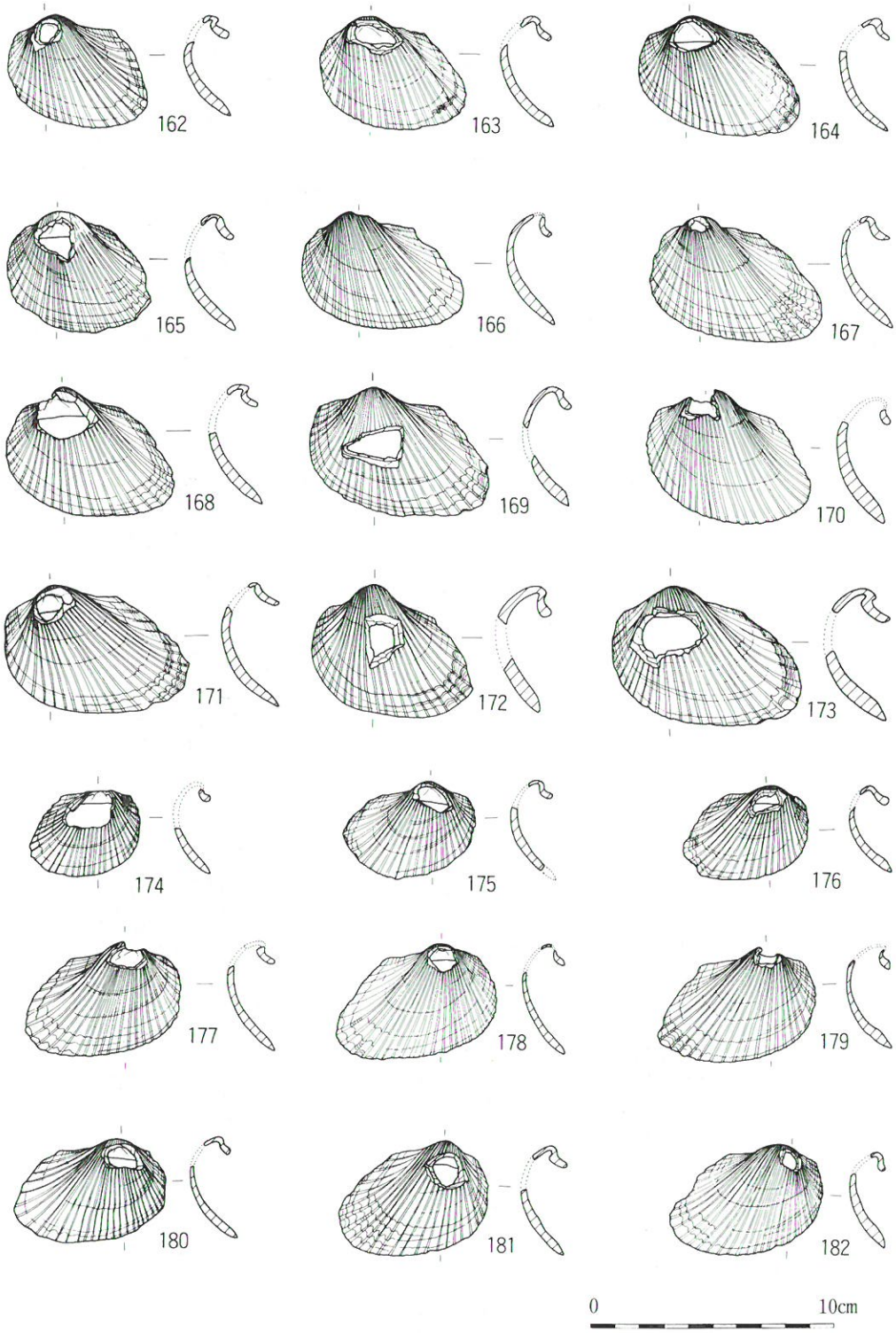
PL. 48　巻貝科製装飾品（133～145）（上は殻頂部・下は側面）



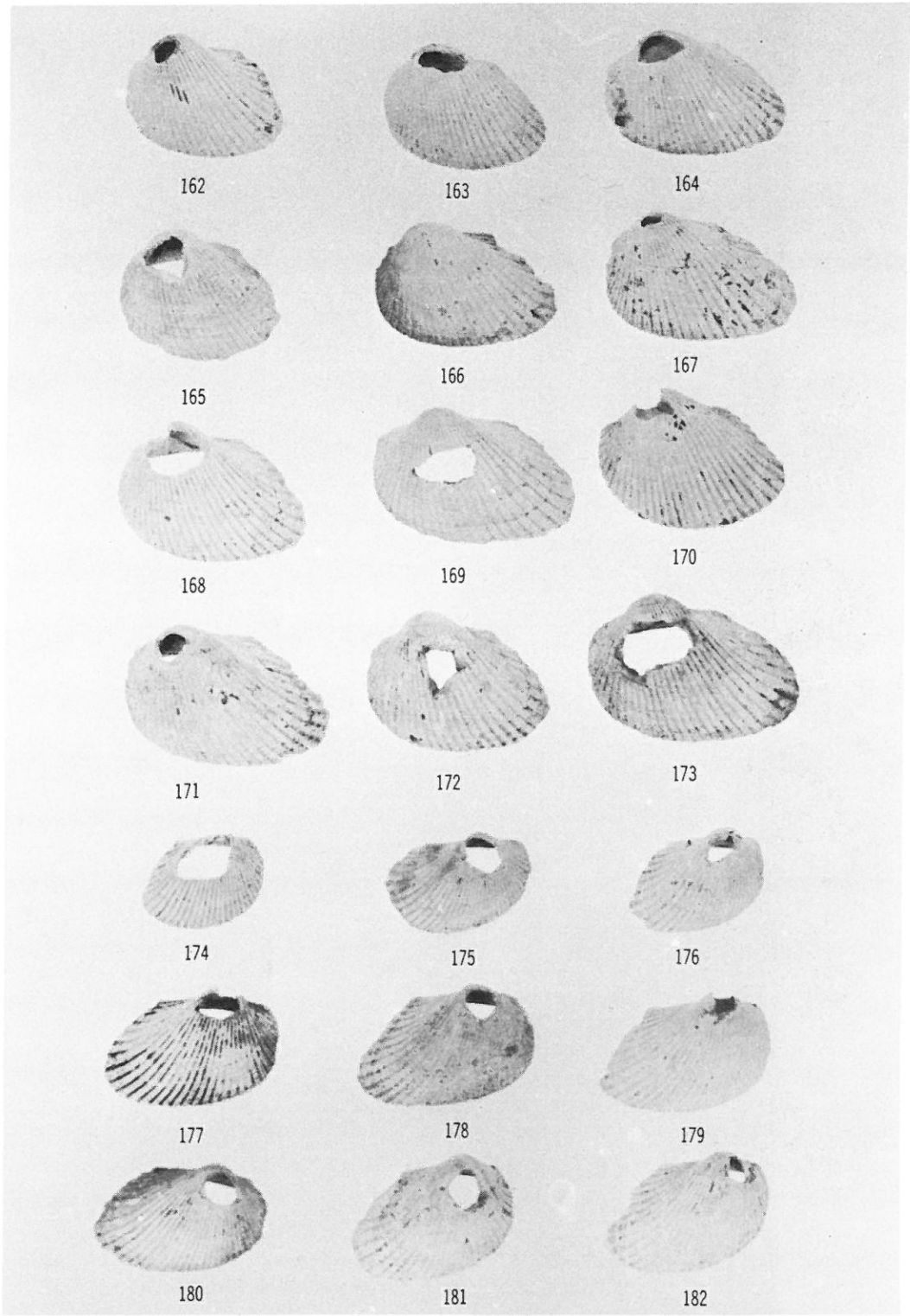
第55図（PL．49）　二枚貝有孔製品（シレナシジミ製146～148、ヒメジャコ製149・150、リュウキュウサルボウ製151～161）



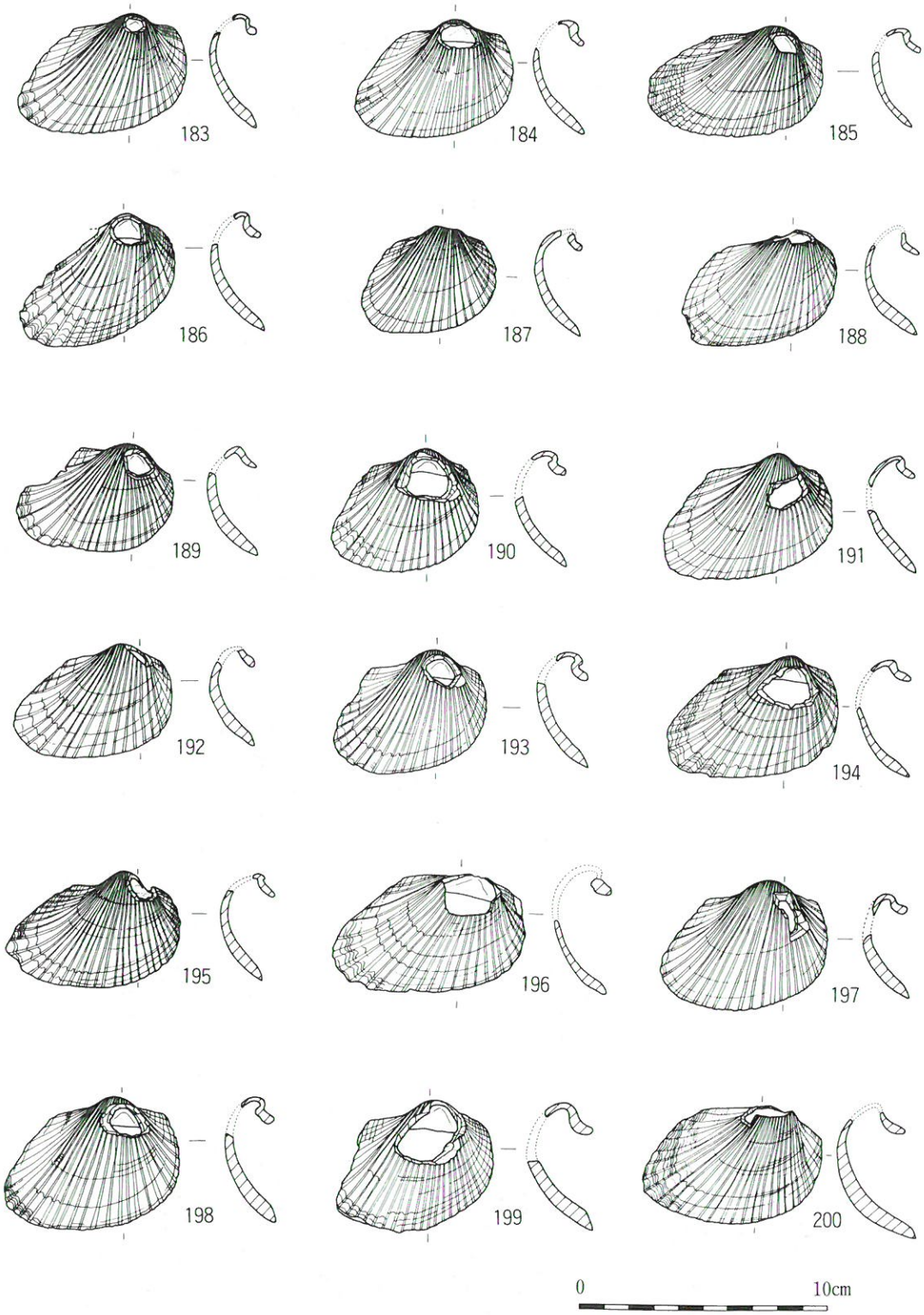
PL. 49　二枚貝有孔製品（シレナシジミ製146～148、ヒメジャコ製149・150、リュウキュウサルボウ製151～161）



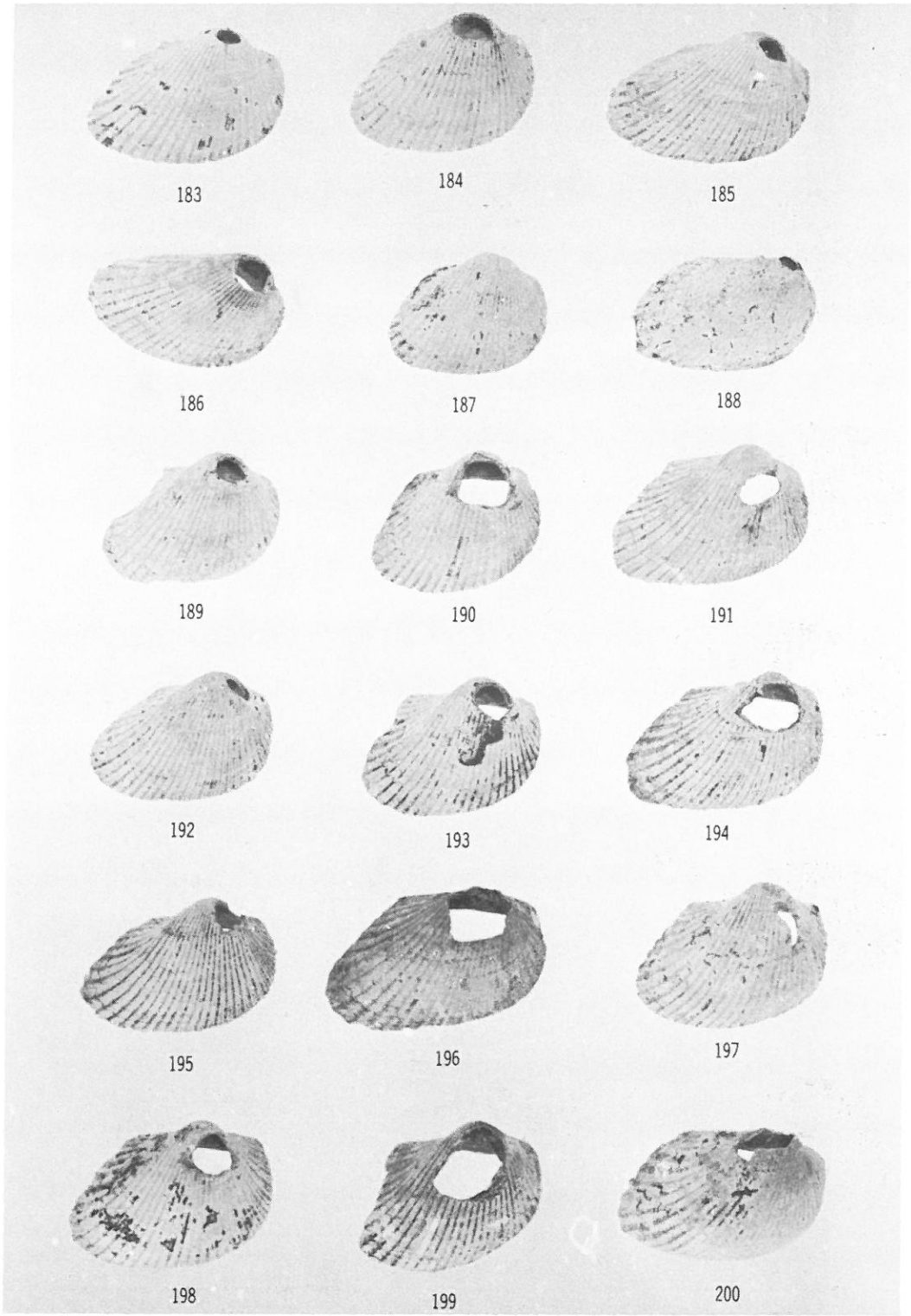
第56図（PL．50）　二枚貝有孔製品（リュウキュウサルボウ製 162～182）



PL. 50　二枚貝有孔製品（リュウキュウサルボウ製162～182）



第57図（PL．51）　二枚貝有孔製品（リュウキュウサルボウ製 183～200）



PL. 51　二枚貝有孔製品（リュウキュウサルボウ製183～200）

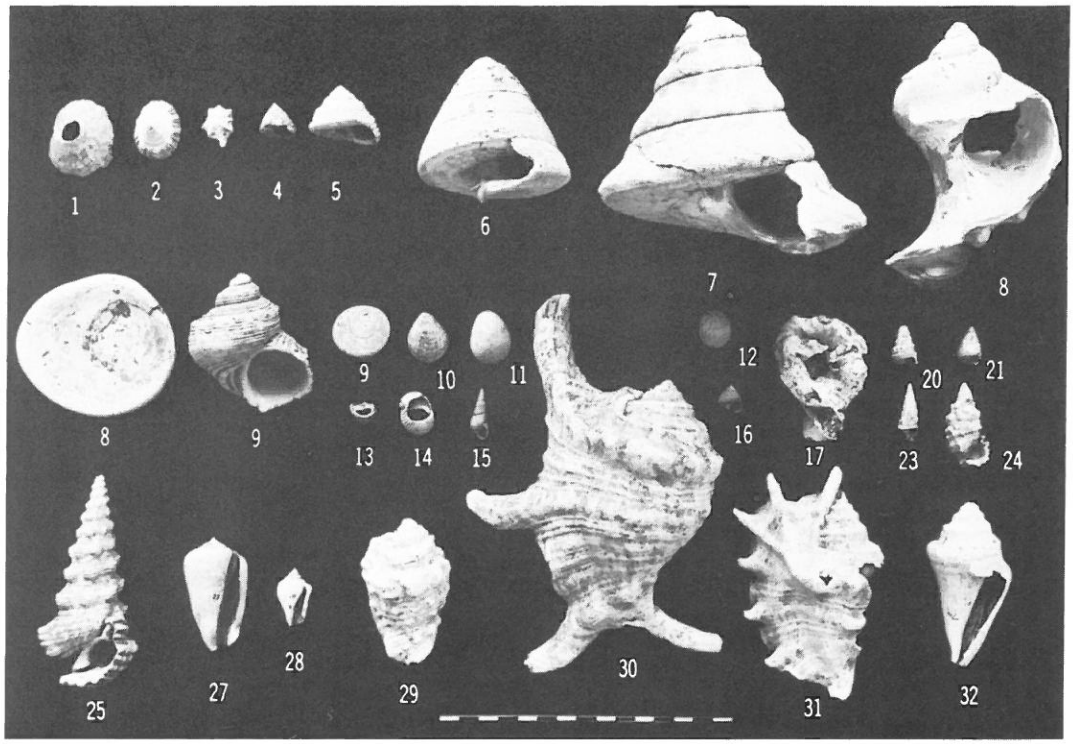
PL. 52

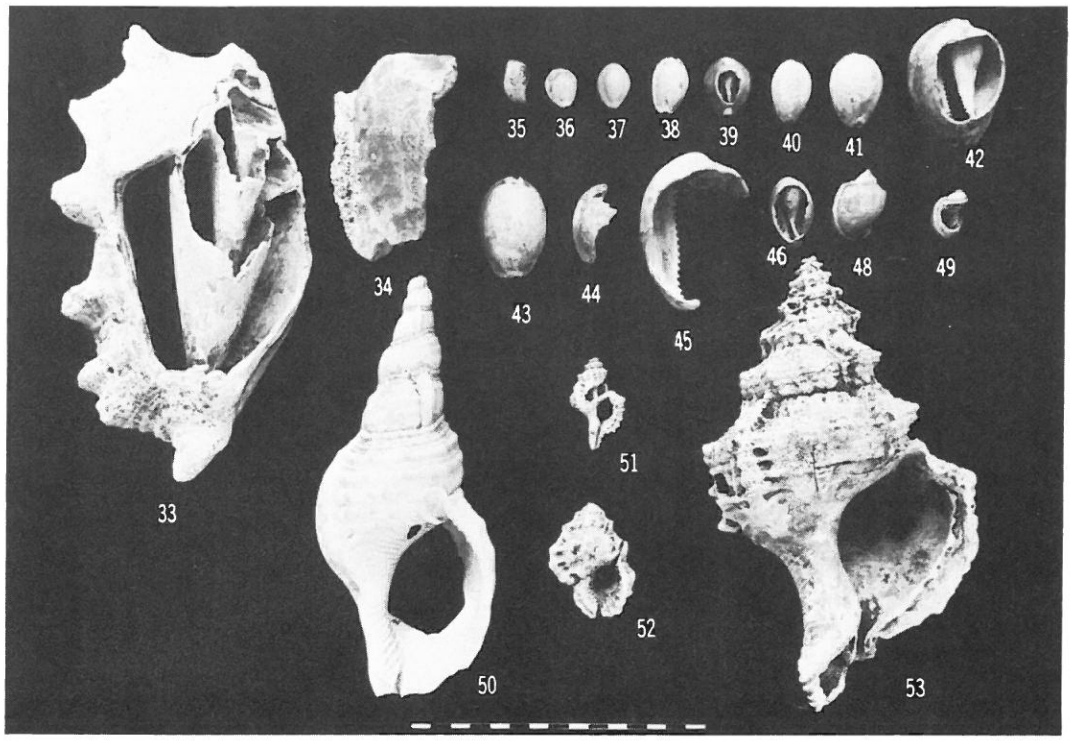
上：

1	オオベッコウガサガイ	2	クルマガサガイ	3	リュキュウウノアシガイ
4	ニシキウズガイ	5	ムラサキウズガイ	6	ギンタカハマガイ
7	サラサバティ	8	ヤコウガイ	8′	ヤコウガイのふた
9	チョウセンサザエ	9′	チョウセンサザエのふた	10	アマオブネガイ
11	ニシキアマオブネ	12	マキミゾアマオブネ	13	キバアマガイ
14	アマガイモドキ	15	ヌノメカワニナ	16	コンペイトウガイ
17	オオヘビガイ	20	ゴマフトウガタカニモリガイ	21	タケノコカニモリガイ
23	カニモリガイ	24	メオニノツノガイ	25	オニノツノガイ
27	マガキガイ	28	ムカシタモトガイ	29	イボソデガイ
30	スイジガイ	31	クモガイ	32	クモガイ（幼）

下：

33	ラクダガイ	34	ゴホウラ	35	トミガイ
36	キイロダカラガイ	37	ハナビラダカラガイ	38	コモンダカラガイ
39	ハナマルユキガイ	40	ホシキヌタガイ	41	クチムラサキダカラガイ
42	ハチジョウタカラガイ	43	ヤクシマダカラガイ	44	ヒメヤクシマダカラガイ
45	ホシダカラガイ	46	ヒメホシダカラガイ	48	タイコガイ
49	アメガイ	50	ホラガイ	51	ミツカドボラ
52	オキニシ	53	シロナルトボラ		


1
2
3
4
5
6
7
8
8
9
9
10
11
12
13
14
15
16
17
20
21
23
24
25
27
28
29
30
31
32


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
48
49
50
51
52
53

PL. 52　貝　類

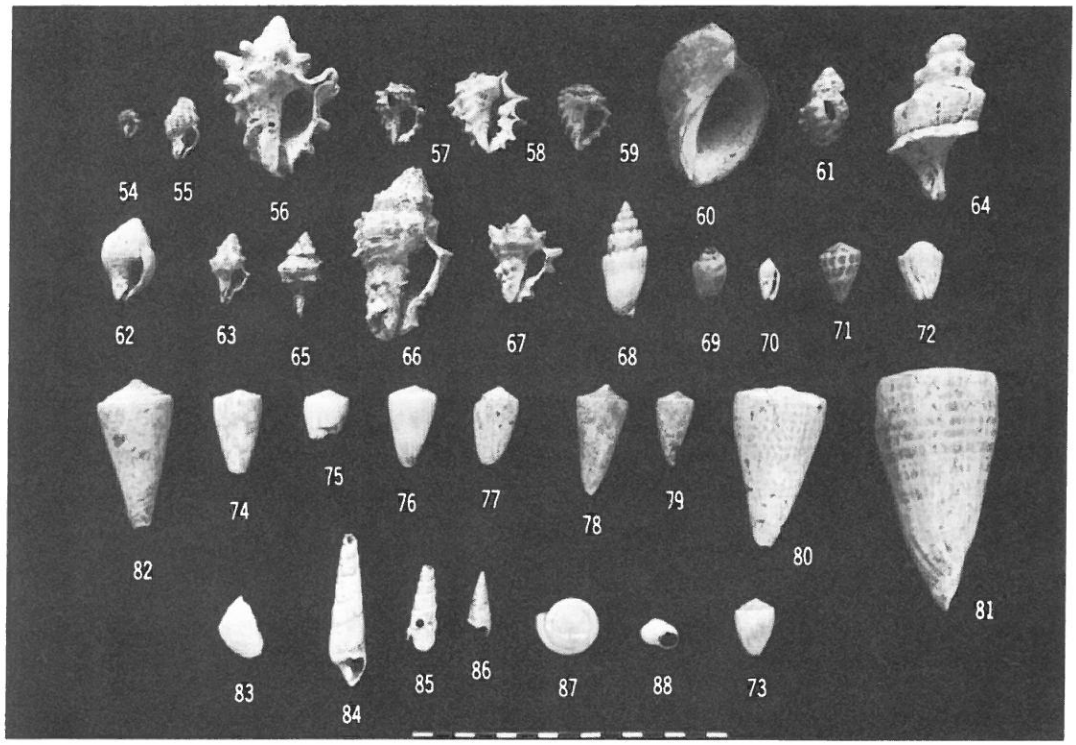
PL. 53

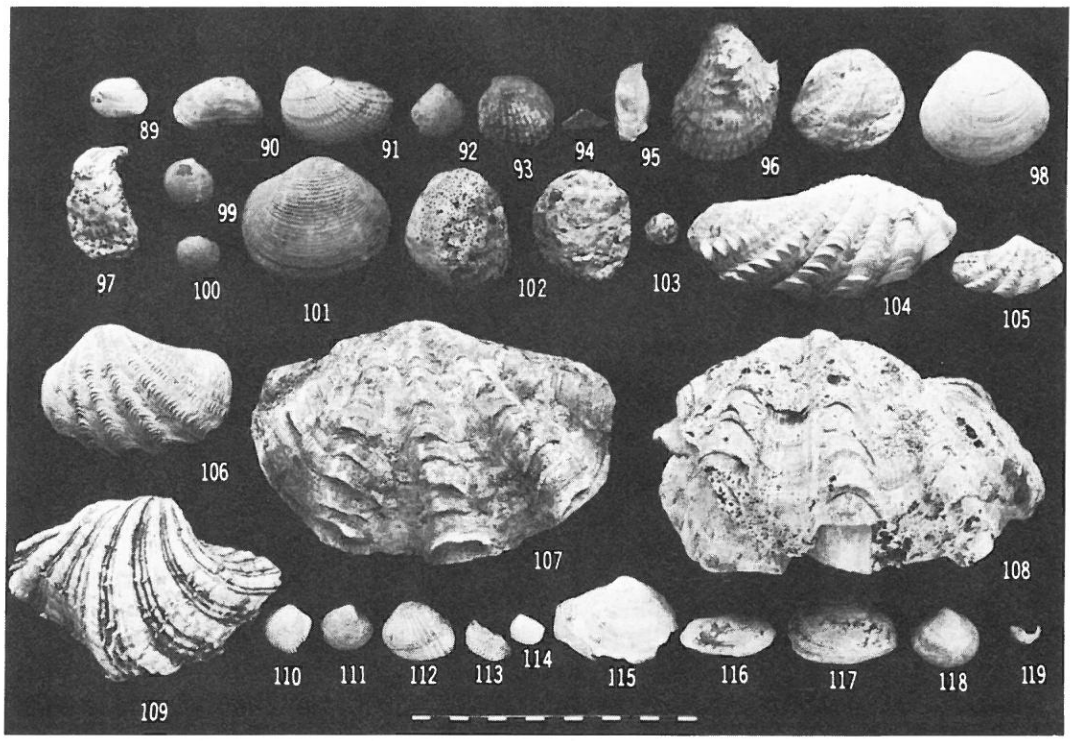
上：

54 レイシガイダマシ　55 ヒメヨウラクガイ　56 シラクモガイ
57 ウニレイシガイ　58 ムラサキイガレイシガイ　59 アカイガレイシガイ
60 ホソスジテツボラ　61 コイボテツレイシ　62 マルニシ
63 リュウキュウツノマタ　64 イトマキボラ　65 ベニマキ
66 オニコブシガイ　67 コオニコブシガイ　68 ニシキノキバフデガイ
69 フトコロヤタテガイ　70 サツマビナガイ　71 マダライモガイ
72 コマダライモガイ　73 サヤガタイモガイ　74 クロミナシガイ
75 イボシマイモガイ　76 キヌカツギイモガイ　77 ゴマフイモガイ
78 アカシマミナシガイ　79 ヒラマキイモガイ　80 アンボンクロザメガイ
81 クロフモドキガイ　82 イボカバイモガイ　83 タガヤサンミナシガイ
84 ウシノツノガイ　85 キバタケガイ　86 リュウキュウタケガイ
87 クロイワオオケマイマイ　88 オキナワウスカワマイマイ

下：

89 ベニエガイ　99 カリガネエガイ　91 リュキュウサルボウガイ
92 ソメワケグリ　93 ウチワガイ　94 リュキュウヒバリガイ
75 シロアオリガイ　96 メンガイ（左・右）　97 オハグロガキ
98 シレナシジミ　99 ウラキツキガイ　100 サザナミセワケツキガイ
101 カゴガイ　102 カネツケザルガイ(左・右)　103 キクザルガイ
104 シラナミガイ　105 シラナミガイ(幼)　105 ヒメジャコ
107 ヒレジャコ　108 オオジャコ　109 シャゴウ
110 カワラガイ　111 マルオミナエシガイ　112 アラスジケマンガイ
113 ヌノメガイ　114 イソハマグリ　115 リュキュウアリソガイ
116 マスオガイ　117 リュキュウマスオガイ　118 サメザラガイ
119 クサズリヒザラガイ科


54
55
56
57
58
59
60
61
64
62
63
65
66
67
68
69
70
71
72
82
74
75
76
77
78
79
80
81
83
84
85
86
87
88
73


89
90
91
92
93
94
95
96
98
97
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119

PL. 53　貝　類

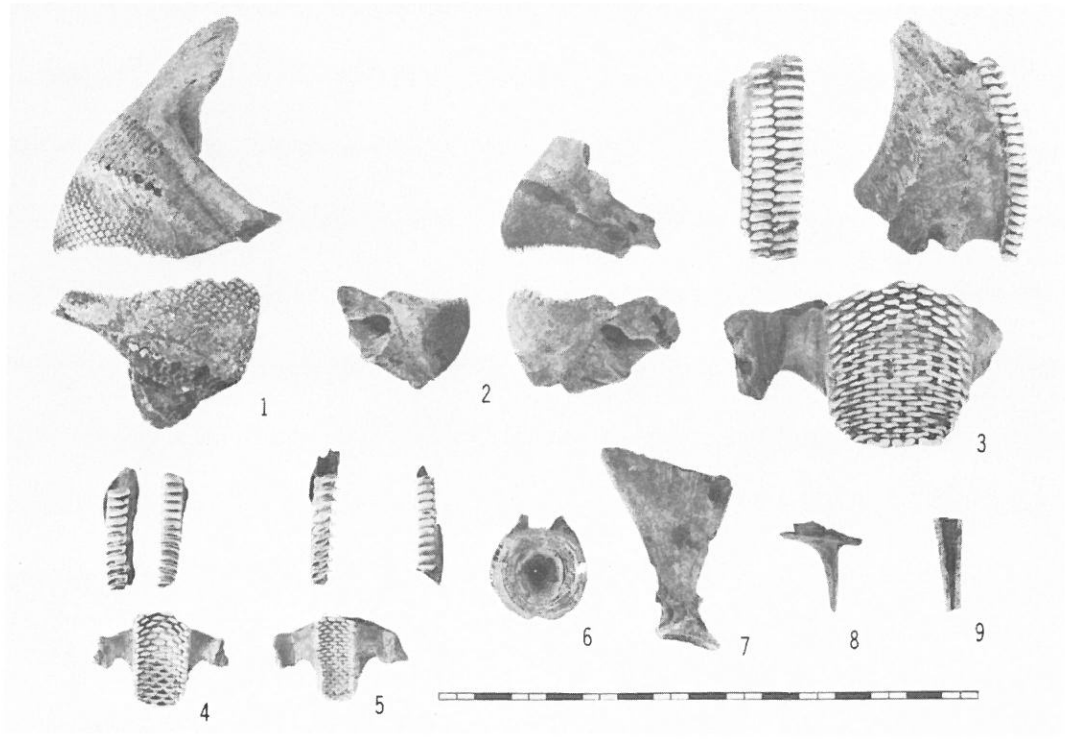
PL. 54

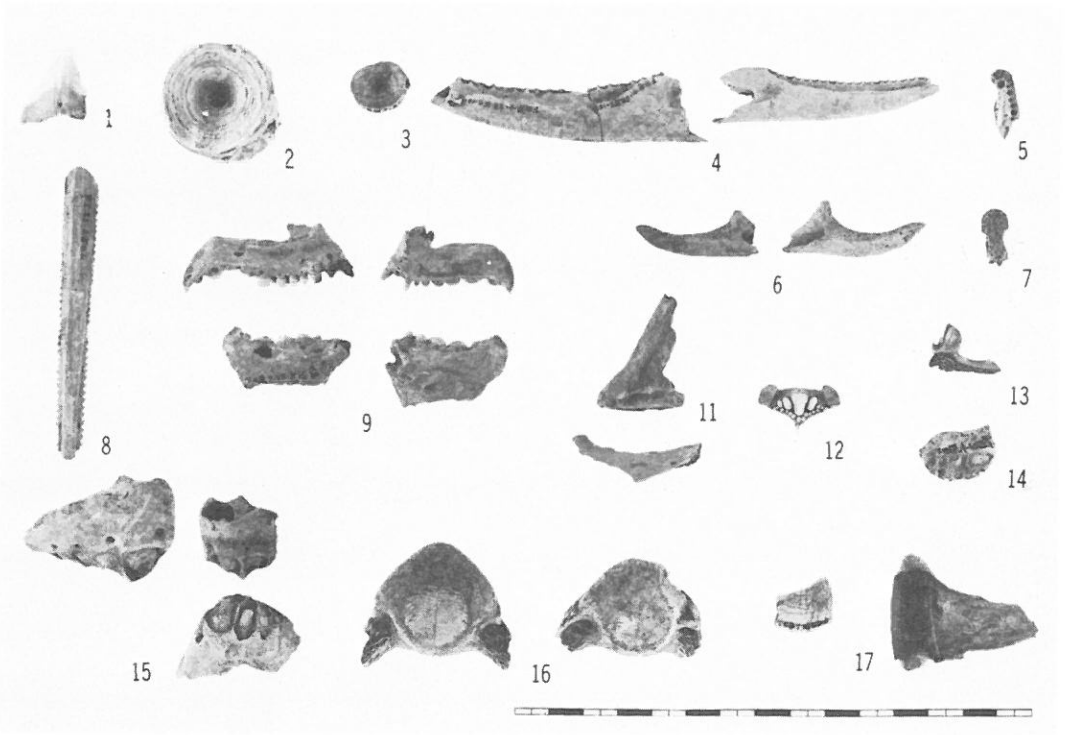
上：魚　類

1	イロブダイ	2	ブダイ科	3	イロブダイ咽頭骨
4	ナガブダイ咽頭骨	5	ナンヨウブダイ咽頭骨	6	サカナ脊椎
7	サカナ尾椎	8	ハリセンボン棘	9	不明

下：魚　類

1	アオザメ科	2	サメ脊椎	3	エイ脊椎
4	ウツボ科(A)	5	ウツボ鋤骨(A)	6	ウツボ科(B)
7	ウツボ鋤骨(B)	8	エイ尾棘	9	ヨコシマクロダイ
11	フエフキダイ科	12	ベラ科咽頭骨	13	ハタ科
14	タイ科	15	モンガラカワハギ科	16	ハリセンボン科
17	フグ科				





PL. 54　魚　類

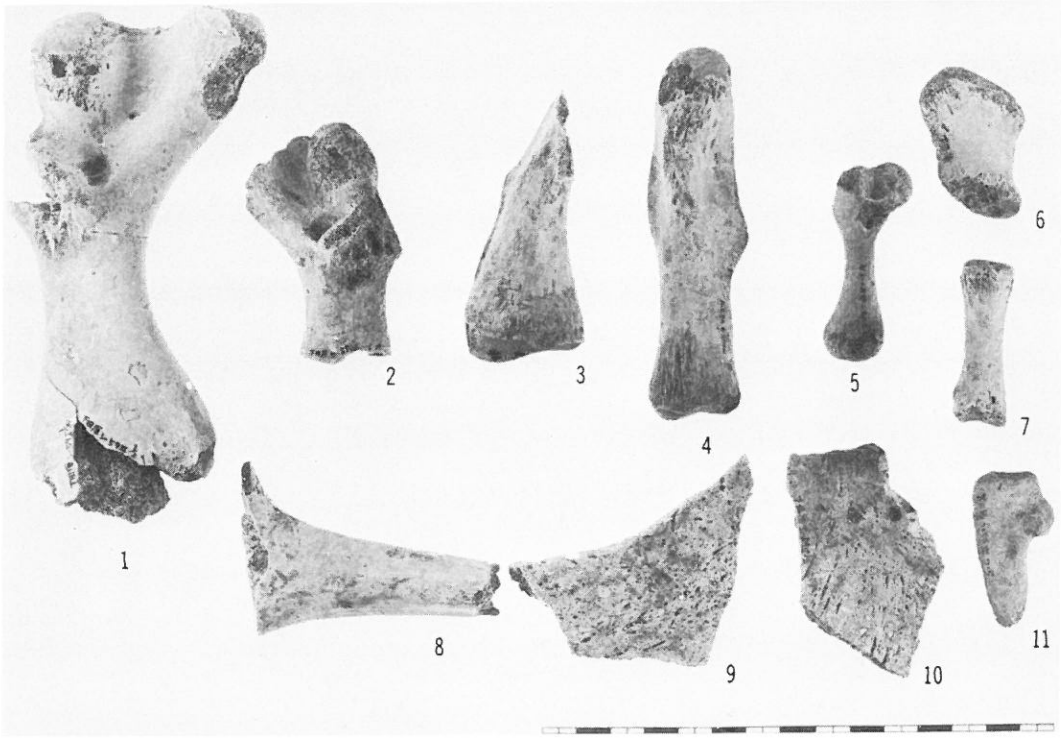
PL．55

上：ウミガメ

1　左上腕骨	2　右上腕骨	3、4　脛骨
5　右大腿骨	6　手足根骨	7　指骨
8　烏口骨	9、10　背甲板	11　末節骨

下：トリ、コウモリ、カエル、ネズミ

1　アホウドリ左上腕骨	2　アホウドリ右上腕骨	3　アホウドリ左脛骨
4　アホウドリ左中手骨	5、6　コウモリ下顎骨（右、左）	
7　カラス左尺骨	8　カラス右尺骨	9　カエル
10　コウモリ右上腕骨	11　コウモリ左上腕骨	12　ネズミ上顎犬歯
13　ネズミ左上腕骨	14　ネズミ右上腕骨	15　ネズミ左寛骨
16　ネズミ右寛骨	17　ネズミ右大腿骨	18　ネズミ　左大腿骨
19　ネズミ左脛骨	20　ネズミ右脛骨	



PL. 55　ウミガメ・トリ・コウモリ・カエル・ネズミ

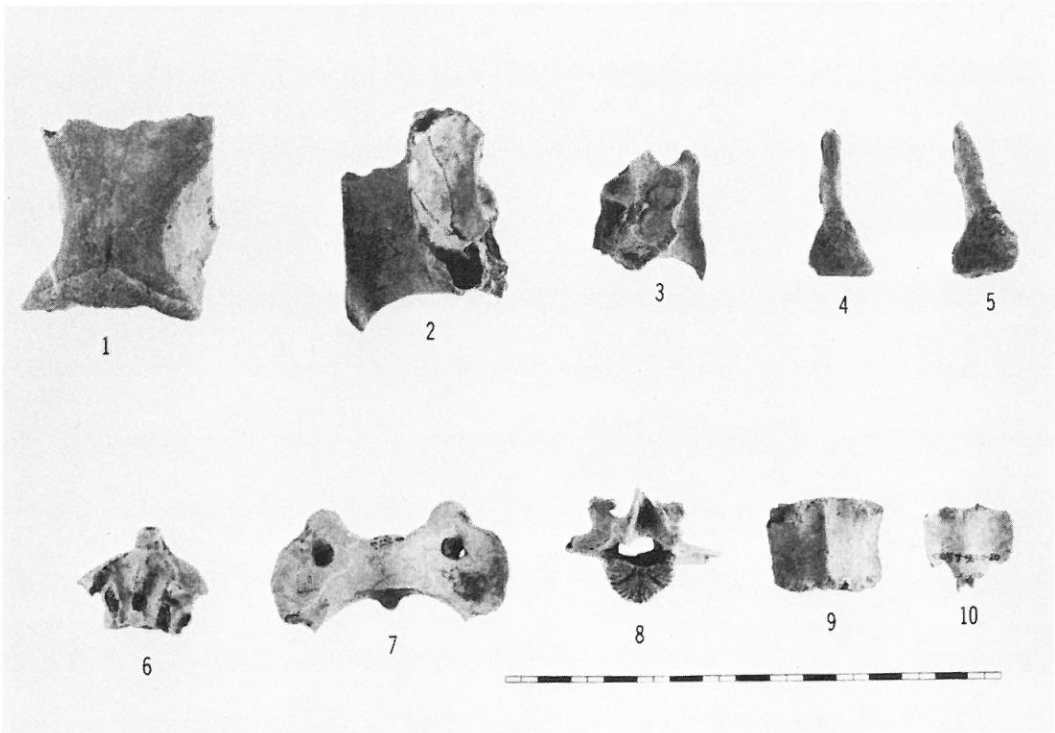
PL．56

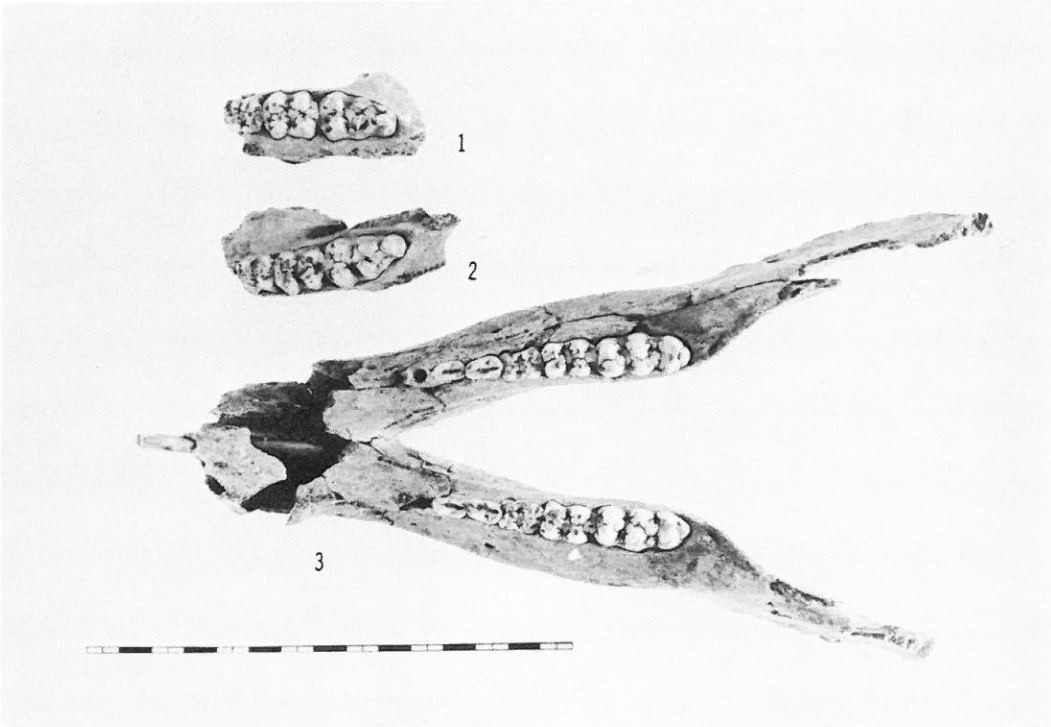
上：イノシシ

1　後頭骨	2　右側頭骨頬骨突起	3　左側頭骨頬骨突起
4　右関節突起	5　左関節突起	6　仙骨
7　環椎	8　椎体	9、10　尾椎

下：イノシシ

1　左上顎骨	2　右上顎骨	3　下顎骨





PL. 56　イノシシ

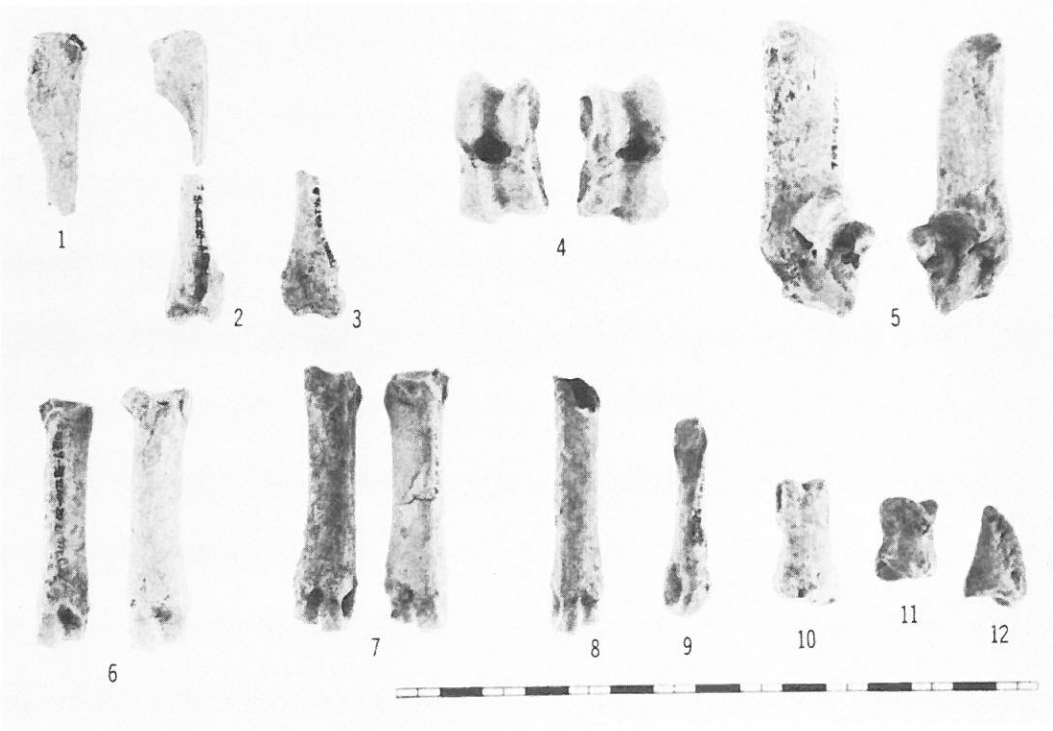
PL．57

上：イノシシ

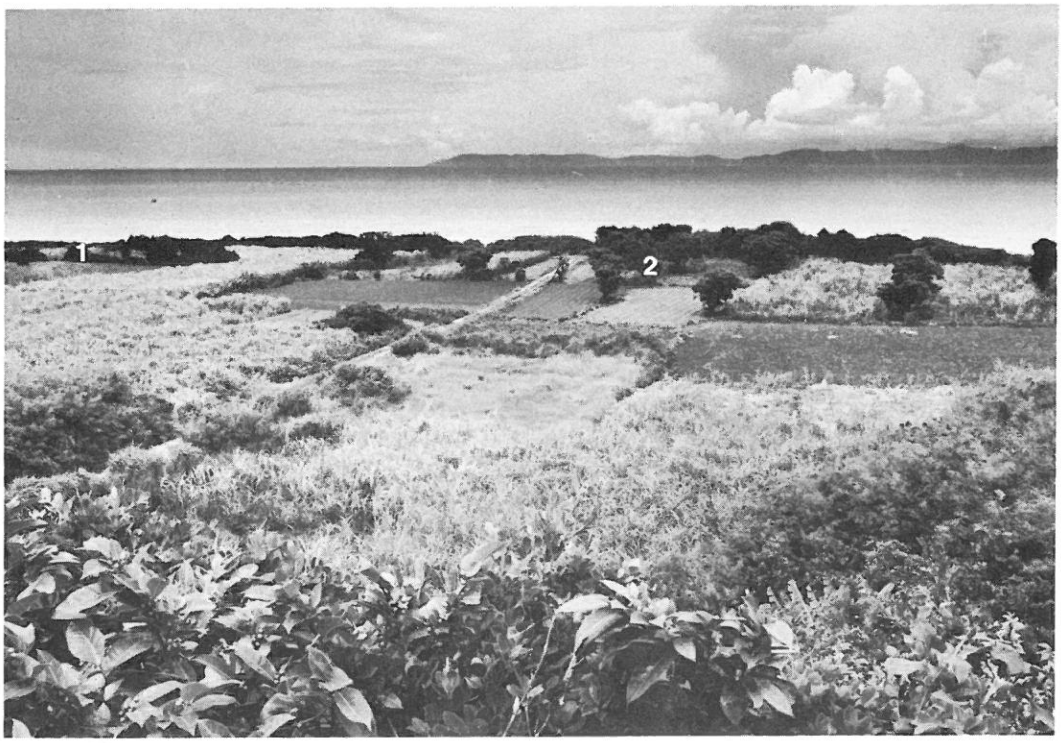
1　肩甲骨	2　上腕骨	3　尺　骨
4　寛　骨	5　橈　骨	6　大腿骨
7　大腿骨骨端	8　脛　骨	

下：イノシシ

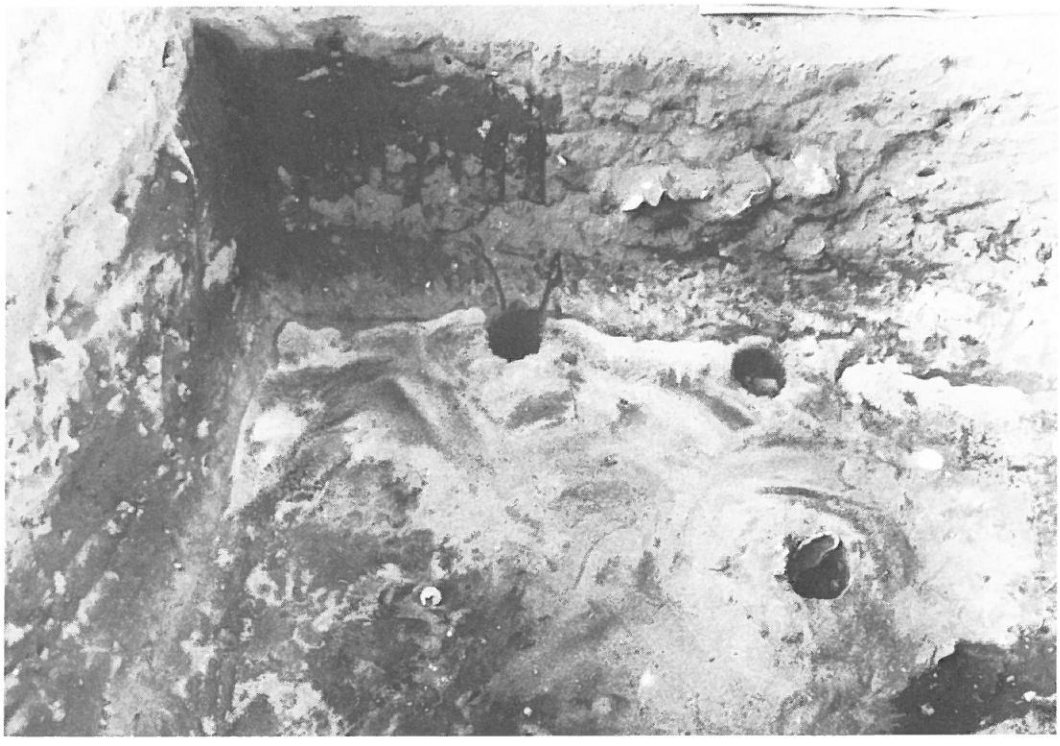
1　不　明	2、3　腓　骨	4　距　骨
5　踵　骨	6、7　中手骨	8、9　中足骨
10　基節骨	11　中節骨	12　末節骨



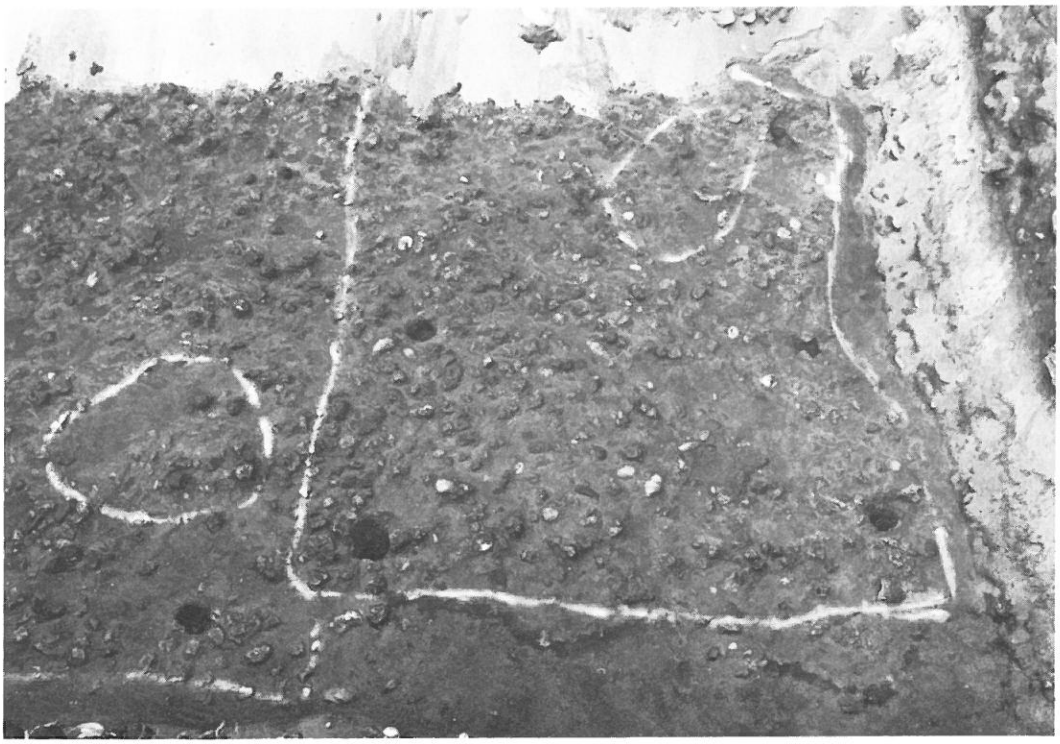
PL. 57　イノシシ



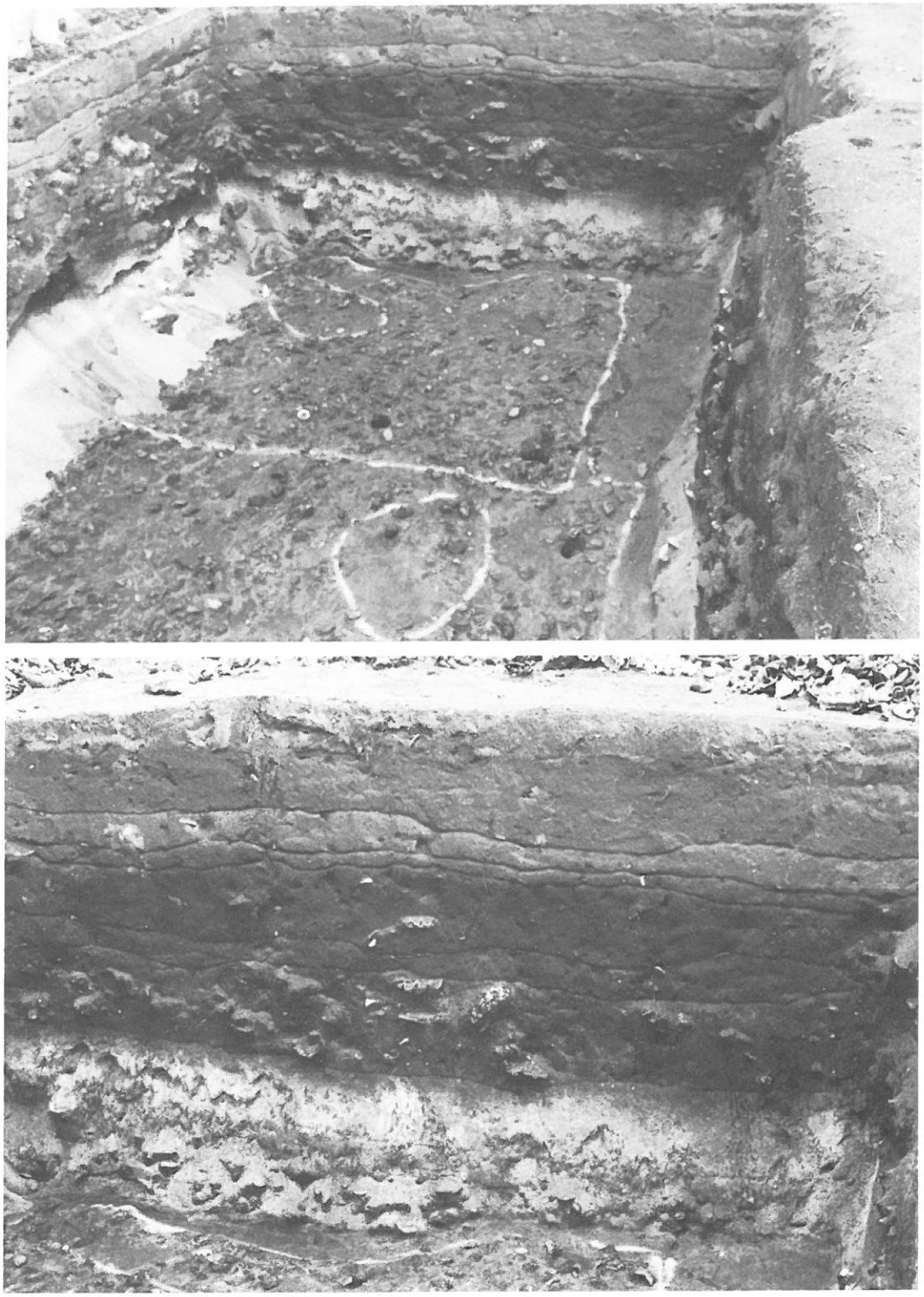
PL. 58　上：遺跡遠景（1は下田原貝塚、2は大泊浜貝塚）南から
下：遺跡近景（実測しているのは礫床住居跡）東から



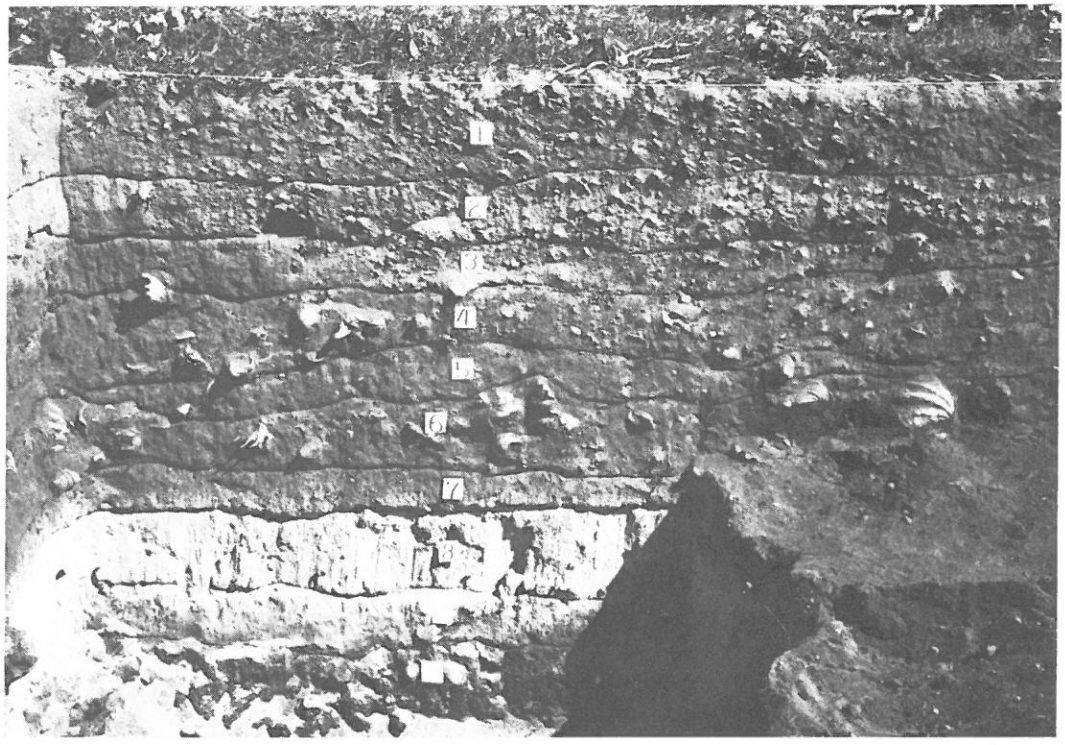
PL. 59　上：大泊浜貝塚の第６層の集石炉
下：大泊浜貝塚の第６層から第８層まで掘り込んだ柱穴　南から



PL. 60　上：大泊浜貝塚第10層で検出された礫床住居跡（第11図上）東から
下：大泊浜貝塚第10層で検出された礫床住居跡（第11図上）南から

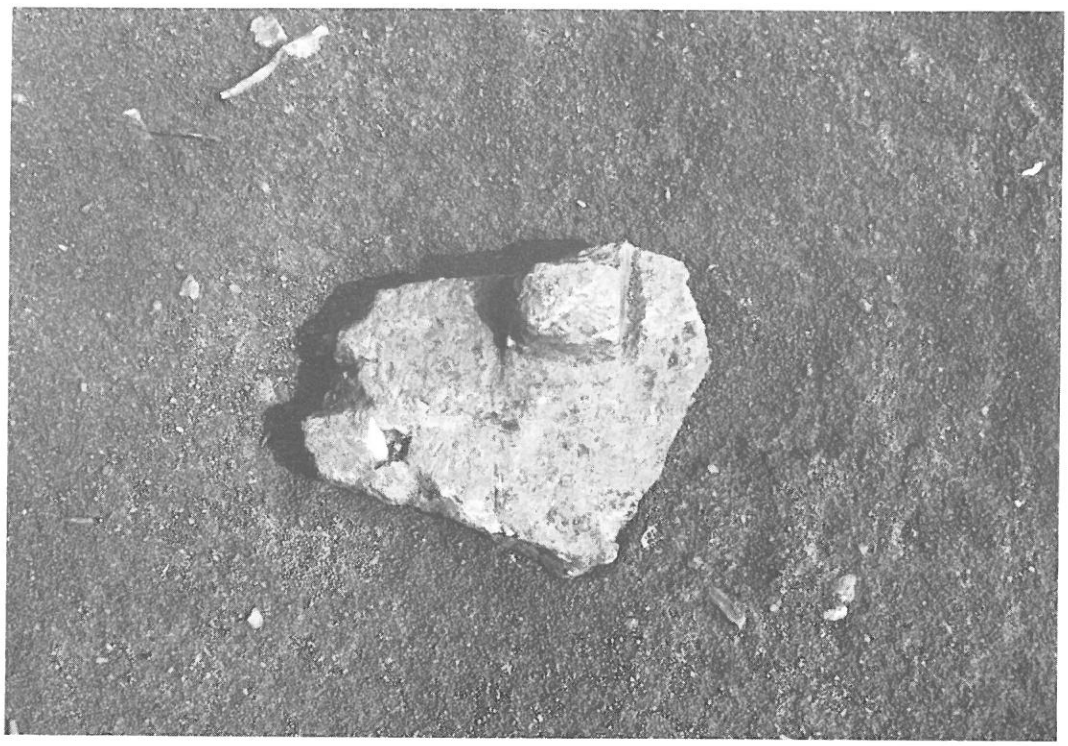


PL．61　上：大泊浜貝塚第10層で検出された礫床住居跡と層序　西から
下：大泊浜貝塚D－22グリッド東壁の層序（第10図上）西から

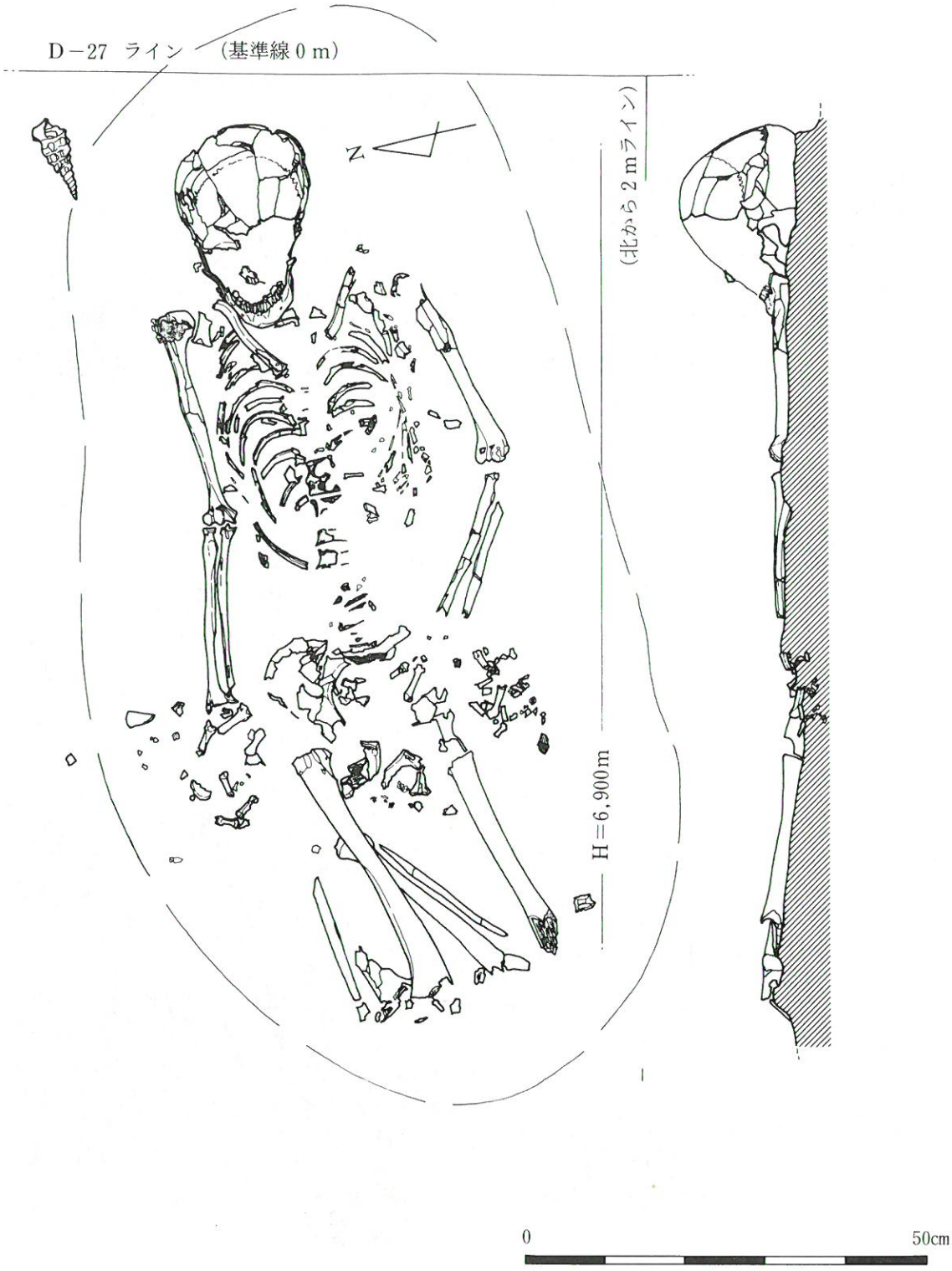


PL. 62　上：大泊浜貝塚D－23グリッド北壁の層序（第10図上）南から
下：大泊浜貝塚G－22グリッド北壁の層序（第10図下）南から

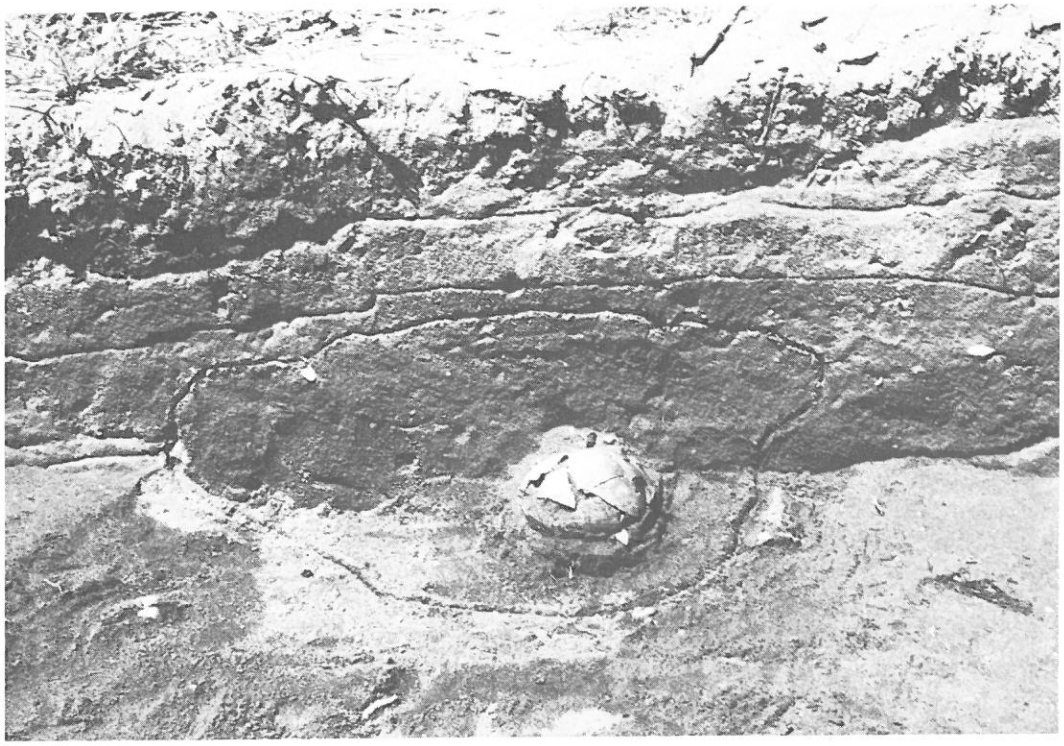
PL. 63　上：大泊浜貝塚G－35グリッド北壁の層序（第10図下右）南から
（注：第１層と第２層の間の線が引かれていないので実測図を参照）
下：大泊浜貝塚で検出された夥しい貝類



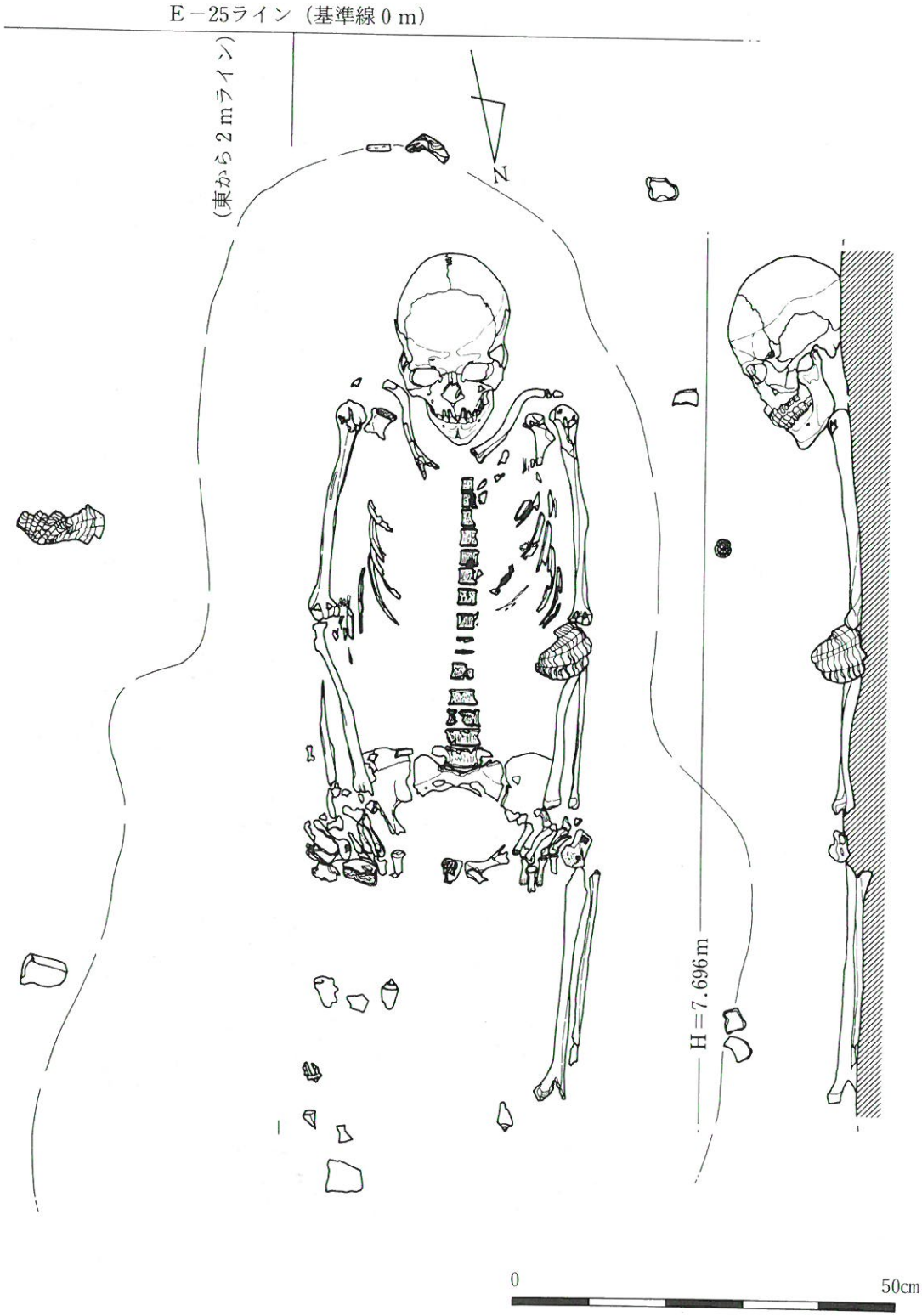
PL. 64　上：大泊浜貝塚第４層で検出された薄手の白磁玉縁碗
下：大泊浜貝塚第４層で検出された滑石製石鍋



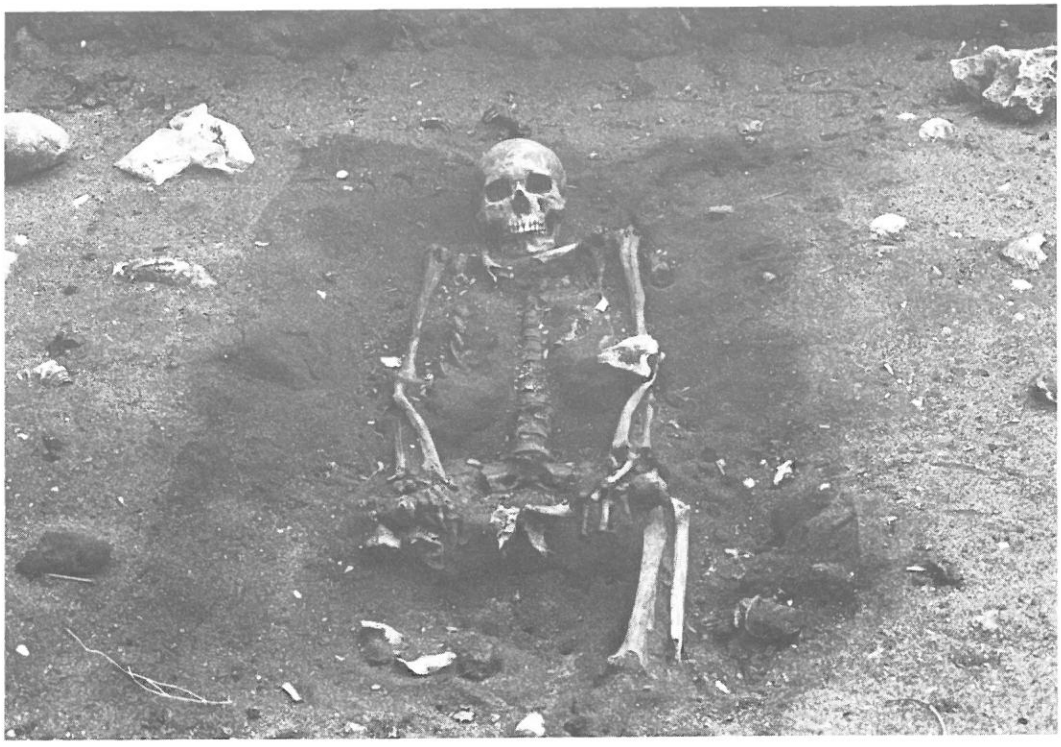
第58図（PL．65）　第１号埋葬人骨（D－27グリッド）



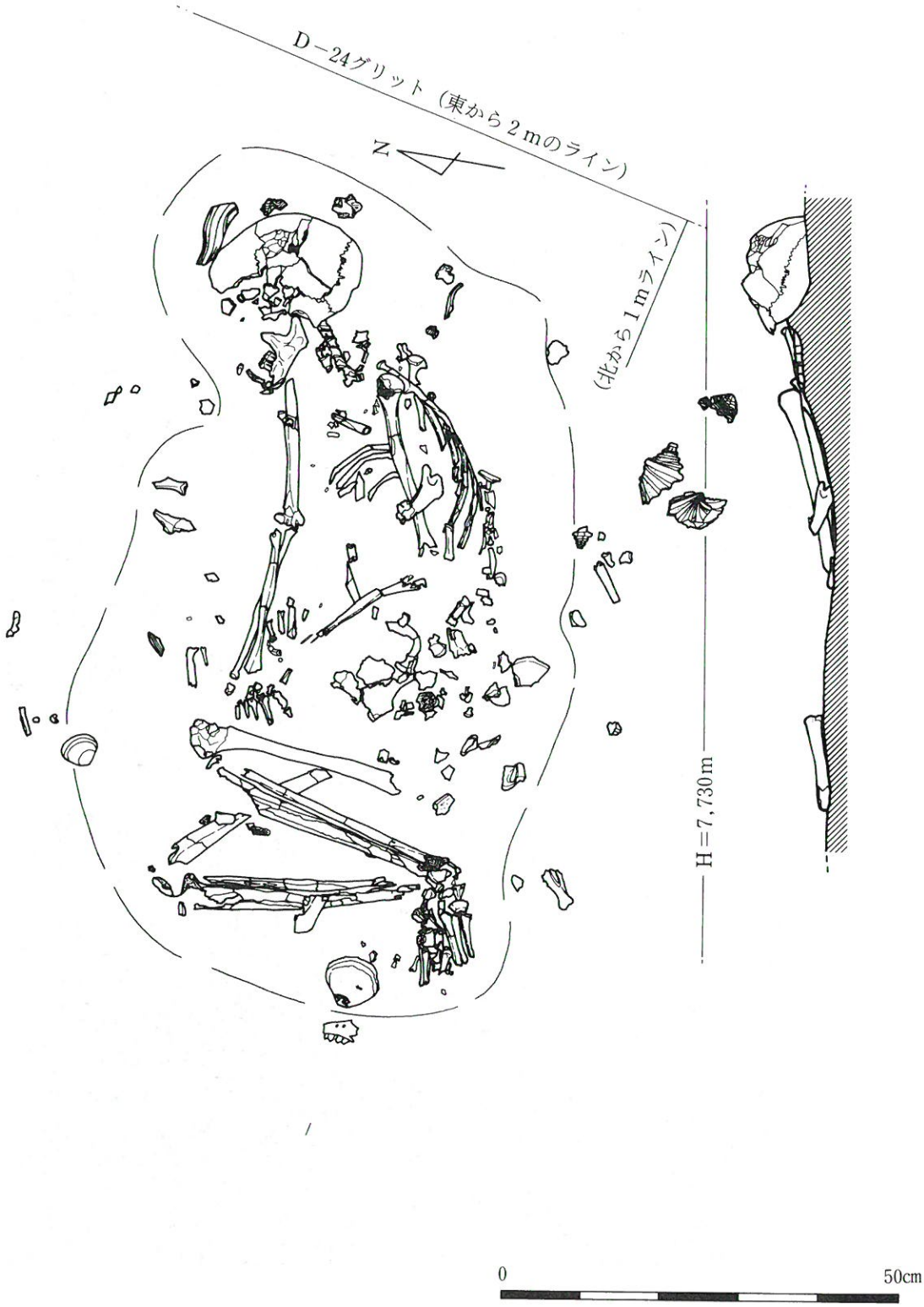
PL. 65　上：第１号埋葬人骨（D－26グリッドの西壁での出土状況）東から
下：第１号埋葬人骨（D－27グリッドを掘って全体を検出）北から



第59図（PL．66）　第2号埋葬人骨（D－25グリッド）

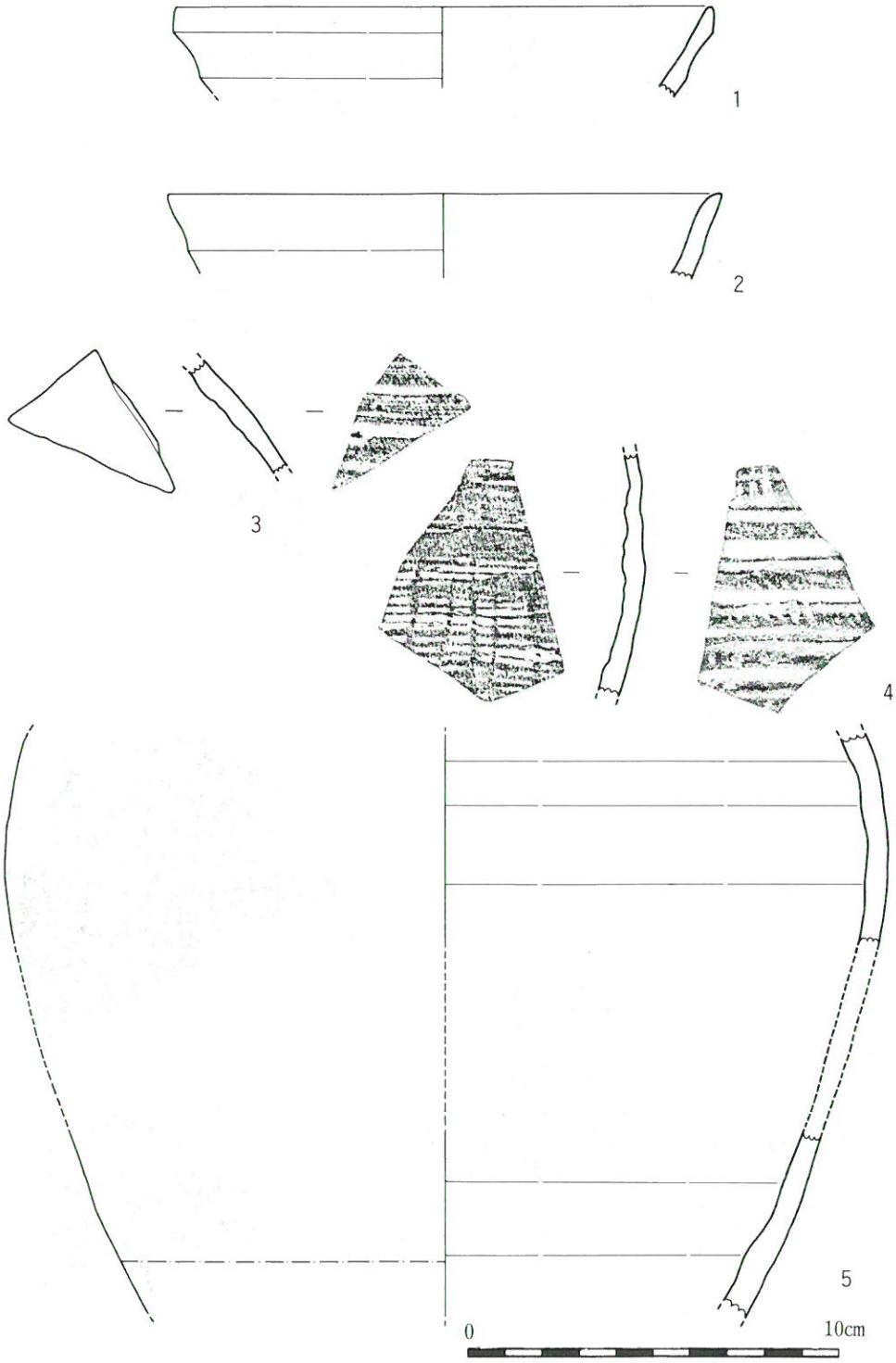


PL. 66　上：第２号埋葬人骨（検出前の状況）　北から
下：第２号埋葬人骨（全体を検出）　北から



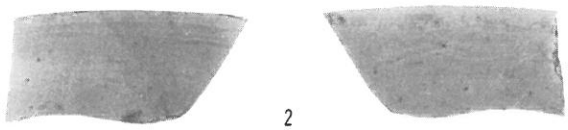
第60図（PL．67）　第3号埋葬人骨（D－24グリッド）

PL. 67　上：第３号埋葬人骨　南から　　下：第３号埋葬人骨　西から

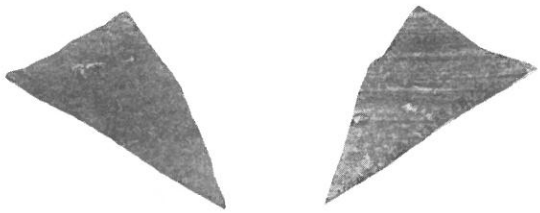


第61図（PL．68）　薄手の白磁玉縁碗１　薄手の白磁端反り碗２　須恵器壺３・４
褐釉陶器壺５

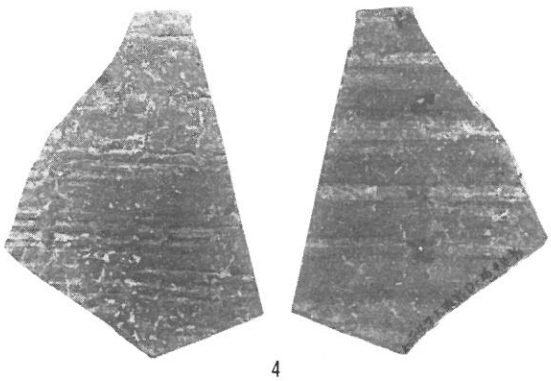
1



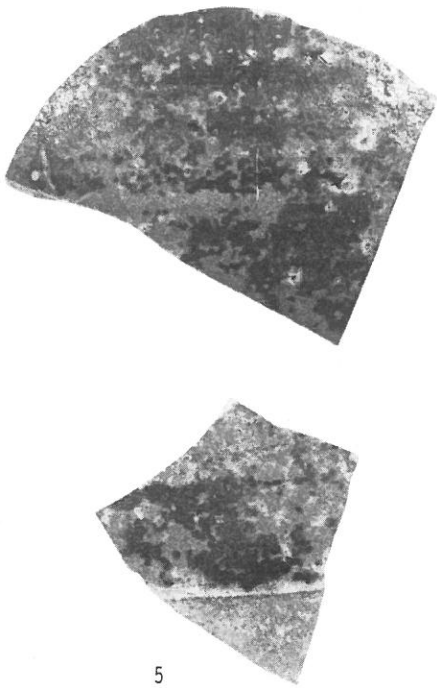
2



3

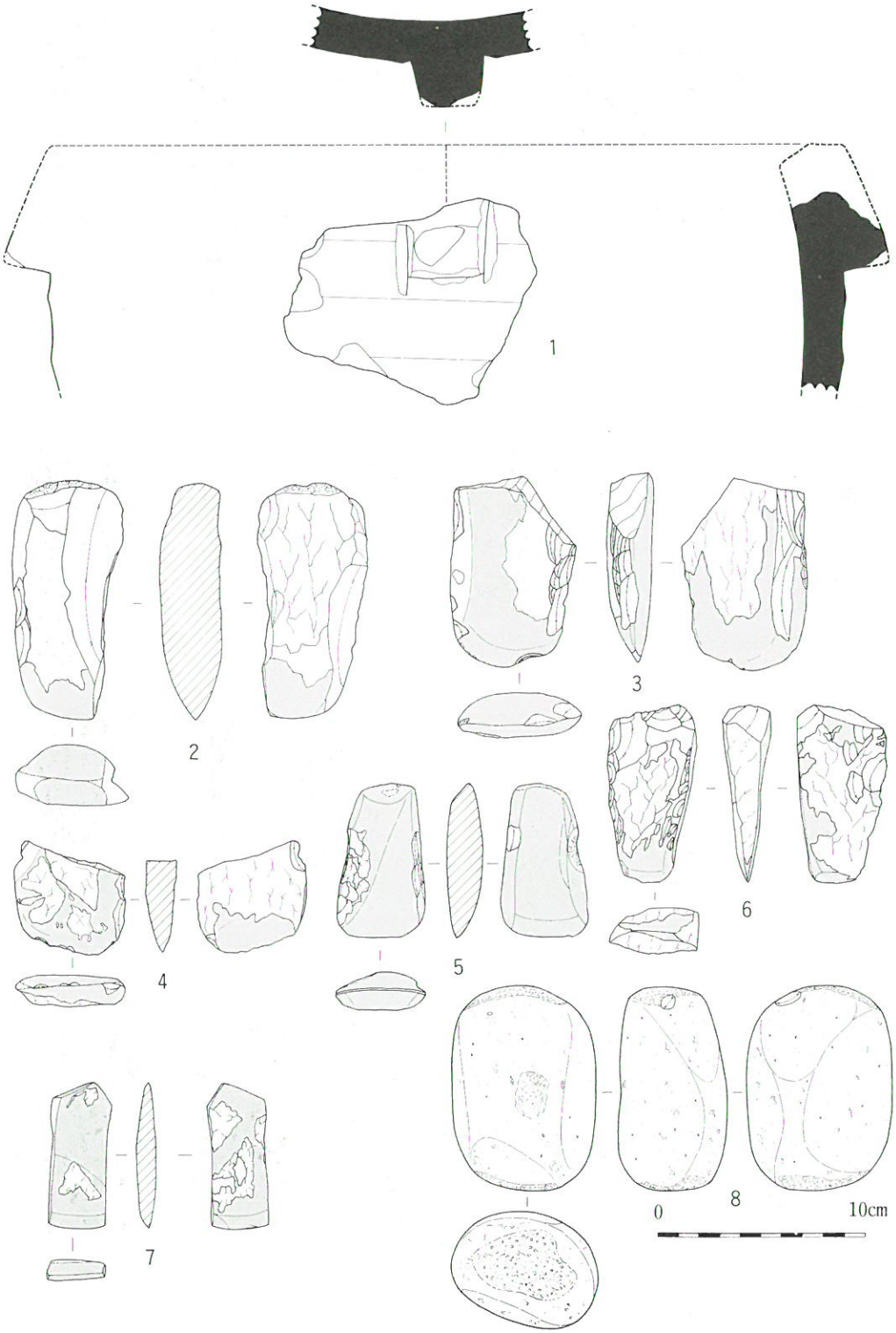


4

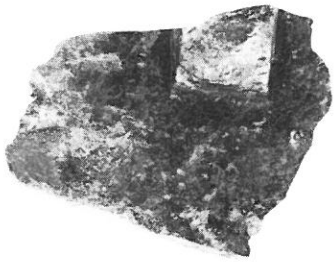


5

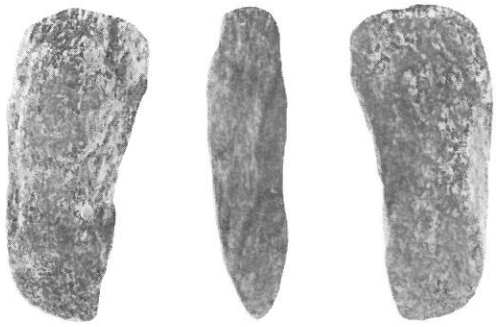
PL. 68　薄手の白磁玉縁碗１　薄手の白磁端反り碗２
須恵器壺３・４　褐釉陶器壺５



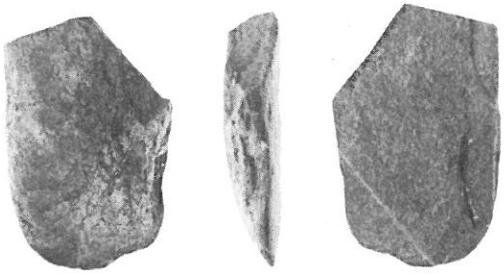
第62図（PL．69）　滑石製石鍋１　石斧（蛤刃２　扁平両刃３・４　片刃５～７）敲石８



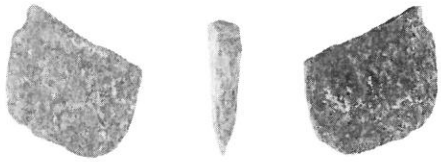
1



2



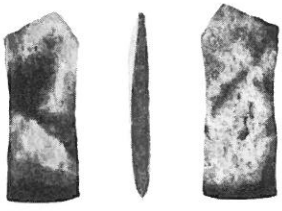
3



4

5

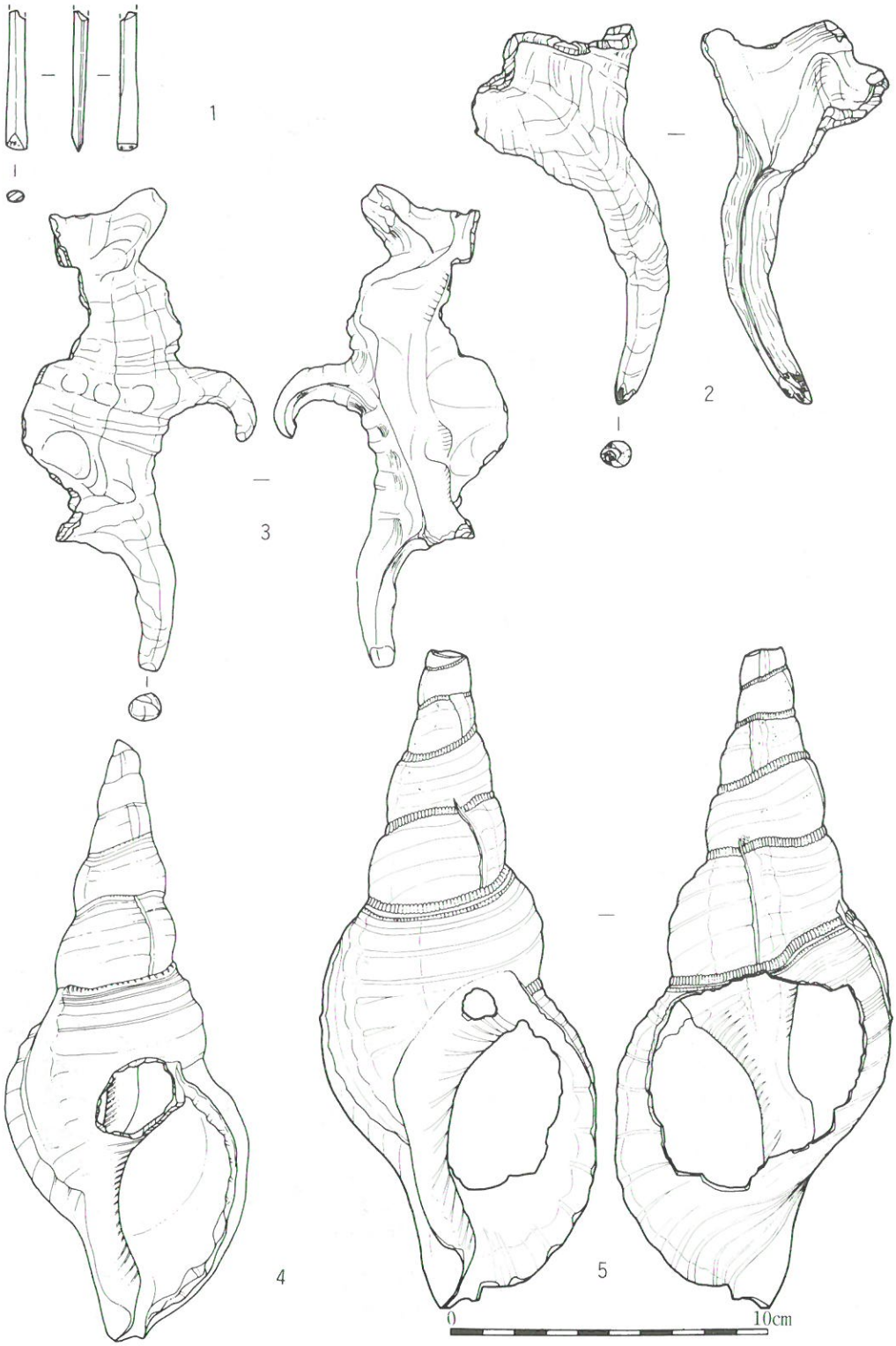
6



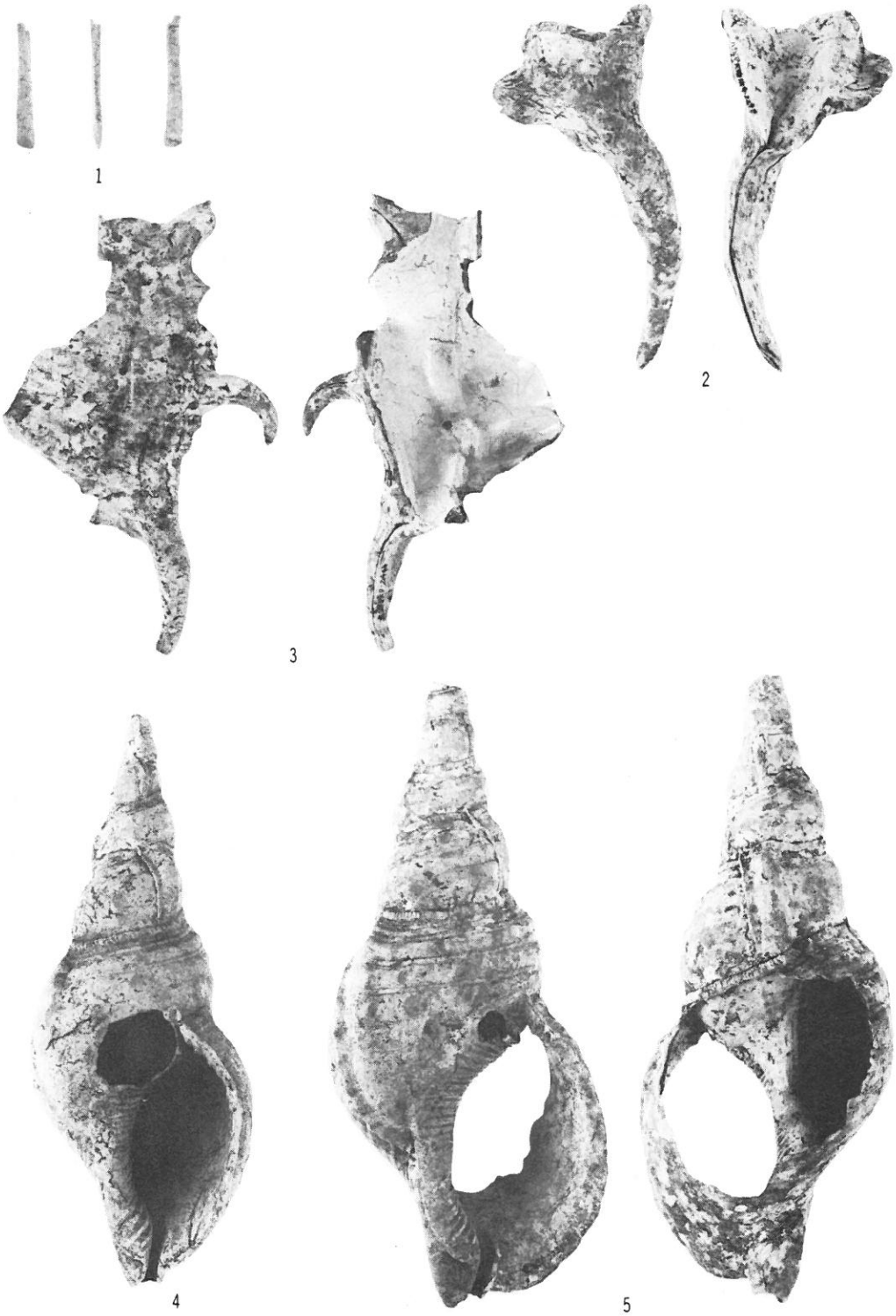
7

8

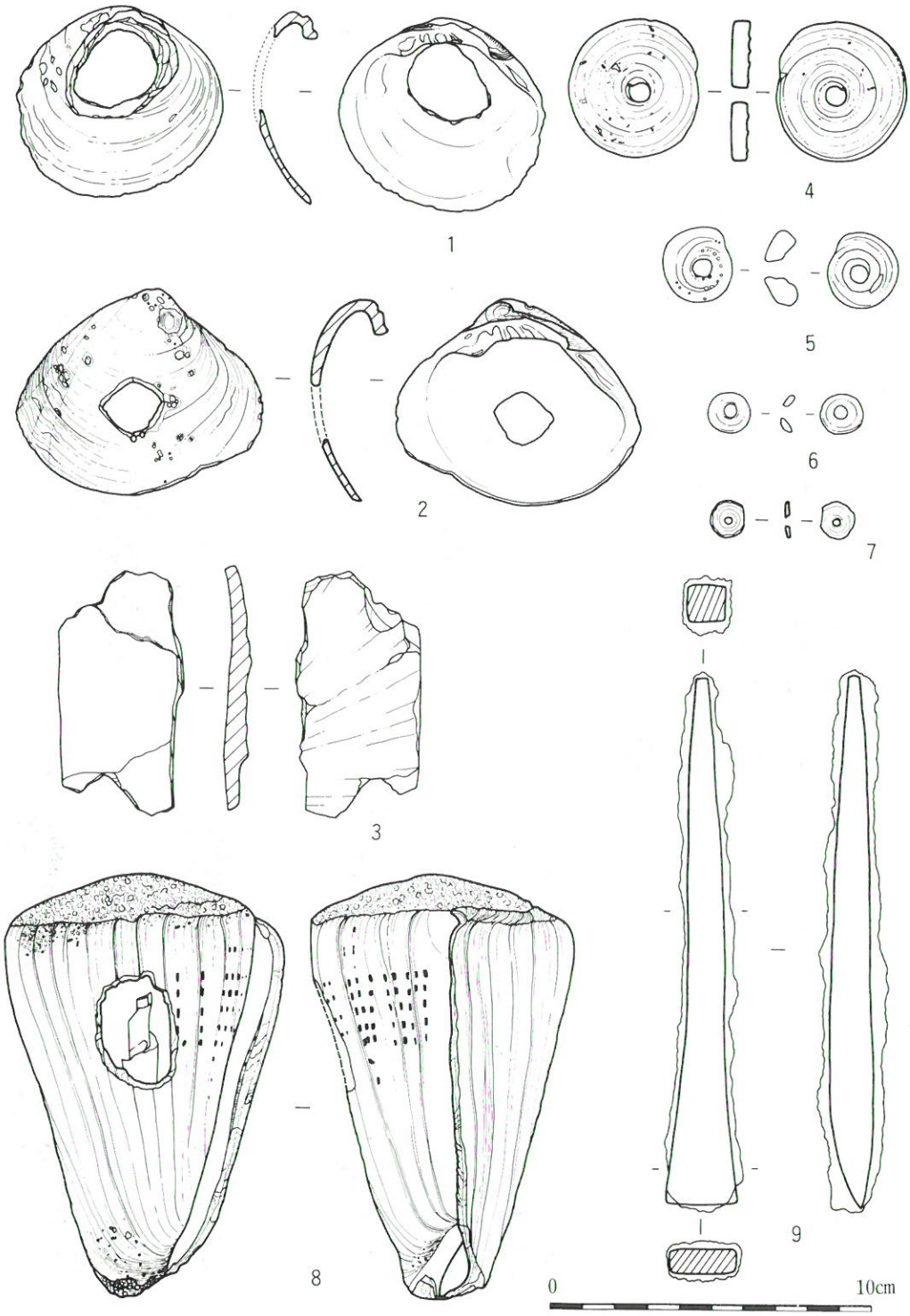
PL. 69　滑石製石鍋１　石斧（蛤刃２　扁平両刃３・４　片刃５～７）　敲石８



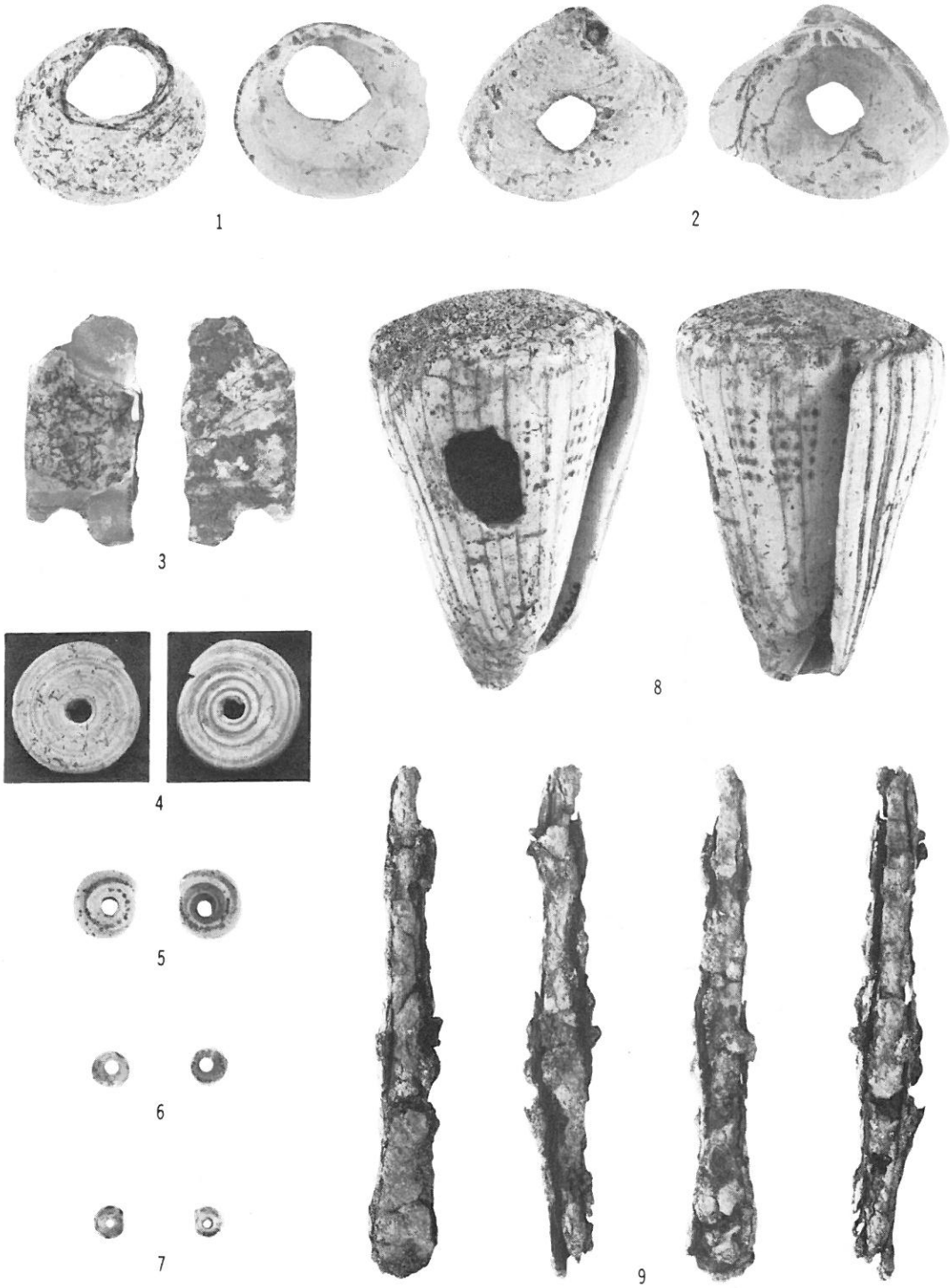
第63図（PL．70）　骨製品（イノシシの腓骨製有刃製品１）　貝製品（スイジガイ製利器２・３　ホラガイ有孔製品４・５）



PL. 70　骨製品（イノシシの腓骨製有刃製品１）　貝製品（スイジガイ製利器２・３　ホラガイ有孔製品４・５）



第64図（PL．71）　貝製品（シレナシジミ有孔製品１・２　ヤコウガイ製貝匙３　イモガイ科有孔製品４～７）その他（アンボンクロザメ有孔品８）　鉄鑿（９）



PL. 71　貝製品（シレナシジミ製有孔製品１・２　ヤコウガイ製貝匙３　イモガイ科有孔製品４～７）　その他（アンボンクロザメ有孔製品８）　鉄鑿(9)

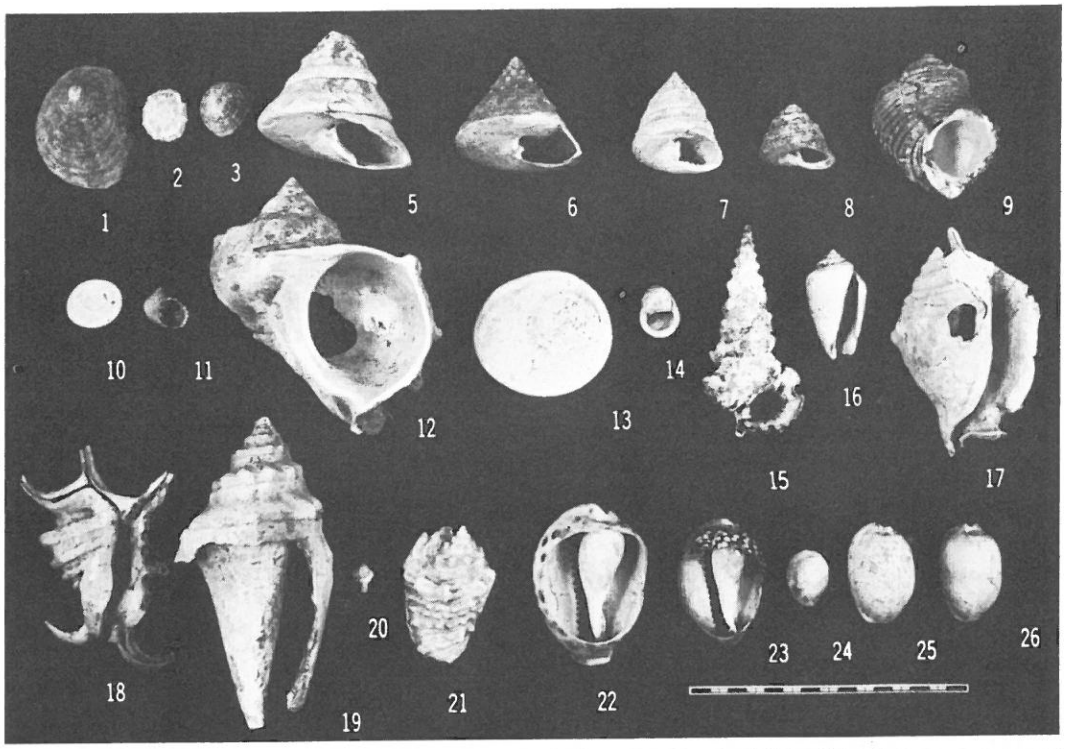
PL. 72

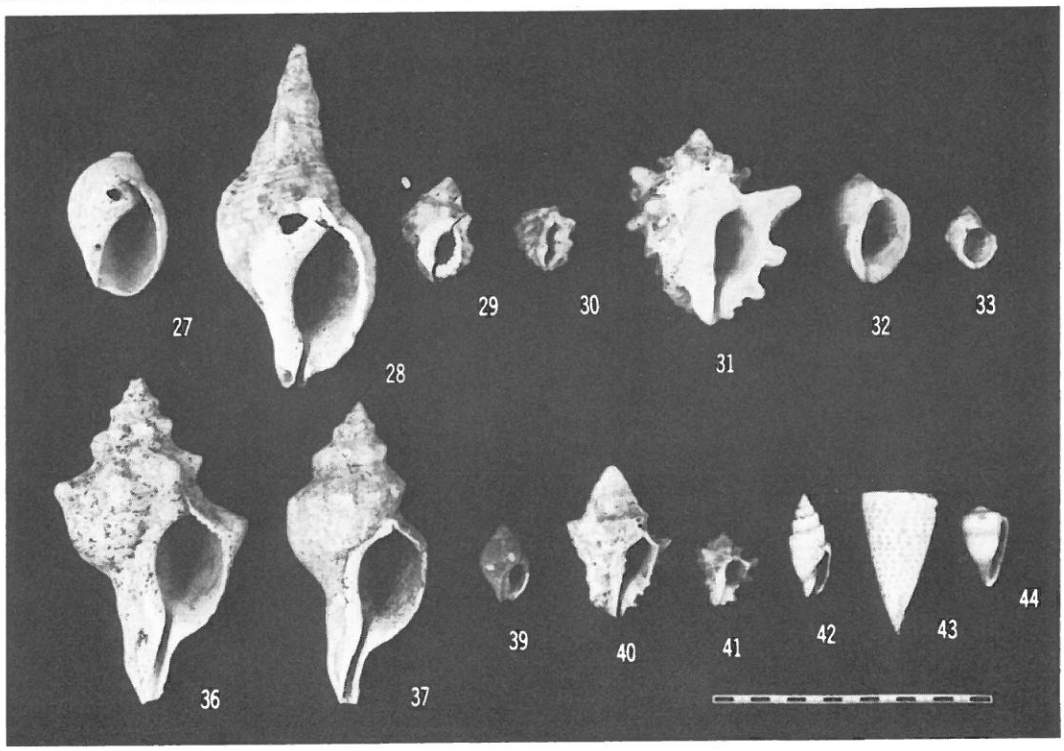
上：

1 オオベッコウガサ	2 マツバガイ	3 ベッコザラ
5 サラサバディ	6 ギンタカハマ	7 ニシキウズ
8 ムラサキウズ	9 チョウセンサザエのフタ	11 コシダカサザエ
12 ヤコウガイ	13 ヤコウガイのフタ	14 ニシキアマオブネ
15 オニノツノガイ	16 マガキガイ	17 クモガイ
18 スイジガイ	19 ラクダガイ	20 ムカシタモト
21 イボソデ	22 ホシダカラ	23 ハチジョウダカラ
24 ハナマルユキ	25 キッコウダカラ	

下：

27 スクミウズラ	28 ホラガイ	29 シロミオキニシ
30 ムラサキイガレイシ	31 ツノテツレイシ	32 ホソスジテツボラ
33 テツボラ	34 カスリレイン	36 イトマキボラ
37 ヒメイトマキボラ	39 マルニシ	40 オニコブシ
41 コオニコブシ	42 ニシノキキバフデ	43 アンボンクロザメ
44 ヤナギシボリイモ		


1
2
3
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26


27
28
29
30
31
32
33
36
37
39
40
41
42
43
44

PL. 72　貝　類

PL. 73

上：

45 イボシマイモ　46 イボカバイモ　47 ロウソクイモ

48 クロフモドキ　49 オトメイモ　50 ミカドミナシ

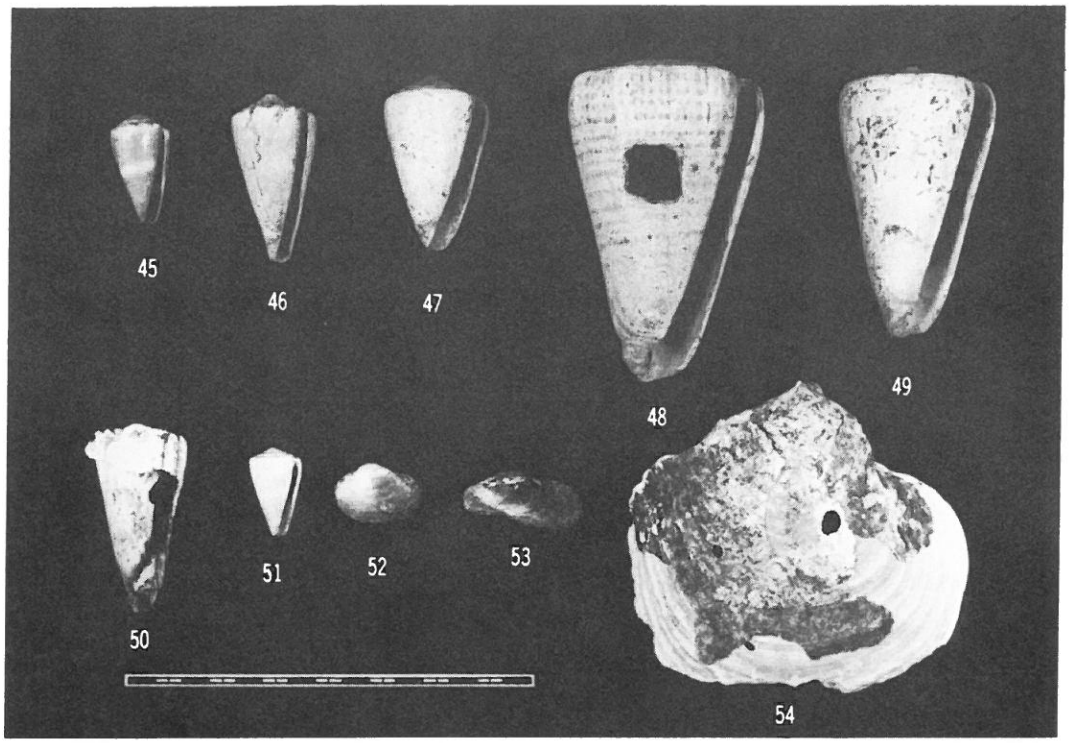
51 キヌカツギ　53 リュウキュウヒバリガイ　54 アコヤガイ

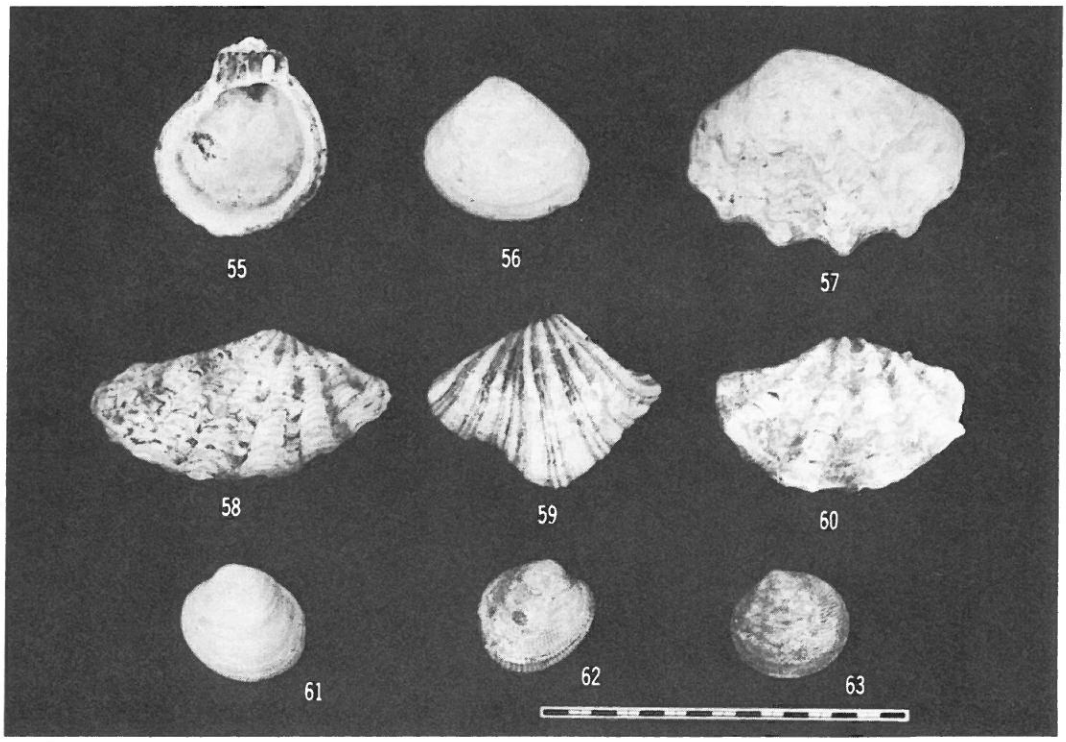
下：

55 メンガイ　56 シレナシジミ　57 ヒメジャコ

58 シラナミ　59 シャゴウ　60 ヒレジャコ

61 ヌノメガイ　62 アラヌノメ　63 サメザラ





PL. 73　貝　類

PL．74

上：魚類

1　エイ脊椎　　2　ウツボ科　　3～5　フエフキダイ科

6　ベラ科前上顎骨　　7　ベラ科上咽頭骨　　8　ヨコシマクロダイ

9　ブダイ科　　10　ナガブダイ　　11　ナンヨウブダイ

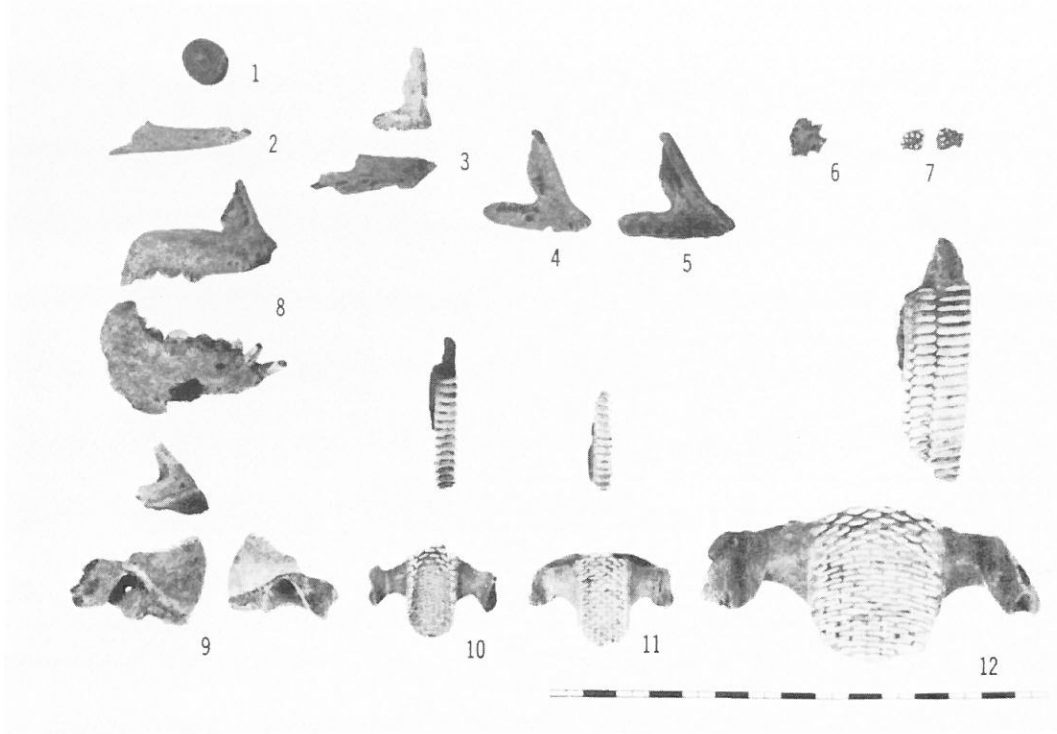
12　イロブダイ

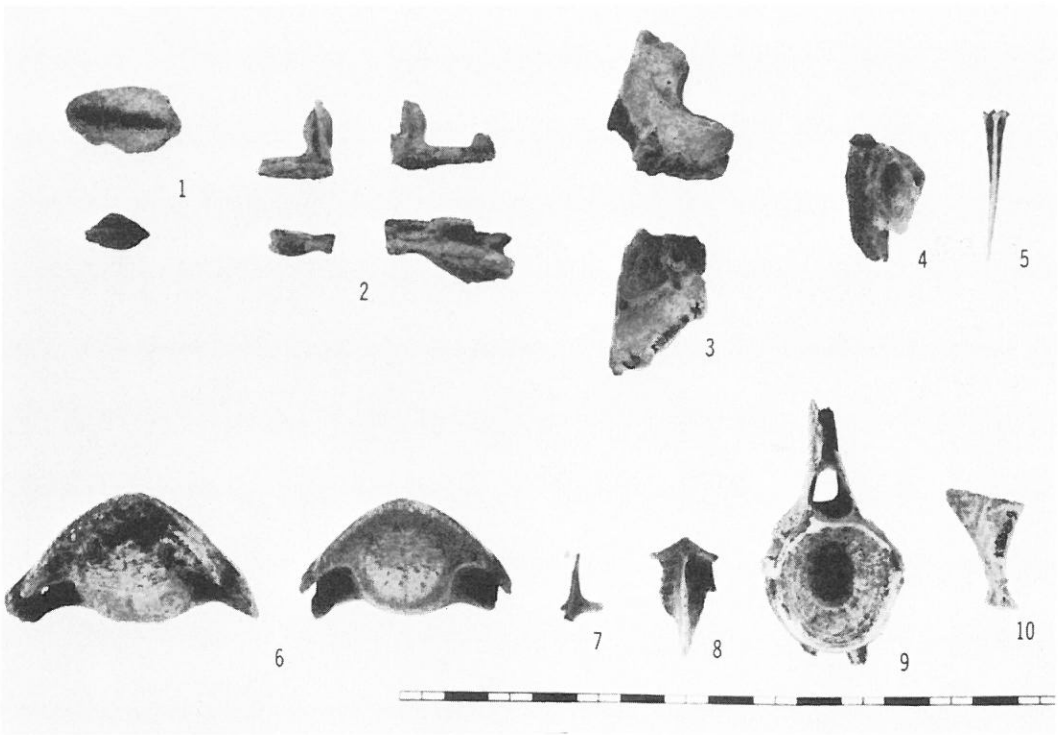
下：魚類

1　ニザダイ科ウロコ　　2　ハタ科　　3　モンガラカワハギ科

4、5　魚その他　　6　ハリセンボン顎骨　　7　ハリセンボン棘

8　鋤　骨　　9　サカナ脊椎　　10　サカナ尾椎





PL. 74　魚　類

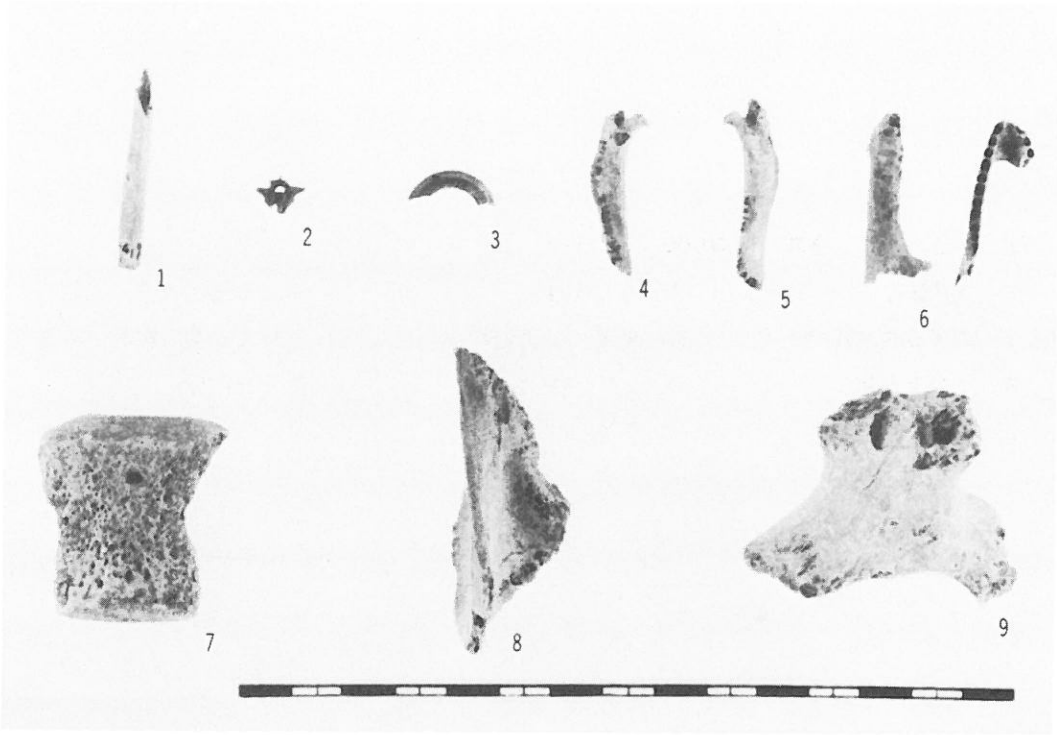
PL．75

上：ウミガメ

1　アオウミガメ右下顎骨	2　右尺骨	3　前烏口骨
4	5　右烏口骨	6　左上腕骨
7　右大腿骨	8　肢骨片	9　中足骨
10　指　骨	11　末節骨	

下：トリ、ヘビ、ネズミ、コウモリ、クジラ

1　トリ破片	2　ヘビ脊椎	3　ネズミ上顎犬歯
4　ネズミ左大腿骨	5　ネズミ右大腿骨	6　コウモリ左下顎骨
7　クジラ椎体	8　クジラ棘突起	9　クジラ破片



PL. 75　ウミガメ・トリ・ヘビ・ネズミ・コウモリ・クジラ

PL．76

上：イノシシ

1　左側頭骨　　2　右側頭骨　　3　左側頭骨頬突起

4　右側頭骨頬突起　　5　後頭骨　　6　右上顎骨

7　左上顎骨

下：イノシシ

1　切歯骨　　2　左下顎骨　　3　右下顎骨

4　左下顎犬歯　　5　右下顎犬歯　　6　左関節突起

7　肋　骨　　8　仙　骨　　9　環　椎

10　椎　体

PL. 76　イノシシ

PL. 77

上：イノシシ

1　右尺骨　　2　左尺骨　　3　寛　骨

4　右脛骨　　5　左脛骨　　6　右大腿骨

7　左大腿骨

下：イノシシ

1　左距骨　　2　右距骨　　3　左踵骨

4　右踵骨　　5　膝　骨　　6～8　中(手)足骨

9　基節骨　　10　中節骨　　11　末節骨

PL. 77　イノシシ

沖縄県立埋蔵文化財センター
平 12. 4. -1 成
210.0254
Ok514

沖縄県文化財調査報告書第74集

下田原貝塚・大泊浜貝塚

—第1・2・3次発掘調査報告—

発行　1986年3月31日
沖縄県教育委員会
沖縄県那覇市旭町1番地
電話　0988－66－2731（文化課）
印刷　1986年3月26日
松本タイプ印刷所
那覇市久茂地2丁目24－15
電話　0988－62－8125・8126